出石郡出石町

入佐川遺跡

小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）

２００２年３月

兵庫県教育委員会

出石郡出石町

入佐川遺跡

小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）

２００２年３月

兵庫県教育委員会

出石中心地から遺跡を望む（南東から）

出石川から遺跡を望む（西から）

カラー写真図版2
入佐川２区・３区

２区Ｄ地点　第２遺構面（南東から）

３区　第４遺構面（西から）

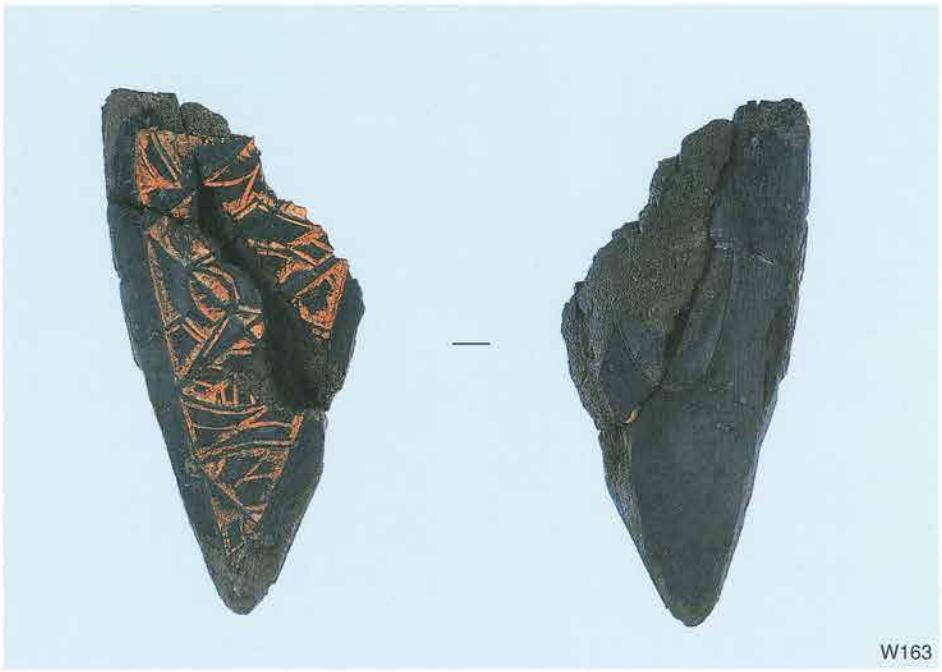
第１遺構面　全景（西から）

第２遺構面　全景（西から）

カラー写真図版4
入佐川４区　Ｄ地点

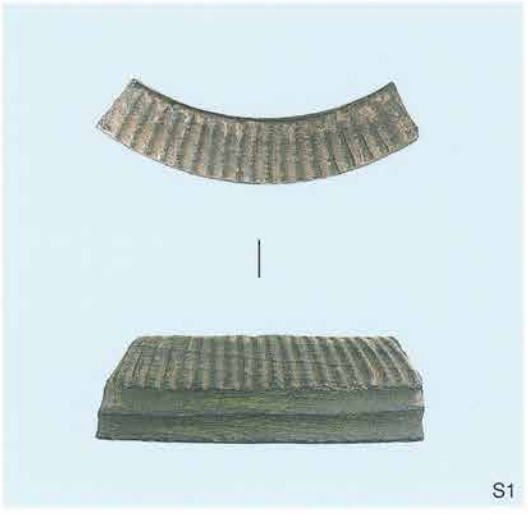
第３遺構面　全景（西から）

第４遺構面　全景（西から）


W163

W163

W163


S1

S2

S10

弥生時代から古墳時代の遺物

古墳時代の主要器種

中世の主要遺物(1)

中世の主要遺物(2)

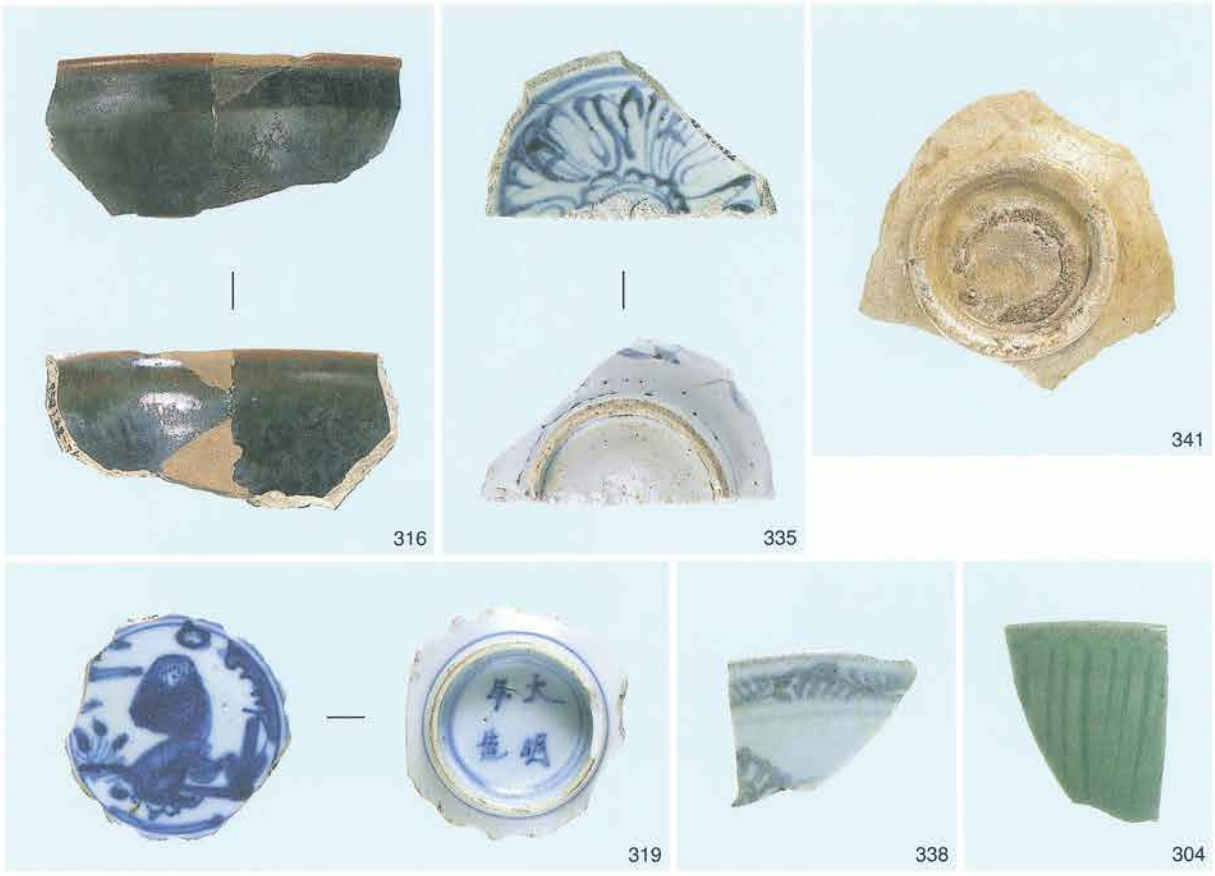
323

天目

323

天目と天目台（参考／天目台は現代のもの）

中世の陶磁器片①



中世の陶磁器片②

315

294

357

中世の陶磁器片③

320

359

339

325

中世の陶磁器片④

W344

部分（左側）

W344

部分（右側）

W344

主要部分

図1　漆付着の様子（土器頸部内面）

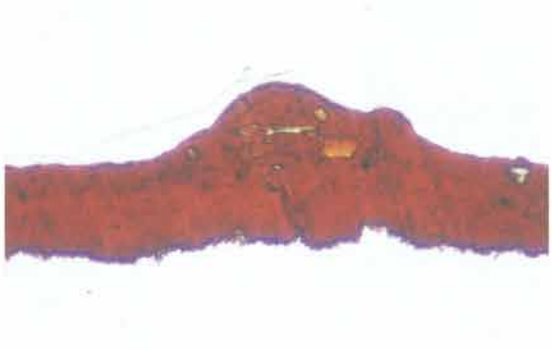


図2　土器頸部内面漆膜の断面（×400）

図3　漆付着の様子（土器外面）

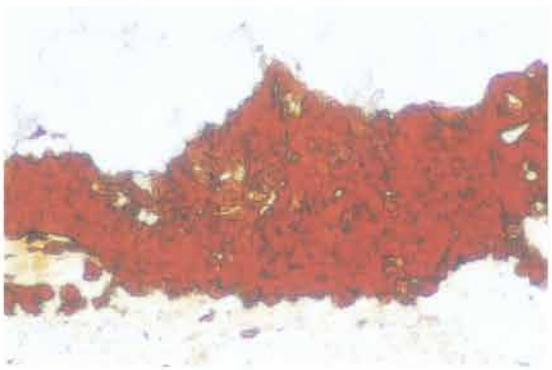


図4　土器頸部外面漆膜の断面（×400）

図5　把頭飾側面の漆膜試料拡大（×32）

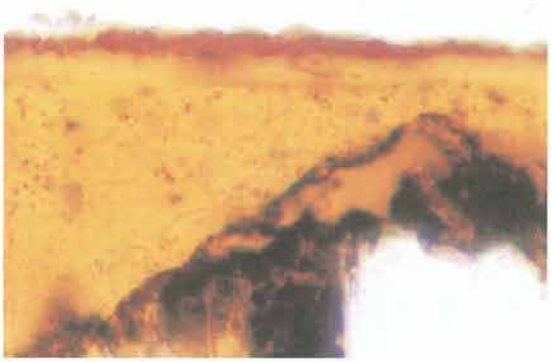


図6　把頭飾端面の断面（×800）

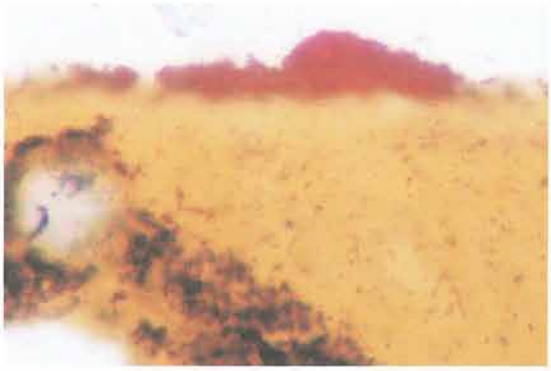


図7　把頭飾側面の断面（×800）

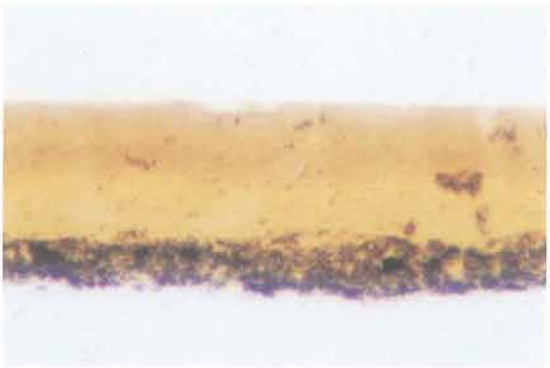


図8　把頭飾把関連結面の断面（×800）

塗膜構造調査資料とその断面

1～4：入佐川2区遺跡出土土器　　5～8：入佐川3遺跡出土把頭飾

例　言

1．本書は兵庫県出石郡出石町宮内に所在する入佐川遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は国土交通省豊岡工事事務所の計画する小野川放水路事業に伴うものであり、同事務所の依頼を受け兵庫県教育委員会が実施した。

3．小野川放水路事業に伴う発掘調査は、入佐川遺跡のほかに砂入遺跡（兵庫県文化財調査報告第161冊）、袴狭遺跡（兵庫県文化財調査報告第197冊）があり、すでに報告書が刊行されている。

上記の遺跡以外に、カヤガ谷墳墓群、カヤガ谷横穴、大谷墳墓群、坪井遺跡を調査しており、これらについては平成14年度に刊行予定である。

なお、袴狭遺跡出土の線刻画木製品（W344）については報告書刊行時に存在が知られていなかったため、今回の入佐川遺跡の報告書の中で報告している。

4．本書の執筆は、主に中村　弘、鈴木敬二、柏原正民が担当した。執筆分担は目次に示している。

5．分析作業は、樹種同定が伊東隆夫氏（京都大学木質科学研究所教授）に、漆膜の分析が株式会社吉田生物研究所に委託して行った。

6．木簡の釈読は独立行政法人奈良文化財研究所資料調査室の方々にお願いした。

7．本書の編集は主任技術嘱託員、前山三枝子の補助を得て、中村が行った。

8．図版１の地図は国土地理院発行200,000分の１地勢図（「鳥取」）を使用し、図版２の地図は同院発行25,000分の１地形図（「江原」「出石」）を使用した。

9．写真図版に用いた写真のうち、遺構写真については各調査担当者が撮影した。航空写真についてはアジア航測、パスコ、写測エンジニアリングに、遺物写真についてはイーストマン、谷口フォトに委託して撮影した。

10．発掘調査および整理作業で得られた図面・写真・遺物は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

11．遺物の保存処理は、木器については来年度に一部を外部委託する予定で、それ以外は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行う予定である。金属製品については全て同事務所で行った。

12．本書で使用した遺構名はできるだけ発掘調査当時の名称を使用した。数字部分は3桁で示しているが100の位の数字は遺構面を示している。なお、調査区については調査時の入佐川Ⅰ区、Ⅱ区をそれぞれ２区、１区と変更している。

13．報告番号は、木器については頭にWを、石製品についてはSを、金属器についてはMを付しており、土器については番号のみで示している。

14．発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々のご協力、ご指導を頂いた。記して、感謝の意を表します。（敬称略）

置田雅昭・小寺　誠・伊東隆夫・大賀克彦

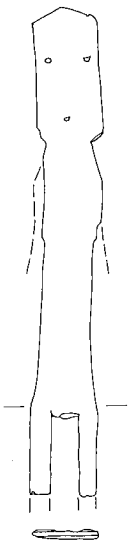
凡　例

1．実測図の表現方法について

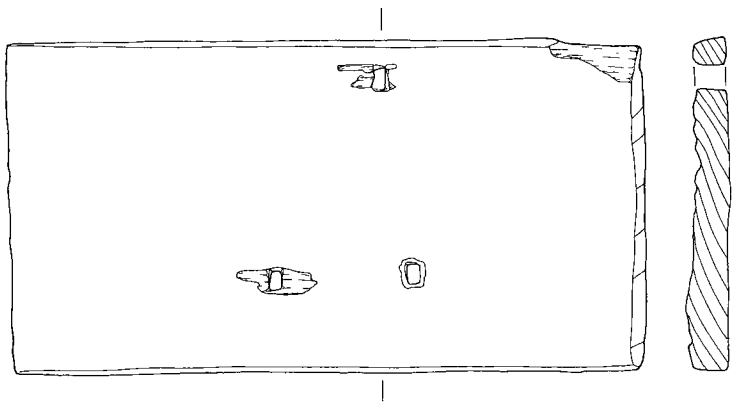
木器の実測図はできるだけ簡素な表現を図るように心がけた。木器の場合、形態の特徴を表す稜線、製作時の工具痕、摩耗や圧迫などの使用痕等、一つの平面図上に表される線の種類が多く、煩雑になりやすい。特に調査時の破損など、本来もつ遺物の属性とは無関係なものは極力省略した。本報告における主な表現上の取り決めは、以下のとおりである。

1）欠損や破損の表現は原則として省略したが、加工痕・使用痕などが破損面によって途切れる場合などは表現している。なお、人形股部の折り取り部分は破損と同様な状況を呈するため、破損面と同様な表現をしているが、これについては人為的な「折り」を表している。

2）木器の大半はスギの板目材が使用され、その割裂性を利用して製材されている。このため、多くの場合、材面には晩材部と早材部の境が明瞭な段差をもって軸方向に走行するのが観察される。しかし、平面図上ではこうした段差は原則として省略し、断面図での階段状の表現にとどめた。



人形の表現



板目材の表現

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯……（中村）　1
第２節　確認調査……（中村）　1
第３節　全面調査……（中村）　2
第４節　整理作業……（中村）　3
第５節　保存科学作業……（中村）　4

第２章　位置と環境
第１節　地理的環境……（中村）　5
第２節　歴史的環境……（中村）　5

第３章　全面調査の概要と遺構
第１節　概　要……（中村）　7
第２節　入佐川１区……（鈴木）　8
第３節　入佐川２区……（柏原）　12
第４節　入佐川３区……（中村）　32
第５節　入佐川４区……（鈴木）　42

第４章　出土遺物
第１節　概　要……（中村）　50
第２節　確認調査……（中村）　52
第３節　入佐川１区……（鈴木）　53
第４節　入佐川２区……（柏原）　56
第５節　入佐川３区……（中村）　73
第６節　入佐川４区……（鈴木）　86
第７節　金属製品……（中村）　105
第８節　石製品……（中村・柏原）　106

第５章　自然科学分析の成果
第１節　漆付着土器ならびに把頭飾の塗膜構造調査……（本吉恵理子・岡田文男）　107
第２節　入佐川遺跡出土木製品の樹種……（伊東隆夫）　109

第６章　まとめ
第１節　入佐川１区……（鈴木）　126
第２節　入佐川２区……（柏原）　126
第３節　入佐川３区……（中村）　128
第４節　入佐川４区……（鈴木）　129
第５節　まとめ……（中村）　130

付編　袴狭遺跡出土線刻画木製品について……（中村）　151

カラー写真図版目次

カラー写真図版１　遺　跡
出石中心地から遺跡を望む
出石川から遺跡を望む
カラー写真図版２　２区・３区
２区Ｄ地点　第２遺構面
３区　第４遺構面
カラー写真図版３　４区　Ｄ地点
第１遺構面　全景
第２遺構面　全景
カラー写真図版４　４区　Ｄ地点
第３遺構面　全景
第４遺構面　全景
カラー写真図版５　遺　物
カラー写真図版６　遺　物
弥生時代から古墳時代の遺物
古墳時代の主要器種
カラー写真図版７　遺　物
中世の主要遺物（１）
中世の主要遺物（２）
カラー写真図版８　遺　物
天目
天目と天目台
カラー写真図版９　遺　物
中世の陶磁器片①
中世の陶磁器片②
カラー写真図版10　遺　物
中世の陶磁器片③
中世の陶磁器片④
カラー写真図版11　線刻画木製品
部分（左側）
部分（右側）
主要部分

挿図目次

第１図　表採遺物……７
第２図　祭祀具分類図……50
第３図　田下駄分類図……51
第４図　弥生土器壷……69
第５図　各地区土層断面図……132
第６図　遺構変遷図……133

写真目次

写真１　土器肩部布目痕……77

表目次

第１表　調査一覧表……２
第２表　整理工程表……３
第３～９表　土器一覧表……134～140
第10～16表　木器一覧表……141～147
第17表　銭一覧表……148
第18表　金属器一覧表……148
第19表　石製品一覧表……149
第20表　線刻画計測表……152

図版目次

図版１　遺跡の位置
図版２　周辺の遺跡
図版３　小野川放水路事業関連
確認調査位置図
図版４　小野川放水路事業関連
全面調査位置図
図版５　入佐川遺跡 調査位置図
図版６　１区 調査区配置図
図版７　１区Ａ地点 第１遺構面
全体図、土層断面図
図版８　１区Ａ地点 第１遺構面 橋脚
図版９　１区Ａ地点 第１遺構面
北端部、矢板等
図版10　１区Ａ地点 第１遺構面
南端部、木組畦畔
図版11　１区Ｂ地点 第１遺構面
全体図、土層断面図
図版12　１区Ｂ地点 第１遺構面
南西隅矢板列
図版13　２区 調査区配置図
図版14　２区Ｂ地点 第１・２遺構面
全体図、シガラミ101・102
図版15　２区Ｂ地点 第２遺構面
シガラミ201
図版16　２区Ｂ地点 第２遺構面
シガラミ203
図版17　２区Ｃ地点 第１・２遺構面
全体図、土層断面図・SD101
図版18　２区Ｄ地点 第１遺構面
全体図、SK101～103
図版19　２区Ｄ地点 第２遺構面
全体図、土層断面図
図版20　２区Ｄ地点 第２遺構面
堤防上土器群出土状況
図版21　２区Ｅ地点
全体図・畦畔上土器出土状況
図版22　２区Ｆ地点 第１遺構面
全体図、SD101・104、旧河道
図版23　２区Ｆ地点 第１遺構面
橋脚、出土土器
図版24　２区Ｆ地点 第２遺構面
全体図、土層断面図
図版25　３区 調査区配置図
図版26　３区 土層断面図
図版27　３区 第１遺構面
全体図、SD101・102
図版28　３区 第２遺構面
全体図、SD201～203
図版29　３区 第３遺構面 全体図、SD301
図版30　３区 第４遺構面 全体図、SD
図版31　３区 第４遺構面 SH401①
図版32　３区 第４遺構面 SH401②
図版33　３区 第４遺構面 SB401
図版34　３区 第４遺構面 SB402
図版35　３区 第４遺構面 SD、落ち込み
図版36　３区 第４遺構面 構造物401・402
図版37　３区 第４遺構面 構造物403
図版38　３区 第４遺構面 構造物404・405
図版39　３区 第４遺構面
木器出土状況（全体）
図版40　３区 第４遺構面 木器出土状況①
図版41　３区 第４遺構面 木器出土状況②
図版42　３区 第４遺構面 木器出土状況③
図版43　３区 第４遺構面 木器出土状況④
図版44　４区 調査区配置図
図版45　４区Ａ地点 第１遺構面
全体図、土層断面図、SK、SD
図版46　４区Ｂ地点 第１遺構面
全体図、土層断面図、SD、旧河道
図版47　４区Ｃ地点 第１遺構面
全体図、土層断面図
図版48　４区Ｃ地点 第１遺構面 SD

図版49　4区D地点 土層断面図
図版50　4区D地点 第1・2遺構面 全体図
図版51　4区D地点 第3・4遺構面 全体図
図版52　土器 1区A・B地点 第1遺構面
図版53　土器 2区B地点 第1・2遺構面①
図版54　土器 2区B地点 第2遺構面②
　　C・E地点 第1・2遺構面
図版55　土器 2区D地点 第2遺構面①
図版56　土器 2区D地点 第2遺構面②
図版57　土器 2区D地点 第2遺構面③
図版58　土器 2区D地点 第2遺構面④
図版59　土器 2区D地点 第2遺構面⑤
図版60　土器 2区D地点 第2遺構面⑥
図版61　土器 2区D地点 第2遺構面⑦
図版62　土器 2区D地点 第2遺構面⑧
図版63　土器 2区D地点 第2遺構面⑨
図版64　土器 2区D地点 第2遺構面⑩
図版65　土器 2区F地点 第1・2遺構面
図版66　土器 3区 第1・2・3遺構面
図版67　土器 3区 第4遺構面
図版68　土器 3区 第4遺構面
図版69　土器 3区 第4遺構面
図版70　土器 3区 第4遺構面
図版71　土器 4区A・B・C地点
　　第1遺構面
図版72　土器 4区D地点 第1・2遺構面
図版73　土器 4区D地点
　　第2・3・4遺構面
図版74　木器 木簡集成
図版75　木器 確認調査
図版76　木器 1区A・B地点
図版77　木器 2区B地点①
図版78　木器 2区B地点②
図版79　木器 2区B地点③
図版80　木器 2区C地点
図版81　木器 2区D地点①
図版82　木器 2区D地点②
図版83　木器 2区D地点③
図版84　木器 2区F地点①
図版85　木器 2区F地点②
図版86　木器 2区F地点③
図版87　木器 2区 大型
図版88　木器 3区①
図版89　木器 3区②
図版90　木器 3区③
図版91　木器 3区④
図版92　木器 3区⑤
図版93　木器 3区⑥
図版94　木器 3区⑦
図版95　木器 3区⑧
図版96　木器 3区⑨
図版97　木器 3区⑩
図版98　木器 3区 大型①
図版99　木器 3区 大型②
図版100　木器 3区 大型③
図版101　木器 4区A地点①
図版102　木器 4区A地点②
図版103　木器 4区B地点③
図版104　木器 4区B地点④
図版105　木器 4区B地点⑤
図版106　木器 4区C地点①
図版107　木器 4区C地点②
図版108　木器 4区C地点③
図版109　木器 4区C地点④
図版110　木器 4区C地点⑤
図版111　木器 4区C地点⑥
図版112　木器 4区C地点⑦
図版113　木器 4区D地点①
図版114　木器 4区D地点②
図版115　木器 4区D地点③
図版116　木器 4区D地点④
図版117　金属器①
図版118　金属器②
図版119　金属器③
図版120　石製品

図版121　付編　袴狭遺跡（坪井地点）
線刻画出土位置図
図版122　付編　袴狭遺跡（坪井地点）
線刻画木製品①
図版123　付編　袴狭遺跡（坪井地点）
線刻画木製品②

写真図版目次

写真図版１　航空写真
写真図版２　遺　跡
遠　景
写真図版３　確認調査
Ａトレンチ井堰検出状況
Ｂトレンチ土層堆積状況（東壁面）
写真図版４　確認調査
Ｃトレンチ全景（南東から）
Ｄトレンチ土層堆積状況（東壁面）
Ｅトレンチ全景（北から）
写真図版５　確認調査
Ｇトレンチ全景（北から）
中世溝検出状況
Ｈトレンチ全景（北西から）
写真図版６　確認調査
Ｈトレンチ土層堆積状況（東壁面）
Ｉトレンチ全景（北半部）
全景（南半部）
写真図版７　確認調査
Ｉトレンチ溝状遺構検出状況
ピット群検出状況
Ｊトレンチ畦畔検出状況（東から）
写真図版８　確認調査
Ｌトレンチ全景（北から）
畦畔検出状況（東から）
試掘坑№13全景（北から）
写真図版９　１区Ａ地点　第１遺構面
全景（南から）
全景（北から）
写真図版10　１区Ａ地点　第１遺構面
橋脚跡　全景（北東から）
橋脚跡　全景（南西から）
写真図版11　１区Ａ地点　第１遺構面
橋脚跡　検出状況（南から）
橋脚跡　全景（南から）
橋脚杭１類
橋脚杭１類（前）と２類（後）
橋脚および桟検出状況（北から）
アップ写真（北西から）
写真図版12　１区Ａ地点　第１遺構面
南半部　木組畦畔（東から）
南半部　木組畦畔（南から）
写真図版13　１区Ａ地点　第１遺構面
北半部　木組遺構（南から）
（西から）
南半部　矢板列（南西から）
（南から）
写真図版14　１区Ｂ地点　第１遺構面
全景（北から）
北半部　全景（南から）
南半部　全景（南から）
写真図版15　１区Ｂ地点　第１遺構面
南西隅部　矢板列検出状況
矢板列たちわり状況
中央東壁付近　杭列検出状況
写真図版16　２区Ｂ地点　第１・２遺構面
第１遺構面　西半部　全景
シガラミ101
第２遺構面　全景（東から）
写真図版17　２区Ｂ地点　第２遺構面
西半部全景（北東から）
旧河道（東から）
SK202（北西から）
写真図版18　２区Ｂ地点　第２遺構面

シガラミ201（南西から）
シガラミ203　検出状況（西から）
シガラミ203（南西から）
写真図版19　２区Ｃ地点　第１・２遺構面
第１遺構面　SD101（南東から）
第２遺構面　旧河道（東から）
全　景（西から）
写真図版20　２区　Ｄ地点　第１・２遺構面
第１遺構面　旧河道（西から）
第１遺構面　田下駄出土状況
第２遺構面　全　景（北西から）
写真図版21　２区Ｄ地点　第２遺構面
堤防上土器群　全景（南東から）
出土状況１
出土状況２
写真図版22　２区Ｄ地点　第２遺構面
堤防上土器群　出土状況３
土器検出状況
SD201　土器出土状況
写真図版23　２区Ｅ地点　第１遺構面
全　景（北東から）
水田全景（西から）
畦畔101遺物出土状況（南東から）
写真図版24　２区Ｆ地点　第１遺構面
西半部　全　景（東から）
全　景（西から）
旧河道・SD104（北東から）
写真図版25　２区Ｆ地点　第１・２遺構面
第１遺構面　SD102（南西から）
橋　脚（南から）
第２遺構面　SD201・202
（北東から）
写真図版26　２区Ｆ地点　第１・２遺構面
第１遺構面　SD104
鉄製鋤先出土状況
第１遺構面　旧河道
墨書土器出土状況
第２遺構面　弥生土器出土状況
写真図版27　３区　第１遺構面
SD101（西から）
（東から）
SD102（北から）
写真図版28　３区　第２遺構面
SD201・202（西から）
SD202（東から）
写真図版29　３区　第２遺構面
SD202・203（東から）
SD201（a－a'）（東から）
SD202（a－a'）（東から）
SD201（b－b'）（西から）
写真図版30　３区　第２遺構面
SD203　検出状況（南から）
SD203　（南から）
SD203　（c－c'）（南から）
写真図版31　３区　第３遺構面
SD301・302（西から）
SD301（東から）
杭　列（東から）
写真図版32　３区　第４遺構面
全　景（木器検出状況）（西から）
全　景（西から）
写真図版33　３区　第４遺構面
全　景（東から）
東半部（西から）
写真図版34　３区　第４遺構面
⑦区　木器出土状況（東から）
⑤区　木器出土状況（南から）
写真図版35　３区　第４遺構面
⑤区　木器出土状況（南から）
⑤区　木器出土状況（南東から）
⑤区　木器出土状況
写真図版36　３区　第４遺構面
⑧区　木器出土状況（東から）
③区　木器出土状況（南から）
写真図版37　３区　第４遺構面
⑦区　木器出土状況（南から）

④区　落ち込み北西側杭列
写真図版38　3区　第4遺構面
構造物405（東から）
構造物403（南から）
構造物403（南から）
写真図版39　3区　第4遺構面
構造物403（南から）
構造物403（東から）
写真図版40　3区　第4遺構面
構造物403 細部
写真図版41　3区　第4遺構面
構造物401（東から）
構造物402（南から）
構造物404（南西から）
写真図版42　3区　第4遺構面
W152・W154・W175・W176
W163・W245・W164・W147
W150
写真図版43　3区　第4遺構面
SH401（南から）
SH401（東から）
SH401 壁溝土器187
出土状況　（東から）
写真図版44　3区　第4遺構面
SH401　柱穴　P1～8
写真図版45　3区　第4遺構面
SB401（東から）
SB401（南から）
写真図版46　3区　第4遺構面
SB401　柱穴　P1～6
SK428
写真図版47　3区　第4遺構面
SB402（東から）
SB402（南から）
写真図版48　3区　第4遺構面
SB402　P1・2・4
写真図版49　4区A地点　第1遺構面
全景（東から）
旧河道およびSD103（西から）
SD102木簡出土状況　（南東から）
写真図版50　4区B地点　第1遺構面
全景（北西から）
旧河道およびSD102（西から）
写真図版51　4区B地点　第1遺構面
南東隅部分杭列検出状況（西から）
SD102田下駄出土状況（西から）
SD101検出状況および
土層堆積状況（東から）
写真図版52　4区C地点　第1遺構面
全景（東から）
SD103（南東から）
写真図版53　4区C地点　第1遺構面
SD103
木器（田下駄等）出土状況
写真図版54　4区D地点　第1遺構面
全景（西から）
東半部全景（北西から）
写真図版55　4区D地点　第1遺構面
東半部　畝状遺構　検出状況
（北から）
中央部　SD101　検出状況
（北東から）
東半部「開元通寶」出土状況
西側堀内　木簡出土状況（南から）
写真図版56　4区D地点　第2遺構面
全景（西から）
北半部（北西から）
写真図版57　4区D地点　第2遺構面
北半部（北から）
北壁　土層堆積状況（北西から）
SD201土層堆積状況（北東から）
写真図版58　4区D地点　第2遺構面
漆椀　出土状況（南西から）
槽　出土状況（北から）
柄杓　出土状況（南西から）
写真図版59　4区D地点　第3遺構面

全景（西から）
全景（北西から）
写真図版60　４区Ｄ地点　第４遺構面
全景（西から）
全景（北東から）
SD401土層堆積状況（北から）
写真図版61　土器　１区Ａ・Ｂ地点
写真図版62　土器　２区Ｂ地点
写真図版63　土器　２区Ｂ地点
写真図版64　土器　２区Ｂ地点
写真図版65　土器　２区Ｃ・Ｄ・Ｅ地点
写真図版66　土器　２区Ｄ地点
写真図版67　土器　２区Ｄ地点
写真図版68　土器　２区Ｄ地点
写真図版69　土器　２区Ｄ地点
写真図版70　土器　２区Ｄ地点
写真図版71　土器　２区Ｄ地点
写真図版72　土器　２区Ｄ地点
写真図版73　土器　２区Ｄ地点
写真図版74　土器　２区Ｄ地点
写真図版75　土器　２区Ｄ地点
写真図版76　土器　２区Ｄ地点
写真図版77　土器　２区Ｄ地点
写真図版78　土器　２区Ｄ地点
写真図版79　土器　２区Ｆ地点
写真図版80　土器　２区Ｆ地点
写真図版81　土器　３区
写真図版82　土器　３区
写真図版83　土器　３区
写真図版84　土器　３区
写真図版85　土器　３区
写真図版86　土器　３区
写真図版87　土器　３区
写真図版88　土器・陶磁器　４区Ａ・Ｂ地点
写真図版89　土器・陶磁器　４区Ｃ・Ｄ地点
写真図版90　土器・陶磁器　４区Ｄ地点
写真図版91　土器・陶磁器　４区Ｄ地点
表採遺物
写真図版92　土器・陶磁器　４区Ｄ地点
写真図版93　土器・陶磁器　４区Ｂ・Ｄ地点
写真図版94　木器　確認調査
写真図版95　木器　確認調査
写真図版96　木器　１区Ａ・Ｂ地点
写真図版97　木器　１区Ａ地点
写真図版98　木器　１区Ａ地点
写真図版99　木器　１区Ａ地点
写真図版100 木器　２区Ｂ地点
写真図版101 木器　２区Ｂ地点
写真図版102 木器　２区Ｂ地点
写真図版103 木器　２区Ｂ地点
写真図版104 木器　２区Ｂ地点
写真図版105 木器　２区Ｃ地点
写真図版106 木器　２区Ｄ地点
写真図版107 木器　２区Ｄ地点
写真図版108 木器　２区Ｄ・Ｆ地点
写真図版109 木器　２区Ｆ地点
写真図版110 木器　２区Ｆ地点
写真図版111 木器　３区
写真図版112 木器　３区
写真図版113 木器　３区
写真図版114 木器　３区
写真図版115 木器　３区
写真図版116 木器　３区
写真図版117 木器　３区
写真図版118 木器　３区
写真図版119 木器　３区
写真図版120 木器　３区
写真図版121 木器　３区
写真図版122 木器　３区
写真図版123 木器　３区
写真図版124 木器　４区Ａ地点
写真図版125 木器　４区Ａ地点
写真図版126 木器　４区Ｂ地点
写真図版127 木器　４区Ｂ地点
写真図版128 木器　４区Ｂ地点
写真図版129 木器　４区Ｃ地点

写真図版130 木器　4区C地点
写真図版131 木器　4区C地点
写真図版132 木器　4区C地点
写真図版133 木器　4区C地点
写真図版134 木器　4区C地点
写真図版135 木器　4区D地点
写真図版136 木器　4区D地点
写真図版137 木器　4区D地点
写真図版138 木器　4区D地点
写真図版139 木器　4区D地点
写真図版140 木器　4区D地点
写真図版141 木器　4区D地点
写真図版142 金属器
写真図版143 金属器
写真図版144 金属器
写真図版145 金属器
写真図版146 石製品
写真図版147 付載　袴狭遺跡
船団線刻画木製品
写真図版148 付載　袴狭遺跡
船団線刻画木製品
写真図版149 付載　袴狭遺跡
船団線刻画木製品

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

出石郡出石町に位置する入佐川、袴狭川は出石川の支流であり、円山川の支流である小野川とともに氾濫しやすく、付近一帯の水田を覆い尽くすほどの大きな洪水の被害をもたらす川として知られていた。特に平成２年、西日本一帯を襲った台風19号は、出石郡北部、旧神美村の豊かな穀倉地帯を一晩のうちに水没させてしまった。

このような水害を解決するため、国土交通省（旧建設省）は「小野川放水路事業」を計画した。その概要は小野川と袴狭川・入佐川をバイパス状の放水路でつなぎ、小野川の水を直接出石川に放流すると同時に、放水路に阻まれた流れをサイフォンを通じて小野川下流の六方川に排水することにより、急激に増水した河川から水流が田にあふれでるのを防ごうというものであった。

用地買収を開始した昭和62年（1987年）、兵庫県教育委員会社会教育･文化財課は旧建設省豊岡工事事務所と協議を行った上で、事業地内の埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった（図版３）。

確認調査の結果、埋蔵文化財が存在することが明らかとなり、小野川流域は砂入遺跡、袴狭川流域は袴狭遺跡、入佐川流域は入佐川遺跡とそれぞれ呼称することとし、それぞれ全面調査を実施した(図版４)。

砂入遺跡、袴狭遺跡については、その後整理作業が行われ、既に報告書が刊行されている。

兵庫県教育委員会『砂入遺跡』兵庫県文化財調査報告第161冊　1997年

兵庫県教育委員会『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第197冊　2000年

第２節　確認調査

入佐川遺跡については昭和62年度、63年度、平成６年度の計３回の確認調査が実施されている。

昭和62年度の確認調査は、小野川、袴狭川、入佐川のすべての河川の流域を対象として実施された。その結果、小野川において埋蔵文化財の存在が確認され、砂入遺跡として全面調査が実施されることとなった。袴狭川、入佐川流域についてはさらに詳細な確認調査を実施することとなった。

昭和63年度の確認調査は、袴狭川流域の一部、および入佐川流域の大半について実施された。その結果、両河川の流域から埋蔵文化財の存在が確認されたため、袴狭川流域を袴狭遺跡、入佐川流域を入佐川遺跡とし、全面調査を実施することとなった。

さらに、平成６年度には、未確認であった入佐川遺跡の上流部分について確認調査を実施し、下流と同様に遺跡が広がることが明らかとなったため、全面調査を実施することとなった。

また、確認調査とは別に平成４年度、５年度には工事立会も行われ、全面調査範囲が広がることとなった（調査番号920386、920387、920397、930091、930248)。

第１表　調査一覧表

地区名	報告名	入佐川１区	入佐川２区	入佐川３区	入佐川４区
	調査時	Ｃ－６	Ｃ－４西	Ｃ－４東	Ｃ－５
調査次数		入佐川Ⅱ	入佐川Ⅰ	入佐川Ⅲ	入佐川Ⅳ
確認調査	調査年度	昭和63年度			平成６年度
	調査番号	880021			940298
	調査期間	昭和63年12月21日～平成元年３月16日			平成７年１月10日～平成７年３月13日
	調査担当者	西口・久保			大平・鈴木・中村・岡・服部
全面調査	調査年度	平成５年度	平成４年度	平成６年度	平成７年度
	調査番号	930082	920166	940184	950122
	調査期間	平成５年６月１日～平成５年７月20日	平成４年４月13日～平成５年２月10日	平成６年６月21日～平成７年３月16日	平成７年５月２日～平成８年２月５日
	調査地点	Ａ～Ｂ地点	Ａ～Ｆ地点	－	Ａ～Ｄ地点
	調査面積	1,007㎡	11,414㎡	3,574㎡	5,336㎡
	調査担当者	大平・西口・藤田・鈴木・岡	大平・村上・柏原	大平・鈴木・中村・岡・服部	大平・鈴木

第３節　全面調査

開発予定地内で確認調査によって明らかとなった遺跡の範囲に対して全面調査を行った。全面調査は４年にわたり、４つの地区に対して、計４回に分けて調査された。

さらに、調査当時に道路として利用されている部分は調査対象外としたため、入佐川３区を除く各地区はさらに小さな地点に分かれている。調査区と調査地点、確認調査と全面調査の関係、調査担当者、調査期間については第１表に示したとおりである。

なお、調査は、同じ小野川放水路事業である袴狭遺跡の調査と並行して行われた地区もあり、調査期間、および調査に従事した調査担当者は実状と必ずしも一致はしていない。

いずれの調査においても、上層については機械掘削を行い、それ以下については人力掘削により行った。調査区壁面については、脆弱な土壌であるにもかかわらず矢板などを用いず調査したため、法面をつけることにより対応した。

第４節　整理作業

点数は明らかでないが、調査により約4,000ℓ（28ℓ入りコンテナで約150箱）の土器類、約20,000ℓの木器が出土した。このうち木器については、水漬け状態にあるという性格上、整理作業・保存処理作業を効率的に行うため、これらを整理する過程で「甲」と「乙」の２つに大きく分けた。「甲」については処理前に全点の写真撮影と計測を行ったが、「乙」については出土した単位でのみ把握しているため、一点ずつのデータは未整理である。

「甲」と「乙」を分類するにあたって、特に明確な基準を設けておらず、調査担当者が木器の出土状況に応じて柔軟に行えるようにしている。結果的に遺物の名称、大きさ、形態など１点ずつのデータを必要とするものは「甲」に、遺物であると認定できるものの、特に一点ずつのデータを必要としないものを「乙」としている。「甲」は全地区で約1,700点である。

甲・乙の選別については発掘調査と並行して発掘現場事務所で行った。大型木器を除いて、ほとんどが１点ずつの水漬けパックにより保管し、漆器、木簡など一部の重要な脆弱木器についてはタッパの中に水漬け保管している。

木器の実測を除くいずれの整理作業についても各地区ごとの調査担当者が指示、チェックを行い、非常勤嘱託員が補助をした。木器の実測図については鈴木敬二がチェックを行った。

なお、整理作業を担当した主な非常勤嘱託員、日々雇用職員は以下のとおりである。

主任技術員　池田悦子、増田麻子、前山三枝子

図化技術員　佐伯純子、村上京子、高田めぐみ、綾小路公子、長川加奈子、桑田寛子、津田友子

図化補助技術員　又江立子

第２表　整理工程表

		土器など			木　器				金属器		
		11年度	12年度	13年度	11年度	12年度	13年度	14年度（予定）	11年度	12年度	13年度
ネーミング											
接合・補強											
実測・拓本											
復　元											
写真撮影											
トレース											
レイアウト											
執筆・編集											
分析・鑑定											
保存処理	外部委託										
	内部処理										

第５節　保存科学作業

入佐川遺跡では、多量に出土した木器を中心に保存科学的分析を行った。

平成13年度には、関西木質遺物研究会（代表　伊東隆夫）に委託し、木器368点について樹種同定を行った。対象となる遺物の選択については、出土した全ての木器について樹種同定を行うことはしなかったが、報告書に掲載したもの全てと、同じ遺構を構成する部材（入佐川１区の橋脚）については全て行うこととした。

また、同年度には、株式会社吉田生物に委託し、入佐川３区出土の木製柄頭（報告番号W163）に塗られた漆膜の分析、および入佐川２区出土の土師器（報告番号55）の内面に遺存する漆膜の分析を行った。

これらの分析結果は第５章に詳しい。

さらに、肉眼観察ではあるが、京都大学大学院生の大賀克彦氏に入佐川２区出土の石釧（報告番号S１）の石材を同定していただいた。

保存処理作業は木器と金属器について行った。木器の保存処理作業は、前節の「甲」「乙」分類を行った後、甲については全て処理前の写真撮影と計測を行った。具体的な保存処理は来年度行う予定で、甲のうち報告書で掲載された遺物を中心に外部委託を行う予定である。それ以外については埋蔵文化財調査事務所で行う予定である。

金属器の保存処理作業はX線撮影を実施した後、鉄製品については水酸化リチウム法による脱塩処理、エアーブレイシブと小型グラインダーによる錆取り作業を行った。真空樹脂含浸には非水性合成アクリル樹脂パラロイドNAD10を使用した。銅製品についてはベンゾトリアゾール法による脱塩処理後、パラロイドB72を含浸、強化し、エアーブレイシブによる錆取りを行った。処理後は鉄製品、銅製品とも脱酸素剤を封入して密閉保管している。

保存処理作業について、木器は中村弘、金属器は加古千恵子、岡本一秀が行い、主に以下の非常勤嘱託職員が補助した。

企画技術員　多賀直子

図化技術員　小林俊子、渡辺二三代、川上啓子、川上緑、船木昌美
西野淳子、三好綾子、藤井光代

図化補助技術員　野上裕子、三島重美

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

入佐川遺跡は兵庫県の北部、但馬地方に位置する。出石郡出石町の市街地からは約2.5km北にあり、東から西に延びる此隅山のすぐ南側にあたる沖積低地に立地する。此隅山の南裾には入佐川が西方へ流れており、遺跡はそのすぐ南側に位置する。行政上は兵庫県出石郡出石町宮内にあたる。

此隅山の北側には袴狭川、さらに谷を隔てた北側には小野川が西方へ流れており、それぞれ袴狭遺跡、砂入遺跡が位置し、袴狭遺跡群を構成している。

入佐川と袴狭川は此隅山のすぐ西側で一本となり、約500ｍ西で出石川と合流し、円山川を経て、日本海へと注いでいる。一方、小野川は下流で六方川となり、大きく北側へ迂回し、出石川と合流することなく円山川と合流し、日本海へ注いでいる。遺跡から日本海までは約19kmである。

調査によって、遺跡に堆積している層は水分を多く含むシルト層が中心であり、部分的に粗砂が河川から供給されて堆積しているに過ぎない。周囲の山は花崗岩で構成されており、この砂層はその風化ばいらん土である「出石真砂」で構成されている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄紋時代

但馬地方において当該期の遺跡は多数確認されており、兵庫県全体でも遺跡数の多い地域である。特に城崎郡日高町神鍋遺跡や養父郡関宮町ハチ高原遺跡のような中核的な遺跡が知られている。入佐川遺跡周辺では、砂入遺跡において縄紋時代前期の土坑が検出され、土器、石器が出土している。また、やや下流域の豊岡市では長谷貝塚、中谷貝塚が知られている。

弥生時代

宮内黒田遺跡や出石神社境内遺跡で前期の遺物が出土しているほか、小野川下流の駄坂で尾根上に築かれた墳墓が確認されている。袴狭遺跡群でも下層から前期にさかのぼる少量の土器が出土しており、入佐川遺跡周辺でも遺跡が存在することが明らかである。中期では、入佐川遺跡２区から完形の壺が出土しているが、遺構は検出されていない。袴狭遺跡では土坑などが検出されている。後期では、豊岡市域において墳墓を中心として遺跡が確認されている。

このように土器が見つかっているものの、集落の状況は明らかでない。この状況は但馬全体についても言えることである。

古墳時代

古墳を中心に多くの調査例がある。特に「□始元年」銘の三角縁神獣鏡が出土した豊岡市の森尾古墳は入佐川遺跡から北側に３km程度の距離であり、かつては同じ出石郡に属していた。他にも丘陵上には多数の古墳が造営されている。中には弥生時代にさかのぼるものから、古墳時代後期の横穴式石室や横穴まで存在する。弥生時代の墳墓には半坂峠墳墓群、御屋敷遺跡、田多地引谷墳墓群、入佐山墳墓群などがあり、代表的な古墳群は半坂峠古墳群、北浦古墳群、立石古墳群、長谷ハナ古墳群、田多地古墳群、安良古墳群、箱根山古墳群、新宮谷古墳群、カヤガ谷古墳群、岩谷古墳群、小野裏山古墳群などがある。田多地引谷墳墓群からは五銖銭が、入佐山墳墓群からは多量のガラス玉が出土しており、注目される。古墳では砂鉄や「君宜高官」銘のある四獣鏡などが埋納された入佐山３号墳や、茶臼山古墳、鶏塚古墳など埴輪を有する古墳があり、これらは現在の出石町の中心部周辺に分布している。また、町内から長持形石棺も見つかっている。

入佐川遺跡周辺では、古墳時代後期のカヤガ谷古墳群が調査されており、主体部は竪穴系横口式石室であった。この種の石室形態は豊岡市でも確認されており、但馬地方の後期古墳を特徴づける一つとなっている。また、横穴も多く分布しており、周辺ではカヤガ谷横穴がある。調査の結果、装飾太刀が出土している。

一方、当期の集落については調査例がなく、土器が田多地小谷遺跡、宮内上坂遺跡で出土しているに過ぎなかったが、今回報告する入佐川遺跡では３区で住居跡が確認されている。しかし、いずれの遺跡も後期に属する遺物がなく、前期から後期に継続するような遺跡は確認されていない。

古　代

但馬の国府は「日本後紀」に気多郡高田郷に遷すとあることから、それ以前を第１次国府、遷されて以降を第２次国府とよんで、２段階に分けて考えられている。日高町では第２次国府が確認されているが、第１次国府はまだ確定しておらず、袴狭遺跡群もその候補の一つとなっている。官衙的な性格のある袴狭遺跡群のうち最も古いのは荒木遺跡で、11棟の大型掘立柱建物や井戸が調査されている。その後、若干時期を重複させるようにして袴狭遺跡に掘立柱建物が現れる。袴狭遺跡からは石帯、銙帯のほか墨書土器、木簡が出土しており、多量の形代祭祀具などとともに官衙的色彩を色濃くしている。特に木簡の検討から、袴狭遺跡周辺に第１次国府が存在した可能性が指摘されている。

平安時代になっても袴狭遺跡には官衙的性格をもった遺構、遺物が継続する。

さらに但馬の一宮である出石神社が入佐川遺跡の南方１㎞に鎮座する。祭神はアメノヒボコという渡来系の神様で、但馬の開拓神として位置づけられている。

中世～近世

室町幕府の管領として六分の一国殿と呼ばれた山名氏が入佐川遺跡の北側丘陵上に此隅山城を築く。此隅山城の北側にある袴狭遺跡でも当期の遺構が確認されているが、南側の入佐川遺跡や宮内遺跡においても堀などの多くの遺構が確認され、豊富な遺物が出土している。

また、入佐川遺跡周辺が描かれた神床文書と呼ばれる絵図が残されており、鎌倉時代末ごろに条里地割が敷かれていたことが明らかとなっている。

やがて、出石藩の居城である出石城が築かれ、城下町が形成されて中心地として発展している。

第３章　全面調査の概要と遺構

第１節　概　要

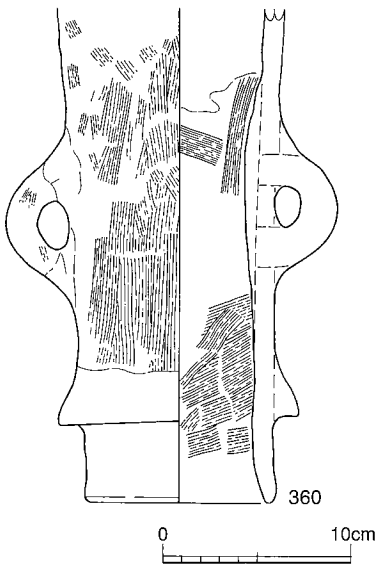
入佐川１区から４区までの４ヶ所に分けて調査した。地区は下流側（西側）から上流側（東側）に向かって１区から順に呼称する。３区以外はさらに小さな地点に分けて調査している。

入佐川１区の調査はＡ・Ｂの２地点に分けて実施した。Ａ区では旧河道に架かる橋梁遺構等を検出し、Ｂ区では旧河道とそれに伴う矢板列などを検出した。

入佐川２区の調査はＡ～Ｆの６地点に分けて実施した。Ａ地点では遺構は確認できず、Ｂ地点では近世とそれ以前の溝・土坑・シガラミを検出した。Ｃ地点では近世の溝とそれ以前の河道を検出し、Ｄ地点では奈良～平安時代の河道・土坑と、古墳時代の河道、堤防、溝を検出した。Ｅ地点では古墳時代の水田を検出し、Ｆ地点では奈良時代～中世の溝、河道、橋と、弥生～古墳時代の溝を検出した。

入佐川３区は今回調査した入佐川遺跡のほぼ中央に位置する調査区である。特に小地区に分けて調査していない。奈良時代～中世の溝・杭列と、弥生～古墳時代の住居址、掘立柱建物、溝、落ち込み、井堰などの木製構造物を検出した。

入佐川４区は入佐川遺跡の最も東に位置している。Ａ～Ｄの４地区に分けて調査を実施した。Ａ・Ｂ・Ｃの３地点からは旧河道や溝等を検出した。Ｄ地点では中世の整地層と堀、土塁、溝、畝状遺構を検出した。



第１図　表採遺物

第２節　入佐川１区

1. 概　要

入佐川１区の調査はA･Bの２地点に分けて実施した。北側の調査区をA区、南側の調査区をB区とする。A区では旧河道に架かる橋梁遺構等を検出した。B区では旧河道とそれに伴う矢板列などを検出した。

2. A地点

①概　要

遺構面は一面であった。調査区南半部を東西方向に貫く旧河道と、そこに架けられた橋の遺構を検出した。橋は橋脚と見られる杭が２列で等間隔かつ直線的に分布する状況を検出することにより橋と判断した。この橋梁遺構の他、旧河道の上層を東西方向に掘られた溝（SD102）と、これらの遺構とは垂直方向の南北に延びる水路（SD101）とその護岸施設、および矢板群を検出した。

なお調査区北西部分（SD101の西側、旧河道およびSD102の北側）は、撹乱のため遺構を検出することができなかった。

②層　序

調査地は沖積地に立地するため明瞭な地山は検出していない。図版７の土層断面図における９層で、SD101とSD102を検出している。SD102は調査区南半部を東西方向に貫いているが、位置的には、橋梁遺構が架けられた旧河道の真上にあたる。旧河道内は砂礫が順に堆積しているが、SD102の内部は灰色のシルト質土が堆積している。遺構面の上層には灰褐色のシルト質土が堆積している。地表下約50㎝はほ場整備時の盛土が堆積しているのを確認した。

③第１遺構面

【橋】

A区内を東西方向に流れる旧河道に架けられた、南北方向に延びる橋の橋脚群を検出した。橋脚群は大小あわせて39本検出した。杭は途中で折れたものを除いてすべて２m以上の長さがある。また調査中に倒れたものを除いて、すべて川底のシルト層まで打ち込まれていた。橋脚の分布状況は、基本的には南北長12m、東西幅1.5mの範囲に細長く分布しているが、旧河道の中央部では上記の範囲から西側に飛び出すように分布が広がっている。橋脚は上端部の形状により１～３類に分類した（橋脚の詳細は第４章：出土遺物、第３節：入佐川１区に記した）。

［橋脚杭１類］　杭の上端部に凹形の切り込みを持つタイプ

［橋脚杭２類］　杭の上端部に、自然と二股に分かれた箇所を用いるタイプ

［橋脚杭３類］　折れるなどして上端部の形状がわからないタイプ

橋脚杭１類は、東西方向に約１ｍ間隔で立てられた２本１組の杭が、南北方向に約2.5ｍ間隔で３組、計６本が規則正しく配列されていた。これら６本の杭に加えて、北側の川岸付近にさらに１本の１類の杭が検出されているため、４列以上の橋脚が復元できる。さらに最も南側の組には、橋梁を支える梁が杭の上に乗った状態で検出されている。この梁材は長さ１ｍ、径５～10㎝の芯持ち材である。

なお橋脚杭２類・３類の分布状況は、１類のように規則性が見出せないため、橋脚としての配列を復元することは困難であり、橋としての性格付けが困難であるかのように考えられる。しかし、特に２類については、上端部の二股を、梁を載せるために利用したものと考えられるため、とりあえず２類についても橋脚の一部であると考えておく。

杭列が発見された川の川底は、最も橋脚検出面から約２ｍの深さにあり、暗灰褐色のシルトで構成されている。杭はすべてこのシルト層まで打ち込まれており、根入れ長は50㎝である。川内部は砂礫層とシルト層が繰り返し水平に堆積している。

この橋の年代については詳細な年代を与えるのが困難であるが、10世紀頃の遺構である可能性が高い。川の埋土の中程から10世紀の人形（W17）が出土し、また川底付近では古墳時代の土師器の高坏（６・７）が出土している。

【旧河道】

旧河道は調査区南半部を東西方向に貫いている。川の北側の岸は検出したが、南側の岸は未検出であるため、正確な川幅は不明である。幅12.5ｍ以上、深さは２ｍ以上である。河道内には主として砂層が順に堆積している。上層では同じ位置で溝SD102を検出した。先述した橋梁遺構は旧河道に対して垂直方向に架けられている。川底はシルト質で、橋脚杭はこのシルトまで打ち込まれている。

出土遺物のうち土器は２点でいずれも高杯（６～７）である。木器は人形（W17）、机脚（W15）、部材（W16）を図化した。

【溝】

SD101

北西―南東方向に延びる溝である。幅約2.5m、深さは約70cmである。調査区南半部では旧河道と切りあっているが、調査時にはこの部分でSD101を検出することができなかった。調査区南東隅に「木組畦畔（木で組まれた畦状の施設）」を検出したが、この施設の位置・方向がSD101西側の肩ラインの位置・方向に一致している。このことから「木組畦畔」をSD101の護岸施設と捉えたい。

従って調査区南半部ではSD101を検出できなかったものの、SD101は旧河道の上層を通過し「木組畦畔」の東側に流れ込んでいるものと判断した。

また調査区北端部では、SD101東肩の護岸のために作られたと考えられる矢板が川岸に打ち込まれている他、堰として用いられたと考えられる二本の木材がSD101に渡されている状況を検出した（図版９）。

出土遺物は土師器のⅢ（１）１点を図化した。

SD102

SD102は調査区南半部を東西方向に貫いているが、位置的には、橋梁遺構が架けられた旧河道の真上にあたる。旧河道内は砂礫が順に堆積しているが、SD102の内部は灰色のシルト質土が堆積している。

出土遺物は土師器皿（２～３）と杯（４）および黒色土器は（５）を図化した。

【矢　板】

調査区の北端部、SD101の両外側で、２群の矢板列を検出した。

東側のグループはSD101の護岸施設と考えられる。幅20cmの矢板を、片方の辺を隣の矢板にオーバーラップさせるように隙間なく並べ、SD101の東肩に立てかけている。

西側のグループはSD101の外側に面を向けているため、SD101と関連のない施設であると考えられる。このグループの矢板より西側は撹乱のため遺構を検出できなかったが、この部分になんらかの水路・溝等が存在し、そうした遺構の護岸施設である可能性を考えたい。

【堰】

矢板群の南側に位置している。二本の部材をSD101とほぼ直角方向に向け、１m間隔に並べられている。この横木として用いられた材は、いずれも東側の先端が枘穴のような形に加工されていることから、廃材を転用したものと考えられる。この横木の周囲には杭が点々と打ち込まれており、横木はこの杭に縄等で結束されていたものと考えられる。

【木組畦畔】

調査区の南東隅で検出した畦状の遺構で、両側の側面を板材と杭等で固定されている。この施設の位置・方向がSD101西側の肩ラインの位置・方向に一致していることからSD101の護岸施設と考えられる。

畦の幅員は約１mで、この両側辺に全長約３m、幅約35cmの板材を立てかけている。その板が転倒しないように、杭を板材の外側に約20cm間隔に打ち込んで板材を固定している。さらに最も南側の一群は、杭の上から約20cm間隔に穿孔したさらに別の板材を被せている。これは杭および板材の転倒防止を図っているものと考えられる。

さらに木組畦畔の北半部と南半部では、板材の方向が異なっている。つまり南半部の板材がほぼ南北方向を向いているのに対し、北半部の板材は約20°東にずれている。そのうえ北半部の板材は南半部の板材の切るような形で設置されていること。このことから「木組畦畔」は度々作り直され、その都度、位置も微妙に変化してきていることが想定される。

3. B地点

①概　要

Ｂ地点では遺構面を１面検出した。この遺構面の主たる遺構は旧河道で、調査区東端部で検出した。

旧河道はほぼ南北方向に延びているが、調査区南端部で南西隅の方向に向かっている。また調査区北端部でも向きを西へ向けている。

また調査区南西隅では大規模な矢板列を検出した(図版12)。この矢板列は旧河道とほぼ垂直方向に設置されていることから、上記の旧河道の堰であると考えられる。さらにこれらの遺構の他、遺構面上で多数の杭痕を検出している。

②層　序

検出した遺構面は、第１遺構面のみである。主としてこの遺構面を形成するのは23層の暗灰褐色シルトである。遺構面として安定しているとは言い難く、この遺構面の下層もシルト層や砂層が乱雑に堆積している。この面の上層に、あまり土壌化の進んでいないシルトが堆積(９･16層)した上層は、シルト質の旧耕作土が６層水平に堆積している。

③第１遺構面

【旧河道】

旧河道は調査区東端部を南北東西方向に貫いているが、調査区南端部で西に向きを変え、調査区南西隅に向かっている。また調査区北端部でも向きを西へ向けている。川幅は約５ｍ、深さは約80㎝で、内部には主として砂層が堆積している。

【矢板列】

調査区南西隅は大規模な矢板列を検出した（図版12)。方向は南北方向より約20°西に振っている。検出した幅は約4.5ｍである。矢板は東列･西列の２列設置されている。西列の方が東列に比べて残存状況が良く、東列は検出した範囲の南側半分は矢板自体が喪失されている状況であった。矢板の根入れは25～30㎝である。

矢板列は旧河道とほぼ垂直方向に設置されていることから、旧河道の堰であると考えられる。

第３節　入佐川２区

1. 概　要

入佐川２区は、入佐川の中流から袴狭川との合流点にかけての範囲を調査区としている。

入佐川から南に幅50～60ｍの範囲を、水路・現道などを境界として６地点に分けて調査した。西から東へ北西から順に番号を与え、西側は北から順にA～C地点、中央にD～E地点、もっとも東をF地点とした。

2. A地点

坪井丘陵の先端にあたり、入佐川と袴狭川の合流する地点の南側に位置する。見性寺川を挟んで南にはB区が存在する。現河道との位置関係から見て、河道の影響を直接受ける場所である。

調査時点での地盤から、1.7ｍ付近まで掘削を行ったが、堆積の大半は、灰白色中～粗砂でしめられている。円礫が局部的に含まれるほか、ラミネーションも認められることから、すべて沖積作用による堆積と考えられる。

安定した堆積は認められず、遺構面並びに遺構の存在についても注意を払ったが、掘削範囲からは確認できなかった。

遺物は、灰白色中～粗砂から少量出土した。細片化した陶磁器片で、19世紀末の所産と考えられる。遺存状態から他の箇所より流入したものと判断した。

3. B地点

①概　要

袴狭川と入佐川が合流する地点の南に位置する。調査区の北辺に沿って見性寺川が流れ、これを挟んで北にA区、南にはC区がある。東はD区、西は平成５年度に調査した入佐川１区（A地点）がある。

遺構面として把握したのは２面で、中間に遺物包含層を挟む。上層の淡褐色シルトの上面を第１遺構面とする。検出した遺構は溝・土坑・シガラミなどで、出土遺物は近世の所産が中心をしめるほか、流入によってもたらされた資料もいくつか認められる。

続く暗灰色シルト～シルト質細砂からは、土器・木器の包含が認められた。第２遺構面の直上にあることを考慮して、第２遺構面包含層として報告する。さらに下層は緑灰色シルトで、上面を第２遺構面とした。検出した遺構は溝・土坑・シガラミなどがある。上面は削平され、複数時期にわたる遺構が同一平面で検出されているほか、小規模な溝も途中で消失している。

②層　序

現地表面下の堆積は、調査前に営まれていた水田の耕作土に続いて、円礫を含む砂質が堆積を重ね

る。局部的に褐色シルトの薄い堆積を挟みながら、80cm近くの厚みを持っていた。褐色シルトはいずれも水田土壌層と考えられ、上層の砂質土は洪水砂がもたらされたことによって廃絶したのであろう。これらの水田土壌層は広範な面を持って検出されず、形成された時期などについては、明らかにしがたい。

現地表面から1.5m前後で、遺構の形成される堆積を確認した。なお調査では、遺構検出面の直上までを重機によって除去している。

調査区の東半分には旧河道が存在し、遺構は西端に偏在して検出された。中間に遺物包含層を挟んで、上下２面の遺構検出面を調査した。もっとも上層に位置する、淡褐色シルトの上面からは近世の遺物を含む遺構が確認された。続いて暗灰色シルト～シルト質細砂が堆積するが、この層中からは土器・木器が包含されている。さらに下層は緑灰色シルトで、上面から古墳時代から中世にかけて、幅広い年代感を示す遺構が見られた。この層以下の堆積からは、遺構・遺物の存在を確認することはできなかった。

③第１遺構面

【溝】

SD101

調査区の南西部に位置する。中央にSK101を挟んで、SD104の対岸にある。SD102・SD104と同一のプランを持ち、それぞれ連接すると考えられる。溝の底面は、SD104がSK101に向かって、SD102がSK101から外方へと傾斜を持つことから、水はSD104→SK101→SD102の順で流れていたと考えられる。

北周壁から南西方向に直線で延びる。底面は、北から南にかけて浅くなり、SK101と近接する箇所で消失している。検出した上端線はほぼ平行、最大幅・最大深度は周壁部分で3.5・0.62m、調査区内で検出できた全長は7.6mである。埋土は、淡茶褐色粗砂が大半を占め、底面付近でわずかに淡黒褐色シルトが認められた。

溝内からは、漆椀（W19）が出土した。出土遺物や連接する遺構から、江戸時代の所産であろう。

SD102

調査区の北西隅に位置し、南東方向へほぼ直線で流れる。旧河道と同一方向であるが、埋土を切り込んでいることから、旧河道が埋没して以後に形成されたと考えられる。SK101と接する南東端は、上層からの削平によって接合状況が失われている。接触部分が明瞭な深度を持つのに対して、SK101の南東からは連続する遺構が検出できず、SK101に連接して機能した可能性が高い。

検出した段階での平面は、ほぼ直線で上端線はほぼ平行にのびる。最大幅はほぼ中央で3.8m、最深部は北西端部で0.82m、検出した全長は10.5mである。埋土は、茶褐色シルト質細砂と黒褐色シルトがラミネーションを見せ、比較的安定した流れを保っていたと考えられる。

溝内部からは土器・木器が出土した。土器は土師器の壷（14）、木器は馬形（W20）、下駄（W21・22）、漆椀（W23・24）がある。混入が想定される土師器壷を除けば、いずれも比較的新しい特徴を有する。

出土遺物の特徴から、江戸時代の遺構と考えられる。

SD103

調査区の西部中央に位置する。東西に長く、旧河道付近で消失する。旧河道埋没後に形成されたと考えられるが、幕末～近代の溝ならびに圃場造成による削平で消滅し、状況は把握できない。

旧河道と近接する付近でわずかに蛇行を見せる。西端ではSD104と近接するが、直接の切り合いは認められない。最大幅はほぼ中央で3.0m・検出した全長21.8mである。底面は緩やかに傾斜し、最深部分は西端部分で0.3mを測る。

埋土は、淡褐色シルト質細砂の単一で構成される。

出土遺物は存在しないが、遺構面の時期から江戸時代の所産と考えられる。

SD104

調査区の南西部に位置する。調査区の西周壁中央から北東に延び、東端でSK101と連接する。

平面は南へ湾曲を見せる。全長は7.5m、幅はほぼ一定で4.5mを測る。底面はSK101に向けて傾斜を持ち、最深部分となる連接部分が0.48mであった。底面の検出状況から、SK101にむけて流れ込んでいたのであろう。連接する箇所にはシガラミ101が存在するが、水量を調整する目的で設けられていたと考えられる。

埋土は、黄褐色シルト質礫混じり細砂である。

溝内からはいくつかの陶磁器片出土したが、図化できなかった。遺物の年代感や旧河道および他の遺構との関係から、江戸時代の遺構と考える。

【土　坑】

SK101

調査区の北西隅付近で検出された。平面はややいびつな円形を呈する。旧河道の西岸に位置するが、河道がある程度埋没した段階で設けられている。北西にはSD102が、南西部にはSD104がそれぞれ取り付く。

下層では第２遺構面で検出したSK202と同じ場所に存在する。ただし平面プランにある程度の違いがあることから、SK202がそのまま遺存したものではなく、第１遺構面が形成される段階で改めて掘削した可能性が考えられる。

検出段階での平面規模は、長軸が南北の中軸で9.4m、直交方向の最大幅が中央よりも北へ偏って8.2mである。断面は逆台形で、周壁は直線に立ち上がる。底部は緩やかな傾斜を持ち、最深部が北側にあたる。深度は0.61mを測る。

埋土は２層からなり、上層は淡茶褐色シルト混じり細砂、下層は黄褐色シルト質細砂である。内部から、遺物は出土しなかった。

連接する遺構ならびに遺構面の時期から、江戸時代に造られたと考えられる。

【シガラミ】

SD104の内部において、板･丸太材を組んだ施設を検出した。調査では、その性質を特定できなかったため、遺構名称をシガラミとして報告する。

シガラミ101

調査区の南西部で検出された。北東方向に延びるSD104内にあり、SK101との連接部分から南西寄りに位置する。南東から北西に向かって緩やかな屈曲をなす部分に設けられている。

板材および丸太材で、溝を遮る形に３列配置して、杭で固定する。３列のうち、南列と中央列はほぼ平行に設けられ、最も北に設けられた１列は幾分離れた配置で角度も異にする。

最も南に位置する列は、全長4.0ｍにわたって、長方形の板材を４枚並べている。遺存した板材は１段であったが、杭列の高さから見て、２段程度に重ねていたのであろう。北西端がSD104の西岸に達するが、東岸付近は撹乱等で消滅しており、完全に流路を遮断していたかどうかは不明である。それぞれの板材は、全長0.82～2.51ｍ・幅0.15～0.20ｍで、いくぶん重なりを持ちながら配置される。板材の両側に直径50㎝前後の杭を打ちこんで固定する。上流にあたる南西面には0.25～0.35ｍの間隔に対して、裏側は0.80～1.13ｍと広間隔に配される。両者の差は、水流の衝撃に対処する配慮の結果と考えられる。

間に挟まれた中央列は、南列とほぼ平行に設けられ、用材・構築方法とも一致点が多い。全長4.05～4.12ｍ・幅0.12～0.15ｍの板材を、縦に３枚積み重ねる。全体の高さは0.42ｍを測る。南東の最下段は、流水による影響で破損している。板材の北西端は南列と同じくSD104の西岸に達するが、東端は破損している上に撹乱の影響で溝の東肩が消滅しているため、状況に不明な点が多い。板材は両側に全長0.70ｍ・径0.10～0.15ｍの半裁した杭を打ちこんで固定するが間隔は両面ともに7.0～8.1ｍと広く、打ち込む箇所を交互に配置する。

最も北側の列は、溝と直交方向に渡した丸太材を杭列で固定している。材は全長2.08ｍ・直径1.45ｍを測る。片側に方形の枘が作り出され、建築部材の転用とみられる。他に関連を想定させる材は検出できなかったが、固定するための杭列が南東方向へと延びを見せている。北側は、SK101に向かって川幅が狭まっており、川をほぼ遮断する形に想定される。固定する杭は全長0.48～0.75ｍ・直径50㎝前後で、丸太材を挟んで打ち込まれていた。横倒しになって検出されたものが多いことから、合掌形に打ち込まれた可能性がある。間隔はSK101に面する北側が0.50ｍ、反対は0.70ｍとやや広くなる。

なお板材が接地する面は溝底から0.15ｍほど上で、最下層の淡褐色礫混じり粗砂が堆積した段階で設けられている。また最下層内からも板材の残欠が確認されており、洪水等の急激な出水による破壊・埋没の後、新たに造りなおした状況が見てとれる。

構造や設置個所から見て、SD104を流れる水流を調節する遺構と考えられる。周辺は全体に削平を受けており、遺構自体も上部の構造を消失しているが、周辺において水路を分岐させた痕跡は認められず、取水・分水のための施設とは考えがたい。具体的な性格付けは困難だが、SK101との連接部分にあたることから、流入する水量を調整するために設けられたと考えておきたい。

シガラミの周辺から遺物の存在は認められなかった。しかし肥前陶磁器片が出土しているSD104に設置されていることから、近世の所産であろう。

【旧河道】

調査区の北東部に位置する。南西方向へほぼ直線に延び、調査区内では西岸上端のみ検出した。第２遺構面へと存続するが、西岸の上端ラインが大きく減退し、埋没の進んだことをうかがわせる。

岸の埋没が進み規模を減じてはいるものの、東岸がさらに調査区外へ広がる。検出した範囲では北

側へ向う傾斜が続くことから、河道の中心も調査区外にあると考えられる。調査区内で検出した幅は8.6m、最深部は調査区の北東隅部分で、検出面からの深さ0.85mである。

遺物はすべて浮き上がった状態で検出された。図化した土師器の坏（13）以外に、摩滅した陶磁器・須恵器が出土している。陶磁器には18世紀後半の特徴を有する物が多く見られた。

出土遺物は多くないが、最も新しい時期を示す陶磁器の存在から、江戸時代の遺構と考えられる。

④第２遺構面

【溝】

SD201

調査区の西部に位置する。南西隅から北東に向かって蛇行しながら流れ、土坑（SK202）・旧河道へと続く。第１遺構面のSD104と重なり合う部分が多く、溝の東端がSK101と連接するが、遺構面の違いや切り合いが生じて流れを変えている堆積状況などから、ある程度の断続期を持って設けられたと考える。

溝の両上端は、南西にむかうにつれて広がりを見せる。全長は19.8m、最大幅は西壁に接する付近で5.4mである。底面はある程度の凹凸を持ちながら北東へ傾斜する。最深部における深度は0.80mだが、両岸は後世の堆積やSD104などによって削平を受けている。

検出した埋土は大きく３層で、上層には灰色シルト質細砂、続いて褐灰色粗砂混じりシルトが厚く堆積する。下層は暗灰色シルト～細砂の堆積が続き、底面付近には暗灰色シルトと灰色粗～中砂のラミネーションが認められた。シガラミ201・202は、中層の褐灰色粗砂混じりシルト上面で検出できた。溝底から0.4mほど埋没した段階で設けられたと考えられる。

溝から出土した遺物のうち、瓦器の椀（15）は検出面付近の最上層より出土して、遺構面を覆う包含層の遺物が混入した可能性が高い。連接する遺構の時期や、埋土から溝底にかけて出土した遺物はすべて土師器（16・17）であることから、古墳時代の遺構と考える。

SD202

調査区の南部、旧河道の西岸付近に位置する。西へわずかに偏るが、ほぼ直線で南北方向を指向する。南端は調査区外へ続く一方、北端は途中で消失する。

検出した全長は5.9m、幅はほぼ一定で0.6mを測る。断面はやや浅めのU字形、最深部は南壁付近で0.3mである。底面はほぼ平坦であった。

埋土は灰褐色中砂のみで構成され、銅銭が２枚（Ｍ１・５）出土した。溝の規模や埋土の状況など長期間にわたって稼働していたとは考えがたく、皇宋通寶（Ｍ５）の鋳造年代などから平安時代後期の遺構と考えたい。

SD203

調査区の南部、旧河道の西岸付近にて検出された。SD202と203の中間に位置する。調査区南壁から北東方向へ延びるが、途中湾曲して北端は消失する。また南端もほとんど深さがなく、埋土をわずかに検出したにすぎない。

全長7.2m・幅0.72mを測る。断面系は浅いⅢ形で、検出した限りにおいては、中央部がもっとも深く0.07mであった。

埋土は淡灰褐色細砂～シルト質細砂である。中からは永楽通寶（M13）が出土した。出土遺物から室町時代の遺構と考えられる。

【土　坑】

SK201

北西－南東に長軸を持つ、楕円形の土坑である。調査区の中央部に位置し、旧河道の西岸を切り込んでいる。南側が調査区外に広がる。

長軸は検出した範囲で29.2m、直交方向の最大幅は13.8mをそれぞれ測る。検出した底面はほぼ平坦で、周壁も直線に立ちあがる。断面は逆台形に近く、深さは2.3mである。

埋土は３層でレンズ状に堆積する。上層は茶褐色細砂、中層は部分的に褐色のシルトブロックを含む茶褐色細砂。下層は淡褐色シルト質細砂である。いずれも人為による痕跡は認められなかった。

内部からは、支脚状の木製部材（W25）と鉄鏃（M20）が出土した。いずれも下層の淡褐色シルト質細砂に含まれていた。

出土した鉄鏃の特徴などから、中世の遺構と考えられる。

SK202

調査区の北西隅付近、旧河道の西岸に位置する。平面はいびつな円形である。南西にはSD201が取りつく。

検出段階での平面規模は、長軸が南北の中軸で8.1m、直交方向の最大幅が中央からいくぶん北へ偏っており7.05mを測る。断面は逆台形、底部は緩やかな傾斜を持ち、最深部が北側にあたる。深度は0.95mを測る。

中央部分を第１遺構面で検出したSK101に切られており、埋土は周壁付近に遺存する状況であった。おおむね２層で、上層は褐色礫混じり細砂、下層はSD201と共通する暗灰色シルト質細砂が見られた。底部付近から、土師器の鉢（31）が出土している。図化し得なかった遺物もすべて土師器で、須恵器の混入は認められない。

出土遺物の年代感から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

【シガラミ】

SD201の内部において、板・丸太材を組んだ施設を３箇所で検出した。シガラミ201・202は溝底がある程度埋没した時点で設けられ、溝底で検出されたシガラミ203とは、0.6～0.8mほどのレベル差がある。

シガラミ201

調査区の西壁近くに位置する。SD201のほぼ中間に存在する。南8.5mにはシガラミ202がある。

SD201に直交して、板状の部材を一列に並べている。0.4mほど埋没した段階でもうけられ、列の全長は3.2m、設置当初と見られる溝底からは0.4m前後突出する。板材は北へ向かっていくぶん倒れ気

味に立っていた。

使用された板材は縦長で用いられ、先端をとがらせたものは少ない。長さ0.5～1.0m・幅0.2～0.3m程度のもの以外に、流路の中央には扉の転用材を２枚（W105・W106）設置する。明瞭な掘り方は認められなかったが、50㎝以上が土中に埋設されるところから、最小限の掘り方で設置したと考えられる。また板材の北面沿いに、直径0.1m前後の杭を打ち込んで支えとする。南側については有無が明確ではないが、水流があたる面とは反対の部分に打ち込まれている。遺存する杭は８本で、扉材の裏面には横木の一部が遺存する。

板列の東端は、溝の東岸部分に到達しているが、西岸と列の西端との間には1.3mほどの空間がある。板材の打ち込まれた痕跡などは見られず、南側からは、杭列・自然石がまとまって検出された。この空間は流れを通すためのもので、石や杭列は水流の調整に用いた施設と考えられる。以上のことから、溝からの分水を目的とした井堰として設けられたものであろう。

シガラミとして用いられた部材のほかに、出土遺物はない。部材（W105・106・109・331～334）は用途不明品のほか、扉材の一部を半裁して転用している。一端に扉壷へ差し入れる突起が認められたものもある。

設置された溝（SD201）の時期から、古墳時代の遺構と考えられる。

シガラミ202

SD201の南西隅に設けられる。溝の西半が大きく調査区外へ広がる場所にあたる。シガラミ201と同じく、溝の直交方向に板材を一列で並べている。

調査区内で検出した板材は全部で６枚あり、すべて垂直に近い角度で打ち込んでいる。列の全長は1.61mで、西は調査区外へと続く。溝が0.4mほど埋没した段階で設けられ、シガラミ201と同一の堆積で設けられている。

使用する板材は縦長で、先端をとがらせて打ち込む。長さ0.5～1.0m・幅0.2～0.3mで、設置段階の溝底からはわずかに頭を出した状態で検出された。設置当初に溝底から露出させた部分はほとんど亡失したと考えられる。遺存する頭部も、摩滅による痛みが激しい。

板材の周辺からは、固定するための杭材など認められず、流れの直行方向に板を打っただけの単純な構造の井堰と理解した。

周辺から遺物の出土はないが、シガラミ201とは同じ溝底の段階で設けられていることから、ほぼ同じ時期に造られたと考えられる。

シガラミ203

調査区の西壁近くに位置する。SD201内に設置されたシガラミだが、溝本来の底部を追求する断ち割り作業中に検出された。同じ溝に設置されたシガラミ201・202よりも下層に位置する。調査の最終段階において存在が明らかとなったため、掘削範囲を遺存する範囲に限定して、遺構検出を実施した。

SD201は下層においても流路の方向に大きな変化がない。ただし岸の線には多少の変化があり、シガラミの設けられた箇所は溝の東岸がわずかに屈曲する場所にあたる。

検出段階での規模は、溝底から40㎝程度で、上部は消失が考えられるが、下部の構造は良好に遺存する。

先端に枘を持つ長さ3.32m・直径0.35m前後の丸太材を横たえ、その裏側には杭を斜めに打ち込んで固定する。杭は長さ1.21m・直径0.22mの丸太材で先端をとがらせたものである。川の流れを受ける形で鋭角に打ち込まれているため、背後にはなんらかの支脚が設けられた可能性も考えられる。

横木とする丸太材の前面にも杭材が２列認められ、その間には木を薄く削いで板状にしたものが敷き詰められていた。

横木の前に打たれた杭は長さ0.75m・直径0.05m、木皮の前面に打たれた杭は長さ0.92m・直径0.10mで、いずれも丸太材を使用する。木皮前の杭が大きく間隔も密であることから、水を受け止める中心の役割を担っていると考えられる。杭の前面はワラと粘土を混ぜたもので固化させる。さらに流れを受け止める形で粘土をたわませ、表面には網代に編んだ樹皮を張り付けている。その一部を検出することができた。樹皮や網代、粘土などは、水の漏れを防ぐために用いられており、横木の全面に打ち込まれた杭によって、水位を上昇させたのであろう。

シガラミ201・202と同じく、SD201内に設けられた施設ではあるが、前者とは異なり、河道が大きく埋没しない段階で設置されたと見られる。両者とのレベル差は0.6～0.8㎜で、シガラミ203の上部が洪水によって消失したと考えるが、遺存する下部の構造から、上流からの流れを受け止め水位を上昇させる性格がうかがえる。分水などのために設けられた井堰と考えられるが、分水状況や分水を受けた水路などは検出できなかった。

付近から図化できる遺物は出土しなかったが、SD201の所産から古墳時代の遺構であろう。溝底付近で出土した遺物に須恵器を含まないことから、古墳時代前期に設けられたと考えられる。

【旧河道】

調査区の中央から東にかけて、大きく広がる。南壁中央から南西隅に向かってほぼ直線に延びる西岸のみを検出できた。

東岸は調査区外に広がっているため、全体の規模はわからない。西岸は中心に向かって傾斜が続き、上端のラインから７～11m内側で多少緩やかとなる。河道の中央部は顕著に凹凸が認められるが、総じて東から西への傾斜を保つ。検出した範囲における最深度は検出面から深さ1.5mであった。

埋土からは、土器ならびに木器が出土した。それぞれの遺物がもつ特徴は幅広く、弥生時代から中世に至るものが存在する。遺物は底部付近と岸付近の堆積に含まれていた。底部付近から出土したものは、弥生土器（18・19）と管状土錘（21）である。また岸付近からは、土師器（32～34）・土製品（35）ならびに木器が出土した。木器は斎串（W26～28）と部材（W29・30）である。

出土遺物のうち、最も下層で出土した遺物が弥生土器を中心としており、時期的には弥生時代にさかのぼる可能性がある。その後はすこしずつ規模を減じながら、第１遺構面で検出した状況に至ると考えられる。

4. C地点

①概　要

袴狭川と入佐川の合流点から、南へ100mに位置する。北にはB地点、西にはD地点がある。

遺構面は２面確認した。調査区の大半が弥生時代から近世にわたる旧河道にあたっており、遺構面は調査区の西側に偏在する。暗褐色シルト質中砂上面を第１遺構面、黒褐色シルト質中～粗砂から暗褐色極細砂上面を第２遺構面としている。また第２遺構面の直上に堆積する灰褐色中～粗砂を、第２遺構面遺物包含層として記述を進める。

第１遺構面で検出した遺構は、調査区の中央付近を流れる溝１条であった。出土遺物には近世の陶磁器、木器がある。

第２遺構面は、調査区の中央にD区･B区と連続する旧河道が横たわる。調査区が流れに沿う格好となったため、西側の岸しか確認できなかった。中央で切りあいを持ち、微妙に方向を違えている様子を検出している。西岸部分は微高地状を呈するが、上面において顕著な遺構は確認できなかった。

第１遺構面は出土遺物から、江戸時代と考えられる。第２遺構面は、複数時期の遺構を同一面で検出しており、面の形成時期は明確にしがたいが、古墳時代の遺構が中心を占める。

②層　序

調査区の東部から中央にかけては、現地表面に続いて、砂質土が厚い堆積を見せる。これらの砂層は、褐色の礫混じり細砂～粗砂で構成され、調査で掘り下げた深度において安定した面を見出すことはできなかった。入佐川の旧河道の堆積で、時期によって川幅の増減があるものの、基本的には古墳時代から近世にわたる長時間、稼動したと考えられる。

遺構面は旧河道の西岸部分に存在する。現地表面下の堆積は、遺構面までがB区と共通する。遺構の形成される堆積は、地表から1.5m前後に存在する。上層にあたる第１遺構面は、黒褐色シルト質極細砂の上面にあたる。

続く暗褐色シルト質中砂以下でSD201の埋土が現れ、安定した堆積は調査区の西隅に限られる。灰褐色中～粗砂層には、微量であるが遺物が含まれる。続いて第２遺構面を形成する土層となるが、基盤層である暗褐色極細砂は西側にむかって微高地状の高まりを見せ、縁辺部に堆積する黒褐色シルト質中～粗砂では、断面観察の結果水田土壌の特徴を認めたが、田面を検出することはできなかった。

③第１遺構面

【溝】

SD101

調査区のほぼ中央において検出した。中央を確認トレンチによって切られる。

北周壁からわずかに蛇行するが、基本的には北西方向直線で延びる。底面は、北に向って深くなり、北壁と接する部分が最深部となる。調査区内で検出できた全長は28.3m、溝の幅はほぼ一定で中央付近で2.4mを測る。最深部の深さは検出面から0.5mであった。

断面形は浅いレンズ状をなし、粒径の大きい砂系埋土とシルト系埋土が南へ偏りながら交互に堆積する。

溝の埋土上層から陶磁器が、底面付近で木器がそれぞれ出土した。図化できたものはいずれも木器で、付札（W54）、下駄（W48）、漆椀（W49～51）である。

遺構の時期は、出土遺物から江戸時代に属すると思われる。

④第２遺構面

【溝・旧河道】

SD201

調査区の中央を横断している。検出面では、中央に中洲状の高まりを挟んで、旧河道の西に位置する。本報告では旧河道とは別の遺構名称を用いているが、旧河道が一時的に流れを変えた痕跡と考えられる。

南周壁の中央部分から、北西方向に直線で延びる。かなりの深度を持つと考えられ、掘削可能な範囲まで掘り下げを実施したが、底面を把握するにはいたらなかった。

検出した最大幅33.1mである。埋土は、川の岸付近には灰褐色細砂と褐色シルトのラミネーションが見られ、続いて洪水による堆積である黄褐色砂礫層、中央部に埋没最終段階の淡黒褐色シルトが堆積する。徐々に川幅を減じつつ、最後はよどみ状の緩やかな流れで埋没していった状況を示す。

上面は褐色シルト質細砂～礫混じり粗砂によって削平を受けている。旧河道の西岸である黒褐色シルトに切られていることから、時期的に先行すると考えられる。

遺物は黄褐色砂礫から細片化した土師器が数点出土した。図化できたものは甕(38)のみである。また木器が淡い黒褐色シルトから出土したが、遺存状態が悪く、図化できるものはなかった。

出土遺物はいずれも古墳時代のものであることや、近世には完全に埋没し、上面に遺構が形成されることから、古墳時代を中心に存続するものであろう。

旧河道

調査区の東部に位置する。西岸の一部はSD201と切り合いを持ち、東岸は調査区外へと続く。

北周壁の中央からわずかに南東方向へ延びている。規模が大きいことから、幅･深度とも、全容を把握するにはいたらなかった。川の東岸は斜め下方へ直線的に延び、南端付近ではSD201を切っている。

淡青褐色シルト質細砂・黒褐色シルトを切る形で形成される。堆積はいずれも礫混じりの中砂～シルトによって形成され、各層には円礫ならびに粒径の大きい砂礫が大量に含まれている。

出土遺物は岸付近に堆積する、淡青褐色細～中砂から出土した。遺物の大半は細片・磨滅化している。図化できたものは、土師器の壷（39）・下駄（W52）の２点にとどまった。

規模から考えて、遺構の時期はかなりの長期にわたると考えられるが、SD201との切り合いから後出はあきらかである。出土遺物のうち、下駄が差歯型であることから、平安時代以降に生成して、近世まで続くものであろう。

【微高地】

旧河道・SD201の西端部に広がる。黒褐色シルト質中～細砂および暗褐色極細砂で、上層を覆う灰褐色中～粗砂の影響によって、多数の起伏が認められた。

顕著な遺構は確認できなかったが、断面観察では畦畔と考えられる盛り上がりが見られることから、水田が形成されていた可能性が考えられる。

5. D地点

①概　要

入佐川Ⅱ区の中央にあたる。農道を挟んで東にはE地点、西にはB・C地点が、調査区の北辺を流れる見性寺川を挟んで北には、F地点がそれぞれ位置する。

検出した遺構面は２面で、現地表面から1.3mに堆積する褐灰色細砂混じりシルト上面を第１遺構面、旧河道並びに堤防の検出面にあたる緑暗灰色シルト～緑灰色シルト混じり細砂、ならびに基盤層にあたる緑灰色シルト上面を第２遺構面として、状況を記述する。なお旧河道は、２つの遺構面でそれぞれ方向・規模を異にする。

第１遺構面では、旧河道・土坑を検出した。畦畔等を平面で検出することはできなかったが、検出面の直上では田下駄などの農具が出土しており、水田化していた可能性が考えられる。旧河道より出土した土器から、これらの遺構面は奈良・平安時代の所産と考えられる。

第２遺構面は、旧河道の北岸が調査区を斜めに横切る。残る部分は堤防と堤防沿いに流れる溝が存在する。堤防およびその周辺からは、数多くの土師器が良好な遺存状態で出土している。特徴が共通し、ほぼ同一の検出面をなすE区検出の水田畦畔については、D区内において確認できなかった。

②層　序

調査前の水田耕作土に続いて、粒径の大きい砂質土と、シルト系の堆積が交互に積み重なるように堆積する。砂質土はかなり層厚であるのにたいして、シルトは薄く、長期にわたって不安定な状況が続いたことを示している。

現地表面から1.3m前後でようやく層序に安定が見られ、褐灰色細砂混じりシルトの上面で、遺構の存在が確認できた（第１遺構面）。続いて、暗黒褐色の細砂混じりシルト～礫混じり細砂が堆積し、調査区北東部は緑灰色のシルト～シルト質細砂の比較的安定した面が堆積を重ねる。一方、南東部から西部にかけては淡褐色礫混じり細砂～黄色灰色粗砂が堆積の中心を占める。

南東部から西部に広がる砂質土は、B・C地点に続く旧河道の堆積であり、北東部の安定した部分はその西岸部分に当たる。旧河道に沿って延びる堤防と溝を検出し（第２遺構面）、堤防より北側は褐灰色細砂混じりシルト～緑灰色シルトが基盤層をなす。

堤防上には完形、または完形に近い土器が帯状に検出された。また旧河道の埋土にも、良好な遺存状態を呈する遺物が多く含まれ、これらの土器は堤防上に並べられていたと考えられ、旧河道の埋没過程で転落した状況がうかがえる。

以下、淡茶褐色シルト質細砂上面を第１遺構面、旧河道並びに堤防の検出面を第２遺構面として、状況を記述する。

③第１遺構面

【土　坑】

SK101

調査区西周壁の中央部で検出された。南7.5ｍにはSK102がある。西側の半分が調査区外へと続く。

検出した部位から、直径1.15ｍの正円形と考えられる。検出面からの深度は0.45ｍを測る。断面は擂鉢状で、周壁は中央へ向かって直線に下がる。

埋土は３層で構成される。いずれも平行に堆積し、上層には暗灰色極細砂、続く灰色細砂には、暗灰色のシルトがブロック状に認められる。最下層は灰色シルト質細砂である。

内部から、遺物の出土は認められなかった。遺構面の時期から、中世と考えられる。

SK102

調査区南西部で検出された。平面は円形を呈し、調査区内では全体の２／３程度を検出した。平面はわずかに楕円形と考えられ、南北方向が長軸となる。長軸の全長は1.55ｍで、直交する軸の残存幅は1.10ｍである。断面は浅いレンズ状で、周壁が中央に向かって緩やかに湾曲する。最大深度は0.34ｍを測る。

埋土は４層で構成される。それぞれの層は平行に堆積する。上層２層は細砂系の堆積で、最上層の灰色細砂には炭化物が含まれる。下層２層はいずれもシルトからシルト質細砂で、遺物は暗灰色シルト内に少量含まれていた。いずれも遺存状態は悪く、底面よりもいくぶん浮き上がった状態であった。なお、底面からは円柱状の石が出土したが、人為による使用痕跡などは認められなかった。

時期を決定する手がかりは少ないが、遺物の状況や遺構面の時期から、近接するSK101と同じ中世の遺構と判断した。

SK103

調査区の中央部に位置する不整形の土坑で、北側を旧河道によって切られ、消失する。

不定楕円形を呈し、長軸を東西方向に向ける。短軸規模は判然としないが、残存する長軸の全長は18.5ｍ、最大幅11.3ｍを測る。断面はおおむね逆台形だが、部分的に凹凸が見られ、東側周壁の立ち上がりは緩い。最深部は検出した中央で0.57ｍを測る。

４層で構成される。周壁に沿って茶褐色細砂が、中央付近に３層の堆積がある。上から順に、暗茶褐色シルト質細砂、シルトをブロック状に含む暗灰褐色シルト質細砂、茶褐色シルトが見られた。内部から出土した遺物はない。

遺物が存在しないため時期の特定は困難だが、旧河道に一部を切られていることから奈良時代よりも先行すると考えられる。ただし埋土はいずれも河道堆積に類しており、ある時期に流れを変えた旧河道が部分的に遺存した可能性もある。

【旧河道】

調査区の北西部周壁沿いに位置する。検出した南岸部分は、北壁の中央から南へと向かい、すぐに東へと屈曲する。検出した範囲では、鍵状の平面を呈する。断面は逆台形だが、周壁の傾斜は急で、

屈曲を呈する部分に水流の直撃を受けて、周壁がオーバーハング気味となる。また底面も凹凸が著しい。

検出した規模は、全長62.5m・最大幅11.5mである。岸から北へ8.5m程度で最深部となることから、本来の幅はおおむね17m前後と考えておきたい。深さは検出面から0.66mである。西から東への流れと考えられる。

堆積は、最上層に暗茶褐色の細砂混じりシルトが比較的薄く堆積する。遺物の大半は、この層中から出土した。以下は大きく２層に分かれ、上層は茶褐色礫混じり細砂、下層は灰褐色細砂礫混じりの中砂～シルトが溝底まで堆積する。上層にはわずかに遺物が含まれているが、下層は円礫ならびに粒径の大きい砂礫が多く含まれていたのみで、遺物を認めることはできなかった。

出土遺物は、茶褐色礫混じり細砂から祭祀具の舟形（W60）・刀形（W61）、遊戯具の琴柱（W62）が、暗茶褐色細砂混じりシルトから祭祀具の斎串（W57～59）、容器の曲物（W66）のほか、農具の大足を装着した方形枠（W73）がほぼ完全な形で出土した。

出土遺物から、旧河道として機能していた時期は奈良～平安時代を中心とするが、平安時代終わりごろには埋没していたと考えられる。埋没の最終過程では、湿田として利用されていた可能性が高く、最上層から出土した木製農具の存在が、裏付ける。

④第２遺構面

【溝】

SD201

堤防の北側に沿って、調査区の南東端から北壁中央に延びる。ほぼ直線でのび、底面は東から西へ緩やかに傾斜する。

検出した規模は全長54.5m、幅はほぼ一定の4.5mである。断面は台形、最深部は東端部で1.05mを測る。溝底の傾斜などから北西への流れと考えられるが、北壁周辺は検出面全体が削平を受けて浅くなっている。

粘性の強い土壌２層で構成される。上層（暗褐色シルト）は、ごく微量だが褐色細砂をブロック状に含んでいる。また下層（暗い灰褐色シルト）は、ほとんど砂粒を含まず、長期のよどんだ状態によって形成された堆積と考えられる。

遺物はそれぞれに含まれているが、下層では底面付近から遺存状態のよい遺物が少量ながら出土したのに対し、上層は比較的小さい破片が数多く含まれている。いずれも堤防側に偏在し、意図的な投棄ではなく、自然の流入によると考えられる。また最上層では、祭祀具の斎串（W55）、農具の田下駄（W56）が出土した。また下層に含まれる遺物は、土師器（41～46）の壷・甕などのほか、石釧の破片（S１）がある。いずれも東端の堤防沿いでまとまって検出し、遺存状態がよい。

溝底付近から検出した遺物は、いずれも古墳時代前期のもので、堤防上から検出した土器群が流入したと考えられることから、SD201の時期もほぼ同時期と考えられる。

【堤　防】

第２遺構面の南東端から西北西へ、帯状に延びる。旧河道の北岸に沿って、全長50mにわたり検出

された。また堤防の北に沿って、溝（SD201）が走る。検出段階の断面形はなだらかな山形で、0.7m程度の盛りあがりを認めたが、後世の削平等によって大きく形を変えている。河道との境界が不明瞭であり、本来の幅は不明確だが、５～10mを測ると考えられる。

構成する土壌は基盤層である緑灰色シルトの直上に堆積する青暗灰色～暗灰色シルトで、異なった土壌の積み上げや芯材などの内包する施設は見られない。

検出面からは、良好な遺存状態を保つ土器が帯状に出土した。分布は、削平によって堤防が消失する東端を除いて、検出面のほぼ全域にわたる。また旧河道・SD201内には、堤防から転落したと考えられる土器が数多く認められた。

出土した土器はすべて土師器（47～99）で、大半を占める壷・甕・高坏のほか、鉢・低脚坏がある。破損せずに出土したものは少数で、内容物の遺存したものは見られなかった。上層から押しつぶされた状態で検出されており、本来は堤防から旧河道の北岸にかけて据え置かれていたものであろう。

堤防上を中心に並べられた土器群は、帯状に重なる出土位置や個々の遺物が良好な遺存状況を示すことなど、特異な点が見出せる。検出した状況だけでは性格を特定するに至らなかったが、土器の中に焼成前穿孔を施されたものが認められることや、堤防から転落したと考えられるSD201出土遺物の中に、破片化した石釧が含まれていることなどから、何らかの祭祀儀礼に際して用いられた可能性が高い。

これらの土器群の時期は、出土遺物から古墳時代の前期と考えられる。

【旧河道】

調査区の南西部分を占める。C区で検出した大規模な旧河道に対応するが、北岸部分を検出したにすぎず、本来の川幅などについては不明である。岸のラインに沿って、堤防並びに溝（SD201）が存在する。岸は北西方向に向かうが、いくぶん蛇行気味となる。

岸部分の南部は、堤防から５mまでなだらかな斜面が続き、角度を変えて急激に深くなる。中央部分はかなりの深度を持つと考えられ、掘削可能な最大深度（検出面から2.5m）まで掘削したものの、底面を露出させるにはいたらなかった。

粒径は異なるが、いずれも円礫を大量に含む中砂～シルトによって埋土が形成されている。また堤防にかけての岸上層に暗灰色細砂混じりシルト・緑灰色シルト混じり細砂など、堤防から流出したと考えられる土砂が堆積する。内部には、堤防から転落した遺物が細片化して含まれていた。

また流出土に包含される土器群のほかに、東部では南岸の緩斜面上に分布する土器群がある。堤防から転落した土器もある程度は混在していると思われるが、広範囲にわたって良好な遺存状態の土器が広がっていることから、大半は岸部分に置かれていたものであろう。主要器種は壷・甕・高坏で、出土状況にも堤防と共通点が多く認められる。直上を覆う土がシルト系の粘質土であり、流失によって形成されたものではないことから、これらの土器も堤防上と同じ意図をもって置かれたものと考えられる。

出土遺物は土器と木器で、土器には土師器と須恵器、土製品がある。土師器（100～115・117～128）には壷・甕・高坏・鉢が、須恵器（116・120）には坏蓋・皿が見られた。土製品は管状土錘（130）である。また木器として用途不明品である方形の板材（W110）が出土した。

中心となる時期は、堤防上の土器群と同じく古墳時代前期と考えられるが、埋土の上層には古墳時

代後期や奈良時代の須恵器が含まれ、稼動した時間が長期にわたることを示している。

6. E地点

①概　要

袴狭川と入佐川の合流点から、東へ100ｍの地点に位置する。西にはD地点、北には見性寺川をはさんでF地点がある。

調査を開始する以前には、周辺の田面改修にともなって生じた残土を集積、投棄した個所である。現地表面から深さ１ｍ前後まで撹乱土が堆積して、本来の堆積は失われている。

遺構面は１面を確認した。遺構面の東隅部分には撹乱の影響が深く及んでいる。なお、明確な遺物包含層は確認できなかった。

検出した遺構は古墳時代を中心とする水田で、田面と対応する畦畔を３条検出した。遺物は畦畔上から検出した土器１点である。出土遺物の年代感から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

②層　序

調査前の地目であった旧耕作土と床土に続いて、圃場整備でもたらされた撹乱土が堆積する。撹乱土は灰褐色の礫混じり粗砂で、中には瓦・スレートの破片などを大量に含んでいた。

撹乱土は部分的に深度をたがえ、東側は第１遺構面から0.5ｍ前後下層にまで影響を与えている。調査区の西から中央部付近では、現地表面から１ｍ前後に堆積する茶褐色シルト質細砂の直上まで及んでいる。続く緑褐色細礫まじりシルトの上面において、第１遺構面が検出された。以下はピートを大量に含む茶褐色シルトが堆積しており、遺構や遺物の存在は認められなかった。

③第１遺構面

【水　田】

水田土壌層は、撹乱で消失する東部を除いて、ほぼ全面で検出された。土壌層中においては、遺物の包含は認められなかった。

検出した畦畔は３条である。南西から北東へ並行にのびる畦畔のうち、東を畦畔101、西を畦畔103と呼称する。また畦畔101と十字に交差する畦畔を、畦102とした。検出した畦畔の配置から長方形の区画を５つ確認したが、調査範囲が少ないこともあり、田面の広がりは十分把握できなかった。区画の規模は、畦畔101と103の間隔から、南北が内法で4.3ｍを測る。東西は畦畔103が検出した限りにおいて屈曲を見せないことから、７～８ｍ前後と考えられる。

直接の出土遺物はないが、畦畔101の上面より出土した遺物から、水田は古墳時代前期を中心とする時期に営まれていたと考えられる。

【畦　畔】

畔畦101

３本の畦畔では、もっとも東に位置する。北東から南西から北西に向けて、ほぼ直線で伸びる。

調査区において検出した全長は8.5m、北側の端から3.5mの個所に、畦畔102が連接する。幅はほぼ一定だが、畦畔102との連接部分より南側が最も広く、幅1.0mを測る。畦の盛り上がりも比較的明瞭で、上層の影響が少ない南部では0.3m前後の高さで遺存する。断面形は台形を呈する。緑褐色のシルト質細砂で構成され、周囲の土壌を盛り上げて構築したと考えられる。畔畦内部に特殊な構造は認められない。

北端から3.0mの部分において、土師器の壷（40）が出土した。南法面直上において、口を畦畔と並行に向けた状態で検出された。土器は畦畔に接する全体の１/２のみが遺存し、内面が露出した状態にあった。

畔畦102

調査区のほぼ中央を、南東から北西に向けて伸びる。ほぼ直線で、中央付近において畦畔101と交差する。交差点は北端から4.0mである。

検出した全長は7.3m、幅は1.0m前後と、ほぼ一定である。北端部分の盛り上がりがもっとも明瞭で、田面からの高さ0.35mを測る。断面は台形をなす。

内部は緑灰色緑褐色シルト質細砂のみが堆積する。特殊な構造は認められず、遺物の出土もなかった。

畔畦103

北東から南西から北西に向けて、ほぼ直線で伸びる。畦畔101と同じ方向だが、南に向かって緩やかに屈曲している。調査区内で、連接する畔畦は確認できなかった。

検出した全長は6.7m、幅は北端が最も広く0.9mである。明瞭な隆起は北端部分で高さ0.30mを測る。盛り上がり・幅とも、南に向かうにつれて規模を縮小する。断面は台形を呈する。

内部は緑灰色緑褐色シルト質細砂のみが堆積する。畦畔101・102と同様、周囲の土壌を盛り上げて構築したと考えられる。表面および内部から、遺物は認められなかった。

7. F地点

①概　要

入佐川２区では最も東側に位置し、袴狭川と見性寺川に挟まれた三角形部分に当たる。入佐川を挟んで北には此隅山から派生する丘陵、見性寺川・農道を挟んで南にはD・E地点がある。また東側は平成６年度に調査した入佐川３区である。

遺構面は２面確認した。現地表面から1.40m前後にある灰褐色中砂～淡灰褐色シルトの上面を第１遺構面、1.60m前後にある灰黒色シルトの上面を第２遺構面と呼称する。

第１遺構面では、中世と奈良・平安期の遺構を同一面で検出した。遺存する遺構はいずれも浅く、

本来遺構が設けられた面から程度を受けたと考えられる。溝・旧河道のほかに、河道にかけられていた小規模な橋を検出した。

第２遺構面では、調査区の中央付近において、切り合った溝２条を検出した。また遺構に伴うものではないが、直上に堆積する包含層からほぼ完形の弥生土器（第３図）が出土した。

②層　序

調査前の水田耕作土および客土に続いて、灰褐色シルト・淡茶褐色シルト質細砂が堆積する。続く灰褐色中砂～淡灰褐色シルトの上面で遺構が検出（第１遺構面）された。さらに下層は暗灰色粗砂～暗褐色シルト・灰黒色シルトが堆積、灰黒色シルトの上面でも遺構を検出（第２遺構面）している。

第１遺構面は、現地表面から1.40m前後に堆積し、遺構面を覆う淡茶褐色シルト質細砂には遺物が含まれている。

また第２遺構面は、現地表面から1.60m前後に存在する。また遺構面直上に堆積する暗灰色粗砂～暗褐色シルトからは弥生土器・土師器を検出したが、質・量ともに乏しい。実測できた遺物は、弥生土器の長頸壺のみである。

③第１遺構面

【溝】

SD101

調査区内の西端で検出した。調査区のもっとも狭い部分に当たるため、検出できたのはごく一部にすぎない。若干北西に振りながら、南北方向に直線で調査区を横切っている。東36mに位置するSD103とは、溝の規模や流路方向が一致する。またSD103と直交するSD104とも、関連が考えられる。

検出した全長は1.95mで、極めて限定された部分の検出である。溝の幅はほぼ一定で1.2m、断面は浅いU字形で南へ向けて深度を増す。最深部の深さは0.25m、底面はほぼ平坦であった。埋土は淡灰褐色シルト質細砂のみで構成される。

溝中からは、祭祀具、部材などの木器が出土した。祭祀具は斎串と舟形（W74・75）、部材（W76）は長方形曲物の底板である。

図化できた遺物は奈良～平安時代の遺物が多いが、等間隔で平行に走るSD103やそれと直交に連接するSD104との位置関係を重視して、中世の遺構と考えたい。

SD102

調査区の西部を蛇行気味に、北東から南西へのびる。旧河道の埋土を切り込んでいることから、旧河道埋没後に形成されたと考えられる。

検出した全長は30m、幅はある程度ばらつきが見られ、2.0m前後を測る。断面は逆台形に近く、溝底は平坦であった。最深部は南西端の0.25mである。４層の堆積を確認した。周壁付近および上層には植物遺体を多く含む粘質土が、中央部分には暗灰色粗砂がそれぞれ見られた。総じて安定した流れであったが、一時的に急流によって一気に堆積した時期のあったことを示している。

比較的多くの遺物が出土している。土器は黒色土器（132）と瓦器（133）、木器は付札と考えられる木簡（W77）、祭祀具の斎串（W81）のほか、服飾具の下駄（W78）、容器の皿（W79）、柄の一部と考えられる部材（W80）がある。また金属器としては環状銅製品（M16）をはじめ、鉄製品の小刀（M17・M18）、鋤先（M22）が見られた。

旧河道よりも後出するが、周辺に位置するSD101・103・104とは、調査区内で直接の切り合いを確認できなかった。主要な出土遺物の年代感などから、中世の遺構と考えられる。なおSD104とは出土遺物の状況から近い年代感を持つが、わずかながら先行するものであろう。

SD103

調査西部を東西に横断する直線の溝で、南端はSD104に接続する。

主軸は北西方向に振るが、南北に直線で延びる。SD104と直交で連接するほか、SD101とは平行に走り、溝の規模や流路方向も一致する。全長は9.8mで、北側はさらに外へと続く。検出した範囲に置いては断面が浅いU字形を呈し、溝の幅はほとんど変わらない。幅1.2m、最深部はSD104との連接部分で0.30mを測る。溝底はほぼ平坦であった。淡灰褐色シルト質細砂のみが堆積していた。

溝内部からは、鉄鏃（M19）が１点出土した。出土遺物ならびに、連接するSD104の時期から考えて、中世の所産と考えられる。

SD104

東周壁から調査区の中央を貫いて、東西方向に延びる。西部ではSD103と直角に連接するほか、東部では旧河道の南岸を切る。

全長116m、幅は2.1～3.4mのばらつきがある。断面は浅い皿形で、最深部は北側に偏る。底部は平坦で、西に向けて深度が高い。最深部は西端部分で0.50mを測る。

わずかな蛇行はあるものの、平面は直線に近くSD103と直角に連接するなど、一定の規格を窺わせる。SD101との連接状況は不明だが、直交するSD103と平行にあることからり、SD101～SD103で方形の区画を構成すると考えられる。

上下で堆積状況が異なり、下層は周壁付近に淡黒褐色シルト・中央には淡灰褐色のシルト質細砂が堆積する。上層はレンズ状の堆積を２層確認した。東側は上層が削平されたと考えられ、下層の堆積しか確認できなかった。

遺物は土器・木器があり、下層の淡灰褐色シルト質細砂と上層の淡黄褐色シルト～中砂に含まれている。図化できたものは、瓦器の椀（131）と、組み合わせ箱の小口と考えられる部材（W82）である。

出土遺物から、溝の時期は中世と考えられる。

【旧河道】

４箇所において部分的に検出した。調査区の北辺沿いを蛇行しながら東西に伸びると考えられ、西はD地区の第１遺構面に連続する。東部ではSD102に切られ、先行することが明らかである。また東部においては南北に横断する橋脚が検出された。

分断された形で検出されているので、規模には推定を含む。調査区で検出した東西両端の全長は140m、最大幅は中央付近で13mである。西側は幅を減じるが、岸が大きく広がりを見せるため、上面

の削平により、本来の規模が遺存していない可能性が考えられる。断面は皿型、最深部は東端で0.62mを測る。底面は凹凸が激しいが東へ深度を増す傾向にあり、本来の流路方向を示している。

レンズ状堆積をなし、シルト～細砂系の埋土が中心を占める。最上層の黒褐色シルトには近世の遺物が混入している。溝底部付近の暗褐色シルトからは、奈良･平安時代の遺物が出土した。

溝底から埋土にかけて、比較的多くの遺物が出土した。土器には須恵器（134～148）と土師器（149）、弥生土器（150～155）がある。溝底部付近の暗褐色シルトからは須恵器が中心に出土し、橋脚の付近で出土した坏身（137）の底部には「中」の墨書がある。また弥生土器は全て埋土に含まれていた。木器は、最上層から木簡（卒塔婆）・斎串・田下駄が、中～下層からは祭祀具・農具・容器や部材・用途不明品が出土した。

出土遺物の示す年代は幅広いが、底部付近から出土した遺物から奈良～平安時代が中心時期であろう。最上層には近世の遺物が見られるものの、寡少で局部的に見られることから埋没の最終時期を示すものとは言いがたい。SD102と直接の切り合いから、溝が生成される中世にはすでに埋没していたと考えたい。

【橋　脚】

調査区の北東部に位置する。旧河道の両岸に打ち込まれた４本の杭とその周辺の杭群からなる。

橋脚の杭は、いずれも直立の状態を保っている。掘り方など設けずに、先端を尖らせて直接打ち込まれており、下端は河道の基盤層にあたる淡灰褐色細砂まじりシルトを貫いて、続く暗灰色シルト質細砂に到達する。

杭にはいずれも丸太材を用いている。太さはほぼ共通して0.15m、遺存する長さは南に位置する２本が東側1.70m・西側1.50m、北は東側1.05m・西側1.35mをそれぞれ測る。いずれも２/３以上が土中に打ち込まれて遺存した。杭の上端部はいずれも摩滅しているため、本来の形状はわからない。南の２本には、溝底から0.1m上の箇所に方形の枘穴が認められる。同じレベルで貫通していることから、横木を貫入させる穴の可能性がある。周辺には、部材や杭がいくつか遺存するが、明確な関連を知ることはできなかった。

４本の杭は、長軸として河道を横断する南北方向を桁行き、旧河道に平行する東西方向を梁間とする。平面形はわずかに平行四辺形をなし、それぞれの間隔は桁行きが3.5m・梁間が1.6mである。旧河道の北上端は調査区外へ続くが、岸の傾斜は緩やかになっていることから、大きく川幅が広がるとは考えがたい。橋脚もさらに北へと延びる可能性は低いであろう。部材の多くが流失して橋脚の基部のみが遺存するため、検出状況から橋の構造を復元するのは困難であるが、端の規模から考えて、上部に梁を渡し南北方向に板を架ける単純構造の橋脚と考えられる。

旧河道と同様、奈良～平安時代の所産と考えられる。杭の先端は、暗褐色シルト質細砂に達していることから、比較的長時間使用されたものであろう。

④第２遺構面

【溝】

いずれも調査区の中央を横断する形で流れる。流路方向は一致しており、SD201がSD202の西岸を

切る形で検出された。

SD201

中央からやや西寄りに位置し、北東から南西へ直線で延びる。東岸はSD202に切られている。

調査区において検出したのは限られた部分で、全長は20m、SD202に切られる幅は８m以上を測る。遺存する西岸周壁は急角度に落ちており、断面は逆台形に近い。底面は凹凸が激しく、流路の最大深度は検出した中央部分で0.70mであった。埋土は茶褐色の礫混じり細砂で、周壁沿いにはわずかに褐色のシルト質細砂が認められた。

溝内から遺物は出土しなかったが、遺構面から弥生～古墳時代の遺構と考えられる。

SD202

調査区の中央を北東から南西へのびる。東岸はほぼ直線だが、SD201を切る西岸はいくぶん屈曲を見せる。東岸の周壁が急な直線を呈するのに対し、西岸の周壁は緩やかな傾斜をなす。屈曲して川幅に変化が生じたことによる影響が窺える。検出した全長は35m、最大幅は北側周壁沿いで14.8mである。かなりの深さを持ち、調査では底面を露出させることはできなかった。調査終了後に断ち割った結果、検出面以下1.8mで埋土の灰～赤褐色粗砂が途切れ、灰黒色シルトが露出した。

埋土は砂礫土が中心を占め、安定した特徴の土壌は見られなかった。岸から中央に向かって、河道の幅を減じるように堆積する。

土師器・弥生土器と考えられる細片化した土器も出土したが、図化できる状態ではなかった。観察を加えられたものは、用途不明の木器（W108）である。板材で、表面にはノミの調整痕が明瞭に遺存する。

遺物の遺存状態が悪いため厳密な時期は決めかねるが、須恵器が認められないことや土師器の存在から、古墳時代前期の遺構と考えておきたい。

第４節　入佐川３区

①概　要

入佐川３区は入佐川の南側約15ｍのところにあり、調査区の長軸は入佐川と平行している。今回調査した入佐川遺跡のほぼ中央に位置する調査区で、長さ143ｍ、幅24ｍ、面積は約4,000㎡、現地表面の標高は約５ｍである。

調査により第１遺構面から第４遺構面までの４つの遺構面を検出した。第１遺構面から第３遺構面は、溝と杭列を検出している。とくに調査区と平行して東西方向に延びる溝は、第１遺構面から第３遺構面までほぼ同じ方向で近い場所に位置している。杭列については溝に平行する方向で検出されているが、第３遺構面については溝と方向の異なる杭列が存在する。

第４遺構面は、住居址、掘立柱建物、溝、落ち込みと、そこに築かれた井堰などの木製構造物が検出された。落ち込み内からは未製品を含む多量の木製遺物が出土しており、貯木場であった可能性が高い。

出土遺物は主に土器と木器があるが、特に第４遺構面の落ち込みを中心に出土しており、他の遺構面では溝から若干の土器、木器が出土しているに過ぎない。

出土遺物からみた各遺構面の時期は、第１遺構面が室町時代、第２遺構面が平安時代後半、第３遺構面が飛鳥時代～奈良時代、第４遺構面が弥生時代後期～古墳時代中期と考えられる。

②層　序

第１遺構面上の第１層、第３層は粗砂～細砂の粒子の粗い砂が堆積しているが、それより下層については、落ち込み、溝などに細砂～極細砂が部分的に認められるものの、基本的にはシルト、あるいはシルト～極細砂といった粒子の細かい層から成っている。

以下、下層から順に土層堆積と遺構面について記す。

当地区の最下層には第26層の灰白色シルト層が認められ、調査区のほぼ全範囲に認められる安定した層である。この上に第25層の暗灰色シルトなどの土壌化したシルト層が認められるが、遺構は第26層の上面で検出し、第４遺構面とした。この第４遺構面では落ち込み、溝などが検出されており、土層断面の東西両端の層が乱れているのは、その影響によるためである。

これらの遺構が埋まったころ、調査区中央を中心にして第25層が安定して認められ、この上面で遺構が検出されたことから、この遺構面を第３遺構面とした。第４遺構面の調査区東西両端で検出された落ち込み、溝の影響を受けて層が乱れているが、それ以外は比較的水平に近い堆積をしている。

なお、この第３遺構面では粗い砂を含む遺構は検出できたものの、第25層の土壌化が著しく、全ての遺構を検出することができなかった。そのため、本来第３遺構面で検出すべき遺構が、第４遺構面で検出されたものがある。それは第３遺構面の時期の遺物が第４遺構面から出土していることからも窺える。

その後、第２遺構面、第１遺構面と第10層、第７・８層のシルト層がほぼ水平に安定して堆積し、それぞれ遺構面となっている。

③第１遺構面

【概　要】

溝が２本と杭列が検出された。SD101とSD102はほぼ垂直に交わっており、また、杭列もこの溝と同じ方向である。いずれも条里にともなうものであると考えられる。

遺物はあまり出土しておらず、溝から出土した１点のみ図示し得たに過ぎない。

また、包含層から銅銭「元豊通寶」（Ｍ７）が出土している。

【溝】

SD101

調査区西側で調査区の長軸に平行して検出された。幅約4.4m、長さは検出された範囲で約87m、深さ約0.4mを測り、北から約82°西の方向を向いて直線的に延びている。SD102とは垂直に交わっているが、交点は調査区外である。

溝の断面形は浅い皿状を呈しており、ゆるく２段になっている。

遺物は美濃の碗(156)、漆椀(W111)、環状鉄製品（M21）が図示し得たに過ぎない。

遺構の時期は美濃の碗から16世紀前半と考えられる。

SD102

調査区中央のやや東寄りで調査区長軸と直交する方向に検出された。幅約1.1m、長さは検出された範囲で約13.5m、深さは約0.15mを測り、ほぼ南北方向を向いて直線的に延びている。SD101とは垂直に近い方向であるが、交点は調査区外である。

溝の断面形はゆるい弧状を呈している。

図示し得た出土遺物はない。

遺構の時期は、SD101と近い時期と考えられる。

【杭　列】

SD101の中に散在して検出されたものと、SD102の西側に沿って検出されたもの、SD102の中央付近から東側に延びるものの、大きく３群に分かれている。

いずれも、丸く樹皮の残る棒材を利用しており、東西に並ぶ杭列は、北から約82°西の方向を向いて密に検出された。この方向はSD101とほぼ同じ方向である。なお、この杭列とSD101の中央の間隔は8.1m、SD101の北側との間隔は10.2mを測る。

遺構の時期はSD101と近い方向であることから、同時期と考えられる。

④第２遺構面

【概　要】

溝が３本と杭列が検出された。上層のSD101および102と同じ方向、同じ位置で検出されており、上層より幅が広い。SD202とSD203は交わっており、交点付近では人頭大の石が埋土に落ち込むような

状況でまとまって出土している。

杭列は溝に沿って検出された。

【溝】

SD201

調査区西側半分で、調査区長軸に平行する方向に検出された。幅約1.7m、長さは検出された範囲で約84.3m、深さは約0.3mを測り、北から約83°西の方向を向いて直線的に延びている。SD202と切り合い関係にあり、SD201がSD202を切っている。

断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は粗砂を含む比較的粗い砂の１層からなる。

杭列が溝に平行して認められ、調査区中央付近で溝の北側にまとまって検出された。

出土遺物は須恵器壺(158)、卒塔婆（W112)、箱形容器（W113）がある。

遺構の時期は遺構面の時期から平安時代後半ごろと考えられる。

SD202

調査区西側半分で、調査区長軸に平行する方向に検出された。幅約2.0m、長さは検出された範囲で約12.8m、深さは約0.75mを測る。北から約84°西の方向を向き、蛇行しながらも、ほぼ直線的に延びている。SD201と切り合い関係にあり、SD202がSD201に切られている。

断面形はゆるい弧状を呈しており、埋土は最下層に粗砂が認められるものの、上層はシルトを中心に堆積している。

SD203と交差しており、交点付近には人頭大の石が埋土に落ち込むような状態でまとまって検出された（写真図版30)。これらの石はSD203の方向には認められず、また杭列もSD202を横切る方向で存在していることから、両溝の最終埋没時期には若干の時間差があった可能性がある。そして、この周囲で検出された石は溝の交点付近に設けられていた何らかの施設の一部で、SD202が埋没していく中で、SD203をさらに北側へのばすために溝の埋土の中へ落とし込まれたものであろう。

また、SD203との交点より東側にも溝が延びているが、浅く、形も不定形であるため、人工的なものではなく、自然に削り込まれた可能性も考えられる。

杭列が溝に平行して検出されており、特に中央付近の溝の南側、およびSD203との交点付近の溝北側に認められる。

出土遺物は黒色土器椀(159・160)と土師器小皿(161)、木器には鎌柄（W114)、部材（W115)がある。

遺構の時期は出土遺物から11世紀から12世紀前半頃と考えられる。

SD203

調査区東側で、調査区長軸と直交する方向に検出された。幅約7.3m、長さは検出された範囲で約18.6m、深さは約0.65mを測り、北から約７°東の方向を向いて直線的に延びている。

断面形は浅い台形を呈しており、埋土はシルトを基本としている。

SD202と交差しており、SD202で記述した状況である。

杭列が溝の東西両側に平行して認められ、SD202を横切っている。

出土遺物は黒色土器椀（162）と土師器小皿（163)、木器には絵画木簡（W116）がある。

遺構の時期は出土遺物から11世紀から12世紀前半ごろと考えられる。

⑤第３遺構面

【概　要】

溝が２本と杭列が検出された。上層の遺構による撹乱が多い。溝は第１・２遺構面で検出された方向と近い位置、方向を示すSD301と、不定形で河道であると思われるSD302がある。

杭列にはまとまりなく散在するものが認められるほか、調査区中央南側のように列状に並ぶものもあるが、溝の方向とは一致しない。

【溝】

SD301

調査区西側半分で、調査区長軸に平行する方向に検出された。幅約2.0m、長さは検出された範囲で約40.8m、深さは約0.2mを測り、北から約87°西の方向を向いて直線的に延びている。

断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は下層がシルト質極細砂、上層が粗砂～細砂で、比較的粗い砂を埋土としている。

SD302と切り合い関係にあり、SD301がSD302を切っている。

溝の内外から杭が検出されているが、特に規則性は認められない。

図示できる遺物は出土していないが、遺構の時期は遺構面の時期から飛鳥時代から奈良時代と考えられる。

SD302

調査区西端付近で検出された。溝の東側では二股に分かれており、全体の形状も不定形であることから、河道である可能性が高い。断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は下層がシルト質極細砂、上層が粗砂～細砂で、比較的粗い砂を埋土としている。

SD301と切り合い関係にあり、SD302がSD301に切られている。

溝の内外から杭が検出されているが、特に規則性は認められない

出土遺物は須恵器坏蓋(166)と坏身(167～169)、木器には田下駄（W121)、人形（W122）がある。

遺構の時期は出土遺物から飛鳥時代から奈良時代と考えられる。

【杭　列】

調査区の西側半分に散在して検出されているが、調査区の中央部南側には、列状に並ぶものがある。大きく２列確認できるが、北側のものは、北から77°東の方向を、南側のものは北から66°東を向いており、両者の間隔が最大でも３mという近い距離にあるにも関わらず、方向はずれている。この両杭列の方向は、第１遺構面から第３遺構面にかけて検出された直線的に延びる溝の方向とは異なっている。

遺構の時期は遺構面の時期から飛鳥時代から奈良時代と考えられる。

⑥第４遺構面

【概　要】

入佐川３区のなかでもっとも密に遺構が検出された遺構面である。円形住居址１棟、掘立柱建物２棟、木製構造物５ヶ所をはじめ、溝、土坑など多数検出された。

調査区西側半分には土器や木器が集中的に出土した落ち込みがあり、木製構造物もこの落ち込み内で検出された。

遺構面の時期は、一部に上層からの沈み込みと考えられる須恵器が混入しているものの、大半の遺物が示す弥生時代後期から古墳時代中期に属すものと考える。

【住居址】

SH401

調査区の中央やや西よりで検出された。かなり削平されており、周壁溝の一部と柱穴が検出されたのみである。東半分は確認調査のトレンチにより削平されている。

住居址は不整形の円形を呈しており、直径は約10.9ｍに復元できる。周壁溝は北東側と南西側で確認でき、幅は広いところで70㎝、平均は約35㎝を測る。北西側は全体に下がっており、溝の反対側の立ち上がりは検出できなかった。南西側の周壁溝は二股に分かれており、切り合い関係は確認できなかったが、柱穴が２組検出されていることから、建て替えに伴う周壁溝の掘り直しである可能性も考えられる。

北側の周壁溝の先端部分からは、山陰型甑形土器(187)がまとまって出土した。削平されているため、全ての破片はそろわなかったものの、図上では完形に復元できた。

中央土坑は南北に細長い歪な形で、長軸2.8㎝、短軸0.8㎝を測る。南側半分は浅く、北側との間には段をもつ。埋土には炭が認められた。

柱穴は４穴で、２組が検出された。周壁溝の位置に合うのは北側の一組で、南側の一組に対応する周壁溝は削平のため検出できていない可能性が考えられる。柱穴のうち６ヶ所の底には礎盤が置かれており、そのうちＰ１・Ｐ３・Ｐ４の３ヶ所の礎盤は２枚の板が並べて置かれていた。

出土遺物は上記の山陰型甑形土器(187)以外に、甕（188）がある。

遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

【掘立柱建物】

SB401

調査区のほぼ中央で検出された。SD411に切られている。梁行１間、桁行２間で、棟軸方向は北から約10°西を向いている。規模は梁行方向で、北側2.2ｍ、南側2.5ｍ、桁行方向で東側3.9ｍ、西側4.0ｍを測り、桁方向の柱間の距離は平均2.0ｍである。

柱穴の平面形は不整形で、隅丸方形に近いものや、円形、楕円形に近いものなど、多様である。柱穴の規模は長軸が最大90㎝、最小55㎝を測る。深さは削平のため15㎝程度のものもあるが、深いものは34㎝を測る。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SB402

調査区のほぼ中央、SB401の東側約4.5mの位置で検出された。SD411に切られている。梁行１間、桁行２間で、棟軸方向は北から約２°東を向いている。規模は梁行方向で、北側2.4m、南側2.3m、桁行方向で東側3.6m、西側3.7mを測り、桁方向の柱間の距離は平均1.8mである。

柱穴の平面形は不整形で、隅丸方形に近いものや、円形、楕円形に近いものなど、多様である。柱穴の規模は長軸が最大58cm、最小45cmを測る。深さは削平のため10cm程度のものもあるが、深いものは34cmを測る。

SB401とは梁行の規模は大差ないものの、桁行の規模はSD401より小さく、また、柱穴の大きさも小さい。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

【溝】

SD401

調査区の中央やや東側で検出された。検出された部分で、長さ約14.1m、幅約3.1m、深さ約15cmを測り、北から約７°東を向いている。断面形は浅い皿状を呈するが、平面形は直線的に延びる。北側でSD403と接続し、中央付近ではSD411とほぼ垂直に交わっている。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD408

調査区の東端付近で検出された。検出された部分で、長さ約27m、幅約2.1m、深さ約20cmを測り、北から約21°西を向いている。北側では直線的に延びているが、南側では大きく東側へ曲がっている。SD410と平行しているが、他の遺構との切り合いはない。埋土は下層に粗砂、上層に粗砂混じりシルトの２層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD410

調査区の東端付近で検出された。検出された部分で、長さ約22m、幅約9.8m、深さ約80cmを測り、北から約22°西を向いている。中央付近で突出する部分があるが、ほぼ直線的に延び、断面形は幅の広い台形を呈する。北西側でSD405と接続し、東側にはSD408が、西側にはSD407が本溝を意識しているかのように平行している。埋土は多くの層からなっており、若干の粗砂が混じる層があるもののほとんどがシルト層である。断面図の右側には再掘削したような堆積を示す部分もある。

図示できた木器が比較的まとまって出土した（写真図版42）。いずれも田下駄（W147～150）であり、形態は異なるもののすべて完形である。

遺構の時期は、出土遺物から判断できず、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD411

調査区の中央付近で検出された。検出された部分で、長さ約20.1ｍ、幅約36㎝、深さ約８㎝を測り、ゆるやかな弧を描きながら北から約83°西の方向を向いている。SD401とは東端で、SD412とは西側付近でほぼ垂直に交わり、SB401・402を切っている。埋土は黒褐色シルト層の１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD412

調査区の中央付近で検出された。検出された部分で、長さ約5.1ｍ、幅約36㎝、深さ約10㎝を測り、ほぼ直線的に北から約25°西の方向を向いている。SD411とは溝の中央付近でほぼ垂直方向に交わり、南端は窪みに続いている。埋土は黒色シルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD415

調査区の中央やや西よりで検出された。検出された部分で、長さ約10.5ｍ、幅約36㎝、深さ約９㎝を測り、ほぼ直線的に北から約20°西の方向を向いている。SD414とは溝のほぼ中央で垂直に交わり、その南側ではSD416とY字状に交わる。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD416

調査区の中央やや西側で検出された。検出された部分で、長さ約6.7ｍ、幅約32㎝、深さ約５㎝を測り、北から約26°西の方向を向いている。溝のほぼ中央付近でSD415とY字状に接続しており、北側は鋭角にSD414と接続している。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD417

調査区の中央やや西側で検出された。検出された部分で、長さ約8.4ｍ、幅約42㎝、深さ約９㎝を測り、北から約20°西を向き、ほぼ直線的に延びる。溝の北端でSD418とV字状に接続している。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD418

調査区の中央やや西側で検出された。検出された部分で、長さ約7.8ｍ、幅約41㎝、深さ約９㎝を測り、北から約16°西を向き、ほぼ直線的に延びる。溝の北端でSD417とV字状に接続している。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトの１層からなる。

遺構の時期は、遺構面の時期から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

SD425

調査区の西端付近で検出された。検出された部分で、長さ約18ｍ、幅約3.3ｍ、深さ約38㎝を測り、

北から約63°東を向いている。平面的にも立面的にも凹凸が多く、埋土に粗砂が堆積していることからも、かなり削られていることがわかる。また、溝の西側は確認トレンチを挟んで形が不明瞭となり、幅が広がり、落ち込みとも境がなくなっている。埋土は下層に粗砂、中層に粗砂混じりシルト、上層に粗砂が堆積していた。出土遺物が遺構面の時期より新しく第３遺構面と同じであるため、第３遺構面のSD302の掘り残しであると考えられる。

出土遺物は須恵器坏身(189・190)、土師器鍋(191)、木器には田下駄（W151）がある。

遺構の時期は、出土遺物から飛鳥時代から奈良時代と考えられる。

【土　坑】

SK435

調査区の中央やや西側、落ち込み内で検出された。平面形は歪な三角形を呈し、長軸約1.8m、短軸約1.1m、深さ約45cmを測る。土坑断面形はゆるやかに彎曲した皿形を呈する。

土坑内の底から未製品の横鍬、泥除が重なって出土した（写真図版42)。若干向きをずらしながら、下からW153、W154、W152の順で出土した。横鍬は両方とも隆起のある面を下向きに、泥除は稜線のある方を上向きにして出土している。

周囲で同じような未製品が出土していないにもかかわらず、土坑内にのみ３点がまとまって出土したことから、ある程度本来の位置を保っていたものと考えられる。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

【落ち込み】

調査区の西南の隅から調査区中央の北側に向かって検出された。検出された部分で、長さ約84m、幅は最大で約18.3m、深さ最大で約52cmを測る。部分的に砂層が堆積しているものの、大半は暗灰色のシルト層であり、滞水していた状態であったと考えられる。また、調査区西端の北側付近では、底が抉られたため、帯状の窪みができている。この箇所では粗砂を中心とした層が堆積している。

暗灰色シルト層中からは、構造物401～405が検出されたほか、弥生土器、土師器、須恵器、木器などの遺物が比較的まとまって出土している。地形が低く、下流側と考えられる西端付近では、大型の木器が目立って出土しており、調査区中央付近では、流され、留まったような状態で、大小さまざまな木器が折り重なるようにして出土した。構造物には井堰があり、落ち込みを滞水させる働きをしていたことから、これら多くの木器は貯木場として水漬け状態で落ち込み内に置かれていた可能性がある。

出土した木器には製品がほとんどなく、棒材、ミカン割材、板材がほとんどであった。丁寧に加工されているものについては図化し、また、出土場所については図版39～43に示している。特筆すべき遺物には直弧文の描かれた木製把頭W163があり、他の木器とともに落ち込みほぼ中央から出土した。

また、落ち込み内からは土坑のSK435が検出され、未製品の農具(W152～154)が置かれていた。

出土遺物の中には飛鳥時代の土器があり、若干の混入が認められるが、ほとんどは古墳時代前期から中期の土師器で、一部に弥生時代後期にさかのぼるものも認められる。須恵器245はTK208型式に属す。遺構の時期はこれら出土遺物から弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

【構造物】

構造物401

落ち込みの東端付近で、落ち込みの方向と直交する向きに築かれている。長さ7.1m、幅0.6mを測る。断面形が正方形に近い角杭を地面に垂直に近い角度で打ち込み、その間に長い板材を横たえている。場所、方向から井堰である可能性が考えられるが、杭と板材とは強く結合されてはいない。

構造物を構成する材には部材（W184）が含まれていた。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

構造物402

落ち込みの東端付近で、落ち込みの方向と平行する向きに築かれている。すぐ南西側には落ち込みが溝状に突出しており、この部分と何らかの関係があった可能性が考えられる。長さ1.7m、幅0.4mを測る。断面形が正方形に近い角杭のほかに、平らな板材が地面に打ち込まれている。しかし、板材は打ち込まれている深さが浅く、角材は深く打ち込まれているため、横材を支える中心となるのは棒材であったと考えられる。横材は両脇を角材で止められている箇所があるが、遺存状況が悪いため明らかでない。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

構造物403

比較的遺存状況が良い井堰である。調査区のほぼ中央の北端で、落ち込みと直交する方向に検出された。落ち込み南側の落ち際から調査区端まで続いており、長さ6.3m、幅は樹皮部分を除いて0.4mを測る。落ち込みの肩には板材が浅く打ち込まれていたのに対し、落ち込み内には角材が比較的密に打ち込まれ、部分的に横材が認められた。また、上流側である東側には、樹皮が２層、平らな状況で検出された。井堰と接する部分はないが、本来は井堰を構成する一部であった可能性が高い。井堰の中心部には、芯となるような長さ1.5m、幅32cm、厚さ２cmを測る比較的大型の板材が一部に認められ、その下流側には、やや上流側に傾くように角材を打ち込み、上流側には、下流側に大きく傾くように角材が打ち込まれていた。また、平面図では図示できなかったものの、調査区壁面では直径18cmの断面円形の材が井堰の中心部に置かれ、芯をなしており、その周囲には高さ30cm、下幅70cmの盛土が認められた。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

構造物404

板材12枚を円形になるように打ち込んだもので、落ち込みの中央付近で検出された。直径は上方で約35cm、検出面で約45cm、高さは検出面から約35cm、最下部から約70cmを測る。西側の一部には板材が認められず、また打ち込まれていた痕跡も検出できなかった。また、北側の板材内側下部には、直径１cm程度の棒材が板材に接して打ち込まれており、板材が内側に倒れるのを支えるためのものと考えられる。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

構造物405

落ち込みの中央付近で検出された井堰である。遺存状況が悪く、長さ1.8mにわたって検出されたが、間が抜けている箇所もある。主に板材が使用されており、棒材は一部に使用されているに過ぎない。先端を両側から尖らせているものもある。

遺構の時期は落ち込みと同じ弥生時代後期から古墳時代中期と考えられる。

第５節　入佐川４区

1. 概　要

入佐川４区は入佐川遺跡の最も東に位置している。東西に長く広がる調査区全体を、町道や農道により分割された４つの地区にわけて調査した。それぞれの調査区に、西から順にＡ～Ｄの各地区名を与えた。これらの調査区のうち、Ａ・Ｂ・Ｃの３地点においては遺構面を１面検出し、旧河道や溝等を検出した。遺構内等から主に田下駄等の木器が出土し、それらの木器から奈良～平安時代前半の遺構面であると判断される。Ｄ地点は、その東側が此隅山城に接しているが、その影響か、中世後期の遺構面を４面検出した。遺構面はいずれも砂質土で整地された整地面である。調査区西端ではいずれの面においても土塁と堀状遺構を検出した。出土した陶磁器類から16世紀後半の年代が与えられる。

2. A地点

①概　要

遺構面を一面検出し、旧河道と溝５本、杭列、土坑１基を検出した。杭列は主として溝SD103と並行するように打設している。出土遺物はおもに土器と木器である。

②層　序

第１遺構面を構成するのは灰白色を呈するシルトで、遺跡の範囲に全体的な広がりが認められる。このシルトの上に、植物遺体等の有機質を含む暗褐色のシルト層が堆積し、この層中から土器・木器が出土した。これより上は地表近くまで、土壌化した灰褐色のシルト層が堆積している。

③第１遺構面

【旧河道】

調査区の北端で東西方向に延びているのが検出された。旧河道の南岸部分のみを検出し、北側は調査区外に位置する。川岸の傾斜はゆるく、川底の断面形もやや直線的である。

遺物は須恵器の壷の口縁部（７）を図示した。

【溝】

SD101

調査区の北東隅で東西方向に延びているのを検出した。深さ約20㎝の溝である。南側に杭列を伴っており、この杭列の配置状況を見てみると、同じく杭列を伴っているSD103と同一の溝である可能性が高い。浅く、底が平坦な断面形を呈しており、内部には砂質土が堆積している。

遺物は須恵器の坏を一点（６）図示した。

SD102

調査区の北東隅で北西―南東方向に検出した直線的な溝である。幅約１ｍ、深さは約20㎝である。遺物は木簡（W194）が出土した。

SD103

調査区北端付近で東西方向に延びているのを検出した。幅約1.7ｍ、深さ約20㎝の溝である。SD104の南側に位置している。内部には樹木の枝を含んだ砂質土が堆積している。SD101と同様、南側に杭列を伴っており、SD101と同一の溝と考えられる。

遺物は須恵器の坏を４点（８～11）と、木器の田下駄（W195～W197）、下駄（W198）、部材（W199）を図示した。

SD104

調査区北端付近で東西方向に検出した。幅約0.5ｍ、深さ約15㎝の溝である。旧河道とSD103の南側に位置している。内部には砂質土が堆積している。

SD105

調査区の北東隅で南北方向に検出した。幅約１ｍ、深さ約10㎝の溝である。

【杭　列】

SD103の南肩付近に、溝と併行するように打設され、その東側は調査区の北端部付近を点々と分布し、SD101の南肩部分に現れるという分布状況を示している。いずれも樹皮の残る棒材を利用しており、その間隔は一定していない。

3. B地点

①概　要

遺構面は二面存在したようであるが、検出し得たのは一面である。

現代のほ場を整備する際に、1.5～２ｍ程度の盛土をするなど現地表面下は大幅に改変されていた。この盛土直下に室町時代の遺構面が存在したようであるが、面としての検出はできなかった。後述するSD101はこの面上に存在したようである。面として唯一検出し得た「第一遺構面」には、旧河道のほか、SD101を含めて溝４本と杭列を検出した。出土遺物はおもに土器と木器である。

②層　序

第１遺構面を構成するのは灰白色を呈するシルトで、遺跡の範囲の全体的な広がりが認められる。このシルトの上に、植物遺体等の有機質を含む暗褐色のシルト層が堆積し、この層中から土器・木器が出土した。これより上は土壌化した灰褐色のシルト層が堆積し、その上から地表にかけての1.5～２

ｍ程度はほ場整備時の盛土が堆積している。

③第１遺構面

【旧河道】

調査区のほぼ中央部で東西方向に延びるのを検出した。幅約９ｍ、深さ約25㎝である。川岸の傾斜はゆるく、川底の断面形もやや直線的である。

遺物は、田下駄（W214）と曲物（W215）、部材（W216～W217）を図化した。

【溝】

SD101

調査区中央部やや南寄りを、東西方向に直線的に掘られた溝である。幅約２ｍ、深さは約1.5ｍで内部は灰褐色のシルトが堆積していた。調査区の壁面を見ると、現代のほ場整備による盛土直下から溝の断面が認められることから、他の遺構とは時期が大きく異なり、中世（室町期）にあたるものと考えられる。

遺物は、土師器の皿（270～275）、および漆碗（W205～W207）のほか、二枚貝の貝殻が含まれている。

SD102

調査区南端部付近で検出した。北西―南東方向に延びる直線的な溝で、幅約２ｍ、深さ約10㎝である。内部には植物遺体を含むシルト質土が堆積している。須恵器の杯（276）、および土師器の高杯（277）と壷（278）を図示した他、木器の木槌（W208）、田下駄（W210・W211・W213）、魚猟具のアカ取り（W212）が出土している。

SD103

調査区北端付近を北西―南東方向に延びているのを検出した。南東端で東側にカーブしている。幅約4.5ｍ、深さ40㎝で丸底の断面形を呈している。遺物は木器の部材（W204）を図示した。

【杭　列】

調査区南東隅付近を東西方向に検出した。樹皮の付いた棒材を用いた一群であるが、分布状況は不規則である。

3. C地点

①概　要

遺構面を一面検出し、溝３本を検出した。その溝のうち、SD103は田下駄や穂摘具等の木製農具が多量に出土した。出土遺物はおもに土器と木器である。

②層　序

第１遺構面を構成するのは灰白色を呈するシルトで、遺跡の範囲の全体的な広がりが認められる。このシルトの上に、植物遺体等の有機質を含む暗褐色のシルト層が堆積し、この層中から土器・木器が出土した。これより上は地表近くまで、土壌化した灰褐色のシルト層が堆積している。

③第１遺構面

【溝】

SD101

調査区西端付近で検出された溝で、北西―南東方向に延びている。幅約1.5m、深さ約30cmの断面丸底の溝である。

SD102

調査区西端付近で検出された、幅約75cm、深さ約５cmの溝である。遺物は木製鍬（W254）一点を図示した。

SD103

調査区中央部で北西―南東方向に検出された直線的な溝で、幅約75cm、深さ約５cmである。土器は弥生土器の壺（282）一点を図示した。木器では田下駄（W250～W251）、穂摘具（W252）、階段（W253）を図示した。

4. D地点

①概　要

入佐川遺跡の東端に位置する。東は此隅山城、南は宮内堀脇遺跡に隣接しているため、遺構や遺物も中世後期のものを主に検出した。遺構面は第１遺構面から第４遺構面までの４面検出した。第１・第２・第４遺構面は軟弱地盤に山土を入れることにより整地し、遺構面を形成している。第３遺構面はほぼ第２遺構面と同一であるが、第２遺構面の調査区南東隅の部分が上下２面にわかれ、その下層部分が第３遺構面と称している。それぞれの遺構面の西端で幅の広い堀を検出した。その堀の東側に土塁が築かれ、さらに東側にはもう１本の溝が存在するという遺構の構成は、第３遺構面を除く各遺構面に共通して認められるものである。これらの遺構のほか、第１遺構面の南東隅には畑の畝の形に整地された「畝状遺構」を検出した。

遺構面の時期については、４面とも16世紀のものであると考えられる。第２遺構面で出土した天目が16世紀中葉の製品であると考えられる点と、２面と３面が、その遺構の内容から大きな時期差はないと考えられる点から、おおまかに言って１面～３面が16世紀後半、４面が16世紀前半の遺構面と考えられる。

②層　序

調査地はシルト質の軟弱地盤上に立地している。第１～４の各遺構面は、マサ土状の砂を用いて整地することにより形成されている。特に第２遺構面の調査区南東隅の部分では、黄褐色のマサ土を特に厚く丁寧に敷いた整地面を検出することができた。第１～４遺構面の間はこうした砂質土および砂混じりのシルトが順に堆積している。第１遺構面の上層は旧耕作土が堆積し、地表から１～0.5m下方は現代のほ場整備時の盛土が堆積している。

③第１遺構面

【概　要】

調査区の西端で幅８ｍ以上の堀（堀101）を検出した。その堀の東側には土塁が築かれている。土塁の幅は上端部で1.5mである。土塁の東側に接する形で、さらに幅２ｍ以上の溝（SD101）が掘削されている。SD101は調査区南半部のみで検出され、調査区全体を南北に横断する形では検出されなかった。

これらの遺構のほかに、第１遺構面の南東隅には畑の畝の形に整地された「畝状遺構」を検出した。

【堀】

堀101

第１遺構面の西端で検出した南北方向に延びる堀である。堀の東側の肩を検出したものの西側は調査区外に存在する。このため堀の全幅は不明であるが、残存幅は約８ｍである。堀の深さは第１遺構面においては土塁の上端から約0.5mである。堀の埋土は褐色のシルトであるが、このシルトには暗褐色のシルト等がブロック状を呈して混入していることから、自然に堆積したものではなく人為的に埋め立てられたものと判断される。

出土遺物は、堀101では土師器の小皿（297～303）のほか、青磁碗（304）・瓦質土器のすり鉢（305～306）を図化した。また木器では、紡織具（糸巻きの枠木：W261）のほか容器（漆椀、曲物、刳り物の皿：W258～W260）等が出土した。

【土　塁】

堀101の東側、SD101の西側で検出した高さ約0.5mの土塁である。上端部で幅約1.5mである。堀101とSD101間で双方の遺構に接するように存在している。また、SD101と同様、第１遺構面の南半分のみで検出され、北半分までは延びていない。

【溝】

SD101

西隣の土塁に接するように掘られた丸底の溝である。土塁と同様、調査区の南半分のみで検出され、調査区北半分までは延びていない。最大幅約４ｍ、深さは約0.8mである。

【畝状遺構】

第１遺構面の南東隅で、畑の畝の形に整地された「畝状遺構」を検出した。畝状遺構の範囲は東西約10m、南北５mである。南北方向に畝を延ばしており、東西10mのうちに13本の畝を検出した。これらの畝を形成する土は、焼土を含んだ暗褐色のシルト質土である。

④第２遺構面

【概　要】

調査区の西端で幅8.5m以上の堀（堀201）を検出した。堀の東側には土塁が築かれている。土塁の幅は上端部で1.5mである。土塁の東側に接する形で、さらに幅約３mの溝（SD201）が掘削されている。SD201は調査区南半部のみで検出され、調査区全体を南北に横断する形では検出されなかった。第２遺構面の南東隅では、マサ土を用いて整地した「整地面」を検出し、さらにこの整地面の北側に隣接した、東西方向に掘られた溝（SD202）を検出した。

【堀】

堀201

調査区の西端で幅8.5m以上の広い堀（堀２）を検出した。深さは約0.7mである。堀は東西方向のものであるが、その堀の一箇所を陸橋状に分断している箇所を検出した。

出土遺物は、土師器の皿（321～322）、美濃天目（323）、備前すり鉢（325）、瓦質土器の鉢（324）を図化した。

【土　塁】

堀201の東側、SD201の西側で検出した高さ約0.7mの土塁である。上端部で幅約1.5mである。堀201とSD201間で双方の遺構に接するように存在している。また、第２遺構面の南半分のみで検出され、北半分までは延びていない点はSD201と共通している。

【溝】

SD201

西隣の土塁に接するように掘られた丸底の溝である。土塁と同様、調査区の南半分のみで検出され、調査区北半分までは延びていない。最大幅約３m、深さは約１mである。

出土遺物は 土師器の皿（326～334）と青花の碗（335）を図化した。

SD202

第２遺構面南東隅に位置する整地面の、北側に隣接するように設置された東西方向の溝である。幅約２m、深さ約30cmである。溝内で土師器皿（336）と土師器鉢は（337）が出土し、図化した。

【整地面】

第２遺構面の南東隅で検出した整地面は、黄褐色の粗い細砂（マサ土）を用いて整地されている。こ

れは軟弱地盤の上に建物等を建てるために地盤を改良した痕跡であると考えられる。この整地面上には５基のピットと一本の溝を検出した。

【焼土坑】

上記の整地面の西側に位置する、最大径約70㎝、深さ約15㎝の土坑である。土坑内には３層の炭の堆積層を確認した。図版50の右下の土層断面図がこの焼土坑の断面図で、この図の中の２・４・８層が炭の堆積層である。これらの炭層の間をシルト層が埋めている。また最下層８層の炭層の上層は焼土が薄く堆積している。これらのことから、この焼土坑はなんらかの原因で焚火・野焼きを定期的に実施する場所であったと考えられる。

⑤第３遺構面

【概　要】

第２遺構面の南東隅検出した「整地面」は上下２面が存在することが判明した。これらの整地面のうち、上層遺構面を第２遺構面で検出し、下層遺構面を第３遺構面として別途検出した。したがって第３遺構面を検出し得たのは、調査区の南東隅の部分だけである。第３遺構面検出時には、整地面以外の部分は第２遺構面検出時と同じ状況のままである。

【整地面】

この第３遺構面の整地面は、その範囲がほぼ第２遺構面の整地面の範囲と重複している。褐色の砂を用いて整地しているが、この面上では遺構を検出することはできなかった。

⑥第４遺構面

【概　要】

調査区の西端で堀（堀401）を検出した。堀401は調査区内を南北に貫いているが、その幅は北側で約3.2m、南側で約4.5mである。その堀401の東側に並行する形で土塁が築かれている。土塁の幅は上端部で１mに満たない。土塁の東側に接して溝（SD401）が掘削されている。溝も堀・土塁に並行しており、その幅は最大で約6.5mである。

【堀】

堀401

幅は3.2～4.5mと上の遺構面と比べて狭くなっているばかりか、同じ遺構面で、土塁を挟んで反対側に位置するSD401よりも幅が狭くなっている。深さは約0.5mで断面形はU字形である。出土遺物は土師器の皿（343～348）を図化した。

【土　塁】

堀401の東側に位置している。堀401並行する形で土塁が築かれている。土塁の幅は上端部で１mに

満たない。高さは約0.5ｍである。

【溝】

SD401

SD401は堀401および土塁の東側に位置している。堀401や土塁と並行しており、調査区内を南北に横断している。幅は北側で約６ｍ、南側で約５ｍ、深さは約１ｍである。断面形はU字形である。出土遺物は土師器の皿（349～352）と瓦質土器のすり鉢（352）を図化した。

下層大溝

SD401と土塁の部分を、調査終了時にサブトレンチを掘削しその土層断面を観察した。その結果、SD401と土塁の下部にさらに規模の大きな溝を検出した。図版49に図示した調査区南壁の土層断面図において、29～34層の部分がこの溝の埋土にあたる。この溝の規模は幅約８ｍ、深さ約２ｍである。

調査区の土層断面（図版49）を観察したところ、この「下層大溝」の底から溝の肩のラインを南側に追っていくと第４遺構面に辿り着くことから、この下層大溝は第４遺構面の時期に掘削されたと判断される。下層大溝は第４遺構面が使用されている時期のうちに埋め立てられ、より規模の小さな溝（SD401）と土塁とに改修されたものと考えられる。

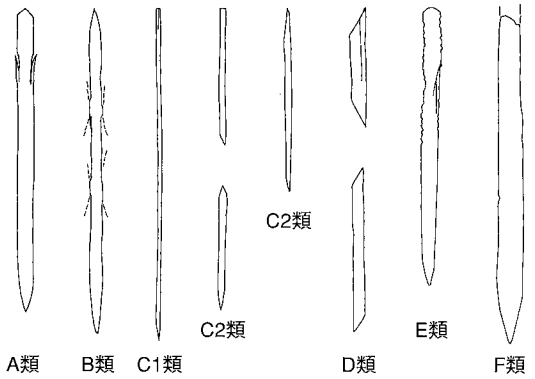
第４章　出土遺物

第１節　概　要

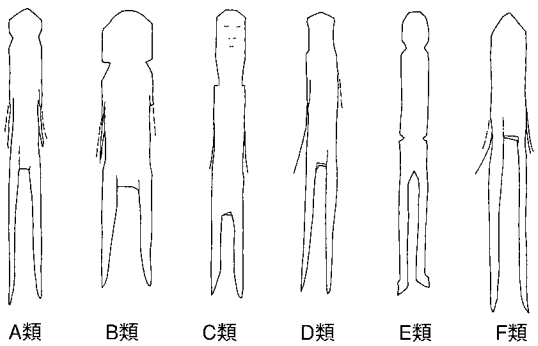
遺物は土器・木器・金属製品・石製品が出土している。土器は土師器が主で、他に弥生土器、須恵器、黒色土器、瓦質時、陶器、磁器がある。木器は農具と部材が主で、特殊な遺物としては、直弧文の描かれた把頭がある。金属器には銅製品、鉄製品があり、図示していないが、金製品（金箔）がある。

なお、木器のうち祭祀具（斎串・人形・馬形）と田下駄については「木器」『砂入遺跡』（兵庫県文化財調査報告第161冊　藤田1997年）の分類を参考にした。以下はその概要である。

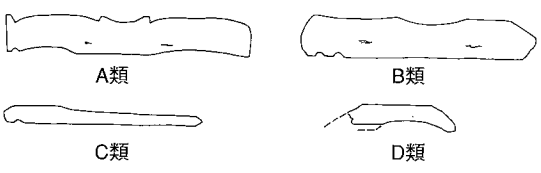
祭祀具



斎　串



人　形



馬　形

第２図　祭祀具分類図

斎　串

A類：上方から切掛けを行う。

B類：上下から切掛けを行う。

C類：細長い角材を素材とする。

　　Ｃ１類：長大なもの。

　　Ｃ２類：小型のもの。

D類：薄板の両端を斜めに切り落としたもの。

E類：側面に小さな切欠きがあるもの。

F類：広葉樹で、下端を尖らせたもの。

人　形

A類：頸部を上下から切欠くもの。

B類：頸部を上方は水平に、下方は斜めに切欠くもの

C類：頸部を上方は斜めに、下方は水平に切欠くもの

D類：C類のうち、上方の切欠きが頭部付近から始まるもの。

E類：手の切掛けがなく、腰の切欠きをもつもの。足は左右に開く。

F類：頸部の切欠きがないもの。

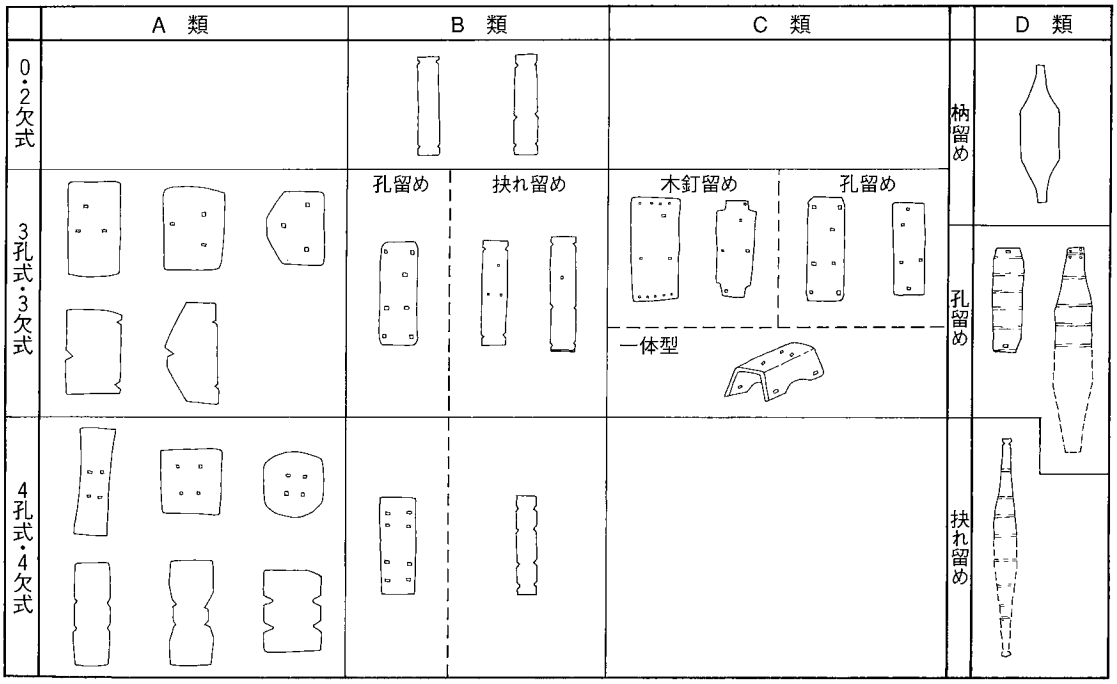
馬　形

A類：M字形の鞍の表現があるもの。

B類：背部を弧状に切欠くもの。

C類：背部に切欠きを行わないもの。

D類：簡略な表現で、上辺あるいは下辺に切欠きを入れるもの。



第３図　田下駄分類図

田下駄

A類：枠のないもの。

A類３孔式　　：鼻緒孔を３孔穿つもの。

A類３欠式　　：切欠きを１辺に１ヶ所、他辺に２ヶ所行うもの。

A類４孔式　　：鼻緒孔を４孔穿つもの。

A類４欠式　　：切欠きを２辺に２ヶ所ずつ行うもの。

B類：円形枠のつくもの。

B類無孔式扶れ留め：鼻緒孔がなく、円形枠を留める切欠きが上下にそれぞれ２ヶ所あるもの。

B類３孔式孔留め　：鼻緒孔を３孔穿ち、円形枠を留める孔が上下にそれぞれ２ヶ所あるもの。

B類３孔式扶れ留め：鼻緒孔を３孔穿ち、円形枠を留める切欠きが上下にそれぞれ２ヶ所あるもの。

C類：台状枠のつくもの。

C類３孔式木釘留め：鼻緒孔を３孔穿ち、足板と台状枠の歯を木釘で留めるもの。

C類３孔式孔留め　：鼻緒孔を３孔穿ち、足板と台状枠の歯の孔同士を樺皮で留めるもの。

C類３孔式木釘留め孔留め併用：

鼻緒孔を３孔穿ち、足板と台状枠の歯を木釘と樺皮と併用して留めるもの。

D類：方形枠のつくもの。

D類無孔式枘留め　：鼻緒孔がなく、両端に方形枠を留めるための枘をもつもの。

D類無孔式孔留め　：鼻緒孔がなく、両端に方形枠を留めるための孔をもつもの。

D類無孔式扶れ留め：鼻緒孔がなく、両端に方形枠を留めるための扶りをもつもの。

第２節　確認調査

（１）概　要

図示できるものは木器のみで、土器については図示できるものはなかった。

（２）木　器（図版75）

容器、服飾具、用途不明品、部材、雑具、農具が出土した。

容器（Ｗ１～６）には**漆椀**がある。Ｗ１は内外面とも黒漆、Ｗ２・４が内面赤漆、外面黒漆、Ｗ３は確認できる内面底以外の範囲では内面赤漆、内面黒漆、Ｗ５が内外面とも赤漆、Ｗ６は確認できる外面は黒漆塗りである。いずれも輪状の高台がつくもので、とくにＷ３は高い。朱で文様が描かれたものがあり、Ｗ１は「一」、Ｗ３は○と×と□を組み合わせた文様、Ｗ４は○に菱形が４つ組み合わされた文様である。Ｗ２は線刻で「×」が刻まれている。

服飾具（Ｗ７）には**下駄**Ｗ７がある。差歯下駄で、前後とも２孔の枘により歯と連結される。歯との接合部分は断面三角形状に盛り上がっている。鼻緒の穿孔は左右対称の位置に認められる。

用途不明品はＷ８がある。
Ｗ８は平らな板材の片方の先端近くに鋸歯状の切り込みを入れている。

部材はＷ９・12～14がある。
Ｗ９は断面が正方形に近い短い棒状のもので、一部に溝状の切り込みがある。側面には木釘の痕跡が認められる。W12は断面半円形の棒状のもので、片側の先端付近に切り込みと、くびれた部分がある。側面は一部にハツリが認められる。W13はやや大型の板材で、両面とも丁寧な調整痕が認められ、図の上側１/４にハツリ痕、下側にケズリ痕が認められる。上端は片側から削られており、厚みが薄くなっている。片側の長辺近くに方形の穿孔が認められ、中央付近の穿孔の近くに貫通しない円孔が認められる。W14もやや大型の板材で片側に丸い切り欠きがある。片側の長辺には長方形の切り欠きがある。

雑具（W10）には**椅子**がある。
W10は**椅子**の脚と思われ、上部に出枘があり、中央に円形の穿孔が認められる。下方の中央には方形の枘孔があり、中に他の部材が詰まっている。

農具（W11）には**田下駄**がある。
田下駄はW11がある。方形枠田下駄Ｄ類枘留めの足板で、上下が細くなり、短部付近が若干くびれている。

第３節　入佐川１区

1. A地点

（１） 土 器

①第１遺構面

【溝】

SD101（図版52）

土師器が出土した。

土師器（１）には**皿**がある。

皿は１がある。底部に回転糸切りの痕が認められる。

SD102（図版52）

土師器と**黒色土器**が出土した。

土師器（２～４）には**皿**と**坏**がある。

皿は２～３がある。いずれも底部に回転糸切りの痕が認められる。**坏**は４がある。

黒色土器（５）には**椀**がある。

椀は５がある。黒色土器Aで、底部は回転糸切りの痕が認められる。体部の器表面の調整は内外面とも横方向のミガキが施される。

【旧河道】（図版52）

土師器が出土した。

土師器（６～７）には**高坏**がある。

高坏は６がある。体部、脚部とも表面はナデで仕上げられている。７は脚部をナデで仕上げているが、体部は外面を横方向のヘラケズリ、内面はミガキを放射状に施している。

（２） 木 器

①第１遺構面

【旧河道】（図版76 W15～W17）

祭祀具・雑具・部材および、橋梁遺構を構成する**橋脚**が出土した。

雑具（W15）には**机脚**がある。

机脚はW15がある。向かって右側の下半部は欠損している。上端部中央に幅５㎝高さ２㎝の枘が設けられている。またその10㎝ほど下方に一辺約２㎝の枘穴があけられている。枘穴には目立った圧痕は認められない。

部材はW16がある。先端部の一方を削り、頭部を形成している。

祭祀具（W17）には**人形**がある。

人形はW17がある。頭部・胸部・腹部が両側から切り欠きすることにより表現された人形E類である。脚部は残っておらず、手の表現も認められなかった。頭部の長さは８㎝、胸部は16.5㎝で、腹部は現状で18.5㎝である。頭部は先端を如意形に成形され、毛髪、眉、目、鼻、口が墨書で表現されている。

橋脚はW308～330がある。すべて、川底のシルト層に達するまで打ち込まれていた。埋設するための柱穴は存在しない。これらの橋脚杭は、その上部に橋梁本体を載せて支えることになる。このため杭の上端部に橋梁（特に横方向の梁）を載せるための加工をすることになる。この加工された橋脚杭上端部の形状により、３種類に分類した。

[橋脚杭１類]（写真図版97）

杭の上端部に凹形の切り込みを持つタイプである。この凹形の切り込みは梁を通すための貫穴の一部であると考えられる。この貫穴が完全な形で残っているものが存在しないものの、現状の遺物から判断して、貫穴の大きさは幅約10㎝、高さ10㎝以上である。この１類の杭に用いられた材木は、全てが角柱状に加工され、その断面形は長方形を呈している。また橋梁の設置とは直接関係のない穴等の加工痕が、杭先端部に残るものも認められることから、建物の建築部材を転用したと判断されるものも含まれる。

[橋脚杭２類]（写真図版98～99）

杭の上端部に、自然と二股に分かれた箇所を用いるタイプである。この二股に分かれた箇所に梁を載せて結合したものと考えられる。自然木をあまり加工することなく橋脚として転用しているものが多いため、[１類]と比べて真っ直ぐな材はほとんどなく、ほぼすべて曲がった材を用いている。

[橋脚杭３類]

折れるなどして上端部の形状がわからないものを[３類]とした。本来[１類]や[２類]に分類されるべきものも含まれる可能性がある。

2. B地点

（１） 土 器

①第１遺構面

【包含層】（図版52）

土師器と**弥生土器**が出土した。

土師器（８～11）には中世の**皿**と、古墳時代の**高坏・壺**がある。

皿は８～９がある。いずれも底部に回転糸切りの痕が認められる。

高坏は10がある。器壁は厚く、口縁部付近で７㎜、脚部付近で１㎝以上ある。体部下半部はやや丸みを帯び、口縁付近はやや外反する。器表面の調整は外面が縦方向のハケ、内面は見込みの部分をミガキで仕上げ、体部上半部から口縁にかけてハケで仕上げている。内面のミガキとハケメの境と、口縁部付近は調整がナデ消されている。

壺は11がある。やや外に開き気味の二重口縁を持つ。体部は内外面ともナデで仕上げられ、体部内面は横方向のヘラケズリが施される。

弥生土器（12）には**器台**がある。

器台は12がある。口縁下部は粘土紐を付加して幅広い口縁を形成している。その端面には５本ほどの擬凹線が認められる。口縁の下半部には円形の透かし穴の痕跡が認められる。器表面の調整は外面が縦方向のミガキが施されたようであるが、その後ナデで仕上げられている。内面もナデで仕上げられる。

（２） 木 器

①第１遺構面

【包含層】（図版76）

農具が出土した。

農具（W18）には**田下駄**がある。

田下駄はW18がある。A類４欠式の田下駄である。両側辺にそれぞれ２箇所ずつ切り欠かれ、足を固定するための紐をそこに引っ掛けて用いたものと考えられる。

第4節　入佐川2区

1. B地点

（1） 土　器

①第1遺構面

【包含層】（図版54）

土製品が出土した。このほか**陶磁器**なども見られたが、大半は図化し得ない状態であった。

土製品（37）には**土錘**がある。

土錘は37がある。管状を呈し、円柱をなす体部の中央に直径1.5㎝の円孔を開ける。孔の一端は外側へ向かって欠損するが、紐を掛ける際の使用痕であろう。土師質である。

【旧河道】（図版53）

陶磁器・須恵器も出土したが、図化できたのは**土師器**のみであった。

土師器（13）には**坏**がある。

坏は13がある。外面に回転糸切りの痕跡をとどめる平坦な底部から、斜め上方へ直線的に口縁が伸びる。

【溝】

SD102（図版53）

土師器が出土した。

土師器（14）には**壺**がある。

壺は14がある。球形の胴部から、内湾気味に立ち上がる口縁を持つ。口縁端部は内傾して、内側に突出する。

②第2遺構面

【溝】

SD201（図版53）

瓦器と**土師器**が出土した。

瓦器（15）には**椀**がある。

椀は15がある。底部には、輪高台を板で押さえつけた扁平な高台を付ける。内面には、粗雑な放射

線状の暗文を加える。

土師器（16・17）には**壺**と**甕**がある。

壺は16がある。球形の体部に複合口縁をもつ。

甕は17がある。体部が長胴気味である。短い口縁はわずかに内湾し、端部が内傾する。

【旧河道】（図版53～54）

上・下2層の堆積から、**弥生土器・土師器・土製品**がそれぞれ出土した。

a）下層では**弥生土器、土製品**が出土した。

弥生土器（18・19）には、**台付鉢**と**蓋**がある。

台付鉢は18がある。脚部の裾を欠損する。体部は大きく胴が張り出し、口縁の先端は垂直に近く屈曲させる。

蓋は19がある。短い天井部から体部が円錐状に開く。内外面ともにヘラ磨きを施す。

土製品（21）には**土錘**がある。

土錘は21がある。円柱形の管状土錘で、中央に1.3cmの円孔を開ける。土師質である。

b）上層からの出土遺物には、**土師器**（32～34）・**土製品**（35）がある。

土師器（32～34）には**甕**がある。32・33は球形の体部に短い口縁がつく。32は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部は凹線状をなす。33は口縁端部を内側に拡張し、内傾させる。34は小型の甕で肩のくびれが緩い。口縁も緩やかに外反する。

土製品（35）は**土錘**がある。紡錘形の管状土錘で、両端が剥離する。中央に1.2cmの円孔を穿つ。土師質である。

【包含層】（図版53～54）

弥生土器・土師器、土製品が出土した。

弥生土器・土師器（20・22～30）は、明確な形態差から帰属を明らかにできるものもあるが、器種ごとの分類を優先して記述する。**壺・甕・鉢・手焙形土器**がある。

壺は20・22・23がある。20は底部に台を持つ。複合口縁だが、屈曲はわずかである。22は明瞭な屈曲の複合口縁を持つ。23は口縁のくびれが弱い広口壺で、底部には焼成前の円孔がある。穿孔はほぼ底部全域に及ぶ。

甕は26～28がある。26はいわゆる「タタキ甕」の形態をとるが、底部外面には削りを加えてわずかな平底を作り出す。また内面調整は、体部上半がハケメのちナデ、下半にはケズリが認められる。28

は長胴気味の体部から、口縁が短く外湾する。27は球形の体部に短い口縁を付す。

鉢は29・30がある。29は浅い体部から、屈曲して大きく外方へ開く形態をなす。丸底で、外面の中央には使用に伴う磨滅痕が認められる。30は逆円錐形で、底部の中央には径0.8～1.3㎝の楕円孔が穿たれている。

手焙形土器は25がある。開口部分の周囲を欠損する。緩やかな丸みをもつ底部と円柱状の体部からなる。体部上端は屈曲し、覆い部分に達する。覆い部分の内面には、わずかに煤が付着する。

なお24は底部のみが遺存し、台付きの壺または鉢の一部と考えられる。

土製品（36）には**土錘**がある。

土錘は36がある。管状で、体部は円柱形である。中央に直径1.4㎝の円孔を開ける。土師質である。

【土坑】

SK202（図版54）

土師器（31）が出土した。

土師器には**鉢**（31）がある。

鉢は31がある。椀形の体部を持つ小型の鉢である。平底の底部から、斜め上方へ緩やかに内湾する口縁を持つ。

（2）木　器

①第1遺構面

【溝】

SD101（図版77）

容器が出土した。

容器（W19）には**漆椀**がある。

漆椀はW19がある。表面は黒漆、内面は赤漆を塗布する。高い削りだし高台を持ち、体部は底部から鋭く屈曲して立ち上がる。口縁部を欠損する。

SD102（図版77）

祭祀具、**服飾具**、**容器**が出土した。

祭祀具（W20）には**馬形**がある。

馬形はW20がある。尾部にかけてわずかな彎曲はあるものの、背中の表現が認められない。馬としての表現はかなりの抽象化が進んでいる。馬形C類に該当するものであろう。

服飾具（W21・22）には**下駄**がある。

下駄はW21・22がある。W21は連歯型の形態で、歯の部分が台から大きく飛び出す。後ろの歯は、折れた痕跡が認められない。台尻と歯の先端が斜めにすり減っていることから、爪先を上げて履いていたのかもしれない。W22は差歯型の下駄で、台は方形の板を用いる。下面を斜めに面取りする。歯に対応する部分には4つの角孔が開けられる。歯そのものは抜け落ちているが、装着に用いた楔が4本遺存する。

容器（W23・24）には**漆椀**がある。

漆椀はW23・24がある。W23は低い口縁を持つ浅い椀である。内面は赤漆、外面には黒漆の地に赤漆で家紋状の文様を描くが、剥落が激しく比定するには至らない。W24は底部の高台が高い。内面は赤漆、外面は黒漆を塗布し、銀で四ツ目紋を描く。

【包含層】（図版79）

祭祀具、農具、服飾具、容器、部材・用途不明品が出土した。

祭祀具（W37～38）には**鳥形**がある。

鳥形はW37～38がある。いずれも長方形の板材を加工して、鳥の側面を抽象化する。W37は一端を大きく切り欠いて頭部とし、反対は斜めに切り落として尾を表現する。W38は全体に彎曲させ、一端には円孔を掘り込んで目を表現している。

容器（W39・40・43・44）には**漆椀、桶**がある。

漆椀はW39・40がある。W39が椀状、W40が杯状の形態である。W39は、体部の中央に突帯を1条巡らせる。W40の底部高台中央には「上」の文字が漆で書かれている。

桶はW43・44がある。丸太材を刳りぬいたもので、底板をはめ込み固定させる段差を持つ。W44は紐を通す穴を作り出す。W43は底板を留める際に用いた木釘が3箇所で認められた。

部材・用途不明品はW41・42・47がある。桟・箱の一部と考えられるもののほか、用途の不明なものがある。W41は短い角材の両端を削り、枘を作り出す。桟として使用されたものであろう。W42は長方形の板材で、一端に方形の枘がある。W47は長方形の板材で、片側に台形の切り欠きを加える。両面には墨痕が遺存するが、判読できるものはない。目釘穴が遺存することから、箱側板の一部と考えられる。

農具（W45）には**鋤**がある。

鋤はW45がある。鋤先のみが遺存する。先端を彎曲させ、厚みを減じて刃とする。

服飾具（W46）には**下駄**がある。

下駄はW46がある。連歯型で、鼻緒を通す孔（壺）が台頭の中央に配される。歯のすり減りが顕著で、大の表面には足の型が残っている。指の痕跡から、右足に装着したものであろう。

②第２遺構面

【土坑】

SK201（図版77）

部材が出土した。

部材はW25がある。支脚状のものである。２つの台形を軸でつないだ形状をなす。板状の材を削り出して作る。

【旧河道】（図版77）

祭祀具、**部材**が出土した。

祭祀具（W26～28）には**斎串**がある。

斎串はW26～28がある。W26・27は斎串A類で、W26は小型で尖り頭、27が大型で平たい頭を持つ。W28は長方形の板材を斜めに落とし、台形に整形する。斎串D類に分類できる。

部材はW29・30がある。把手状のものと、棒状材がある。W29は台形の部材・用途不明品で、一方の厚みを減じて枘状に形作る。２箇所の枘があり、片側は半円形の穴を開けて把手状とする。片側は小さい正方形の穴をあける。W30は顕著に摩滅するが、両端付近を減じて紐掛け状とする。

【包含層】（図版78・87）

農具、**容器**、**雑具**、**部材・用途不明品**が出土した。

農具（W31）には**田下駄**がある。

田下駄はW31がある。長方形の板材の両端を削り、枘を作る。D類無孔式枘留の形式と考えられる。

部材・用途不明品はW32・33・107がある。棒状材と不明品がある。W32は断面カマボコ形の棒状材で、両端を削りだして紐掛けとする。W33は板材で、片側を尖らせ、片側は方形の枘状に整形する。W107は円柱状の支脚で、頭部は逆円錐の部分を作り出す。基部は欠損する。頭部は中空となり、一部が溝状に切れる。厳密な用途は不明だが、形状から燭台の受け部などが考えられる。

雑具（W34）には**付け木**がある。

付け木はW34がある。彎曲した針状で、片側の先端には焦げた痕跡が残る。

容器（W35・36）には**蓋**と**桶**がある。

蓋はW35がある。円形の板の中央に把手を取り付ける。把手は変形六角形で、端部は身にはまるよう斜めに切り落とす。

桶はW36がある。桶の側部分で、全体の４分の１が残る。丸太材の内側を刳りぬき、底部は段状に

削り残す。底板をはめ込んで使用したものであろう。

【シガラミ】

シガラミ201（図版87・写真図版103・104）

建築部材・用途不明品が出土した。

建築部材はW105・106・109・331～334がある。**扉**材の一部と、板状の**用途不明品**である。いずれもシガラミの部材に転用されていた。W105・106・331は、上端が欠損するが、下端は扉を装着する突起が遺存する。W109は方形の板材で、一端は方形に整形する。四角い窪みをつけ、取り囲むように円孔を配する。中央には方形の枘穴を開ける。W332～334は厚みのある板材で、一端あるいは両端を欠損する。

2. C地点

（1） 土　器

土器は細片化や磨滅の進んだものがほとんどで、図化することのできたものは土師器の2点のみである。全て第2遺構面からの出土である。

①第2遺構面

【溝】

SD201（図版54）

細片化した**土師器**が数点出土した。図化できたものは1点にとどまる。

土師器（38）には**甕**がある。

甕は38がある。球形の体部に短く外方へのびる口縁がつく。

【旧河道】（図版54）

出土遺物のほとんどが細片・磨滅化し、図化できたものは**土師器**1点だけである。

土師器（39）には**壺**がある。

壺は39がある。口縁の端部付近を欠損する。球形の小さい体部に、外反する口縁がつく。口縁先端は欠損するが、屈曲せずにわずかに外反、または直線的に外方へ伸びると見られる。

（２）　木　器

①第１遺構面

【溝】

SD101（図版80）

木簡、**服飾具**、**容器**が出土した。

服飾具（W48）には**下駄**がある。

下駄はW48がある。連歯型で、前の歯だけが遺存する。台と歯の側面は、外方へ開く。

容器（W49～51）には**漆椀**がある。

漆椀はW49～51がある。W49はベタ高台を持つ。口縁端部を欠損する。W50・51は高い削りだし高台を有する。W49・50は内面に赤漆・外面に黒漆を、W51は内外面ともに赤漆を塗布する。

木簡（W54）には**付札**がある。

付札はW54がある。板状で、両端を欠損し、片面には墨痕が残る。墨書は１字分が遺存する。部分的な遺存であり判読できないが、「匁」の可能性がある。

②第２遺構面

【旧河道】（図版80）

服飾具が出土した。

服飾具（W52）には**下駄**がある。

下駄はW25がある。連歯型で、台の表面には歯を装着した枘穴が貫通している。緒孔の周辺には足指の痕跡が残る。

【包含層】（図版80）

部材が出土した。

部材はW53がある。方形枠である。支柱の先端部分が遺存し、先端には把手を装着する枘穴が残る。把手は木釘止めで装着している。横桟を固定する枘穴は５箇所遺存する。

3. D地点

（1） 土　器

報告する遺物は、いずれも第2遺構面からの出土である。堤防上から出土したもののほか、溝・旧河道から出土した遺物も、同じ意図をもって置かれたと考えられる。

①第2遺構面

【溝】

SD201（図版55）

土師器（41～46）が出土した。

土師器には**壺・甕・器種不明品**がある。

壺は41～43がある。いずれも丸底で、球形の体部を持つ。41は肩部から鋭く屈曲して直線的に伸びる口縁を持つ。端部は内側へわずかに屈曲させ、肥厚気味とする。42は器壁が厚く、口縁の屈曲もわずかである。口縁端部は内傾する。43は緩やかに上方へ開く口縁を持つ。

甕は45・46がある。いずれも短く外反する口縁を持つ。口縁端部は45が丸くおさめ、46が外傾する。44は体部のみが遺存する。法量から甕の可能性があるが、器種は確定できなかった。

器種不明品は44がある。底部ならびに口縁部を欠損するため、器種を特定できなかった。体部の形態から、壺もしくは甕と考えられる。

【堤防】（図版55～62）

堤防上から検出された土器に加えて、排水溝からの出土ではあるが出土状況から堤防上への配置が確実視できるもの（63）、ならびに土器群を覆って旧河道へ続く堆積から出土したもの（73）、については堤防出土の土器として含めている。

なお、後掲する旧河道出土土器の多くは、堤防から転落したものと見られるが、確実な関連を見いだせなかったものは旧河道出土として後掲した。出土遺物はいずれも**土師器**である。

土師器（47～99）には、**壺・甕・高坏・鉢・低脚坏**がある。

壺は47～56、89～92がある。小型丸底壺の系譜を引く小型の器形が多い。長頸壺・複合口縁壺はきわめて少量見られた。

47～49・53は、扁球形の体部に大きく外方へ開く口縁を付す。口縁は頸部からくの字に屈曲し、まっすぐに端部へ至る。口縁端部は丸くおさめる。50・51は、小さい体部から大きく外反する口縁がのびる。51は尖底気味の体部をなす。口縁端部はわずかに上方へ屈曲する。52は直線の口縁で、端部を丸くおさめる。54はさらに小型の器形と考えられる。口縁部を欠損する。

55は広口壺で、球形の体部と直線でのびる口縁からなる。内面には黒色の付着物が認められた。体部から口縁部にかけて、縦方向に付着することから、埋没段階で横倒しになり流出したと考えられる。

成分は分析の結果漆で、貯えられているものと判明した（第5章参照）。

89～92は長頸壺である。口縁は端部付近で内湾する（89・90）ものと、外反するもの（91・92）がある。口縁端部は92が内傾するほかは丸くおさめる。体部は長胴形で、91は肩部が張り出す。90は小型で、体部に焼成前穿孔が認められる。胴部の下方に直径0.6cmの円孔が開けられている。

56は複合口縁壺である。丸みを帯びる肩部から頸部が緩やかに外反する。屈曲してから直線で斜め上方にのび、2段目の口縁をなす。口縁端部は外傾し、端面を整える。

甕は57～85がある。

57～61は複合口縁をもつ。2段目の口縁が、58・60では直立、57・59・61では外反する。57は屈曲がわずかで、口縁の外面には2条の沈線による擬凹線を巡らす。

その他は、短い単純口縁を付す。端部の形態がいくつか認められ、内傾させるものが最も多い。73～75はわずかに内傾気味だが、口縁端部の両側を水平に近く揃えている。口縁はいずれも短く、直線的に端部へ達する。64～66・70は口縁端部を内傾させ、内側へ突出させる。口縁は内湾気味にのびるが、66は外反しながら端部へ達する。67～69は端部の内側を突出させて内傾気味とするが、全体に丸みをおびている。口縁は内湾気味だが彎曲は弱く、67はほぼ直線といってよい。69は端部付近がわずかに内湾気味となる。68は口縁と器形に歪みを生じる。72・76・77・85は端部の内側を肥厚させるのみで、端面は丸くおさめている。口縁端部の突出はわずかとなり、72・85では口縁付近を内側にわずかに屈曲させるにすぎない。口縁はいずれも直線で端部へ達する。80・81は内傾する口縁の端面が、段状をなす。口縁はいずれも直線で、81はくの字に鋭く屈曲する。

63は口縁がゆるやかに内湾し、端部付近でわずかに外反させる。71は口縁端部を外傾させる。端面に沿って加えた強い横なでが、凹線状となる。

62・78・79・82～85は、口縁端部を丸くおさめる。62は口縁がわずかに内湾、79はわずかに外反気味となる。78は先端が尖り気味となる。

高坏は86・93～99がある。86は坏部のうち、屈曲する口縁部のみが遺存する。かなり小型の形態と見られるが、遺存部位がわずかなため、全容は不明な点が多い。93は脚部が欠損し、坏部のみが遺存する。明瞭な屈曲を持つ大型の坏部で、外・内面には放射状の暗文が施される。94～97は深めの坏部を呈する。いずれも坏の内面に暗文が施され、94は外面に横方向の粗いミガキがある。98・99は、坏部の口縁が緩やかに外へ開き、途中でわずかに屈曲する。器面への加飾は認められない。

鉢は87がある。わずかな平底に椀状の体部を持つ。形態から見て坏に近い。

坏は88がある。椀状の体部と短小な脚からなる低脚坏である。脚は口縁に対して歪みがある。

【旧河道】（図版62～64）

土師器と**須恵器**、**土製品**が出土した。

土師器（100～115・117～128）には、**壺**・**甕**・**高坏**・**鉢**がある。

壺は101～104・110・111・117～119がある。101・102・110・111は、球形の体部に、短い口縁を付す。101はまっすぐ、102は内湾気味の口縁をなす。110は口縁が短く、端部付近でわずかに外反する。111は底部に脚の痕跡を残す。103は頸部で強い横ナデを加えて段差を形作る。平底に近く、肩部には焼成前穿孔が認められる。104･117は、まっすぐ上方へのびる口縁を持つ。117は端部付近が軽く内側

に屈曲する。118は扁球の体部から、細身の口縁部がのびる。口縁は直線で、端部付近がわずかに屈曲する。119は内湾気味に立ち上がる口縁をなす。端部は丸くおさめる。

甕は105～109、123～126、128がある。口縁端部はいずれも単純な口縁で、端部を内傾させるものが目立つ。107・108・125は、口縁端部が内傾して内側へ突出する。108はわずかに内側への肥厚を認めるが、端部はまるくおさめている。124は口縁端部を内傾させ、内側に微弱なナデを加える。105は、口縁の途中が屈曲気味に内湾、端部が外傾する。106・109・125は、いずれも口縁端部を丸くおさめる。口縁の形態はそれぞれ異なり、106が直線で斜め上方へ、109が緩やかに外反、123が端部付近で大きく外反する。126は小型の甕で、頸部に強い横なでを加えて複合口縁状に整形する。128は口縁端部が外傾し、方形に整形する。頸部のくびれがすくない、いわゆる砲弾型の甕である。旧河道の最上層から出土しており、最終埋没過程で混入したと考えられる。

高坏は100・112～114・120～122がある。100・113・114・120～122は緩やかに外方へ屈曲する口縁を持つ。100は坏部の底中央に、粘土接合痕が残る。121は坏部内面に放射状のミガキを施す。112は明瞭に屈曲する口縁を持つ大型品である。

鉢は115・127がある。115は丸底に近い。底部の器壁はかなり薄い。127は平底で、底部の外面には葉脈の圧痕がのこる。

須恵器（116・129）には、**坏蓋・皿**がある。

坏蓋は116がある。古墳時代の坏蓋で、天井部と垂下する口縁の境界には、鋭く突出する稜線を持つ。口縁端部は内傾する。

皿は129がある。焼成時に起因して底部に歪みが生じ、器面の荒れが目立つ。

土製品（130）には**土錘**がある。

土錘は130がある。管状で紡錘形をなし、片側の端部には装着時についたとみられる剥離痕が溝状に残る。中央に0.5㎝の円孔を穿つ。土師質である。

（２）　木　器

①第１遺構面

【旧河道】（図版81～83）

祭祀具、農具、容器、遊戯具、部材・用途不明品が出土した。

祭祀具（W57～61）には**斎串、舟形、刀形**がある。

斎串はW57～59がある。いずれも斎串A類で、W59は基部が欠損する。切り込みは複数回にわたると考えられるが、削りかけの遺存が悪いため、詳細は不明。W58は小形の斎串である。

舟形はW60がある。箱型の形態で、両小口を斜めに落として舳先を作る。

刀形はW61がある。切先の部分を欠損する。柄付近では２方向に切り込みを加える。

遊戯具（W62）には**琴柱**がある。

琴柱はW62がある。弓状の平面形をなす。弦と琴柱があたるところは中央に四角い切り欠きが加わる。

農具（W63～65・73）には、**田下駄**がある。

田下駄はW63～65・73がある。W63はA類2孔式、W64はB類孔留め6孔式の田下駄で、長方形の板材に孔を空ける。W65はC類田下駄に付随する台形状枠歯で、変形六角形の頂部に円孔を1箇所、基部に長方形孔を2箇所穿つ。

W73は大足を載せる方形枠である。2本の支柱と横桟が結合した状態で出土した。11本ある横桟のうち7本が遺存する。大足そのものは、至近から出土していない。大足は枘留めと考えられ、幅が厚く中央に方形の枘を切った横桟が上から9本目に1枚遺存する。対応すると見られる横桟（a）は、枠から抜け落ちた状態で出土した。

容器（W66）には**底板**がある。

底板はW66がある。平面形は円形を呈す。側板との接合痕が見られないため、落とし込む形式で固定されていたのであろう。桶または曲物に使用されていたと考えられる。

部材・用途不明品はW67～72がある。棒状材や用途不明品である。

W67は方形の板材で、四隅に円孔が穿たれる。片面には円孔をつなぐ形で圧痕が認められ、何らかの部材を装着するものかもしれない。W70は羽子板状の部材で、片側は柄上に角を面取りする。W71は楕円柱の片側4分の3程度を半裁したもの。半裁部分の先端は丸みを帯びている。把手の可能性もあるが、装着痕は見当たらない。棒状材はW68・W69・W72である。W68は角材の両端を削って枘を作り出す。W69は片側に紐掛けを持ち、もう一方は尖らせる。W72も両端に紐掛けのある、短い棒状材である。

②第2遺構面

【溝】

SD201（図版81）

祭祀具、**農具**が出土した。

祭祀具（W55）には**斎串**がある。

斎串はW55がある。細長い板材の両端を尖らせ、中央部の両側にV字の切り欠きを加える。斎串X類に該当する。

農具（W56）には**田下駄**がある。

田下駄はW56がある。A類4欠式にあたる。長方形板材の小口付近を欠損する。

【旧河道】（図版87）

用途不明品（W110）が出土した。

用途不明品はW110がある。方形の板材で、片面の中央に正方形の溝を刻む。両小口はわずかに台形状をなし、一端には方形の切り欠きを施す。

4. E地点

（1） 土　器

遺物で図化できたものは、水田の畦畔から出土した土師器の壺、1点にとどまる。

①第1遺構面

【畦畔】

畦畔101（図版54）

土師器が出土した。

土師器（40）には**壺**がある。

壺は40がある。開き気味の複合口縁で広口、大きく外反する。底部は平底をなす。

5. F地点

（1） 土　器

第1遺構面では、弥生から中世にかけての土器が出土している。第2遺構面の遺物のうち図化できたものは、包含層から出土した弥生土器である。

①第1遺構面

【溝】

SD102（図版65）

黒色土器と**瓦器**が出土した。

黒色土器（132）には**椀**がある。

椀は132がある。内面は炭素の吸着が認められ、口縁端部から見込み部付近にまで、暗文が施される。螺旋状ではあるが、粗雑。口縁端部はわずかに外反気味、底部外面は糸切りの平高台をなす。

瓦器（133）には**椀**がある。

椀は133がある。内外面ともに炭素の吸着が認められる。外面は口縁部付近のみに横方向、内面は口縁から見込み部にかけて粗雑なラセン状の暗文をそれぞれ施す。口縁付近で上方へ屈曲し、端部は外反気味となる。底部は糸切りの平高台である。

SD104（図版65）

瓦器が出土した。

瓦器（131）には**椀**がある。

椀は131がある。内外面ともに炭素の吸着が認められる。外面は口縁部付近のみに横方向、内面は口縁から見込み部にかけて粗雑なラセン状の暗文をそれぞれ施す。口縁端部は肥厚気味に丸くおさめる。底部は平高台で、糸切り痕跡をとどめる。

【旧河道】（図版65）

須恵器と**土師器**、**弥生土器**が出土した。

須恵器（134～148）には**坏**と**椀**、**皿**がある。

坏は136～141・144～148がある。136～141は皿状で、底部に高台を持たない。136・138・140は口縁端部が外反気味となる。137は底部外面に「中」の墨書（図版23）がある。144～145は、古墳時代の坏蓋に近い。145・146は、口縁端部が直立する。7世紀初頭前後に見られる、椀を模倣した形態の可能性もある。148は口縁にたちあがりを有する古墳時代の坏身である。たちあがりは短く、内傾が著しい。至近から出土した147は、口径が合致することから、対応する蓋と判断した。

椀は134・135がある。小型の器形で、底部には粗雑な張り付け高台を付す。

皿は、器高が口径の1/3を下回る142・143を比定した。いずれも平らな底部に、大きく外方へ開く口縁を持つ。口縁端部はわずかに屈曲する。

土師器（149）には**壺**がある。

壺は149がある。短く外反気味に伸びる口縁をもつ。

弥生土器（150～155）には**甕**がある。

甕は150～155がある。全容を把握できるものは151だけで、他は口縁から体部にかけてのみが遺存する。いずれも短く外反する口縁を持つ。151・152・154・155の口縁端部は、上下へわずかに拡張して、面を整える。150・153は上部へ拡張させて、端面をなす。

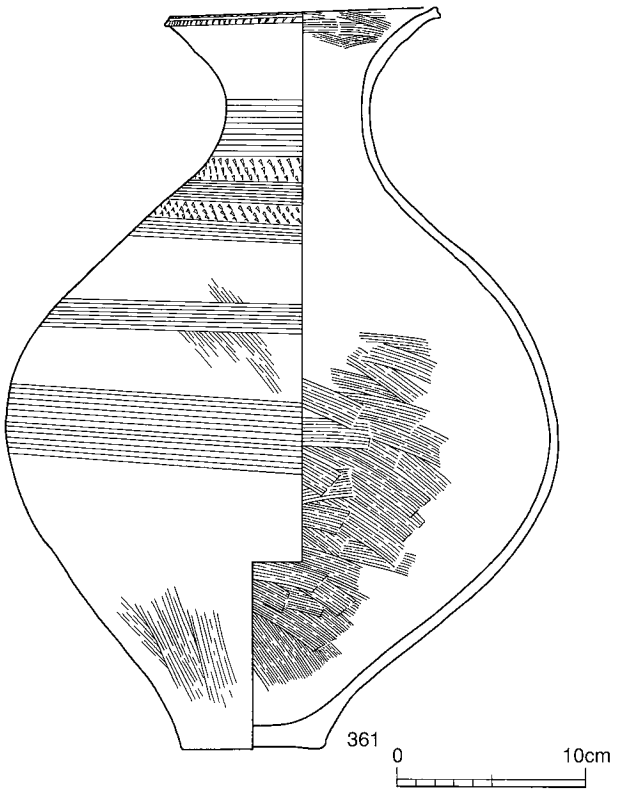
②第２遺構面

【包含層】（第３図）

弥生土器が出土した。

弥生土器（361）には**壺**がある。

壺は361がある。小さい平底と大きく拡張する胴部からなる長頸壺で、ほぼ完形に遺存する。器形の中軸に歪みが生じる。口縁端面には刻み目を施してから、中央にヘラ描き沈線を１条巡らす。また頸部から胴部にかけて沈線を数条施すほか、肩部は刺突文で装飾する。



第４図　弥生土器壷

（２）　木　器

①第１遺構面

【溝】

SD101（図版84）

祭祀具、**部材**が出土した。

祭祀具（W74・75）には**斎串**と**舟形**がある。

斎串はW74がある。頭部が欠損するが、全体の形状から斎串A類に分類した。

舟形はW75がある。長方形の角材を削って舟形としたもので、先端を尖らせて舳先とする。中央は大きく繰り込んで船室を表現する。

部材はW76がある。板状で、長方形曲物の底板と考えられる。縁沿いには、綴じ紐を通す孔が断裂した状態で遺存する。さらに角孔が５つ開けられる。補修、または田下駄に転用された可能性がある。

SD102（図版84～85）

木簡、**祭祀具**、**服飾具**、**容器**、**部材**が出土した。

木簡（W77）には**付札**がある。

付札と考えられるものはW77がある。表面に墨痕は認められない。板状で、一端の片側に１箇所、切り欠きを付す。外形は方形だが、切り欠きの持たない辺は途中で破損しており、本来の幅はわからない。

服飾具（W78）には**下駄**がある。

下駄はW78がある。連歯型で、歯のすり減りが顕著に認められる。表面にのこる足の痕跡から、右足に履いたものと考えられる。

容器（W79）には**皿**がある。

皿はW79がある。表面は縁に向かってわずかに反りを見せる。底部外面は幅広いベタ高台を持つ。

部材はW80がある。柄の一部と考えられる。円柱の部材・用途不明品の中央に四角い枘穴を開ける。この枘に柄を通して装着したものであろう。枘穴には、柄を固定する目釘孔が遺存する。

祭祀具（W81）には**斎串**がある。

斎串はW81がある。斎串B類に該当し、頭部と基部の2方向から、それぞれ中心に向かって複数回の切り込みがある。

SD104（図版85）

部材が出土した。

部材はW82がある。組み合わせ箱の小口部分と考えられる。外形はT字で、仕口に組み合わせるため、角を斜めに落としている。

【旧河道】（図版85～86）

上層（W102～104）からは、**木簡、祭祀具、農具**が、中～下層（W83～101）からは、**祭祀具、農具、容器、部材・用途不明品**が出土した。

祭祀具（W83～95・104）には、**人形、馬形、斎串、鏃形？**がある。

人形はW83～88がある。W83・86～88は首の切り欠きがL字形をなし、人形C類に該当する。W87は比較的大型の人形で、首の切り欠き幅が短い。W88は脚部付近を欠損するが、比較的大型の人形と考えられる。L字形の切り欠き幅は短く、比較的長い頭部には冠帽を載せた人の顔が墨描される。顔の表現は写実的で、冠帽からは頭髪がのぞく様子も描かれる。W83は首付近のみが遺存する。表面には人面が墨描される。鼻の一部と口、髭および耳が描かれる。W86も頭部のみが遺存する。表面には3箇所の線刻で、顔の表現を作りだす。W84は表面に3箇所の線刻を施して、両眼と口を表現する。首の切り欠きが逆L字形をなす、人形B類に該当する。W85は首の切り欠きが長いため、人形D類に分類した。肩は比較的なで肩である。

馬形はW89・90・104がある。W89は背中に鞍の表現を持つ馬形A類だが、体部下半を欠損する。頭部の上端には、わずかながら切り欠きを加えている。W90は鞍を持たない馬形B類である。背中の切り欠きは大きく、尾部の先端は尖る。頭部には2箇所、V字の切り欠きを加える。体部下半に残る痕跡から、4本足で立脚していたものであろう。W104は背中に切り欠きが認められないことから、馬形C類に分類した。頭部の上端を大きく切り欠き、丸みを帯びた下端にはV字の切り欠きで口を表現す

る。体部中央の下部にもわずかながら切り欠きが認められる。全体の表現は、かなり抽象化が進んでいる。

斎串はW91～94がある。W91は削り掛けをのぞいて、ほぼ全容が遺存する。斎串A類に該当する。W92は頭部のみが遺存する。遺存する部位においては、削り掛けの方向が頭部側からのみのため、斎串A類に分類した。W93は短い棒状で、両端を尖らせる。斎串C類に分類した。W94は長い棒状の板材で、両端を並行四辺形に切り落とす。歪みを生じているが、斎串D類に該当するものであろう。

鏃形と考えられるものにW95がある。菱形を呈する板の小片で、鏃形に比定した。圭頭の鏃身と頸部を表現したものであろう。

木簡（W96・102）には**卒塔婆**と**付札**がある。

付札と考えられるものはW96がある。板状で、一端の片側にV字の切り欠きを付す。反対側も多少不明瞭だが、対応する部位がわずかにくぼむ。表面に墨痕は認められない。

卒塔婆はW102がある。板状で、両端を欠損する。表面は「為清覚坊法□〔印ヵ〕菩提」と1行で書かれ、続いて2列に割書される。右には「□□〔はこヵ〕□」の3文字、左にも文字痕があるが表面が剥離して判読できない。さらに下方では、中央に「道□」の2文字が認められた。裏面には、梵字が2字分認められる。

農具（W98・103）には**田下駄**、**鍬**がある。

田下駄はW98がある。C類田下駄に付随する台形状枠歯である。頂部には田下駄を装着した木釘が3箇所遺存するほか、角孔が1箇所開けられる。下部にはコの字状の切り欠きがある。支軸をはめ込んだ部位であろう。

鍬はW103がある。風呂部のみ遺存しており、中央から上寄りには、柄を装着する角孔が開けられる。穴は角度を持って穿たれている。底面に対して60度程度となることから、打ち鍬として用いられたものであろうか。

容器（W99）には**皿**がある。

皿はW99がある。浅い盆状の形態で、半分近くが遺存する。表面は緩やかにすり鉢状となる。底部に高台は認められない。

部材・用途不明品はW97・100・101がある。いずれも用途不明である。W97長方形の板材をヘラ状に加工する。W100は椀状で、底部は丸く中空となる。縁に沿った1箇所で半円に切り欠きを加える。内面には加工痕が目立つことから、内面を露出させずに使用したと考えられる。W101は角材で、一端は枘状に加工、反対側は逆Lに切り欠きを加える。

②第2遺構面

【溝】

SD202（図版87）

用途不明品（W108）が出土した。

用途不明品はW108がある。板材で、両小口付近に1箇所ずつ両小口がわに1箇所ずつ、方形孔が認められる。表・裏面ともに、調整痕（ノミによるハツリ痕跡）が密に施される。

第5節　入佐川3区

（1）土　器

①概　要

第4遺構面の落ち込み以外は、どの遺構面も出土量は多くなく、溝から若干の土器が出土しているに過ぎない。

美濃の碗、黒色土器、須恵器、土師器、弥生土器がある。

②第1遺構面

【溝】

SD101（図版66）

陶器が出土した。

陶器（156）には美濃の**碗**がある。

碗は156がある。底部片である。平高台で、全体に厚い。外面上半部と内面には黒褐色の釉が施されるが、発色は悪い。外面下半部は露胎しており、ケズリが認められる。

③第2遺構面

【包含層】（図版66）

土師器が出土した。

土師器（157）には**椀**がある。

椀は157がある。底部のみの破片で、高い高台が貼り付けられている。外面には螺旋状に沈線が巡るが、雑な感があり、傷である可能性も高い。

【溝】

SD201（図版66）

須恵器が出土した。

須恵器（158）には**底部片**がある。

底部片は158がある。高い高台をもち、壺状の形態かと思われる。底部内外面には不定方向の粗いナデが認められる。

SD202（図版66）

黒色土器と**土師器**が出土した。

黒色土器（159～160）には**椀**がある。

椀は159～160がある。159は緩く彎曲する体部をもち、底部外面はケズリと思われるような痕跡が認められる。内面には幅の広い横方向のミガキが認められる。内面のみ黒色を呈している。160の体部には内外面共に横方向の幅広いミガキが認められる。口縁部が若干膨らみ、やや外反している。内面のみ黒色を呈している。

土師器（161）には**小皿**がある。

小皿は161がある。直線的に浅く開く体部をもち、底部は回転糸切りである。

SD203（図版66）

黒色土器と**土師器**が出土した。

黒色土器（162）には**椀**がある。

椀は162がある。底部径がやや大きく、体部は若干内彎する。内面には横方向のミガキが密に認められる。外面は回転ヘラケズリの痕跡が認められる。

土師器（163）には**小皿**がある。

小皿は163がある。径の大きい底部からなめらかに短く内彎する。底部外面には指頭圧痕、内面には一方向のナデが認められる。

④第3遺構面

【包含層】（図版66）

土師器と**須恵器**が出土した。

土師器（164）には**甕**がある。

甕は164がある。布留式の**甕**で、口縁部は直線的に上外方に延び、端部は若干肥厚させる。外面は体部中央付近に斜め方向のハケメ、体部上方に横方向のハケメ、頸部付近に斜め方向のハケメが認められる。内面は体部に斜め方向のケズリ、頸部付近に横方向のケズリが認められる。体部外面に煤が付着している。

須恵器（165）には**坏**がある。

坏は165がある。径の大きい底部から体部にかけて屈曲し、上外方へ若干内彎しながら延びている。底部はヘラ切り未調整である。ロクロは右回りである。

【溝】

SD302（図版66）

須恵器が出土した。

須恵器（166～169）には**坏蓋**と**坏身**がある。

坏蓋は166がある。体部は緩やかに内彎する。頂部外面はヘラ切りの後、ナデが認められる。内面は不定方向のナデが認められる。ロクロは右回りである。

坏身は167～169がある。167は緩やかに内彎する体部をもち、口縁部は若干外反する。底部外面はヘラ切り未調整である。ロクロは右回りである。168は平らで径のやや大きい底部をもち、若干突出している。ヘラ切り未調整である。体部は中央付近から大きく上方へ彎曲し、口縁部付近で若干外反させている。ロクロは右回りである。169はゆるやかに丸味を帯びた底部をもち、体部から口縁部に向かって直線的に延びている。底部外面はヘラ切りの後、ナデが認められる。

⑤第4遺構面

【包含層】（図版67）

土師器・弥生土器、須恵器が出土した。

弥生土器・土師器（170～184）には**壺、甕、高坏、鉢**がある。

壺は170～175がある。170･171は径に違いがあるが、比較的近い形態である。170は口縁部がやや内彎し、端部は肥厚させている。調整は体部外面に縦方向のハケメが認められる。体部内面に横方向のケズリが認められるが、頸部付近にはケズリが行われる前の調整である横方向のハケメが認められる。口縁部外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケメが認められる。171は口縁部が直線的に外方に延びており、端部は若干丸味をもって厚みをもつ。調整は体部外面に横方向のハケメ、内面に横方向のケズリ、口縁部外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケメが認められる。

172･173は小型の壺である。172はやや扁平の体部に直線的に外方に開く口縁部をもつ。調整は体部外面に斜め方向のハケメ、内面にハケメとナデ、口縁部は内外面とも横方向のナデが認められる。口縁部の下半内面に粘土の接合痕が認められる。173はやや縦に長い体部をもつ。調整は体部外面に横方向から斜め方向のハケメ、内面はナデで一部にケズリが認められる。頸部には横方向のハケメが認められる。体部外面の上方に縦方向に2本のヘラ記号がある。外面には煤が付着している。

174は口縁部端部を上下方に拡張し、上下両側の端部に刻み目を施す。外方に向いた面には凹線が巡り、部分的に刻み目をもつ棒状浮文を貼り付ける。頸部と体部の境には刻み目をもつ突帯を貼り付ける。調整は頸部外面が縦方向のミガキ、内面が横方向のケズリ、口縁部内面は横方向のミガキが認められる。

175は受口状の口縁をもつ。頸部から口縁部の屈曲部、および口縁端部は外方へ張り出している。外面には竹管文が施される。頸部外面には縦方向のハケメと思われる調整が観察できるが、磨滅のため明らかでない。

甕は176～178がある。いずれも複合口縁をもつもので、二次口縁外面に擬凹線を巡らすもの（176･

177）と巡らさないもの（178）がある。

高坏は179～183がある。179・180は坏部も遺存しているが、いずれも複合口縁をもつもので、二次口縁外面に擬凹線を巡らす。181～183は脚部のみ遺存しており、外方に開き、若干内彎するもの(181)と筒状の脚部から大きく外反して端部にいたるもの(182・183)がある。

鉢は184がある。小型で雑なつくりで、口縁部は歪みが著しい。

須恵器（185～186）には**坏蓋**がある。

坏蓋は185･186がある。いずれも頂部はヘラ切り未調整で、内面は一方向のナデが認められる。186は径が小さく、口縁部はやや長い範囲で強いナデのため外反している。

【住居址】

SH401（図版68）

弥生土器・土師器が出土した。

弥生土器・土師器（187・188）には**山陰型甑形土器**、**甕**がある。

山陰型甑形土器は187がある。上方に大きくラッパ状に開く体部をもち、一対の縦方向の把手が体部に挿入されて付けられている。口縁部付近ではやや内彎し、端部は平らである。底部付近には断面三角形の突帯が巡る。調整は内外面ともハケメが認められるが、把手付近の内面は他の部位に認められるハケメより粗いハケメの痕跡が認められる。

甕は188がある。突出することのない小さい底部からゆるやかに内彎する体部をもつ。外面には煤が付着する。

【溝】

SD425（図版68）

須恵器と**土師器**が出土した。

須恵器（189・190）には**坏**がある。

坏は189･190がある。いずれもヘラ切り未調整であるが、190はその後、一方向のハケメが認められる。体部は189が丸身をもち緩やかに内彎しているのに対し、190は平らな底部から体部へと屈曲し、厚みをもったまま直線的に延びる。189は口縁端部で若干外反する。

土師器（191）には**鍋**がある。

鍋は191がある。丸味をもった体部をもち、口縁部は厚みをもったまま外反する。調整は外面がハケメ、内面がケズリである。底部付近は磨滅のため調整が不明である。

【落ち込み】（図版68～70）

弥生土器・土師器、**須恵器**が出土した。

弥生土器・土師器（192～244）には**甕、壺、鉢、高坏、器台、手焙形土器、椀**がある。

甕は192～194、210～220がある。完形に復元できたものは192と193のみで、他は口縁部片のみである。

複合口縁をもつものと、もたないものがあり、前者はさらに二次口縁が長く直立するもの（192～194）、短いもの（210～211）、長く外傾・外反するもの（212～214）に分かれる。

210は二次口縁の外面に擬凹線を巡らせる。214の体部上方外面には、延びきった波状文のような横方向ハケメが認められる。

複合口縁をもたないものは215～220があり、口縁部が外反するもの(215～217）と、内彎し、端部を肥厚または拡張するもの（218～220）がある。

壺は195～209がある。中・小型を除いて完形に復元できたものはない。壺には複合口縁をもつもの（195～199）、小型または中型で丸底のもの（200～207）、長頸壺（209）にわけることができる。

複合口縁をもつものは、口縁部が上方に延びるもの（194～196）と、浅く広がるもの（197～198）がある。前者はいずれも屈曲部が外側に突出しており、特に196は顕著であり、特異な感を呈する。また、195は上下両側へ拡張している。浅く広がるものはいずれも二次口縁端部外面に文様が巡らされており、197は上下を擬凹線に挟まれた波状文である。この波状文は上下で様子が異なっており、上半分は太く鋭いもの、下半分は細いものである。198は上方が擬凹線、下方が列点文で、間に波状文が描かれている。

また、199は大型の壺で、内傾する二次口縁をもつ。

中型･小型の壺は200～207があるが、207を除いて、丸い体部に直線的に外傾する口縁部をもつといった共通する形態的特徴をもつ。調整についても確認できるものは外面および口縁部内面がハケメ、体部内面がケズリといった共通する特徴をもつ。207については、低脚をもつ、頸部に２個で一対の穿孔が二対ある、外面にミガキが認められるなど、他とは異なる特徴を持つ。なお、200・201の外面には煤が付着し、204の肩部の一部には布目の痕跡が認められる（写真１）。

写真１　土器肩部布目痕

208は外方に開く口縁部をもち、調整は、体部外面に縦方向のハケメの後、横方向のミガキが認められる。長頸壺の209は直口する長い口縁をもち、調整は体部外面に縦方向のミガキ、頸部に縦方向のハケメ、体部内面にケズリ、頸部にハケメが認められる。

鉢は221～224がある。221は受け口状の口縁をもち、内外面にミガキが認められる。222～224は低脚をもつもので、222は浅く広がり、内外面にミガキが認められる。223は深さのある体部で、内外面にハケメが認められる。224は手捏ねの土器で、内外面に指頭圧痕が認められる。

高坏は225～235がある。完形に復元できたものはない。225・226は平らな底部から直線的に延びる口縁をもち、226は外面にハケメ、内面に放射状のミガキが認められる。227は椀状の坏部をもち、内面には放射状のミガキが認められる。228・229は上方へ屈曲する口縁部をもち、端部は短く外反する。229は丁寧なミガキが認められる。230は坏部と脚部の境に段をもつ。調整は磨滅のため不明である。

脚部は231が緩やかにラッパ状に開いており、他は屈曲して開いている。

器台は236～242がある。確認できるものは全て口縁を外反させる二次口縁をもつもので、脚部は直線的に開く。239は口縁部を上下に拡張し、擬凹線を巡らす。

手焙形土器は243がある。破片で、全体の形状はあきらかでない。外面にはハケメが認められる。

椀は244がある。丸い体部をもち、口縁端部は若干彎曲する。調整は外面底部付近が不定方向のケズリ、内面は板ナデ状の痕跡が認められる。

須恵器（245～249）には**甕**、**坏**、**壺**がある。

甕は245がある。やや扁平の体部をもち、口縁部は段をもって開く。端部は平らである。頸部にカキメを巡らす。体部下半外面にはカキメ状の痕跡が確認でき、底部はヘラケズリののちナデが認められる。

坏は246･247がある。246には高台がなく、247には高台が付く。246の底部はヘラ切り未調整で、その周囲にはヘラケズリ（補助ケズリ）が認められる。底部内面には一定方向のナデが認められる。247の底部はヘラ切り未調整で、体部と底部の境付近に短く外方へ傾いた高台を貼り付ける。体部には十状の墨書が認められる。

壺は248・249がある。外方へ長く踏ん張る高台をもつ。調整はいずれも回転ナデのみ確認できる。内面底には一定方向のナデが認められる。249は短頸壺である。

（2）木　器

①概　要

各遺構面から溝を中心に木器が出土しているが、特に集中するということはない。ただし、第4遺構面の落ち込みからはまとまって出土しており、図化しなかったものも含めて多量に出土している。それは、旧河道という木器が遺存しやすい環境にあったというだけでなく、貯木場としての遺構の性格にも起因するものと思われる。

②第1遺構面

【溝】

SD101（図版88）

容器が出土した。

容器（W111）には**漆椀**がある。

漆椀はW111がある。低く外側を向く高台が付くもので、体部は浅く広がる。黒漆に赤漆が部分的に認められる。

③第2遺構面

【溝】

SD201（図版88）

木簡、容器が出土した。

木簡（W112）には**卒塔婆**がある。

卒塔婆はW112がある。先端部のみで、縦方向に半分のみ遺存する。釈読は不可能である。

容器（W113）には**箱形容器**がある。

箱形容器はW113がある。長方形に近い台形を呈した板状のもので、両短辺に溝状の枘が切り込まれている。中央には方形の穿孔が認められる。

SD202（図版88）

農具、部材が出土した。

農具（W114）には**鎌柄**がある。

鎌柄はW114がある。下端が鉤形に曲がっており、断面は丸みをもった長方形である。中央部に1カ所、上部に2カ所の円形の穿孔が認められる。

部材はW115がある。長方形の板で、全体の一辺が遺存するに過ぎない。確認できる一隅は落とされている。方形の穿孔が中央に1カ所、上下両側に2カ所認められる。

SD203（図版88）

木簡が出土した。

木簡（W116）には**絵画木簡**がある。

絵画木簡はW116がある。平らな板材に絵が描かれたもので、下方には蓮の花状の部分、その上方に重なる同心円状の部分、その上方に点、その上方に方向の異なる曲線からなる部分があり、遺存するもっとも上には重なる同心円状の部分が描かれている。

④第2～3遺構面

【出土層位不明】（図版88）

第2遺構面の調査時に、任意に設定した側溝から出土したものである。

工具、農具、祭祀具が出土した。

工具（W117）には**斧柄**がある。

斧柄はW117がある。斧柄の未製品と思われるが、明らかでない。上方に近いところが幅広い帯状に突出している。帯状部分の断面形は歪な三角形を呈するが、下方の棒状部分は、円形に近い断面形である。全体に傷みが著しい。

農具（W118）には**田下駄**がある。

田下駄はW118がある。台状枠の歯で、平面形は先を平らにした三角形状である。上部には円形孔が一カ所認められ、下方の左右両側には方形の穿孔が認められる。

祭祀具（W119）には**斎串**がある。

斎串はW119がある。遺存状況が悪いため明らかでないが、先端が三角形状に尖っていることから斎串A類の頭部であると考えられる。

⑤第３遺構面

【包含層】（図版89）

建築部材が出土した。

建築部材（W120）には**梯子**がある。

梯子はW120がある。断面長方形の細長い梯子の一部で、一段のみ遺存する。段の直上は溝状に長方形に抉れている。

【溝】

SD301（図版89）

農具、祭祀具が出土した。

農具（W121）には**田下駄**がある。

田下駄はW121がある。平面形が長方形の足板で、A類３孔式である。長辺付近の片側に１カ所、反対側に２カ所の方形の鼻緒孔が認められる。

祭祀具（W122）には**人形**がある。

人形はW122がある。A類の頭部で、肩は若干撫で肩気味である。顔の表現があり、目と口が刻まれている。

⑥第３～４遺構面

【出土層位不明】（図版89）

第３遺構面の調査時に、任意に設定した側溝から出土したものである。

祭祀具、容器、農具、雑具が出土した。

祭祀具（W123～125）には**人形**、**鏃形**、**馬形**がある。

人形はW123がある。W123は人形C類の頭部と思われ、墨書により顔、冠の表現が画かれている。

鏃形はW124がある。断面円形の棒状のもので、上部がやや膨れた後すぼまり、先端部で尖っている。

馬形はW125がある。欠損しているが、顔、鞍が切り込みにより表現されており、A類である。

容器（W126）には**皿**がある。

皿はW126がある。平高台が磨滅により低くなっているもので、中央には円形の穿孔が認められる。また、高台の脇に円形の小穿孔が2カ所に認められる。

農具（W127）には**田下駄**がある。

田下駄はW127がある。長方形の板で、A類4欠式である。長側辺の中央付近に、2カ所一対の切り込みが左右に認められる。切り込みにはそれぞれ左右の対応する場所に線刻が引かれている。

雑具（W128）には**腰掛け**がある。

腰掛けはW128がある。長方形の板材で、短辺付近に長方形の穿孔があることから、指物腰掛けの座板であると思われる。

⑦第4遺構面

【包含層】（図版90・91・99・100）

祭祀具、**工具**、**農具**、**容器**、**紡織具**、**部材**が出土した。

祭祀具（W129～132）には**人形**、**斎串**、**舟形**、**刀形**がある。

人形はW129がある。C類で、肩部の切り欠きが上方に偏っており、やや、いかり肩となっている。

斎串はW130がある。三角形状に尖った頭部と、左右側面に上方向の切り込みがあり、A類である。

舟形はW131がある。平らな板材の上下両端を削って平面形を舟形にし、その両端を薄く片側から削って尖らせているが、舟としての抉り込みは認められない。

刀形はW132がある。鞘に入った状態の刀で、鞘縁金具、鞘尻金具の表現が見られ、鞘縁と柄縁に見られる表現からは、柄縁金具、柄頭金具あるいは鹿角装の刀装具の表現がうかがえる。

工具（W133・134）には**木槌**がある。

木槌はW133･134がある。いずれも棒状の木器に貫通する方形の孔を開けたものであるが、W133は断面が円形に近く、大きな方形の孔を開けているのに対し、W134は断面が方形で、小さな長さの短い方形の孔を開けているという違いがある。W133の両短面は使用されたためか、磨滅している。

農具（W135～140・144）には**田下駄**、**鍬**がある。

田下駄はW135～138･144がある。W135は方形枠田下駄の足板と思われ、D類枘留めである。図の上側に突出部が確認できる。W136は鼓形をした田下駄で、A類4欠式である。幅の狭くなった部分に左

右4カ所の切り込みがある。図の上部には溝状の切り込みがあるが、転用されたためか、単に自然に欠損したのかは明らかでない。W137も鼓形を呈しているが、表面は丁寧なハツリ痕が認められ、W136のような切り込みは認められない。A類0孔式になろうか。W138は厚みのある田下駄で、C類3孔式の孔留めである。表面には丁寧なハツリ痕が認められる。四隅と鼻緒孔が方形に穿孔されている。W144は方形枠田下駄D類の横桟である。上下が細く突出する。

鍬はW139・140がある。いずれもなすび形といわれる曲柄のものである。W139は又鍬であるが、歯は遺存しないため明らかでない。

容器（W141・145・146）には**栓**、**柄杓**、**槽**がある。

栓はW141がある。断面形は長方形で、図の下側がやや膨らんでいる。図の上側には切り込みが認められる。

柄杓はW145がある。柄杓の柄で、上端に方形の穿孔、その下には左右2カ所づつのくびれがある。

槽はW146がある。刳り物で、平面形および断面形は舟形を呈する。内面の側面には丁寧なハツリ痕が認められる。

紡織具（W142・143）には**紡錘車**と**糸巻き**がある。

紡錘車はW142がある。平面形がほぼ正円形に近く、中央に小さい円孔が穿孔される。

糸巻きはW143がある。糸巻きの支え木と思われ、中央部に長方形に窪んだ部分があり、同様の部材と組み合わせるような構造であると考えられる。小円孔はその部材同士をつなぎ止めるためのものであろう。上下両端には半円形の穿孔と、そのやや内側に小円孔が認められ、腕木を支えるための穿孔であると思われる。

部材はW182・183がある。W182は断面方形の棒材で、図の下側を4方から尖らせ、杭状となる。反対側の上方には若干の抉りをもつ。W183は断面形が長い三角形を呈する板材で、上下の端付近に方形の穿孔がある。材の端は丸みを帯びているが、遺存状況が悪いため明らかでない。また、角の一つには長軸と直交する方向に鋭利な刃物による深い傷が認められる。

【溝】

SD410（図版92）

農具が出土した。

農具（W147～150）には**田下駄**がある。

田下駄はW147～150がある。W147はC類3孔式の一体型である。鼻緒孔は方形で、長辺方向に造りつけられた歯は中央がなめらかに抉れており、前後左右の計4ヶ所には横方向の穿孔が認められる。W148は平面長方形で、A類4欠式である。図の上方にはハツリ痕が認められる。W149はB類3孔式孔留めと考えられるが、C類である可能性もある。前壺が若干左に寄っている。枠を留める孔は前後に2ヶ所ずつ認められる。W150はA類3孔式で、方形の鼻緒孔をもつ。

SD425（図版92）

農具が出土した。

農具（W151）には**田下駄**がある。

田下駄はW151がある。C類の台状枠の歯で、左右が大きく突出する平面形である。図の上方に開けられた足板を留める孔には他の部材が遺存する。

【土　坑】

SK435（図版93）

農具が出土した。

農具（W152～154）には**横鍬、泥除**があるが、いずれも未製品である。

横鍬はW152・153がある。いずれも未製品であるが、平面形が横に長い長方形の直柄横鍬と考えられる。中央縦方向には平面長方形、横断面台形の隆起があり、一般的に柄孔周辺に認められる隆起になると考えられる。隆起部には柄孔は開けられていないが、調整はかなり丁寧で、角は鋭く、面も平滑である。W152・153ともほぼ完形であり、W153のほうが長さが短い。W153には丁寧なハツリ痕が認められる。

泥除はW154がある。未製品である。平面形は横に長い隅丸の長方形を呈し、断面形は中央がやや盛り上がった低い山形を呈す。柄孔や鍬に装着する穿孔も認められない。全面に丁寧なハツリ痕が確認でき、山形に盛り上がった稜線の両脇には稜線と直交する方向のハツリ痕が、それ以外は横方向のハツリ痕が確認できる。

【落ち込み】（図版94～100、写真図版121～123）

農具、祭祀具、紡錘具、漁猟具、雑具、部材、武器、工具、用途不明品、運搬具が出土した。

農具（W155～157）には**田下駄**がある。

田下駄はW155～157がある。いずれもA類で、W155が方形孔のある4孔式、W156・157が切り欠きのある4欠式である。W156は比較的厚く、ハツリ痕が明瞭に残る。W157は上下2ヶ所に、長軸に直交する方向に溝状の抉りがあり、周囲は厚く盛り上がっている。本来は溝に脚がはめ込まれ、机、腰掛けなどの天板として使用されていた可能性が考えられ、後に田下駄として転用されたものであると考えられる。調整は幅の広いハツリ痕が認められる。

祭祀具（W158・164）には**斎串、盾形？**がある。

斎串はW158がある。A類で、下端、切り掛け以外はほぼ完存する。

盾形？はW164があるが、盾形かどうかは明らかにできない。上方には左右に開くような切り込みがあり、下方には左右に突出する方形部分がある。方形の突出部には方形の穿孔があり、穿孔位置の基準にするためか、直線が引かれているが、木目のため点線状になっている。ハツリ、ケズリの加工痕が認められる。

紡錘具（W159）には紡錘車がある。

紡錘車はW159がある。平面が円形で、中央に小孔が穿たれる。

漁猟具（W160・176）には**アカ取り**、**網枠**がある。

アカ取りはW160がある。箱状の一側面がないもので、本来ならば柄がつくものであるが、遺存していない。

網枠はW176がある。枝分かれした木を利用し、幹を柄、枝を枠に仕上げているが、片側および柄のほとんどは遺存しない。枠の先端には紐で留めるための抉り込みが認められる。

雑具（W161）には**火鑽板**がある。

火鑽板はW161がある。完存しており、上下均等な位置にほぼ等間隔に火鑽臼が位置する。

部材にはW162・166・167・169・171～175・177～180・184～187・335～340がある。

W162は栓状の部材で、断面形が円形の棒状材である。一端が膨らんでおり、全体のほぼ中央に方形の枘孔を開ける。W166は断面楕円形の棒材で、先端を薄くし、円形の穿孔をもつ。その若干下方には左右から抉りが認められる。さらにその若干下方には縦方向の擦痕が認められる。W167は断面が隅丸の長方形の棒材で、先端を三角形状に抉り出している。W169は断面楕円形の棒材の一端に、断面長方形の薄い板材を枘結合したものである。結合部の上方には左右からの抉りが認められる。W171は断面形が不整形の長方形で、端部付近に左右からの抉りがある。W172は建築部材と思われ、断面形が扇形を呈し、ほぼ直角に接する面にはL字形に貫通する長方形の枘孔が3ヶ所に認められる。面の一部にはハツリの痕跡が認められる。W173は板材の両端に長方形の突出部を造り出したものである。突出部には平面形が長方形の穿孔がそれぞれ1ヶ所に認められる。また、図の下方付近にも平面形が長方形の穿孔が1ヶ所認められる。W174は板材の下端を左右両側から尖らせたもので、端付近に長方形の穿孔が認められる。また、中央付近にも穿孔が認められるが、平面形は不整形で、加工も粗い。W175は建築部材の蹴放し、あるいは楣である。扉軸穴、扉当たりをもち、方立をはめ込む溝を穿つ。図の左側にも同様の溝状のくぼみがあるが、扉を受ける軸孔がないため、単に劣化しただけのものであると考えられる。しかし、溝状のくぼみを方立をはめこむものとすれば、片開きの扉であった可能性も考えられる。辺付との結合は出枘となっている。W177は板材で、長辺に偏ったところに方形の穿孔が2ヶ所、図の下側に不整形の穿孔が1ヶ所認められる。表面には幅の広いハツリ痕が認められる。W178は断面三角形状の棒材で、図の下側には枘加工が施してある。W179は建築部材の扉である。長側辺の上下に軸穴にはめ込む軸をつくりだしている。表面はハツリ痕が認められる。W180は断面形が平行四辺形の棒材である。上方には片側からの抉りがあり、下端は四面から削られ、尖っている。

W185は断面形が長方形の板材で、図の上方には方形の穿孔と思われる穴が開けられているが、劣化のため不明瞭である。W186は断面長方形の平らな棒材で、図の下端は側面から切り込まれ、尖っている。W187は断面長方形の平らな棒材で、図の下端は鉤形に削り込まれている。

W335は板材で、片方の端は一方向から削られ、尖っている。W336はやや幅の広い板材で、長側辺の一辺には方形の切り込みが認められる。W337は断面長方形の棒材で、片側を4方向から尖らせ、中央やや上方には方形の穿孔が認められる。W338は板材であるが、遺存状況が悪いため全体の形状は

明らかでない。円孔が認められる。

武器（W163）には**刀装具**がある。

刀装具はW163がある。は直弧文を施した黒漆塗りの刀装具で、把頭である。平面形は長三角形を呈する。直弧文は正面と3側面に浮き彫りで画かれており、彫り窪められた部分を中心に赤漆で彩られている。把間へつづく部分は約2㎜の段差があり、さらに把間へと細くなっている。

工具（W165）には**木槌**がある。

木槌はW165がある。円柱状の材の両端を丸くしたもので、中央には柄を差し込む方形の穿孔が認められる。孔の両側には帯状のくぼみが巡る。

用途不明品にはW168・170がある。W168は断面円形の棒材で、両端を削り尖らせている。W170はゆるやかにS字のカーブを描く板材で、片側辺に沿って小円孔が不規則に8ヶ所認められる。表面は丁寧なハツリ・ケズリが認められる。

運搬具（W181）には**天秤棒**がある。

天秤棒はW181がある。断面円形の棒材で、緩く弧を描いている。両端部には上下からの切り込みがあり、図の上側にはそのやや内側に下方からの抉り込みがある。

【構造物】

構造物401（図版100）

部材が出土した。

部材はW184がある。断面形が長方形の細長い板材で、片側に平面形が方形と思われる穿孔が認められる。端部は若干ハツリがあり、薄くなっている。縦方向に割れているため全体の形状は明らかでない。

第6節　入佐川4区

1. A地点

（1） 土 器

①第1遺構面

【包含層】（図版71）

須恵器、**土師器**、**土製品**が出土した。

須恵器（250・251・255）には**坏**と**甕**がある。

坏は250･251がある。250の形態は丸底に近く体部も内側に彎曲している。底部はヘラ切りの痕跡が認められる。251は平底で、底部にヘラ切りの痕跡が認められる。

甕は255がある。口縁端部の直下は、外面に粘土を貼り足して突帯を形成している。また口縁部外面には刷毛により羽状文が施されている。

土師器（252）には**甕**がある。

甕は252がある。器表面の調整は、体部外面に縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが認められる。ハケメ原体は外面のほうが内面より細かいものを用いている。体部と口縁部の境界は、特に外面に強いナデの痕跡が認められ、部分的に指頭の圧痕が残されている。

土製品（253・254）には**土錘**がある。

土錘は253･254がある。253は両端が細く中央が厚いラグビーボール形の中央に、直径6～7㎜の穴があけられている。表面にタタキの痕跡が残されている。254は側面形が台形で表面が面取りされており、土錘としては異様な形を呈している。中央の穴は直径5㎜である。

【旧河道】（図版71）

須恵器が出土した。

須恵器（256）には**壺**がある。

壺は256がある。口縁はやや外反し、器表面の調整は内外面とも回転ナデである。

【溝】

SD101（図版71）

須恵器が出土した。

須恵器（260）には**坏**がある。

坏は260がある。平らな底部の裏面はヘラ切りの後は未調整である。

SD103（図版71）

須恵器が出土した。

須恵器（257～259）には**坏**がある。

坏は257～259がある。表面調整は底部から体部中位にかけての外面は回転ヘラケズリを施し、体部上半部から口縁部および体部内面にかけて回転ナデを施している。259は底部裏面にヘラ切りの痕跡が認められる。

（2） 木 器

①第1遺構面

【包含層】（図版101 W188～193）

祭祀具・農具・部材・容器が出土した。

祭祀具（W188）には**馬形**がある。

馬形はW188があり、B類である。顔には口が表現されていない。背中の鞍は表現されず、背を浅く弧状に抉っている。下腹部側に4箇所切り込みがあって、そこに脚の痕跡が認められる。

農具（W189～191）には**田下駄**がある。

田下駄はW189～191がある。W189は長方形の両側辺の片側2箇所ずつ合計4箇所を切り欠き、そこに紐を通して足を固定するもので、A類4欠式である。W190はB類3孔式孔留めで、円形枠か立体的な台形枠を組みあわせて用いるものである。W191はA類3孔式である。上面に足跡が残されている。

部材はW192がある。方形孔が2ケ所、片側長辺に片寄って穿たれる。

容器（W193）には**槽**がある。

槽はW193がある。厚さ5㎝以上の材木を、上面から手斧等で丸く刳りぬいて作られた、全長82cm以上の大型品である。

【溝】

SD102（図版102 W194）

木簡が出土した。

木簡はW194がある。釈文は「□塩卅六□人三」である。上から5文字目は「右」あるいは「古」と考えられる（大平茂 1996年）。

SD103（図版102 W195～W199）

農具・服飾具・部材が出土した。

農具（W195～W197）には**田下駄**がある。

田下駄はW195～W197がある。W195およびW197はA類４欠式で足に固定するタイプである。枠を用いるタイプではない。W196はC類３孔式木釘留めで、台形の枠歯が２箇所につくものである。田下駄の前後に釘穴が二箇所に、各々二つずつ認められるが、この二箇所に枠歯を固定したようである。

服飾具（W198）には**下駄**がある。

下駄はW198がある。一木造りの連歯下駄である。下駄本体の上面中央部に焼け焦げた痕跡が認められる（図中のスクリーン・トーンの範囲）。前後の鼻緒の穴は平面形が四角形で、それぞれ前後の歯の前に穿孔されている。下駄の歯は前後とも摩滅した痕跡が認められる。

部材はW199がある。断面形が楕円形の棒状品で、両端とも欠損しているため全長は不明である。約７～８㎝間隔で四角い穴があけられ、その内部に部材が残されている。梯子状の木製品の外枠として用いられたと考えられる。

2. B地点

（１）　土　器

①第１遺構面

【包含層】（図版71）

須恵器・土製品・瓦質土器のほか、**白磁**・明の**青花**（染め付け）が出土している。

須恵器（261～264）には**坏蓋・坏・甕**がある。

坏蓋は261がある。表面調整は、頂部付近のみヘラケズリが施され、その他の部位は回転ナデで仕上げられる。頂部内面に同心円タタキの痕跡が認められる。

坏は262～263がある。262は器表面は全般的に回転ナデで仕上げているが、体部下半部はナデが弱く、回転ヘラケズリの跡が存在する。263は体部下半部はやや内彎しているが、体部上半部は直線的である。底部裏側には回転糸切りの痕跡が認められるが、その縁辺に細く粘土を付け加え、さらに回転ナデで調整することにより輪高台状に成形している。

甕は264がある。口縁部の破片で、断面形はほぼ直線的であるが、端部は外面に粘土を付加し、厚めに成形している。口縁部外面に櫛描きの装飾が認められる。端部付近は列点文を右上がりに施文し、その下方は縦方向に櫛を動かし、平行線模様を施している。

土製品（265）には**土錘**がある。

土錘は265がある。土師質である。

白磁（266）には**皿**がある。

皿は266がある。釉はやや濁った白色を呈している。外反する口縁部の下に内湾する体部が付く。断面三角形の高台の下端部には灰が付着している。また高台の内側も施釉されている。

青花（267～268）には**碗**と**小坏**がある。

碗は267がある。体部下半部は丸みを帯び、口縁部にかけては直線的な断面形を呈している。外面の模様は細かい草花文を繰り返して描き、口縁部に一重、底部付近に二重の圏線を描く。内面は口縁部に幅の狭い二重圏線、底部付近に幅広の二重圏線を描き、その中を丸文で充填している。高台の端部は外面から斜めに削られており、その断面形は鈍い三角形を呈している。

小坏は268がある。底部上面には二重圏線の中に山水が描かれ、体部外面は草花文が描かれている。底部裏には福字の銘が書かれている。高台の端部は外側から斜めに削られており、その断面形は鈍い三角形を呈している。

瓦質土器（269）には**鉢**がある。

鉢は269がある。平底で体部は直立し、脚は三足であったと考えられる。内外面とも光沢のある濃い灰色を呈している。外面中位には花文が付けられている。

【溝】

SD101（図版71）

土師器が出土した。

土師器（270～275）には**皿**がある。

皿は270～275がある。口径は8～9㎝である。器表面の調整は横方向のナデで仕上げられるが、内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。体部下半部には指頭圧痕が残されている。底部内面は一定方向のナデ、底部外面は調整されないようである。275はやや大型で、口径は11.6㎝である。上記のようなナナメ方向のナデは存在しない。

SD102（図版71）

須恵器と**土師器**が出土した。

須恵器（276）には**坏**がある。

坏は276がある。体部と底部内面を回転ナデ調整し、底部内面はさらに一定方向のナデを施している。底部外面は未調整である。口縁部付近を中心に焼成時の歪みが認められる。

土師器（277～278）には**高坏**と**壺**がある。

高坏は277がある。脚部の破片である。

壺は278がある。小型で平底の壺で、仕上げが粗く、成形時に付いた指頭圧痕が多く遺されている。底部はほぼ平底である。

（２）　木　器

①第１遺構面

【包含層】（図版103　W200～W203）

容器・部材・用途不明品が出土した。

容器（W201）には**皿**がある。

皿はW201がある。底部に擬高台が付いている。擬高台の周縁部は立ち上がりがみられない。表面に刃物による傷が無数に認められる。また中央部に直径４㎝の穿孔が認められる。

部材はW200がある。断面が半円形で、四角い穴が17箇所あけられている。それぞれの穴には小さな材が充填されている。

用途不明品はW202･203がある。W202は円板の周縁部に多数の穴をあけ、そこに木釘が打ち込まれている。W203は何らかの「栓」と考えられる。断面形は長方形である。

【溝】

SD101（図版103　W205～W207）

容器のみ出土した。

容器（W205～207）には**漆椀**がある。

漆椀はW205～207がある。W205・207は口径16.7㎝、器高８㎝で、W206は器高4.1㎝とやや低い。

W205は外面が黒漆地で、赤漆を用いて２羽の向き合う鶴と、その間の足元に亀が１匹描かれている。この絵柄は入佐川遺跡では典型的な図柄である。内面は口縁下3.5㎝まで赤漆が塗られ、その下方は黒漆が塗られている。

W206も外面が黒漆地で、赤漆を用いておもだか状の植物が一対描かれている。内面は口縁部下２㎝まで赤漆が塗られ、その下部はすべて黒漆が塗られている。

W207は外面に黒漆、内面には赤漆が塗られた痕跡が認められる。

SD102（図版104　W208～W213）

工具・農具・漁猟具が出土した。

工具（W208）には**木槌**がある。

木槌はW208がある。槌の頭のみ出土した。片側の端面のみ面取りを施して丸く整形しているが、反対側は平たいままである。

農具（W209～W211・W213）には**鍬・田下駄**がある。

鍬はW209がある。その形態から曲柄又鍬の刃先と考えられる。

田下駄はW210・W211・W213がある。W210は組み合わせ式の田下駄C類の枠歯である。同様の枠歯をもう一枚用い、その上に足板を載せ木釘などで固定して使用する。W211は違う型式の組み合わせ式田下駄である。このような形の板を2枚十字に組み合わせ、上に踏み板をのせて用いたものである。近接する袴狭遺跡でも同様の田下駄が出土している（藤田2000年（2））。W213はA類3孔式の田下駄である。

漁猟具（W212）には**アカ取り**がある。

アカ取りはW212がある。四角い本体と輪状の把手からなる。把手から本体まで一木を刳り抜いている。把手の位置は中央よりやや左側面側に片寄っている。

SD103（図版103 W204）

農具（W204）が出土した。

農具（W204）には**田下駄**がある。

田下駄はW204がある。平面形は長方形でA類3欠式にあたる。

【旧河道】（図版105 W214～W217）

農具・容器・部材が出土した。

農具（W214）には**田下駄**がある。

田下駄はW214がある。A類4欠式で足に固定するタイプである。方形などの枠を用いるタイプではない。

容器（W215）には**曲物**がある。

曲物はW215がある。直径16.5㎝の小型品で、曲物の底板である。釘穴の痕跡が2箇所認められるが、それぞれの位置関係を考慮すれば、釘穴は当初3箇所あったものと考えられる。

部材はW216～W217がある。W216は9箇所以上の四角い穴が並んで空けられている。またそれらの穴とは別の側面に、図のとおり1箇所、穿孔されている。この形状から判断して、田下駄の方形枠の部材である可能性も考えられる。

3. C地点

（1） 土 器

①第1遺構面

【包含層】（図版71）

土師器・瓦質土器および**青磁**が出土した。

瓦質土器（279）には**すり鉢**がある。

すり鉢は279がある。体部の断面形が直線的であるがやや内湾する。表面の調整は横方向のナデが施されるが、体部下半部の外面はあまり調整が施されないため、指頭圧痕が認められる。体部内面はナデが施された後すり目が付けられる。すり目は一単位が9本の刻線で成り立っている。

土師器（280）には**皿**がある。

皿は280がある。器表面は内外面とも横方向のナデが施されている。内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。体部外面の下半部はナデが弱いためか指頭の圧痕が残っているのが認められる。

青磁（281）には**碗**がある。

碗は281がある。龍泉窯系と考えられる。釉の発色が悪いため淡い黄色を呈している。この釉は体部の内外面にかけられているが、釉のかかった範囲にはすべて細かな貫入が認められる。口縁の端面と高台が露胎である。胎土の色調は橙褐色である。器表面には線刻により蓮弁文が描かれている。

【溝】

SD103（図版71）

弥生土器が出土した。

弥生土器（282）には**壺**がある。

壺は282がある。広口壺の頸部から肩部にかけての破片である。Ⅴ様式併行期の後半にあたると考えられる。外面は全面的に縦方向に磨かれ、内面は頸部上端のみ縦ハケが見られる他はすべてナデで仕上げられている。

（2） 木 器

①第1遺構面

【包含層】（図版106～111 W218～W249）

農具・容器・祭祀具・服飾具・食事具・雑具・部材・用途不明品が出土した。

農具（W218～228）には**田下駄**がある。

田下駄はW218～W228がある。そのうち、W218とW219は台形枠を装着して使用するC類3孔式である。W218はC類3孔式木釘留めタイプ、W219は同じく木釘留め孔留め併用タイプである。いずれも木釘そのものの痕跡が残されている。なおW218の類例で完形のものは袴狭遺跡で出土している（藤田2000（1））。

W220は円形枠を装着するB類3孔式孔留めタイプである。W222は方形枠を装着して用いるD類抉れ留めタイプである。方形枠の横桟の痕跡が8本の平行線模様となって現れている。

W221はA類4欠式、W223～W226はA類4孔式である。またW227とW228はA類3孔式である。

容器（W230・W232・W242）には**合子、槽、漆椀**がある。

合子はW230がある。円柱状脚で、一木を削り出して成形している。上端部は欠損している事から、合子の本体がこの上に続くものと考えられる。

槽はW232がある。方形の刳り物の槽の破片である。長側辺が外側に張り出すように彎曲している。底部裏には台形の脚が2箇所認められるが、当初は4箇所に存在した。

漆椀はW242がある。椀の外面は黒漆地に赤で葉の模様が描かれ、内面は赤漆が塗られている。底部裏面（高台内側）は線刻で記号が描かれている。

雑具（W231）には、**腰掛け**がある。

腰掛けはW231がある。座板と考えられる。長方形を呈しているが、その片方の面の両端部付近に枘穴が2箇所設けられている。この部位に脚部を装着したらしく、枘穴内に木釘の痕跡が残されている。これらは座板と脚の固定に用いられたと考えられる。

祭祀具（W237～240）には**馬形**と**斎串**がある。

馬形はW237・238がある。いずれもB類で、墨書による顔の表現もなければ、口の形に切り欠きを施した痕跡も認められない。背中は弧状に切り欠いて成形しているが、鞍は表現されていない。W237は片面2箇所ずつ脚の痕跡が認められた。

斎串はW239・240がある。W239は先端部の破片であるので形態・型式は不明である。W240はA類である。上端よりやや下方で、両側面に複数の切り込みが施されている。「手」の部分は大半が欠損している。

服飾具（W241）には**櫛**がある。

櫛はW241がある。歯が根元からほぼすべて欠落している。歯の間隔はW286の櫛と比べてかなり細かい。また表面に漆などが塗られた痕跡は認められない。

食事具（W243～244）には**箸**がある。

箸はW243～244がある。

部材はW229・W233～W236がある。W229は4穴式田下駄と同様の形態を呈しているが、穴の数や位置が他の田下駄と異なっている。W233は図より右側部分が欠損している。両端付近に長方形の穿孔が2箇所と、その他に小型で円形の穿孔が3箇所に認められる。W234は長方形の板材であるが、両側辺が弧状に抉られている。W235は残存長70cm以上の長い部材である。正方形の穿孔が3箇所存在する。W236は残存長86.7cm、全幅29.1cmの板材である。手斧による加工痕がほぼ全面に残っている。

用途不明品はW245～W249がある。W245～W249は用途不明品である。W245は長方形を呈しており、両端部がやや細くなっている。中央に1箇所穿孔されている。W246は隅丸長方形で、周縁部が他よりも薄くなるよう加工されている。表面は全体的に黒漆が塗られている。細長い木箱の箱である可能性が考えられる。W247は小判形の板材である。手斧による加工痕がほぼ全面に残っている。W248は小型の円板である。中央に樺皮のツマミのようなものが付けられている。

【溝】

SD102（図版112 W254）

農具が出土した。

農具（W254）には**鍬**がある。

鍬にはW254がある。曲柄又鍬である。上端の柄装着部の下に笠が存在する。その下は刃部になるが、刃は途中で一度屈曲している。

SD103（図版112 W250～W253）

農具と**建築部材**が出土した。

農具（W250～W252）には**田下駄**と**穂摘具**がある。

田下駄はW250とW251がある。いずれもB類3孔式孔留めで、円形ないし方形の枠を装着して用いるものである。W250の下端とW251の上端は接合が可能であった（写真図版134参照）。

穂摘具はW252がある。半分が欠損しているが、ほぼ平行四辺形を呈している。背部中央に細長い紐孔があけられている。木目が刃に対して斜めに交わるように、木取りされている。

建築部材（W253）には**梯子**がある。

梯子はW253がある。幅9cm、長さ80cm、厚さ3cm以上の材を削り出して成形している。段は3段以上あったものと考えられる。段と段の間隔は約27cm、足をかける段の幅は約2.5cmである。

【旧河道】（図版112 W255）

部材（W255）が出土した。

部材はW255がある。完形ではなく、残存長1m足らずの柾目の板で、表面は平らになるよう手斧で削られている。片方の側辺に4箇所の長方形の孔があけられている。孔は2cm×1cmの長方形で、孔

から材の側辺にかけて浅い溝状になるように表面が掘り窪められている。

4. D地点

（1）土 器

①第1遺構面

【包含層】（図版72）

土師器と**白磁・瓦質土器**がある。

土師器（283～292・295）には**皿**等がある。

皿は283～292がある。特に287の皿は左右両側辺が内側に折り曲げられる、俗に耳皿と呼ばれるものである。調整はすべてナデで仕上げられる。その他の皿も器表面の調整は基本的には横ナデが施される。289の皿はほぼ完形に近いものであるが、内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。その他の皿は破片であるためこのようなナデの痕跡は見られないが、同様の調整が施されていた可能性があると考えられる。

その他には295の壺状の土器がある。外面は丁寧に磨かれ、横方向の低い突帯が付けられている。

白磁（293・294）には**皿**がある。

皿は293・294がある。いずれも体部下半部は丸みを帯び口縁部は外反する。高台の端部周辺は内外面とも露胎である。釉は鮮やかな乳白色を呈している。また293は高台の内側には砂が付着している。

瓦質土器（296）には**すり鉢**がある。

すり鉢は296がある。断面形は直線的で、内外面ともナデで調整されている。外面の下半部は指頭の圧痕が残り、さらに下端部には横方向のヘラケズリの痕跡が認められる。すり目は五本の沈線で一単位が形成されているものの、頻繁に使用されたと見え、すり目は口縁部付近を除いてかなり摩滅している。

【堀101】（図版72）

土師器と**青磁・瓦質土器**が出土した。

土師器（297～303）には**皿**がある。

皿は297～303がある。301はほぼ完形に近いものであるが、内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。その他の小皿は破片であるためこのようなナデの痕跡は見られないが、同様の調整が施されていた可能性があると考えられる。

青磁（304）には**碗**がある。

碗は304がある。発色は良く濃い黄緑色を呈している。体部外面の蓮弁文は線刻で描かれている。

瓦質土器(305・306）には**すり鉢**がある。

すり鉢は305～306がある。305の口縁部は端部がやや内側に彎曲気味であるが、306の口縁端部は外反し、口縁端部直下の内面に１本の沈線が巡らされる。すり目は306のみに認められ、すり目は７本で１単位を形成している。

②第２遺構面

【包含層】（図版72）

土師器と**白磁・青磁・青花・美濃・備前・瓦質土器**が出土した。

土師器（307～314）には**皿**がある。

皿は307～314がある。307～312と比べて313～314は口径がやや大きい。308と310は内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。307と309も同様の調整が施されていた可能性があると考えられる。311はほぼ完形であるが上記のようなナナメ方向になでた痕跡は見られない。308および313･314は灯明皿で内外面に煤の痕が認められる。

白磁（315）には**碗**がある。

碗は315がある。焼成が良好ではなく、釉は乳白色を呈している。

美濃（316）には**天目**がある。

天目は316がある。口縁部の断面形はほぼ直立するもその端部はやや外反する。体部も直線的で、口縁部との境界に稜線を形成している。釉は非常に濃い褐色で口縁部付近に橙褐色の釉がかかっている。胎土はもろく、白味がかった黄褐色を呈している。

青磁（317）には**碗**がある。

碗は317がある。釉はくすんだ緑灰色を呈している。

瓦質土器（318）には**直口壺**がある。

直口壺は318がある。底部内面は器表面が剥離した痕跡が認められる。器表面の調整は基本的には横ナデであるが、底部裏には不定方向のケズリの痕跡が見られる。

青花（319）には**碗**がある。

碗は319がある。乳白色の釉に鮮やかな青の呉須で文様が描かれている。底部内面には童子の図が描かれ、裏面は「大明年造」の銘が書かれている。

備前（320）には**すり鉢**がある。

すり鉢は320がある。器高は12cmであるのに対し口縁部の幅が約3.5㎝と、口縁部が幅広な点が目立つ遺物である。口縁部外面には凹線が３条巡らされている。体部から底部にかけてはすり目が付けられているが、約10本で１単位を形成している。また体部下半から底部にかけては、器表面が摩耗する状態の使用痕が認められる。

【堀201】（図版72）

土師器と**美濃・備前・瓦質土器**が出土した。

土師器（321～322）には**皿**がある。

皿は321～322がある。321には内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められるが、322にも同様の調整が施されていた可能性があると考えられる。322には灯明皿に用いられたとみえ、口縁部の２箇所に煤が付着している。

美濃（323）には**天目**がある。

天目は323がある。完形品であるが、かつて使用中に一度破損し４個の破片に分割されたようである。その後に漆を用いて復元されている。体部の断面形は直線的であるがやや内彎する。口縁部は直立するがその端部はやや外反する。釉の色は暗褐色で、明るい黄褐色の微細な点が全体に吹き散らしたように散在している。外面の体部下半は完全な露胎で、化粧土などが施された痕跡は認められない。胎土の色はやや赤味がかった黄褐色で、その質はやや粗く、粒径約１～２㎜の砂粒を少量ながら含んでいる。器表面の調整は内面全体と外面の体部上半はロクロを用いた粗いナデを施しているが、外面の特に体部下半から高台にかけては、ヘラで粗く削られた痕跡が残されている。高台は削り出して成形された輪高台である。井上喜久男氏の美濃窯製品の編年（井上1988年）によると大窯Ⅲ期の製品にあたり、16世紀中庸の絶対年代が与えられると考えられる。

瓦質土器（324）には**鉢**がある。

鉢は324がある。高台付きである。内彎する体部の両脇に２箇所の把手が貼り付けられている。把手は幅４㎝、奥行き1.3㎝、厚さ８㎜で手づくねで成形されている。体部は内外面とも横方向のヘラミガキが密に施されている。古事類苑の器用部第一冊にこの遺物と酷似した器物の挿し絵が見られる（古事類苑1909年）。これによればこの遺物は匜盤（みだらひ）とされる。

備前（325）には**すり鉢**がある。

すり鉢は325がある。器高は11.5cmであるのに対し口縁部の幅が約3.5㎝と、口縁部が幅広な点が目立つ遺物である。口縁部外面には凹線が３条巡らされている。体部から底部にかけてはすり目が付けられているが、また体部下半から底部にかけては器表面が摩耗する状態の使用痕が認められる。

【溝】

SD201（図版73）

土師器と**青花**が出土した。

土師器（326～334）には**皿**がある。

皿は326～334がある。326は他の皿とは異なるタイプである。平底の上に高さ5㎜の体部が直立するように付けられる。調整は基本的には横方向のナデで底部の裏面のみ不定方向のナデが施される。327～334は手づくねで成形されている。327・328・330～332には内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められるが、他の小皿にも同様の調整が施されていた可能性があると考えられる。いずれの小皿も灯明に用いられたとみられ、特に328～333には口縁部付近に煤が付着している。

青花（335）には**碗**がある。

碗は335がある。素地は乳白色で呉須はにぶい青である。高台は高さが約1cmあり、端部は内外面を削り露胎のような状況を呈している。文様は底部内面に二重圏線の内側に花文を描き、体部外面には何らかの草花文を描く。底部裏面は無文である。

SD202（図版73）

土師器が出土した。

土師器（336～337）には**皿**と**鉢**がある。

皿は336がある。手づくねで成形されるが、外面上半から内面は横ナデで仕上げられる。体部下半には指頭の圧痕が残されている。

鉢は337がある。底部のみの破片で、厚い器壁と外に踏ん張る形の高台が特徴である。器表面の調整は、内面は縦ハケで、底部付近は仕上げにヘラで削っている。外面は体部から高台外側にかけてナデ、高台の内側は左回転のヘラケズリである。

③第3遺構面

【包含層】（図版73）

青花と**備前**が出土した。

青花（338）には**碗**がある。

碗は338がある。口縁部の破片である。乳白色の素地に薄く濁った呉須で模様が描かれている。

備前（339）には**甕**がある。

甕は339がある。口縁部のみ残存する。

④第４遺構面

【包含層】（図版73）

土師器・瀬戸美濃・瓦質土器が出土した。

土師器（340）には**皿**がある。

皿は340がある。手づくねで成形されるが、外面上半から内面は横ナデで仕上げられる。体部下半には指頭の圧痕が残されている。

瀬戸美濃（341）には**碗**がある。

碗は341がある。灰釉陶器の丸碗底部の破片であるが、瀬戸美濃の灰釉陶器と考えられる。高台は輪高台で底部に貼り付けられている。大きな貫入が入った薄黄褐色の釉が体部から高台裏にまで全面的にかけられており、高台の内側に丸く砂目跡が残されている。

瓦質土器（342）には**すり鉢**がある。

すり鉢は342がある。平底の上に直線的に開く体部が付く。器表面の調整は、外面は縦ハケを施し下端を指頭で成形する。内面はナデ調整した後に９本１単位のすり目を付けている。

【堀401】（図版73）

土師器が出土した。

土師器（343～348）には**皿**がある。

皿は343～348がある。343・347は内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。345・346は灯明に用いられたと見え、口縁部付近に煤が付着しているのが認められる。

【溝】

SD401（図版73）

土師器と**瓦質土器**が出土した。

土師器（349～352）には**皿**がある。

皿は349～352がある。うち349と351は内面のナデの終点は指を口縁部から外へ指を逃がしているため、その部位に限りナナメ方向のナデの痕跡が認められる。351と352は灯明皿と見られ裏表に煤が薄く付着している。

瓦質土器（353）には**すり鉢**がある。

すり鉢は353がある。焼成は良く内外面とも濃い暗灰色を呈している。特に内面は焼成後、更に熱を受けたせいか黒く変色している。

【層位が不明な土器】（図版73）

土師器と**青磁・越前**がある。

土師器（354～356・358）には**皿**と**坏**がある。

皿は354～356がある。うち、354と355は比較的小型で、体部下半に指頭の圧痕が残されている。また354には煤が部分的に付着している。356は前の二者と比べるとやや大型で、器表面も丁寧にナデ調整されている。また口縁に直交するような紐状の煤痕が付着しているが、これは灯明に用いられた際の芯の痕跡が残ったものである。

坏は358がある。S字形の体部に弱く外反する口縁部が付く。底部に高さ２㎝の高台が貼り付けられている。

青磁（357）には**皿**がある。

皿は357がある。多弁の輪花形の小皿である。胎土はきめ細かいが焼成は悪く、断面には薄い黄褐色に発色した部分が認められる。細かい貫入の入った薄緑色の釉は高台裏までかけられており、高台裏にはほぼ全面的に砂が付着している。また高台の内側は朱色に着色されている。文様は、内面は花弁そのものが陰刻されるが、外面は花弁の境界が幅広の刻線で表現されるのみである。

越前（359）には**すり鉢**がある。

すり鉢は359がある。胎土は粗く径３㎜以下の礫・砂粒を含んでいる。色調は橙褐色、外面下半は明るい黄褐色を呈している。調整はいずれも横方向のナデで仕上げられている。内面にすり目が付けられた後、内面の口縁直下を横方向に一度指ナデを施している。すり目は2.5㎝間隔で付けられ、一単位八本の線刻から成り立っている。頻繁に使用されたとみえ、内面下半は器表面およびすり目が完全に消え去り、胎土そのものが露出してしまっている。また体部中位に墨書が認められる。田中照久氏の編年研究によれば第Ⅴ期の大窯期の製品にあたると考えられ、生産時期は16世紀代と考えられる（田中1994年）。

（２）木　器

①第１遺構面

【包含層】（図版113　W263）

工具が出土した。

工具（W263）には**錐**がある。

錐はW263がある。柄は心持材を利用し、表面に細かな面取りを行うことにより成形している。先端には鉄製の錐身（刃）が挿入されている。刃は断面が四角形である。

【堀101】（図版113　W256～W262）

紡織具と**容器・用途不明品**が出土した。

用途不明品はW256とW257およびW262である。W256は何らかの動物の形態を模したものと考えられる。W257は台座の脚と考えられる。W262は用途不明品である。隅丸長方形の中央部付近に直径約１㎝の丸い孔をあけ、その両側にそれぞれ1.5㎝ほど離して小さな孔を２箇所あけている。何らかの台に用いられたと推測される。

容器（W258～W260）には**漆椀**と**曲物**、および**皿**がある。

漆椀はW258がある。外面は黒漆地に赤漆で絵が描かれている。内面は全面的に赤漆が塗られている。底部裏面（高台内側）には、赤漆で「上」の銘が書かれている。

曲物はW259がある。周縁部よりやや内側に側板が接触した痕跡が残っているため、側板を樺皮留めしていたと考えられるが、そのための穿孔が存在しない。

皿はW260がある。高台の付く刳り物の皿で、内外面に漆が塗付されている。

紡織具（W261）には**糸巻き**がある。

糸巻きはW261がある。糸巻きの枠木で、類例は袴狭遺跡に存在する（鈴木2000年）。

②第２遺構面

【包含層】（図版114　W271～W281、写真図版137　W342）

木簡・祭祀具・容器がある。

木簡はW271～W273の３点がある。W272とW273は、その出土位置から堀201の埋土中に含まれていたものと判断される。W271は釈読で不能であった。形態上の特徴は、上端から４㎝下方が三角形に切り欠かれ、人形のような「頭部」を形成している点である。W272は長方形の木簡で、釈文は「五千弐四拾弐…」である。W273は荷札木簡である。頭部は両端が面取りされ、下部は細長く尖らせている。釈文は「〇十一月壱斗七合　かふや」であるが、最下部の３文字は「あふや」とも見える(大平茂 1996年)。

祭祀具（W274）には**絵馬**がある。

絵馬はW274がある。厚さ2.5㎜と、きわめて薄く作られている。絵馬の一角のみ残っており、そこに馬の頭部から胸部および前脚部が墨で描かれている。

容器（W275～W281・W342）には**曲物**と**漆椀、槽、桶、柄杓**がある。

曲物はW275がある。底板のみ残存する。直径10㎝に満たない小型品で、側面に木釘の痕跡が４箇所に認められる。

漆椀はW276～W279がある。このうちW276～W278はの大きさが、口径15㎝、高さ8.5㎝と揃っているため、規格品である可能性が考えられる。

W276の外面は黒漆の地に赤漆で絵が描かれている。絵は２箇所あり、一つは竹林で、二つ目は二羽の鶴が向き合いその足元に一匹の亀が描かれるという当遺跡では典型的な絵柄である。内面は口縁部から3.5㎝下方は赤漆が塗られ、その下側は黒漆でうめられている。また底部裏面（高台の内側）には、

赤漆で「一」の字が書かれている。

W277は漆の残存状況が悪く剥離が進んでいるものの、外面は黒、内面は赤の漆の痕跡が認められる。外面には赤漆で絵が描かれた痕跡が認められるが、その絵柄はW276と同様、二羽の鶴が向き合い、その足元に一匹の亀が描かれるというものである。

W278も外面は黒、内面は赤の漆の痕跡が認められる。外面に、赤漆で描かれた鶴の絵が認められる。

W279は外面が黒、内面が赤の漆で塗られている。外面には竹林の絵柄が赤漆で描かれている。また底部裏面（高台の内側）には、台形と三角形が組み合わされた形の線刻が認められる。

槽はW280がある。刳り物の槽である。残存状況が悪く、出土時には底部と体部は分離した状態であった。全長52㎝、高さ約10㎝である。

桶はW281がある。側板で、図のとおりタガの痕跡が外面に二箇所残されている。

柄杓はW342がある。曲物部分の残存状況が極めて悪いため、実測はせず遺物写真のみにより記録した（写真図版137）。柄の全長は91.5㎝。この片側に曲物の杓が付けられる。杓の本体は直径約20㎝の曲物である。この側壁に２箇所穿孔し、そこに柄を挿入することにより柄と杓を固定している。因みに柄の手に持つ側の先端付近には、一辺約２㎝の四角い穴があけられている。

③第３遺構面

【包含層】（図版113　W264～W265）

服飾具が出土した。

服飾具（W264～W265）には**下駄**がある。

下駄はW264がある。組み合わせ式の差歯下駄である。台木の平面は楕円形で、断面は横断面･縦断面とも逆台形である。歯の上端に枘を２箇所作り、これを台木にあけた計４個の枘穴に挿入して歯と台木に固定している。

W265は一木造りの連歯下駄である。歯は２本で、前よりも後の歯が擦り減っている。鼻緒の穴の位置は前の穴が前の歯より前、後ろの２穴も後ろの歯より前にあけられている。台木の上面には足型の凹みが残されている。

④第４遺構面

【包含層】（図版115　W282～W297）

祭祀具・木簡・服飾具・容器が出土した。

祭祀具（W282）には**羽子板形木製品**がある。

羽子板形木製品はW282がある。図の右端部分は欠損している。表面は墨書や絵･文様の痕跡は認められないが、赤漆の痕跡がわずかに点在している。

木簡（W283～W285）は３点である。W283は表裏両面とも梵字が多数書き込まれている。両側辺は

欠損している。W284の素材は竹である。竹を縦に分割し、その外面に墨書が認められる。墨書の最下端付近は、両側辺がそれぞれ三角形に切り欠かれている。W285は墨痕こそ認められないがその形状から付札木簡と考えられる。

服飾具（W286～288）には**櫛**と**下駄**がある。

櫛はW286がある。歯は23本で、漆が塗られた痕跡などは認められない。

下駄はW287・288がある。いずれも一木造りの連歯下駄である。

容器（W289～297）には**漆椀・柄杓・曲物**がある。

漆椀はW289～291がある。W289は漆椀の破片である。外面は黒漆地に赤漆で草花文が描かれる。W290も漆椀である。外面には黒漆、内面には赤漆が塗られている。W291は漆塗りの小皿である。外面には黒漆、内面には赤漆が塗られている。

柄杓はW292がある。棒状の柄と曲物の本体からなる。柄は断面形が横長の長方形で、先端が細くなるよう加工されている。先端から把手側に10cm余り戻ったところで木釘の痕跡が認められるが、これにより柄と本体が固定されていた。このことより曲物の本体は直径が約10cmであったことがわかる。本体は側板を2重に巡らし、その始点と終点を樺皮で結束している。

曲物はW293～297がある。W293は底板で、直径10cmに満たない小型品であるが、側面に木釘の痕跡が残っている。W294～297は方形曲物（折敷）である。W294とW295は小型品で一辺9.5cmの正方形である。側板との結束箇所は2箇所である。それぞれに2つ穿孔し、樺皮で側板を締め付けて固定している。W296は一辺18.7cm、側板との結束箇所は4箇所と考えられる。各々の結束箇所では、樺皮を通すための穿孔が3箇所認められる。W297は最大幅32cmの長方形曲物である。側板の結束箇所は4箇所認められ、各々2～3箇所の穿孔が認められる。

【堀401】（図版116　W298～W304）

容器・食事具・用途不明品がある。

容器（W298～299）には**桶**がある。

桶はW298～299がある。側板のみ遺存する。いずれもタガの痕跡があり、W298は根元に1箇所、W299は両端に2箇所タガの痕跡が認められる。

用途不明品はW300・W301・W304がある。W300は断面が台形の棒の上端に小さな長方形の板が付けられる形である。棒の先端が細く枘のように加工され、それを小長方形にあけられた枘穴に挿入することにより、二つの材が結合されている。W301は半円形の板材で、半円の弦にあたる部分に釘穴が認められる。

W304は連歯下駄に似た形態を呈しているが、下駄の歯にあたる部分の前後が欠落している。さらに穿孔が4箇所に認められる。これらの穴のうち「下駄の歯」の間にあけられた穴は、「下駄の歯」とほぼ平行の方向にあけられている。残りの2つの穴は斜め方向にあけられている。

食事具（W302・W303）には**切匙**（せっかい）がある。

切匙はW302・W303がある。すり鉢の内側についたものを掻き落とす道具とされる。W302は把手側が欠損しており、残存部分の長さは21.3㎝である。W303は完形品で全長19.8㎝である。

【溝】

SD401（図版116　W305～W306）

容器が出土した。**容器**（W305～306）には**漆椀**と**曲物**がある。

漆椀はW305がある。口径14.4㎝に対し器高は5.6㎝と、やや浅めである。漆は外面に黒、内面には赤の漆が塗られている。

曲物はW306がある。口径10㎝に満たない小型の底板で、側面に３箇所、釘穴が認められた。

【層位が不明な木器】（図版113　W266～W270　写真図版132、138）

服飾具、容器、用途不明品が出土した。**服飾具**（W266～267）には**下駄**がある。

下駄はW266～267がある。いずれも台木と歯が一木から作られる連歯下駄である。歯は２本で、W266は前よりも後の歯が極端に擦り減っている。台木の上面には足型の凹みが残されている。W267は下駄の後半部の破片であるが、台木上面に扇の文様が刻線で描かれているのが特徴である。歯の側面は面取りが施されている。W267はW266と比べてやや小型である。

容器（W268～270・343）には**漆椀、桶、かご**がある。

漆椀はW268・269がある。いずれも黒漆地に赤漆で文様が描かれるが、漆の剥離が進行していることから文様柄は明瞭でなく、赤漆の痕跡が残る程度である。

桶はW270がある。側板の破片である。把手を付けるために他よりも高く作られた部分とみられることから、桶自体は水を運搬するための水桶と考えられる。またこの破片の最も下方にタガで締められた圧痕が認められる。

かごはW343がある。２本が１単位の放射状に延びたものに、直交する方向に密に編んでいる。

用途不明品はW341がある。鉤形を呈し、鉄釘が打ち込まれている。

【参考文献】

井上喜久男「美濃窯の研究（一）　―十五～十六世紀の陶器生産―」『東洋陶磁』第十五・十六号　東洋陶磁学会　1988年

大平　茂「兵庫・入佐川遺跡」『木簡研究』第18号　1996年

『古事類苑 器用部第一冊』「器用部十一、澡浴具二」神宮庁司　1909年

鈴木敬二「第３章　第３節　内田１区（98頁、30行）」『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第197冊　兵庫県教育委員会　2000年

田中照久「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現―九右衛門窯の記録』出光美術館　1994年

藤田　淳（１）「第３章　第10節　深田１区（162頁、22行）」『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第197冊　兵庫県教育委員会　2000年

藤田　淳（２）「第３章　第10節　深田１区（163頁、５行）」『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第197冊　兵庫県教育委員会　2000年

第７節　金属製品

①銅製品（図版117・118、第17・18表）

銅銭・鉄銭、環状銅製品が出土した。

銅銭・鉄銭はＭ１～M14がある（第17表）。開元通寶、開元通寶（背上月）、天聖通寶、皇宋通寶、熙寧元寶、元豊通寶、紹聖元寶、政和通寶、永楽通寶、寛永通宝（鉄製）があり、初鋳年代は621年～1739年までである。いずれも第１遺構面あるいは機械掘削中に出土しており、地区では入佐川４区でまとまって出土している。他に入佐川２区の溝からもまとまって出土している。

環状銅製品はM15・16がある。M15は黄銅色を呈しており、真鍮製の鋳物である。千鳥に霰地文、および青海波が浮き彫りになっている。ほぼ正円形に近い平面形で、断面は長細い蒲鉾形を呈する。なお、表面と裏面の文様の位置は同じではなく、１/４回転ほどずれている。

M16は一方が欠けており、遺存する部分は歪な半円形を呈している。断面形は円形に近い。

②鉄製品（図版118・119、第18表）

小刀、鉄鏃、環状鉄製品、鋤先、鎌、毛抜き、釘、および**スラッグ**が出土した。なお、スラッグについては図示していない。

小刀はM17・18がある。M17は比較的遺存状況がよく、関の部分を除いてほぼ完存する。身の背側は柄の方向と平行して直線的に延びており、刃側は直線的に幅を狭めながら刃先に延び、切っ先付近で広いふくらがつく。関は両関であると思われ、その形態は不均等の関、あるいは均等の関の刃側が欠損しているものと思われる。茎は茎尻に向かって直線的に細くなっている。茎尻の形態は錆のため不明。

M18は錆が進行しており、茎はほとんど遺存せず、刃も遺存状況は悪い。身は刃側と背側が平行しており、切っ先付近は広いふくらがつく。関の形態は両関と思われ、不均等の関あるいは均等の関の刃側が欠損しているものと思われる。

鉄鏃はM19・20がある。鏃身平面形は雁又で、台形状に開く篦被をもつ。M19は身が細身であるが、M20は幅が広い。

環状鉄製品はM21がある。平面形は正円形に近く、やや高さがあり、断面形は長細い長方形を呈する。図の上半部が磨滅している。

鋤先はM22がある。平面形がU字形を呈しており、刃先はやや片刃となっている。袋部は先端付近がもっとも深く、両端では浅くなっている。

鎌はM23がある。全長7.3cmと小型である。身の刃側は直線的であるが、背側はゆるく円弧を描いている。尻側は丸くねじり、中に針金状の細い鉄線が通されている。

毛抜きはM24がある。刃先部分の幅が広がっており、先端部では内側に折り返されている。

釘はM25～29がある。M25は頭部の形状が不明であるが、他はいずれも四角く、折れ曲がるようになっている。

③金製品・スラッグ

図示していないが、**金箔**の小片と**スラッグ**が出土している。

第８節　石製品

石釧、**管玉**、**石鏃**、**磨石**、**砥石**、**硯**が出土した。（図版120、第19表）

石釧はＳ１がある。両端を破損した状態で出土した。円弧から復元すると、本来の外経は7.4㎝前後となり、全体の１／５程度が遺存すると考えられる。断面は不正な台形で、各部位の計測値は、内径の復元値が6.1cm、環体高：1.45／環体幅：0.8／下底幅：0.6／斜面長：1.1／側面高：0.8㎝をそれぞれ測る。

側面はほぼ垂直だが、内面は内傾し、上端へ近づくにつれてわずかながら反りを生じる。刻みは斜面にのみ施され、遺存する範囲では等間隔だが、幅広の匙面が存在した可能性は否定できない。側面は２段の匙面取りがなされる。匙面の幅はほぼ等しい。斜面と側面の境界に沈線は認められない。

以上の特徴から、蒲原分類(1)のⅢ－a類（刻みの状況によってはⅢ－a’類）／鐘方分類(2)のAⅡ－②型式に該当する。

材質はグリーンタフと見られるが、色調は灰色に近い。節理面が断面や内面側に浮き出ており、石質はよくない。形態から４世紀末～５世紀前半の年代感が与えられ、周囲から出土したの土器群よりも若干先行する。

管玉はＳ２がある。滑石製で暗緑灰色を呈する。断面形は円形に近いが、側面には鈍い稜線が認められ、また、調整痕も部分的に明瞭に残る。両小口側は同じ向きに傾斜している。円孔の直径は3.0㎜である。

石鏃はＳ３がある。サヌカイト製で、平基式である。重さは1.5gである。

磨石はＳ４がある。側面には自然面がそのまま残されており、凹凸が著しい。先端には磨滅した痕跡が認められる。

砥石はＳ５～８がある。Ｓ５は長側面がややくぼんだ平面形で、表面・裏面・長側面に擦痕がみとめられる。中央付近には三日月状の深い傷が認められる。Ｓ６は断面形が高さのある長方形で、全体に厚い。表面および図の右側面に擦痕が認められる。Ｓ７は比較的大型で、表・裏・両側面には長軸方向に平行する方向の擦痕が認められる。表面は部分的に表面が欠けている。Ｓ８は他の砥石とは異なり、表面の端から側面にかけて円形のくぼみが多数あけられている。そのうちいくつかは重複するもの、中央がやや盛り上がっているものがあり、径も深さも大小いろいろある。側面に開けられている孔は側面に直行するものではなく、若干表面側に傾いた方向で開けられている。表面、裏面には不定方向の擦痕が認められる。

硯はＳ９がある。平面形は長方形を呈すると思われるが、陸の部分のみで全体の形状は明らかでない。中央部分は使用されたため周囲よりさらに若干くぼんでいる。側面は垂直に立ち上がり、裏面は平らで、脚、およびそれを思わせるような加工は認められない。

【参考文献】（１）蒲原宏行「石釧研究序説」『比較考古学試論』（1987）
（２）鐘方正樹「碧玉製腕飾類の研究視点」『網干善教先生華甲記念論集』（1988）。

第５章　自然科学分析の成果

第１節　漆付着土器ならびに把頭飾の塗膜構造調査

㈱吉田生物研究所　　本　吉　恵理子
京都造形芸術大学　　岡　田　文　男

1. はじめに

兵庫県入佐川遺跡から出土した、漆が付着した土器と漆が塗布された把頭飾について、塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査した資料

調査した資料は入佐川２区出土の土器の壷（報告番号55）１点（資料No.１）と、入佐川３区出土の把頭飾（報告番号W163）１点（資料No.2）で、ともに古墳時代前期の遺物である。

No.１：完形の壷である。褐色の漆が体部内面と頸部内面に大量に付着している（図１）。その付着の部位は極めて特異で、体部内面にはあたかもマスキングテープを用いたかのように一定した幅で縦方向に漆が付着している（図３）。また口縁部は、中に入っていた漆が流れ出たような付着の状態である。その他外面にも漆の付着が認められる。各部の漆の表面にはつやはなく、かさかさした状態である。このような壷の以下の部位に付着する漆を調査した。

①　頸部内面　　②　頸部外面　　③　体部外面

資料が割れていないので、体部内面については試料を採取できなかった。

No.２：把間へつながる部分で破損しており、ほぼ三角柱のような形状である。木胎で端面と３側面に直弧文を表現する線刻、肉彫りが施されている。そして全面に黒色の漆が厚く塗布され、文様部に赤色の顔料が埋めこまれており、黒色地に赤色の文様が表出されている（図５）。このような把頭飾の以下の部位について調査した。

①　端面の赤色文様部　　②　側面の赤色文様部　　③　把間連結面の黒色部

3. 調査方法

資料本体から数㎜四方の破片を採取して、エポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを透過光ならびに落射光の下で検鏡した。

4. 観察結果

No.1土器付着漆

①，②，③の各部位で淡褐色～褐色の漆膜が観察された（図２，４）。色調の違いは作製したプレパラートの厚みの相違によるものである。通常の器物に塗布された漆は黄褐色を呈する。これよりも明らかに濃い色調であることから、過度に加熱された可能性がある。漆膜に顔料の混和は認められず、気泡もほとんど認められないので、精製された透明漆と判断する。③頸部内面の漆膜は、層厚は比較的均一であるが、塗布された場合のように表面は平滑ではない。

表１　把頭飾の塗膜断面観察結果

No.	部　位	図No.	木　胎	漆層構造（下層から）	
				塗　り	加　飾
①	端面（文様部）	6	最下層の漆が浸透する	漆＋油煙（多）/漆+油煙（微）/透明漆	朱＋膠着剤（漆?）
②	側面（文様部）	7	最下層の漆が浸透する	漆＋油煙（多）/漆+油煙（微）/透明漆	朱＋膠着剤（漆?）
③	把間連結面（黒色部）	8	最下層の漆が浸透する	漆＋油煙（多）/漆+油煙（微）/透明漆	—

No. 2 把頭飾

①～③の部位で、木胎と漆層という構造が見られた。下地は見られない。①と②は同一の層構造で、途中まで③と共通する（表１）。

木　胎：木胎最表層の細胞組織に、油煙を大量に混和した漆がよく浸透している。

塗　り：①～③の部位に共通する。漆に油煙様の黒色微粒子が混じる層が２層、その上に気泡をほとんど含まない精製度の高い漆が１層重なっている。２層の黒色微粒子混和層は油煙様の混和量が大きく異なるため色調が異なる。木胎直上の層には大量に混和され、層全体が真っ黒に見える。層厚は比較的薄く、上面は平坦ではないため、木胎の表面に薄く施されたと推測する。上層には黒色微粒子が認められるが、きわめて微量であるため、意図的に混和されたものかどうか不明である。この層には気泡も見られ、精製度の低い漆であることがわかる。層厚は厚く、上面は平坦である。その上に透明漆が１層認められる。この層は層厚が一定で上面は平滑である。

加　飾：①，②の文様部である。塗りの透明漆の上に、赤色顔料を膠着剤に混和した層が１層見られる。赤色顔料は、朱の粒子が観察できた。膠着剤の色調が見えないくらいに朱粒子の密度が高い。粒子が欠落し、層が白く抜けている部分があり、平滑ではない。これは膠着剤が少ないことも関係しているかもしれない。膠着剤は漆の可能性が高い。

5. まとめ

古墳時代前期の漆製品２点を調査した。古墳時代の漆製品の塗膜構造調査事例は現在のところまだ少数である。同時代の漆工技術の系譜を明らかにするためにも今後の事例の増加が期待される。

土器付着漆

①漆は塗布されたものではなく、使用の結果付着したと解釈する。ただしその使用の内容は不明である。

②漆に混和物は認められない。気泡も見られないことから、よく精製された透明漆といえる。

漆の色調は濃い。過度に加熱された可能性がある。

把頭飾

①下地は施されず、大量に油煙様の黒色微粒子を混和した漆が直接木胎に塗布されている。

②上層には漆が重ねられ、その上の線刻部に朱がのせられている。

第２節　入佐川遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所
伊東　隆夫

兵庫県出石郡出石町宮内に所在する入佐川遺跡は出石町の市街地からは約2.5km北にあり、東から西に延びる此隅山のすぐ南側にあたる沖積低地に立地する。此隅山の南裾には入佐川が西方へ流れており、遺跡はそのすぐ南側に位置する。なお、遺跡から日本海までは約19kmである。

同遺跡では弥生時代後期から近世までの遺構・遺物が検出されている。弥生時代後期から古墳時代には住居址、掘立柱建物のほか、溝、旧河道、堤防が検出された。溝、旧河道には井堰が認められ、配水するためのものや、貯木するためのものがある。古代は祭祀具が認められるが、袴狭遺跡、砂入遺跡ほど出土していない。遺構は条里に伴う溝などがある。中世は此隅山に城が築かれたため、それに伴う堀などの遺構が検出された。近世は水田に伴う溝や旧河道が検出された。

全般的に、本遺跡の木製品は旧河道から出土したものが多いため、時代を判定するのが難しいものも多い。

兵庫県埋蔵文化財調査事務所から同遺跡出土木製品の樹種の同定の依頼があった。定法により小さい材片から安全カミソリで薄い切片を作製し、スライドガラスに載せカバーガラスをかぶせてガムクロラールで封入し、顕微鏡用プレパラートを作製した。樹種同定の拠点は以下の通りである。

モミ(*Abies firma* Sieb. et Zucc.)

樹脂道を欠く。放射柔細胞壁は厚い。

二葉マツ(*Pinus* sp., haploxylon)

樹脂道が存在。分野壁孔は窓状。放射仮道管に鋸歯状突起。

スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はスギ型。

ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* Endlicher)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はヒノキ型。

オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim subsp. *sieboldiana* Kitamura)

散孔材。道管は大きく散在し、単穿孔を有する。放射組織は1-4列。

アカガシ亜属(*Quercus* sp. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材。単穿孔。大型の道管が放射方向にならぶ。単列放射組織と広放射組織。

クヌギ節(*Quercus* sp., *Lepidobalanus* Sect. *Cerris*)

環孔材。単穿孔。孔圏外で道管は放射方向に散在。単列放射組織と広放射組織。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

環孔材。単穿孔。孔圏外で道管は放射方向に火炎状にならぶ。単列放射組織。

シイノキ属(*Castanopsis* sp.)

環孔材。単穿孔。孔圏外で道管は放射方向に火炎状。単列放射組織。

ブナ属(*Fagus* sp. Blume)

散孔材。大きさ中庸の道管が蜜に分布する。年輪始めは比較的大きい道管が分布する。単穿孔と階段穿孔がみられる。放射組織は幅が単列から多列と様々の大きさのものがみられる。

ヤマグワ(*Morus australis* Poiret)

環孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は1-5列で異性。

ホオノキ(*Magnolia obovata* Thunb.)

散孔材。大きさは中庸の道管で、単穿孔を有する。隔壁木繊維が存在。道管側壁に対列壁孔がみられる。放射組織は２列。

サルナシ(*Actinidia arguta* Planchon ex Miquel)

散孔材。孔圏道管は単列。単穿孔。道管にらせん肥厚およびチロースがみられる。放射組織は異性。

ヒサカキ(*Eurya japonia* Thunberg)

散孔材。道管径はきわめて小さい。バーのきわめて多い階段穿孔。らせん肥厚。放射組織は異性で、1-4列。

イスノキ(*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

散孔材。道管径はやや小さい。階段穿孔。らせん肥厚。放射組織は異性で、1-4列。

サクラ属(*Prunus* sp.)

散孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚、ときに着色物質。放射組織は同性。

センダン(*Melia azedarach* L. var. *subtripinmata* Miquel)

環孔材。孔圏の幅は広い。単穿孔。孔圏道管の周囲に小道管が囲む。道管にらせん肥厚および着色物質。放射組織は同性ないし異性。

ハゼノキ(*Rhus succedanea* L.)

散孔材。単穿孔。道管にチロースがみられる。隔壁木繊維が存在する。放射組織は異性で1-2列となり、結晶が存在する。

カエデ属(*Acer* sp.)

散孔材。道管は単独ないし2-3個放射複合。単穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は同性で、1-5列。

トチノキ(*Aesculus turbinate* Blume)

散孔材。やや小さい道管が単独ないし２- ３個放射複合。単穿孔。放射組織は単列で、層階状に配列。

樹種同定の結果は表１に示す。これを樹種別にまとめたものが表２、器種別にまとめたものが表３である。表２を用途や時代に関係なく、利用樹種の多い順にみると、全体で368点のうち針葉樹ではスギが237点で６割５分に当たる量であった。その他はヒノキが48点、二葉マツとモミが共に３点であった。広葉樹ではクリの23点とトチノキの15点が多い方で、ブナやホオノキの８点、アカガシ亜属の６点がこれに続く。

一方、表３の器種別の結果を時代を無視して検討すると、最も多く出土した種別は部材で110点、次いで容器の68点、農具の66点、祭祀具の47点、服飾具の19点、木簡の12点、雑具の７点、工具の６点、紡織具、食事具の各４点、漁猟具の３点、それに運搬具、遊戯具、武具各１点となる。

各器種の内訳をみると、部材110点のうち橋脚が33点で圧倒的に多く、用材としてはクリ（15点）、スギ（８点）、ヒノキ（７点）が多用されていた。容器では68点のうち漆椀が30点で、用材はトチノキ

（13点）、ブナ（８点）、クリ（６点）が特に多く用いられた。桶、柄杓、槽、木皿、折敷、蓋、曲物、などにはスギまたはヒノキが多用された。農具では66点のうち田下駄が53点で圧倒的に多く、用材としてもっぱらスギ（52点）が利用され、ただ１点がサルナシであった。鍬は７点で、用材はアカガシ亜属（４点）、クヌギ節（２点）、カエデ属（１点）であった。祭祀具では47点が斎串、人形、馬形、舟形、刀形、鳥形、盾形、絵馬、鏃形、羽子板に加工され、そのほとんどがスギであったが、鳥形の１点はヒノキであり、絵馬１点は二葉マツであった。服飾具には下駄17点と櫛２点が出土しているが、下駄にはホオノキが８点で最も多く、スギとヒノキが各２点、オニグルミ、ハゼノキが各１点であった。これらのほか木簡、雑具、工具、紡織具、食事具、漁猟具、運搬具、遊戯具のほとんどにスギが用いられていた。

以上のように、スギが出土木製品全体（368点）の65％に利用され、かつ部材、農具、祭祀具、容器、建築部材、木簡、雑具、食事具、工具、漁猟具、紡織具、服飾具、遊戯具、運搬具と実に多くの木製品に用いられていたことが、この遺跡の大きい特徴である。スギ以外の用途では、過去の木製品の使用樹種の調査で明らかになっている樹種と用途の関係[(1)]と類似の利用傾向が見られた。

【参考文献】

（１）島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」、雄山閣出版、1988.

注：写真の括弧内の数字は表１の「資料通し番号」の数字である。

表１　樹種同定結果一覧表

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川（確認）	1	1	容器	漆椀	中世？	ブナ	880021- 6
	2	2	容器	漆椀	中世？	トチノキ	880021- 11
	3	3	容器	漆椀	中世？	シイノキ属	880021- 10
	4	4	容器	漆椀	中世？	トチノキ	880021- 3
	5	5	容器	漆椀	中世？	ブナ	880021- 19
	6	6	容器	漆椀	中世？	トチノキ	880021- 13
	7	7	服飾具	下駄	不明	ホオノキ	880021- 147
	8	8	用途不明	不明	不明	スギ	880021- 122
	9	9	部材	不明	不明	スギ？	880021- 34
	10	10	雑具	椅子脚（本体）	不明	スギ	880021- 149
	11			椅子脚（楔）		スギ	
	12	11	農具	田下駄	不明	スギ	880021- 156
	13	12	部材	不明	不明	スギ	880021- 115
	14	13	部材	不明	不明	スギ	880021- M024
	15	14	部材	不明	不明	スギ	880021- M023
	16	×	農具	田下駄	不明	スギ	880021- 118
入佐川１区	17	15	雑具	机脚	古代？	スギ	930082- 22
	18	16	部材	不明	古代？	スギ？	930082- 19
	19	17	祭祀具	人形	古代？	スギ	930082- 30
	20	18	農具	田下駄	不明	スギ	930082- 5
	21	308	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 31
	22	309	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 33
	23	310	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 34
	24	311	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 35
	25	312	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 36
	26	313	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 37
	27	314	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 32
	28	315	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 38
	29	316	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 42
	30	317	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 43
	31	318	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 44
	32	319	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 46
	33	320	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 48
	34	321	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 49
	35	322	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 41
	36	323	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 57
	37	324	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 58
	38	325	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 59
	39	326	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 62
	40	327	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 65
	41	328	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 53
	42	329	建築部材	橋脚	古代？	スギ	930082- 51
	43	330	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 52
	44	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 40
	45	×	建築部材	橋脚	古代？	アカガシ亜属	930082- 45
	46	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 50
	47	×	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ	930082- 54
	48	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 55
	49	×	建築部材	橋脚	古代？	ヒノキ？	930082- 56
	50	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 60
	51	×	建築部材	橋脚	古代？	ヒサカキ	930082- 61
	52	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 67
	53	×	建築部材	橋脚	古代？	クリ	930082- 70
入佐川２区	54	19	容器	漆椀	近世	クリ	920166- 351
	55	20	祭祀具	馬形	近世	スギ	920166- 414
	56	21	服飾具	下駄	近世	センダン	920166- 389
	57	22	服飾具	下駄	近世	センダン	920166- 378
	58	23	容器	漆椀	近世	ブナ	920166- 352
	59	24	容器	漆椀	近世	ブナ	920166- 421
	60	25	部材	不明	中世	スギ	920166- 479
	61	26	祭祀具	斎串	不明	スギ	920166- 541
	62	27	祭祀具	斎串	不明	スギ	920166- 516
	63	28	祭祀具	斎串	不明	スギ	920166- 273

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川２区	64	29	部材	把手？	不明	スギ	920166- 274
	65	30	部材	紐かけのある棒状材	不明	スギ	920166- 543
	66	31	農具	田下駄	不明	スギ	920166- 514
	67	32	部材	紐かけのある棒状材	不明	スギ	920166- 507
	68	33	部材	不明	不明	スギ	920166- 531
	69	34	雑具	付け木	不明	ヒノキ？	920166- 497
	70	35	容器	蓋（本体）	不明	スギ	920166- 540
	71			蓋（把手）		スギ	
	72	36	容器	桶	不明	スギ	920166- 532
	73	37	祭祀具	鳥形	近世	スギ	920166- 463
	74	38	祭祀具	鳥形	近世	ヒノキ	920166- 457
	75	39	容器	漆椀	近世	ブナ	920166- 424
	76	40	容器	漆椀	近世	トチノキ	920166- 503
	77	41	部材	桟？	近世	ヒノキ	920166- 448
	78	42	部材	不明	近世	スギ	920166- 449
	79	43	容器	桶	近世	ヒノキ	920166- 439
	80	44	容器	桶	近世	スギ	920166- 530
	81	45	農具	鋤先	近世	スギ	920166- 545
	82	46	服飾具	下駄	近世	ヒノキ	920166- 443
	83	47	部材	箱？	近世	スギ	920166- 373
	84	48	服飾具	下駄（本体）	近世	センダン	920166- 284
	85			下駄（歯）		ハゼノキ？	
	86	49	容器	漆椀	近世	ブナ	920166- 287
	87	50	容器	漆椀	近世	ブナ	920166- 285
	88	51	容器	漆椀	近世	サクラ属	920166- 290
	89	52	服飾具	下駄（本体）	中世～近世	ホオノキ	920166- 328
	90			下駄（歯）		ホオノキ	
	91	53	部材	方形枠（支柱）	古墳時代	スギ	920166- 332
	92			方形枠（横桟）		スギ	
	93	54	木簡	付札	近世	スギ	920166- 253
	94	55	祭祀具	斎串	古墳時代～古代	スギ	920166- 278
	95	56	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	920166- 279
	96	57	祭祀具	斎串	古代	スギ	920166- 205
	97	58	祭祀具	斎串	古代	スギ	920166- 208
	98	59	祭祀具	斎串	古代	スギ	920166- 272
	99	60	祭祀具	舟形	古代	スギ	920166- 188
	100	61	祭祀具	刀形	古代	スギ	920166- 268
	101	62	遊戯具	琴柱	古代	スギ	920166- 195
	102	63	農具	田下駄	古代	スギ	920166- 262
	103	64	農具	田下駄	古代	スギ	920166- 212
	104	65	農具	田下駄	古代	スギ	920166- 243
	105	66	容器	底板	古代	スギ	920166- 201
	106	67	部材	不明	古代	モミ	920166- 196
	107	68	部材	不明	古代	スギ	920166- 228
	108	69	部材	不明	古代	スギ	920166- 258
	109	70	部材	不明	古代	スギ	920166- 259
	110	71	部材	不明	古代	スギ	920166- 251
	111	72	部材	紐かけのある棒状材	古代	スギ	920166- 215
	112	73	農具	田下駄（A）	古代	スギ	920166- 580
	113			田下駄（B）		スギ	
	114			田下駄（C）		スギ	
	115			田下駄（D）		サルナシ	
	116	74	祭祀具	斎串	中世	スギ	920166- 25
	117	75	祭祀具	舟形	中世	スギ	920166- 21
	118	76	部材	底板？	中世	ヒノキ	920166- 20
	119	77	木簡	付札	中世	スギ	920166- 26
	120	78	服飾具	下駄	中世	ヒノキ？	920166- 104
	121	79	容器	皿	中世	ヒノキ	920166- 1
	122	80	部材	柄	中世	スギ	920166- 130
	123	81	祭祀具	斎串	中世	スギ	920166- 76
	124	82	部材	箱	中世	ヒノキ？	920166- 152
	125	83	祭祀具	人形	古代～中世	スギ	920166- 69
	126	84	祭祀具	人形	古代～中世	スギ	920166- 127

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川２区	127	85	祭祀具	人形	古代～中世	スギ	920166- 185
	128	86	祭祀具	人形	古代～中世	スギ	920166- 41
	129	87	祭祀具	人形	古代～中世	スギ	920166- 163
	130	89	祭祀具	馬形	古代～中世	スギ	920166- 46
	131	90	祭祀具	馬形	古代～中世	スギ	920166- 40
	132	91	祭祀具	斎串	古代～中世	スギ	920166- 35
	133	92	祭祀具	斎串	古代～中世	スギ	920166- 125
	134	93	祭祀具	斎串	古代～中世	スギ	920166- 170
	135	94	祭祀具	斎串	古代～中世	スギ	920166- 160
	136	95	祭祀具	鏃形	古代～中世	スギ	920166- 176
	137	96	木簡	付札	古代～中世	スギ	920166- 64
	138	97	部材	不明	古代～中世	スギ	920166- 147
	139	98	農具	田下駄	古代～中世	スギ	920166- 94
	140	99	容器	皿	古代～中世	ヒノキ？	920166- 45
	141	100	部材	不明	古代～中世	トチノキ	920166- 252
	142	101	部材	不明	古代～中世	スギ	920166- 143
	143	103	農具	鍬	古代～中世	クヌギ節	920166- 77
	144	104	祭祀具	馬形	古代～中世	スギ	920166- 134
	145	105	建築部材	扉材	古墳時代	スギ	920166- 575
	146	106	建築部材	扉材	古墳時代	スギ	920166- 581
	147	107	部材	不明	弥生～古墳	スギ	920166- 573
	148	108	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 83
	149	109	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 569
	150	110	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 129
	151	331	建築部材	扉材	古墳時代	スギ	920166- 576
	152	332	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 579
	153	333	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 574
	154	334	部材	不明	古墳時代	スギ	920166- 578
	155	×	建築部材	扉材	古墳時代	スギ	920166- 577
入佐川３区	156	111	容器	漆椀	中世	トチノキ	940184- 4
	157	112	木簡	卒塔婆	古代	スギ	940184- 210
	158	113	容器	箱形容器	古代	スギ	940184- 19
	159	114	農具	鎌柄	古代	スギ	940184- 24
	160	115	部材	不明	古代	スギ	940184- 52
	161	116	木簡	絵画木簡	古代	スギ	940184- 211
	162	117	工具	斧柄	中世～古代	スギ	940184- M002
	163	118	農具	田下駄	中世～古代	スギ	940184- 33
	164	119	祭祀具	斎串	中世～古代	スギ	940184- 31
	165	120	建築部材	梯子	中世～古代	スギ	940184- 53
	166	121	農具	田下駄	古代	スギ	940184- 68
	167	122	祭祀具	人形	古代	スギ	940184- 67
	168	123	祭祀具	人形	古墳時代～古代	スギ	940184- 118
	169	124	祭祀具	鏃形	古墳時代～古代	スギ	940184- 49
	170	125	祭祀具	馬形	古墳時代～古代	スギ	940184- 47
	171	126	容器	皿	古墳時代～古代	ヒノキ	940184- 45
	172	127	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- 55
	173	128	雑具	腰掛け	古墳時代～古代	スギ	940184- M007
	174	129	祭祀具	人形	古墳時代～古代	スギ	940184- 120
	175	130	祭祀具	斎串	古墳時代～古代	スギ	940184- 138
	176	131	祭祀具	舟形	古墳時代～古代	スギ	940184- 69
	177	132	祭祀具	刀形	古墳時代～古代	スギ	940184- 139
	178	133	工具	木槌	古墳時代～古代	スギ	940184- 148
	179	134	工具	木槌	古墳時代～古代	スギ	940184- 113
	180	135	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- M005
	181	136	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- 97
	182	137	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- 116
	183	138	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- 129
	184	139	農具	鍬	古墳時代～古代	アカガシ亜属	940184- 72
	185	140	農具	鍬	古墳時代～古代	クヌギ節	940184- 77
	186	141	容器	栓	古墳時代～古代	スギ	940184- 124
	187	142	紡織具	紡錘車	古墳時代～古代	スギ	940184- 110
	188	143	紡織具	糸巻き	古墳時代～古代	ヒノキ	940184- 208
	189	144	農具	田下駄	古墳時代～古代	スギ	940184- 84

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川３区	190	145	容器	柄杓	古墳時代～古代	スギ	940184- M009
	191	146	容器	槽	古墳時代～古代	スギ	940184- 86
	192	147	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 142
	193	148	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 136
	194	149	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 144
	195	150	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 143
	196	151	農具	田下駄	古代	スギ	940184- 154
	197	152	農具	鍬	弥生～古墳時代	アカガシ亜属	940184- 176
	198	153	農具	鍬	弥生～古墳時代	アカガシ亜属	940184- 177
	199	154	農具	泥除け	弥生～古墳時代	アカガシ亜属	940184- 178
	200	155	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 181
	201	156	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 194
	202	157	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	940184- 175
	203	158	祭祀具	斎串	弥生～古墳時代	スギ	940184- 163
	204	159	紡織具	紡錘車	弥生～古墳時代	スギ	940184- 198
	205	160	漁猟具	アカ取り	弥生～古墳時代	スギ	940184- 189
	206	161	雑具	火鑽板	弥生～古墳時代	スギ	940184- 204
	207	162	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- 203
	208	163	武具	刀装具（把頭）	古墳時代	カエデ属	940184- 209
	209	164	祭祀具	盾形？	弥生～古墳時代	スギ	940184- 206
	210	165	工具	木槌	弥生～古墳時代	スギ	940184- 202
	211	166	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- 190
	212	167	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- 155
	213	168	用途不明品	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M035
	214	169	部材	不明（本体）	弥生～古墳時代	スギ	940184- M010
	215			不明（差し込み）		スギ	
	216	170	用途不明品	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M036
	217	171	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M023
	218	172	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M037
	219	173	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M015
	220	174	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- M032
	221	175	建築部材	蹴放し、楣	弥生～古墳時代	スギ	940184- M041
	222	176	漁猟具	網枠	弥生～古墳時代	スギ	940184- L026
	223	177	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L009
	224	178	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L040
	225	179	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L076
	226	180	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L018
	227	181	運搬具	天秤棒	弥生～古墳時代	スギ	940184- L067
	228	182	部材	不明	古墳時代～古代	スギ	940184- L063
	229	183	部材	不明	古墳時代～古代	スギ	940184- L022
	230	184	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L051
	231	185	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L010
	232	186	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L019
	233	187	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L066
	234	335	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L081
	235	336	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L062
	236	337	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L015
	237	339	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L079
	238	340	部材	不明	弥生～古墳時代	スギ	940184- L072
入佐川４区	239	188	祭祀具	馬形	古代？	スギ	950122- 197
	240	189	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 198
	241	190	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 188
	242	191	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 156
	243	192	部材	不明	古代？	スギ	950122- 196
	244	193	容器	槽	古代？	スギ	950122- M22
	245	194	木簡	木簡	古代？	ヒノキ	950122- 162
	246	195	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 223
	247	196	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 239
	248	197	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- M33
	249	198	服飾具	下駄	古代？	スギ	950122- 218
	250	199	部材	梯子？（本体）	古代？	スギ	950122- M34
	251			梯子？（差し込み）		スギ	
	252	200	部材	不明（本体）	古代？	スギ	950122- M29

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川４区	253	200	部材	不明（差し込み）	古代？	スギ	950122- M29
	254	201	容器	皿	古代？	ヒノキ	950122- 286
	255	202	用途不明品	不明	古代？	スギ	950122- 216
	256	203	用途不明品	不明（栓？）	古代？	スギ	950122- 260
	257	204	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 311
	258	205	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 395
	259	206	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 397
	260	207	容器	漆椀	中世	ブナ	950122- 396
	261	208	工具	木槌	弥生～古墳時代	ヒノキ	950122- 293
	262	209	農具	鍬	弥生～古墳時代	カエデ属	950122- 308
	263	210	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	950122- 304
	264	211	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	950122- 283
	265	212	漁猟具	アカ取り	弥生～古墳時代	スギ	950122- 288
	266	213	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	950122- 292
	267	214	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 301
	268	215	容器	曲物	古代？	ヒノキ	950122- 302
	269	216	農具	田下駄？	古代？	スギ	950122- 300
	270	217	農具	田下駄？	古代？	スギ	950122- 282
	271	218	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 4
	272	219	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 77
	273	220	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 78
	274	221	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 61
	275	222	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 3
	276	223	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 100
	277	224	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 89
	278	225	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 79
	279	226	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 90
	280	227	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 83
	281	228	農具	田下駄	古代？	スギ	950122- 2
	282	229	部材	不明	古代？	スギ	950122- 88
	283	230	容器	合子脚	古代？	スギ	950122- 84
	284	231	雑具	腰掛け	古代？	ヒノキ？	950122- 14
	285	232	容器	槽	古代？	ヒノキ	950122- 73
	286	233	部材	不明	古代？	スギ	950122- 66
	287	234	部材	不明	古代？	スギ	950122- 67
	288	235	部材	不明	古代？	ヒノキ	950122- M1
	289	236	部材	不明	古代？	スギ	950122- M18
	290	237	祭祀具	馬形	古代？	スギ	950122- 21
	291	238	祭祀具	馬形	古代？	スギ	950122- 33
	292	239	祭祀具	斎串	古代？	スギ	950122- 25
	293	240	祭祀具	斎串	古代？	スギ	950122- 24
	294	241	服飾具	櫛	古代？	ヒサカキ	950122- 166
	295	242	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 165
	296	243	食事具	箸	古代？	スギ	950122- 31.1
	297	244	食事具	箸	古代？	スギ	950122- 31.2
	298	245	用途不明品	不明	古代？	スギ	950122- 63
	299	246	用途不明品	箱？（本体）	古代？	ヒノキ	950122- 39
	300			箱？（木釘）		ヒノキ？	
	301	247	用途不明品	不明	古代？	ヒノキ	950122- 8
	302	248	用途不明品	不明	古代？	スギ	950122- 32
	303	249	用途不明品	不明	古代？	クリ	950122- 30
	304	250	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	950122- 108
	305	251	農具	田下駄	弥生～古墳時代	スギ	950122- 109
	306	252	農具	穂摘具	弥生～古墳時代	ヤマグワ	950122- 106
	307	253	建築部材	梯子	弥生～古墳時代	スギ	950122- M12
	308	254	農具	鍬	弥生～古墳時代	アカガシ亜属	950122- 117
	309	255	部材	不明	弥生～古墳時代	ヒノキ	950122- M7
	310	256	用途不明品	不明	中世	ヒノキ	950122- 160
	311	257	用途不明品	台座脚？	中世	ヒノキ	950122- 135
	312	258	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 172
	313	259	容器	曲物	中世	スギ	950122- 142
	314	260	容器	皿	中世	トチノキ	950122- 131
	315	261	紡織具	糸巻き	中世	ヒノキ	950122- 317

調査地点	資料通し番号	報告番号	種　別	器　種	時　代	樹種名	登録番号
入佐川4区	316	262	用途不明品	不明	中世	スギ	950122- 143
	317	263	工具	錐	中世	ニ葉マツ	950122- 120
	318	264	服飾具	下駄（本体）	中世	ホオノキ	950122- 321
	319			下駄（歯）		ホオノキ	
	320	265	服飾具	下駄	中世	スギ	950122- 314
	321	266	服飾具	下駄	中世	ホオノキ	950122- 118
	322	267	服飾具	下駄	中世	ホオノキ	950122- 97
	323	268	容器	漆椀	中世	クリ	950122- 354
	324	269	容器	漆椀	中世	クリ	950122- 169
	325	270	容器	桶	中世	ニ葉マツ	950122- 122
	326	271	木簡	木簡	中世	スギ	950122- 217
	327	272	木簡	木簡	中世	スギ	950122- 157
	328	273	木簡	荷札木簡	中世	ヒノキ	950122- 159
	329	274	祭祀具	絵馬	中世	ニ葉マツ	950122- 161
	330	275	容器	曲物底板	中世	スギ	950122- 150
	331	276	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 177
	332	277	容器	漆椀	中世	クリ	950122- 170
	333	278	容器	漆椀	中世	クリ	950122- 173
	334	279	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 174
	335	280	容器	槽	中世	クリ	950122- 141
	336	281	容器	桶	中世	スギ	950122- 137
	337	282	祭祀具	羽子板	中世	スギ	950122- 419
	338	283	木簡	木簡	中世	ヒノキ	950122- 398
	339	284	木簡	木簡	中世	モミ	950122- 400
	340	285	木簡	付札	中世	スギ	950122- 408
	341	286	服飾具	櫛	中世	イスノキ	950122- 394
	342	287	服飾具	下駄	中世	ホオノキ	950122- 343
	343	288	服飾具	下駄	中世	オニグルミ	950122- 373
	344	289	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 337
	345	290	容器	漆椀	中世	トチノキ	950122- 391
	346	291	容器	漆椀	中世	ヒサカキ	950122- 392
	347	292	容器	柄杓（側板）	中世	ヒノキ	950122- 405
	348			柄杓（柄）		ヒノキ	
	349	293	容器	曲物	中世	スギ	950122- 347
	350	294	容器	曲物	中世	ヒノキ	950122- 424
	351	295	容器	曲物	中世	ヒノキ	950122- 384
	352	296	容器	曲物	中世	スギ	950122- 423
	353	297	容器	曲物	中世	モミ	950122- 420
	354	298	容器	桶	中世	ヒノキ	950122- 431
	355	299	容器	桶	中世	ヒノキ	950122- 417
	356	300	用途不明品	不明（本体）	中世	スギ	950122- 380
	357			不明（差し込み）		スギ	
	358	301	用途不明品	不明	中世	スギ	950122- 385
	359	302	食事具	切匙	中世	スギ	950122- 407
	360	303	食事具	切匙	中世	スギ	950122- 432
	361	304	用途不明品	不明	中世	ヒノキ	950122- 370
	362	305	容器	漆椀	中世	クリ	950122- 329
	363	306	容器	曲物	中世	ヒノキ	950122- 332
	364	341	用途不明品	不明	中世	スギ？	950122- 29
	365	342	容器	柄杓（柄）	中世	ヒノキ	950122- M20
	366			柄杓（側板）		ヒノキ	950122- 105
	367			柄杓（底板）		ヒノキ？	
	368			柄杓（木釘）		ヒノキ？	

表２　樹種別器種一覧表

樹種	点数	種別	点数	器種	点数	時代								
						弥生～古墳時代	古墳	古墳～古代	古代	古代～中世	中世	中世～近世	近世	不明
スギ	234	部材	61	紐かけのある棒状材	3				1					2
				梯子？	2									2
				方形枠	2		2							
				柄	1						1			
				箱？	1								1	
				把手？	1									1
				不明	51	23	6	2	5	2	1		1	11
		農具	56	田下駄	52	12		7	8	2				23
				田下駄？	2									2
				鎌柄	1				1					
				鋤先	1								1	
		祭祀具	45	斎串	18	1		2	3	5	2			5
				人形	9			2	1	5				1
				馬形	8			1		3			1	3
				舟形	3			1	1		1			
				刀形	2			1	1					
				鏃形	2			1		1				
				盾形	1	1								
				鳥形	1								1	
				羽子板	1						1			
		容器	16	曲物	4						4			
				桶	3						1		1	1
				槽	2			1						1
				蓋	1									1
				蓋（把手）	1									1
				合子脚	1									1
				底板	1				1					
				栓	1			1						
				箱形容器	1				1					
				柄杓	1			1						
		建築部材	15	橋脚	8									8
				扉材	4		4							
				梯子	2	1				1				
				蹴放し、楣	1	1								
		木簡	8	付札	4					1	2		1	
				木簡	2						2			
				卒塔婆	1				1					
				絵画木簡	1				1					
		雑具	5	腰掛け	1			1						
				椅子脚（楔）	1									1
				椅子脚（本体）	1									1
				机脚	1									1
				火鑽板	1	1								
		食事具	4	箸	2									2
				切匙	2						2			
		工具	4	木槌	3	1		2						
				斧柄	1					1				
		漁猟具	3	アカ取り	2	2								
				網枠	1	1								
		紡織具	2	紡錘車	2	1		1						
		服飾具	2	下駄	2						1			1
		遊戯具	1	琴柱	1				1					
		運搬具	1	天秤棒	1	1								
		用途不明品	11	不明	11	2					4			5

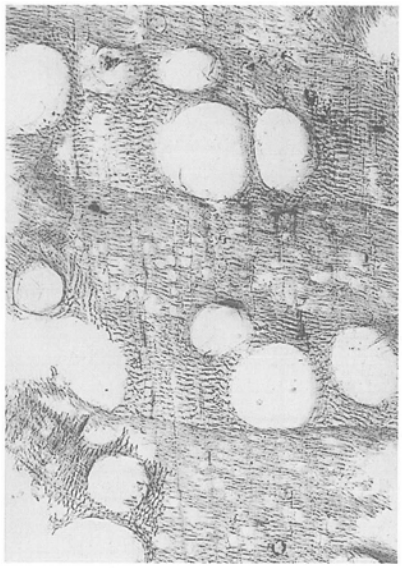
						時　代								
樹種	点数	種別	点数	器種	点数	弥生～古墳時代	古墳	古墳～古代	古代	古代～中世	中世	中世～近世	近世	不明
ヒノキ	39	容器	15	曲物	4						3			1
				桶	3						2		1	
				皿	3			1			1			1
				柄杓（柄）	2						2			
				柄杓（側板）	2						2			
				槽	1									1
		建築部材	7	橋脚	7									7
		部材	4	桟？	1								1	
				底部？	1						1			
				不明	2	1								1
		木簡	3	木簡	2						1			1
				荷札	1						1			
		紡織具	2	糸巻き	2			1			1			
		祭祀具	1	鳥形	1						1			
		工具	1	木槌	1	1								
		服飾具	1	下駄	1								1	
		用途不明品	5	不明	3						2			1
				箱？	1									1
				台座脚？	1						1			
クリ	23	建築部材	15	橋脚	15									15
		容器	7	漆椀	6						5		1	
				槽	1						1			
		用途不明品	1	不明	1									1
トチノキ	15	容器	14	漆椀	13						9		1	3
				皿	1						1			
		部材	1	不明	1					1				
ホオノキ	8	服飾具	8	下駄	6						4	1		1
				下駄（歯）	2						1	1		
ブナ	8	容器	8	漆椀	8						1		5	2
アカガシ亜属	6	農具	5	鍬	4	3		1						
				泥除け	1	1								
		建築部材	1	橋脚	1									1
二葉マツ	3	工具	1	錐	1						1			
		祭祀具	1	絵馬	1						1			
		容器	1	桶	1						1			
モミ	3	容器	1	曲物	1						1			
		木簡	1	木簡	1						1			
		部材	1	不明	1				1					
ヒサカキ	3	建築部材	1	橋脚	1									1
		服飾具	1	櫛	1									1
		容器	1	漆椀	1						1			
センダン	3	服飾具	3	下駄	3								3	
カエデ属	2	武具	1	把頭	1		1							
		農具	1	鍬	1	1								
クヌギ節	2	農具	2	鍬	2			1		1				
イスノキ	1	服飾具	1	櫛	1						1			
オニグルミ	1	服飾具	1	下駄	1						1			
サクラ属	1	容器	1	漆椀	1								1	
サルナシ	1	農具	1	田下駄	1				1					
シイノキ属	1	容器	1	漆椀	1									1
ヤマグワ	1	農具	1	穂摘具	1	1								
ヒノキ？	9	容器	3	皿	1					1				
				柄杓（木釘）	1						1			
				柄杓（底板）	1						1			
		雑具	2	腰掛	1									1
				付け木	1									1
		建築部材	1	橋脚	1									1
		部材	1	箱	1						1			
		服飾具	1	下駄	1						1			
		用途不明品	1	箱？（木釘）	1									1
スギ？	3	部材	2	不明	2									2
		用途不明品	1	不明	1						1			
ハゼノキ？	1	服飾具	1	下駄（歯）	1								1	

表３　器種別樹種一覧表

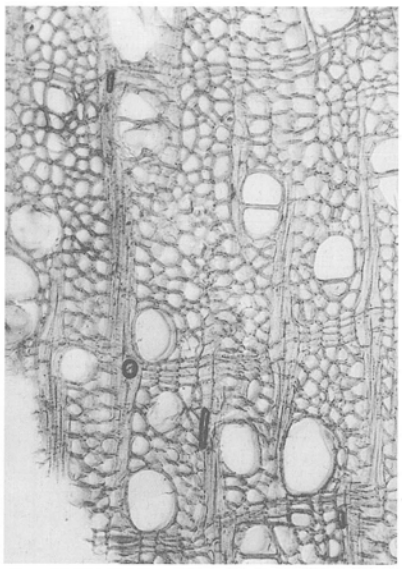
種別	点数	器種	点数	樹種	点数	時代								
						弥生～古墳時代	古墳	古墳～古代	古代	古代～中世	中世	中世～近世	近世	不明
部材	110	橋脚	33	クリ	15									15
				スギ	8									8
				ヒノキ	7									7
				アカガシ亜属	1									1
				ヒサカキ	1									1
				ヒノキ？	1									1
		扉材	4	スギ	4		4							
		紐かけのある棒状材	3	スギ	3				1					2
		梯子	2	スギ	2	1				1				
		方形枠	2	スギ	2		2							
		蹴放し、楣	1	スギ	1	1								
		柄	1	スギ	1						1			
		箱	1	ヒノキ？	1						1			
		梯子？	2	スギ	2									2
		箱？	1	スギ	1								1	
		桟？	1	ヒノキ	1								1	
		把手？	1	スギ	1									1
		底板？	1	ヒノキ	1						1			
		不明	57	スギ	51	23	6	2	5	2	1		1	11
				ヒノキ	2	1								1
				モミ	1				1					
				トチノキ	1					1				
				スギ？	2									2
容器	68	漆椀	30	トチノキ	13						9		1	3
				ブナ	8						1		5	2
				クリ	6						5		1	
				サクラ属	1								1	
				シイノキ属	1									1
				ヒサカキ	1						1			
		曲物	9	スギ	4						4			
				ヒノキ	4						3			1
				モミ	1						1			
		桶	7	スギ	3						1		1	1
				ヒノキ	3						2		1	
				ニ葉マツ	1						1			
		皿	5	ヒノキ	3			1			1			1
				トチノキ	1						1			
				ヒノキ？	1					1				
		槽	4	スギ	2			1						1
				ヒノキ	1									1
				クリ	1						1			
		柄杓（柄）	2	ヒノキ	2						2			
		柄杓（側板）	2	ヒノキ	2						2			
		柄杓（底板）	1	ヒノキ？	1						1			
		柄杓（木釘）	1	ヒノキ？	1						1			
		柄杓	1	スギ	1			1						
		蓋	1	スギ	1									1
		蓋（把手）	1	スギ	1									1
		合子脚	1	スギ	1									1
		栓	1	スギ	1			1						
		箱形容器	1	スギ	1				1					
		底板	1	スギ	1				1					
農具	66	田下駄	53	スギ	52	12		7	8	2				23
				サルナシ	1				1					
		鍬	7	アカガシ亜属	4	3		1						
				クヌギ節	2			1		1				
				カエデ属	1	1								
		泥除け	1	アカガシ亜属	1	1								
		鋤先	1	スギ	1								1	
		鎌柄	1	スギ	1				1					
		穂摘具	1	ヤマグワ	1	1								
		田下駄？	2	スギ	2									2

						時代								
種別	点数	器種	点数	樹種	点数	弥生～古墳時代	古墳	古墳～古代	古代	古代～中世	中世	中世～近世	近世	不明
祭祀具	47	斎串	18	スギ	18	1		2	3	5	2			5
		人形	9	スギ	9			2	1	5				1
		馬形	8	スギ	8			1		3			1	3
		舟形	3	スギ	3			1	1		1			
		鳥形	2	スギ	1								1	
				ヒノキ	1						1			
		刀形	2	スギ	2			1	1					
		鏃形	2	スギ	2			1		1				
		盾形	1	スギ	1	1								
		絵馬	1	二葉マツ	1						1			
		羽子板	1	スギ	1						1			
服飾具	19	下駄	14	ホオノキ	6						4	1		1
				センダン	3								3	
				スギ	2						1			1
				オニグルミ	1						1			
				ヒノキ	1								1	
				ヒノキ？	1						1			
		下駄(歯)	3	ホオノキ	2						1	1		
				ハゼノキ？	1								1	
		櫛	2	イスノキ	1						1			
				ヒサカキ	1									1
木簡	12	木簡	5	スギ	2						2			
				ヒノキ	2						1			1
				モミ	1						1			
		付札	4	スギ	4					1	2		1	
		絵画木簡	1	スギ	1				1					
		卒塔婆	1	スギ	1				1					
		荷札	1	ヒノキ	1						1			
雑具	7	腰掛	2	ヒノキ？	1									1
				スギ	1			1						
		椅子脚(本体)	1	スギ	1									1
		椅子脚(楔)	1	スギ	1									1
		机脚	1	スギ	1									1
		火鑽板	1	スギ	1	1								
		付け木	1	ヒノキ？	1									1
工具	6	木槌	4	スギ	3	1		2						
				ヒノキ	1	1								
		錐	1	二葉マツ	1						1			
		斧柄	1	スギ	1					1				
紡織具	4	紡錘車	2	スギ	2	1		1						
		糸巻き	2	ヒノキ	2			1			1			
食事具	4	箸	2	スギ	2									2
		切匙	2	スギ	2						2			
漁猟具	3	網枠	1	スギ	1	1								
		アカ取り	2	スギ	2	2								
運搬具	1	天秤棒	1	スギ	1	1								
遊戯具	1	琴柱	1	スギ	1				1					
武具	1	刀装具(柄頭)	1	カエデ属	1		1							
用途不明品	19	不明	16	スギ	11	2					4			5
				ヒノキ	3						2			1
				スギ？	1						1			
				クリ	1									1
		台座脚？	1	ヒノキ	1						1			
		箱？（本体）	1	ヒノキ	1									1
		箱？（木釘）	1	ヒノキ？	1									1

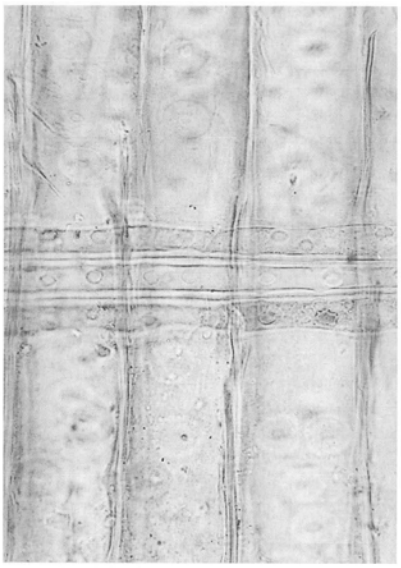
1　漆椀（２）　トチノキ　×60



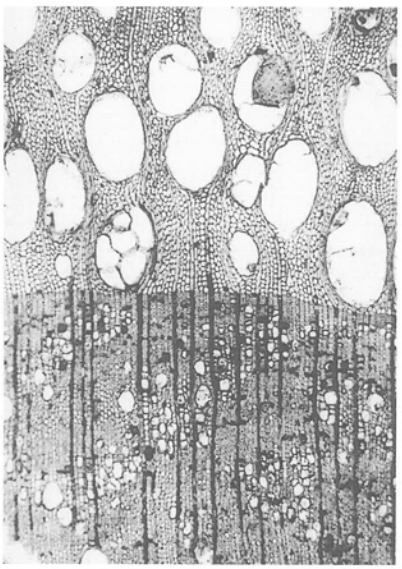
2　漆椀（３）　シイノキ属　×30



3　下駄（７）　ホオノキ　×60

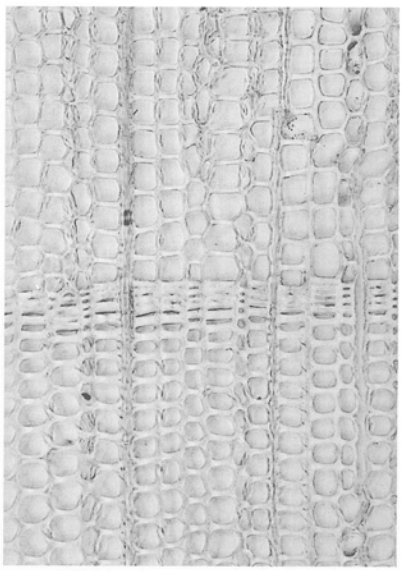


4　部材(12)　スギ　×250

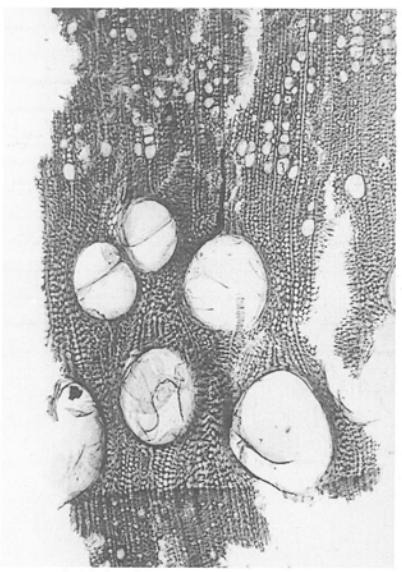


5　橋脚(30)　クリ　×60

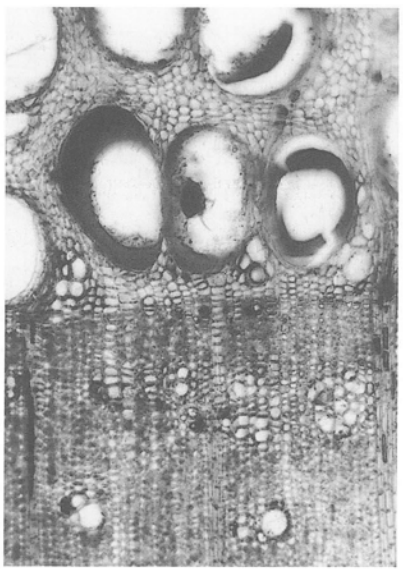
6　橋脚(44)　クリ　×60



7　橋脚(47)　ヒノキ　×120

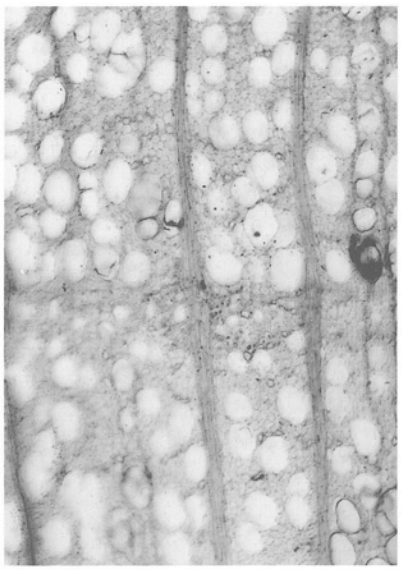


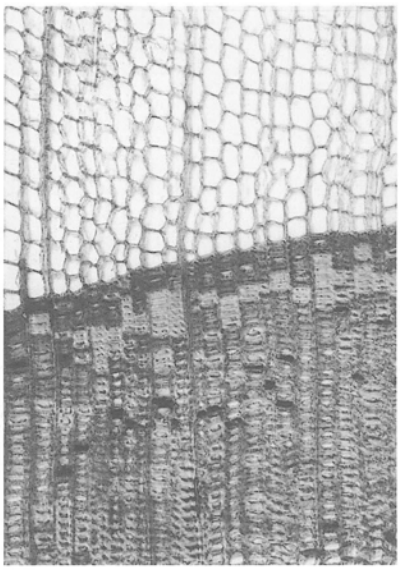
8　漆椀(54)　クリ　×30

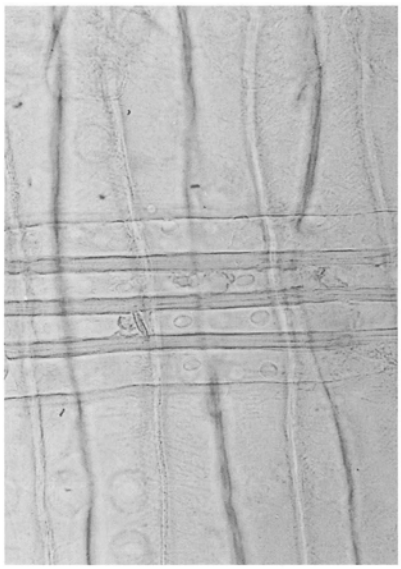


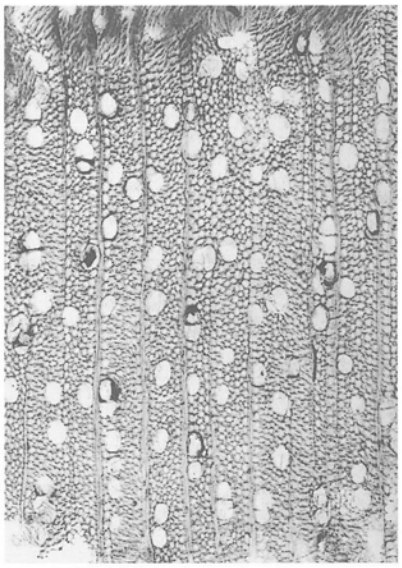
9　下駄(56)　センダン　×60

写真１　入佐川遺跡出土木製品の顕微鏡写真(1)

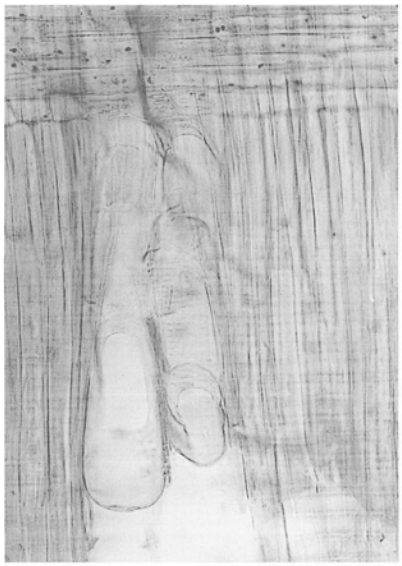

10　漆椀(59)　ブナ　×60

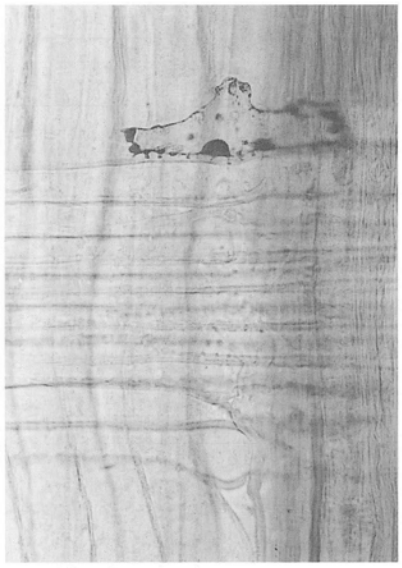

11　田下駄(66)　スギ　×60

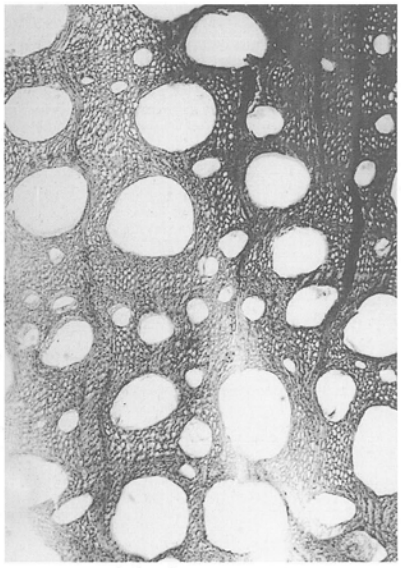

12　桶(80)　スギ　×250


13　下駄(歯)(85)ハゼノキ？　×30

14　漆椀(87)　ブナ　×60


15　下駄(歯)(90)ホオノキ　×120


16　槽の部品(106)　モミ　×250


17　田下駄(115)　サルナシ　×30

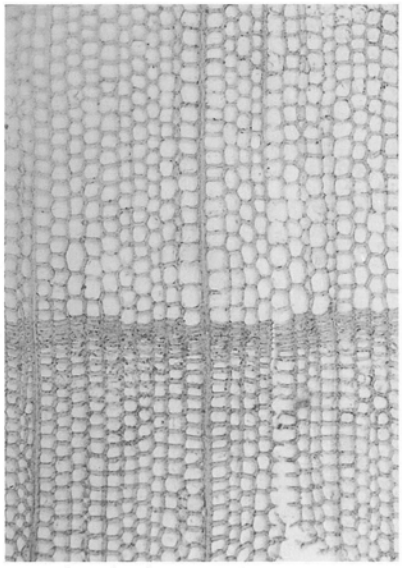
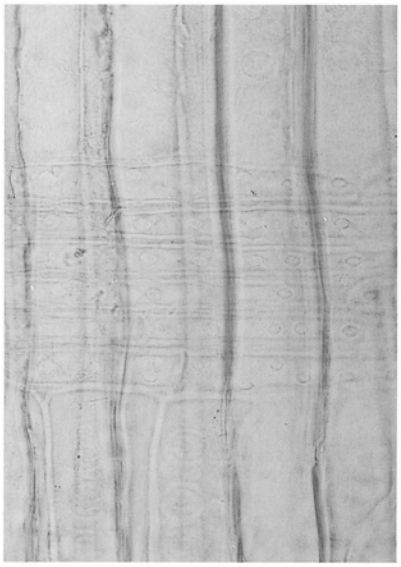
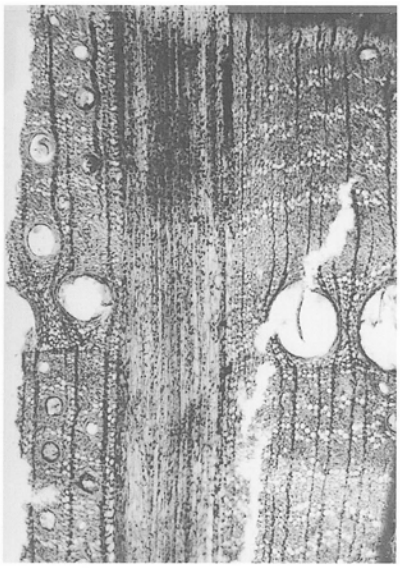

18　木皿(121)　ヒノキ　×60

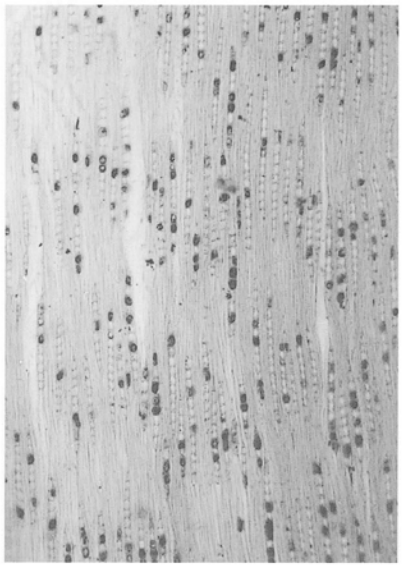
写真２　入佐川遺跡出土木製品の顕微鏡写真(2)



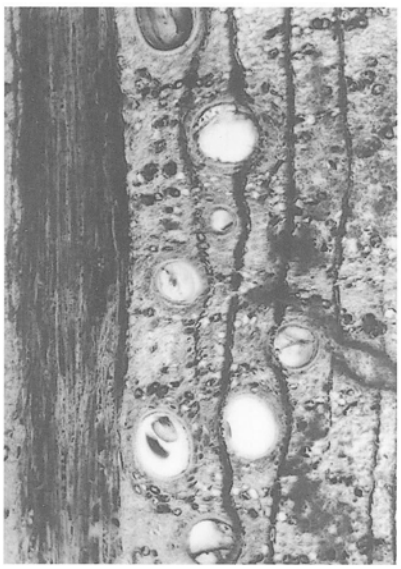
19　人形(128)　スギ　×250



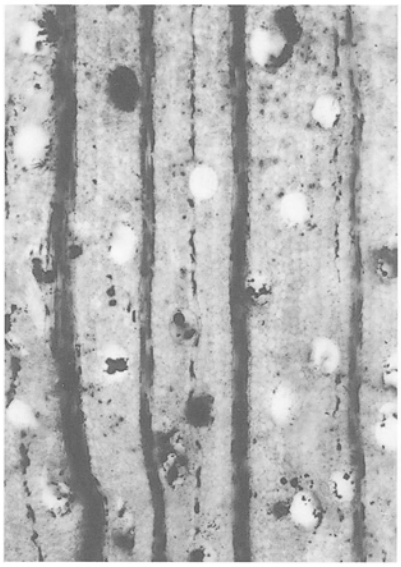
20　鍬(143)　クヌギ節　×30



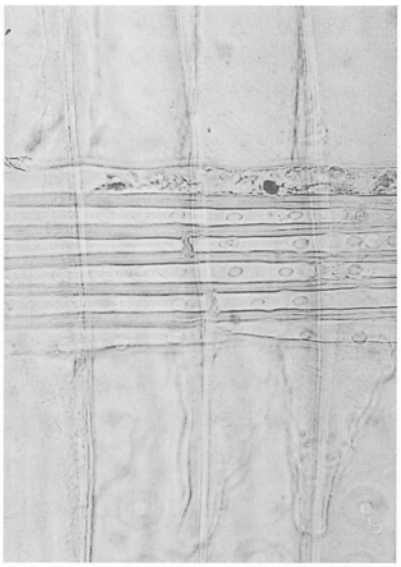
21　漆椀(156)　トチノキ　×60



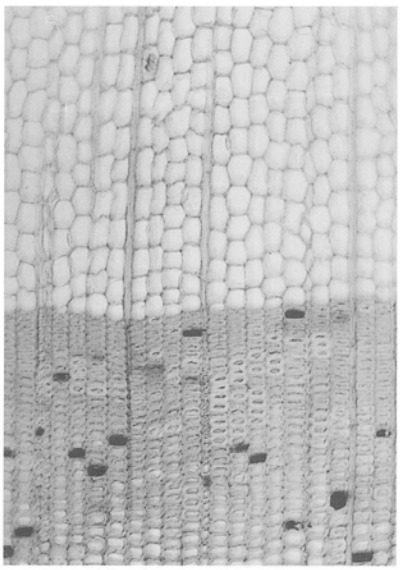
22　鍬(184)　アカガシ亜属　×60



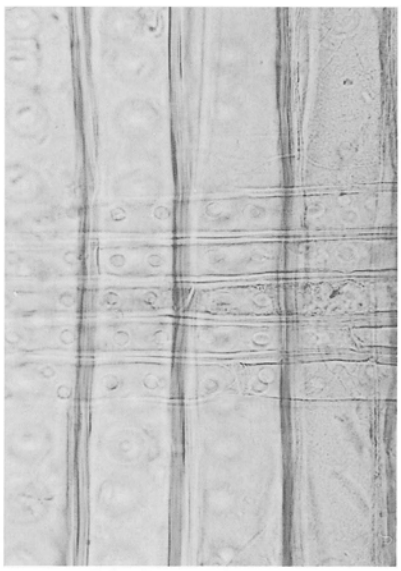
23　把頭(208)　カエデ属



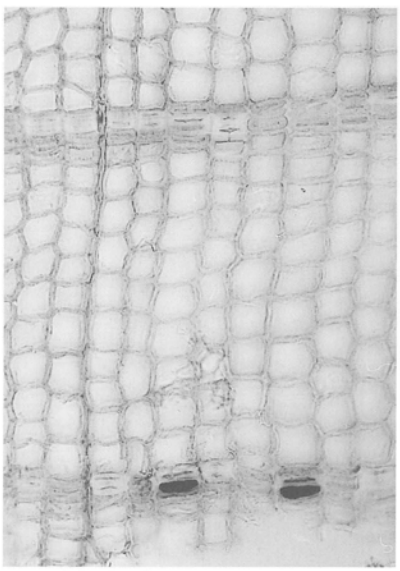
24　不明(211)　スギ　×250



25　不明(223)　スギ　×60

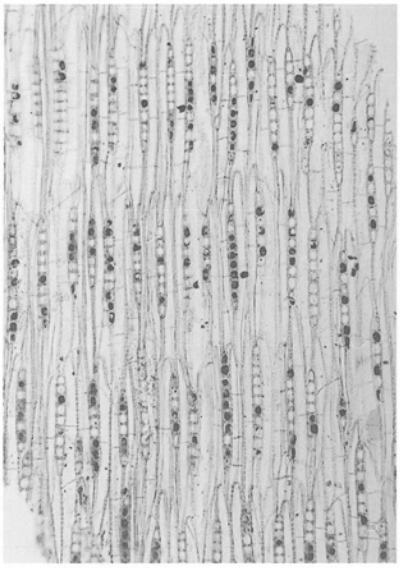


26　不明(232)　スギ　×250

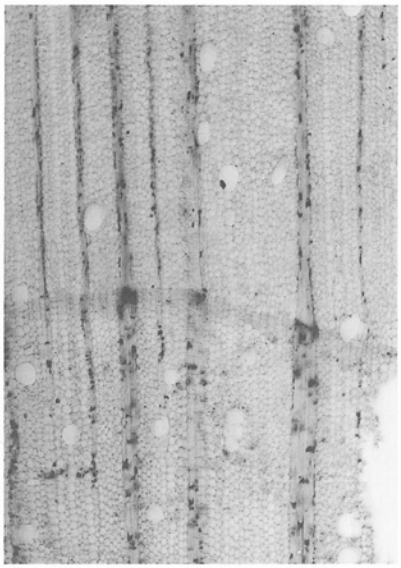


27　木簡(245)　ヒノキ　×120

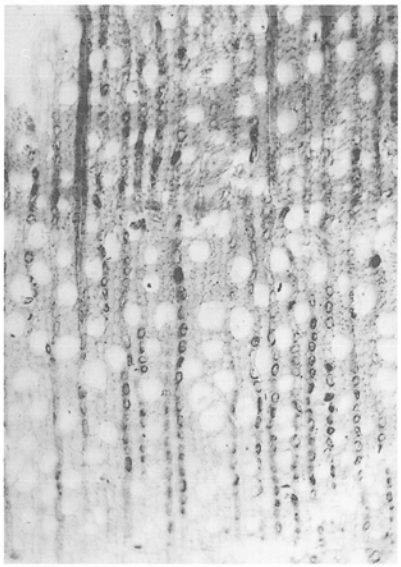
写真３　入佐川遺跡出土木製品の顕微鏡写真(3)



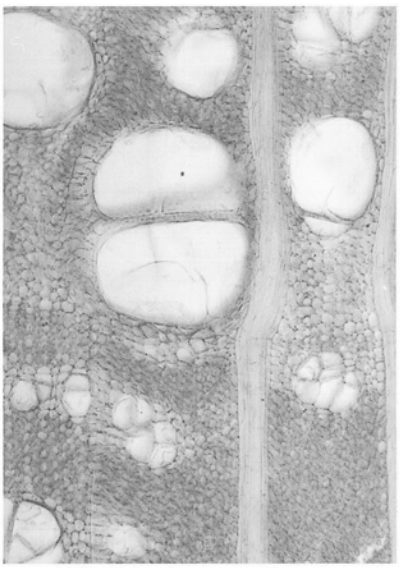
28　漆椀(259)　トチノキ　×60



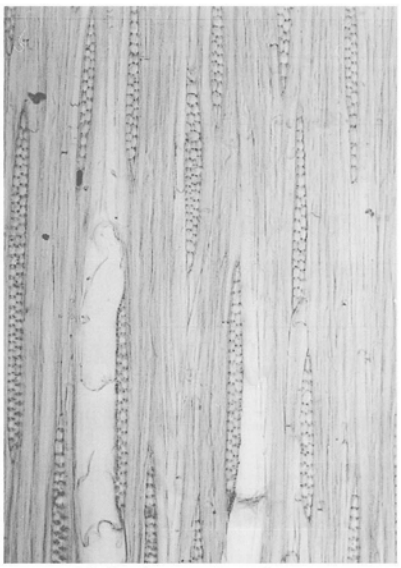
29　鍬(262)　カエデ属　×60



30　櫛(294)　ヒサカキ　×60

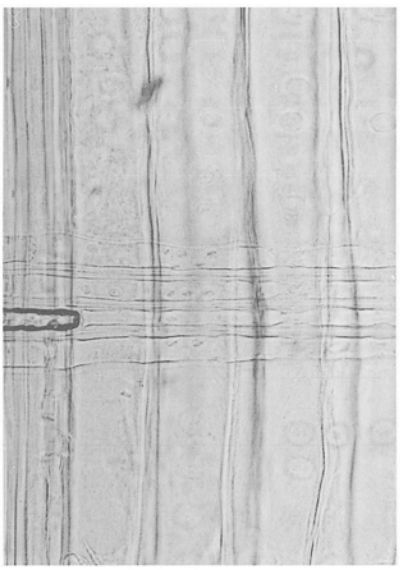


31　穂摘具(306)　ヤマグワ　×60

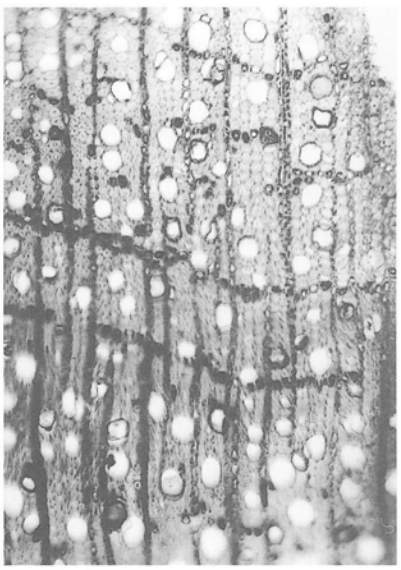


32　下駄(322)　ホオノキ　×60

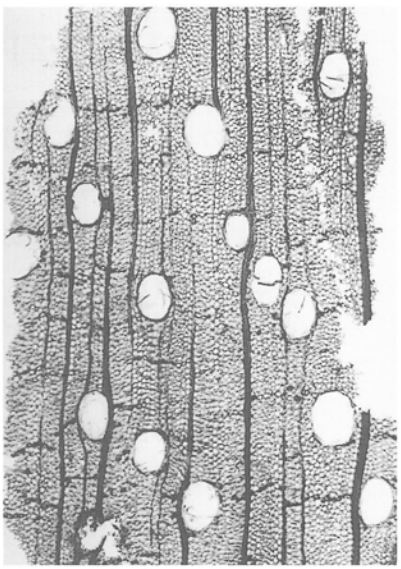
33　桶(325)　二葉マツ



34　荷札木簡(328)　ヒノキ　×250



35　櫛(341)　イスノキ　×60



36　下駄(343)　オニグルミ　×120

写真4　入佐川遺跡出土木製品の顕微鏡写真(4)

第６章　まとめ

第１節　入佐川１区

入佐川１区は、北側のＡ地点と南側のＢ地点に分けて調査を実施した。

【Ａ地点】

Ａ地点は遺構面を１面検出した。調査区南半部を東西方向に貫く旧河道と、そこに架けられた橋の遺構を検出した。旧河道内から出土した遺物には、古墳時代の土師器と10世紀頃の木製人形が存在する。遺跡周辺の平坦な地形から判断して、旧河道が古墳時代から律令期までの期間を通じて、川筋を変えることなく存続していたとは考え難い。したがってＡ地点で検出した旧河道は、律令期前後に限って存在したものである可能性が高いと考える。よって橋脚遺構の時期も10世紀と判断した。

旧河道の上層で、旧河道と同じく東西方向に掘られた溝（SD02）を検出した。また、旧河道やSD02と垂直方向の南北に延びる水路（SD01）を検出した。

SD02は調査区北端部で堰と考えられる遺構と、護岸施設と考えられる矢板列を検出した。SD01では調査区南端部において、護岸施設と考えられる「木組畦畔」を検出した。この木組畦畔は一度修復された痕跡が認められた。

遺構の時期については、SD02は埋土のシルト内で出土した土師器の皿から10世紀以降、SD01は出土した黒色土器等から10世紀前後の年代が考えられる。

【Ｂ地点】

Ｂ地点でも遺構面を１面のみ検出した。この遺構面で検出した主な遺構は旧河道で、調査区東端部で南北方向に延びている状況を検出した。また調査区南西隅では大規模な矢板列を検出した(図版12)。この矢板列は旧河道とほぼ垂直方向に設置されていることから、上記の旧河道の堰であると考えられる。さらにこれらの遺構の他、遺構面上で多数の杭痕を検出した。

第２節　入佐川２区

Ａ～Ｆの６つの地点に分割して調査を実施、洪水などの影響から良い遺存状態を保つ遺構面は少なかった。特に現在の袴狭川と入佐川が交流する地点に近いＡ地点は、掘削範囲の全域が旧河道の中央と洪水砂の中央にあたり、安定した遺構面は検出できなかった。他の５地点については、遺構を検出することができた。

前項までに触れた各地点ごとの知見を略述し、時期別に整理して、まとめとしたい。

①近　世

調査区内における旧河道の影響が縮小し、地形が安定を見せる。下流のＢ地点第１遺構面では、溝とシガラミからなる集水遺構を検出した。旧河道沿いの土坑（SK101）から、３本の溝（SD101･102･104）がのび、SD104が近接する箇所には、水量を調整するためのシガラミ101が設けられている。出土遺物から近世が中心時期と考えられる。Ｃ地点では、旧河道が埋没して形成される第１遺構面にお

いて、近世の溝を1条（SD101）検出した。埋土に陶磁器を含むことからみて、18世紀以降の遺構であろう。

②中　世

旧河道は各地で埋没が進み、D地点では水田化、F地点では新たな方形区画を持つ地割が設けられる。検出範囲こそ狭いものの、ほぼ正方位を指向する高い企画性が注目される。F地点では西端で旧河道が埋没して後に溝SD102が設けられるが、方形区画とは方向を異にする。SD102とSD104の出土遺物は、大きな時間幅を持たないことや、SD102は旧河道と似た方向を持つことから、規模を縮小した旧河道の流れとも考えられ、方形区画の設置に伴って埋めたてられた可能性を指摘しておく。

この他にB地点第2遺構面で土坑（SK201）・溝（SD203）、D地点第1遺構面で土坑（SK101・102・103）を検出した。

③奈良～平安時代

調査区の東部において、旧河道を検出した。流れの方向は現在の河道に近く、F地点からD→C→B地点を蛇行しながら進む。含まれる遺物は、上流のF地点で多く、下流にむかって少なくなる。F地点での出土遺物には時期幅があるが、奈良時代後期～平安時代中期が稼働のピークと考える。またF地点では河道にかかる橋脚を検出した。1区A地点検出の橋脚と比較して、簡易な構造である。

河道以外では、B地点の第2遺構面で、皇宋通寶（M5）の出土した溝（SD202）がある。

④古墳時代

調査区のほぼ全域に、遺構が分布する。D地点の第2遺構面では、旧河道の北岸と堤防、溝を検出した。周辺からは土師器が良好な遺存状態の土師器が数多く出土している。土器群は全長50mにわたって帯状につらなり、旧河道の岸部やSD201へも分布する。SD201では堤防上から転落した土器に混じって、石釧の破片（S1）が出土している。堤防上に帯状で土器を配置する状況、個々の遺物が据え置かれたと類推できる高い完形率、焼成前穿孔を施した土器が混じる、転落した土器に混じって石釧が見られる、諸点から、非日常的な意図で配置されたものであろう。特定の性格を特定できる手がかりはないが、祭祀的な性格を持って形成されたと考えておきたい。

出土した土器は、壷・甕・高坏が大半を占める。壷は小型丸底壷の系譜を引く小型品が目立つ。中・大型品では、長頸壷が少量見られるほかに器形のバリエーションが乏しく、直線の口縁を持つ広口壷へ収斂される。調整は全体に粗製で、口縁部は内外ともヨコナデ、体部は外面をハケメ・内面をヘラケズリするものが多い。甕は球形の体部に短い口縁を付すものが大半で、複合口縁をなすものは極少数である。口縁端部は内傾して内面に幅広く突出するものと、内面に丸く肥厚するものが混在する。体部は長胴化の傾向が見られる。口縁部は内外ともヨコナデ、体部は外面をハケメ・内面をヘラケズリするものが多い。調整は口縁～肩部外面と口縁部内面がヨコナデ、体部外面がハケメ・内面がヘラケズリする。外器面に煤が付着するものや、底部中央に摩滅痕の残るものなど、使われたものを含む。高坏は坏部外面の稜線が消失するが、坏体部と底部の屈曲は明瞭である。また脚柱も開きが少なく、円柱状を保つ。極少量であるが大型で加飾の著しい布留系大型高坏が存在する点にも注目したい。以上の特徴から、これらの土器は布留式土器の範疇に含まれ、甕の口縁端部や高坏の形態などに新相の特徴を見出すことができる。須恵器を共伴しないことから、布留式土器新相のなかでも須恵器出現直前の土器群と位置づけておく。

なお隣接するE地点第1遺構面では、先行する古墳時代前期の水田を検出したが、D地点への広が

りは確認できなかった。

下流のＢ地点（第２遺構面）では、旧河道の南岸に設けられた土坑（SK202）に連接する溝（SD202）のなかから、シガラミ３基を検出した。２時期にわたって設けられたと考えられる。上層のシガラミ201・202は板材を溝に直接打ち込んでおり、下層のシガラミ203は網代と杭を組合せて構築する。シガラミ201・202に用いられた部材には、扉壷を有する部材を転用していることから、扉を有する建物の存在を暗示させて興味深い。出土遺物は少ないが須恵器は含まないことから、古墳時代前期の所産であろう。集水に関する遺構が集中することから、調査区の周辺には耕作地が広がっていたのであろう。

⑤弥生時代

当該時期の遺構は、Ｆ地点第２遺構面の溝（SD201・202）だが、出土遺物の状態が悪いため、厳密な時期比定は困難である。これらの遺構面を覆う包含層からは、良好な遺存状態の長頸壷が出土している。

また、Ｂ地点旧河道沿いの微高地を覆う包含層からも、後期と考えられる遺物がいくつか出土している。

第３節　入佐川３区

入佐川３区は小さな地点に分けずに調査し、第１遺構面から第４遺構面の４つの遺構面が検出された。

第１遺構面から第３遺構面では、東西方向の溝（SD101・201・202・301）が最大87ｍにわたって検出された。方向は北から82°～87°西の範囲に収まっており、ほぼ同じ方向であると言える。また、この方向と直交する方向の溝（SD102・203）が検出された。方向は北から０～７°東を向いており、東西方向の溝とほぼ垂直方向に交わる。さらに、第１遺構面で検出された杭列も東西の溝と同じ方向を向いており、これら溝、杭列は条里地割に伴うものであることがわかる。これについては第５節に詳しい。なお、この地割の時期であるが、第３遺構面で検出されたSD302が地割に沿った溝と考えられるSD301に切られていることから、SD302の時期、すなわち奈良時代以降であることがわかる。これは、同じく第３遺構面で検出された杭列の方向が条里地割と大きく異なることからも首肯される。また、確認された条里地割の最終時期はSD101の時期、すなわち出土した美濃の碗（156）が示す16世紀前半までであり、溝の場所は何度も埋没しているにもかかわらず奈良時代以降から16世紀前半までほぼ同じであった。

第４遺構面では竪穴住居址、掘立柱建物、溝、土坑、落ち込みとそれに伴う構造物が検出された。これまで当該期の遺物は多く出土しているが、住居址、建物跡が検出されたのは袴狭遺跡、砂入遺跡を含めてもこの地点が唯一である。

落ち込みには井堰が設置され、水位を上昇させる意図が読みとれる。周囲からは水田に関連する遺構がなく、住居址、掘立柱建物が認められること、さらに落ち込みからは多量の木製品が出土していることから、落ち込みは井堰で水位を保たれた貯木場であった可能性が高い。井堰以外の構造物として板材を環状に打ち込んだ構造物404があり、何らかの木製品を囲んでいた可能性が考えられる。また、SK435内に農具の未製品が置かれたような状況で出土していることからも、貯木場としての可能

性を高めている。この落ち込みから出土した木製品はほとんど製品がなく、大半が板材やみかん割材であり、部材を含めた製品を製作する前の材を保管するためのものであったのだろう。

遺物には木器、土器・陶器、金属器がある。土器は土師器がほとんどで、若干須恵器が混ざるのみである。

第4節　入佐川4区

入佐川4区は、A～D地点に分けて調査を実施した。

【A地点】

遺構面を一面検出し、旧河道と溝5本、杭列、土坑1基を検出した。旧河道は東西方向に延びていることから、現在の入佐川の旧河道であると考えられる。溝は、5本検出したうち、3本が旧河道に並行している（SD101、103、104）。SD101と103はいずれも東西方向に延びることと、南側の肩の周辺に杭列が設置されていることから、同一の溝であると考えられる。出土した須恵器から時期は7世紀前後と考えられる。またSD102からは律令期のものと考えられる木簡が出土している。

【B地点】

中世の遺構はSD101のみである。この遺構は平面で検出することが難しく、調査区西壁の断面で確認した。

第1遺構面で検出した遺構は旧河道のほか、SD101を含めて溝4本と杭列を検出した。遺構からの出土遺物は少ないが、SD102では古墳時代の土師器と古墳時代末期の須恵器が併存している。

【C地点】

遺構面を一面検出し、溝3本を検出した。これらの溝のうちSD101とSD103は北西－南東方向に延びており、SD102は末端が北西－南東方向に延びるが、じきに北東－南西に方向を変える。SD102では木製農具（鍬）が出土し、SD103は田下駄や穂摘具等の木製農具が多量に出土した。これらの木器から、SD102および103の時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

【D地点】

D地点は中世の守護大名、山名氏の居城である此隅山城の麓に立地する。こうした立地条件に影響されたためか、他の調査区とは異なり中世後期の遺構を検出した。

遺構面は4面検出した。

各遺構面における遺構の構成は、第1・第2・第4遺構面では西端から順に堀、堀の東側の土塁、さらに東側の溝という遺構の構成が共通して認められる。これらの遺構のほか、第1遺構面の南東隅には畑の畝の形に整地された「畝状遺構」を検出した。

第3遺構面は、第2遺構面南東隅の整地面の下層を指している。

最上面である第1遺構面で出土した美濃の天目は、16世紀中庸に生産されたと考えられ、最下層の第4遺構面で出土した越前のすり鉢（359）も、生産時期が16世紀代と考えられる。このことから最初に整地された第4遺構面は16世紀の少なくとも前半の内に形成され、その後16世紀中庸から後半にか

けて第１遺構面が整地される間、順に第３・２遺構面が形成されたものと考えられる。すなわち16世紀代のうちに第４遺構面から第１遺構面が順に形成されたものと考えられる。

第１遺構面の出土遺物は、包含層からは土師器と白磁・瓦質土器、木器では錐が出土した。また堀101内では土師器皿と青磁碗・瓦質土器のすり鉢が出土し、木器では糸巻きおよび漆椀、曲物、木皿が出土した。

第２遺構面の出土遺物は、包含層からは土師器皿と白磁・青磁・青花の碗、美濃天目、備前すり鉢、瓦質土器の壺が出土した。木器では木簡３点、絵馬、および漆椀・槽・桶・柄杓などの容器類が出土した。また堀202では完形の美濃天目の他、土師器の皿、備前すり鉢、瓦質土器鉢が出土した。その他の溝では主として土師器小皿が出土している。

第３遺構面の包含層では青花の碗、備前の甕が出土している。木器では下駄が出土した。

第４遺構面では、包含層から土師器皿、灰釉陶器の碗、瓦質土器のすり鉢が出土した。木器では木簡３点と羽子板、櫛、下駄、漆椀、曲物、柄杓が出土した。堀401では灯明皿の他、木器の桶、切匙が出土した。SD401では土師器の皿、瓦質土器すり鉢の他、漆椀が出土した。

入佐川遺跡４区Ｄ地点は宮内堀脇遺跡に隣接している。宮内堀脇遺跡では、此隅山城の城下町と見られる中世後期の遺構・遺物が検出されている。当遺跡４区Ｄ地点でも、城下町に伴う整地面の末端を検出したものと考えられる。宮内堀脇遺跡は、平成13年10月現在、報告書作成作業中である。したがってこの整地面の全容・性格付けに関しては、宮内堀脇遺跡の報告書により明らかにされるものと期待される。

第５節　まとめ

最後に、入佐川遺跡全体の遺構の変遷を以下に示す。ただし、調査面積の割に遺物の出土量が少なく、時期比定が困難な地点、遺構もある。よって、ここでは出土遺物から大きくステージ１からステージ４の４つのステージに分けることとした。

ステージ１（弥生時代後期～古墳時代）

入佐川３区において遺構の集中が認められる。掘立柱建物２棟、竪穴住居１棟のほか、旧河道に設けられた堰をもつ貯木場が検出された。

また、入佐川２区では旧河道とそれに伴う堤防が検出された。堤防上とその周辺からは完形に近い状態の土師器が多数出土している。焼成前の穿孔をもつ土器が含まれ、石釧の破片も含まれていることから祭祀的な要素が認められる。下流側の入佐川２区Ｂ地点では、扉材を転用したシガラミが溝に伴って検出された。

入佐川２区Ｅ地点では水田畦畔が検出されており、全体が検出されてはいないが、比較的小区画の水田であったように思われる。

ステージ２（古代）

入佐川３区から２区Ｆ・Ｄ・Ｃ・Ｂ地点において旧河道が検出された。おおきくは東から西側に向かって流れているが、大きく蛇行している。この河道には入佐川２区Ｆ地点において南北に近い方向で橋脚が検出されている。

また、入佐川1区A地点においても橋脚が南北に近い方向で検出されているが、入佐川B地点で河道の方向が変わっているため、入佐川2区F地点で検出された河道と同じであるかどうかは明らかでない。橋脚の方向についても異なっている。

この河道を切るようにしてほぼ東西方向に直線的に延びる溝が検出された。入佐川3区SD201・202から入佐川2区F地点SD104へと続いているもので、時期は3区SD302・425を切っていることから奈良時代以降、特に黒色土器A類が出土していることから平安時代と考えられる。入佐川3区では、この溝にほぼ直交する方向に溝が検出されており、条里地割に伴う溝である可能性が高い。

当地域では『神床文書』[(1)(2)]の絵図に描かれた条里地割の存在が知られており、今回の調査によってその存在と位置、および成立年代がほぼ確認できたものといえよう。

ステージ3（中世）

下流域を除いてシルト層が安定して堆積しており、条里に伴う溝が前時期に続いて同じ場所で検出された。

また、入佐川4区D地点において整地層、堀、土塁などを検出した。当地は中世の守護大名である山名氏の居城、此隅山城の麓に位置しており、関連が考えられる。また、南側に隣接して宮内堀脇遺跡が調査され、人名墨書土器、木簡、漆椀のほか、兜の鍬形台、茶匙など豊富な遺物が出土している。現在整理作業中であり、今後の成果に期待したい。

ステージ4（近世）

入佐川2区において溝とシガラミからなる集水遺構が検出されているが、他の地区では明確な遺構は検出されていない。

以上が入佐川遺跡の変遷である。弥生時代後期から古墳時代にかけて掘立柱建物、住居跡や堤防などが検出された以外は、中世の山名氏に関連すると思われる堀・土塁が検出されたのみである。他の時期はすべて水田、あるいは溝や旧河道が存在したのみであり、直接生活を示す遺構は検出されなかった。出土遺物も当該期以外は全体的に遺物量は少なく、遺構ごとの時期を比定するのが困難な状況であった。その中で、絵図との照合が可能な溝が検出されたことは大きな成果といえる。

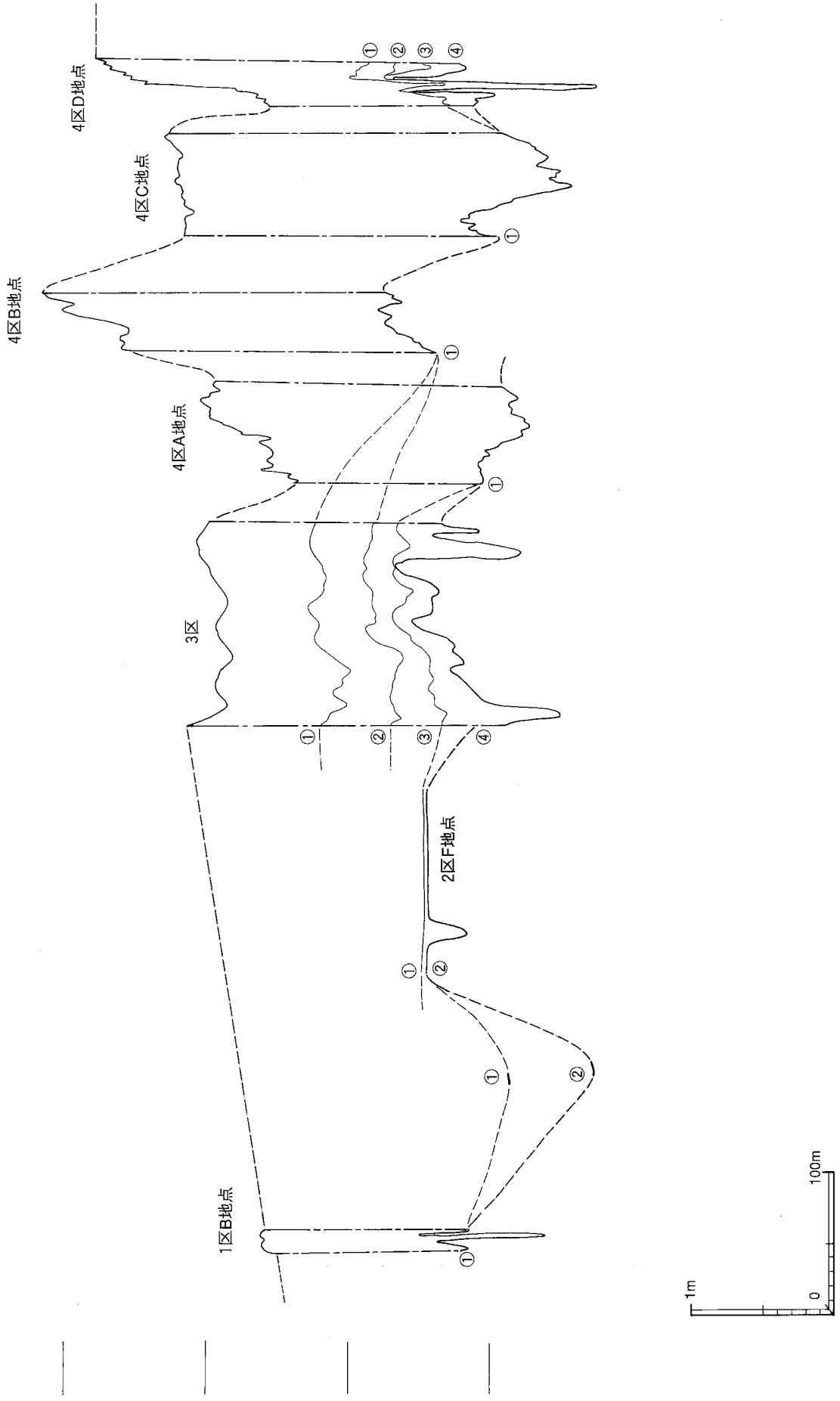
また、木製遺物が多く出土していることも特徴的であった。部材が最も多いが、用途の不明なものが多い。用途が明らかなものの中では橋脚が最も多い。部材以外では農具、容器、祭祀具がそれに次いで多く出土している。これまでの袴狭遺跡、砂入遺跡とは異なり、祭祀具の占める割合が大きく減っており、入佐川遺跡周辺では律令祭祀が頻繁に行われていなかったことを示している。

樹種はこれまでの但馬地域での出土例と同様にスギが多用されており、全体の65%に達する。

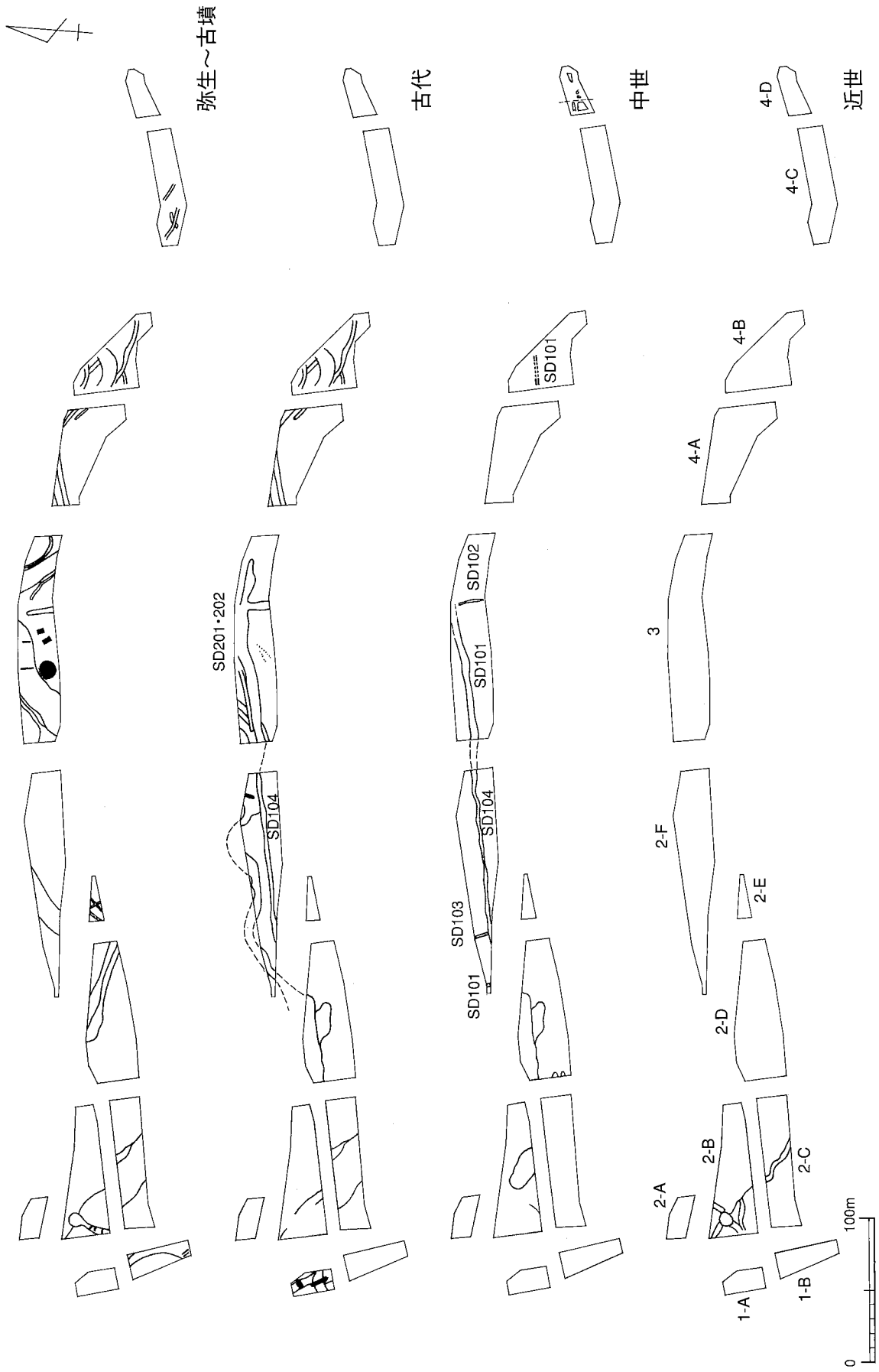
【参考文献】

(1)西岡虎之助編「但馬国出石神社領田図」『日本荘園絵図集成』下　1977年

(2)石上英一ほか『京畿内荘園の史料データベース作成と歴史地理学的研究』昭和63年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書　1989年



第5図　各地区土層断面図


弥生～古墳
古代
中世
近世
SD201・202
SD104
SD101
SD102
SD103
3
4-A
4-B
4-C
4-D
2-A
2-B
2-C
2-D
2-E
2-F
1-A
1-B
0
100m

第6図　遺構変遷図

第3表　土器一覧表（1）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
52	1	930082	5	土師器	皿	7.6	1.5	3.7	1区	A地点	第1遺構面	SD101
	2	930082	3	土師器	皿	8.0	1.5	4.3	1区	A地点	第1遺構面	SD102
	3	930082	4	土師器	皿	(8.0)	(1.45)	(3.5)	1区	A地点	第1遺構面	SD102
	4	930082	2	土師器	杯	(13.6)	(4.1)	(7.6)	1区	A地点	第1遺構面	SD102
	5	930082	1	黒色土器A	椀	—	—	(7.25)	1区	A地点	第1遺構面	SD102
	6	930082	11	土師器	高杯	(14.4)	(11.2)	(9.3)	1区	A地点	第1遺構面	旧河道
	7	930082	12	土師器	高杯	14.5	10.8	9.9	1区	A地点	第1遺構面	旧河道
	8	930082	9	土師器	皿	7.5	1.4	3.5	1区	B地点	第1遺構面	包含層
	9	930082	6	土師器	皿	(7.8)	(1.45)	3.6	1区	B地点	第1遺構面	包含層
	10	930082	7	土師器	高杯	(17.45)	—	—	1区	B地点	第1遺構面	包含層
	11	930082	10	土師器	壷	(16.5)	—	—	1区	B地点	第1遺構面	包含層
	12	930082	8	弥生土器	器台	(17.05)	—	—	1区	B地点	第1遺構面	包含層
53	13	920166	2	土師器	杯	(9.7)	3.0	4.9	2区	B地点	第1遺構面	旧河道
	14	920166	102	土師器	壷	(12.0)	(15.0)	(15.4)	2区	B地点	第1遺構面	SD102
	15	920166	106	瓦器	椀	13.5	5.3	5.3	2区	B地点	第2遺構面	SD201
	16	920166	101	土師器	壷	11.5	13.6	14.0	2区	B地点	第2遺構面	SD201
	17	920166	99	土師器	甕	15.7	24.4	24.2	2区	B地点	第2遺構面	SD201
	18	920166	115	弥生土器	台付鉢	15.2	14.4	18.6	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	19	920166	27	弥生土器	蓋	4.9	9.4	16.3	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	20	920166	112	弥生・土師器	壷	(12.0)	12.0	6.2	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	21	920166	28	土製品	土錘	8.5	3.9	3.7	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	22	920166	111	弥生・土師器	壷	(10.75)	(6.4)	12.5	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	23	920166	114	弥生・土師器	壷	13.2	12.7	3.3	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	24	920166	109	弥生・土師器	器種不明	3.9	—	9.9	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	25	920166	113	弥生・土師器	手焙形土器	—	17.8	15.1	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	26	920166	124	弥生・土師器	甕	15.2	21.6	1.8	2区	B地点	第2遺構面	包含層
54	27	920166	123	弥生・土師器	甕	14.6	28.9	26.6	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	28	920166	110	弥生・土師器	甕	11.3	(13.2)	(15.5)	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	29	920166	107	弥生・土師器	鉢	16.2	6.2	—	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	30	920166	108	弥生・土師器	鉢	14.5	11.6	2.6	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	31	920166	143	土師器	鉢	(9.5)	(5.25)	(4.0)	2区	B地点	第2遺構面	SK202
	32	920166	4	土師器	甕	(14.4)	(9.9)	—	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	33	920166	1	土師器	甕	(15.4)	(9.5)	(14.8)	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	34	920166	42	土師器	甕	16.6	(18.2)	(23.4)	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	35	920166	3	土製品	土錘	6.3	3.8	3.9	2区	B地点	第2遺構面	旧河道
	36	920166	144	土製品	土錘	6.8	2.3	0.9	2区	B地点	第2遺構面	包含層
	37	920166	5	土製品	土錘	10.0	5.0	5.0	2区	B地点	第1遺構面	包含層
	38	920166	98	土師器	甕	14.1	20.0	19.0	2区	C地点	第2遺構面	SD201
	39	920166	29	土師器	壷	—	(7.3)	(8.4)	2区	C地点	第2遺構面	旧河道
	40	920166	116	土師器	壷	(14.1)	13.3	1.8	2区	E地点	第1遺構面	畦畔101
55	41	920166	100	土師器	壷	10.4	(13.3)	13.4	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	42	920166	121	土師器	壷	10.6	14.6	14.8	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	43	920166	90	土師器	壷	9.8	18.6	(16.9)	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	44	920166	103	土師器	壷・甕？	—	19.9	(22.6)	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	45	920166	122	土師器	甕	13.3	22.4	20.2	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	46	920166	53	土師器	甕	18.4	40.0	26.1	2区	D地点	第2遺構面	SD201
	47	920166	82	土師器	壷	9.0	9.3	9.6	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	48	920166	83	土師器	壷	10.1	9.7	10.3	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	49	920166	77	土師器	壷	9.5	8.5	9.6	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	50	920166	80	土師器	壷	8.4	7.3	7.9	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	51	920166	81	土師器	壷	(9.75)	10.7	9.0	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	52	920166	84	土師器	壷	12.7	(12.6)	14.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	53	920166	91	土師器	壷	12.7	14.5	14.7	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	54	920166	78	土師器	壷	—	(3.4)	6.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
56	55	920166	56	土師器	壷	11.9	17.8	16.8	2区	D地点	第2遺構面	堤防

第4表　土器一覧表（2）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
56	56	920166	125	土師器	壷	(20.1)	(26.1)	(27.8)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	57	920166	52	土師器	甕	16.9	32.8	28.6	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	58	920166	97	土師器	甕	(13.7)	28.7	(23.9)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	59	920166	49	土師器	甕	17.2	33.7	26.6	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	60	920166	95	土師器	甕	15.5	(25.9)	(26.9)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
57	61	920166	48	土師器	甕	19.9	32.4	27.7	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	62	920166	117	土師器	甕	14.4	21.0	21.0	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	63	920166	62	土師器	甕	13.5	26.0	23.5	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	64	920166	71	土師器	甕	16.1	(31.0)	25.7	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	65	920166	69	土師器	甕	15.2	25.1	22.8	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	66	920166	59	土師器	甕	16.6	26.0	(22.25)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
58	67	920166	93	土師器	甕	(15.65)	26.1	22.8	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	68	920166	58	土師器	甕	15.6	26.1	(21.8)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	69	920166	51	土師器	甕	(14.6)	28.7	25.2	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	70	920166	57	土師器	甕	14.2	(24.85)	21.8	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	71	920166	55	土師器	甕	14.6	25.6	(21.1)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	72	920166	45	土師器	甕	14.8	29.1	23.4	2区	D地点	第2遺構面	堤防
59	73	920166	31	土師器	甕	14.3	(20.2)	21.6	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	74	920166	68	土師器	甕	(13.5)	(20.6)	(18.4)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	75	920166	66	土師器	甕	14.0	21.7	20.5	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	76	920166	94	土師器	甕	(14.4)	26.0	21.3	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	77	920166	92	土師器	甕	12.2	20.6	18.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	78	920166	61	土師器	甕	11.1	17.9	16.3	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	79	920166	47	土師器	甕	17.8	(32.8)	(29.2)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
60	80	920166	63	土師器	甕	16.6	24.3	23.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	81	920166	70	土師器	甕	16.0	26.5	23.7	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	82	920166	54	土師器	甕	13.6	26.1	21.8	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	83	920166	64	土師器	甕	(14.5)	24.6	24.3	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	84	920166	50	土師器	甕	17.9	28.3	25.7	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	85	920166	60	土師器	甕	13.8	23.9	21.2	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	86	920166	79	土師器	高杯	(10.0)	2.7	—	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	87	920166	76	土師器	鉢	11.3	(4.1)	(3.3)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	88	920166	74	土師器	杯	18.0	5.5	4.9	2区	D地点	第2遺構面	堤防
61	89	920166	72	土師器	壷	12.4	27.8	22.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	90	920166	67	土師器	壷	13.6	20.9	18.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	91	920166	65	土師器	壷	15.8	(25.8)	22.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	92	920166	46	土師器	壷	17.4	38.0	30.0	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	93	920166	75	土師器	高杯	22.9	7.6	—	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	94	920166	73	土師器	高杯	15.0	(5.95)	—	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	95	920166	88	土師器	高杯	(15.4)	14.5	(9.9)	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	96	920166	89	土師器	高杯	15.3	13.3	9.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	97	920166	85	土師器	高杯	(16.5)	(14.2)	10.5	2区	D地点	第2遺構面	堤防
62	98	920166	87	土師器	高杯	18.1	12.7	10.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	99	920166	86	土師器	高杯	14.6	12.7	10.1	2区	D地点	第2遺構面	堤防
	100	920166	140	土師器	高杯	15.3	11.2	10.2	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	101	920166	138	土師器	壷	7.7	9.3	8.7	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	102	920166	147	土師器	壷	8.4	9.0	9.8	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	103	920166	131	土師器	壷	9.2	7.8	8.2	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	104	920166	119	土師器	壷	8.3	12.2	11.8	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	105	920166	136	土師器	甕	14.5	24.5	23.5	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	106	920166	127	土師器	甕	17.2	(25.9)	28.5	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	107	920166	134	土師器	甕	14.8	25.4	24.1	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	108	920166	126	土師器	甕	(14.8)	(22.7)	23.2	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
63	109	920166	130	土師器	甕	16.9	25.4	26.1	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	110	920166	146	土師器	壷	10.2	10.4	11.7	2区	D地点	第2遺構面	旧河道

第5表　土器一覧表（3）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量 口径	器高	底径・最大径	出土場所 地区	地点	遺構面	遺構
63	111	920166	137	土師	壷	9.8	10.7	11.7	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	112	920166	133	土師器	高杯	21.8	(14.5)	13.0	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	113	920166	132	土師器	高杯	16.2	12.7	11.6	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	114	920166	128	土師器	高杯	15.0	11.3	9.7	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	115	920166	129	土師器	鉢	11.6	6.7	—	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	116	920166	118	須恵器	杯蓋	12.5	4.5	—	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	117	920166	30	土師器	壷	10.3	16.6	14.8	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	118	920166	33	土師器	壷	(8.6)	(16.4)	(15.35)	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	119	920166	37	土師器	壷	(10.1)	12.3	14.0	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	120	920166	39	土師器	高杯	—	(8.95)	(7.7)	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	121	920166	43	土師器	高杯	(18.0)	(12.0)	10.1	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	122	920166	38	土師器	高杯	(15.6)	11.6	(11.5)	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
64	123	920166	34	土師器	甕	(16.8)	28.3	28.0	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	124	920166	35	土師器	甕	17.9	29.1	28.1	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	125	920166	36	土師器	甕	14.0	22.0	20.0	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	126	920166	32	土師器	甕	(15.8)	19.7	(19.8)	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	127	920166	120	土師器	鉢	(12.0)	(5.6)	6.0	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	128	920166	26	土師器	甕	(27.5)	(25.9)	(29.6)	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	129	920166	141	須恵器	皿	14.9	1.0	12.5	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
	130	920166	40	土製品	土錘	6.6	2.8	2.7	2区	D地点	第2遺構面	旧河道
65	131	920166	142	瓦器	椀	15.2	5.5	4.9	2区	F地点	第1遺構面	SD104
	132	920166	104	黒色土器	椀	15.8	5.2	6.9	2区	F地点	第1遺構面	SD102
	133	920166	105	瓦器	椀	16.7	(5.9)	6.6	2区	F地点	第1遺構面	SD102
	134	920166	8	須恵器	椀	(11.0)	(4.1)	(6.8)	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	135	920166	15	須恵器	椀	11.2	5.2	7.4	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	136	920166	14	須恵器	杯	(12.55)	(3.45)	8.8	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	23 137	920166	6	須恵器	杯	12.2	3.5	9.2	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	138	920166	18	須恵器	杯	13.2	3.1	8.2	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	139	920166	139	土師器	杯	14.4	3.2	10.3	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	140	920166	17	須恵器	杯	12.3	4.1	7.9	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	141	920166	7	須恵器	杯	(13.15)	(3.9)	7.9	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	142	920166	13	須恵器	皿	(13.15)	(2.9)	(10.3)	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	143	920166	11	須恵器	皿	(14.4)	(2.5)	(10.6)	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	144	920166	10	須恵器	杯	(11.8)	(3.9)	6.7	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	145	920166	12	須恵器	杯	(9.7)	(3.3)	5.8	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	146	920166	9	須恵器	杯	9.5	3.7	4.9	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	147	920166	16	須恵器	杯	13.0	4.2	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	148	920166	41	須恵器	杯	(11.15)	(4.0)	(5.3)	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	149	920166	24	土師器	壷	(11.6)	(11.1)	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	150	920166	20	弥生土器	甕	(17.6)	(8.5)	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	151	920166	25	弥生土器	甕	(20.5)	24.1	21.5	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	152	920166	21	弥生土器	甕	17.2	(7.2)	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	153	920166	19	弥生土器	甕	(18.0)	(10.1)	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	154	920166	22	弥生土器	甕	(18.3)	(10.6)	19.0	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
	155	920166	23	弥生土器	甕	24.2	7.5	—	2区	F地点	第1遺構面	旧河道
66	156	940184	99	陶器(美濃)	碗	—	(4.2)	(5.0)	3区	—	第1遺構面	SD101
	157	940184	100	土師器	椀	—	(3.3)	7.5	3区	—	第2遺構面	包含層
	158	940184	101	須恵器	不明(壺状)	—	(5.7)	(16.0)	3区	—	第2遺構面	SD201
	159	940184	96	黒色土器	椀	(15.8)	5.0	5.4	3区	—	第2遺構面	SD202
	160	940184	95	黒色土器	椀	(15.6)	(5.3)	—	3区	—	第2遺構面	SD202
	161	940184	97	土師器	皿	(10.3)	2.8	4.5	3区	—	第2遺構面	SD202
	162	940184	92	黒色土器	椀	(16.0)	(5.2)	7.1	3区	—	第2遺構面	SD203
	163	940184	98	土師器	皿	(9.0)	(1.8)	6.2	3区	—	第2遺構面	SD204
	164	940184	31	土師器	甕	(14.6)	(15.2)	21.2	3区	—	第3遺構面	包含層
	165	940184	49	須恵器	杯	(13.25)	3.9	(9.2)	3区	—	第3遺構面	包含層

第6表　土器一覧表（4）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
66	166	940184	54	須恵器	杯蓋	(13.7)	(3.95)	5.6	3区	—	第3遺構面	SD302
	167	940184	56	須恵器	杯	(11.2)	(3.2)	(6.5)	3区	—	第3遺構面	SD302
	168	940184	52	須恵器	杯	10.5	3.0	6.4	3区	—	第3遺構面	SD302
	169	940184	53	須恵器	杯	11.5	4.0	7.9	3区	—	第3遺構面	SD302
67	170	940184	23	弥生・土師器	壷	(15.2)	(9.7)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	171	940184	24	弥生・土師器	壷	(13.0)	(10.7)	17.3	3区	—	第4遺構面	包含層
	172	940184	38	弥生・土師器	壷	(8.7)	(8.6)	9.0	3区	—	第4遺構面	包含層
	173	940184	37	弥生・土師器	壷	—	8.1	9.3	3区	—	第4遺構面	包含層
	174	940184	43	弥生・土師器	壷	(17.6)	(9.1)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	175	940184	46	弥生・土師器	壷	(17.6)	(5.3)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	176	940184	32	弥生・土師器	甕	(13.1)	(13.2)	16.4	3区	—	第4遺構面	包含層
	177	940184	42	弥生・土師器	甕	(13.2)	(4.8)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	178	940184	83	弥生・土師器	甕	(14.0)	(6.2)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	179	940184	28	弥生・土師器	高杯	(26.4)	23.4	(15.6)	3区	—	第4遺構面	包含層
	180	940184	9	弥生・土師器	高杯	(24.9)	(14.0)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	181	940184	19	弥生・土師器	高杯	—	(11.5)	(14.4)	3区	—	第4遺構面	包含層
	182	940184	30	弥生・土師器	高杯	—	(9.1)	(10.4)	3区	—	第4遺構面	包含層
	183	940184	33	弥生・土師器	高杯	—	(9.2)	(13.8)	3区	—	第4遺構面	包含層
	184	940184	51	弥生・土師器	鉢	(9.8)	(6.8)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	185	940184	65	須恵器	杯(蓋)	(13.1)	(4.0)	—	3区	—	第4遺構面	包含層
	186	940184	79	須恵器	杯(蓋)	11.4	4.0	—	3区	—	第4遺構面	包含層
68	187	940184	1	土師器	山陰型甑形土器	39.7	51.7	9.0	3区	—	第4遺構面	SH401
	188	940184	36	弥生・土師器	甕(底部)	—	(8.1)	3.4	3区	—	第4遺構面	SH401
	189	940184	90	須恵器	杯	10.8	4.1	6.1	3区	—	第4遺構面	SD425
	190	940184	80	須恵器	杯	10.9	3.9	8.3	3区	—	第4遺構面	SD425
	191	940184	84	土師器	鍋	(21.4)	(11.4)	—	3区	—	第4遺構面	SD425
	192	940184	7	土師器	甕	(11.25)	(25.0)	(23.0)	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	193	940184	6	土師器	甕	11.0	21.8	(18.7)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	194	940184	12	土師器	甕	(17.3)	(9.3)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	195	940184	35	土師器	壷	(17.6)	(6.2)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	196	940184	41	土師器	壷	(16.6)	(7.8)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	197	940184	67	土師器	壷	(27.4)	(2.7)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	198	940184	58	土師器	壷	(21.5)	(3.1)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
69	199	940184	40	土師器	壷	(29.2)	(8.5)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	200	940184	16	土師器	壷	(11.4)	16.5	(14.7)	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	201	940184	10	土師器	壷	10.7	(12.0)	(14.0)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	202	940184	74	土師器	壷	(9.1)	9.7	9.2	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	203	940184	20	土師器	壷	9.5	9.2	10.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	204	940184	15	土師器	壷	8.2	10.1	9.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	205	940184	39	土師器	壷	7.7	8.5	8.1	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	206	940184	21	土師器	壷	6.5	8.4	8.5	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	207	940184	48	土師器	壷	4.8	6.3	6.9	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	208	940184	22	土師器	壷	(18.4)	(9.0)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	209	940184	8	土師器	壷	(11.3)	(15.5)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	210	940184	34	土師器	甕	(17.8)	(19.8)	19.5	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	211	940184	47	土師器	甕	(15.7)	(9.95)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	212	940184	87	土師器	甕	(16.2)	(5.8)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	213	940184	73	土師器	甕	(17.4)	(8.4)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み②区
	214	940184	60	土師器	甕	—	(4.3)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	215	940184	18	土師器	甕	(14.3)	(13.9)	16.1	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	216	940184	69	土師器	甕	(17.3)	(7.0)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み②区
	217	940184	89	土師器	甕	(16.8)	(7.1)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	218	940184	27	土師器	甕	15.7	(8.9)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	219	940184	57	土師器	甕	(15.1)	(8.2)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	220	940184	68	土師器	甕	(17.3)	(6.9)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区

第7表　土器一覧表（5）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
70	221	940184	78	土師器	鉢	(15.65)	(7.7)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	222	940184	76	土師器	鉢	(14.2)	7.9	5.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	223	940184	72	土師器	鉢	9.8	8.3	(5.1)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	224	940184	59	土師器	鉢	5.6	3.7	2.9	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	225	940184	71	土師器	高杯	19.2	(6.2)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	226	940184	64	土師器	高杯	(17.4)	(5.2)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	227	940184	45	土師器	高杯	(16.5)	(6.3)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	228	940184	63	土師器	高杯	(13.4)	(5.55)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み②区
	229	940184	85	土師器	高杯	(13.7)	(3.9)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み②区
	230	940184	94	土師器	高杯	9.7	7.7	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	231	940184	11	土師器	高杯	—	11.3	14.3	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	232	940184	70	土師器	高杯	—	(6.9)	(8.9)	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	233	940184	50	土師器	高杯	—	(7.5)	(10.3)	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	234	940184	29	土師器	高杯	—	(7.7)	(9.3)	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	235	940184	77	土師器	高杯	—	(7.15)	9.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	236	940184	13	土師器	器台	(20.2)	(16.75)	14.7	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	237	940184	26	土師器	器台	—	(13.75)	(15.5)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	238	940184	25	土師器	器台	—	(14.3)	(12.5)	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	239	940184	93	土師器	器台	(22.2)	(7.8)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	240	940184	44	土師器	器台	(25.1)	(6.3)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	241	940184	66	土師器	器台	(16.2)	(4.0)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	242	940184	86	土師器	器台	(13.3)	(5.9)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	243	940184	82	弥生土器	手焙形土器	(14.6)	(5.0)	—	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	244	940184	17	土師器	椀	12.0	7.8	14.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	245	940184	14	須恵器	甕	8.6	12.0	12.3	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	246	940184	81	須恵器	杯	11.7	4.8	5.5	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	247	940184	62	須恵器	杯	(13.6)	3.9	(9.1)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	248	940184	61	須恵器	壺	—	(4.75)	(7.4)	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	249	940184	88	須恵器	壺	4.9	8.4	10.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑧区
71	250	950122	67	須恵器	杯	12.6	4.0	(5.0)	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	251	950122	31	須恵器	杯	(12.7)	3.4	8.0	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	252	950122	33	土師器	甕	(23.0)	(16.0)	(22.9)	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	253	950122	35	土製品	土錘	7.6	4.0	3.7	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	254	950122	26	土製品	土錘	3.1	3.2	3.3	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	255	950122	44	須恵器	甕	(60.0)	(6.7)	—	4区	A地点	第1遺構面	包含層
	256	950122	32	須恵器	壺	(14.5)	6.0	—	4区	A地点	第1遺構面	旧河道
	257	950122	11	須恵器	杯	12.8	3.1	—	4区	A地点	第1遺構面	SD103
	258	950122	14	須恵器	杯	11.3	3.8	4.8	4区	A地点	第1遺構面	SD103
	259	950122	16	須恵器	杯	(12.9)	(3.6)	(6.8)	4区	A地点	第1遺構面	SD103
	260	950122	15	須恵器	杯	11.2	3.6	6.8	4区	A地点	第1遺構面	SD101
	261	950122	28	須恵器	杯蓋	13.5	3.3	—	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	262	950122	30	須恵器	杯	(15.15)	8.0	10.5	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	263	950122	27	須恵器	杯	(14.3)	5.1	7.0	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	264	950122	29	須恵器	甕	(38.2)	(7.3)	—	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	265	950122	25	土製品	土錘	5.9	3.0	2.7	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	266	950122	39	白磁	皿	(11.8)	3.0	(6.3)	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	267	950122	43	青花	碗	(13.8)	(5.4)	(5.0)	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	268	950122	42	青花	小坏	—	(2.0)	(2.6)	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	269	950122	45	瓦質土器	鉢	(11.5)	(5.9)	(11.3)	4区	B地点	第1遺構面	包含層
	270	950122	6	土師器	皿	8.6	1.6	4.4	4区	B地点	第1遺構面	SD101
	271	950122	5	土師器	皿	8.2	2.0	4.1	4区	B地点	第1遺構面	SD101
	272	950122	7	土師器	皿	8.7	1.8	4.0	4区	B地点	第1遺構面	SD101
	273	950122	3	土師器	皿	8.5	1.7	4.3	4区	B地点	第1遺構面	SD101
	274	950122	2	土師器	皿	8.7	2.1	4.0	4区	B地点	第1遺構面	SD101
	275	950122	4	土師器	皿	11.6	2.2	5.6	4区	B地点	第1遺構面	SD101

第8表　土器一覧表（6）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
71	276	950122	10	須恵器	杯	11.0	4.0	7.0	4区	B地点	第1遺構面	SD102
	277	950122	8	土師器	高杯	—	—	(9.15)	4区	B地点	第1遺構面	SD102
	278	950122	9	土師器	壷	(6.5)	8.3	4.0	4区	B地点	第1遺構面	SD102
	279	950122	37	瓦質土器	すり鉢	(34.1)	(11.0)	—	4区	C地点	第1遺構面	包含層
	280	950122	40	土師器	Ⅲ	10.0	2.2	5.4	4区	C地点	第1遺構面	包含層
	281	950122	46	青磁	碗	11.0	6.8	4.3	4区	C地点	第1遺構面	包含層
	282	950122	17	弥生土器	壷	—	(7.3)	—	4区	C地点	第1遺構面	SD103
72	283	950122	107	土師器	Ⅲ	(8.8)	(2.0)	5.7	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	284	950122	79	土師器	Ⅲ	(8.85)	2.0	4.6	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	285	950122	101	土師器	Ⅲ	(9.0)	(2.3)	—	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	286	950122	108	土師器	Ⅲ	9.8	2.3	3.8	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	287	950122	102	土師器	Ⅲ(耳Ⅲ)	5.5	1.6	4.0	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	288	950122	41	土師器	Ⅲ	(10.0)	2.3	5.3	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	289	950122	98	土師器	Ⅲ	12.6	2.4	6.2	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	290	950122	92	土師器	Ⅲ	(11.8)	2.7	5.3	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	291	950122	109	土師器	Ⅲ	(14.2)	(2.1)	6.8	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	292	950122	82	土師器	Ⅲ	(12.75)	(2.1)	6.2	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	293	950122	34	白磁	Ⅲ	(11.4)	3.1	(6.2)	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	294	950122	84	白磁	Ⅲ	(11.4)	2.5	(5.4)	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	295	950122	99	土師器	壷？	—	—	—	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	296	950122	111	瓦質土器	すり鉢	(26.0)	9.5	(10.6)	4区	D地点	第1遺構面	包含層
	297	950122	61	土師器	Ⅲ	8.4	2.1	3.1	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	298	950122	52	土師器	Ⅲ	(8.8)	(1.9)	—	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	299	950122	65	土師器	Ⅲ	(10.45)	1.5	4.9	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	300	950122	69	土師器	Ⅲ	(11.9)	(2.65)	5.7	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	301	950122	64	土師器	Ⅲ	11.5	2.8	6.3	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	302	950122	57	土師器	Ⅲ	12.3	2.4	6.5	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	303	950122	62	土師器	Ⅲ	12.5	2.2	6.6	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	304	950122	63	青磁	碗	(13.8)	—	—	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	305	950122	51	瓦質土器	すり鉢	(33.0)	—	—	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	306	950122	47	瓦質土器	すり鉢	(32.2)	—	—	4区	D地点	第1遺構面	堀101
	307	950122	91	土師器	Ⅲ	(7.8)	(2.2)	3.2	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	308	950122	94	土師器	Ⅲ	8.5	2.1	4.1	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	309	950122	97	土師器	Ⅲ	(8.4)	(1.9)	—	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	310	950122	80	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	4.4	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	311	950122	90	土師器	Ⅲ	8.0	2.2	3.8	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	312	950122	106	土師器	Ⅲ	(11.75)	(2.7)	—	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	313	950122	110	土師器	Ⅲ(灯明Ⅲ)	(12.4)	(2.35)	5.7	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	314	950122	93	土師器	Ⅲ(灯明Ⅲ)	(12.8)	(2.2)	(7.7)	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	315	950122	103	白磁	碗	(15.5)	(4.7)	—	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	316	950122	95	美濃	天目	(11.6)	—	—	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	317	950122	19	青磁	碗	(17.3)	—	—	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	318	950122	104	瓦質土器	直口壷	8.5	6.6	8.9	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	319	950122	96	青花	碗	4.2	—	(4.15)	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	320	950122	77	備前	すり鉢	(24.7)	(12.1)	(9.8)	4区	D地点	第2遺構面	包含層
	321	950122	71	土師器	Ⅲ	(8.2)	2.0	(8.6)	4区	D地点	第2遺構面	堀201
	322	950122	68	土師器	Ⅲ	(9.2)	(1.65)	(3.3)	4区	D地点	第2遺構面	堀201
	323	950122	1	美濃	天目	11.6	6.3	4.0	4区	D地点	第2遺構面	堀201
	324	950122	48	瓦質土器	鉢	—	—	(12.6)	4区	D地点	第2遺構面	堀201
	325	950122	78	備前	すり鉢	(31.2)	—	—	4区	D地点	第2遺構面	堀201
73	326	950122	56	土師器	Ⅲ	(9.5)	1.3	8.5	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	327	950122	55	土師器	Ⅲ	8.5	2.2	3.9	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	328	950122	58	土師器	Ⅲ(灯明Ⅲ)	8.2	2.3	3.2	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	329	950122	54	土師器	Ⅲ(灯明Ⅲ)	8.6	2.3	4.4	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	330	950122	50	土師器	Ⅲ(灯明Ⅲ)	(9.0)	2.0	(4.0)	4区	D地点	第2遺構面	SD201

第9表　土器一覧表（7）

図版No.	報告番号	調査番号	実測No.	種別	器種	法量			出土場所			
						口径	器高	底径・最大径	地区	地点	遺構面	遺構
73	331	950122	59	土師器	皿(灯明皿)	8.6	2.1	3.2	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	332	950122	60	土師器	皿(灯明皿)	8.6	2.0	4.3	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	333	950122	53	土師器	皿(灯明皿)	8.9	2.1	3.9	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	334	950122	74	土師器	皿	12.9	2.5	5.5	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	335	950122	49	青花	碗	—	—	(5.0)	4区	D地点	第2遺構面	SD201
	336	950122	21	土師器	皿	(9.0)	1.7	(4.1)	4区	D地点	第2遺構面	SD202
	337	950122	38	土師器	鉢	—	—	(20.1)	4区	D地点	第2遺構面	SD202
	338	950122	81	青花	碗	(13.0)	—	—	4区	D地点	第3遺構面	包含層
	339	950122	100	備前	甕	(6.0)	—	—	4区	D地点	第3遺構面	包含層
	340	950122	86	土師器	皿	(13.8)	2.1	(7.8)	4区	D地点	第4遺構面	包含層
	341	950122	88	瀬戸美濃	碗(灰釉陶器)	—	—	5.2	4区	D地点	第4遺構面	包含層
	342	950122	113	瓦質土器	すり鉢	—	—	(13.35)	4区	D地点	第4遺構面	包含層
	343	950122	66	土師器	皿	(8.2)	2.1	(3.9)	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	344	950122	75	土師器	皿	(9.2)	(1.95)	(4.7)	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	345	950122	76	土師器	皿	(11.7)	(2.45)	—	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	346	950122	72	土師器	皿	12.0	2.7	5.3	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	347	950122	73	土師器	皿	12.0	2.4	5.8	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	348	950122	70	土師器	皿	(13.0)	2.5	(7.4)	4区	D地点	第4遺構面	堀401
	349	950122	20	土師器	皿	(8.4)	2.1	(3.8)	4区	D地点	第4遺構面	SD401
	350	950122	23	土師器	皿	(8.0)	1.8	—	4区	D地点	第4遺構面	SD401
	351	950122	22	土師器	皿	(8.3)	2.6	3.0	4区	D地点	第4遺構面	SD401
	352	950122	18	土師器	皿	(11.1)	1.8	(6.1)	4区	D地点	第4遺構面	SD401
	353	950122	24	瓦質土器	すり鉢	(32.2)	—	—	4区	D地点	層位不明	—
	354	950122	112	土師器	皿	8.2	2.1	4.0	4区	D地点	層位不明	—
	355	950122	83	土師器	皿	(10.2)	2.5	(3.8)	4区	D地点	層位不明	—
	356	950122	85	土師器	皿	(14.9)	(2.9)	(7.8)	4区	D地点	層位不明	—
	357	950122	87	青磁	皿	(10.2)	(2.7)	(5.0)	4区	D地点	層位不明	—
	358	950122	36	土師器	杯	(14.1)	7.7	9.4	4区	D地点	層位不明	—
	359	950122	89	越前	すり鉢	(15.7)	—	—	4区	D地点	層位不明	—
7頁	360	950122	114	土師器	山陰型甑形土器	—	—	9.3	採集資料			
69頁	361	920166	44	弥生土器	壷	14.0	39.2	7.3	2区	F地点	第2遺構面	包含層

第10表　木器一覧表（１）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
75	W１	880021-　6	容器	漆椀	(11.6)	4.1	(5.6)	確認(２区)	Cトレンチ(B地点)	—	—
	W２	880021-　11	容器	漆椀	—	—	(7.0)	確認(２区)	Dトレンチ(C地点)	—	—
	W３	880021-　10	容器	漆椀	(14.4)	(6.3)	(8.0)	確認(２区)	Dトレンチ(C地点)	—	—
	W４	880021-　3	容器	漆椀	—	—	—	確認(２区)	Cトレンチ(B地点)	—	—
	W５	880021-　19	容器	漆椀	(10.85)	3.5	(5.6)	確認(２区)	4トレンチ(B地点)	—	—
	W６	880021-　13	容器	漆椀	—	—	7.5	確認(２区)	Dトレンチ(C地点)	—	—
	W７	880021-　147	服飾具	下駄	23.1	9.4	2.8	確認(２区)	Dトレンチ(C地点)	—	—
	W８	880021-　122	用途不明	不明	14.5	0.8	0.6	確認(２区)	Cトレンチ(B地点)	—	—
	W９	880021-　34	部材	不明	12.6	3.0	2.7	確認(２区)	Dトレンチ(C地点)	—	—
	W10	880021-　149	雑具	椅子脚	34.6	13.6	2.3	確認(２区)	Cトレンチ(B地点)	—	—
	W11	880021-　156	農具	田下駄Ｄ類柄留め	50.1	9.2	1.2	確認(２区)	Cトレンチ(B地点)	—	—
	W12	880021-　115	部材	不明	(59.2)	3.4	1.8	確認(３区)	14トレンチ	—	—
	W13	880021-Ｍ 24	部材	不明	122.5	22.3	1.7	確認(２区)	Hトレンチ(E地点)	—	—
	W14	880021-Ｍ 23	部材	不明	115.9	11.0	1.8	確認(３区)	Kトレンチ	—	—
76	W15	930082-　22	雑具	机脚	36.3	11.1	1.7	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W16	930082-　19	部材	不明	(37.2)	3.3	1.5	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W17	930082-　30	祭祀具	人形Ｅ類(墨書)	43.4	5.3	0.8	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W18	930082-　5	農具	田下駄Ａ類４欠式	45.2	17.7	1.9	１区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
写真図版97	W308	930082-　31	建築部材	橋脚	165.0	18.0	13.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W309	930082-　33	建築部材	橋脚	210.0	20.0	10.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W310	930082-　34	建築部材	橋脚	305.0	20.0	20.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W311	930082-　35	建築部材	橋脚	300.0	20.0	20.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W312	930082-　36	建築部材	橋脚	285.0	20.0	20.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W313	930082-　37	建築部材	橋脚	290.0	20.0	20.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W314	930082-　32	建築部材	橋脚	225.0	20.0	12.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
写真図版98	W315	930082-　38	建築部材	橋脚	150.0	13.0	13.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W316	930082-　42	建築部材	橋脚	250.0	12.0	12.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W317	930082-　43	建築部材	橋脚	260.0	12.0	12.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W318	930082-　44	建築部材	橋脚	225.0	12.0	14.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W319	930082-　46	建築部材	橋脚	235.0	15.0	15.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W320	930082-　48	建築部材	橋脚	290.0	15.0	15.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W321	930082-　49	建築部材	橋脚	275.0	15.0	15.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W322	930082-　41	建築部材	橋脚	250.0	18.0	8.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
写真図版99	W323	930082-　57	建築部材	橋脚	240.0	15.0	15.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W324	930082-　58	建築部材	橋脚	250.0	12.0	12.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W325	930082-　59	建築部材	橋脚	280.0	10.0	10.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W326	930082-　62	建築部材	橋脚	260.0	15.0	15.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W327	930082-　65	建築部材	橋脚	230.0	10.0	10.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W328	930082-　53	建築部材	橋脚	260.0	18.0	8.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W329	930082-　51	建築部材	橋脚	220.0	16.0	16.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
	W330	930082-　52	建築部材	橋脚	220.0	14.0	14.0	１区	Ａ地点	第１遺構面	旧河道
77	W19	920166-　351	容器	漆椀	—	—	(5.2)	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD101
	W20	920166-　414	祭祀具	馬形Ｃ類	13.9	2.8	1.8	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W21	920166-　389	服飾具	下駄	16.1	8.4	3.4	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W22	920166-　378	服飾具	下駄	22.2	7.6	3.2	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W23	920166-　352	容器	漆椀	10.4	5.3	3.4	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W24	920166-　421	容器	漆椀	—	—	—	２区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W25	920166-　479	部材	不明	12.2	32.9	4.2	２区	Ｂ地点	第２遺構面	SK201
	W26	920166-　541	祭祀具	斎串Ａ類	20.2	1.5	0.5	２区	Ｂ地点	第２遺構面	旧河道
	W27	920166-　516	祭祀具	斎串Ａ類	57.5	1.2	0.4	２区	Ｂ地点	第２遺構面	旧河道
	W28	920166-　273	祭祀具	斎串Ｄ類	25.4	2.8	0.6	２区	Ｂ地点	第２遺構面	旧河道

第11表　木器一覧表（２）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
77	W29	920166- 274	部材	把手？	24.4	(12.2)	4.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	旧河道
	W30	920166- 543	部材	紐掛けのある棒状材	6.0	4.6	1.8	２区	Ｂ地点	第２遺構面	旧河道
78	W31	920166- 514	農具	田下駄Ｄ類柄留め	47.7	8.3	3.2	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W32	920166- 507	部材	紐掛けのある棒状材	47.0	5.1	1.6	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W33	920166- 531	部材	不明	40.0	10.2	2.5	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W34	920166- 497	雑具	付け木	15.7	1.1	0.7	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W35	920166- 540	容器	蓋	17.1	17.5	3.6	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W36	920166- 532	容器	桶	25.4	15.0	4.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
79	W37	920166- 463	祭祀具	鳥形	13.2	2.4	0.9	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W38	920166- 457	祭祀具	鳥形	22.4	4.1	0.8	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W39	920166- 424	容器	漆椀	—	—	(5.75)	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W40	920166- 503	容器	漆椀	(8.3)	5.2	3.1	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W41	920166- 448	部材	桟？	12.4	2.8	1.7	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W42	920166- 449	部材	不明	12.1	7.3	1.5	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W43	920166- 439	容器	桶	28.2	(18.6)	2.7	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W44	920166- 530	容器	桶	(15.1)	(12.9)	10.5	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W45	920166- 545	農具	鋤先	35.2	10.9	1.6	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W46	920166- 443	服飾具	下駄	(19.7)	(10.3)	3.4	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W47	920166- 373	部材	箱？	17.9	4.0	0.3	２区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
80	W48	920166- 284	服飾具	下駄	22.3	8.8	5.3	２区	Ｃ地点	第１遺構面	SD101
	W49	920166- 287	容器	漆椀	—	—	5.4	２区	Ｃ地点	第１遺構面	SD101
	W50	920166- 285	容器	漆椀	(11.5)	(5.0)	(6.45)	２区	Ｃ地点	第１遺構面	SD101
	W51	920166- 290	容器	漆椀	(10.4)	(6.5)	4.7	２区	Ｃ地点	第１遺構面	SD101
	W52	920166- 328	服飾具	下駄	21.0	7.3	2.9	２区	Ｃ地点	第２遺構面	旧河道
	W53	920166- 332	部材	方形枠の桟	(16.9)	4.9	3.2	２区	Ｃ地点	第２遺構面	包含層
	W54	920166- 253	木簡	付札	(12.85)	(1.2)	(0.5)	２区	Ｃ地点	第１遺構面	SD101
81	W55	920166- 278	祭祀具	斎串Ｘ類	43.3	2.0	0.3	２区	Ｄ地点	第２遺構面	SD201
	W56	920166- 279	農具	田下駄Ａ類４欠式	(36.6)	18.3	1.5	２区	Ｄ地点	第２遺構面	SD201
	W57	920166- 205	祭祀具	斎串Ａ類	36.0	1.5	0.4	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W58	920166- 208	祭祀具	斎串Ａ類	16.4	(1.25)	0.6	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W59	920166- 272	祭祀具	斎串Ａ類	27.2	2.7	0.2	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W60	920166- 188	祭祀具	舟形	23.7	5.6	2.9	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W61	920166- 268	祭祀具	刀形	(20.65)	1.7	0.5	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W62	920166- 195	遊戯具	琴柱	3.7	11.7	0.6	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
82	W63	920166- 262	農具	田下駄Ａ類２孔式	43.7	15.6	2.5	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W64	920166- 212	農具	田下駄Ｂ類孔留め６孔式	25.1	11.4	1.4	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W65	920166- 243	農具	田下駄Ｃ類台形状枠園	11.3	28.5	1.4	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W66	920166- 201	容器	底板	11.4	11.1	0.7	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W67	920166- 196	部材	不明	9.5	8.7	1.0	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W68	920166- 228	部材	不明	34.7	3.9	1.7	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W69	920166- 258	部材	不明	39.8	2.7	2.3	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W70	920166- 259	部材	不明	33.8	11.9	2.3	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W71	920166- 251	部材	不明	13.6	4.4	3.4	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
	W72	920166- 215	部材	紐掛けのある棒状材	17.8	3.1	1.5	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
83	W73	920166- 580	農具	田下駄Ｄ類	111.0	46.0	3.4	２区	Ｄ地点	第１遺構面	旧河道
84	W74	920166- 25	祭祀具	斎串Ａ類	(24.0)	2.4	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD101
	W75	920166- 21	祭祀具	舟形	26.0	3.0	2.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD101
	W76	920166- 20	部材	底板？	45.1	14.3	1.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD101
	W77	920166- 26	木簡	付札	27.3	5.0	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD102
	W78	920166- 104	服飾具	下駄	24.7	13.2	3.3	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD102
	W79	920166- 1	容器	皿	16.5	2.1	12.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD102

第12表　木器一覧表（３）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
84	W80	920166- 130	部材	柄	14.2	3.5	2.8	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD102
85	W81	920166- 76	祭祀具	斎串Ｂ類	(20.1)	2.2	0.5	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD102
	W82	920166- 152	部材	箱	5.9	2.1	0.7	２区	Ｆ地点	第１遺構面	SD104
	W83	920166- 69	祭祀具	人形Ｃ類	(6.42)	3.1	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W84	920166- 127	祭祀具	人形Ｂ類	25.7	3.4	0.4	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W85	920166- 185	祭祀具	人形Ｄ類	17.0	3.6	1.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W86	920166- 41	祭祀具	人形C類	16.1	6.1	0.5	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W87	920166- 163	祭祀具	人形C類	56.0	3.8	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W88	920166- 95	祭祀具	人形Ｃ類	(53.0)	7.6	1.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W89	920166- 46	祭祀具	馬形Ａ類	22.4	4.4	5.5	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W90	920166- 40	祭祀具	馬形B類	34.0	3.6	0.8	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W91	920166- 35	祭祀具	斎串Ａ類	26.6	1.9	0.3	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W92	920166- 125	祭祀具	斎串Ａ類	(23.9)	3.0	0.7	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W93	920166- 170	祭祀具	斎串Ｃ類	(23.7)	1.5	0.7	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W94	920166- 160	祭祀具	斎串D類	44.8	2.1	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W95	920166- 176	祭祀具	鏃形	(9.1)	1.7	0.7	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
86	W96	920166- 64	木簡	付札	20.9	2.6	6.5	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W97	920166- 147	部材	不明	23.8	1.6	5.5	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W98	920166- 94	農具	田下駄Ｃ類台形状枠歯	11.0	26.1	2.1	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W99	920166- 45	容器	皿	(20.4)	1.1	(15.1)	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W100	920166- 252	部材	不明	7.5	5.0	4.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W101	920166- 143	部材	不明	52.3	4.2	4.3	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W102	920166- 93	木簡	卒塔婆	(25.4)	(4.9)	(0.45)	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W103	920166- 77	農具	鍬	20.9	12.7	4.0	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
	W104	920166- 134	祭祀具	馬形Ｃ類	16.9	3.2	0.6	２区	Ｆ地点	第１遺構面	旧河道
87	W105	920166- 575	建築部材	扉材	56.5	55.8	3.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
	W106	920166- 581	建築部材	扉材	128.0	69.0	3.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
	W107	920166- 573	部材	不明	(83.3)	5.9	5.4	２区	Ｂ地点	第２遺構面	包含層
	W108	920166- 83	部材	不明	64.0	17.2	3.5	２区	Ｆ地点	第２遺構面	SD202
	W109	920166- 569	部材	不明	121.2	14.0	2.2	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
	W110	920166- 129	部材	不明	53.4	33.6	3.4	２区	Ｄ地点	第２遺構面	旧河道
写真図版103	W331	920166- 576	建築部材	扉材	84.0	26.0	2.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
写真図版104	W332	920166- 579	部材	不明	120.0	42.0	2.5	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
	W333	920166- 574	部材	不明	55.0	33.0	3.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
	W334	920166- 578	部材	不明	60.0	37.5	2.0	２区	Ｂ地点	第２遺構面	シガラミ201
88	W111	940184- 4	容器	漆椀	10.2	3.2	6.8	３区	—	第１遺構面	SD101
	W112	940184- 210	木簡	卒塔婆	(12.8)	2.9	0.5	３区	—	第２遺構面	SD201
	W113	940184- 19	容器	箱形容器	(6.9)	13.3	1.2	３区	—	第２遺構面	SD201
	W114	940184- 24	農具	鎌柄	33.6	4.8	1.7	３区	—	第２遺構面	SD202
	W115	940184- 52	部材	不明	42.7	5.3	1.8	３区	—	第２遺構面	SD202
	W116	940184- 211	木簡	絵画木簡	(22.75)	3.6	0.5	３区	—	第２遺構面	SD203
	W117	940184-M 2	工具	斧柄	(52.85)	6.4	4.7	３区	—	第2～3遺構面	包含層
	W118	940184- 33	農具	田下駄Ｃ類孔留め	16.0	31.8	1.9	３区	—	第2～3遺構面	包含層
	W119	940184- 31	祭祀具	斉串Ａ類	(17.2)	1.7	0.4	３区	—	第2～3遺構面	包含層
89	W120	940184- 53	建築部材	梯子	36.6	4.7	2.7	３区	—	第2～3遺構面	包含層
	W121	940184- 68	農具	田下駄Ａ類３孔式	37.8	17.6	2.0	３区	—	第３遺構面	SD301
	W122	940184- 67	祭祀具	人形Ａ類	(9.8)	3.2	0.4	３区	—	第３遺構面	SD301
	W123	940184- 118	祭祀具	人形Ｃ類	(13.2)	3.8	0.7	３区	—	第3～4遺構面	包含層
	W124	940184- 49	祭祀具	鏃形	(9.9)	2.0	1.7	３区	—	第3～4遺構面	包含層
	W125	940184- 47	祭祀具	馬形Ａ類	24.0	4.0	1.1	３区	—	第3～4遺構面	包含層
	W126	940184- 45	容器	皿	(20.4)	7.6	1.2	３区	—	第3～4遺構面	包含層

第13表　木器一覧表（4）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
89	W127	940184- 55	農具	田下駄A類4欠式	52.2	12.6	2.1	3区	—	第3~4遺構面	包含層
	W128	940184-M 7	雑具	腰掛け	94.8	19.5	1.7	3区	—	第3~4遺構面	包含層
90	W129	940184- 120	祭祀具	人形C類	(21.4)	3.9	0.4	3区	—	第4遺構面	包含層
	W130	940184- 138	祭祀具	斉串A類	15.0	1.6	0.4	3区	—	第4遺構面	包含層
	W131	940184- 69	祭祀具	舟形	(23.2)	3.3	0.9	3区	—	第4遺構面	包含層
	W132	940184- 139	祭祀具	刀形	28.2	2.6	1.8	3区	—	第4遺構面	包含層
	W133	940184- 148	工具	木槌	9.4	3.8	3.0	3区	—	第4遺構面	包含層
	W134	940184- 113	工具	木槌	12.7	3.8	2.3	3区	—	第4遺構面	包含層
	W135	940184-M 5	農具	田下駄D類枘留め	64.9	12.7	1.9	3区	—	第4遺構面	包含層
	W136	940184- 97	農具	田下駄A類4欠式	(55.0)	17.4	1.1	3区	—	第4遺構面	包含層
	W137	940184- 116	農具	田下駄A類0孔式？	45.2	9.7	1.7	3区	—	第4遺構面	包含層
91	W138	940184- 129	農具	田下駄C類3孔式孔留め	27.8	12.4	2.9	3区	—	第4遺構面	包含層
	W139	940184- 72	農具	曲柄又鍬	(24.1)	(5.0)	1.4	3区	—	第4遺構面	包含層
	W140	940184- 77	農具	曲柄鍬	(22.1)	8.0	1.0	3区	—	第4遺構面	包含層
	W141	940184- 124	容器	栓	11.7	2.4	1.0	3区	—	第4遺構面	包含層
	W142	940184- 110	紡織具	紡錘車	5.7	5.5	0.7	3区	—	第4遺構面	包含層
	W143	940184- 208	紡織具	糸巻き	(29.0)	3.1	0.7	3区	—	第4遺構面	包含層
	W144	940184- 84	農具	田下駄D類横桟	57.9	4.6	1.1	3区	—	第4遺構面	包含層
	W145	940184-M 9	容器	柄杓	69.0	2.5	1.5	3区	—	第4遺構面	包含層
	W146	940184- 86	容器	槽	52.2	8.3	7.6	3区	—	第4遺構面	包含層
92	W147	940184- 142	農具	田下駄C類3孔式一体型	36.2	17.0	6.6	3区	—	第4遺構面	SD410⑬区
	W148	940184- 136	農具	田下駄A類4欠式	44.8	11.9	1.4	3区	—	第4遺構面	SD410⑬区
	W149	940184- 144	農具	田下駄B類3孔式孔留め	33.8	10.5	1.6	3区	—	第4遺構面	SD410⑬区
	W150	940184- 143	農具	田下駄A類3孔式	33.7	17.6	2.3	3区	—	第4遺構面	SD410⑬区
	W151	940184- 154	農具	田下駄C類孔留め	(11.3)	(27.5)	2.2	3区	—	第4遺構面	SD425①区
93	W152	940184- 176	農具	直柄横鍬	50.2	24.5	5.7	3区	—	第4遺構面	SK435⑦区
	W153	940184- 177	農具	直柄横鍬	42.8	18.1	5.4	3区	—	第4遺構面	SK435⑦区
	W154	940184- 178	農具	泥除け	49.8	21.6	1.6	3区	—	第4遺構面	SK435⑦区
94	W155	940184- 181	農具	田下駄A類4孔式	46.5	10.7	1.3	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	W156	940184- 194	農具	田下駄A類4欠式	38.1	14.3	2.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑥区
	W157	940184- 175	農具	田下駄A類4欠式	47.5	14.8	1.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み②区
	W158	940184- 163	祭祀具	斉串A類	(32.9)	2.3	0.4	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑦区
	W159	940184- 198	紡織具	紡錘車	6.3	—	1.1	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	W160	940184- 189	漁労具	アカ取り	(19.9)	(7.3)	3.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	W161	940184- 204	雑具	火鑽板	36.3	2.8	1.2	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	W162	940184- 203	部材	不明	21.5	4.7	4.1	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
95	W163	940184- 209	武器	刀装具(把頭)	10.0	5.1	2.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	W164	940184- 206	祭祀具	盾形？	27.9	(15.5)	1.2	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	W165	940184- 202	工具	木槌	(20.8)	5.5	4.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
96	W166	940184- 190	部材	不明	52.1	3.9	2.9	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	W167	940184- 155	部材	不明	47.3	4.3	2.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	W168	940184-M 35	用途不明品	不明	65.3	3.4	3.3	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	W169	940184-M 10	部材	不明	71.0	4.5	3.5	3区	—	第4遺構面	落ち込み⑤区
	W170	940184-M 36	用途不明品	不明	63.0	5.0	0.9	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
97	W171	940184-M 23	部材	不明	128.8	5.3	3.7	3区	—	第4遺構面	落ち込み①区
	W172	940184-M 37	部材	不明	103.4	9.3	6.0	3区	—	第4遺構面	落ち込み④区
	W173	940184-M 15	部材	不明	108.8	12.4	1.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み
	W174	940184-M 32	部材	不明	129.4	15.1	3.5	3区	—	第4遺構面	落ち込み
	W175	940184-M 41	建築部材	蹴放し、または楣	(110.0)	17.4	7.2	3区	—	第4遺構面	落ち込み
98	W176	940184-L 26	漁猟具	網枠	166.5	—	2.8	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区
	W177	940184-L 9	部材	不明	138.5	18.8	2.2	3区	—	第4遺構面	落ち込み③区

第14表　木器一覧表（５）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
98	W178	940184- L 40	部材	不明	141.0	10.8	7.6	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
99	W179	940184- L 76	部材	不明	166.0	14.0	3.4	３区	—	第４遺構面	落ち込み⑤区
	W180	940184- L 18	部材	不明	155.0	5.6	3.0	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
	W181	940184- L 67	運搬具	天秤棒	226.5	5.0	5.0	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
	W182	940184- L 63	部材	不明	244.0	5.3	5.0	３区	—	第４遺構面	包含層
100	W183	940184- L 22	部材	不明	353.4	14.0	4.2	３区	—	第４遺構面	包含層
	W184	940184- L 51	部材	不明	328.8	8.2	3.5	３区	—	第４遺構面	構造物401
	W185	940184- L 10	部材	不明	270.8	13.1	5.1	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
	W186	940184- L 19	部材	不明	282.0	6.8	2.1	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
	W187	940184- L 66	部材	不明	353.5	6.0	3.2	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
写真図版121	W335	940184- L 81	部材	不明	211.0	15.4	3.4	３区	—	第４遺構面	落ち込み②区
	W336	940184- L 62	部材	不明	214.0	27.9	2.4	３区	—	第４遺構面	落ち込み⑥区
写真122	W337	940184- L 15	部材	不明	142.8	6.2	2.8	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
写真図版123	W338	940184- L 17	部材	不明	174.0	16.0	3.8	３区	—	第４遺構面	落ち込み③区
	W339	940184- L 79	部材	不明	132.4	17.1	5.2	３区	—	第４遺構面	落ち込み②区
	W340	940184- L 72	部材	不明	140.0	7.8	4.7	３区	—	第４遺構面	落ち込み⑤区
101	W188	950122- 197	祭祀具	馬形Ｂ類	28.6	4.7	1.5	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
	W189	950122- 198	農具	田下駄Ａ類４欠式	37.1	12.9	1.7	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
	W190	950122- 188	農具	田下駄Ｂ類３孔式孔留め	37.8	7.7	1.5	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
	W191	950122- 156	農具	田下駄Ａ類３孔式	26.4	12.3	2.1	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
	W192	950122- 196	部材	不明	28.2	11.4	1.9	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
	W193	950122-M 22	容器	槽	(82.4)	(13.1)	(5.6)	４区	Ａ地点	第１遺構面	包含層
102	W194	950122- 162	木簡	木簡	21.3	3.0	1.2	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD102
	W195	950122- 223	農具	田下駄Ａ類４欠式	34.6	7.6	1.5	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD103
	W196	950122- 239	農具	田下駄Ｃ類３孔式木釘留め	29.7	10.1	1.1	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD103
	W197	950122-M 33	農具	田下駄Ａ類４欠式	58.4	14.5	1.8	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD103
	W198	950122- 218	服飾具	下駄	24.4	11.4	1.9	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD103
	W199	950122-M 34	部材	梯子？	(89.8)	4.8	3.2	４区	Ａ地点	第１遺構面	SD103
103	W200	950122-M 29	部材	不明	87.0	5.9	3.0	４区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W201	950122- 286	容器	皿	(20.4)	(1.7)	(15.2)	４区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W202	950122- 216	用途不明品	不明	(37.9)	(7.9)	1.2	４区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W203	950122- 260	用途不明品	不明(栓？)	16.1	2.2	1.7	４区	Ｂ地点	第１遺構面	包含層
	W204	950122- 311	農具	田下駄Ａ類３欠式	37.8	17.0	2.1	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD103
	W205	950122- 395	容器	漆椀	(16.7)	(7.9)	(8.7)	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD101
	W206	950122- 111	容器	漆椀	13.6	4.1	6.8	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD101
	W207	950122- 396	容器	漆椀	—	—	6.7	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD101
104	W208	950122- 293	工具	木槌	(11.7)	4.5	3.3	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W209	950122- 308	農具	曲柄又鍬	25.2	5.7	0.8	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W210	950122- 304	農具	田下駄Ｃ類	36.3	13.1	2.5	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W211	950122- 283	農具	田下駄	14.6	36.4	2.0	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W212	950122- 288	漁猟具	アカ取り	42.0	(17.2)	7.0	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
	W213	950122- 292	農具	田下駄Ａ類３孔式	42.3	13.3	1.8	４区	Ｂ地点	第１遺構面	SD102
105	W214	950122- 301	農具	田下駄Ａ類４欠式	53.2	13.1	2.0	４区	Ｂ地点	第１遺構面	旧河道
	W215	950122- 302	容器	曲物	16.6	16.5	0.9	４区	Ｂ地点	第１遺構面	旧河道
	W216	950122- 300	農具	田下駄(方形枠支柱)？	53.5	5.1	2.9	４区	Ｂ地点	第１遺構面	旧河道
	W217	950122- 282	農具	田下駄(方形枠横桟)？	55.8	4.4	1.5	４区	Ｂ地点	第１遺構面	旧河道
106	W218	950122- 4	農具	田下駄Ｃ類３孔式木釘留め	25.3	14.1	1.9	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W219	950122- 77	農具	田下駄Ｃ類釘・孔併用留め	34.9	10.8	1.6	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W220	950122- 78	農具	田下駄Ｂ類３孔式孔留め	48.7	12.2	1.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W221	950122- 61	農具	田下駄Ａ類４欠式	37.7	13.6	1.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W222	950122- 3	農具	田下駄Ｄ類抉留め	77.9	7.7	1.3	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層

第15表　木器一覧表（６）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
107	W223	950122- 100	農具	田下駄Ａ類４孔式	28.8	20.8	1.8	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W224	950122- 89	農具	田下駄Ａ類４孔式	35.8	27.4	2.1	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W225	950122- 79	農具	田下駄Ａ類４孔式	49.8	18.8	1.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W226	950122- 90	農具	田下駄Ａ類４孔式	(29.0)	(32.5)	(2.85)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
108	W227	950122- 83	農具	田下駄Ａ類３孔式	(34.35)	17.9	2.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W228	950122- 2	農具	田下駄Ａ類３孔式	43.8	24.2	2.6	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W229	950122- 88	部材	不明	(29.2)	(20.6)	(1.7)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
109	W230	950122- 84	容器	合子脚	8.5	7.5	4.8	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W231	950122- 14	雑具	腰掛け	29.7	15.4	3.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W232	950122- 73	容器	槽	35.9	(9.4)	6.2	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W233	950122- 66	部材	不明	(44.5)	(12.15)	(1.45)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
110	W234	950122- 67	部材	不明	(48.7)	15.7	1.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W235	950122-Ｍ 1	部材	不明	(70.3)	8.9	3.2	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W236	950122-Ｍ 18	部材	不明	86.7	29.1	3.0	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
111	W237	950122- 21	祭祀具	馬形Ｂ類	20.2	3.2	0.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W238	950122- 33	祭祀具	馬形Ｂ類	18.1	2.9	1.0	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W239	950122- 25	祭祀具	斉串	(21.55)	1.3	0.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W240	950122- 24	祭祀具	斉串Ａ類	37.0	1.9	0.6	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W241	950122- 166	服飾具	櫛	(6.4)	(1.6)	(1.2)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W242	950122- 165	容器	漆椀	—	—	7.5	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W243	950122- 31	食事具	箸	22.5	0.7	0.6	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W244	950122- 31	食事具	箸	25.4	0.8	0.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W245	950122- 63	用途不明品	不明	24.6	5.0	1.7	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W246	950122- 39	用途不明品	箱？	31.9	(4.8)	0.5	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W247	950122- 8	用途不明品	不明	15.8	8.9	0.8	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W248	950122- 32	用途不明品	不明	7.5	(4.6)	1.1	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
	W249	950122- 30	用途不明品	不明	(15.5)	9.1	5.5	４区	Ｃ地点	第１遺構面	包含層
112	W250	950122- 108	農具	田下駄Ｂ類３孔式孔留め	(41.6)	(12.5)	(2.0)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	ＳＤ103
	W251	950122- 109	農具	田下駄Ｂ類３孔式孔留め	42.9	12.6	1.8	４区	Ｃ地点	第１遺構面	ＳＤ103
	W252	950122- 106	農具	穂摘具	(11.8)	5.4	0.9	４区	Ｃ地点	第１遺構面	ＳＤ103
	W253	950122-Ｍ 12	建築部材	梯子	(80.7)	(9.2)	(3.0)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	ＳＤ103
	W254	950122- 117	農具	曲柄又鍬	35.5	6.5	1.5	４区	Ｃ地点	第１遺構面	ＳＤ102
	W255	950122- Ｍ7	部材	不明	(97.6)	(13.8)	(1.2)	４区	Ｃ地点	第１遺構面	旧河道
113	W256	950122- 160	用途不明品	不明	6.4	1.7	0.3	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W257	950122- 135	用途不明品	台座脚？	3.9	5.6	(2.0)	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W258	950122- 172	容器	漆椀	—	—	(6.8)	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W259	950122- 142	容器	曲物	17.4	(12.3)	1.2	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W260	950122- 131	容器	皿	(24.4)	5.8	(11.6)	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W261	950122- 317	紡織具	糸巻き	9.2	1.1	1.0	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W262	950122- 143	用途不明品	不明	27.2	5.1	1.0	４区	Ｄ地点	第１遺構面	堀101
	W263	950122- 120	工具	錐	17.6	1.9	1.9	４区	Ｄ地点	第４遺構面	包含層
	W264	950122- 321	服飾具	下駄	20.8	7.3	3.0	４区	Ｄ地点	第３遺構面	包含層
	W265	950122- 314	服飾具	下駄	20.0	10.0	1.5	４区	Ｄ地点	第３遺構面	包含層
	W266	950122- 118	服飾具	下駄	19.6	9.3	3.7	４区	Ｄ地点	—	—
	W267	950122- 97	服飾具	下駄	(7.2)	7.9	2.1	４区	Ｄ地点	—	—
	W268	950122- 354	容器	漆椀	(12.8)	5.7	(8.2)	４区	Ｄ地点	—	—
	W269	950122- 169	容器	漆椀	(12.4)	(6.7)	(5.9)	４区	Ｄ地点	—	—
	W270	950122- 122	容器	桶	(19.1)	5.4	1.1	４区	Ｄ地点	—	—
114	W271	950122- 217	木簡	木簡	10.5	2.1	0.5	４区	Ｄ地点	第２遺構面	包含層
	W272	950122- 157	木簡	木簡	6.1	1.8	0.3	４区	Ｄ地点	第２遺構面	包含層
	W273	950122- 159	木簡	荷札木簡	28.2	3.8	0.5	４区	Ｄ地点	第２遺構面	包含層

第16表　木器一覧表（７）

図版	報告番号	登録番号	種　類	器　種	法　量			出土場所			
					長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	地区	地　点	遺構面	遺　構
114	W274	950122- 161	祭祀具	絵馬	(5.2)	(4.9)	0.3	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W275	950122- 150	容器	曲物の底板	9.7	8.8	0.6	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W276	950122- 177	容器	漆椀	15.1	8.7	8.1	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W277	950122- 170	容器	漆椀	(15.2)	—	—	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W278	950122- 173	容器	漆椀	(14.9)	(9.1)	(8.25)	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W279	950122- 174	容器	漆椀	14.1	6.0	7.5	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W280	950122- 141	容器	槽	52.6	(26.6)	1.2	４区	D地点	第２遺構面	包含層
	W281	950122- 137	容器	桶	(23.15)	10.4	1.1	４区	D地点	第２遺構面	包含層
115	W282	950122- 419	祭祀具	羽子板	(28.7)	6.2	1.0	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W283	950122- 398	木簡	木簡	(10.1)	(2.2)	0.1	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W284	950122- 400	木簡	木簡	(11.1)	3.0	0.2	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W285	950122- 408	木簡	付札	11.4	2.4	0.3	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W286	950122- 394	服飾具	櫛	7.8	4.3	1.2	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W287	950122- 343	服飾具	下駄	21.1	10.8	5.9	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W288	950122- 373	服飾具	下駄	20.2	8.9	1.9	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W289	950122- 337	容器	漆椀	—	—	—	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W290	950122- 391	容器	漆椀	(14.6)	9.8	(6.5)	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W291	950122- 392	容器	漆椀	9.3	2.7	6.1	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W292	950122- 405	容器	柄杓	14.0	7.9	6.4	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W293	950122- 347	容器	曲物	9.0	8.7	0.7	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W294	950122- 424	容器	曲物	9.7	(6.8)	0.2	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W295	950122- 384	容器	曲物	9.6	(9.1)	0.2	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W296	950122- 423	容器	曲物	18.7	(10.0)	0.5	４区	D地点	第４遺構面	包含層
	W297	950122- 420	容器	曲物	(32.05)	(11.0)	(0.8)	４区	D地点	第４遺構面	包含層
116	W298	950122- 431	容器	桶	(18.0)	5.3	1.1	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W299	950122- 417	容器	桶	(12.9)	(4.85)	0.6	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W300	950122- 380	用途不明品	不明	18.1	4.0	1.1	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W301	950122- 385	用途不明品	不明	11.9	4.5	0.7	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W302	950122- 407	食事具	切匙	(21.3)	(4.1)	(0.6)	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W303	950122- 432	食事具	切匙	(19.8)	(2.3)	0.2	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W304	950122- 370	用途不明品	不明	8.5	6.6	4.5	４区	D地点	第４遺構面	堀401
	W305	950122- 329	容器	漆椀	(14.4)	5.6	6.8	４区	D地点	第４遺構面	SD401
	W306	950122- 332	容器	曲物	11.7	11.6	0.9	４区	D地点	第４遺構面	SD401
写真132	W341	950122- 29	用途不明品	不明	16.2	3.0	1.2	４区	D地点	機械掘削	包含層
写真図版137	W342	950122- 105	容器	柄杓	20.0	5.3	0.7	４区	D地点	第２遺構面	包含層
		950122-M 20	容器	柄杓の柄	91.5	2.8	2.0				
写真138	W343	950122- 195	容器	かご（編み物）	8.5	3.6	1.4	４区	D地点	不明	不明

123	W344	880080- L 11	部材？	線刻画木製品	197.3	16.2	2.0	袴狭遺跡	深田１区	第３遺構面	SD304

第17表　銭一覧表

報告番号	銭について			出土場所				調査番号	実測番号
	銭名	初鋳年代	備考	地区	地　点	遺構面	遺　構		
M1	開元通寶	621	背上月	2区	B地点	第2遺構面	SD202	920166	1
M2	開元通寶	960		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	4
M3	天聖通寶	1023		4区	C地点	機械掘削	包含層	950122	10
M4	皇宋通寶	1038		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	2
M5	皇宋通寶	1038		2区	B地点	第2遺構面	SD202	920166	2
M6	熙寧元寶	1068		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	7
M7	元豊通寶	1078		3区	—	第1遺構面	包含層	940184	1
M8	元豊通寶	1078		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	5
M9	元豊通寶	1078		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	6
M10	紹聖元寶	1094		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	3
M11	政和通寶	1111		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	1
M12	政和通寶	1111		4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	8
M13	永楽通寶	1408		2区	B地点	第2遺構面	SD203	920166	4
M14	寛永通寶	1739	鉄製	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	9

第18表　金属器一覧表

報告番号	製品名	遺物名	法　量			出土場所				調査番号	実測番号
			長さ	幅	高(厚)	地区	地点	遺構面	遺構		
M15	銅製品(真鍮)	環状銅製品	4.8	4.8	0.2	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	12
M16	銅製品	環状銅製品	5.4	3.3	0.6	2区	F地点	第1遺構面	SD102	920166	6
M17	鉄製品	小　刀	28.1	2.2	0.6	2区	F地点	第1遺構面	SD102	920166	10
M18	鉄製品	小　刀	25.3	2.9	0.7	2区	F地点	第1遺構面	SD102	920166	11
M19	鉄製品	鉄　鏃	19.1	5	0.4	2区	F地点	第1遺構面	SD103	920166	9
M20	鉄製品	鉄　鏃	15.7	4.4	0.5	2区	B地点	第2遺構面	SK201	920166	12
M21	鉄製品	環状鉄製品	2.8	2.8	0.6	3区	—	第1遺構面	SD101	920166	2
M22	鉄製品	鋤　先	19.1	18.5	0.5	2区	F地点	第1遺構面	SD102	940184	7
M23	鉄製品	鎌	7.3	1.5	0.2	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	14
M24	鉄製品	毛抜き	9.3	2.2	0.7	4区	D地点	第4遺構面	包含層	950122	21
M25	鉄製品	釘	9	0.5	0.4	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	16
M26	鉄製品	釘	7.7	1.3	0.7	4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	19
M27	鉄製品	釘	7.5	1.1	0.9	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	17
M28	鉄製品	釘	5	0.8	0.3	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	18
M29	鉄製品	釘	4.7	0.8	0.6	4区	D地点	第1遺構面	畝状遺構	950122	20
—	金製品	金　箔	2.8	1.8	0.1	4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	11
—	鉄製品	スラッグ	12.3	10.9	2.7	4区	D地点	第4遺構面	SD401	950122	22

第19表　石製品一覧表

報告番号	遺物名	法量			備考	出土場所				調査番号	実測番号
		長さ	幅	厚さ		地区	地点	遺構面	遺構		
S1	石釧	7.4	7.4	1.5	緑色凝灰岩	2区	D地点	第2遺構面	SD201	920166	148
S2	管玉	3.1	0.9	0.9	滑石	2区	B地点	第2遺構面	包含層	920166	145
S3	石鏃	2.6	1.9	0.3	サヌカイト	1区				930082	149
S4	磨石	13.4	6	3.9		3区	—	第1遺構面	包含層	940184	2
S5	砥石	11.2	3.8	1.4		3区	—	第4遺構面	落ち込み	940184	3
S6	砥石	8.45	3.8	2.6		4区	B地点	第1遺構面	包含層	950122	12
S7	砥石	18	8.4	4.3		4区	C地点	第1遺構面	包含層	950122	13
S8	砥石	15	9	2		3区	—	第4遺構面	包含層	940184	4
S9	硯	10.8	6.3	1.3		4区	D地点	第1遺構面	包含層	950122	105
S10	(水晶)				自然石	3区	—	第4遺構面	落ち込み	940184	5

付 編　袴狭遺跡出土線刻画木製品について

第１節　はじめに

ここで報告する遺物は、小野川放水路事業に伴って1988年度（昭和63年度）におこなった袴狭遺跡（当時は坪井遺跡と呼称）の確認調査時（調査番号880080）に出土したものである。しかし、調査終了後、台帳等に記載されないまま大型水槽に保管されることとなり、遺物が存在していることさえ知られないままとなっていた。特に、確認調査で出土したこともあって後回しにされ、その間、木器を保管する木器保存処理担当者が３度に渡って交代したこともあり、結果として袴狭遺跡の報告書完了時まで認知されないままとなっていた。

やがて、保存処理作業を進める中でこの遺物の保管された大型水槽を整理することとなり、その作業中に初めて線刻画の存在が明らかとなった。そこで、調査は終了していたものの、急遽、記者発表を行い、一般に広く公表されることとなった（平成12年５月31日）。

その後、平成12年10月15日に『古代船団但馬に現る！』と題したシンポジウムを開催し、広く一般の方々へ公開すると同時に、国立歴史民俗博物館長　佐原真先生、神戸商船大学名誉教授　松木哲先生、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所部長　工楽善通先生の各先生方から様々な検討が加えられた。

さらに、平成12年11月18日には出土した地元但馬でも公開の場を設け、当教育委員会埋蔵文化財調査事務所職員が報告会を行った。

このような公表・公開以降、雑誌等でも取り上げられ、その意味するところについて、いろんな角度から検討が加えられている[(1)]。

また、学術的な正式報告については、袴狭遺跡の報告書[(2)]において報告することができなかったため、同じ開発事業に伴って調査された入佐川遺跡の報告書である本書において報告を行うこととなった。報告番号はW344である。

第２節　出土状況

【確認調査での出土】

線刻画木製品は、袴狭遺跡の確認調査時に第３トレンチから出土した。このトレンチ南側からは大型の木器がまとまって出土しているが、板材や棒材が中心で、特別な加工のあるものは認められなかった。この時点では線刻の存在が気づかれていなかったので、詳細な出土状況は明らかにできない。

【全面調査との関係と成果】

平成５年度に、この第３トレンチ周辺は袴狭Ⅶ（Ｂ－１）区、調査番号930124として全面調査された。この地区は最終的に深田１区として報告書に記されている。

深田１区は調査を行った中で最も下流に位置する調査区である。すぐ南側を流れる袴狭川は約200ｍ下流で入佐川と合流し、やがて出石川に合流する。調査面積は8,657㎡である。第１遺構面から第３遺構面までの３つの遺構面が検出されている。

全面調査の結果、第３トレンチの場所は深田１区第３遺構面で検出された溝（SD304）と重なっており、そこには確認調査時に出土したような大型木器のまとまりがSD304をまたぐように出土していた。このような大型木器の出土状況、および出土レベル、層位から、線刻画木製品は袴狭遺跡の報告書での深田１区第３遺構面に伴うものと考えられ、特に大型木器の集中状況からSD304周辺の大型木器集中部からの出土であると考えられるに至った。

深田１区第３遺構面からは溝が11条と畦畔が検出され、当地が水田であったことが判明した。線刻画木製品が出土したSD304は幅１ｍ前後、深さ10～20㎝、調査区内での長さは約53ｍを測る。東から西の方向へ蛇行気味に走行し、SD302に合流する。また、途中からSD305が分岐する。埋土は腐植土である。大型木器集中部は調査区の中央部南側で認められ、周囲では杭が不規則に打ち込まれていた。

【他の出土遺物】

この深田１区第３遺構面から出土した遺物には、同じ確認トレンチから同じ状況で出土した部材（袴狭遺跡報告書のW23。以下、報告番号は袴狭遺跡の報告書による）、梯子（W24）、板材（W25）がある。

全面調査では木器が多く出土し、調査区全体で28リットル入りのコンテナ909箱、点数にして13,000点を数える。1.3ｍ以上の大型木器だけでも303点が出土している。一方、土器はほとんど出土しておらず、調査区全体で28リットル入りのコンテナ５箱が出土したに過ぎない。

線刻画木製品が出土したのと同じSD304からは撥形の透かし彫りのある板（W1470）と、用途不明品（W1473）が出土した。また、同じ第３遺構面で検出されたSD306からは田下駄（W1472）、SD310からは木製穂摘具（W1471）、SD313からは建築部材（W1873）が出土している。

さらに、注目される遺物として、第３遺構面直上からは楽器の一種である琴板と推定されている箱形木製品（W1467～1469）が出土している。

土器は第３遺構面で検出されたSD301から弥生土器壺底部（1090）と、同じく甕（1091）の２点が図示できたにすぎない。

第３節　遺　物

線刻画が確認された当初、線は薄い刃物で描かれていたため、幅をもった線ではなく、単に切れ目が入っていたに過ぎず、明瞭には見えていなかった。その後、実測、写真撮影、新聞発表を行う中で若干の乾燥が進み、保存処理後の現在では、かなり幅をもった深い線となっている。

【全体について】

線刻画木製品（W344）は片側が欠損しており、現存長197.3㎝、幅16.2㎝、厚さ2.0㎝を測る板材である。樹種はスギ、木取りは板目取りで、スギの割裂性を利用して製材されている。そのため、材面には晩材部と早材部の境が明瞭な段差をもって軸方向に走行するのが観察され、特に表面（船の線刻がある面）において顕著である。表面、裏面とも特に調整されたような痕跡は認められず、凹凸を残したままとなっている。なお、表面が木の中心側で、裏面が木の外側である。

側面部分についても同様に調整は認められず、凹凸が著しいが、欠損していない側の小口部分につ

いては板材を折るために付けられた加工が認められる。

【線刻画について】

表面の線刻は、現状では板材の右側に偏った部分に描かれており、その範囲は約108cmにわたる。しかし、右側が欠損しており、線刻の状況からさらに右側に延びることが明らかであるため、本来の板材の中で線刻がどのような位置をしめるのかは明らかでない。また、線が完結していないものや、絵と絵が重複するものなどがあり、すべてが独立した個々の絵を描いているのではない可能性もあるが、ここでは便宜的に全ての線刻画に①～⑰の番号を付して記述する。

なお、個々の計測値や、簡単な観察については第20表に示す。

全体の構図としては、大きく左右の２つに分かれており、左側には①が他と離れて単独で描かれている。右側には残りの②～⑰が描かれているのであるが、これらは長大な⑤を中心として囲むように配置され、②が左側、⑥・⑦・⑩が上側、⑪～⑮が右側、③・④・⑧・⑨・⑯・⑰が下側に描かれている。

第20表　線刻画計測表

船の番号	法量(cm)		形　状				
	長さ	高さ	規模	完成度	形態	舷側板の窪み	その他
①	11.2	2.1	小型	完全	1類	左側	丸木船部の船首側が上方に折り返される
②	8.3	1.3	小型	完全	2類	左側	船尾から３号船の船首に線が引かれる。
③	13.1	1.8	小型	完全	2類	左側	４号船と同一か？船首から２号船の船尾に線が引かれる。中央にも２号船から縦方向に線が引かれる。４号船と船尾で重なる。
④	10.8	2.5	小型	完全	2類？	？	３号船と同一か？船尾に縦線。船尾で３号船と重なる。中央に２号船から縦線が引かれる。
⑤	37.2	2.5	大型	完全	2類	両側	舷側の線を引くとき、中央やや右側で線を継いでいる。
⑥	12.0	1.2	小型	完全	2類	左側	７号船の後で、７号船を避けるように描かれる。
⑦	8.8	3.2	小型	完全	1類	左側	６号船と重なり、６号船より先に描かれる。
⑧	—	4.0	小型	船首のみ	1類	なし	９号船と重なる。
⑨	12.7	3.0	小型	完全	1類	左側	丸木船部と舷側板の境が船首から船尾まで描かれる。船首･船尾ともに二重に描かれるが、互いに直接的な関連はない。
⑩	10.3	3.0	小型	完全	1類	左側	舷側板のくぼみが二重に描かれる。
⑪	11.7	3.5	小型	完全	1類	左側	船尾が二重に描かれる。５号船の船底の線が延びており、それを避けるようにして11号船の船底の線が描かれる。
⑫	20.0	1.7	中型	完全	2類	左側	13・14号船と重なる。
⑬	—	2.8	小型	船首のみ	1類？	？	12・14号船と重なる。船首のみ。14号船を描くときの失敗か？
⑭	10.4	3.2	小型	完全	1類	左側	12・13号船と重なる。
⑮	4.5	1.3	小型	痕跡のみ	？	？	詳細不明
⑯	11.9	1.5	小型	ほぼ完全	1類	？	丸木船部と縦板のみ描く。丸木船部と舷側板との境の船を細い線で描く。
⑰	14.3	1.3	小型	完全	—	—	他の船の絵とは異なる。

これらの絵は不明な⑮・⑰を除いて船、特に船形埴輪に見られる準構造船を描いていることが明らかである。いずれも装飾性に乏しく、船体のみが描かれている。

次に、個々の線刻画について観察する。①は舷側の左側が一段高くなっており、右側は上方へ反り上がっている。丸木船部左側の突出部は線を上へ折り返すことで表現されており、上方へゆるく彎曲する。②も丸木船部左側の突出部が線を上側に折り返すことで表現されている。舷側の左側は一段高くなっており、２本線で表現されている。右側は上方へ反り上がっている。ここで注目すべき点は②の右側先端から③の左側先端に線が引かれていることである。この線は途中で板材に存在する段を越えて引かれたために途中でずれており、このずれを修正して意識的に③の左側先端に向けて引ききっている。

③は左側の丸木船部の突出がほとんどなく、直線的に若干延びているだけである。舷側左側は一段高くなっており、右側は２本の線が接している。④は③と重複して描かれている。船底の線の右側は③の線と平行して延び、右端で上下方向に引かれた線により③の右端と接する。この④については全体の形状が表現されておらず、また、右側が③と共有していることから③の一部である可能性が高い。

⑤は長さ約37センチメートルを測り、最も長い。舷側板は左右の両側で一段高くなっており、ほぼ左右対称に描かれている。丸木船部の突出はなく左右両側とも直線的に延びるだけであるが、右側については直線的に長く延びており、⑪の右側と接する。⑥は⑦とほとんど重複している。丸木船部の突出はなく、船底の線は左右両側とも直線的に若干延びるのみである。左側の舷側は一段高く描かれているが、右側については舷側全体が大きく蛇行しており、明らかでない。舷側右側は鋭角に閉じている。

⑦は⑥とほとんど重複している。丸木船部左側に突出部があり、線を下側に折り返すことにより表現される。船底の線は⑤の舷側の線と共有している。舷側左側は一段高くなっており、右側は船底の線と共に上方へ反り上がっている。⑧は左側のみ描かれており、横に倒したM字形を呈する。竪板と突出した丸木船部を描いたものと考えられる。⑨は舷側の左側が一段高くなっており、右側は船底の線と平行して上方に反り上がり、上下方向の線で閉じられている。丸木船部左側の突出部は下側に折り返すことによって描こうとしているが、船底の線が右端まですでに完結しているために線を引けず、途中でやめている。そこで、竪板と丸木船部の突出部との間に無理に線を書き足し、丸木船部の突出を表現している。⑧はこの左端での書き損じを大胆に引き直したものであるのかもしれない。

⑩は下側に折り返すことによって描かれた丸木船部左側の突出部、舷側左側の高まり、舷側と船底の線が平行し、大きく反り上がった右側の表現など、もっとも均整のとれた線刻画である。⑪は⑤の船底の線の延長に近接して描かれたもので、舷側左側の高まり、舷側右側の反り上がりがある。舷側右側にも書き足したような高まりが認められるが、単に線の揺れであるかもしれない。船底の線は⑤の線を避けるようにして描かれている。

⑫は⑬・⑭と重複して描かれている。丸木船部の左側は突出しておらず、船底の線がやや延びる程度で、⑪の右側船底部と接する。舷側の左側は一段高く、右側は大きく上方に反り上がっている。この舷側右端と船底の線は⑭と共有しているが、中程で線を継いでいる。⑬は左の竪板と舷側のみ描かれている。⑭の竪板と平行し、⑬の線が消える場所と⑭の線刻画が始まる場所がほぼ同じ位置にあることから、⑭の線刻画の一部、あるいは引き直しであるとも考えられる。⑭は船底と舷側右側の線を⑫と共有する。舷側左側は一段高く、左端は丸木船の突出が描かれる。船底の線は中程で継がれている。

⑮は線刻の一部であると考えられるが、全体は欠損しているため明らかでない。⑯は丸木船部と竪板のみ表現してあり、描く途中の状態であろう。丸木船部左側が突出し、上方に若干彎曲している。丸木船部を上下の２線を使って表している。⑰は他の線刻画と形状が大きく異なることから、船を描いているとは言い難い。魚を表しているとも考えられる。

また、各線刻の右側で顕著に認められる細かい刻みは、線を引く時に偶然木がひび割れたものと思われる。

次に裏面の線刻画であるが、ほぼ上下対象で、左側から２本の平行な線が２組み延び、右側で上下に彎曲して開く。右端は上下それぞれ１本ずつの線で内側にくびれる線が描かれている。

第４節　線刻画の検討

線刻画は特徴から準構造船を描いているのは明らかであり、突出部が折り返されて明確に表現されたもの（１類）と、船底の線が若干突出するのみで折り返されないもの（２類）の２種に分けられる。この２種はこれまで船形埴輪や他の船の線刻画で表現されているような丸木船部が突出し、前後両側が口を開けたようになったもの（例：高廻り２号墳[3]）と、丸木船部が突出しないもの（例：高廻り１号墳[4]）の２種に対応するものと考えられる。

また、前後の表現が異なるのはニゴレ古墳出土船形埴輪[5]のような形を表しているのかもしれない。

これら線刻画は左側が側面図、右側は船底の線と舷側の線が平行して上方へ彎曲することから平面図を描いていると考えられ、異なる２視点からの図を組み合わせた多視点画、すなわちイメージ画[6]であることがわかる。よって、これらの絵は佐原真氏のいう「絵の文法」に照らして解釈する必要があろう。

氏の指摘のように絵の大小は実際の大きさと関係なく、大切な画像を大きく描くことを考慮すると、大きく描かれた⑤の船は他の船との相対的な大きさを表しているのではなく、何らかの特別な意味を持った船を表している可能性が考えられる。三重県宝塚古墳[7]のような大刀、威杖、蓋によって権威を表現したのと異なり、大きさで権威を表現したのかもしれない。

また、いずれの船も左側を向いているのは、右利きの人が描くと左を向きやすいことから、特に左向きには意味はない可能性が高い。

さらに、絵の配置には基底線上の絵と基底面上の絵の２者があるとされている。今回の線刻画は⑤、⑪、⑫、⑬、⑭が線上に並んでおり、基底線上に描かれているように窺えるが、全体としては上下にも展開して描かれており、基底面上の絵であることがわかる。

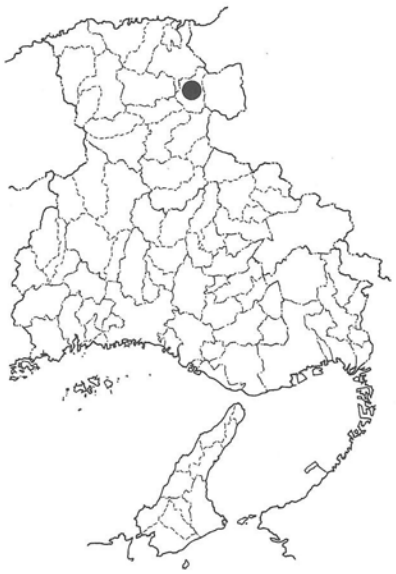
これらの船が当初から何らかの計画性をもって複数の船を描こうとしたのか、単体の船を多数描いた結果、複数となったのかどうかが問題として残る。これについては今後の検討にゆだねたい。

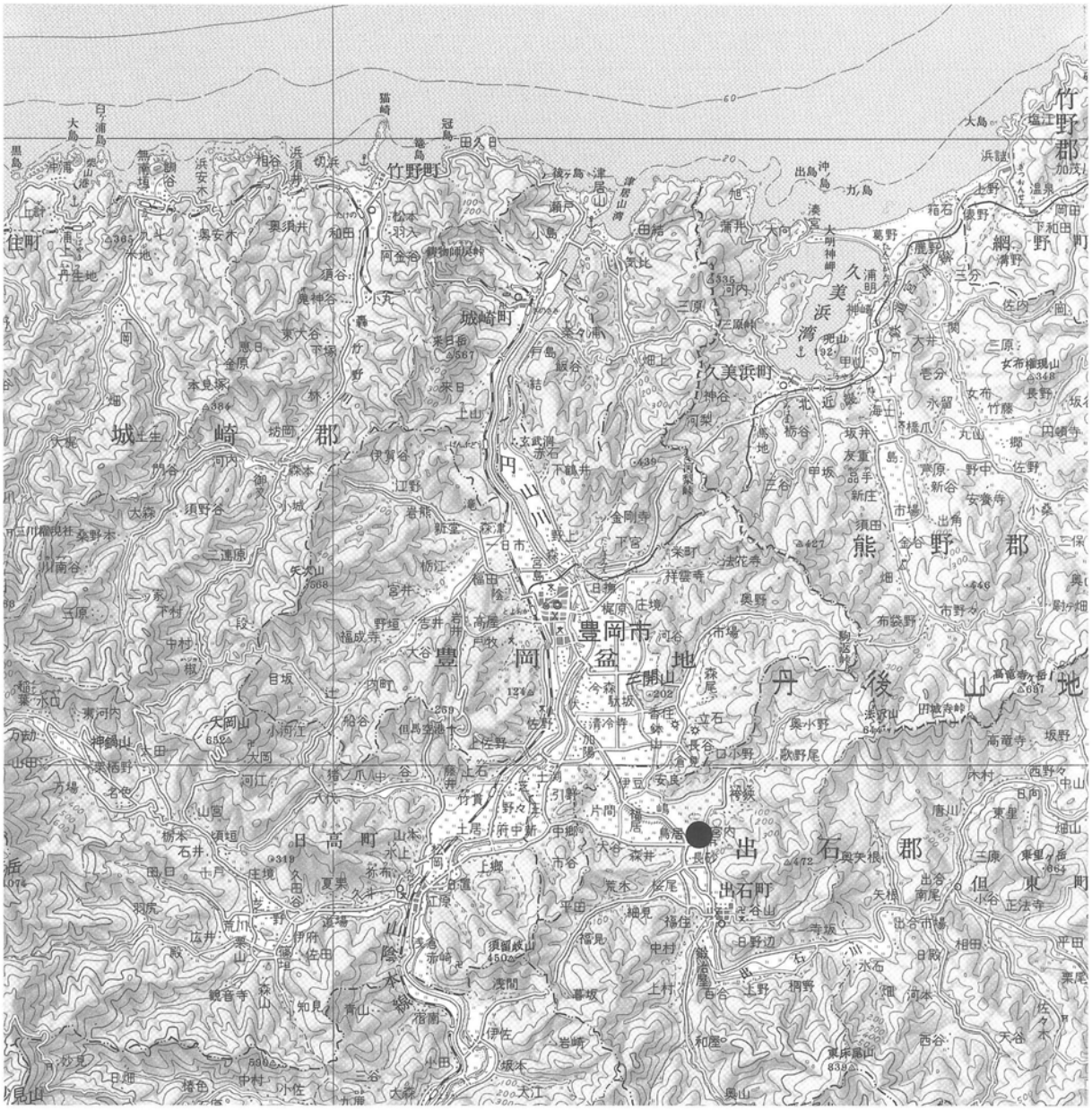
【参考文献】

（１）佐原真「弥生･古墳時代の船の絵」『考古学研究』第48巻第１号（通巻189号）考古学研究会　2001年
門脇禎二「日本海文化と日本古代史」『むきばんだ　やよい塾通信』No.7　2000年
（２）兵庫県教育委員会『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告　第197冊　2000年
以下、袴狭遺跡の報告書は当文献に同じ。

(3)大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ　1991年
(4)(3)に同じ。
(5)弥栄町教育委員会『ニゴレ古墳』京都府弥栄町文化財調査報告　第5集　1988年
(6)佐原真「古墳時代の絵の文法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集　国立歴史民俗博物館　1999年
　佐原真・春成秀爾『原始絵画』歴史発掘　第5巻　1997年
(7)松阪市教育委員会『松阪宝塚1号墳調査概報』学生社　2001年

図　版





遺跡の位置

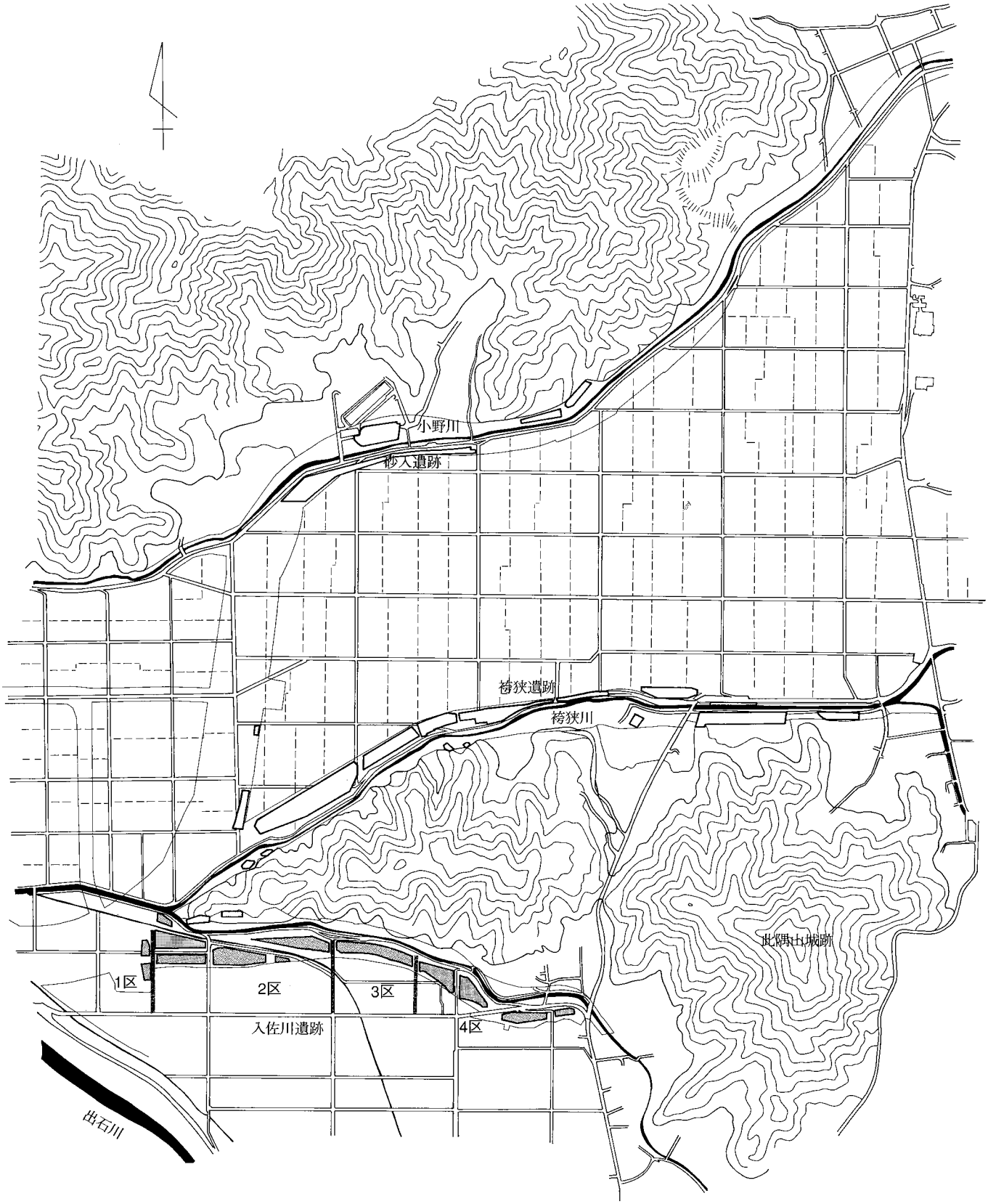
図版2

1. 入佐川遺跡
2. 嶋遺跡
3. 下安良城山古墳
4. 安良古墳群
5. 田多地古墳群
6. 蝉山古墳群
7. 田多地小谷古墳群
8. 田多地小谷遺跡
9. 田多地引谷墳墓群
10. 砂入遺跡
11. カヤガ谷古墳群
12. カヤガ谷墳墓群
13. カヤガ谷横穴
14. 篠谷２号墳
15. 荒木遺跡
16. 小野小学校裏山遺跡
17. 岩谷古墳群
18. 新宮谷古墳群
19. 坪井古墳群
20. 下坂横穴群
21. 袴狭遺跡
22. 御屋敷遺跡
23. 此隅山城跡
24. 上坂遺跡
25. 上坂古墳群
26. 宮内堀脇遺跡
27. 出石神社
28. 宮内遺跡
29. 宮内黒田遺跡
30. 鳥居遺跡
31. 東谷古墳
32. 小坂古墳群

周辺の遺跡

小野川放水路事業関連　確認調査位置図

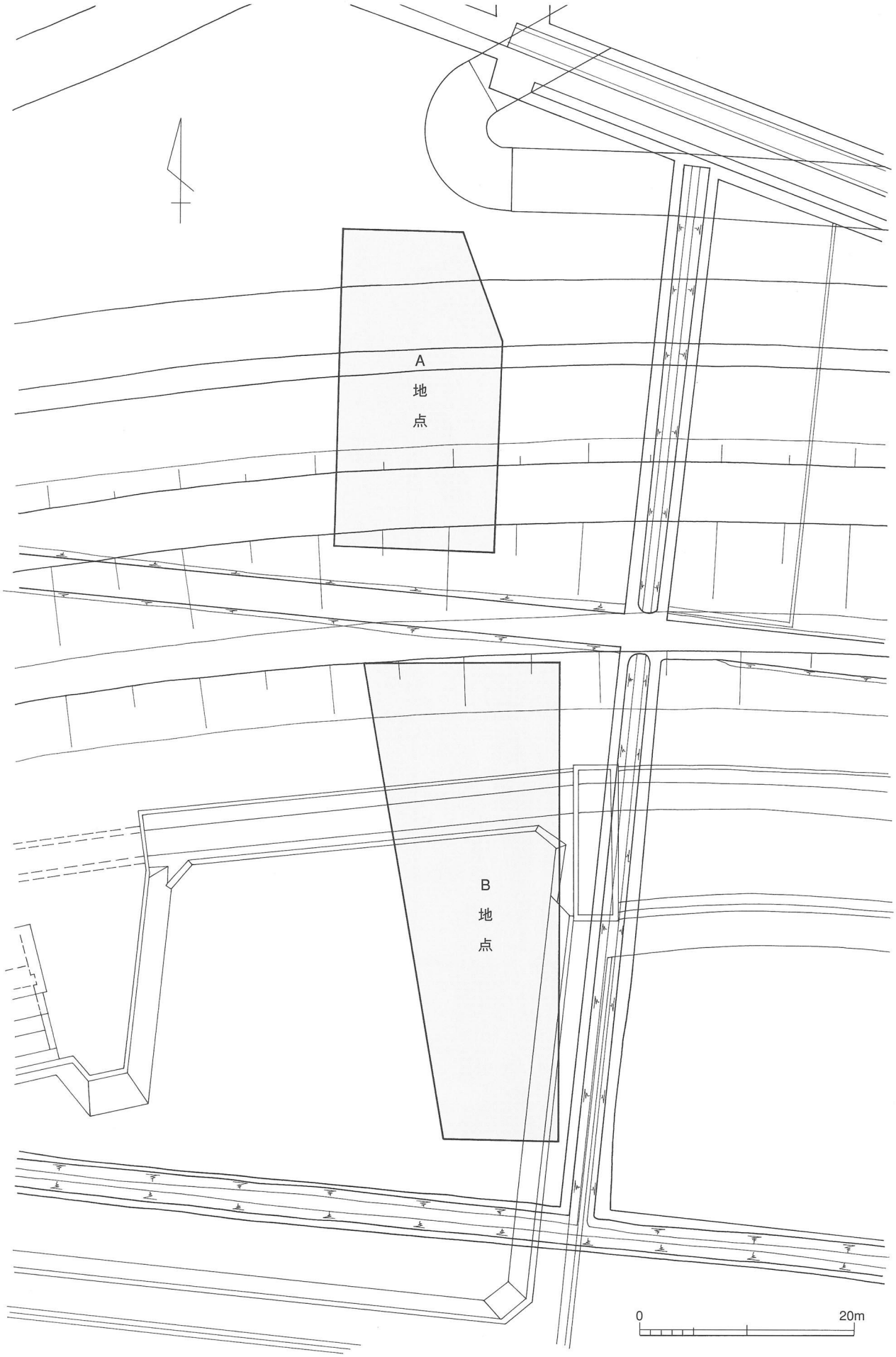
図版4



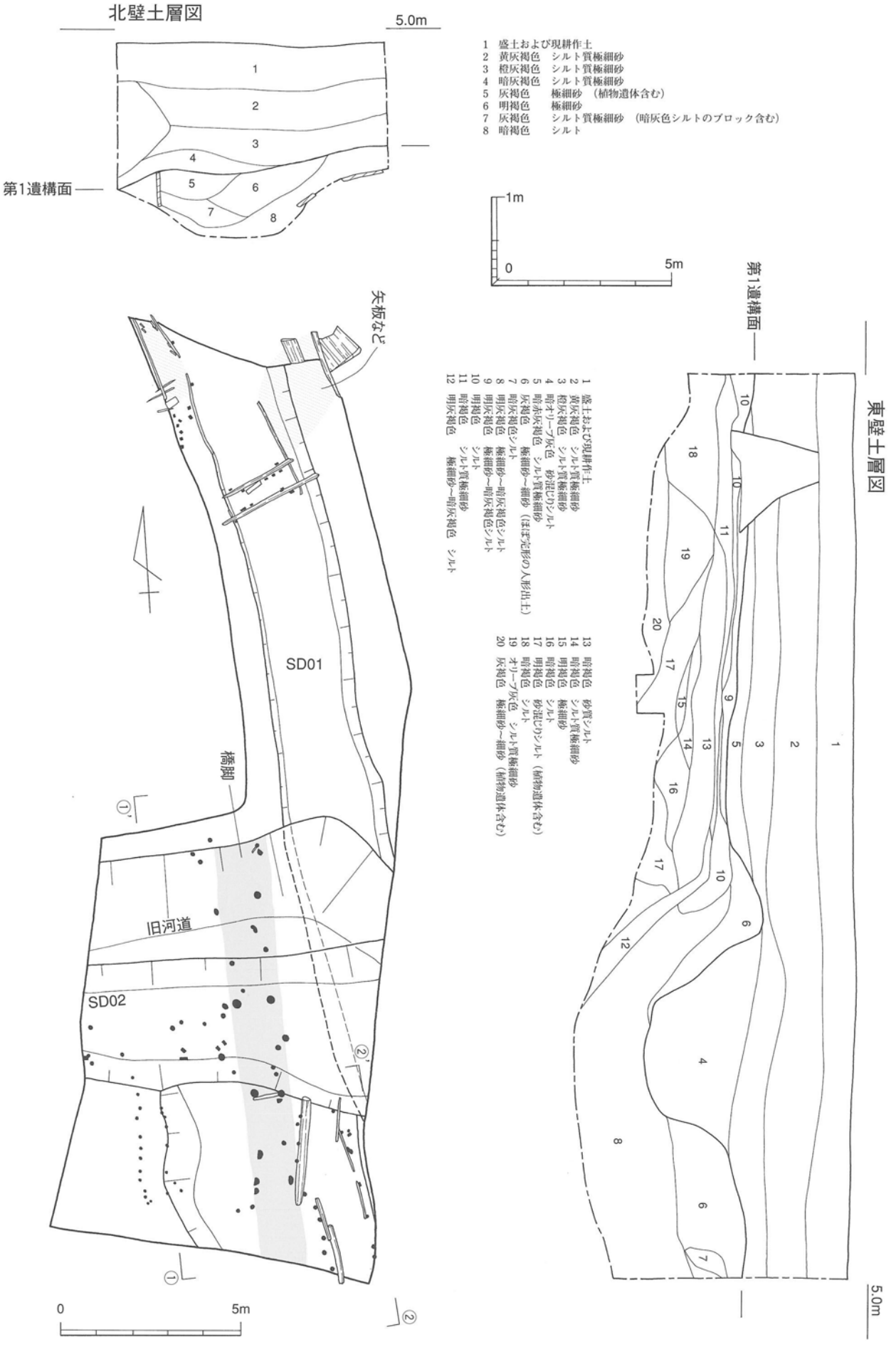
小野川放水路事業関連　全面調査位置図

4区D地点
4区C地点
4区B地点
4区A地点
78.2
L
3区
K
14
J
13
I
2区F地点
2区E地点
G
H
2区D地点
E
4
C
D
2区C地点
2区A地点
A
B
2区B地点
1区A地点
1区B地点
狭
川
出
石
0
200m

入佐川遺跡　調査位置図

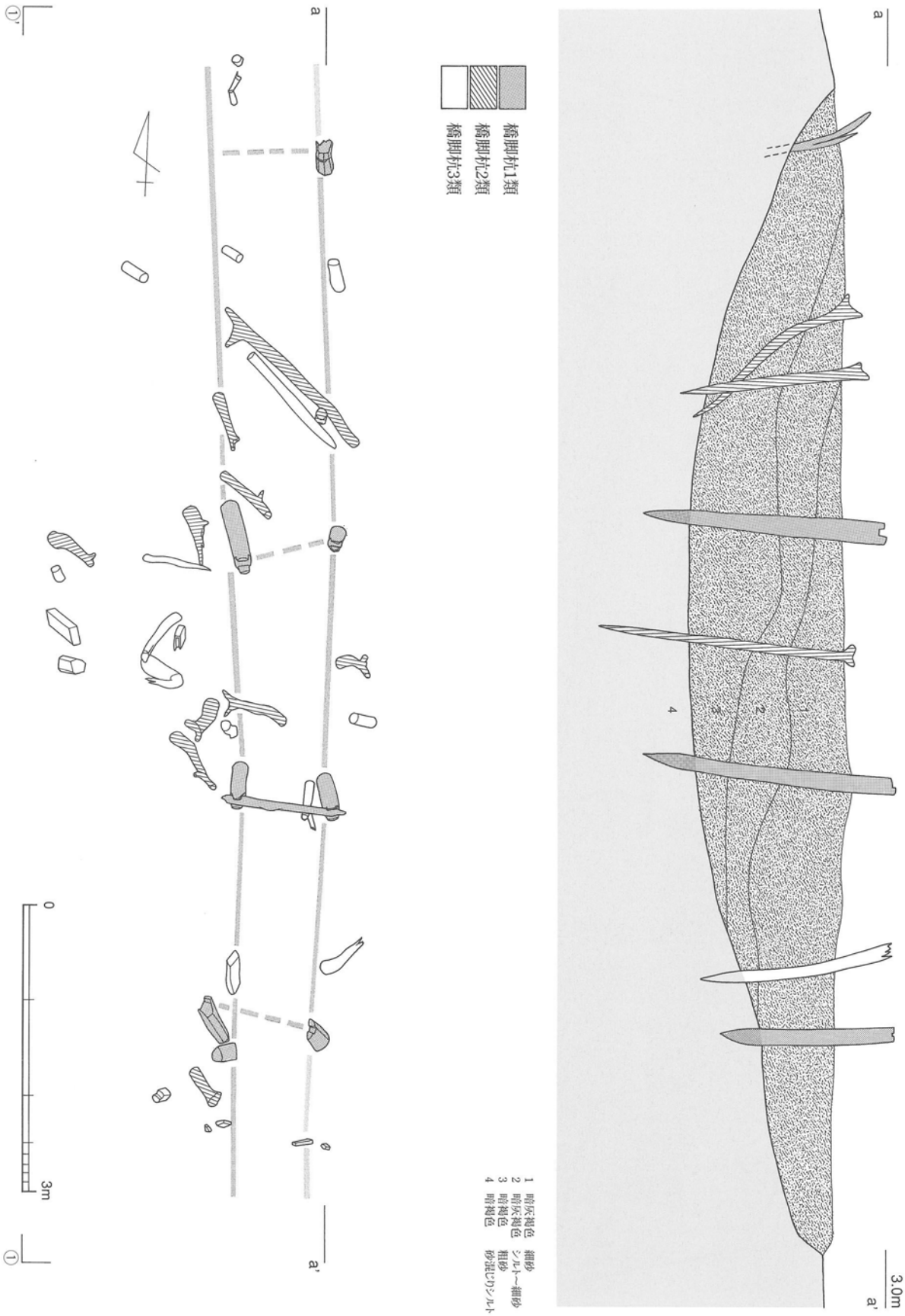


1区　調査区配置図

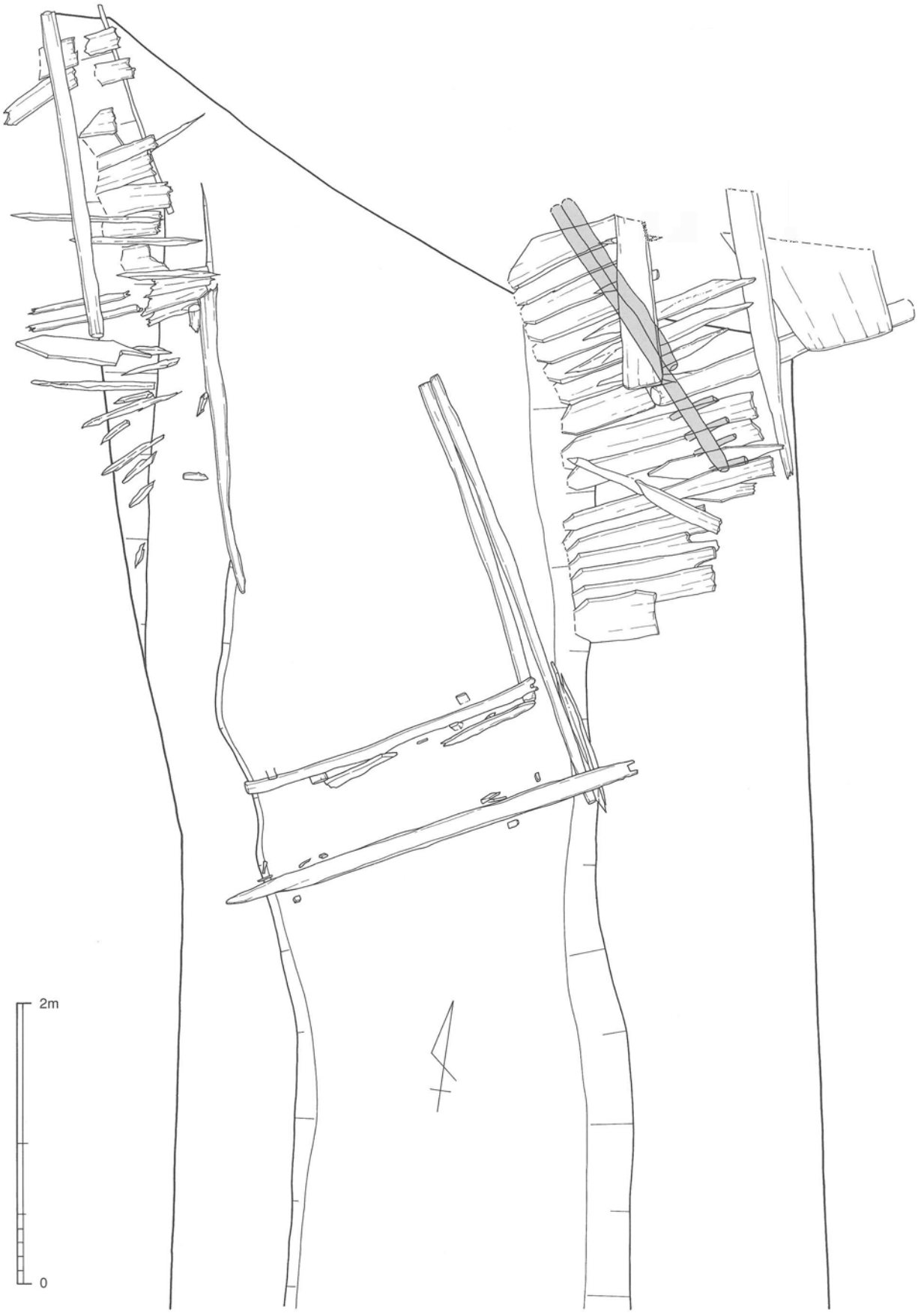


1区　A地点　第1遺構面　全体図、土層断面図

図版8

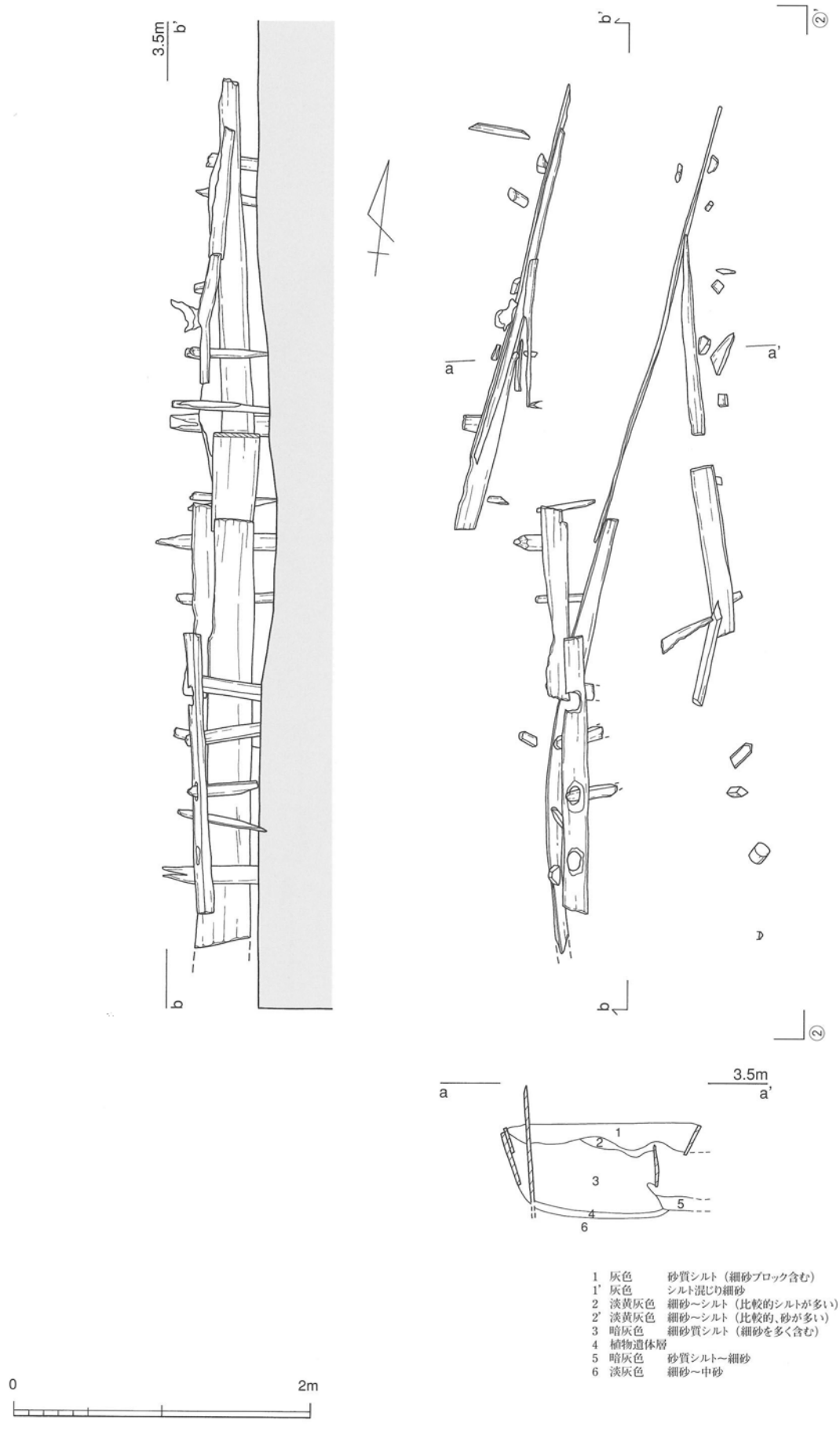


1区　A地点　第1遺構面　橋脚

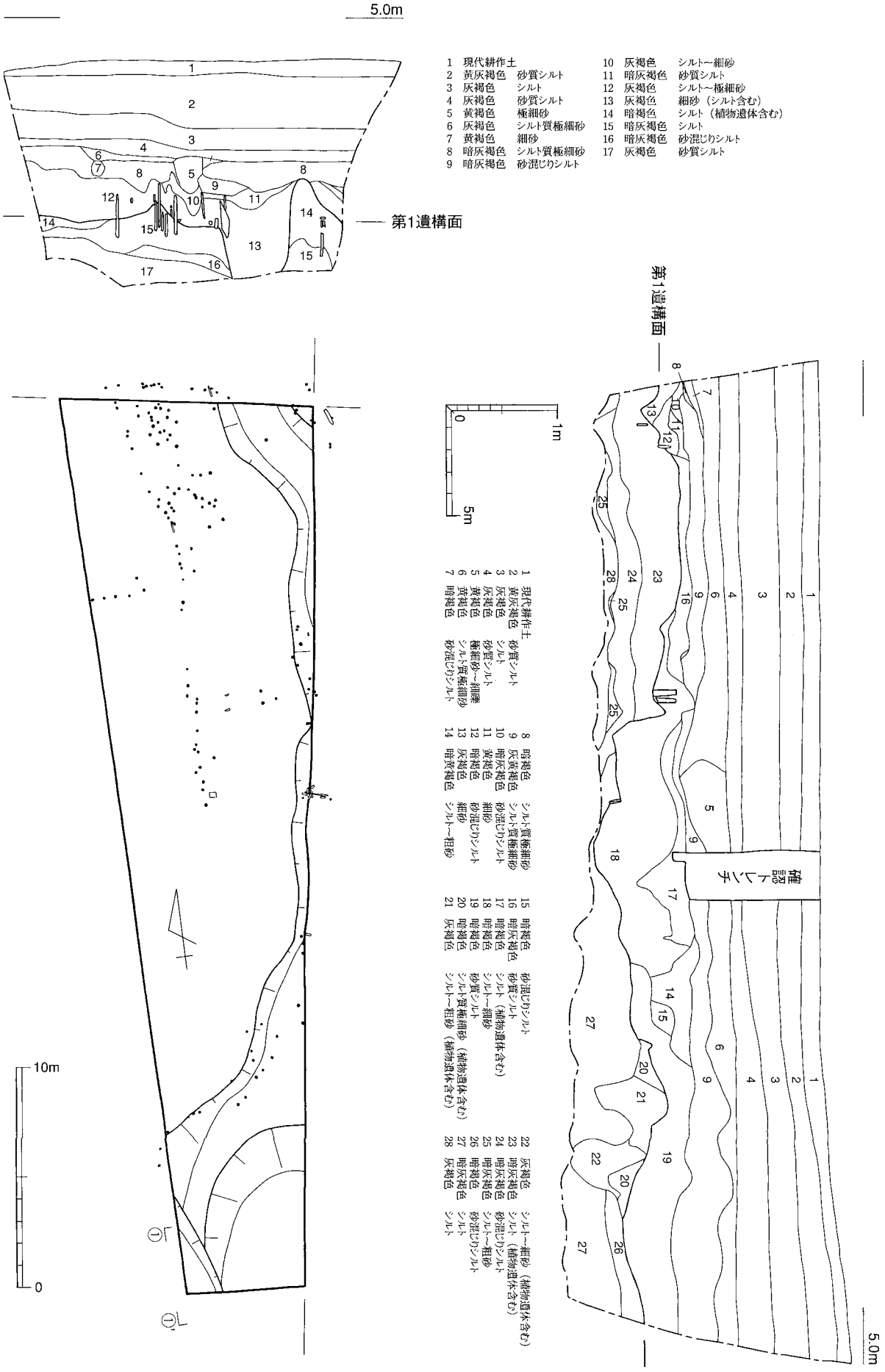


1区　A地点　第1遺構面　北端部、矢板等

図版10

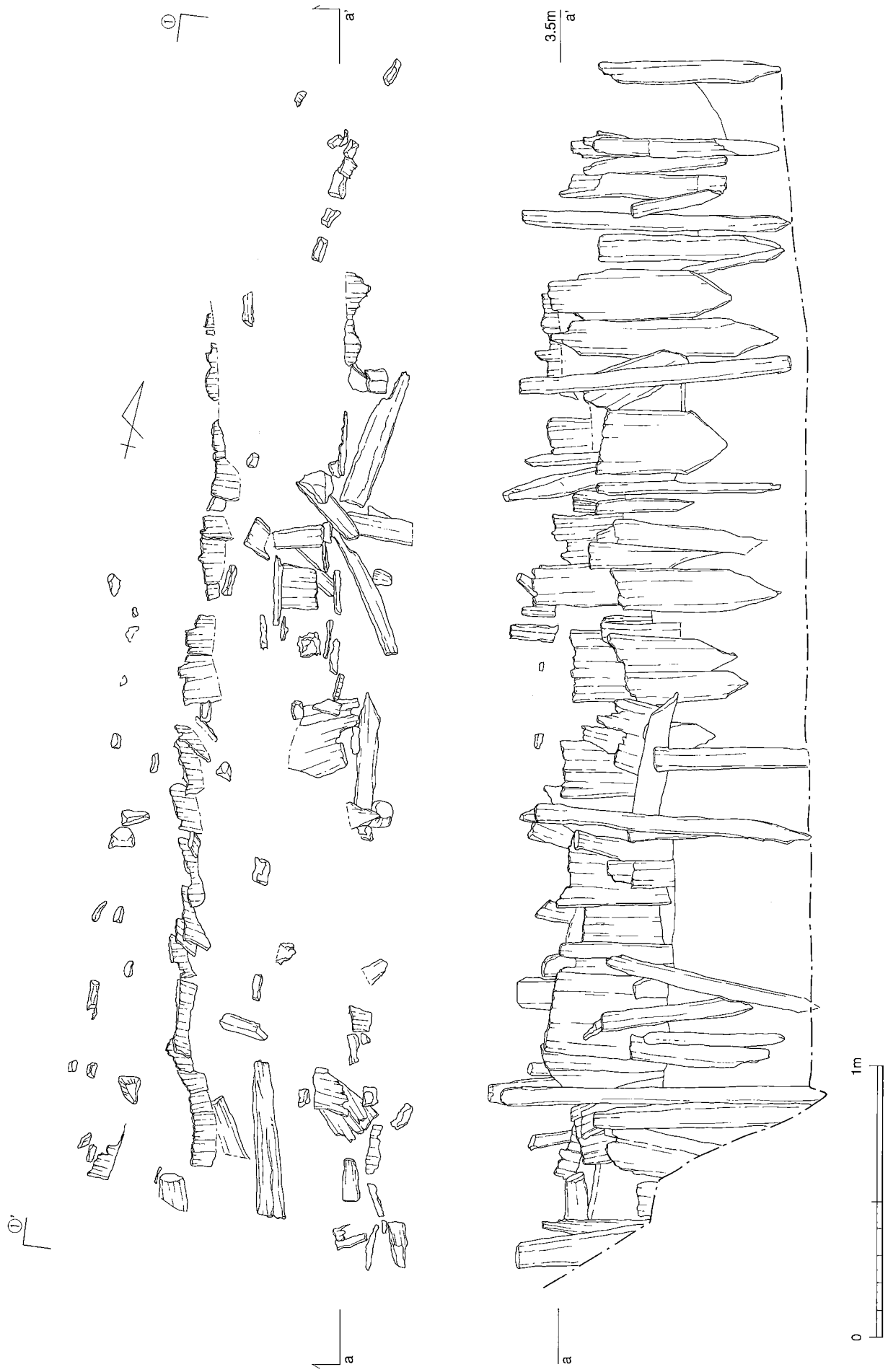


1区　A地点　第1遺構面　南端部、木組畦畔

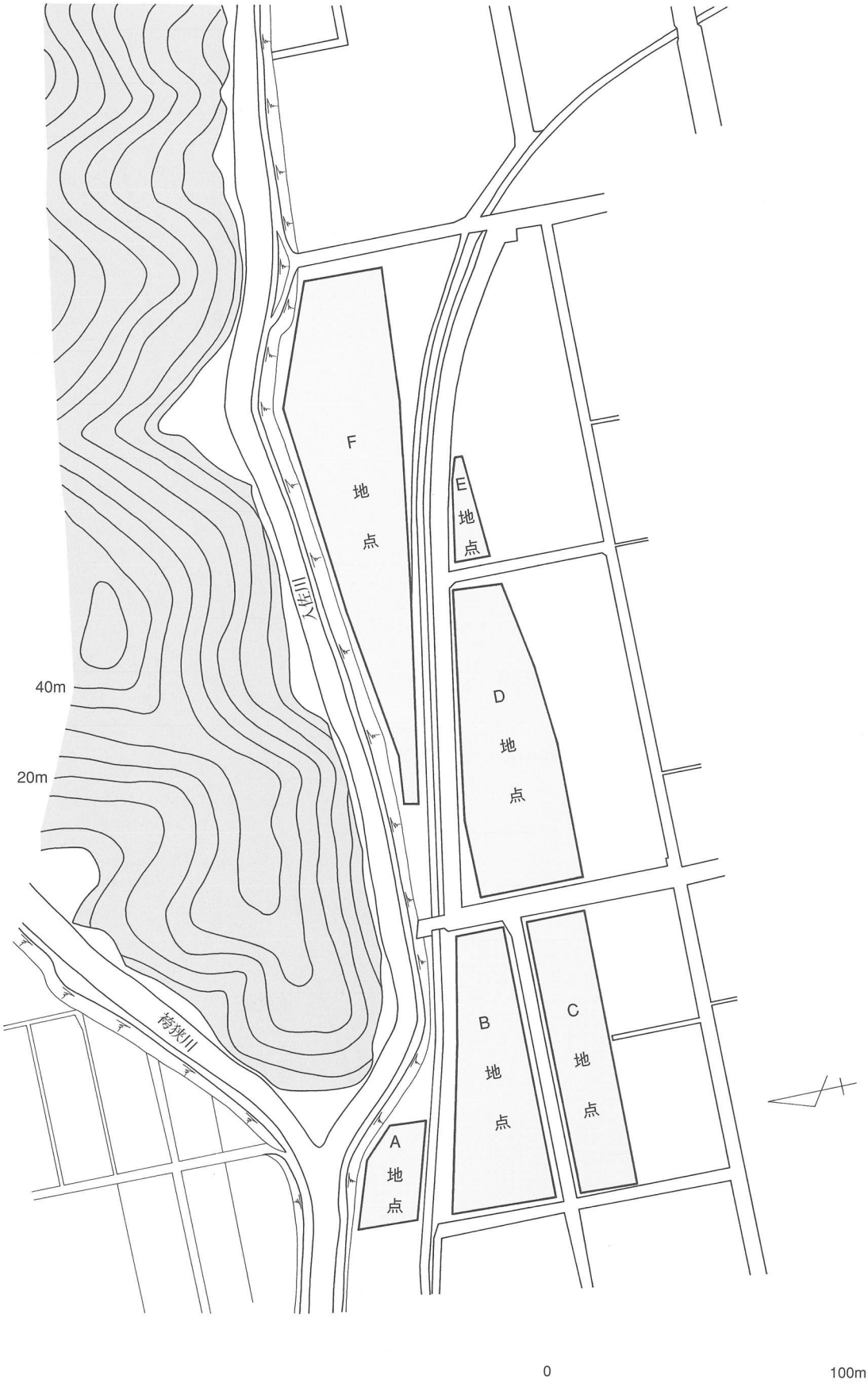


1区　B地点　第1遺構面　全体図、土層断面図

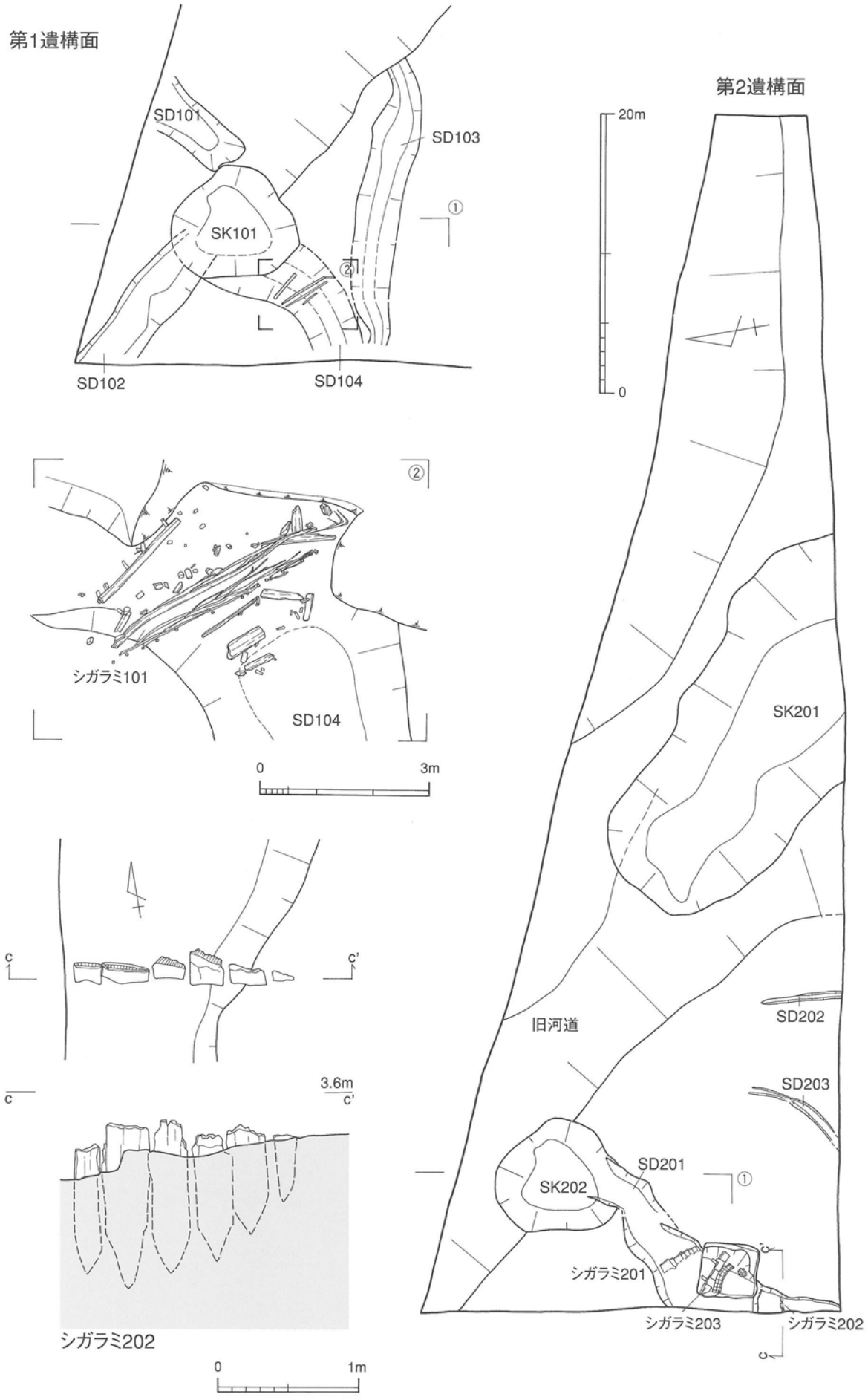
図版12



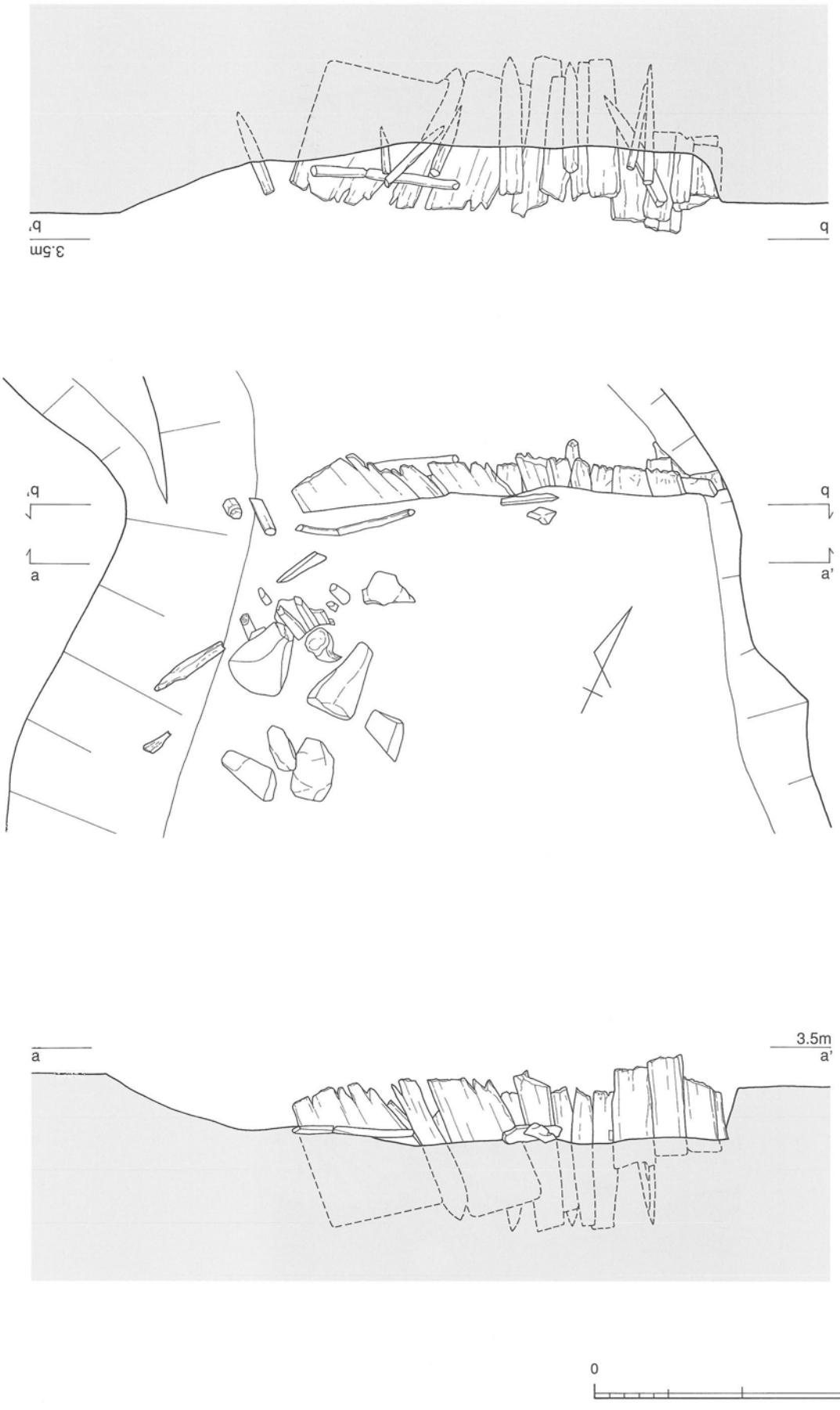
1区　B地点　第1遺構面　南西隅矢板列



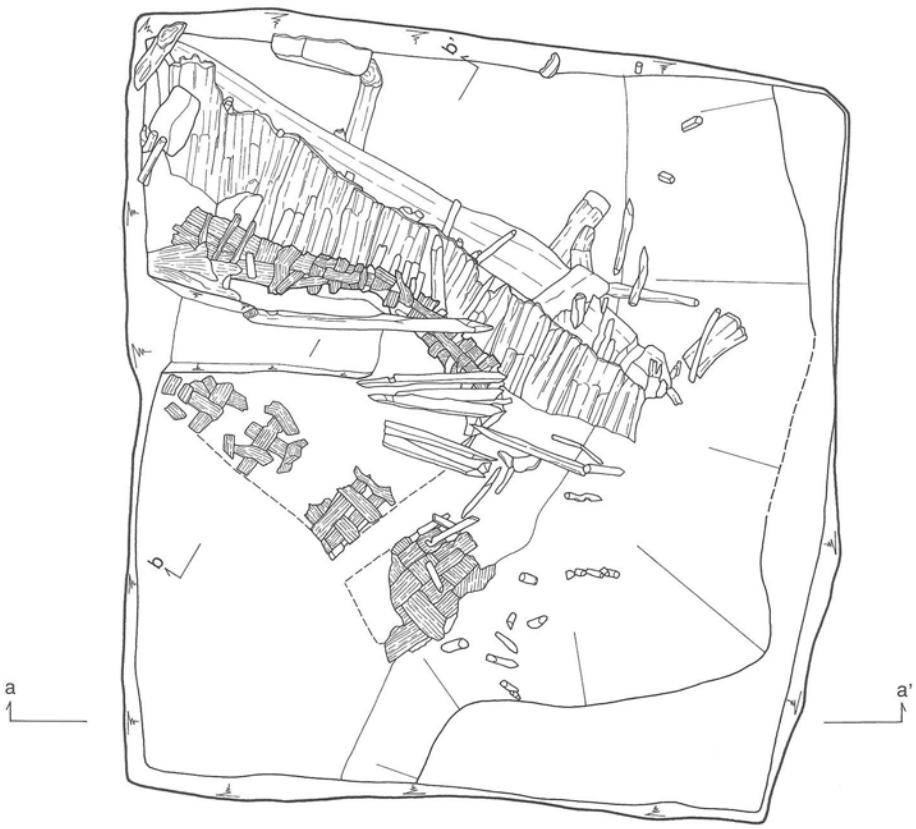
2区　調査区配置図

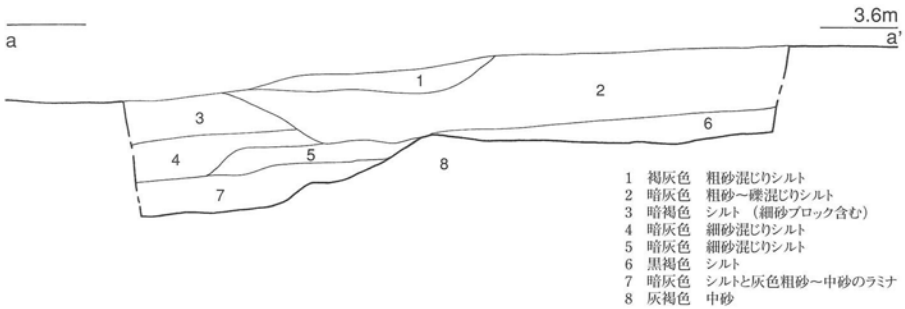


2区　B地点　第1・2遺構面　全体図、シガラミ101・102

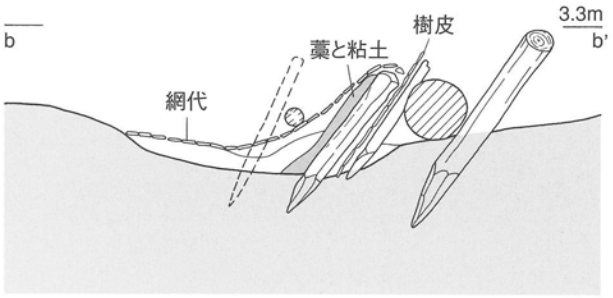


2区　B地点　第2遺構面　シガラミ201

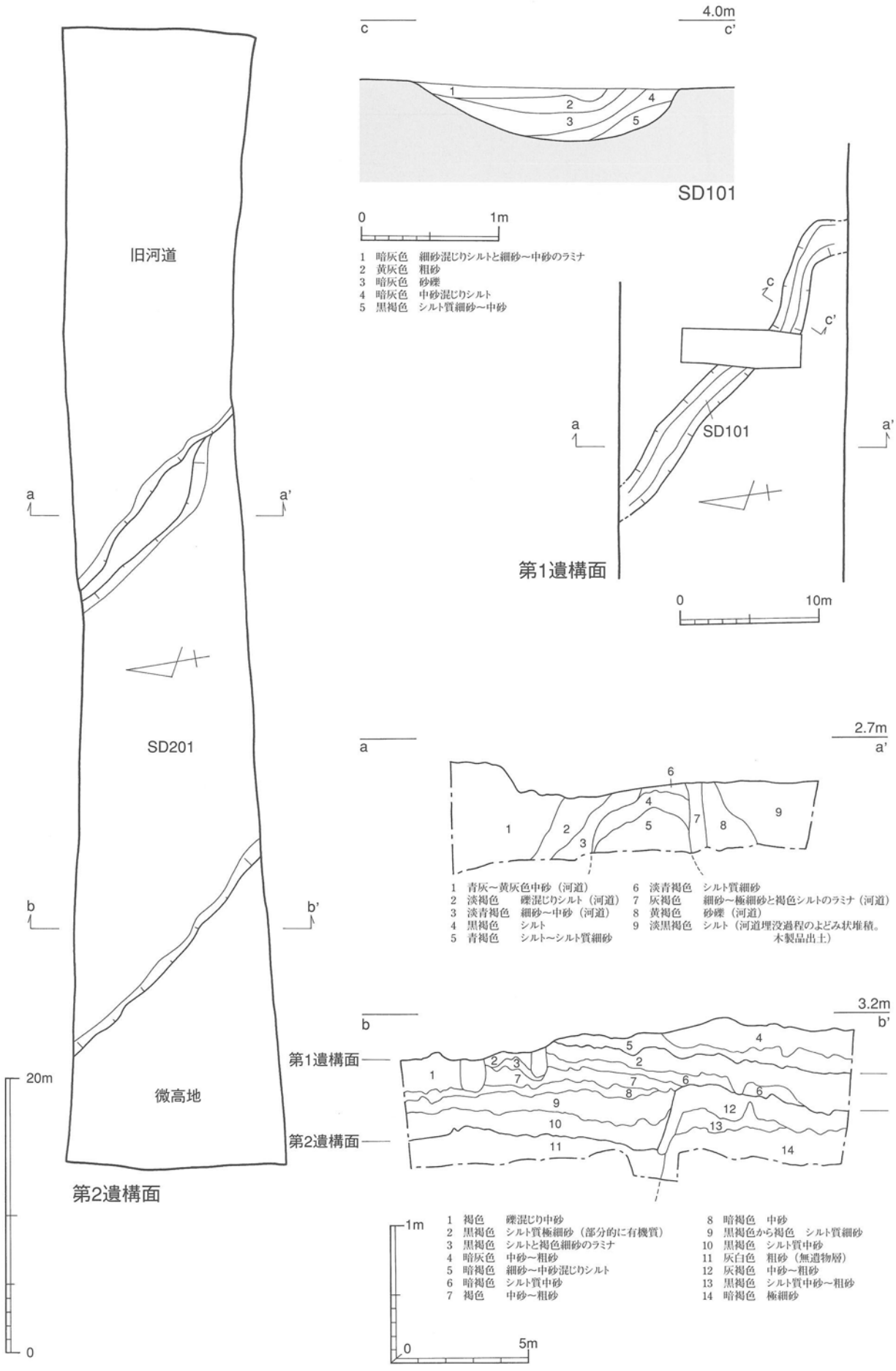




1　褐灰色　粗砂混じりシルト
2　暗灰色　粗砂～礫混じりシルト
3　暗褐色　シルト（細砂ブロック含む）
4　暗灰色　細砂混じりシルト
5　暗灰色　細砂混じりシルト
6　黒褐色　シルト
7　暗灰色　シルトと灰色粗砂～中砂のラミナ
8　灰褐色　中砂

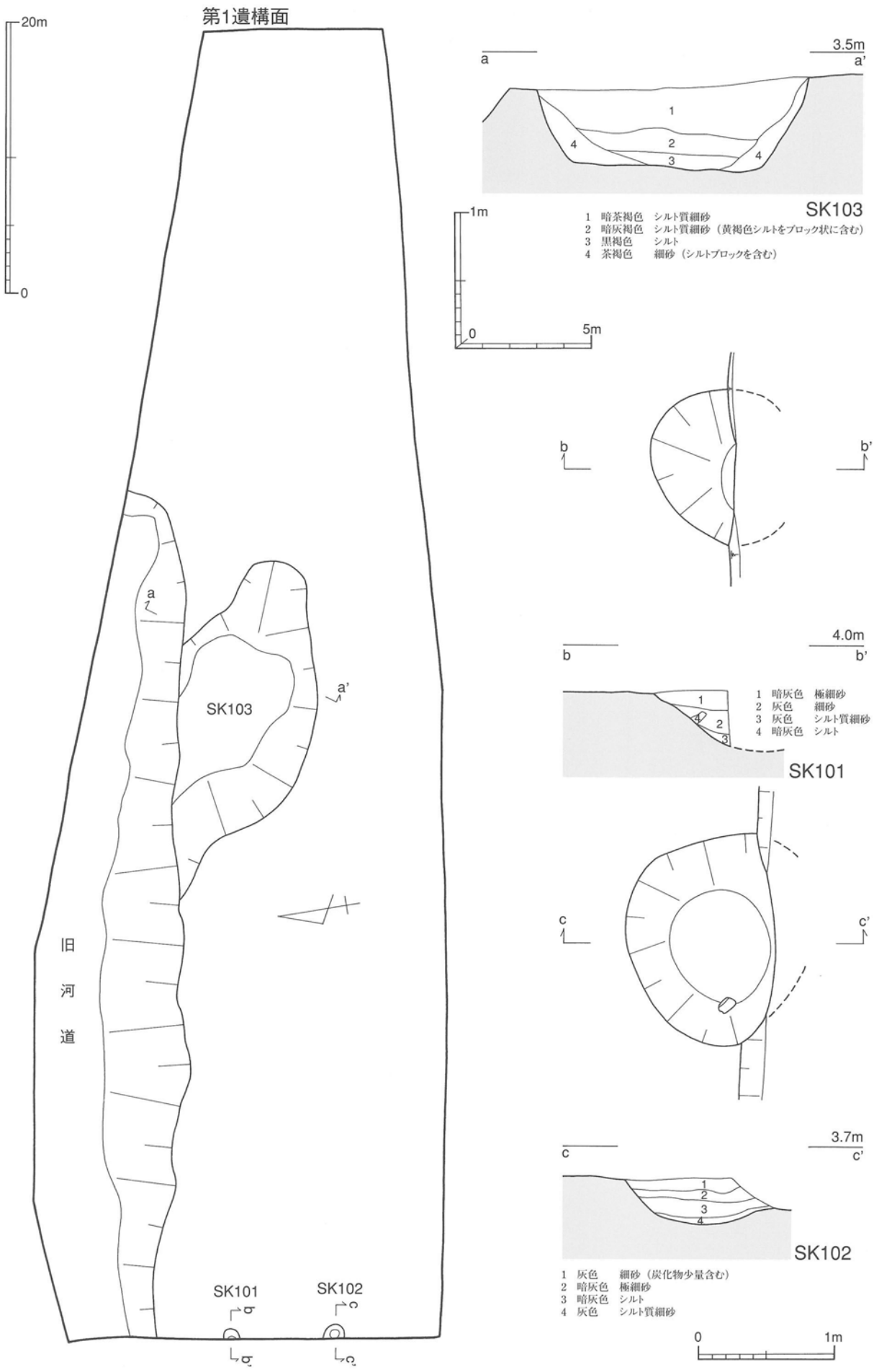


2区　B地点　第2遺構面　シガラミ203

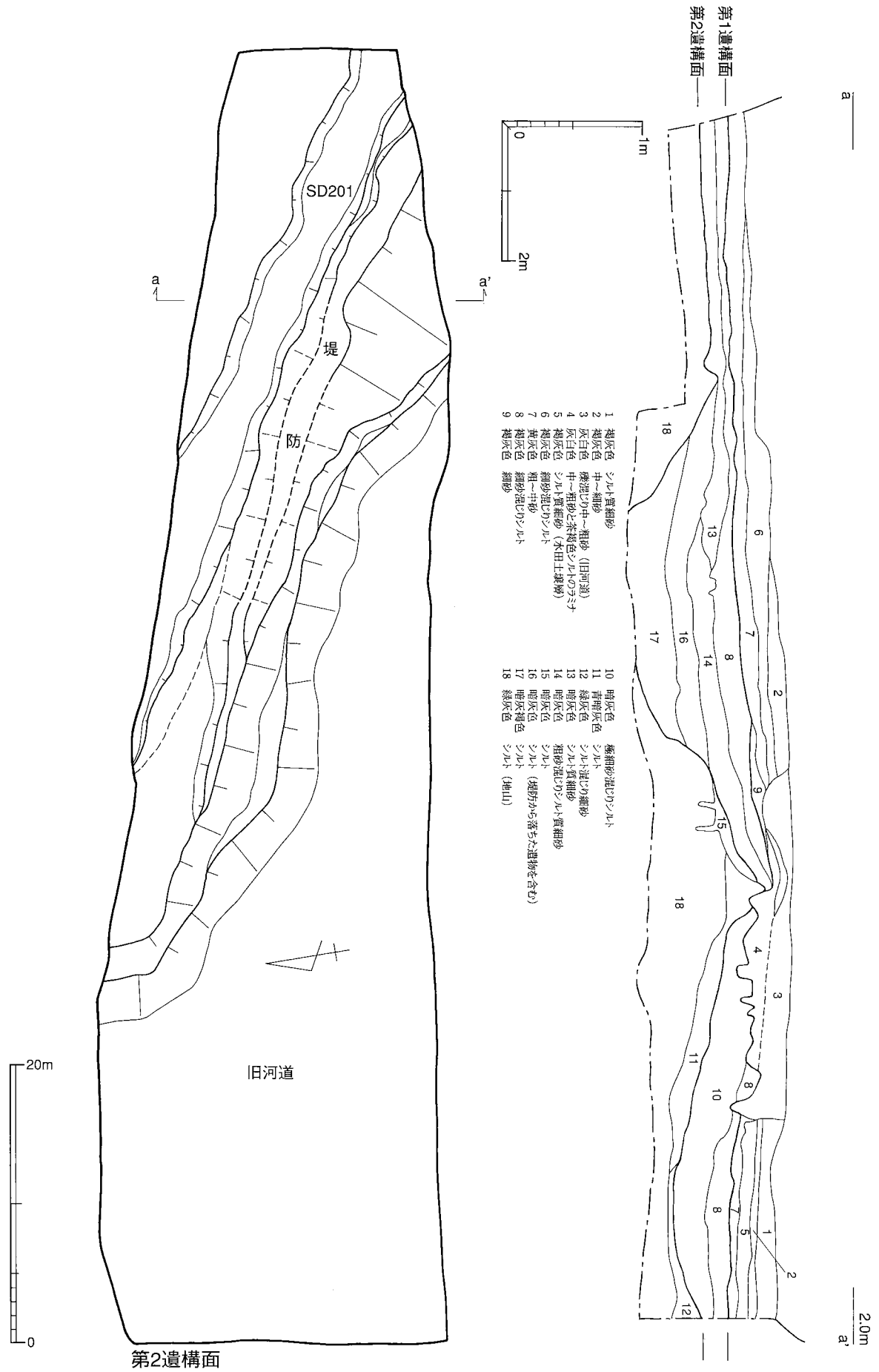


2区　C地点　第1・2遺構面　全体図、土層断面図・SD101

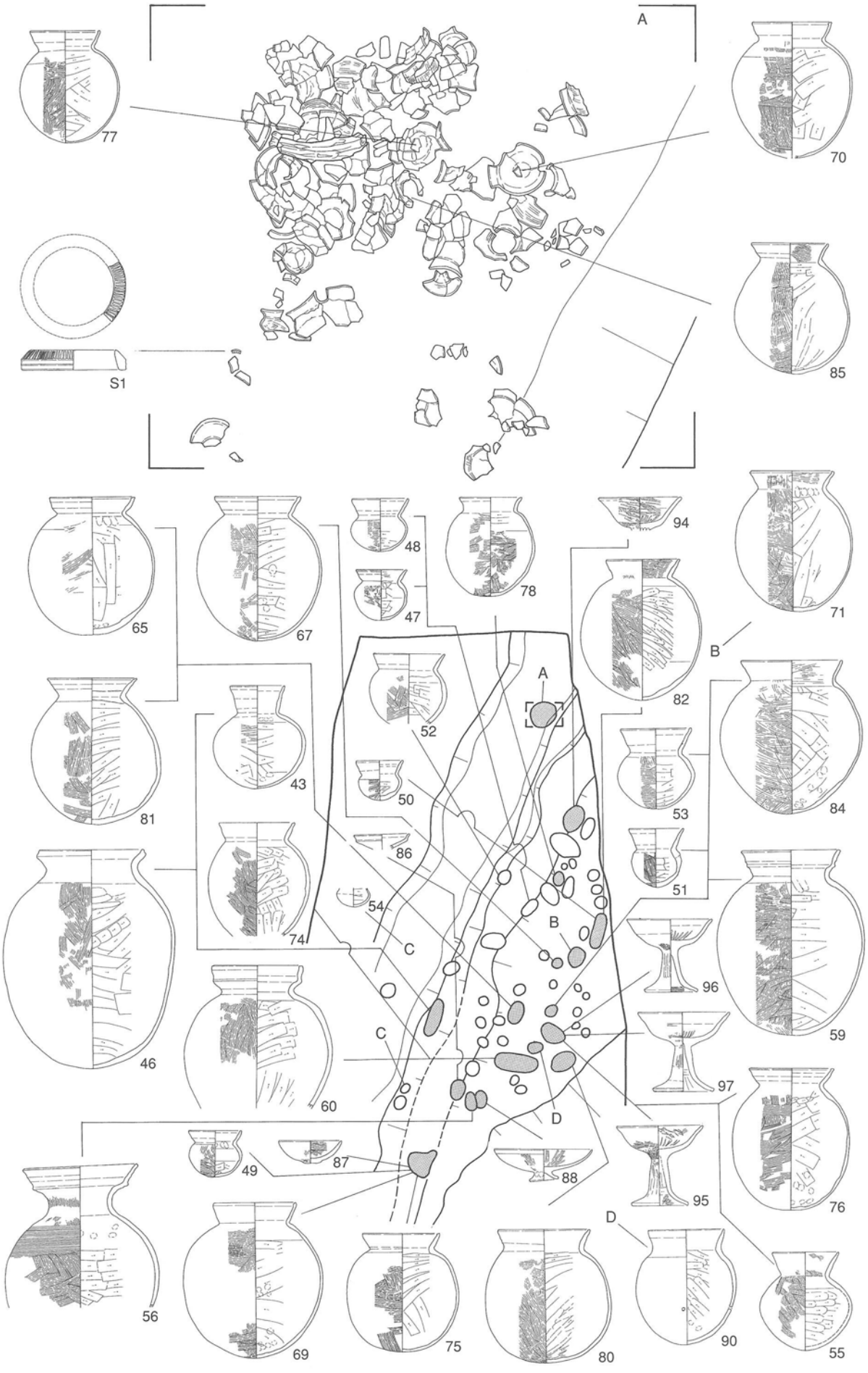
図版18



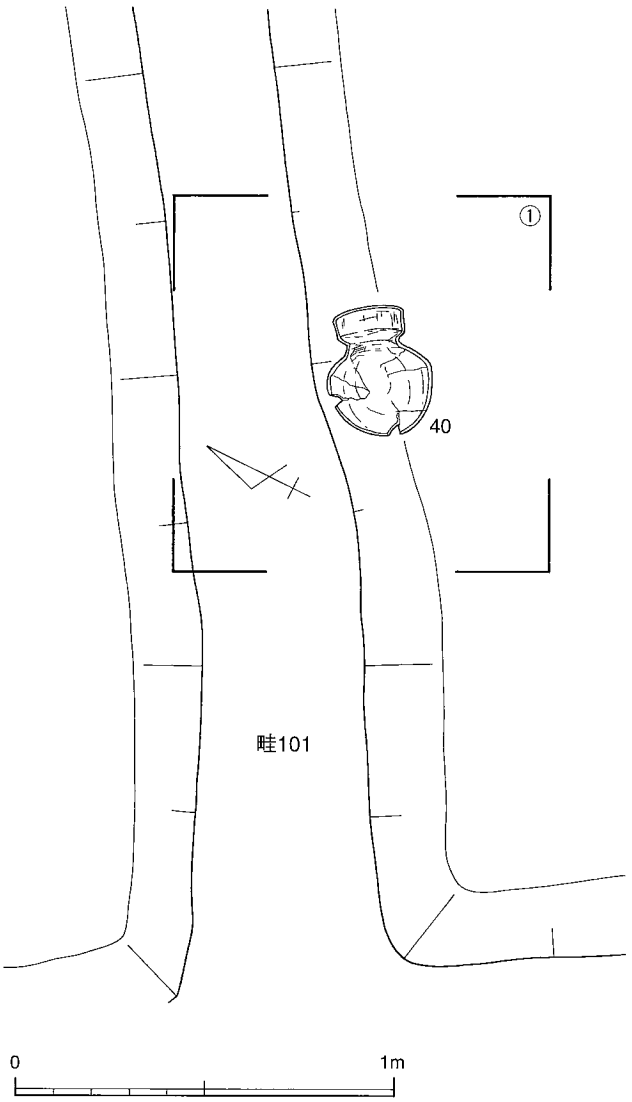
2区　D地点　第1遺構面　全体図、SK101～103

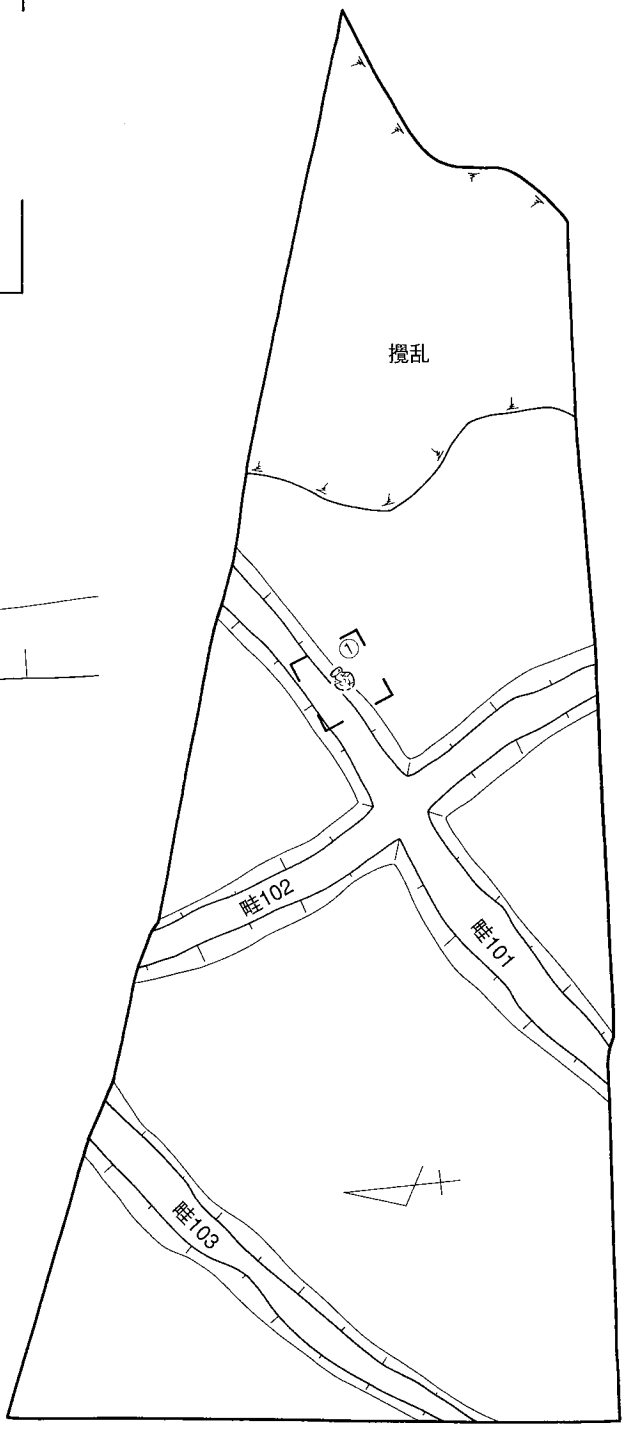


2区　D地点　第2遺構面　全体図、土層断面図

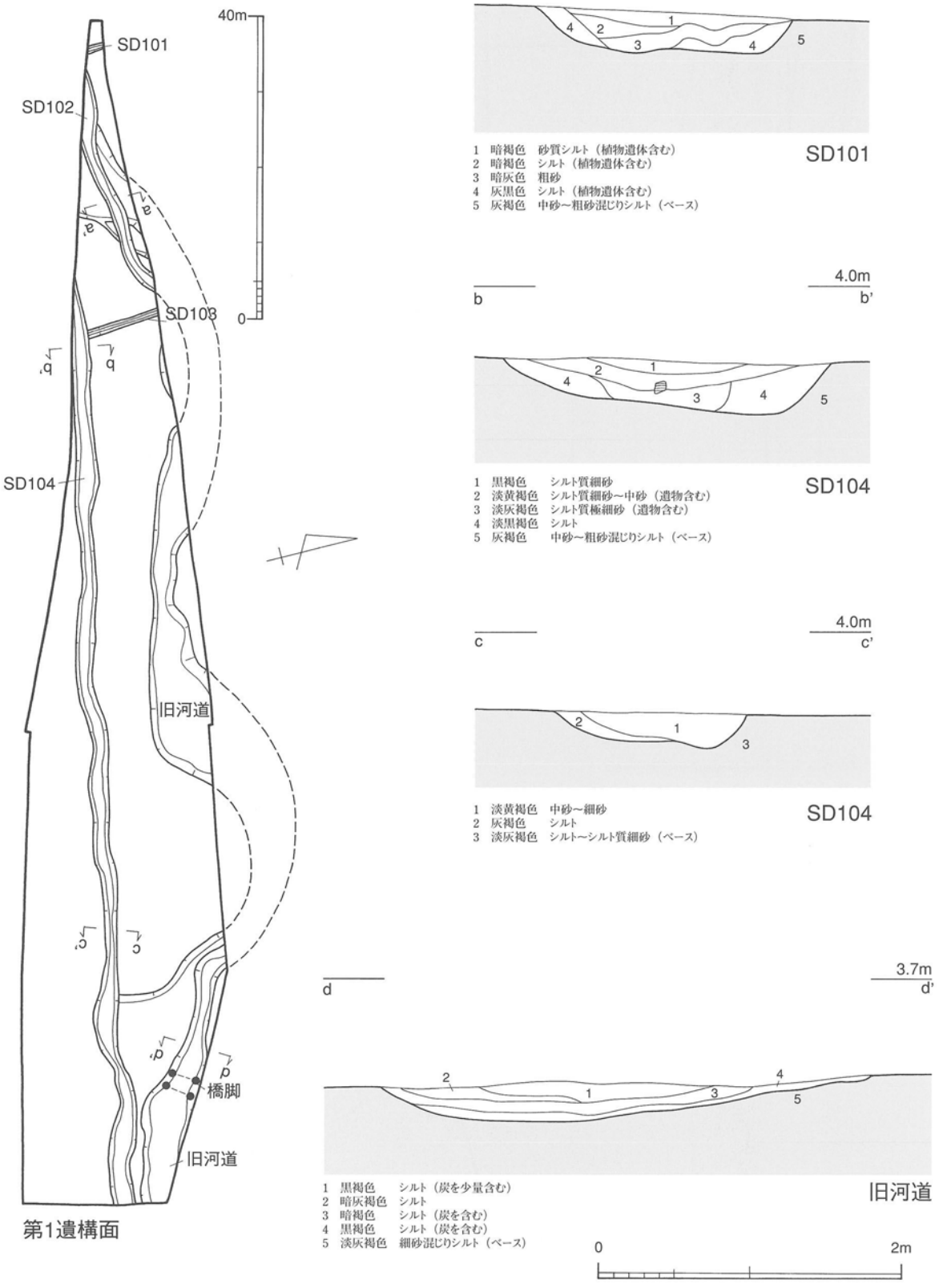


2区　D地点　第2遺構面　堤防上土器群出土状況

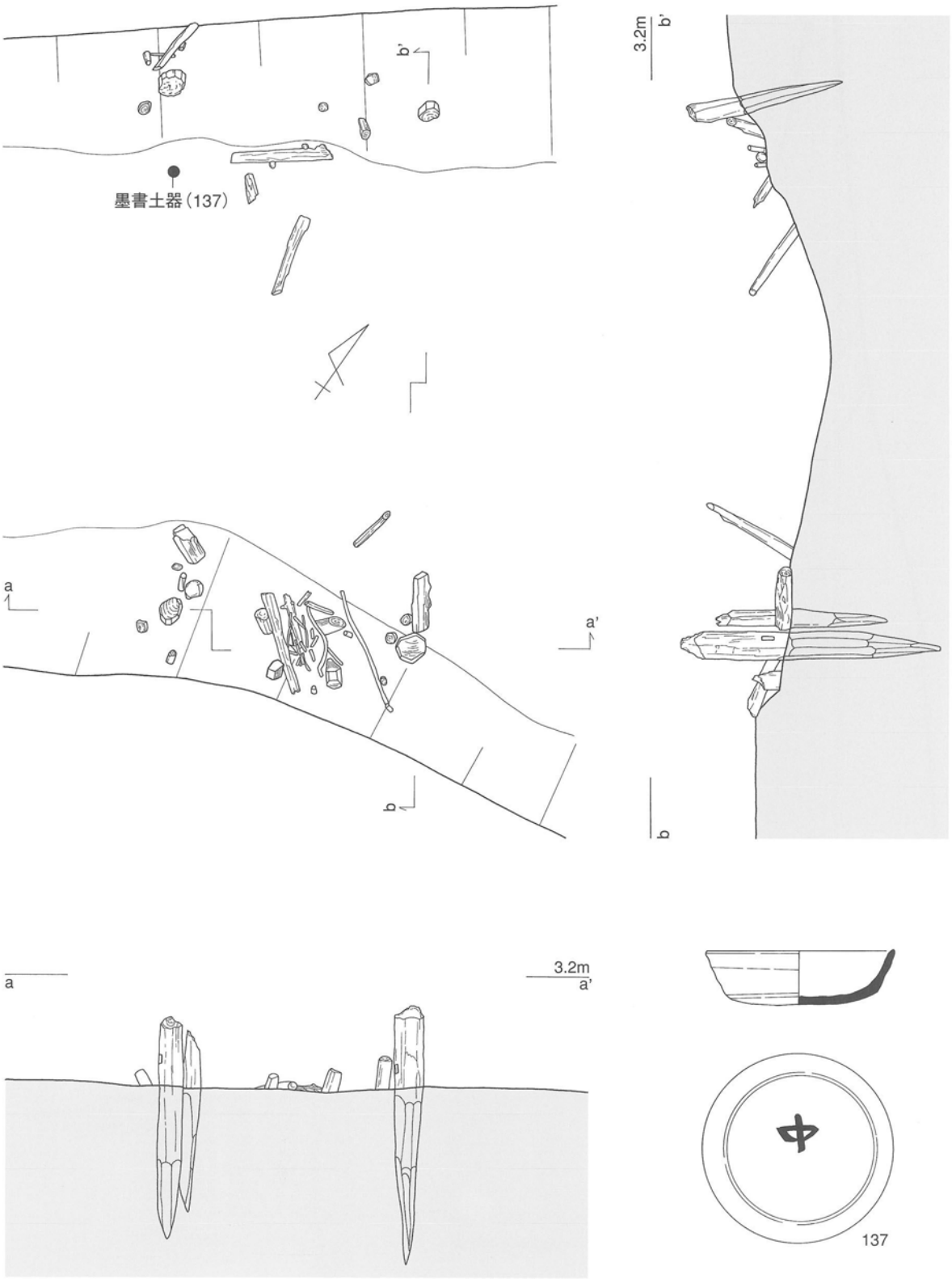




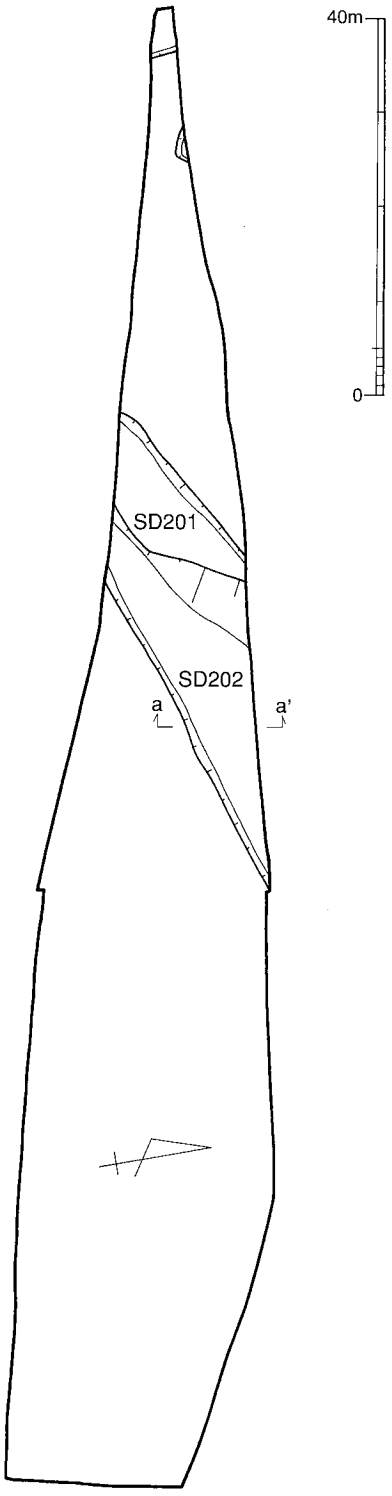
2区　E地点　全体図・畦畔上土器出土状況



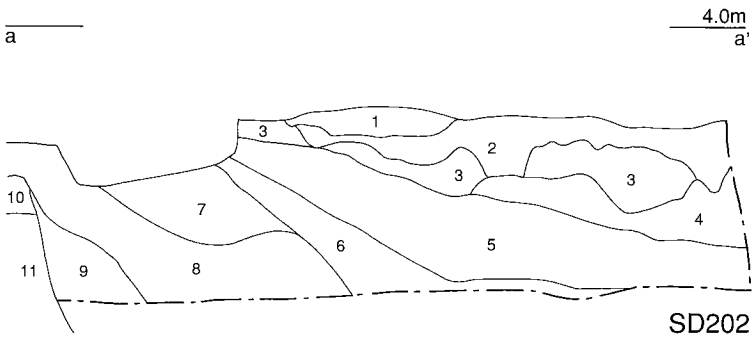
2区　F地点　第1遺構面　全体図、SD101・104、旧河道

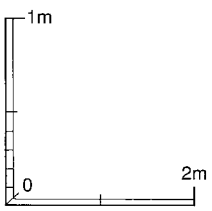


2区　F地点　第1遺構面　橋脚、出土土器



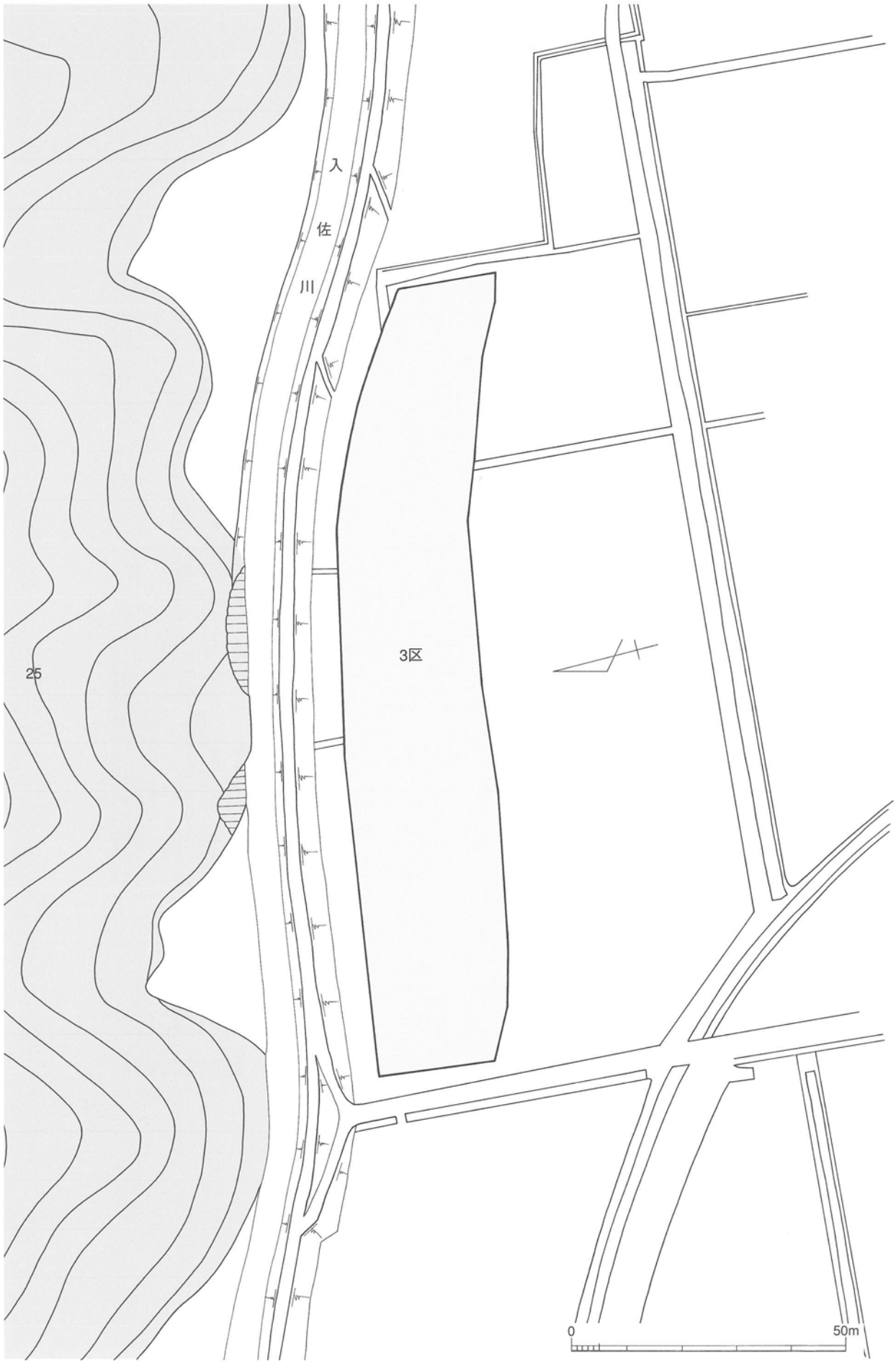
第2遺構面



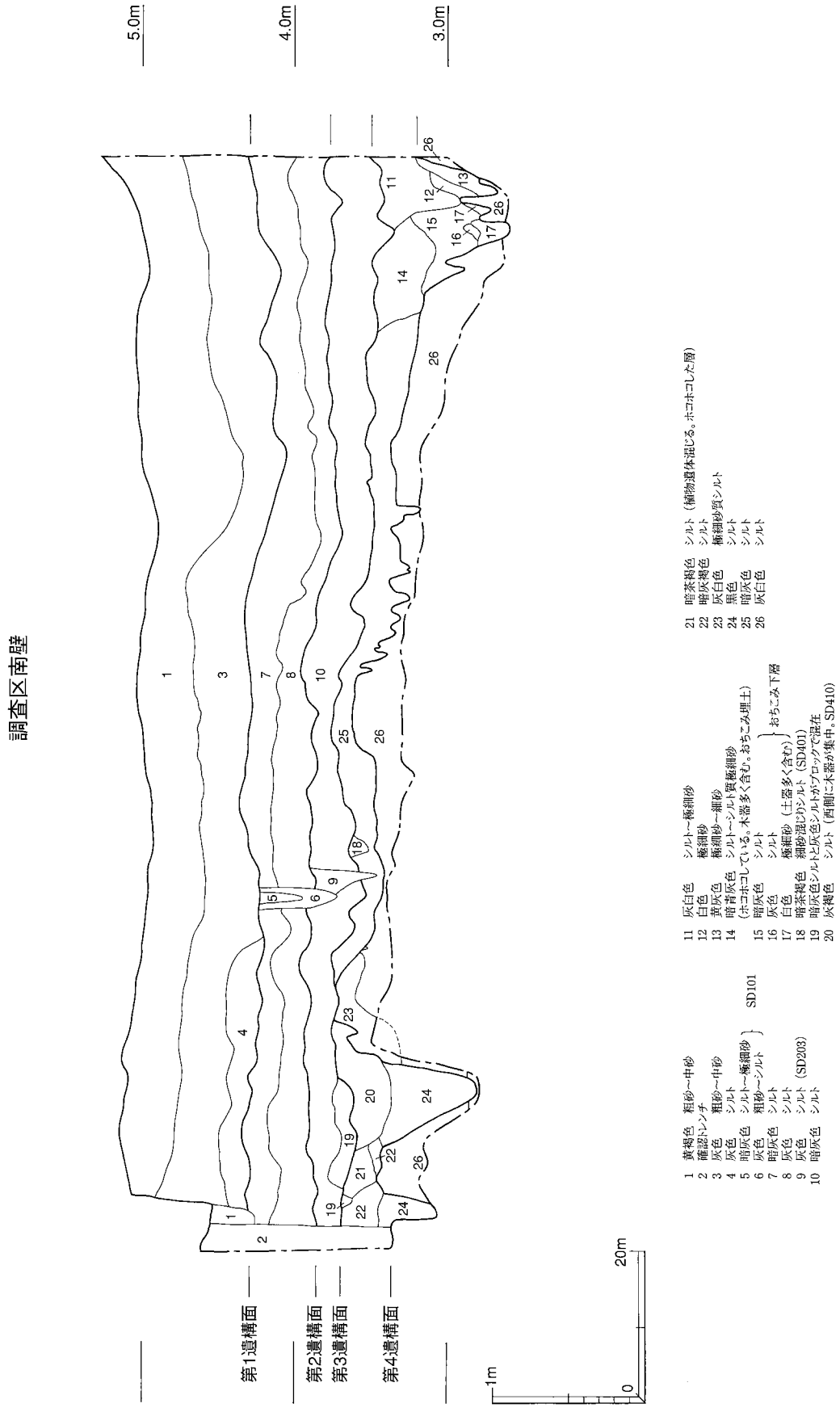


1 青灰色　粗砂混じりシルト（酸化鉄含む）
2 暗灰色　粗砂～極細砂（奈良～平安時代の遺物含む）
3 暗褐色　シルト（奈良～平安時代の遺物含む）
4 青灰色～褐色　中砂～粗砂
5 青灰色～灰色　極細砂～細砂
6 灰色～赤茶色　中砂
7 青灰色～褐色　細砂～中砂
8 灰色～赤茶色　極細砂～中砂
9 赤茶色　細砂～シルト
10 灰黒色　シルト（炭化物含む）
11 暗灰色　シルト質細砂

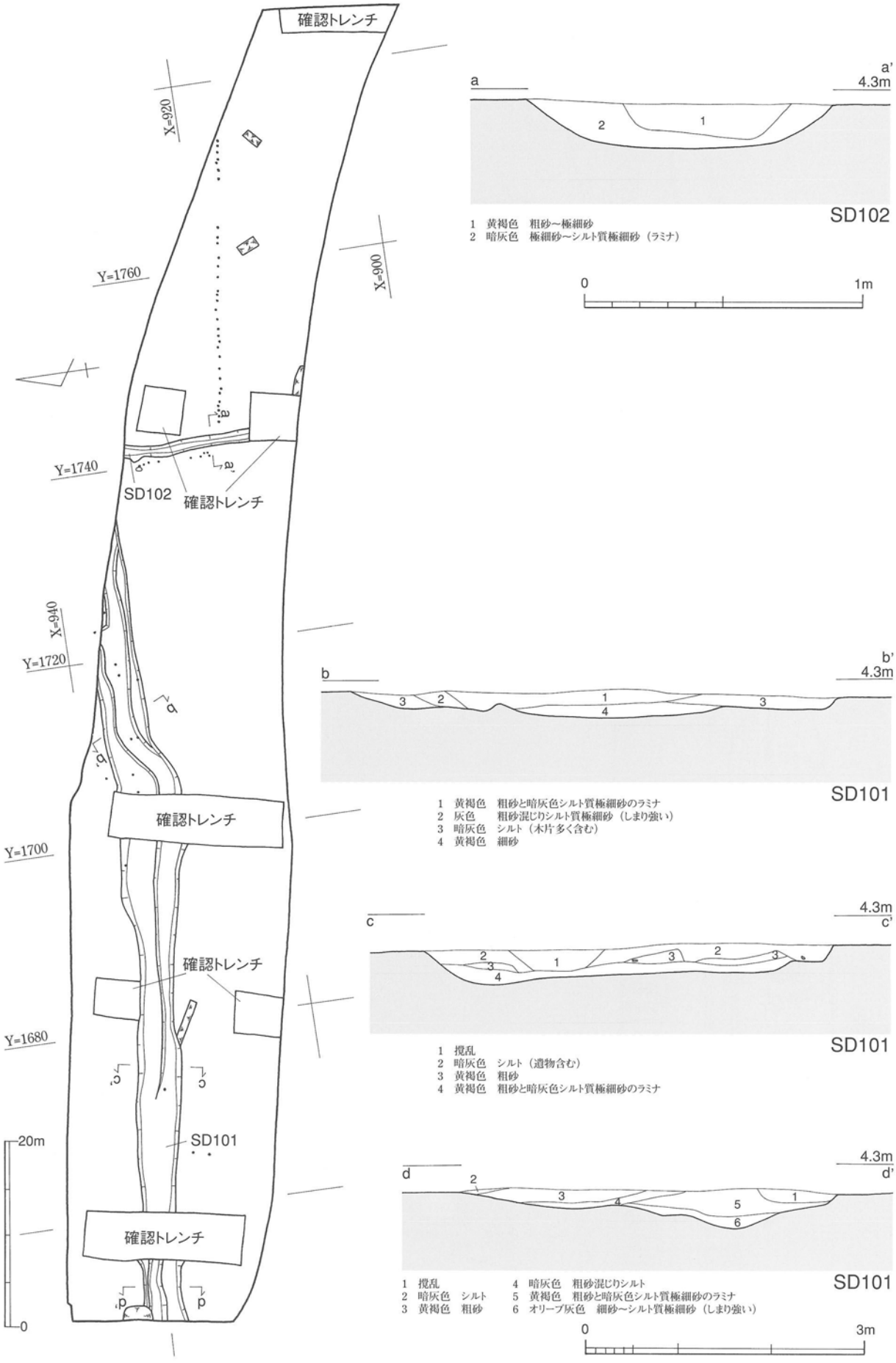
2区　F地点　第2遺構面　全体図、土層断面図



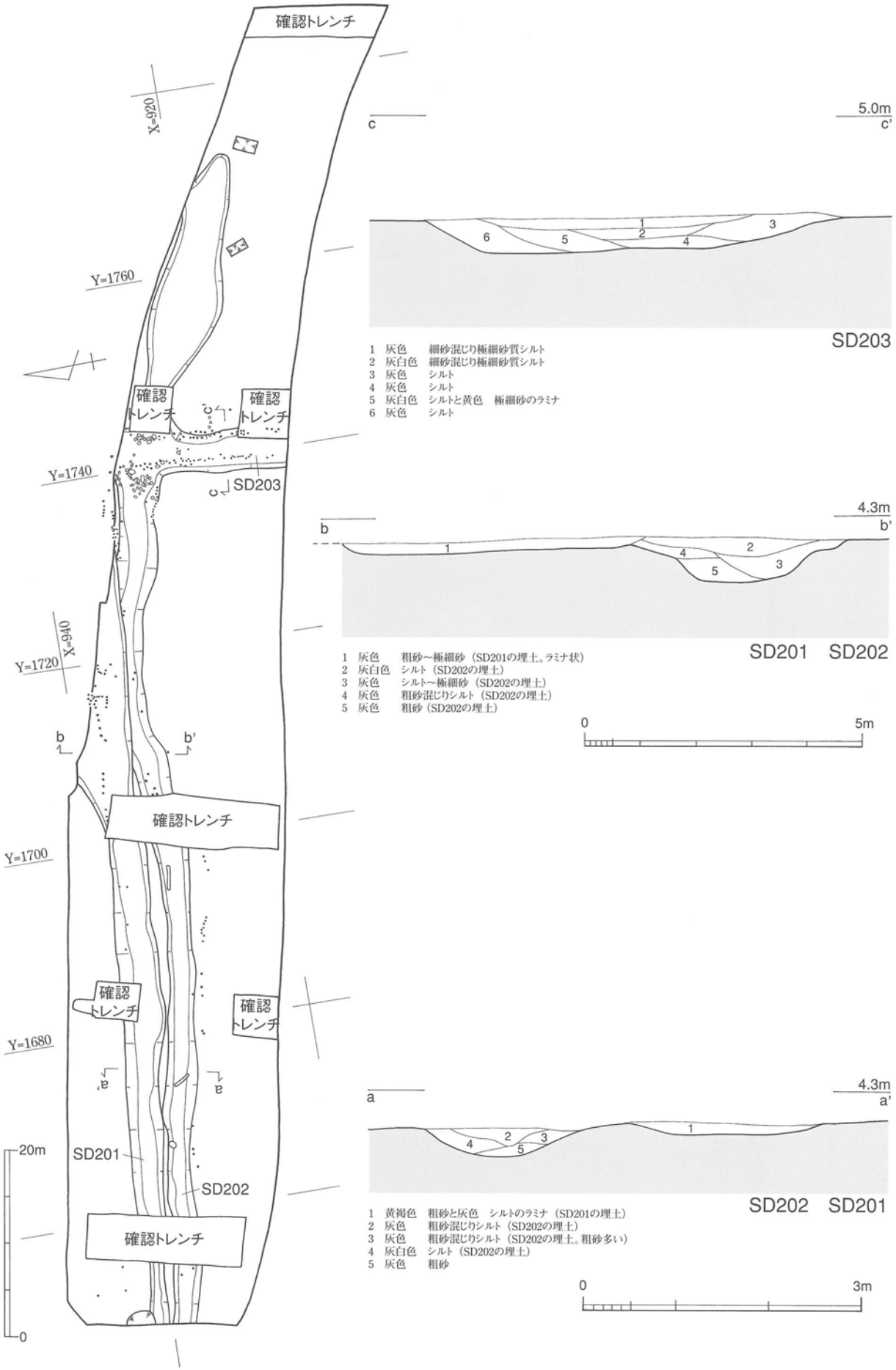
3区　調査区配置図


調査区南壁
5.0m
4.0m
3.0m
第1遺構面
第2遺構面
第3遺構面
第4遺構面
20m
0
1m
1 黄褐色 粗砂～中砂
2 礫混トレンチ
3 灰色 粗砂～中砂
4 灰色 シルト
5 暗灰色 シルト～極細砂
6 灰色 粗砂～シルト
7 暗灰色 シルト
8 灰色 シルト
9 灰色 シルト（SD203）
10 暗灰色 シルト
SD101
11 灰白色 シルト～極細砂
12 白色 極細砂
13 黄灰色 極細砂～細砂
14 暗青灰色 シルト～シルト質極細砂
（ホコホコしている。木器多く含む。おちこみ埋土）
15 暗灰色 シルト
16 灰色 シルト
17 白色 極細砂（土器多く含む）
18 暗茶褐色 細砂混じりシルト（SD401）
19 暗灰色シルトと灰色シルトがブロックで混在
20 灰褐色 シルト（西側に木器が集中。SD410）
おちこみ下層
21 暗茶褐色 シルト（植物遺体混じる。ホコホコした層）
22 暗灰褐色 シルト
23 灰白色 極細砂質シルト
24 黒色 シルト
25 暗灰色 シルト
26 灰白色 シルト

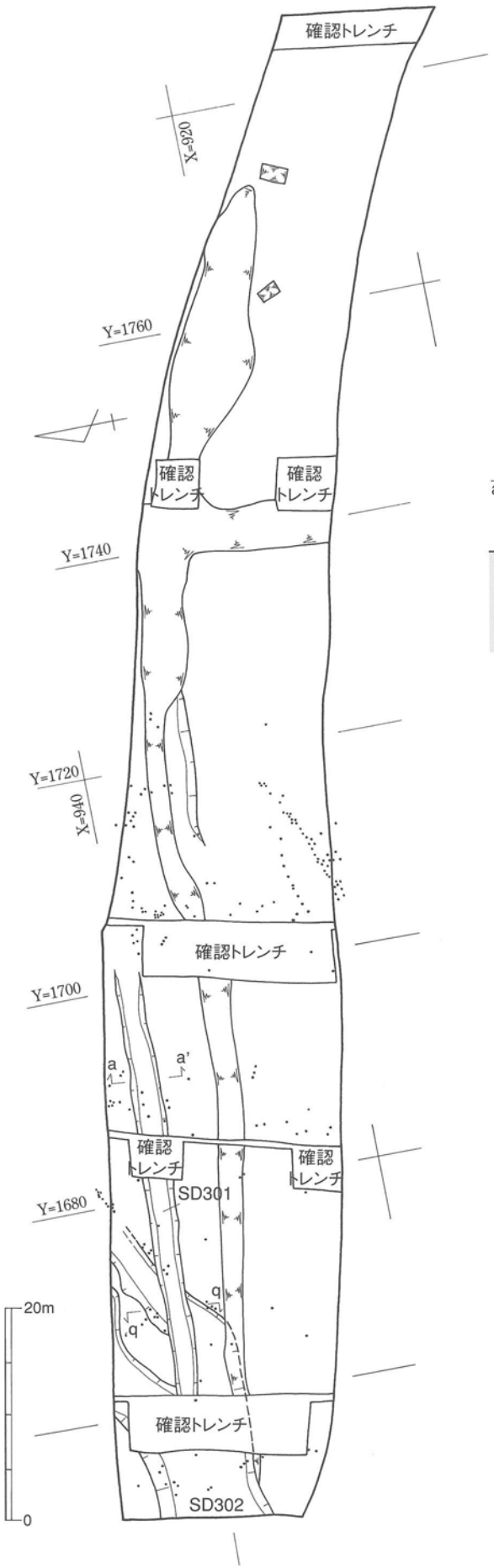
3区　土層断面図

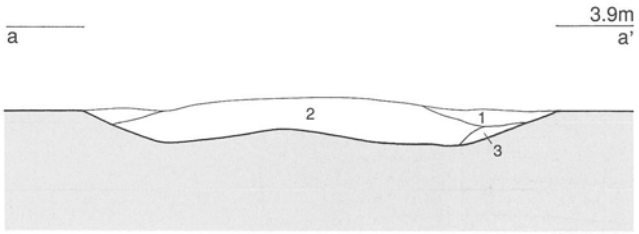


3区　第1遺構面　全体図、SD101・102



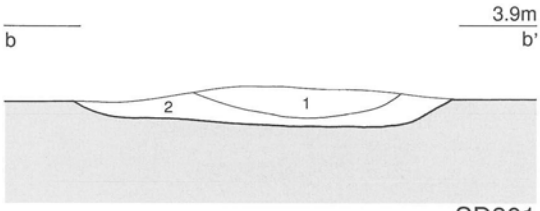
3区　第2遺構面　全体図、SD201～203





SD301

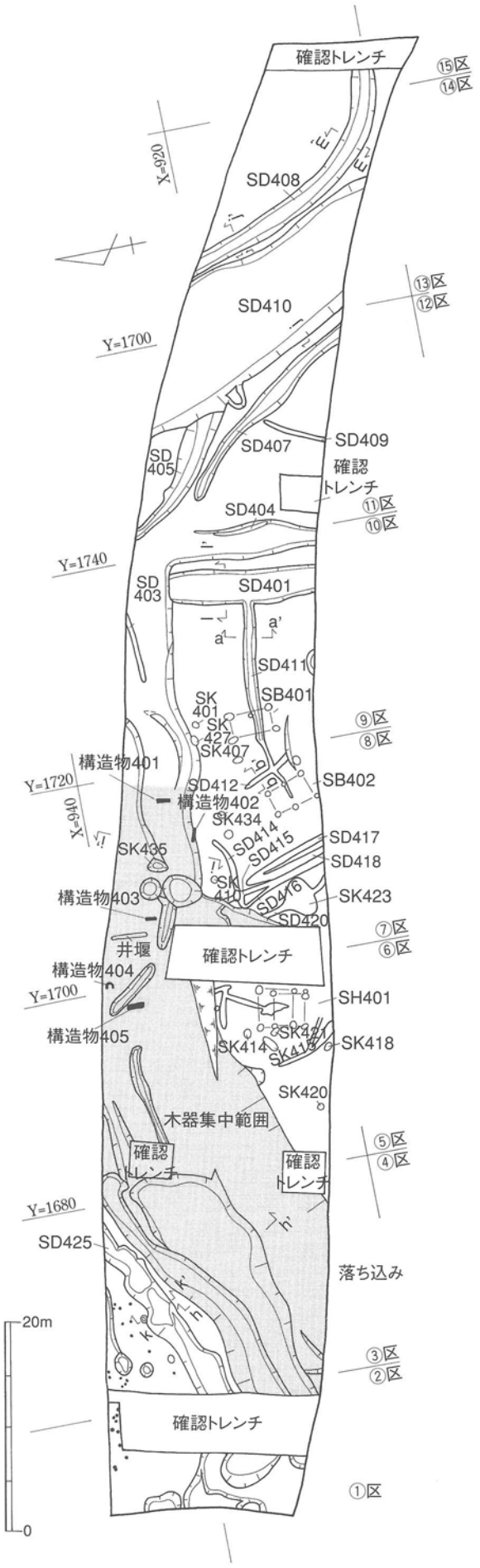
1 暗灰色　粗砂混じりシルト質極細砂（木質多い）
2 灰白色　粗砂～細質（ラミナ状）
3 暗灰色　シルト質極細砂（木質多い）

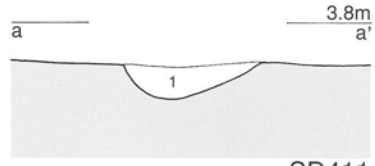


SD301

1 灰白色　粗砂～細砂（ラミナ状）
2 暗灰色　シルト質極細砂（木質多い）

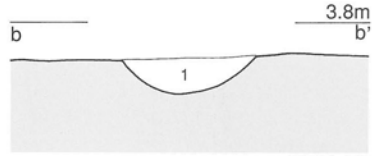
3区　第3遺構面　全体図、SD301





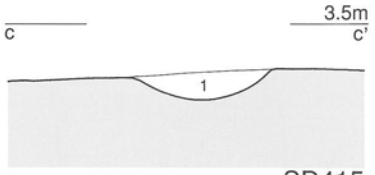
1 黒褐色 シルト

SD411



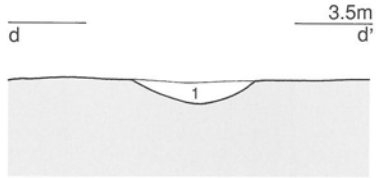
1 黒色 シルト

SD412



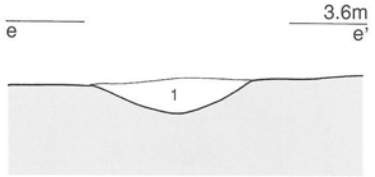
1 暗褐色 粗砂混じりシルト

SD415



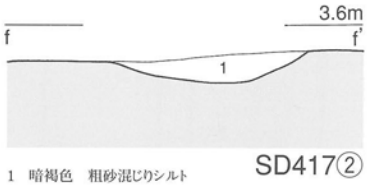
1 暗褐色 粗砂混じりシルト

SD416



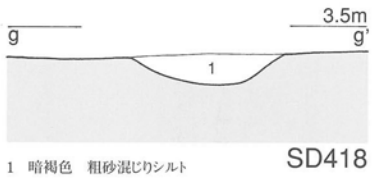
1 暗褐色 粗砂混じりシルト

SD417①



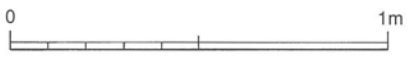
1 暗褐色 粗砂混じりシルト

SD417②

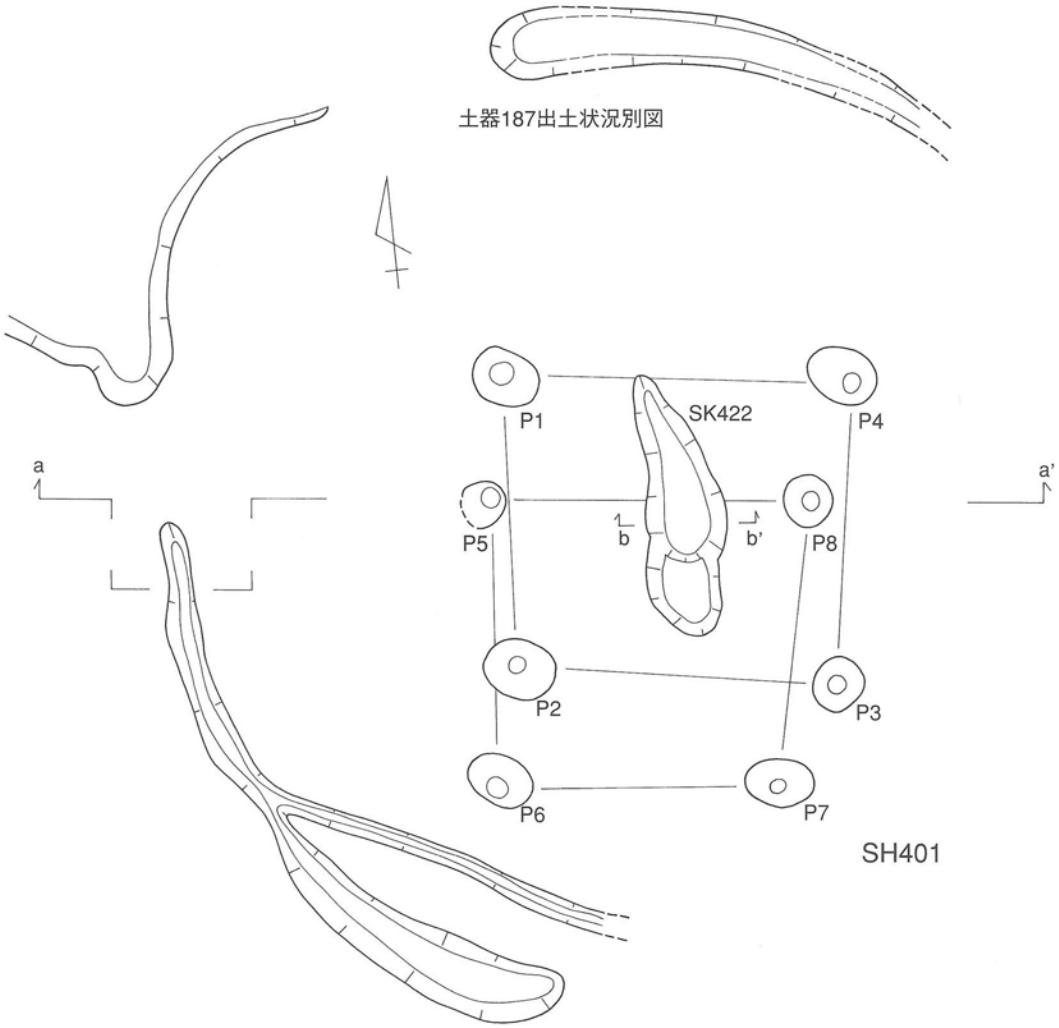


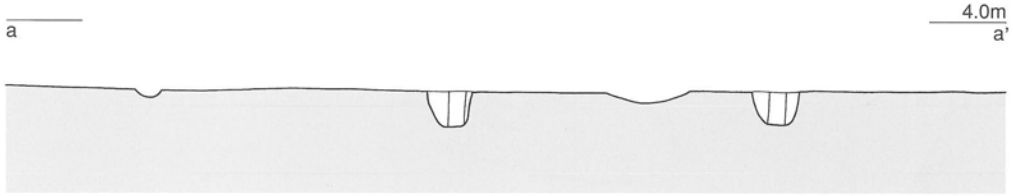
1 暗褐色 粗砂混じりシルト

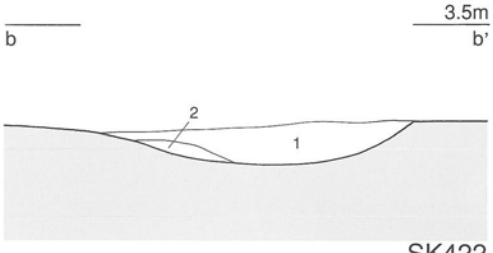
SD418



3区　第4遺構面　全体図、SD



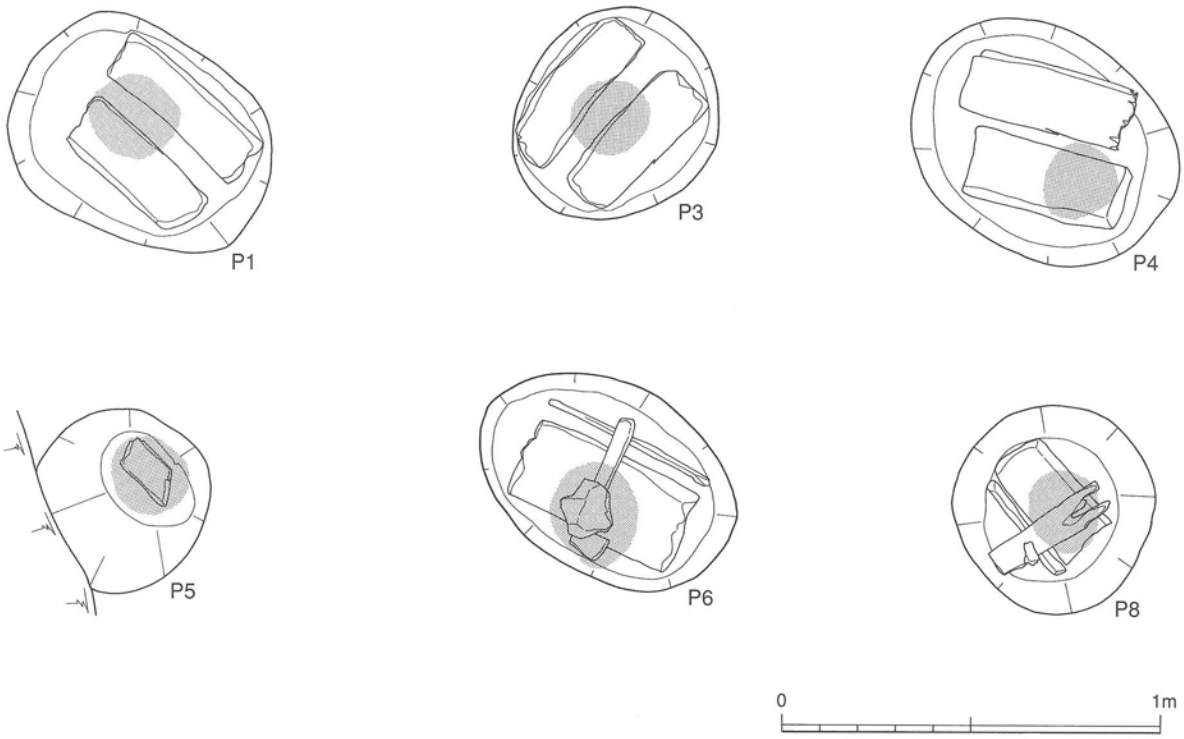


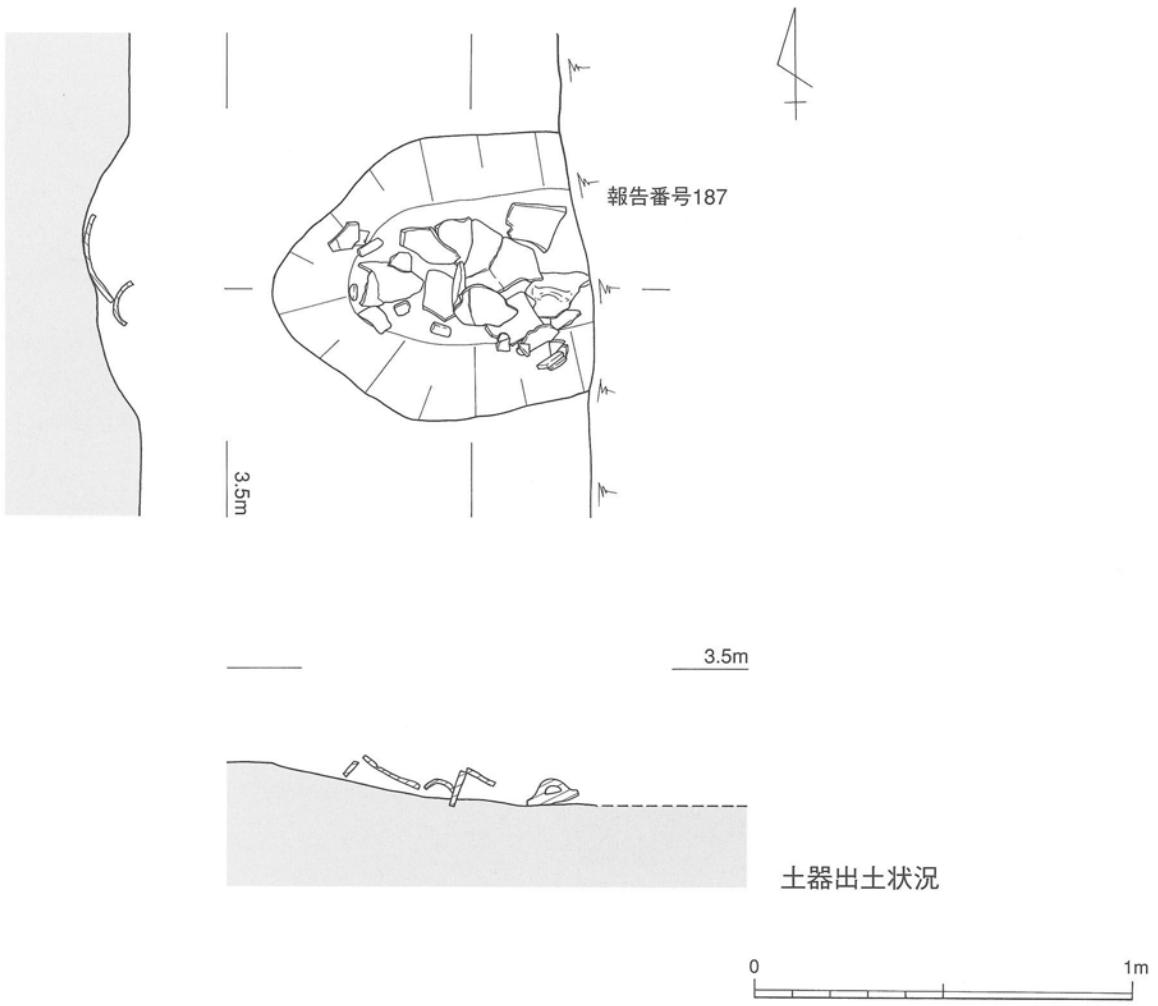


1 暗灰色 シルト（炭混じり）
2 炭

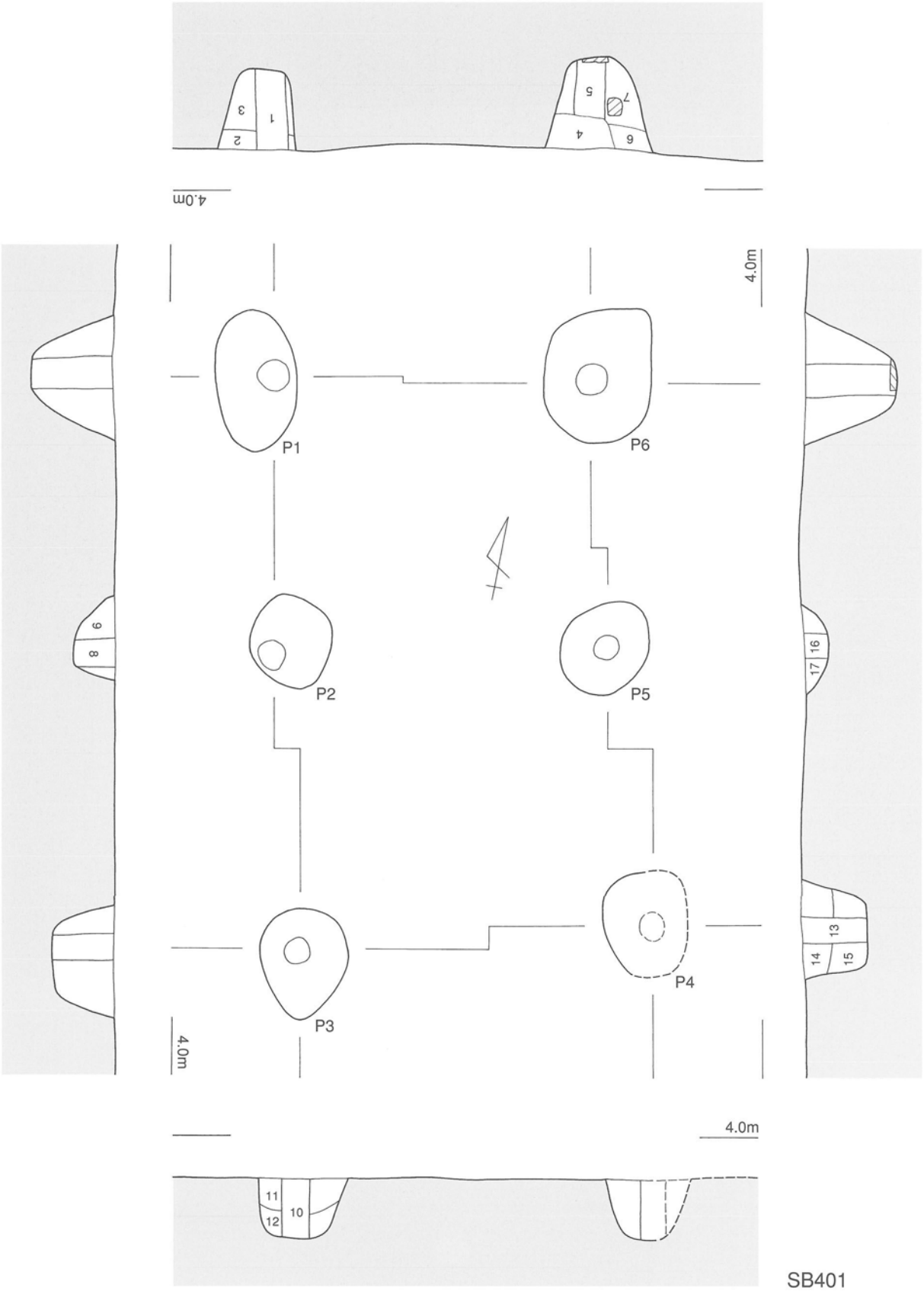
3区　第4遺構面　SH401①

図版32





3区　第4遺構面　SH401②



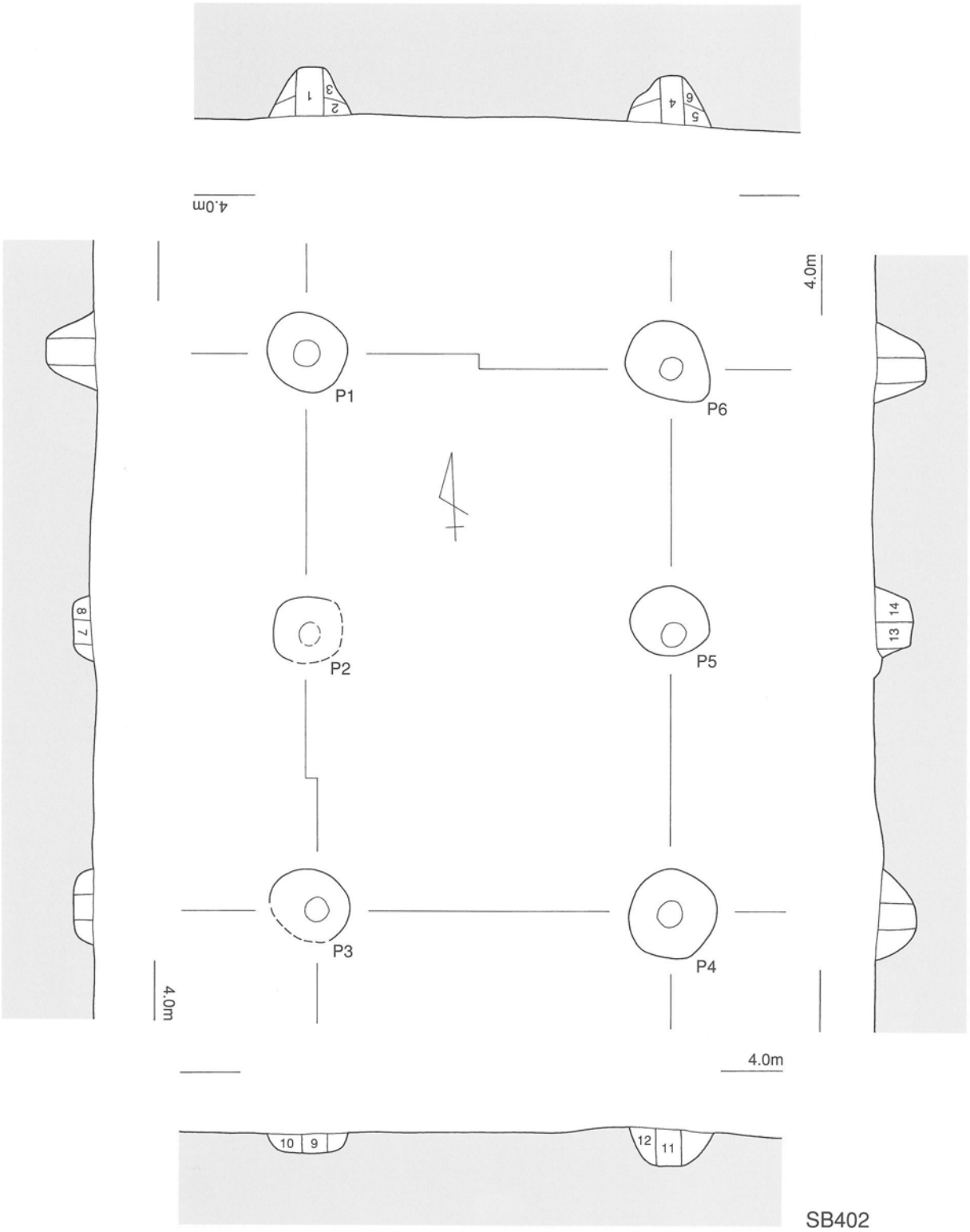
SB401

1 暗灰色 シルト
2 灰褐色 シルト
3 暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり
4 黄灰色 極細砂（暗灰色シルトがブロックで混ざる）
5 暗灰色 シルト
6 灰褐色 シルト
7 灰色 シルト
8 暗灰色 シルト
9 暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり
10 暗灰色 シルト
11 灰色 シルト
12 暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり
13 暗灰色 シルト
14 暗灰色 シルト
15 暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり
16 暗灰色 シルト
17 暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり

0 2m

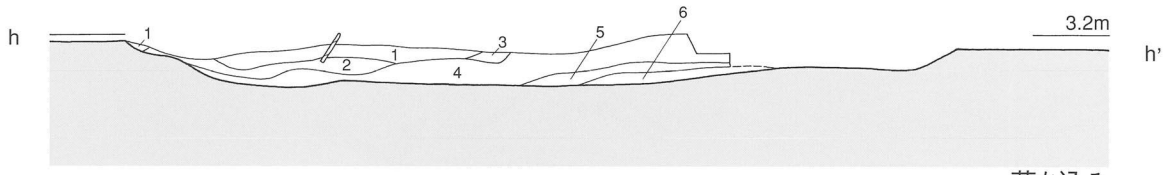
3区 第4遺構面 SB401

図版34



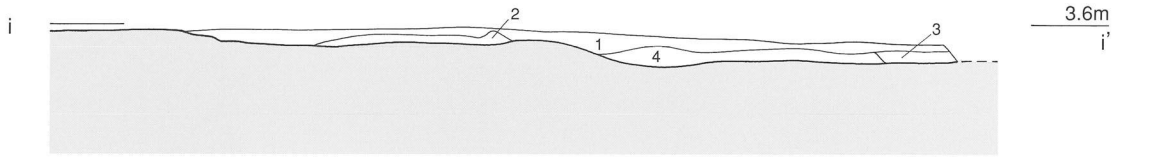
1　暗灰色　シルト
2　灰色　　シルト（粘性）
3　暗灰色シルトと灰色シルトの混ざり
4　暗灰色　シルト
5　灰色　　シルト（粘性）
6　灰色　　シルト（粘性）
7　暗灰色　シルト
8　灰色　　シルト（粘性）
9　暗灰色　シルト
10　灰色　　シルト（粘性）
11　暗灰色　シルト
12　灰色　　シルト（粘性）
13　暗灰色　シルト
14　灰色　　シルト（粘性）

3区　第4遺構面　SB402



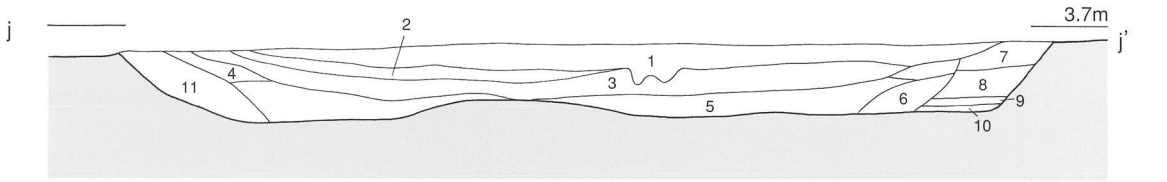
落ち込み

1 暗褐灰色 粗砂混じりシルト
2 灰白色 粗砂～中砂（遺物多く含む）
3 灰色 粗砂
4 暗灰色 シルト
5 暗灰色 粗砂混じりシルト
6 黄褐色 粗砂



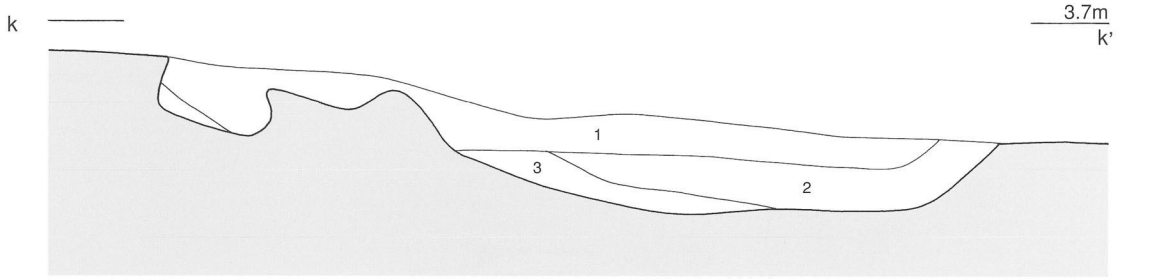
落ち込み

1 暗灰褐色 粗砂混じり シルト
2 暗灰褐色 極細砂質 シルト
3 黒褐色 腐植質 シルト
4 暗灰色 粗砂



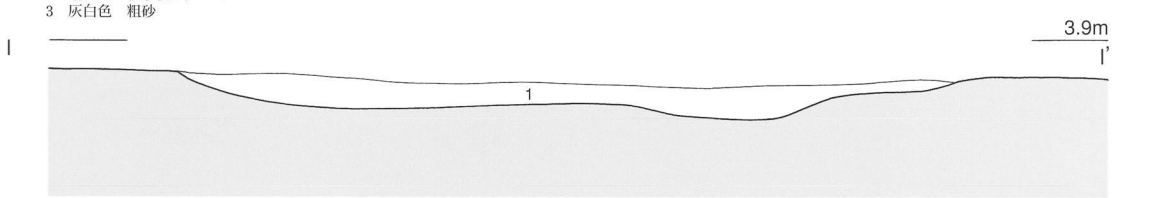
SD410

1 暗褐色 シルト（西側に木器が多い）
2 暗灰褐色 シルト
3 黒色 シルト
4 灰色 極細砂質シルト
5 暗褐色 腐食質シルト
6 灰色 シルト
7 灰白色 細砂混じりシルト
8 褐灰色 シルト
9 暗灰褐色 シルト
10 暗灰色 シルト
11 灰白色 極細砂質シルト



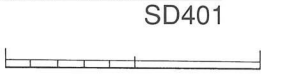
SD425

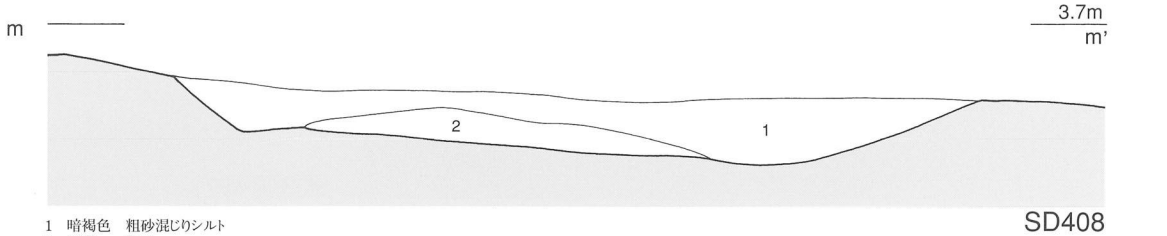
1 暗褐色 粗砂（ラミナ）
2 暗灰色 粗砂混じりシルト
3 灰白色 粗砂



SD401

1 暗褐色 粗砂混じりシルト

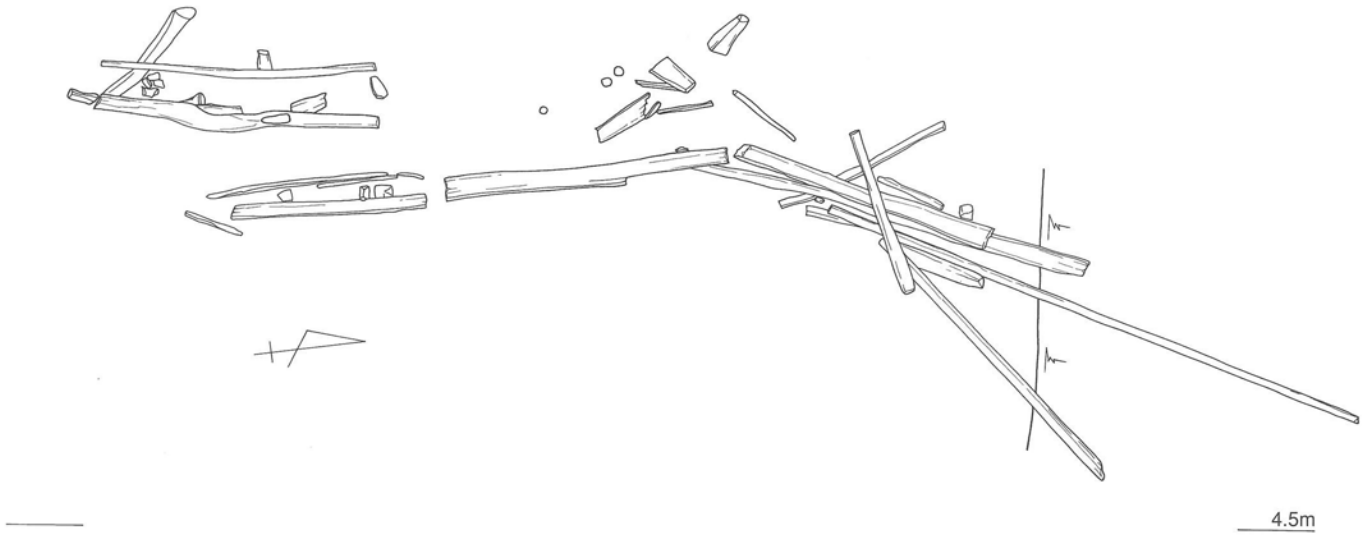


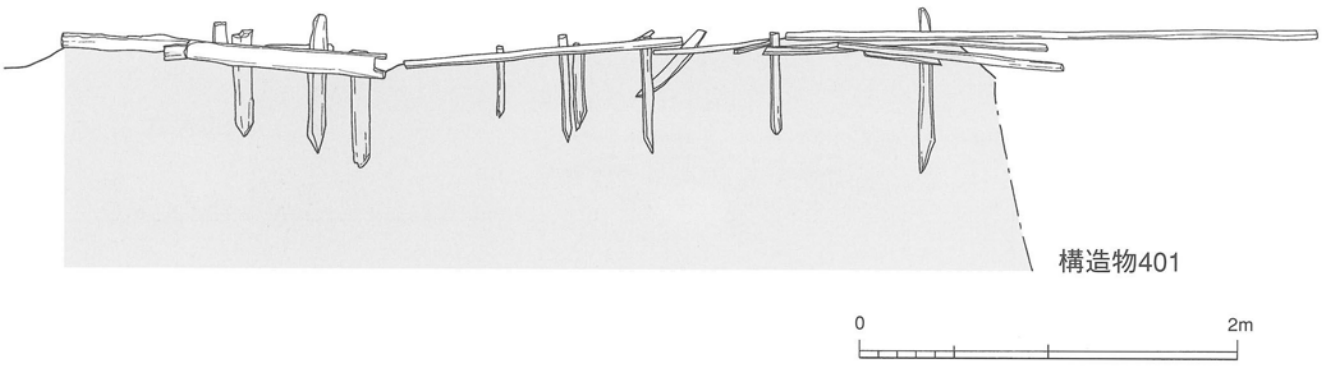


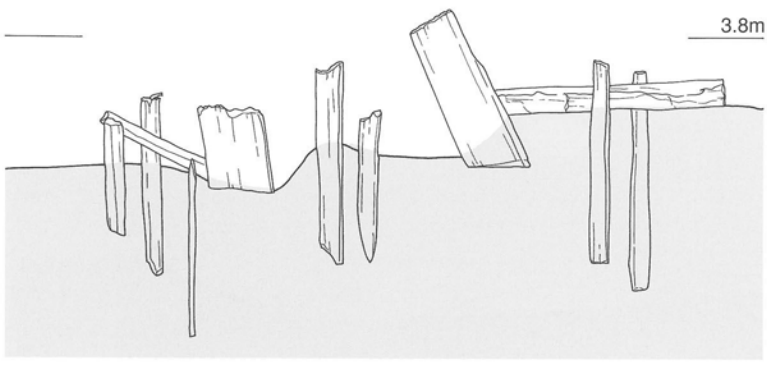
SD408

1 暗褐色 粗砂混じりシルト
2 灰色 粗砂

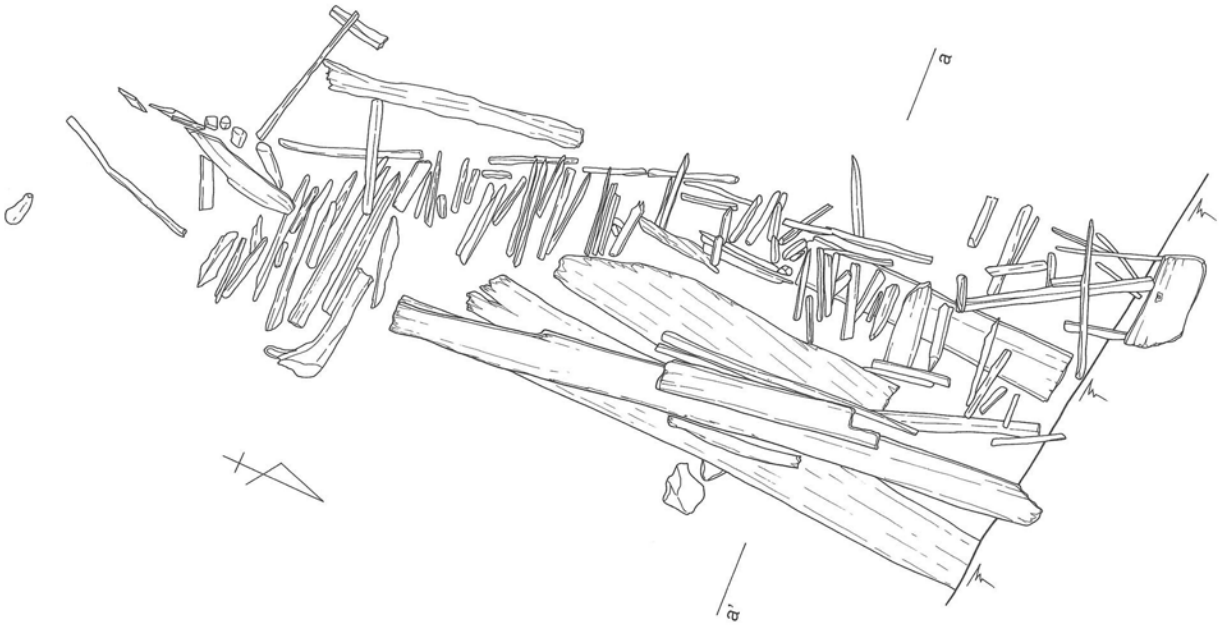
3区 第4遺構面 SD、落ち込み

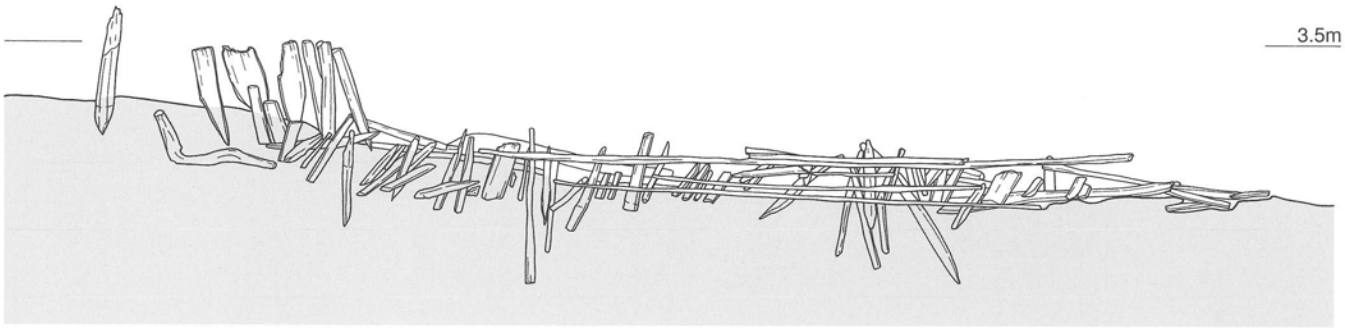




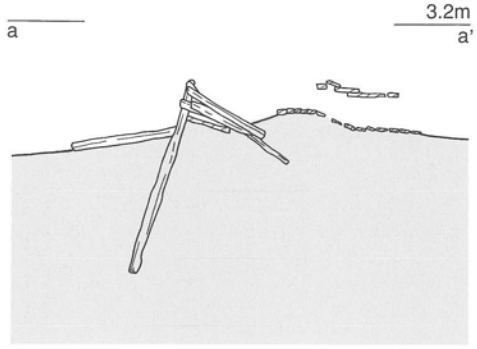


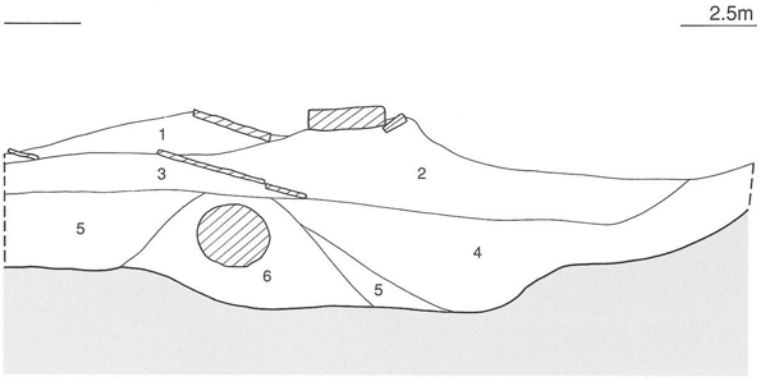
3区　第4遺構面　構造物401・402





構造物403

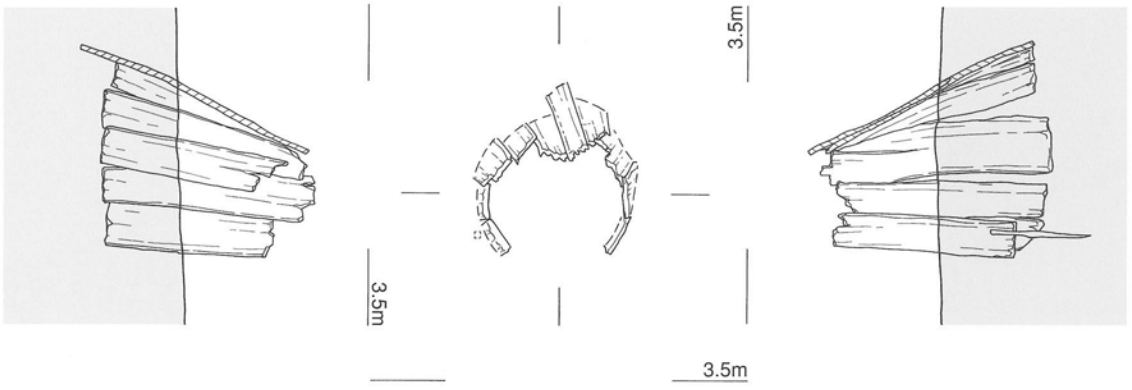


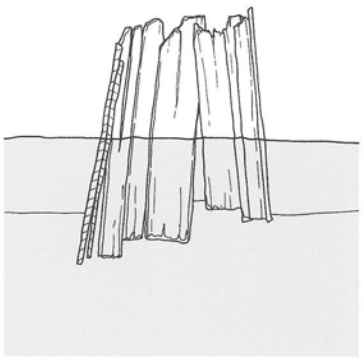


1 暗灰色　シルト
2 暗褐色　極細砂（腐植土）
3 暗褐色　シルト（腐植土）
4 灰色　シルト（井堰側は細砂～極細砂のラミナ）
5 暗灰褐色　粗砂混じりシルト（粗砂多い）
6 暗灰褐色　粗砂混じりシルト

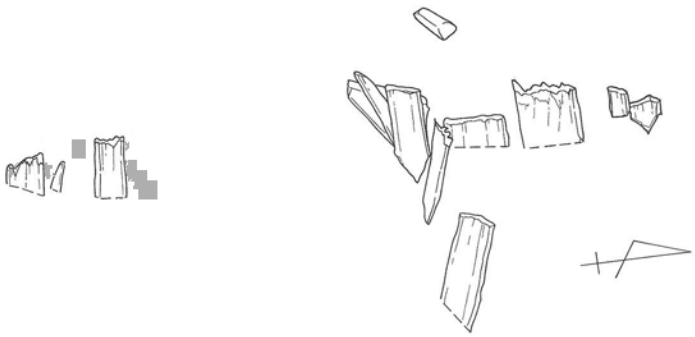
調査区北壁における土層図（南から）

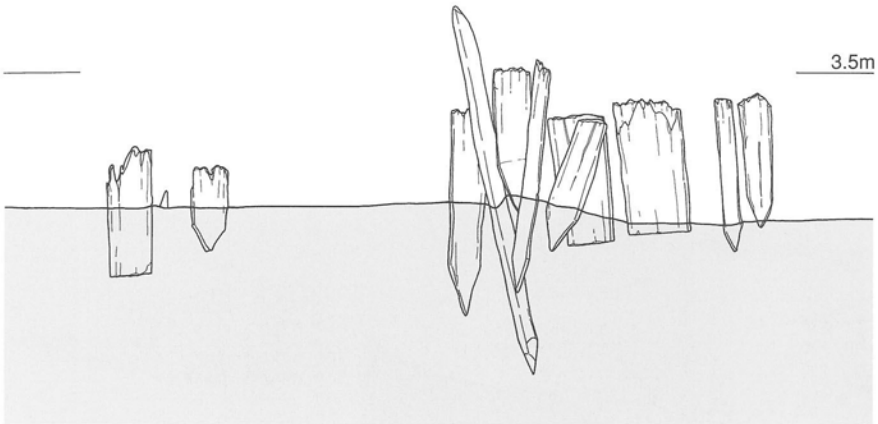
3区　第4遺構面　構造物403





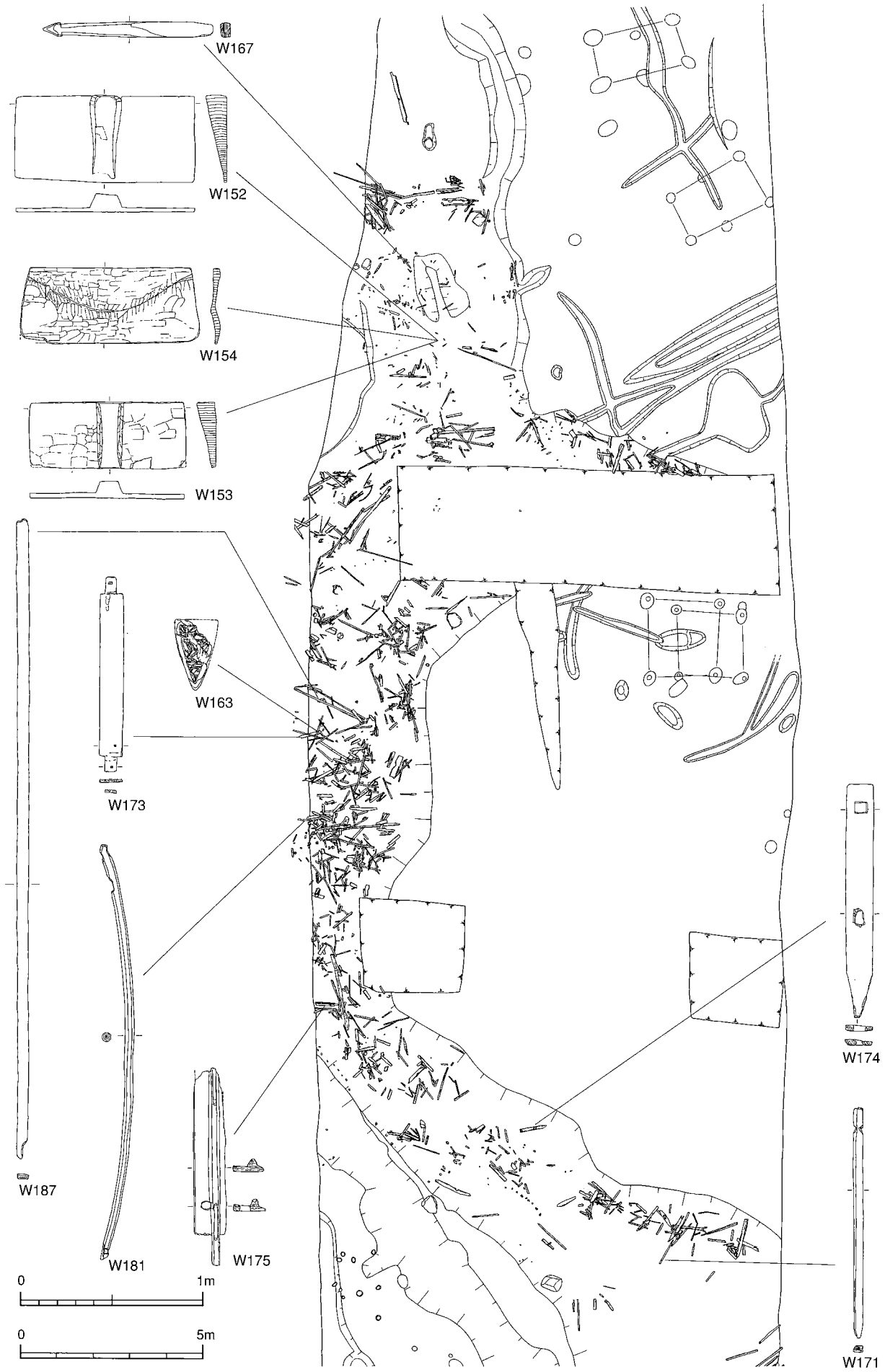
構造物404



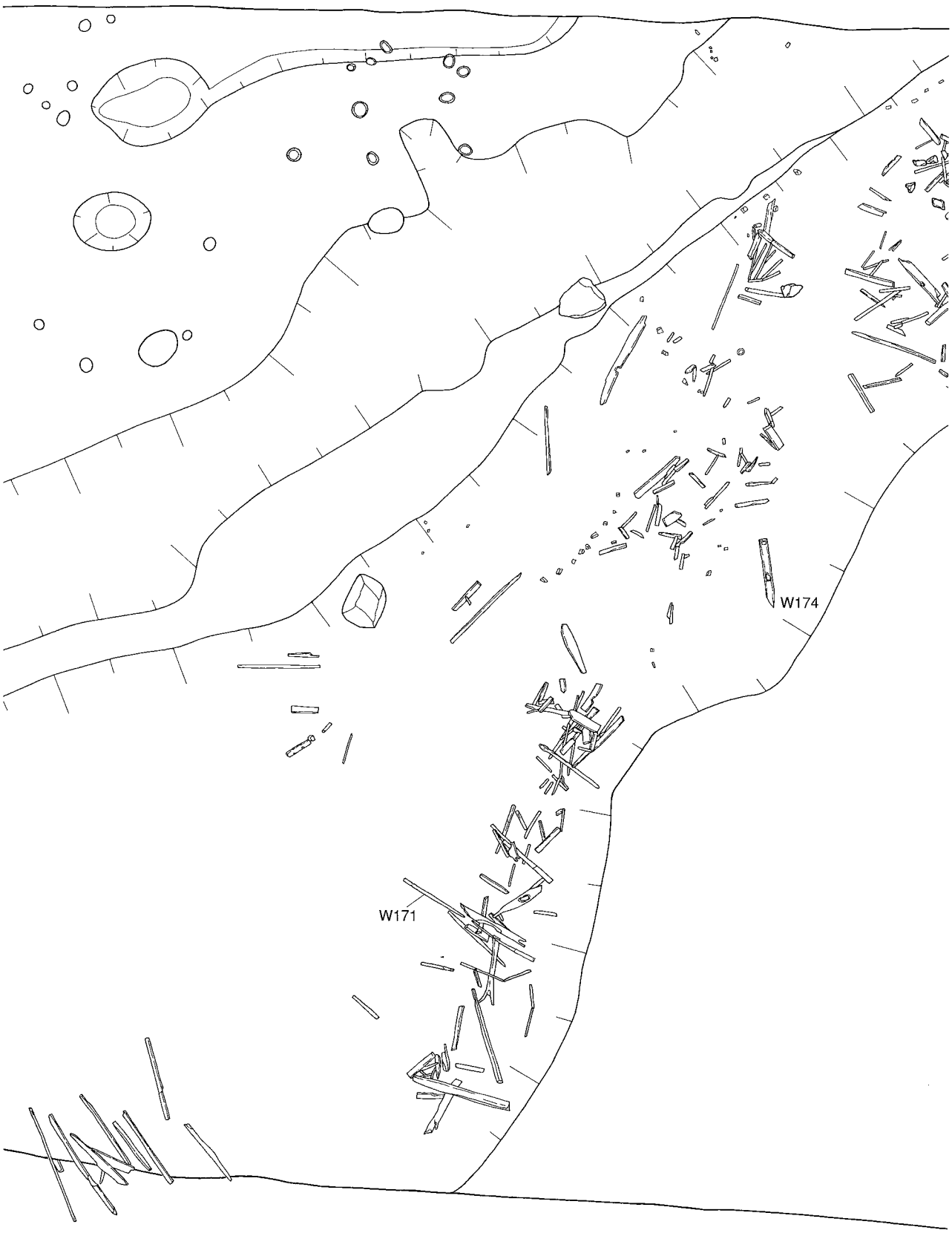


構造物405

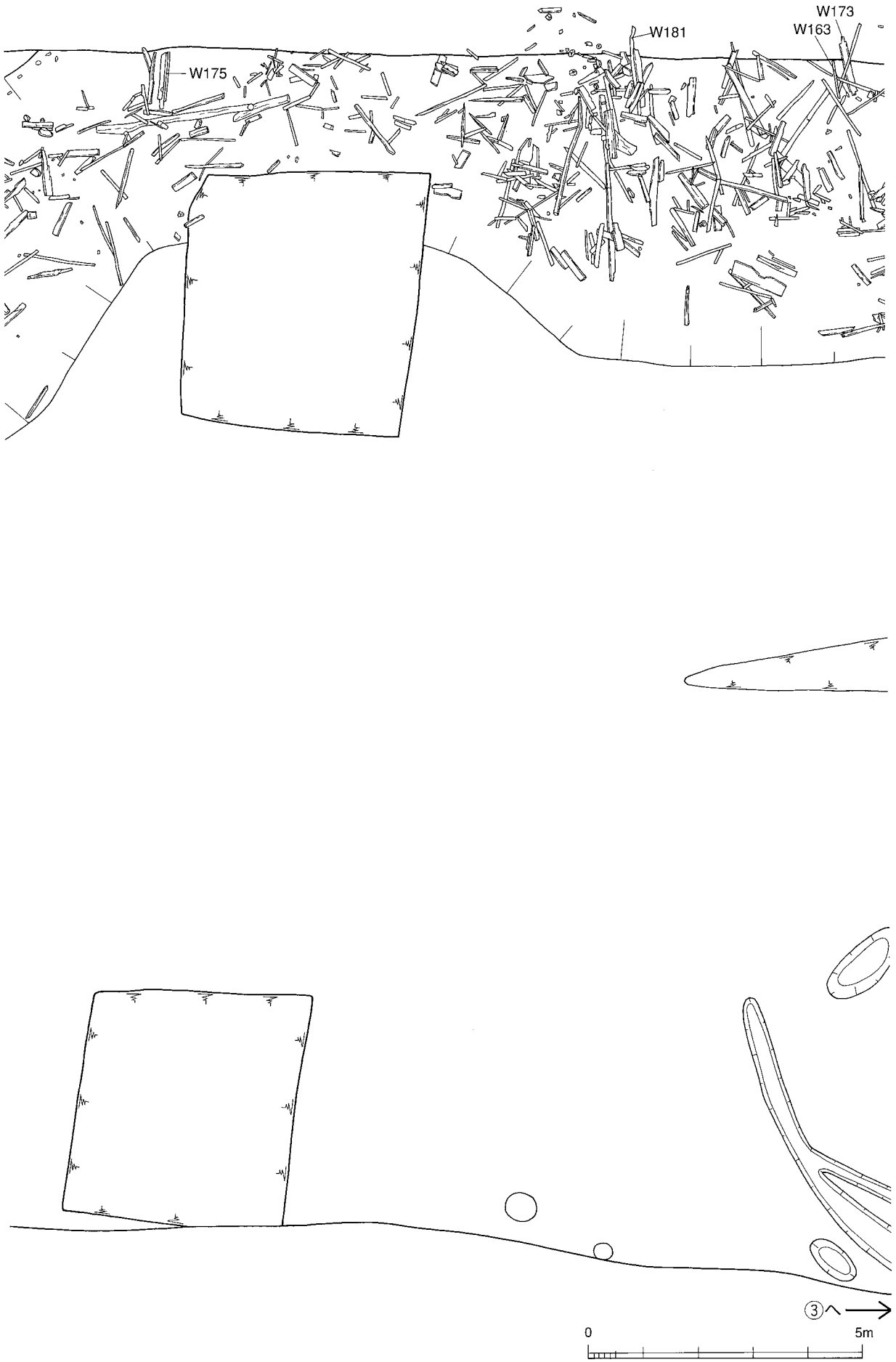
3区　第4遺構面　構造物404・405



3区　第4遺構面　木器出土状況（全体）

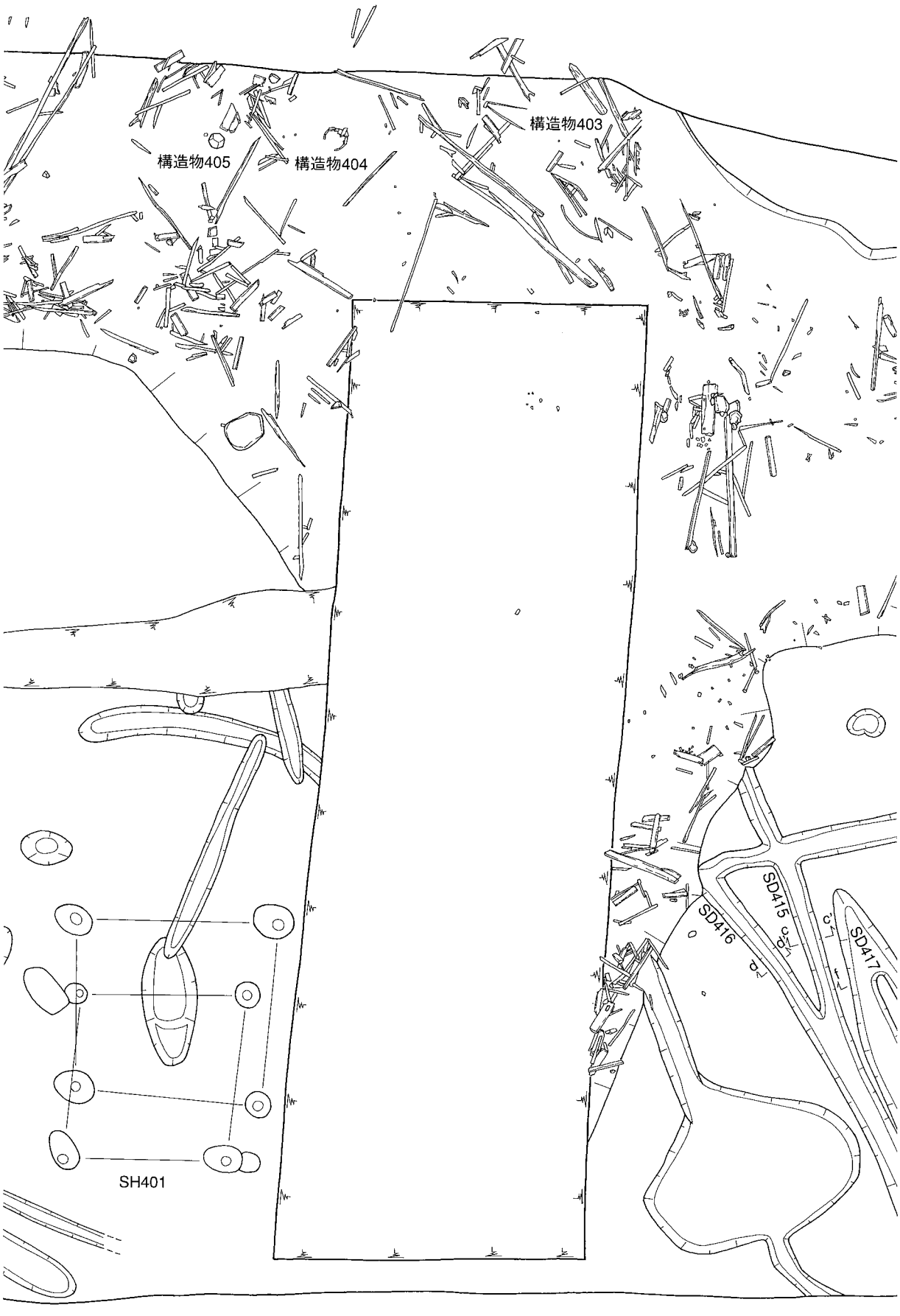


3区　第4遺構面　木器出土状況①

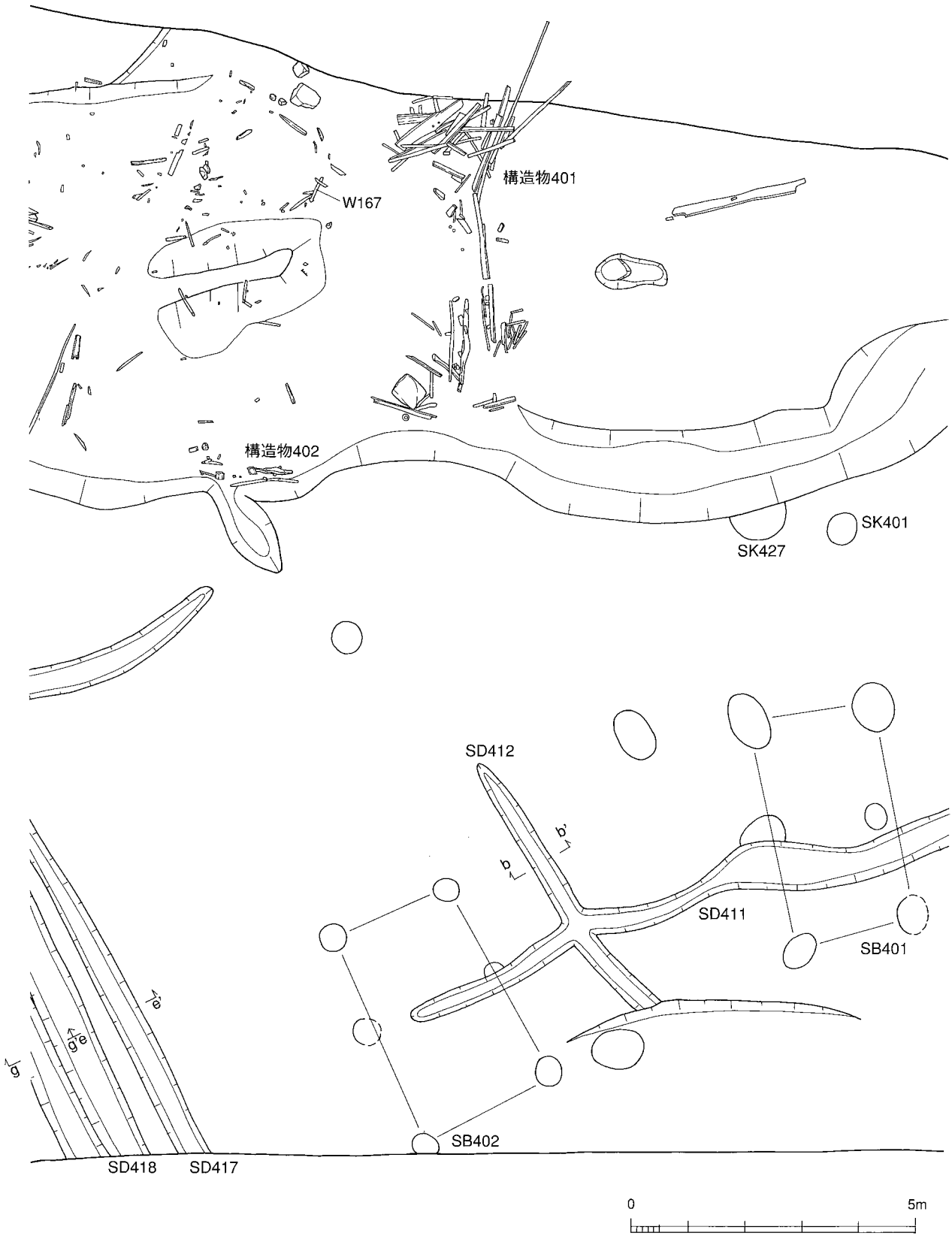


3区　第4遺構面　木器出土状況②

図版42

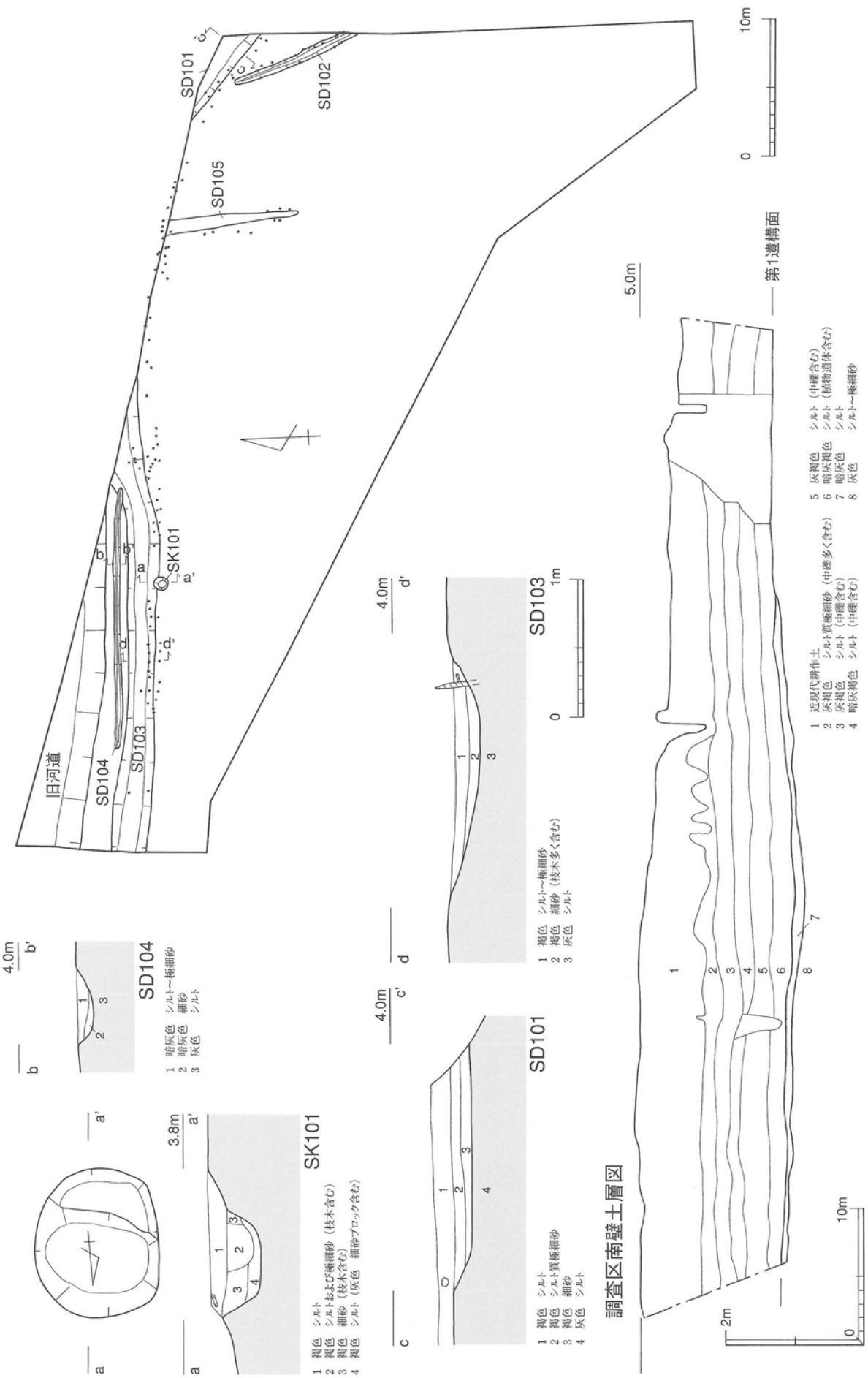


3区　第4遺構面　木器出土状況③

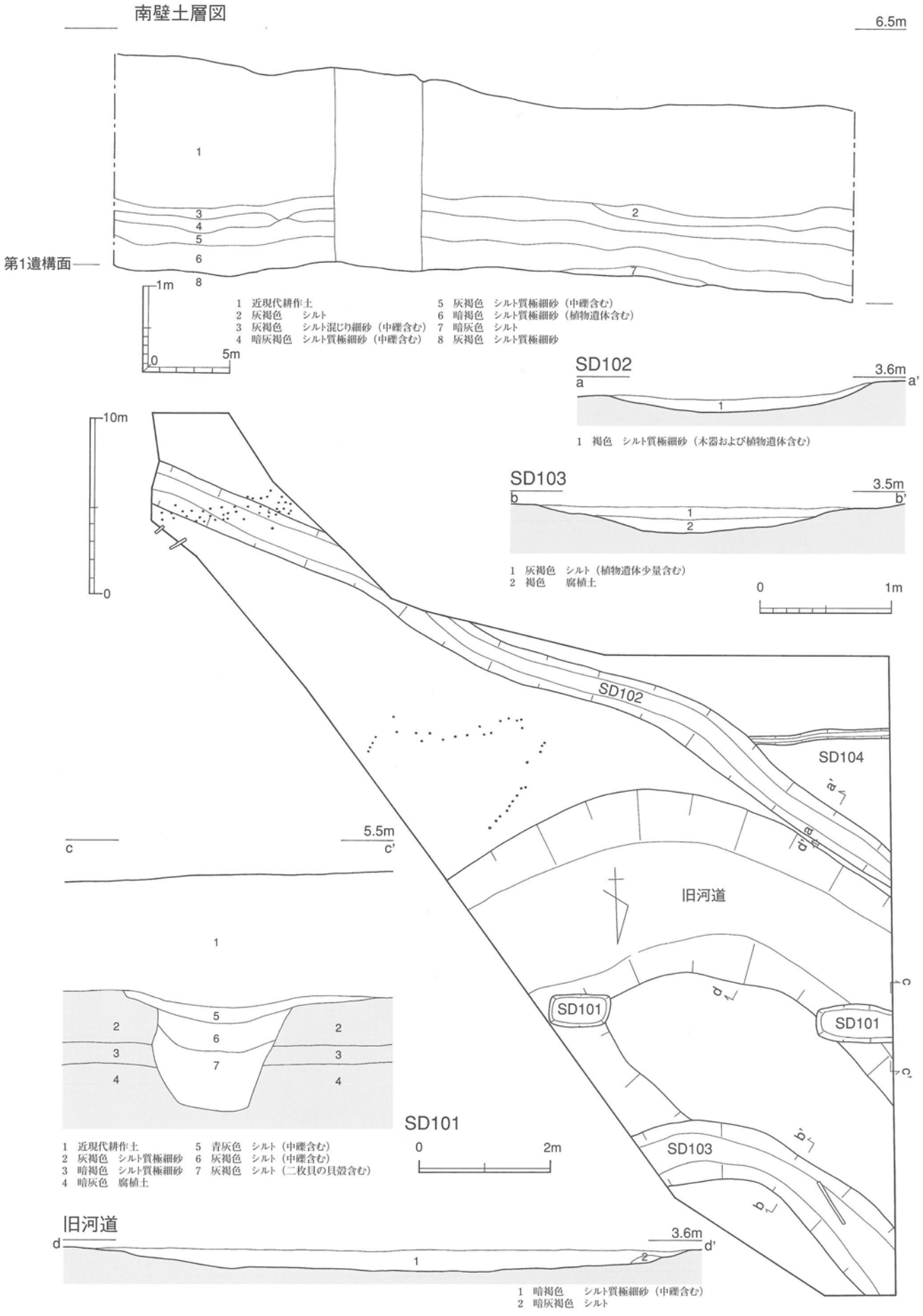


3区　第4遺構面　木器出土状況④

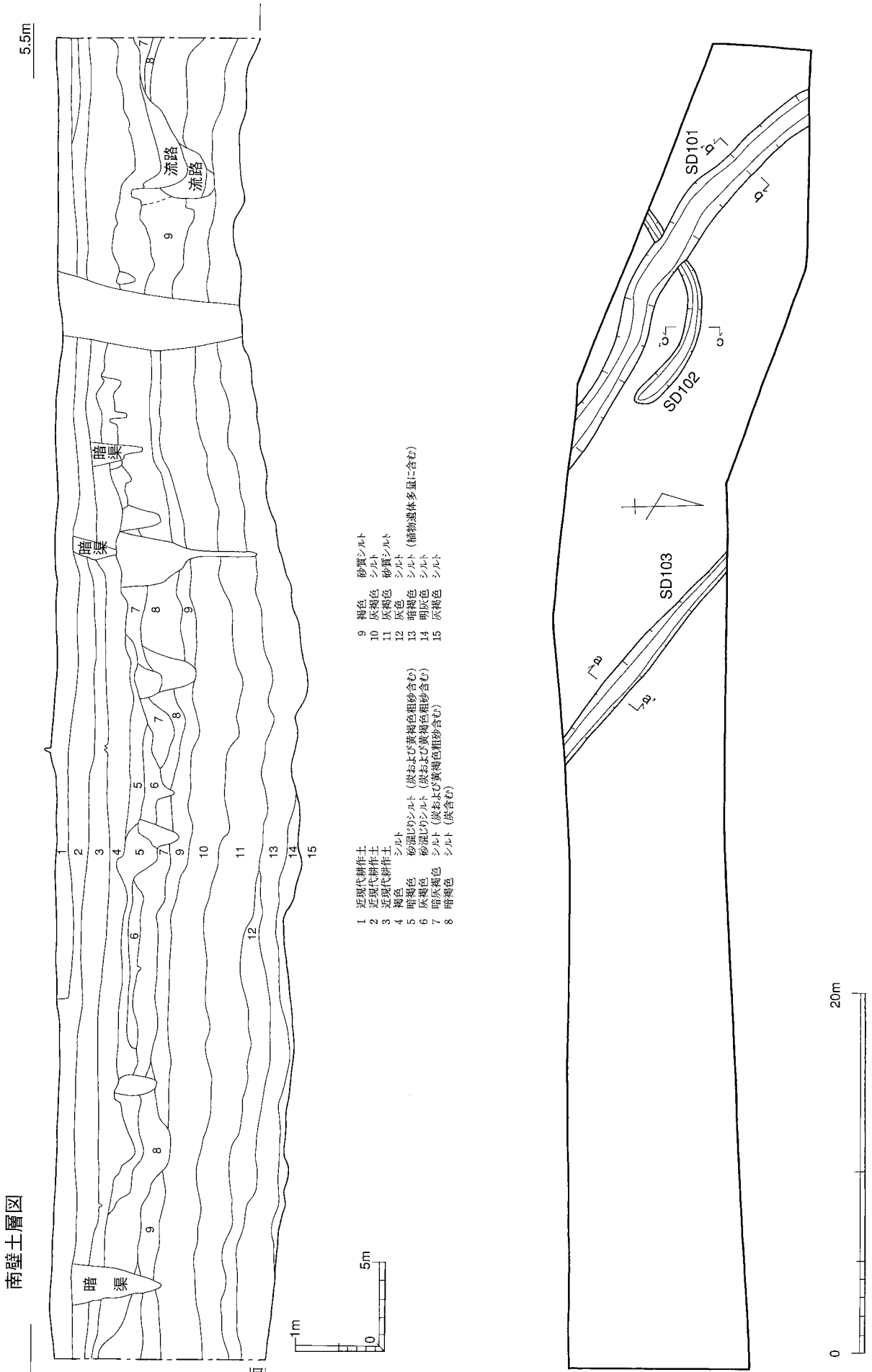
4区　調査区配置図



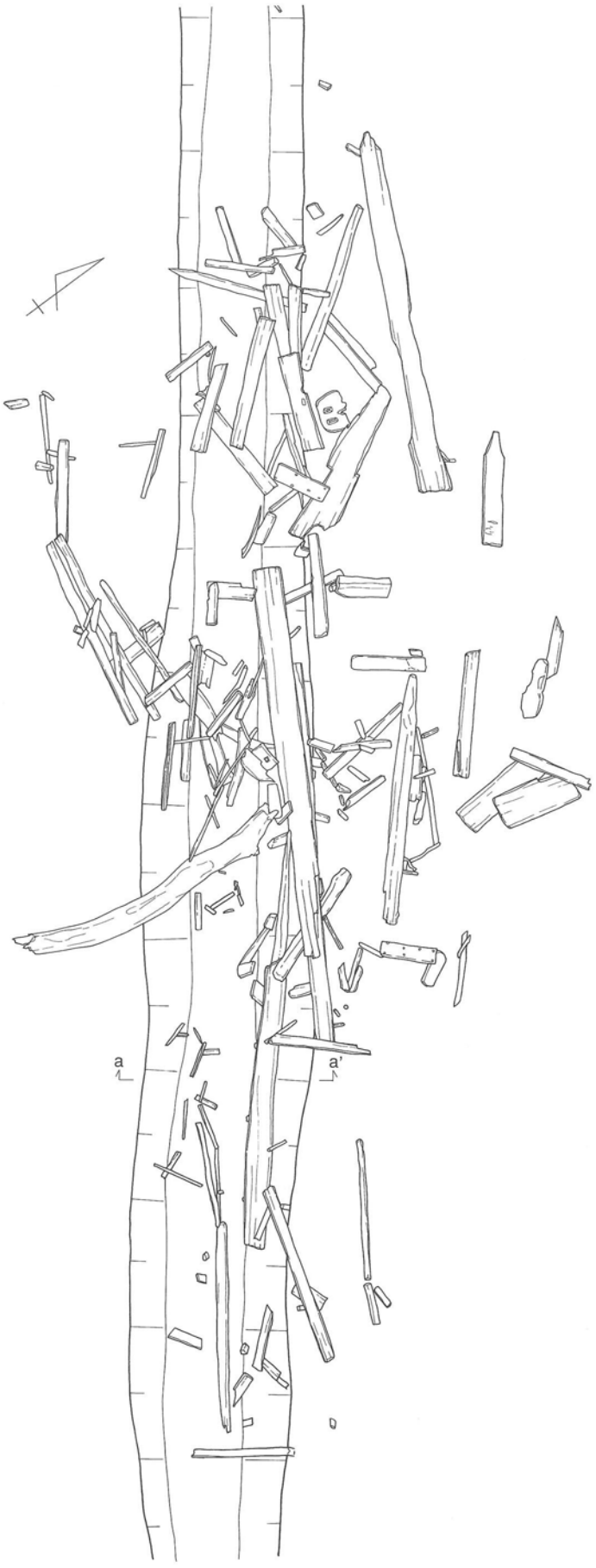
4区　A地点　第1遺構面　全体図、土層断面図、SK、SD

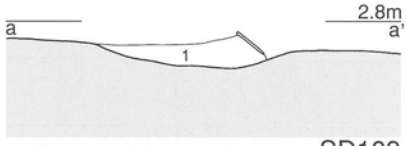


4区　B地点　第1遺構面　全体図、土層断面図、SD、旧河道

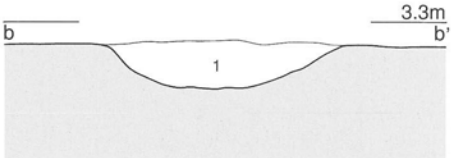


4区　C地点　第1遺構面　全体図、土層断面図

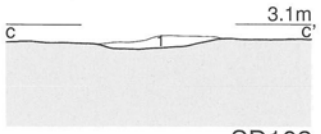




1　暗褐色　シルト（植物遺体含む）　SD103



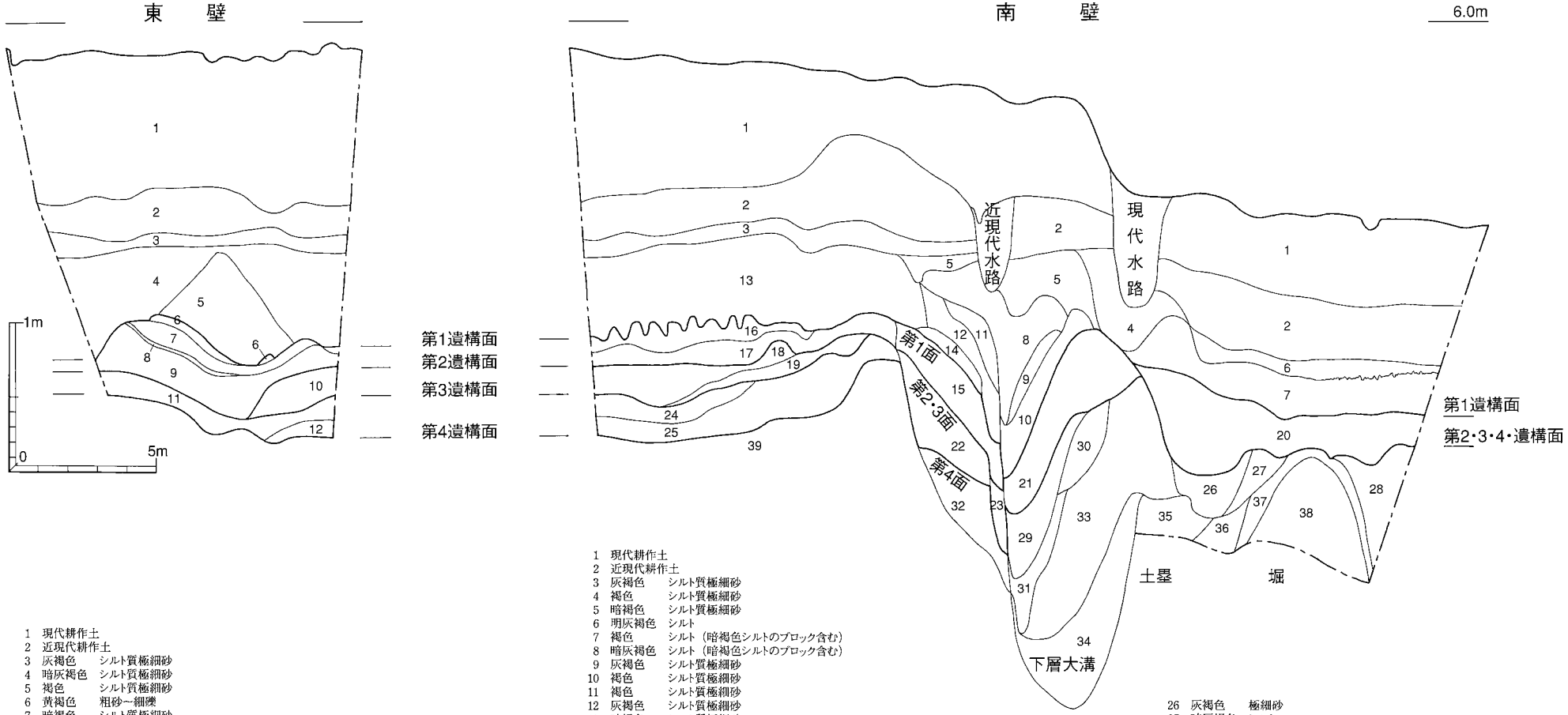
1　暗褐色　シルト（植物遺体多く含む）　SD101



1　暗灰色　シルト　SD102

4区　C地点　第1遺構面　SD

4区　D地点　土層断面図

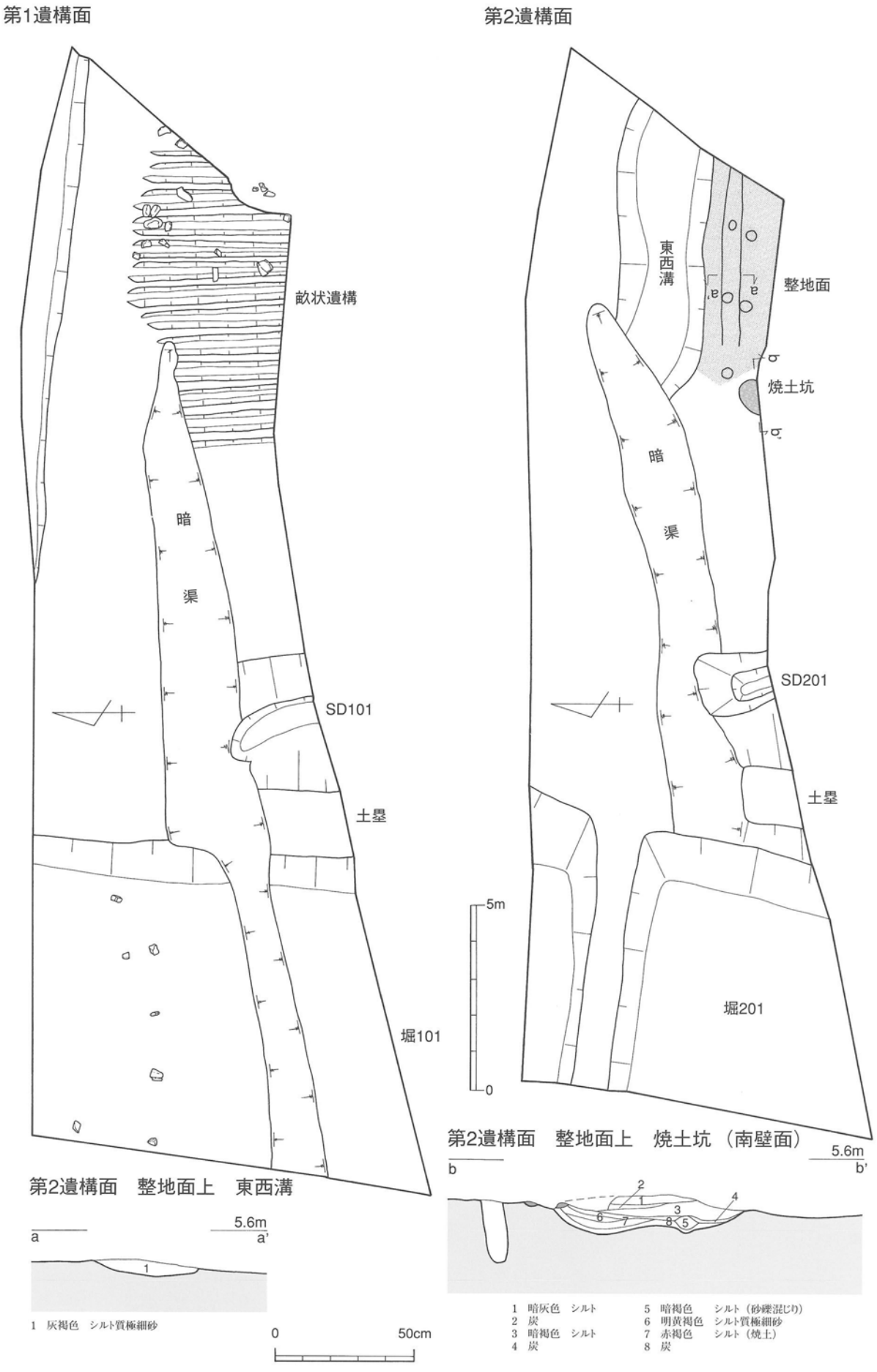


1　現代耕作土
2　近現代耕作土
3　灰褐色　シルト質極細砂
4　暗灰褐色　シルト質極細砂
5　褐色　シルト質極細砂
6　黄褐色　粗砂～細礫
7　暗褐色　シルト質極細砂
8　黄褐色　粗砂～細礫
9　褐色　シルト質極細砂
10　黄褐色　粗砂～細礫
11　暗褐色　シルト～シルト質極細砂
12　褐色　シルト～シルト質極細砂
13　灰褐色　シルト質極細砂（細礫含む）

1　現代耕作土
2　近現代耕作土
3　灰褐色　シルト質極細砂
4　褐色　シルト質極細砂
5　暗褐色　シルト質極細砂
6　明灰褐色　シルト
7　褐色　シルト（暗褐色シルトのブロック含む）
8　暗灰褐色　シルト（暗褐色シルトのブロック含む）
9　灰褐色　シルト質極細砂
10　褐色　シルト質極細砂
11　褐色　シルト質極細砂
12　灰褐色　シルト質極細砂
13　暗褐色　シルト質極細砂
14　褐色　シルト質極細砂（黄褐色粗砂含む）
15　褐色　シルト質極細砂
16　赤～暗褐色　焼土層
17　褐色　シルト質極細砂
18　黄褐色　粗砂～細礫
19　灰褐色　シルト
20　褐色　シルト
21　暗灰褐色　シルト質極細砂（黄褐色粗砂含む）
22　褐色　シルト質極細砂
23　暗褐色　シルト
24　褐色　シルト質極細砂
25　暗褐色　シルト～シルト質極細砂

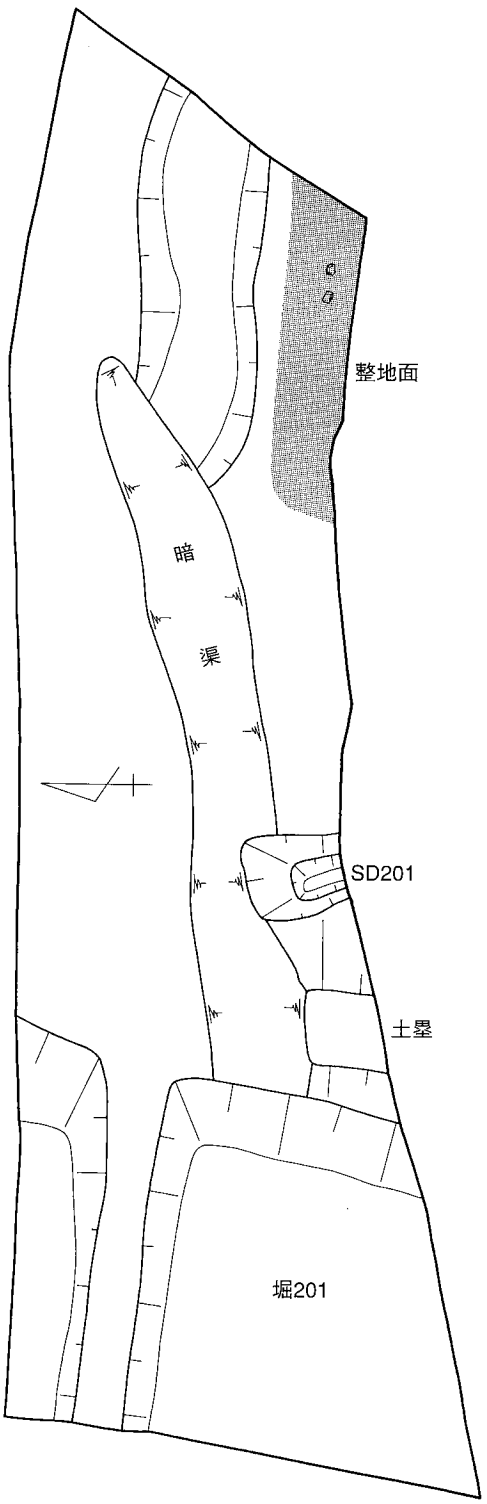
26　灰褐色　極細砂
27　暗灰褐色　シルト
28　暗灰褐色　シルト
29　褐色　シルト質極細砂
30　灰褐色　シルト（暗褐色シルトのブロック含む）
31　暗褐色　シルト
32　暗灰褐色　シルト
33　褐色　シルト質極細砂
34　暗灰褐色　シルト
35　暗褐色　シルト質極細砂
36　暗褐色　腐植土
37　灰色　シルト
38　暗褐色　腐植土
39　灰褐色　シルト質極細砂（細礫含む）

図版49

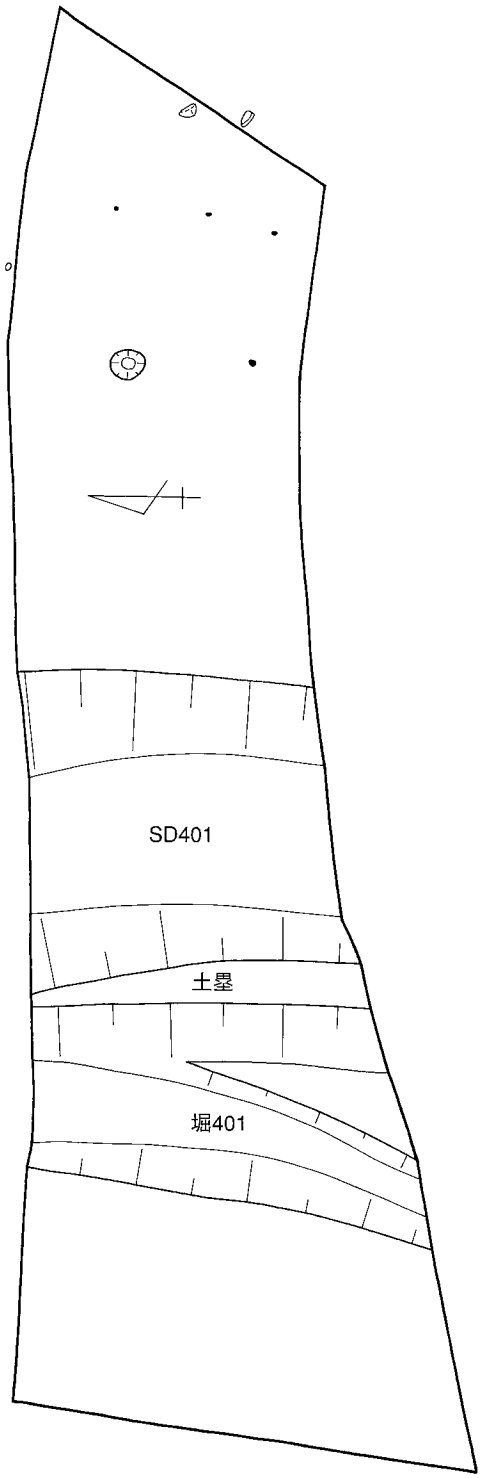


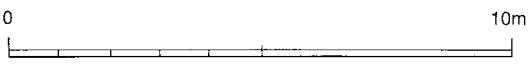
4区　D地点　第1・2遺構面　全体図

第3遺構面



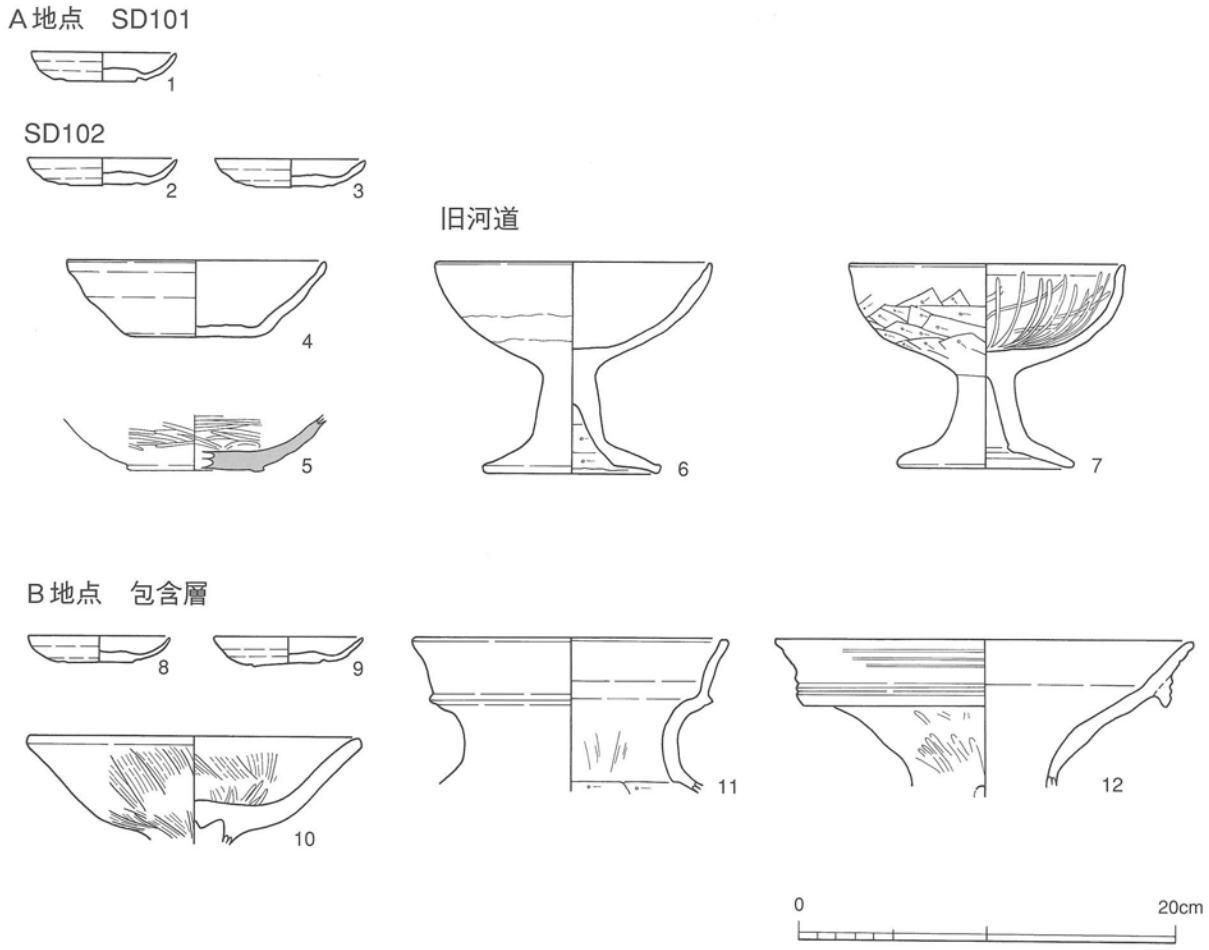
第4遺構面





4区　D地点　第3・4遺構面　全体図

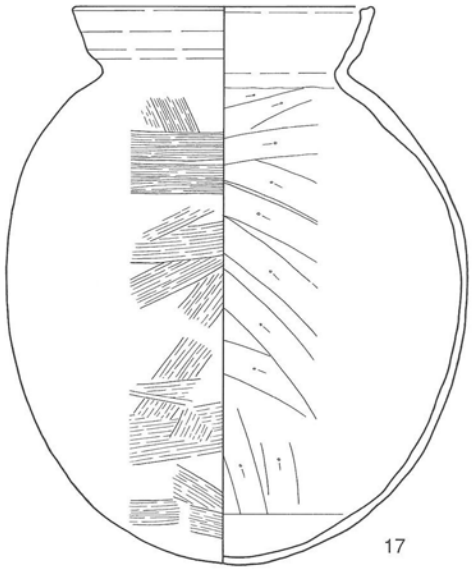
図版52



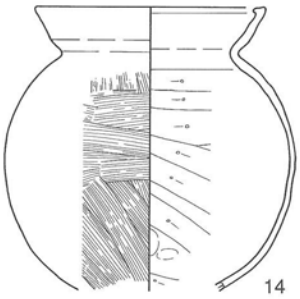
土器　1区　A・B地点　第1遺構面

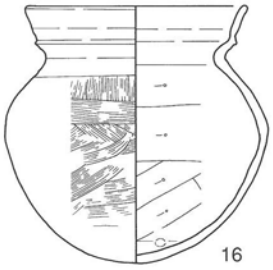
第1遺構面
旧河道

第2遺構面
SD201

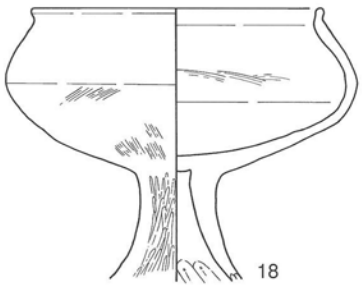


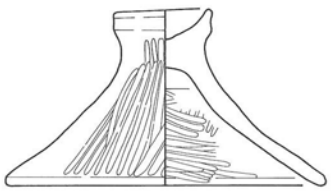
SD102





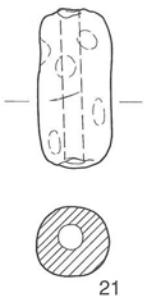
旧河道



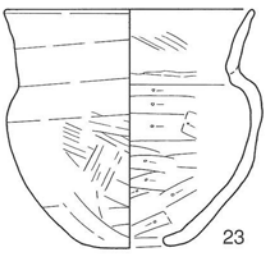


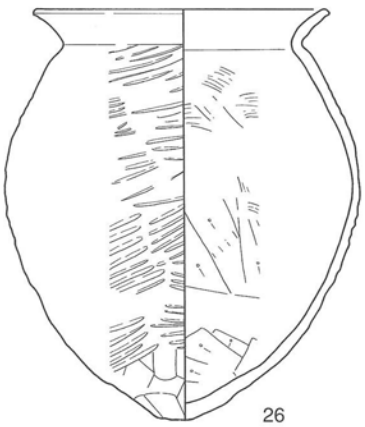
包含層

旧河道



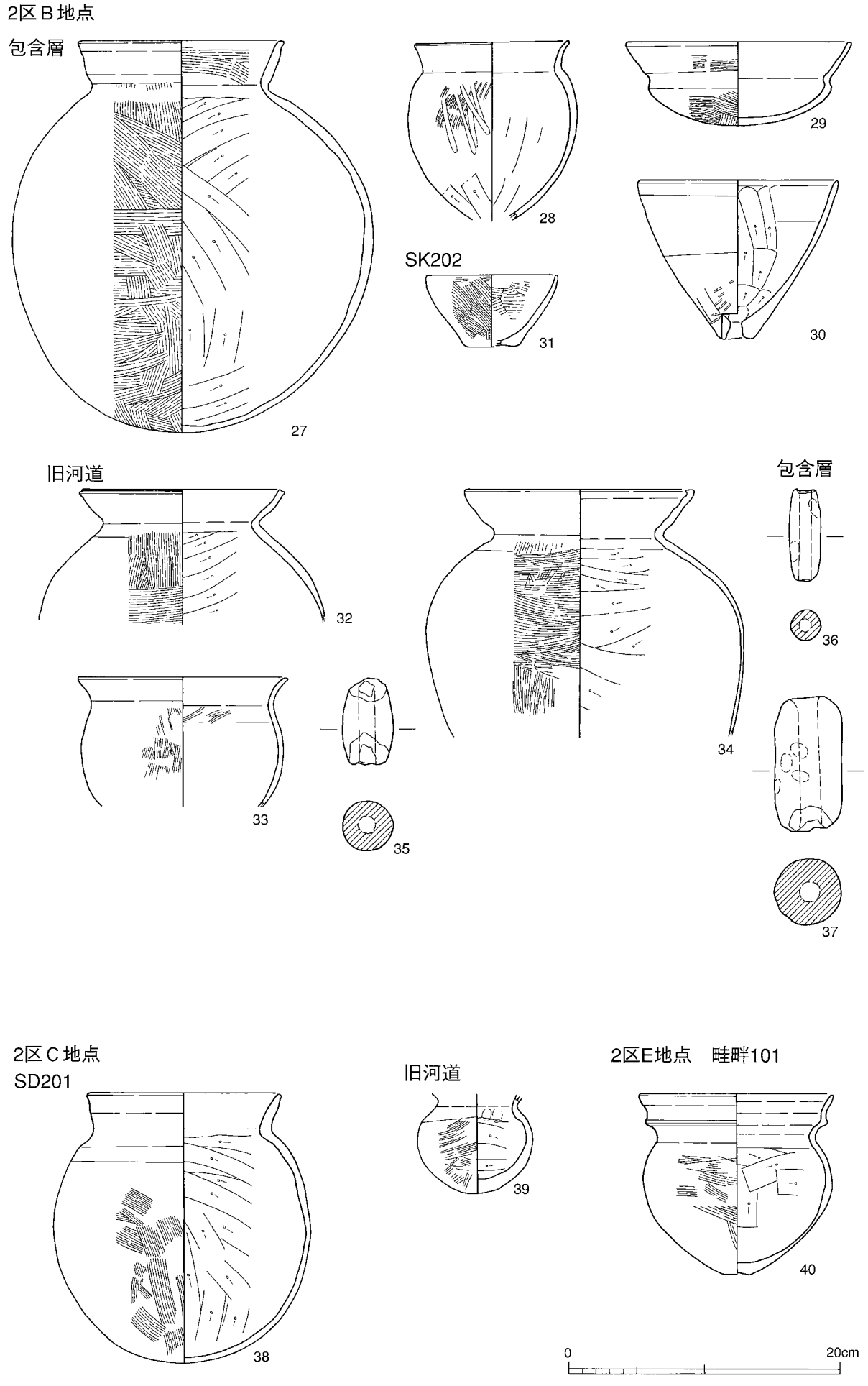
包含層





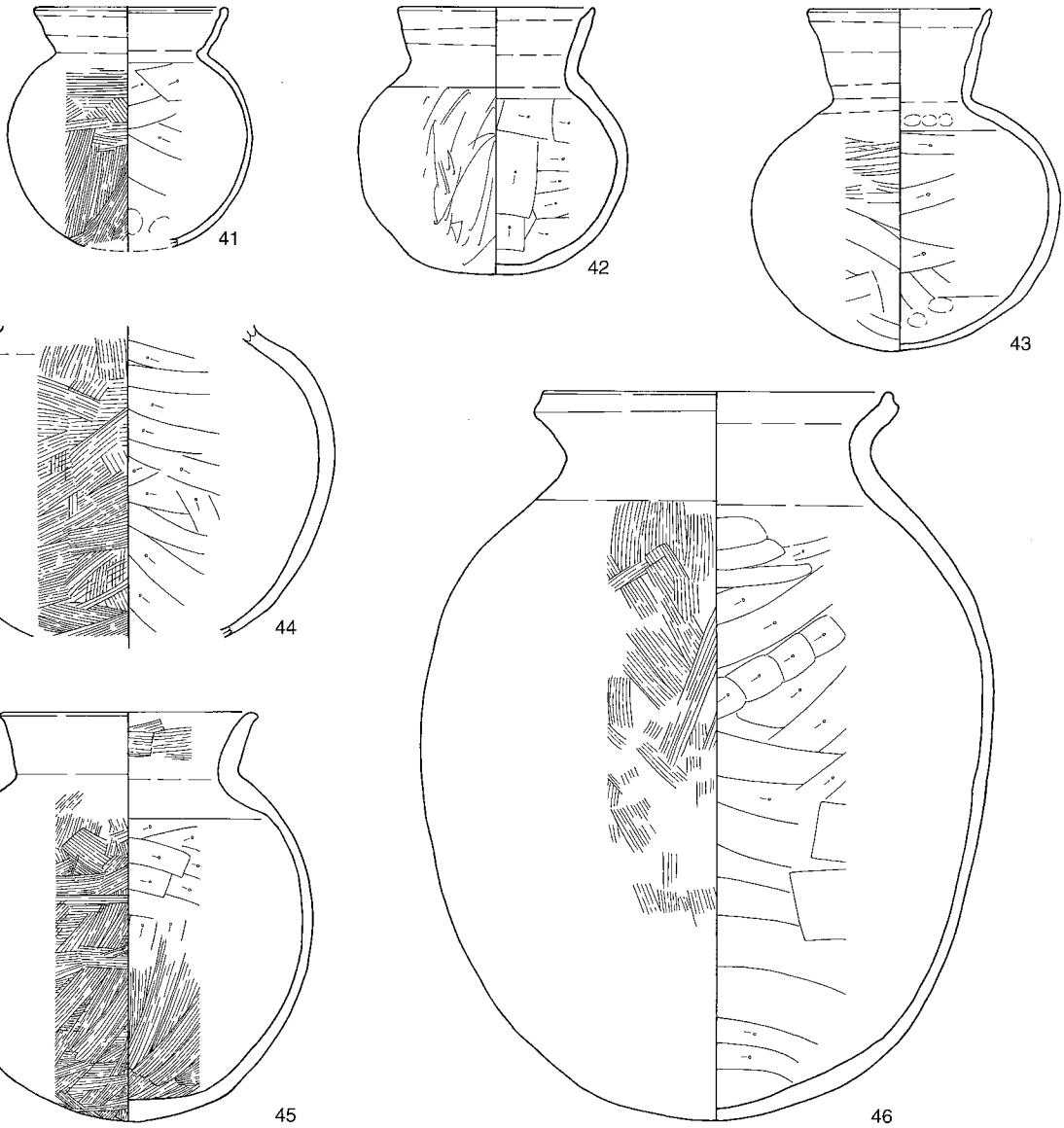
土器　2区　B地点　第1・2遺構面①

図版54

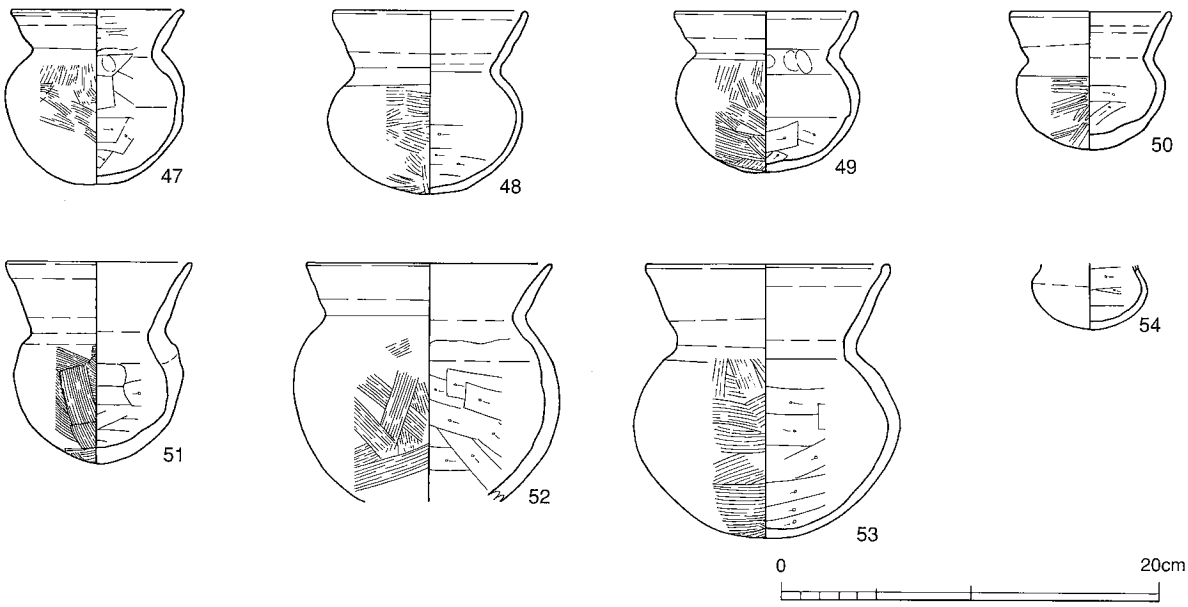


土器　2区　B地点　第2遺構面②、C・E地点　第1・2遺構面

SD201



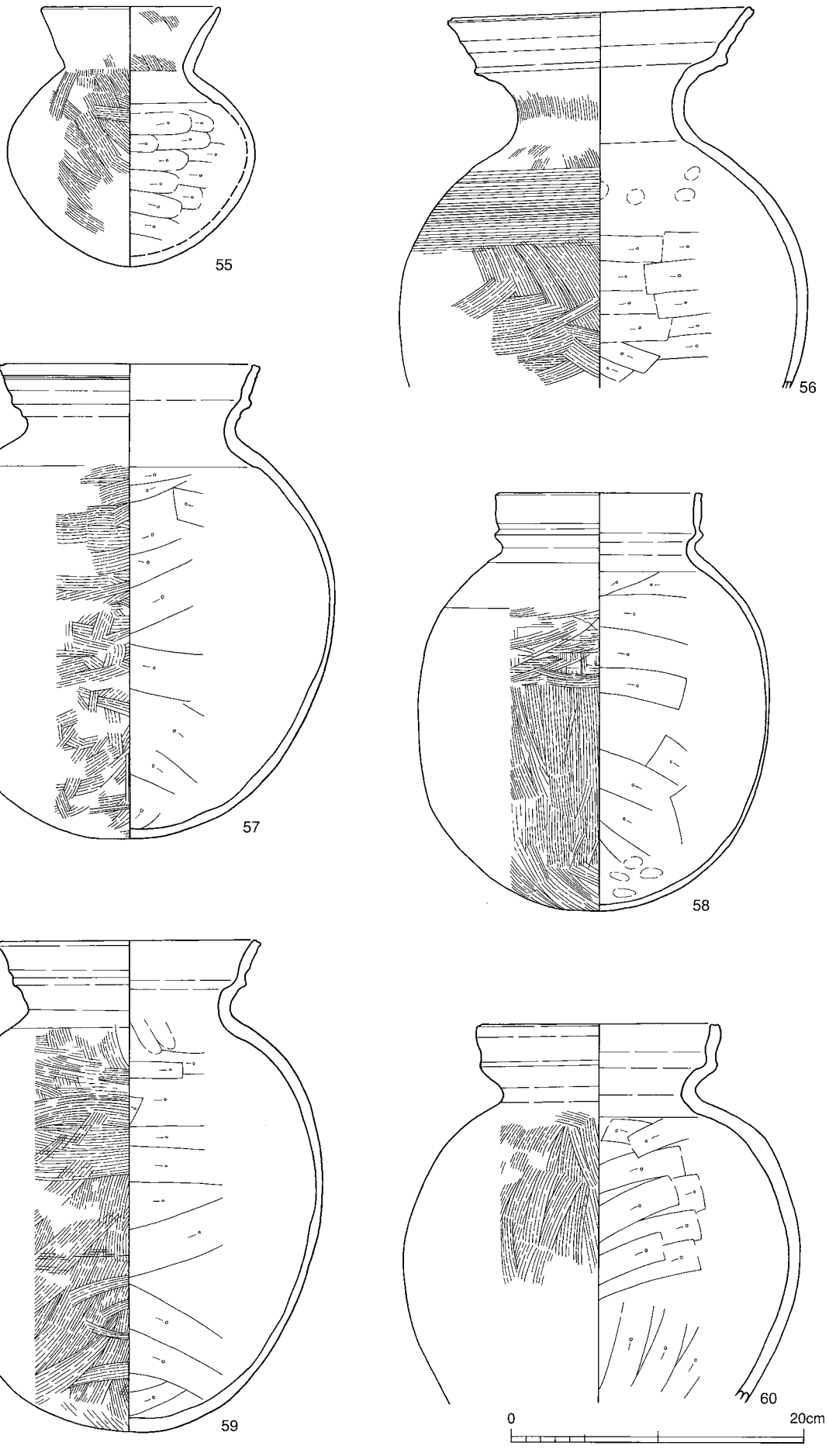
堤防上土器群①



土器　2区　D地点　第2遺構面①

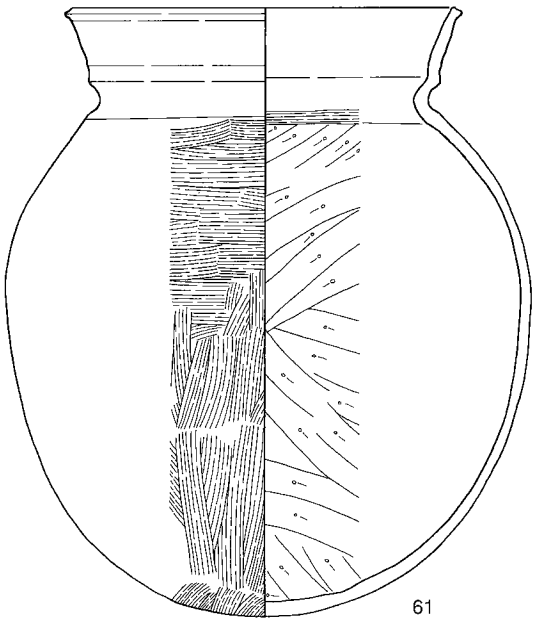
図版56

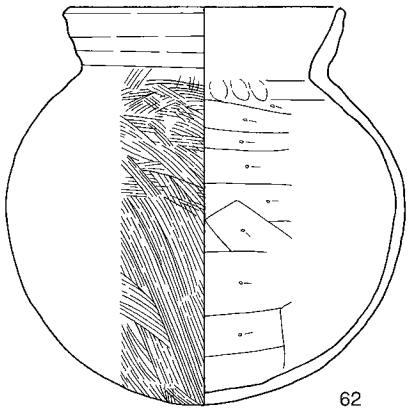
堤防上土器群②

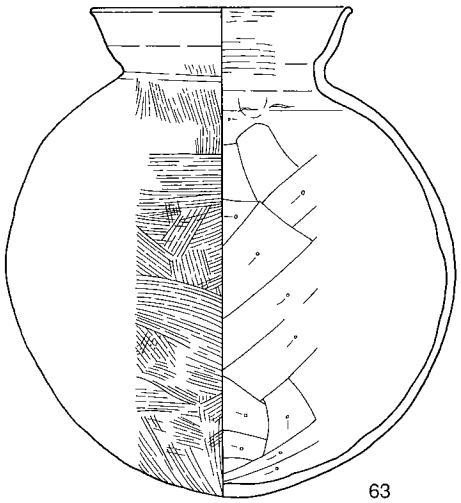


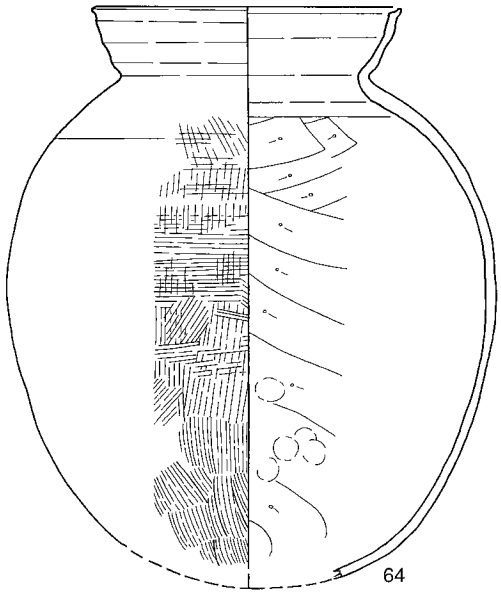
土器　2区　D地点　第2遺構面②

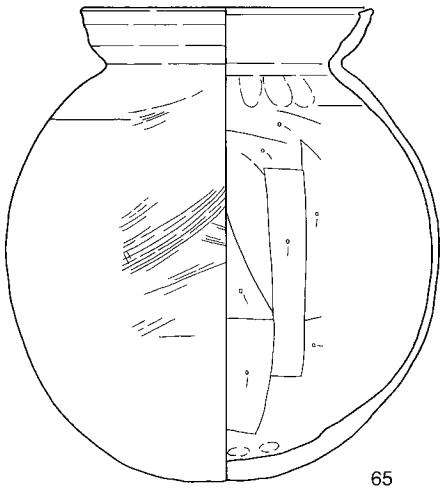
堤防上土器群③

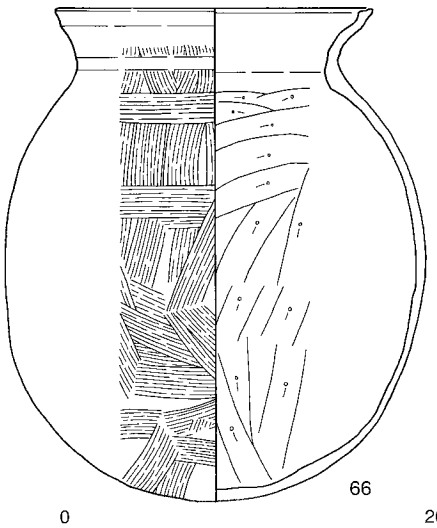








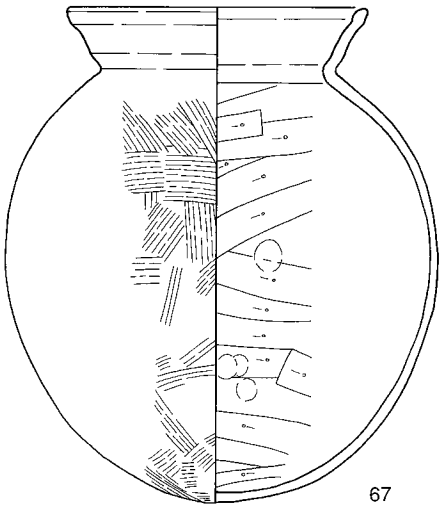


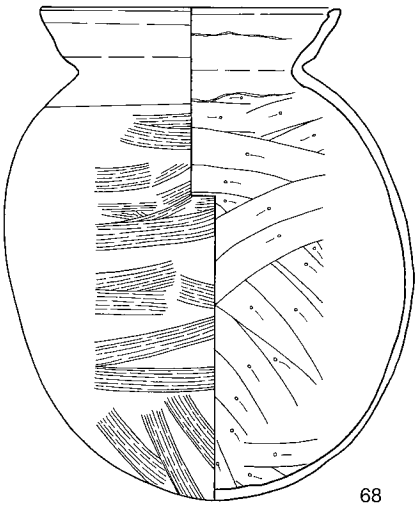


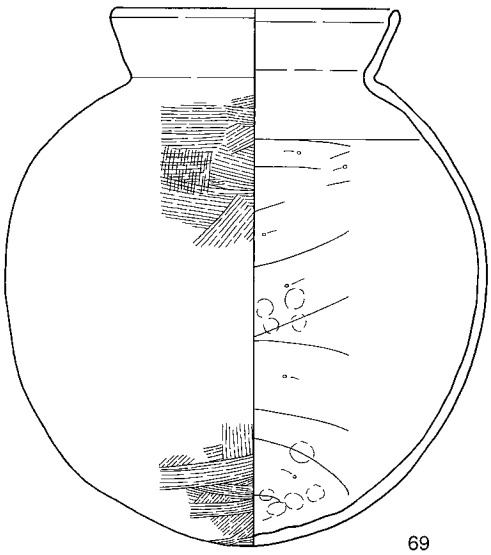
土器　2区　D地点　第2遺構面③

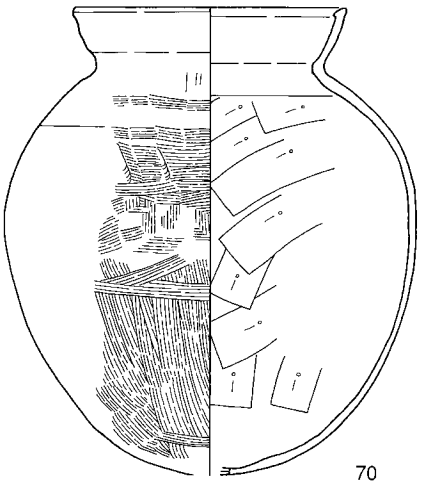
図版58

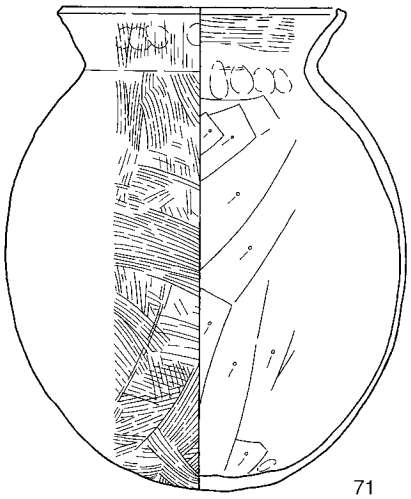
堤防上土器群④

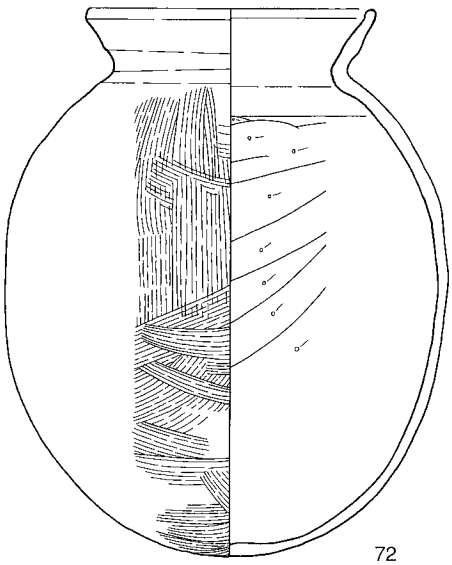






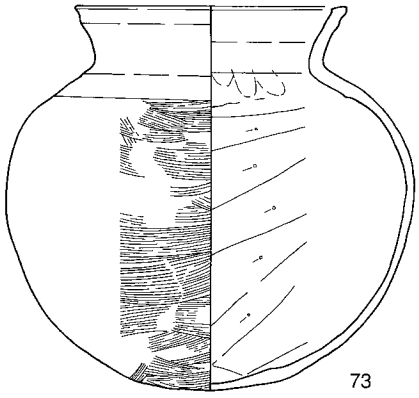


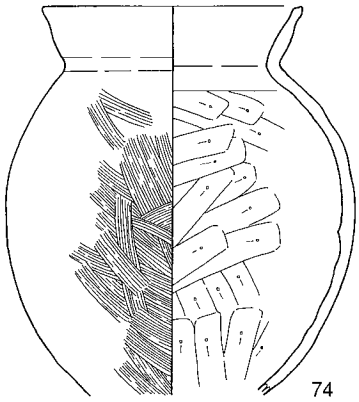


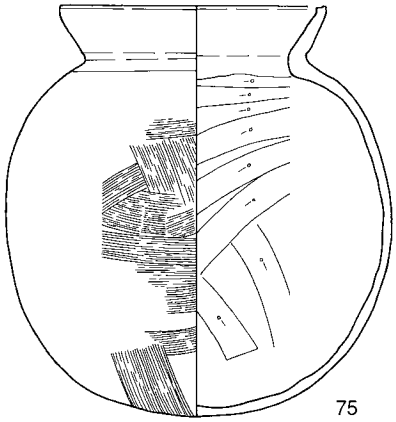


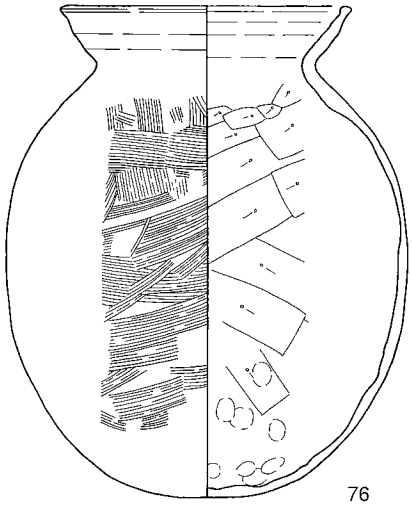
土器　２区　Ｄ地点　第２遺構面④

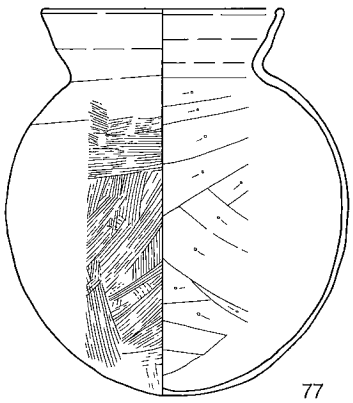
堤防上土器群⑤

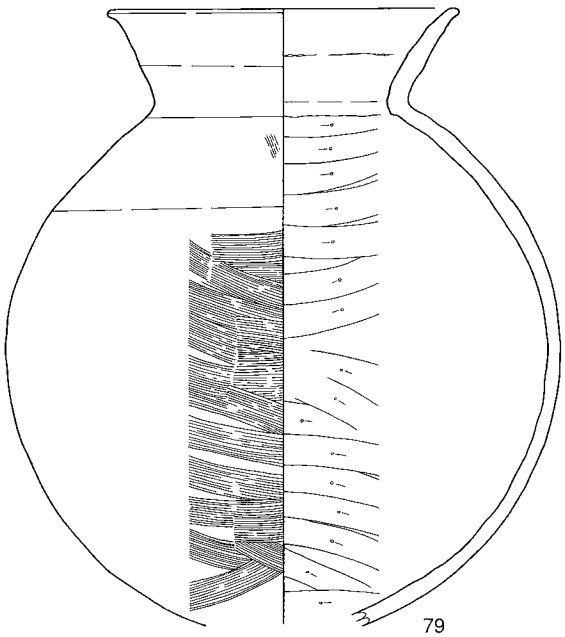

73

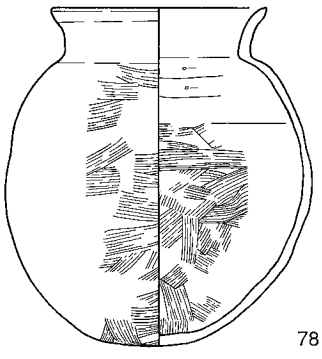

74

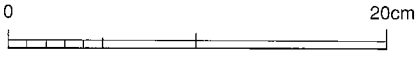

75


76


77


79

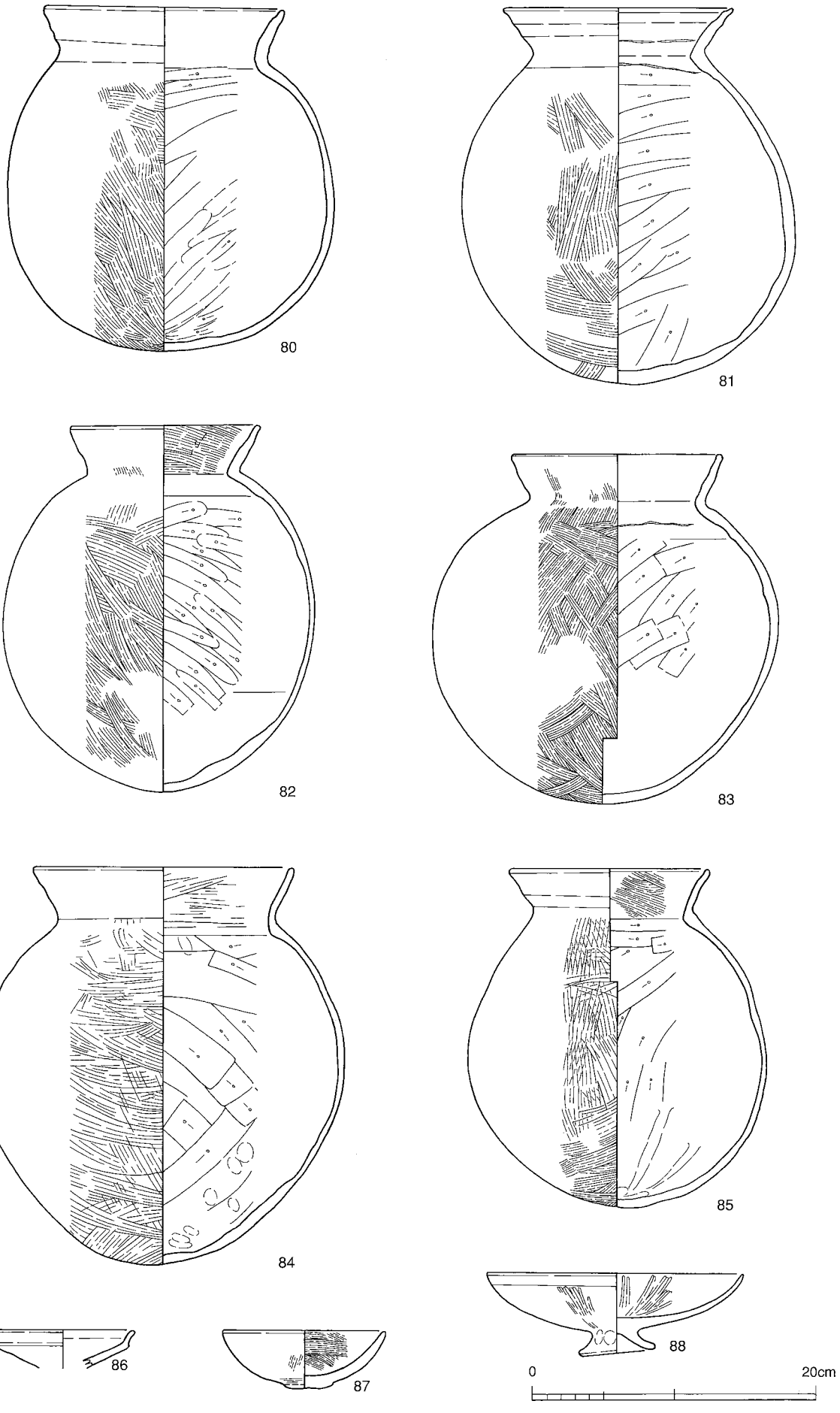

78



土器　2区　D地点　第2遺構面⑤

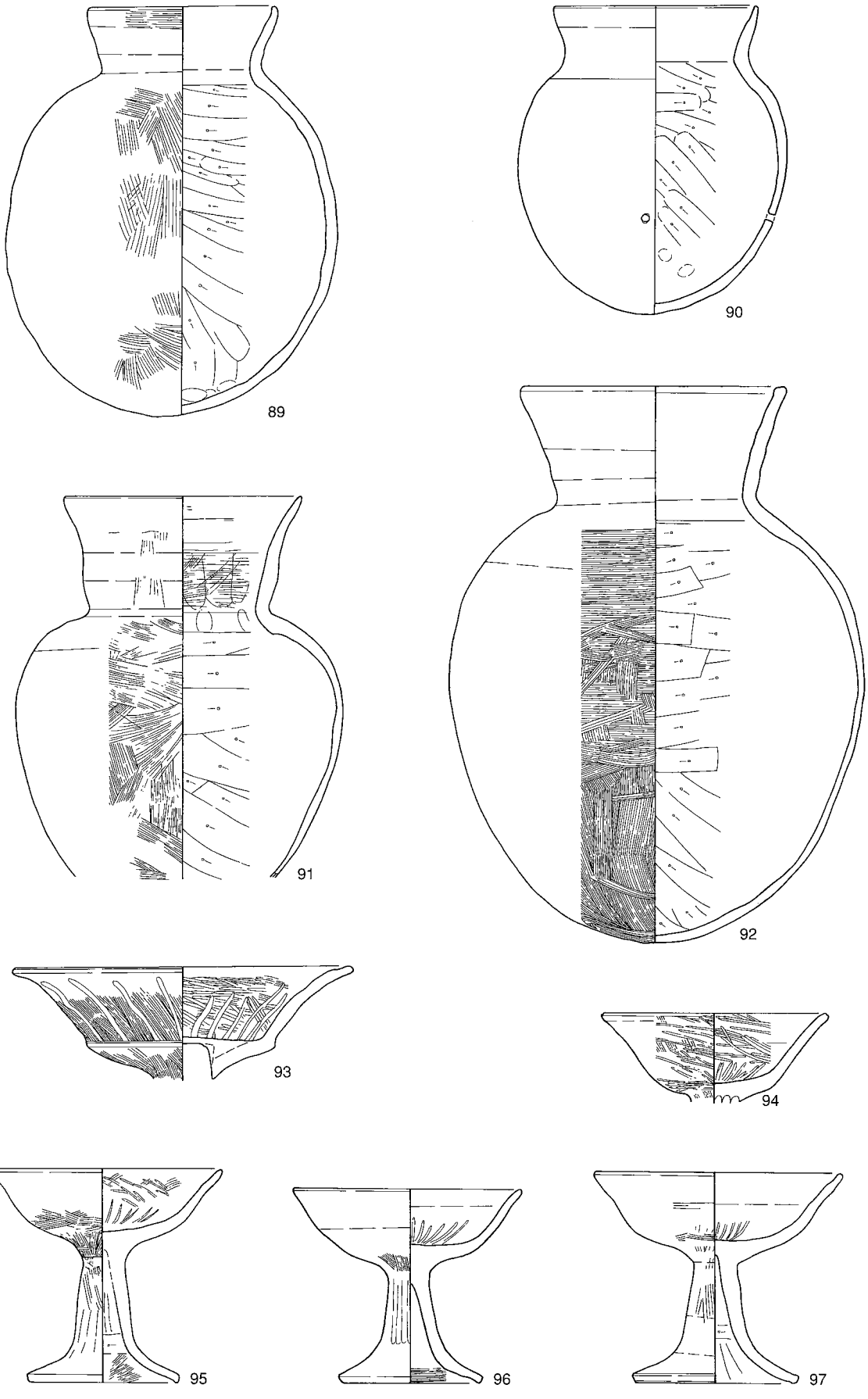
図版60

堤防上土器群⑥



土器　2区　D地点　第2遺構面⑥

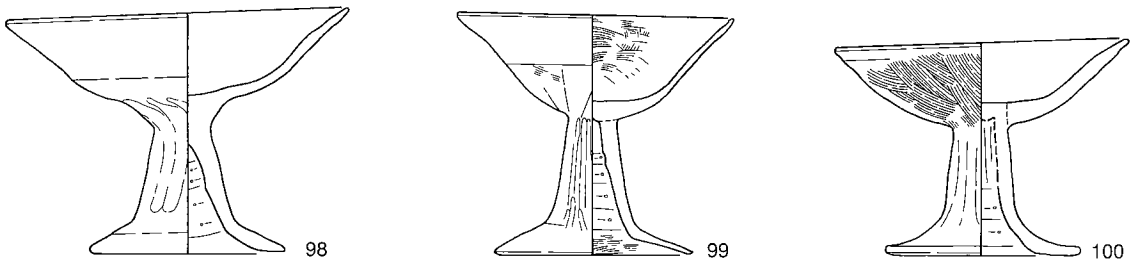
堤防上土器群⑦



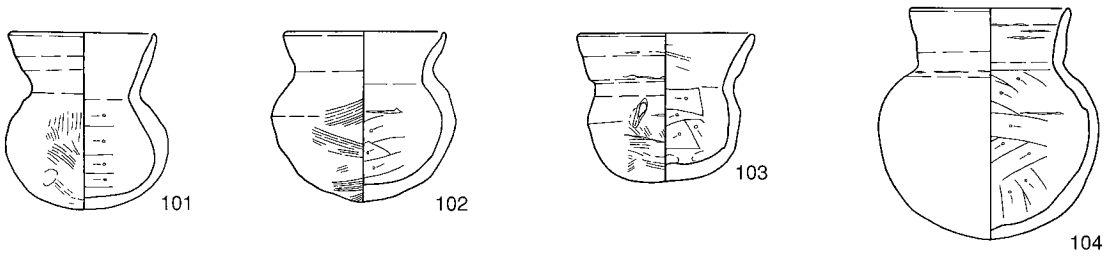
土器　2区　D地点　第2遺構面⑦

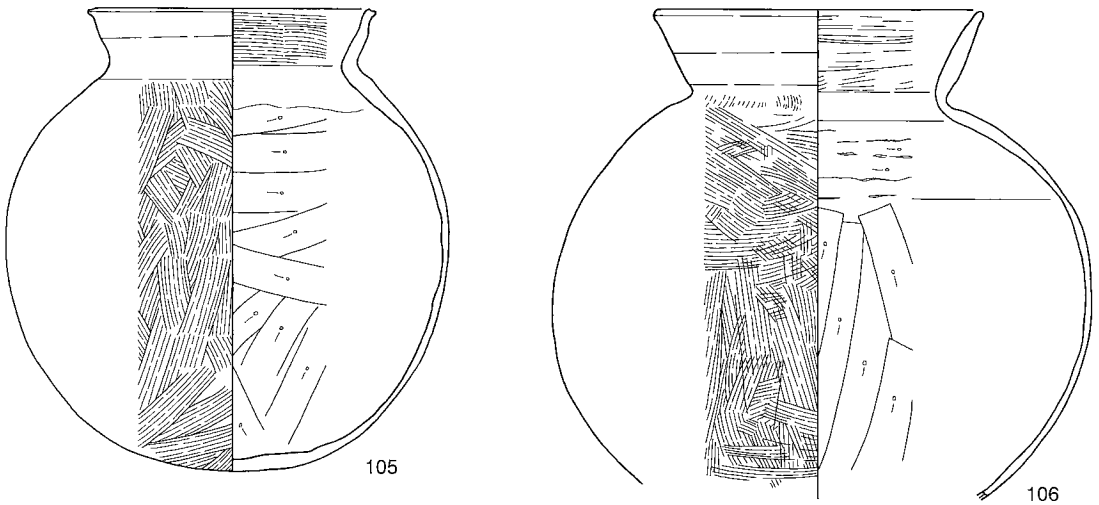
図版62

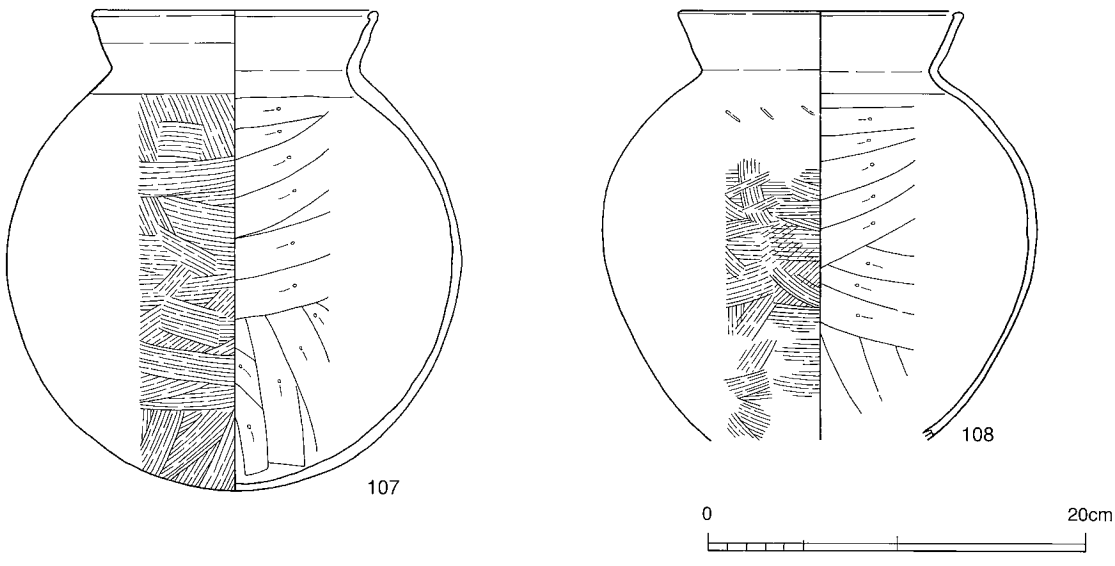
堤防上土器群⑧



旧河道①

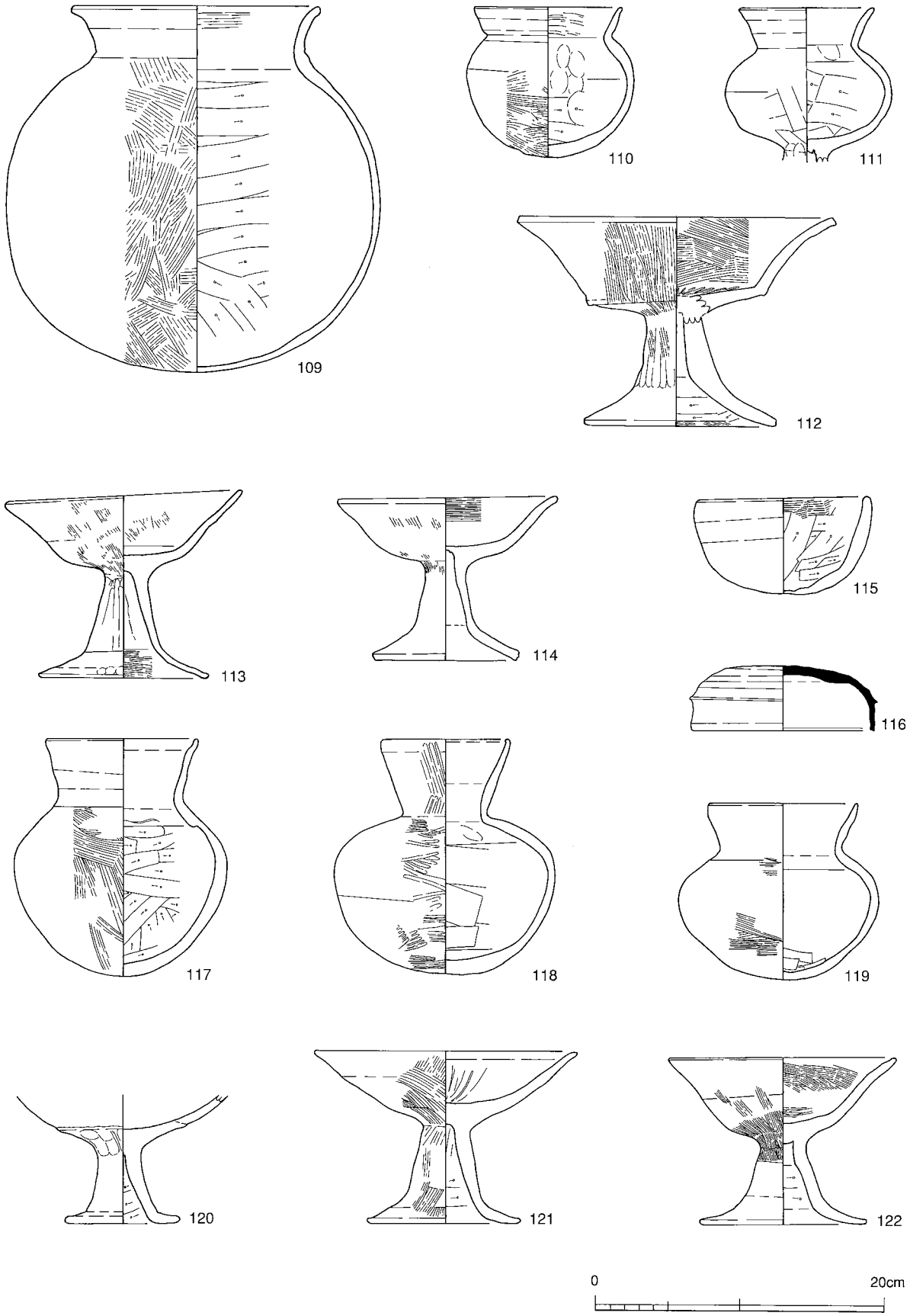






土器　2区　D地点　第2遺構面⑧

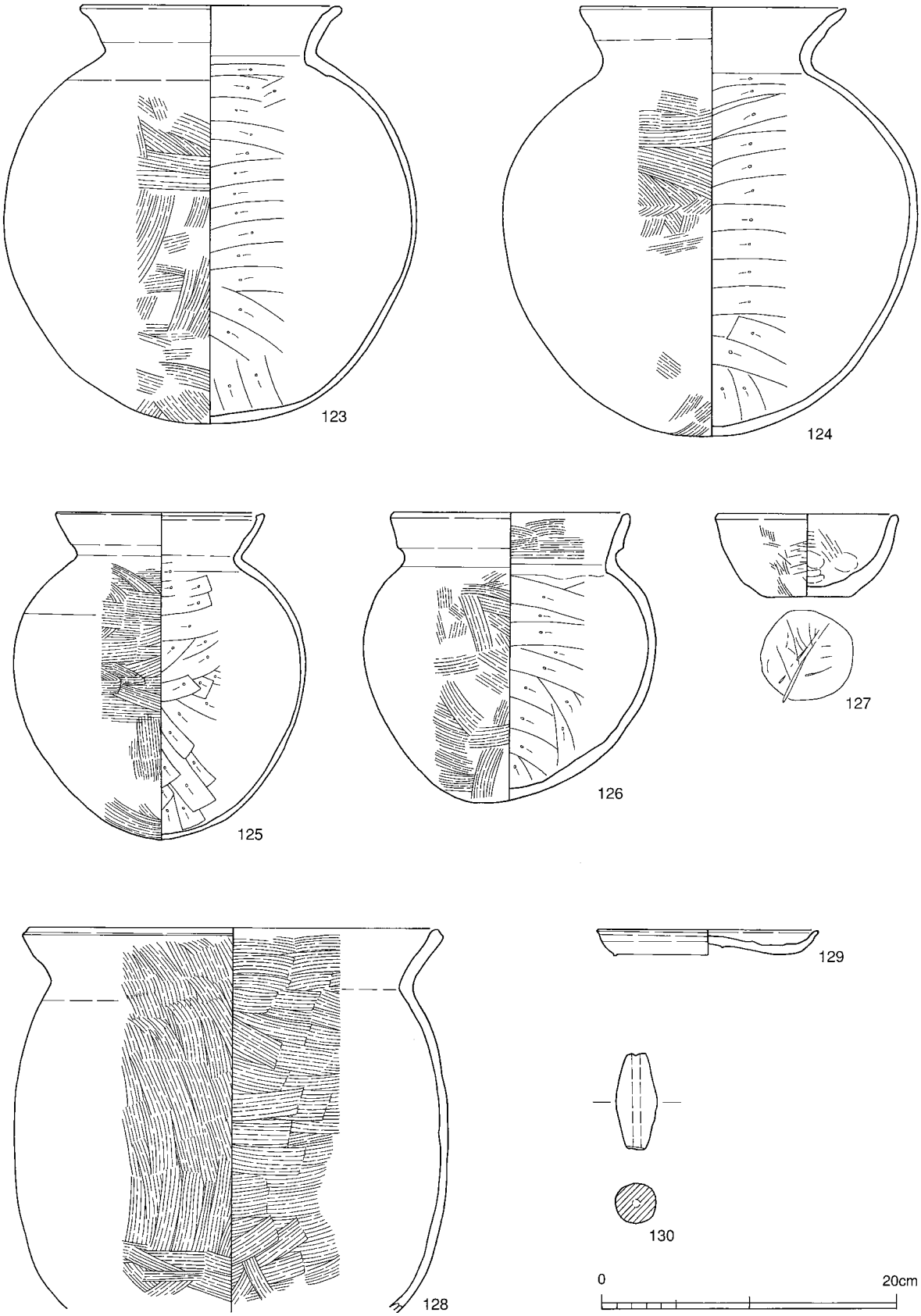
旧河道②



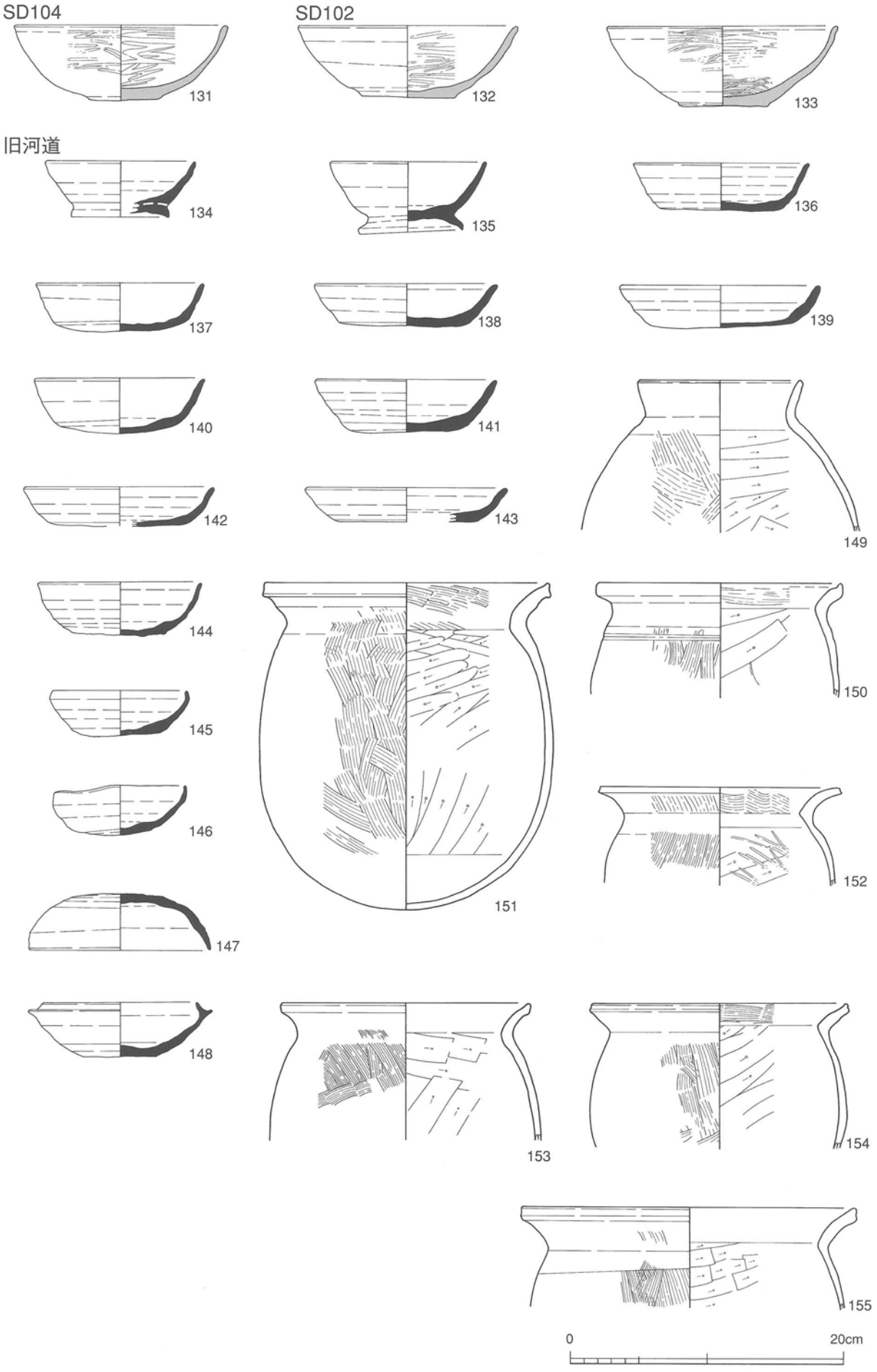
土器　2区　D地点　第2遺構面⑨

図版64

旧河道③



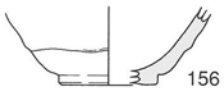
土器　2区　D地点　第2遺構面⑩



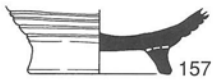
土器　2区　F地点　第1遺構面

図版66

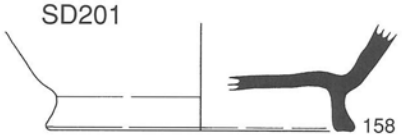
SD101



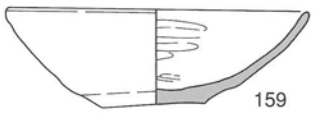
第2遺構面

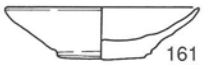


SD201

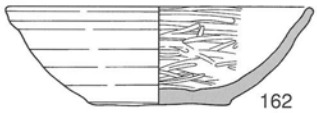


SD202

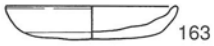




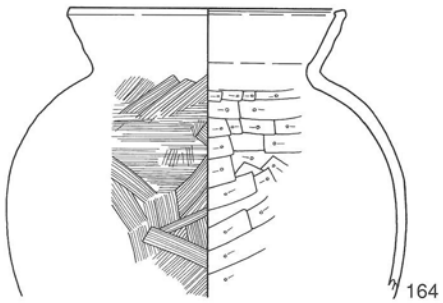
SD203



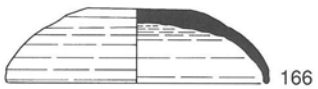
SD204

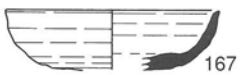


第3遺構面



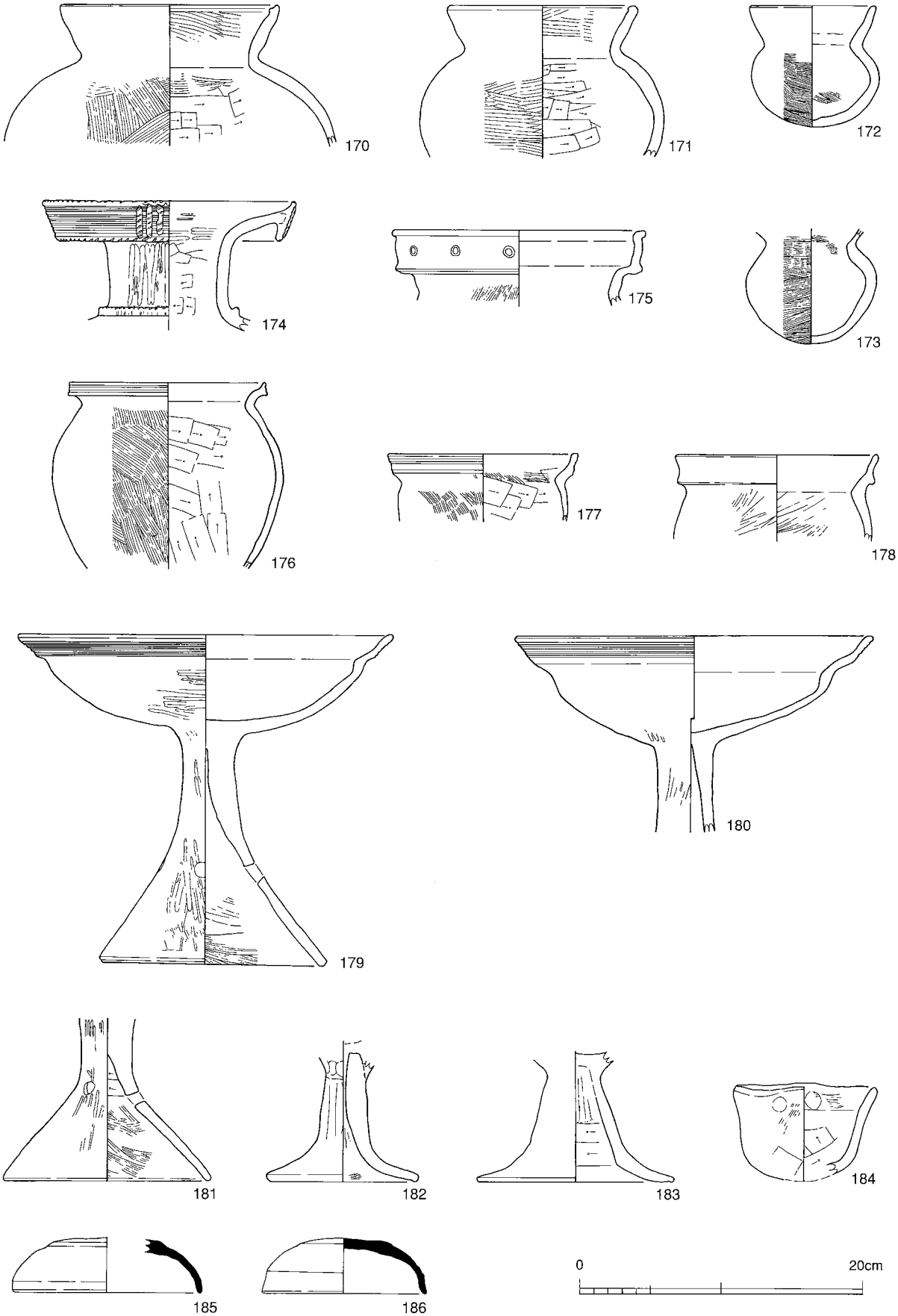
SD302





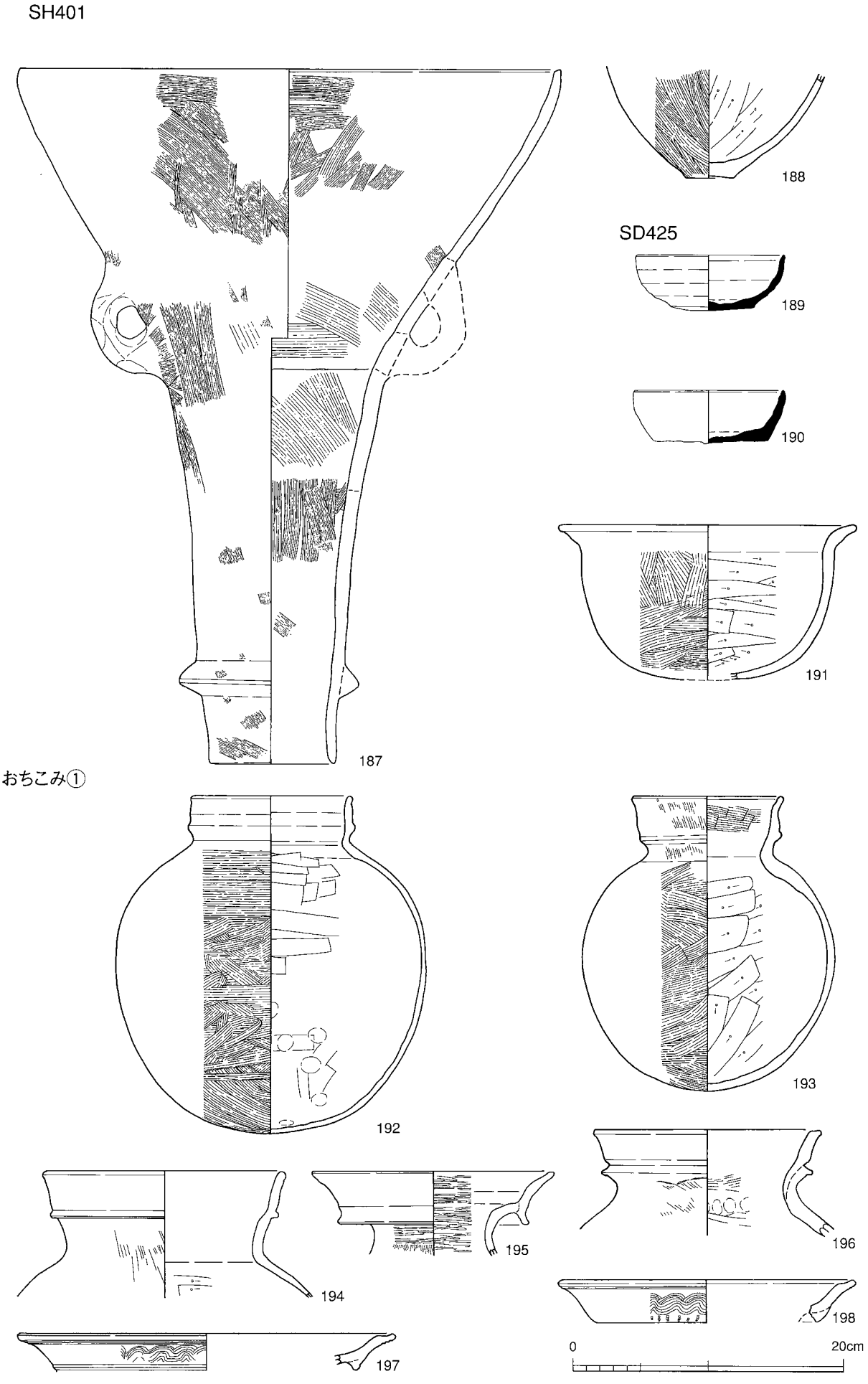
土器　3区　第1・2・3遺構面

包含層



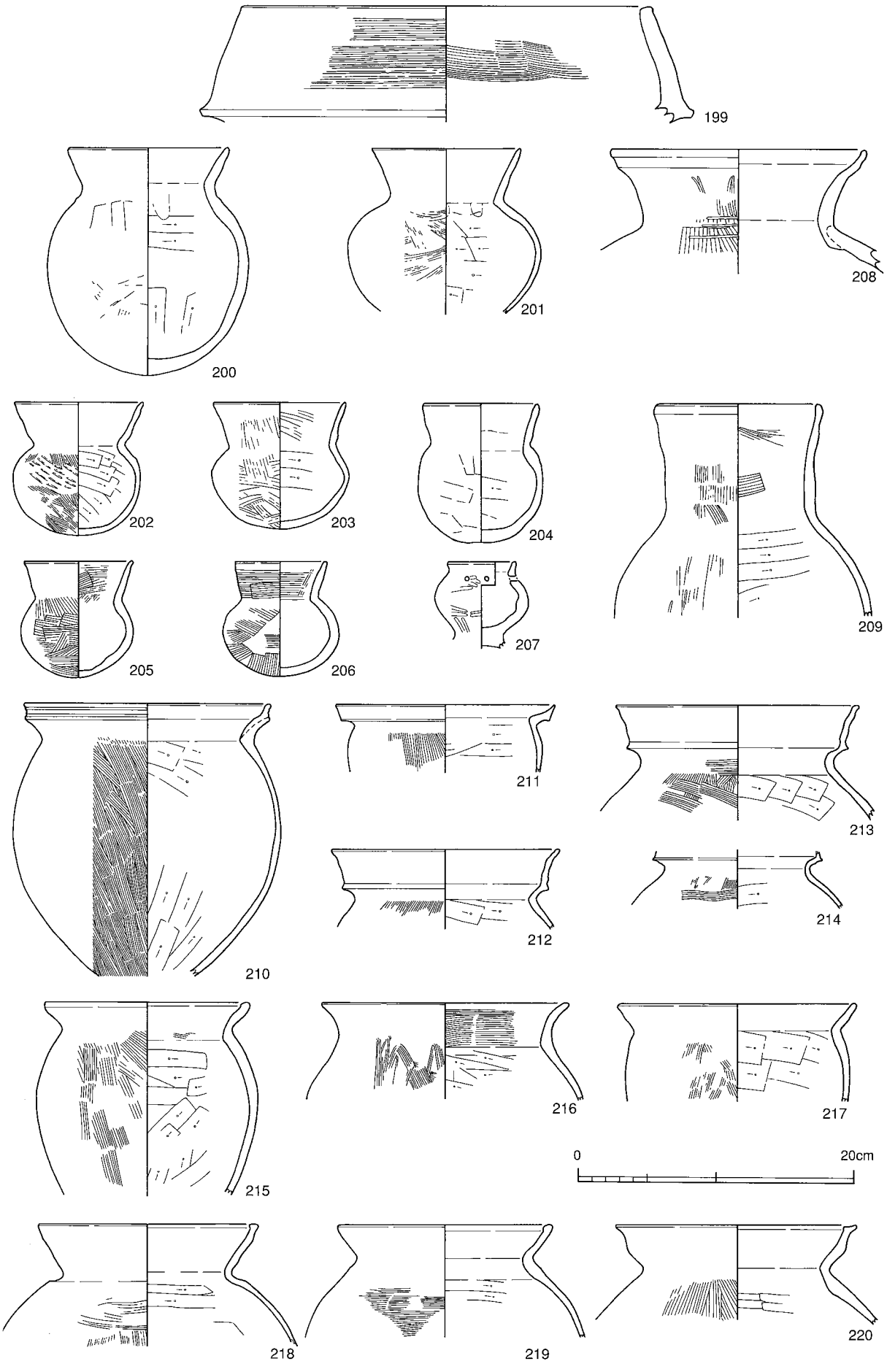
土器　3区　第4遺構面

図版68



土器　3区　第4遺構面

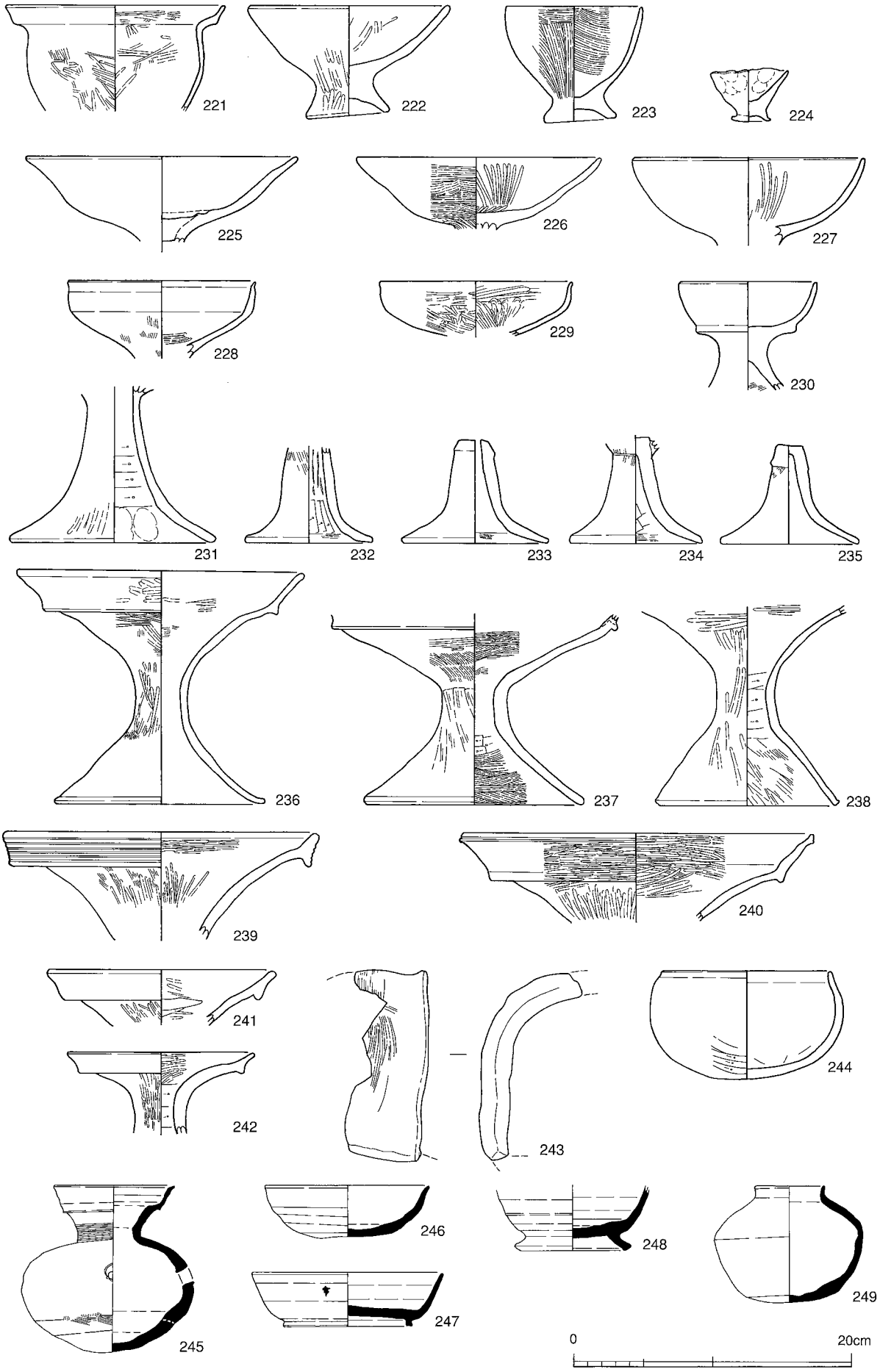
おちこみ②



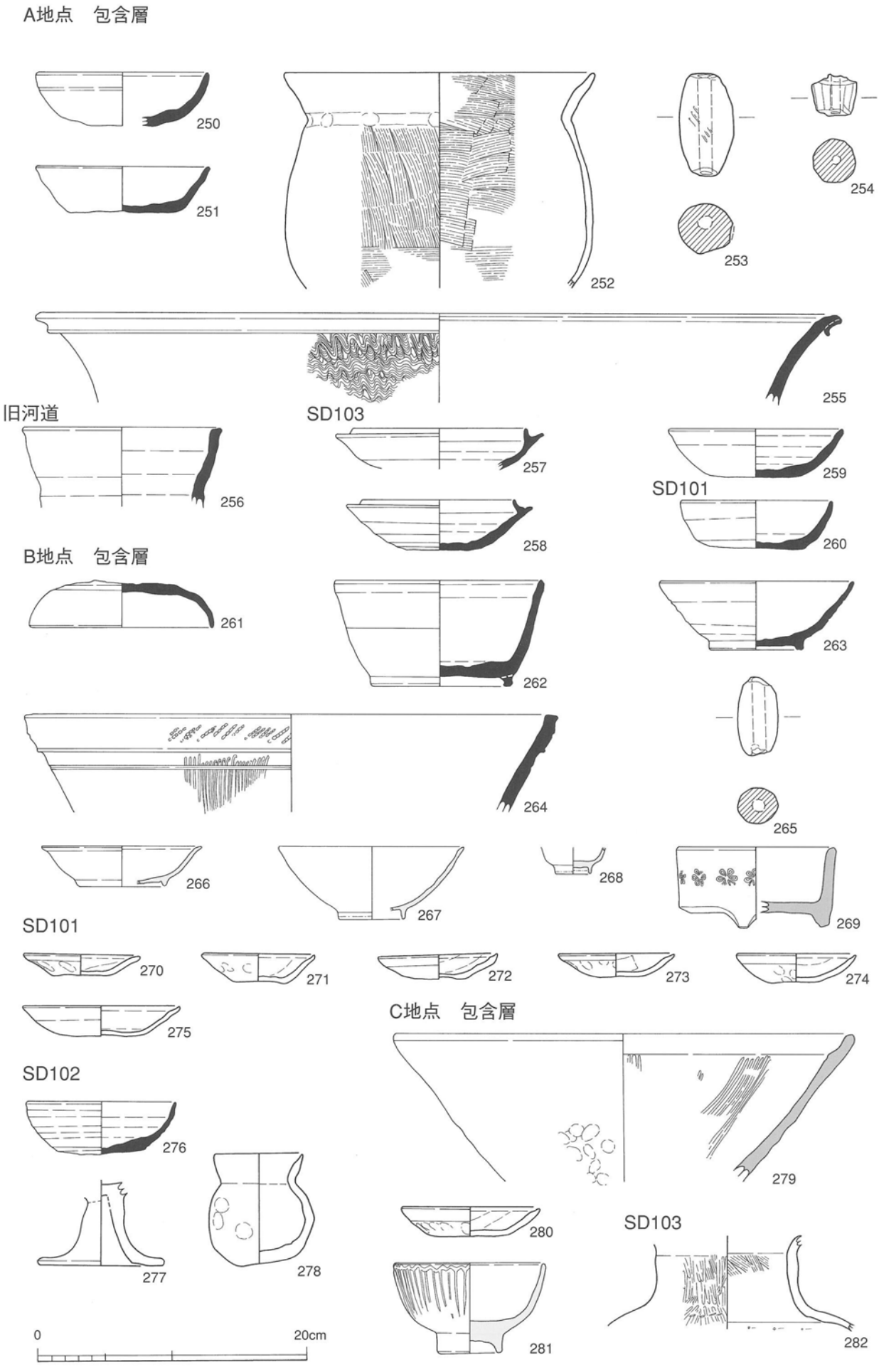
土器　3区　第4遺構面

図版70

おちこみ③

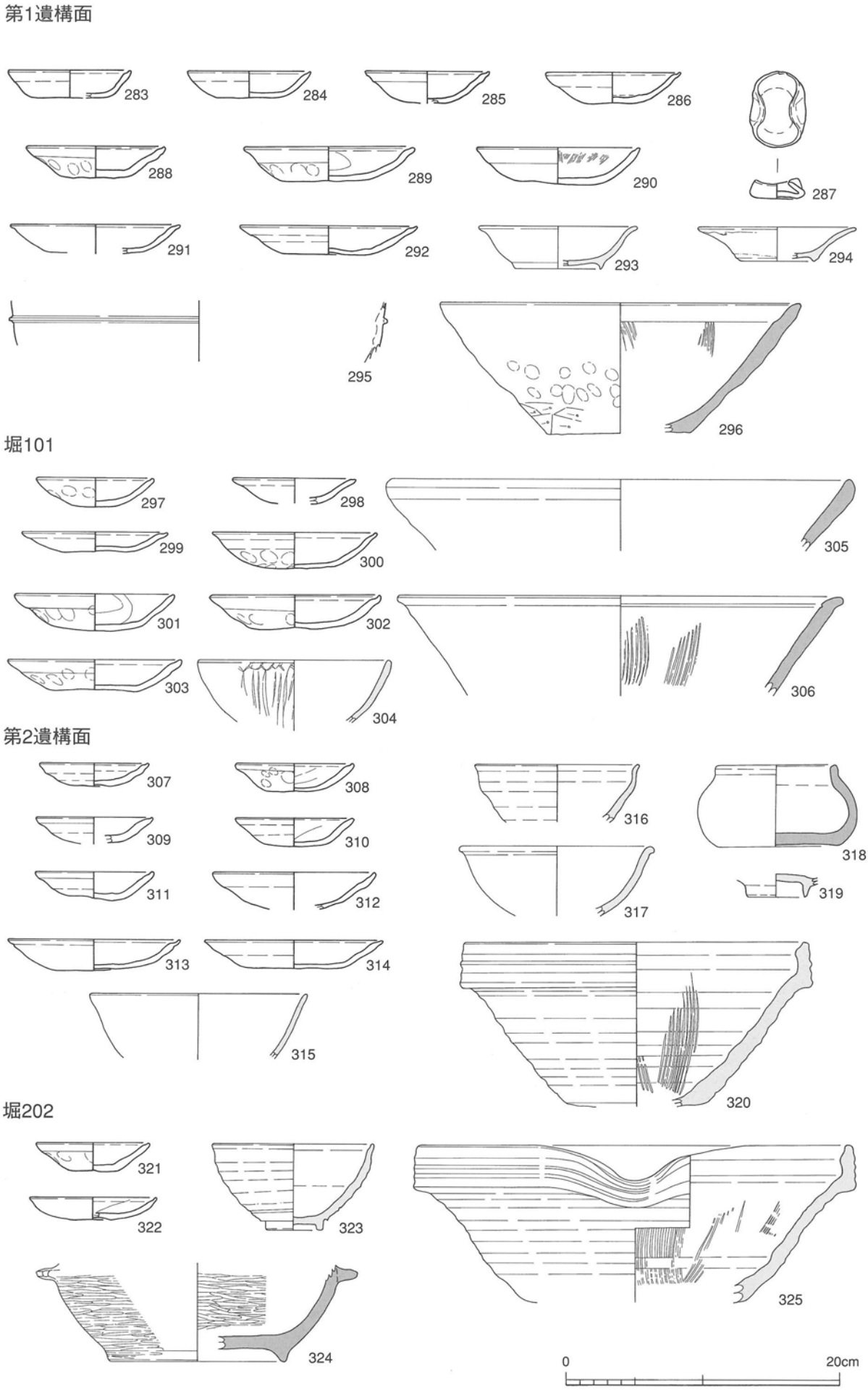


土器　3区　第4遺構面



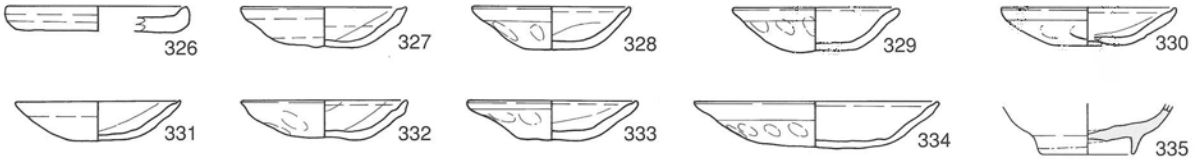
土器　4区　A・B・C地点　第1遺構面

図版72



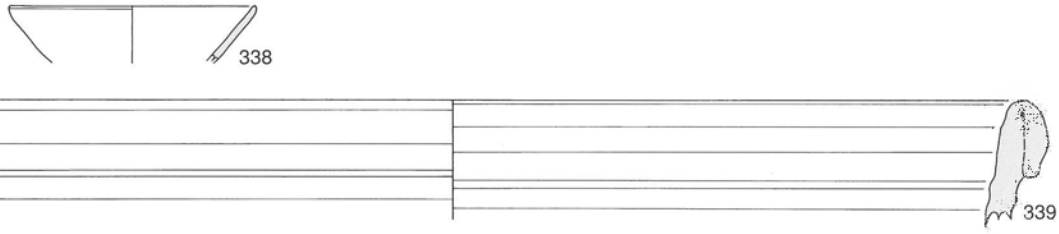
土器　4区　D地点　第1・2遺構面

SD201



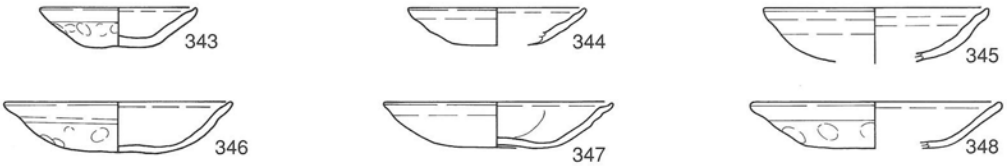
SD202

第3遺構面

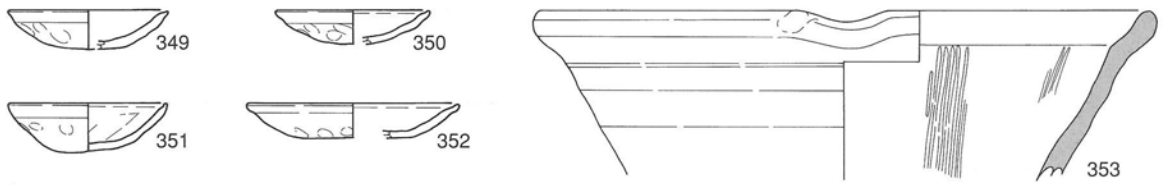


第4遺構面

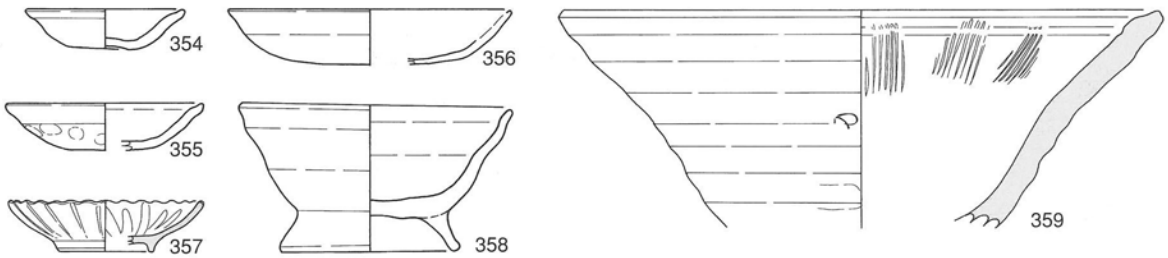
堀4



SD401

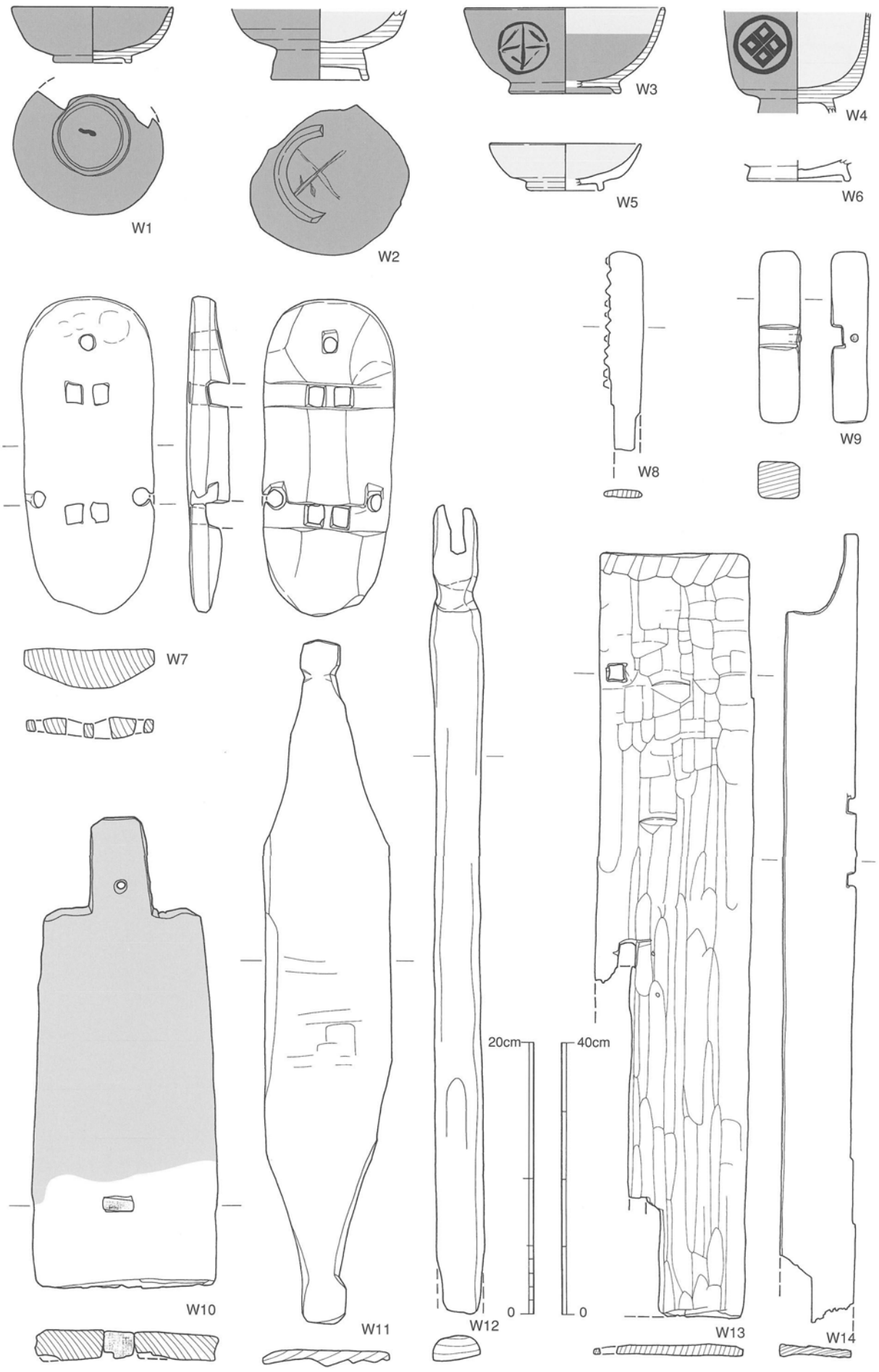


層位不明



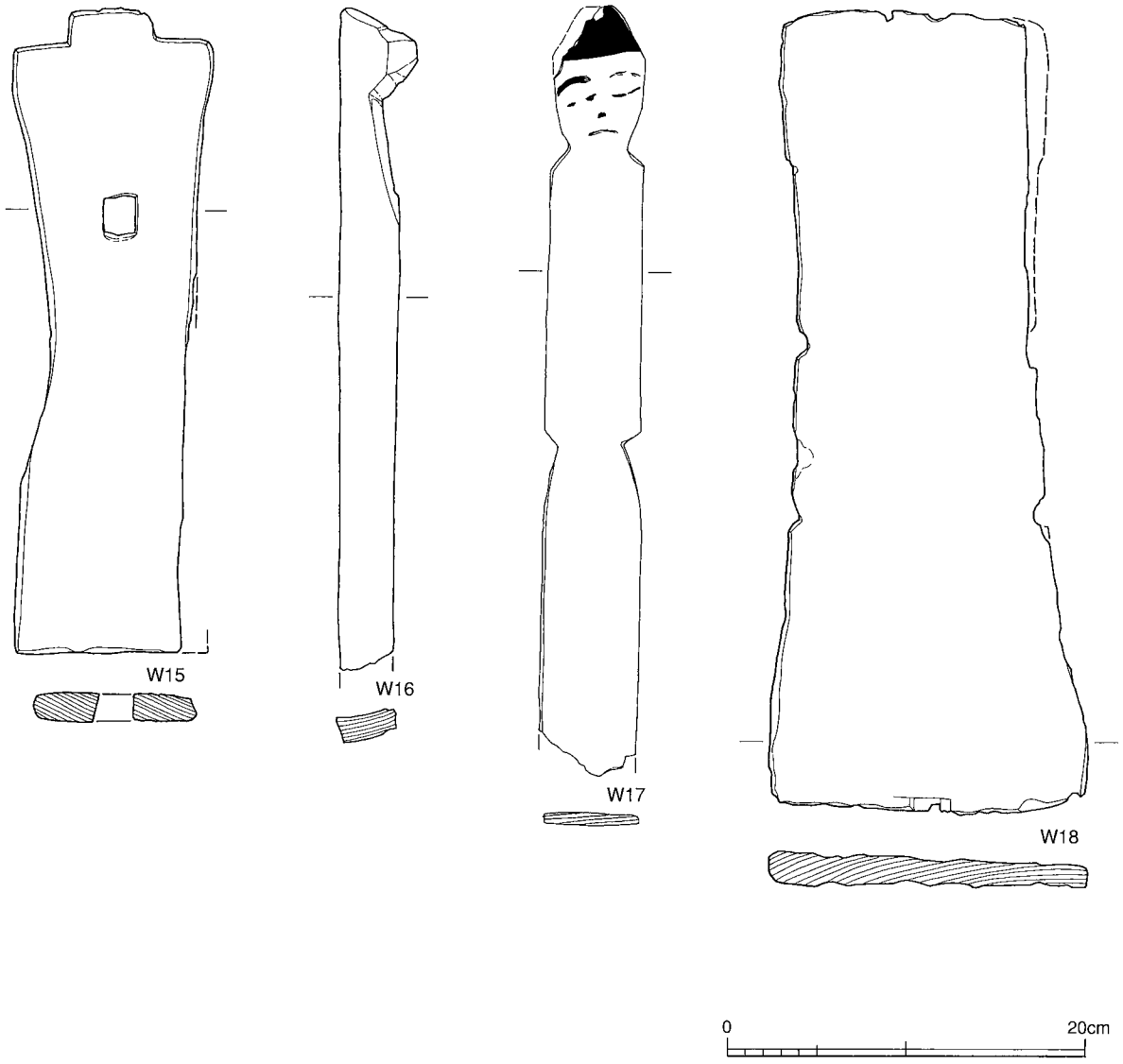
土器　4区　D地点　第2・3・4遺構面

木器　木簡集成

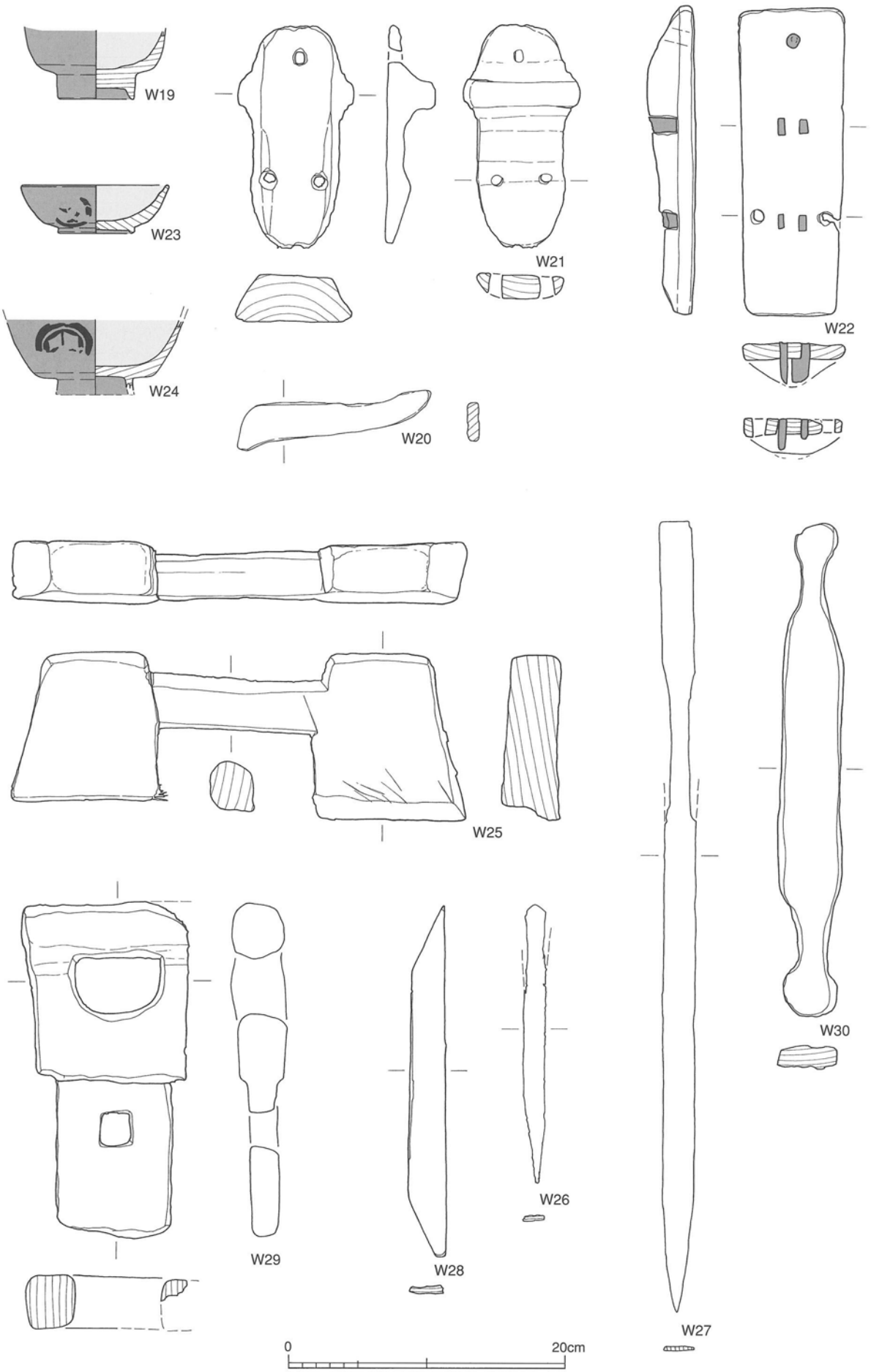


木器　確認調査

図版76

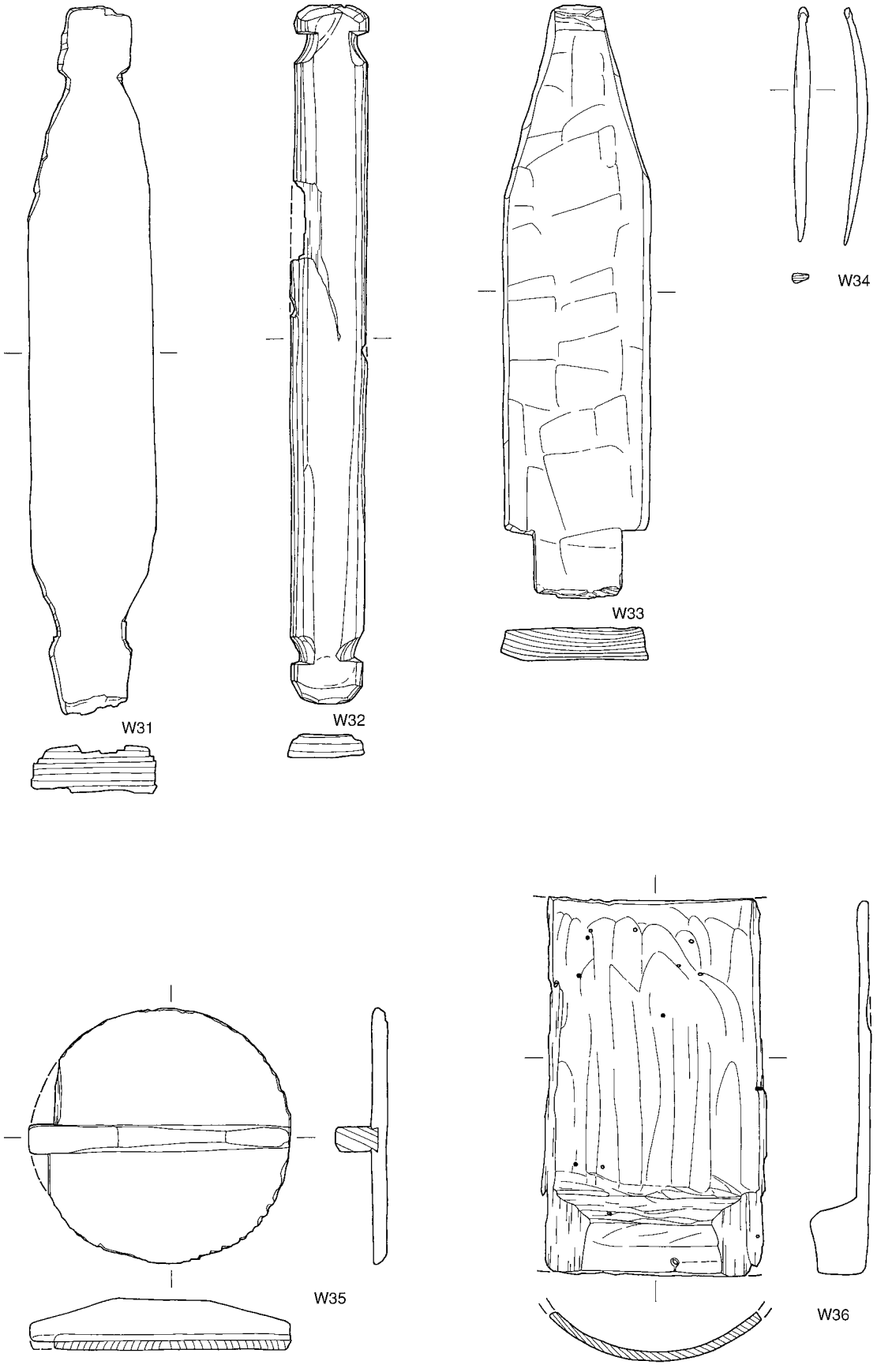


木器　１区　Ａ・Ｂ地点

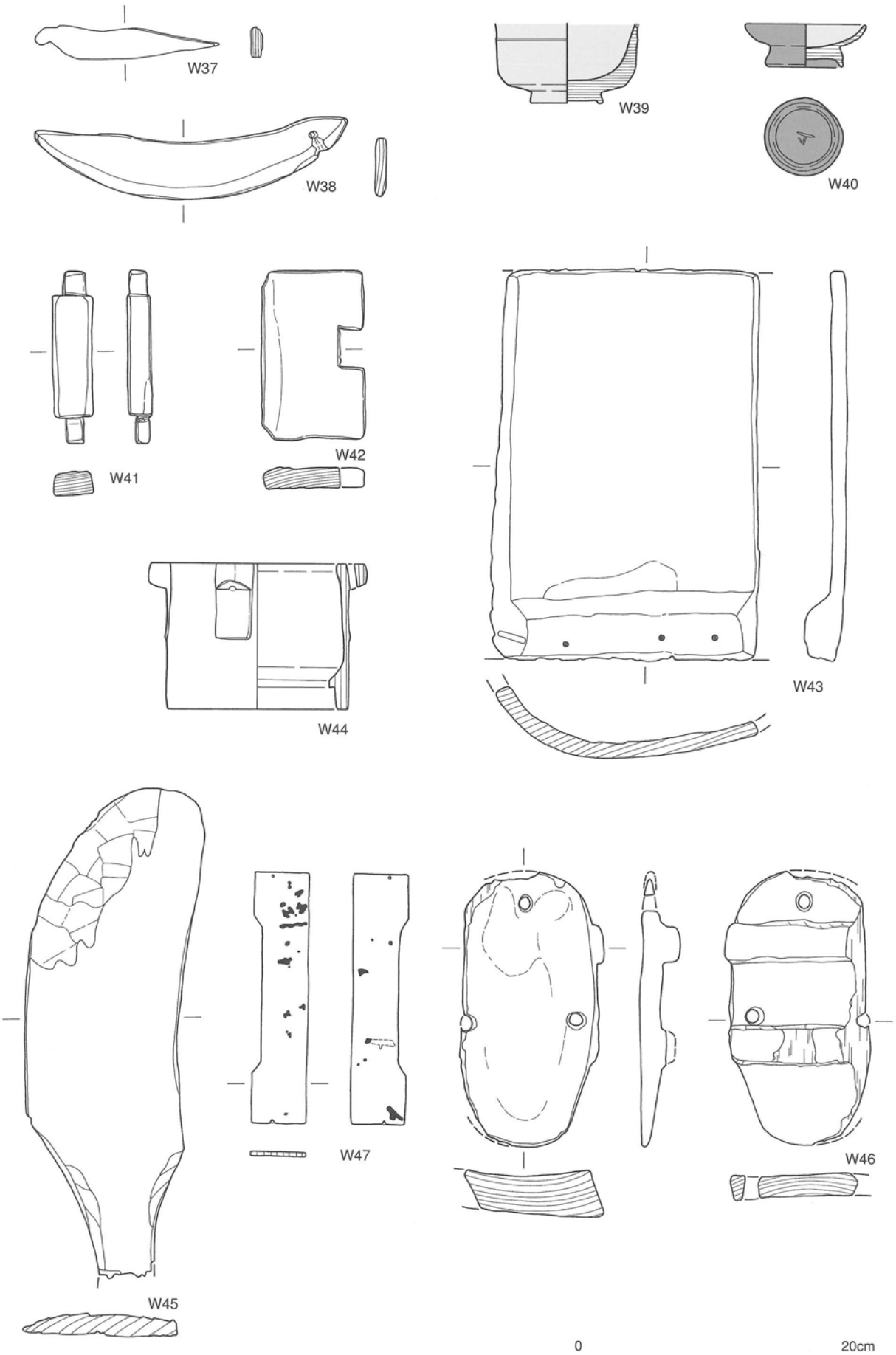


木器　2区　B地点①

図版78

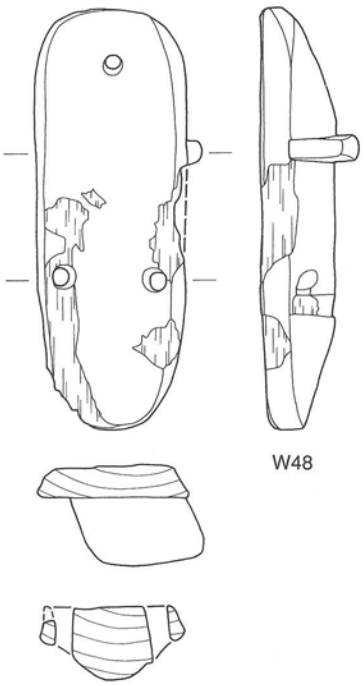


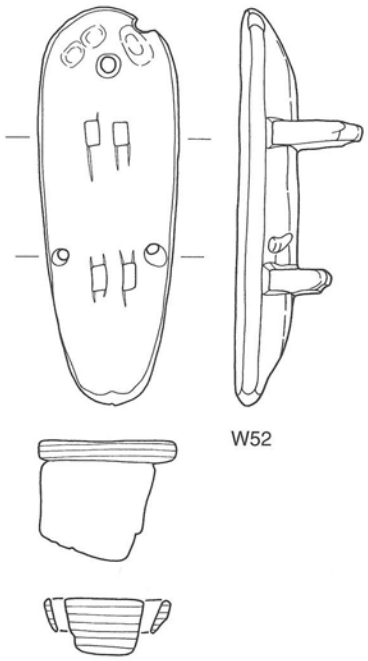
木器　2区　B地点②

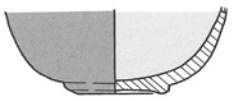


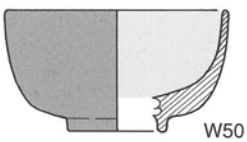
木器　2区　B地点③

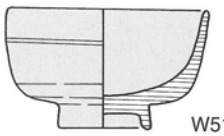
図版80

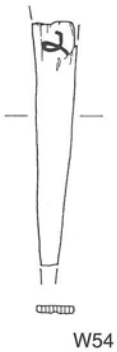


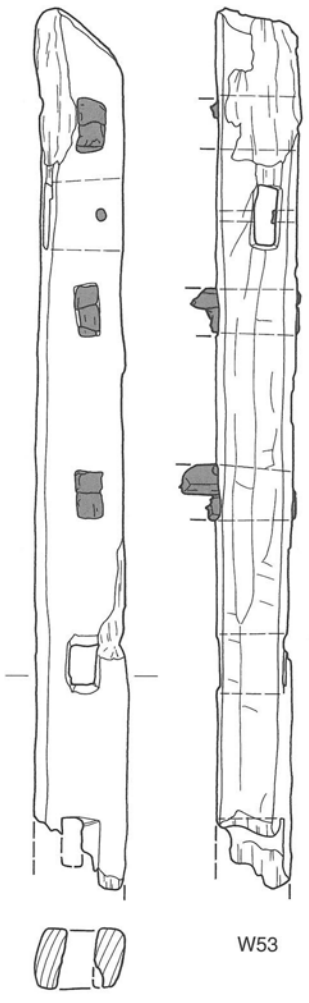




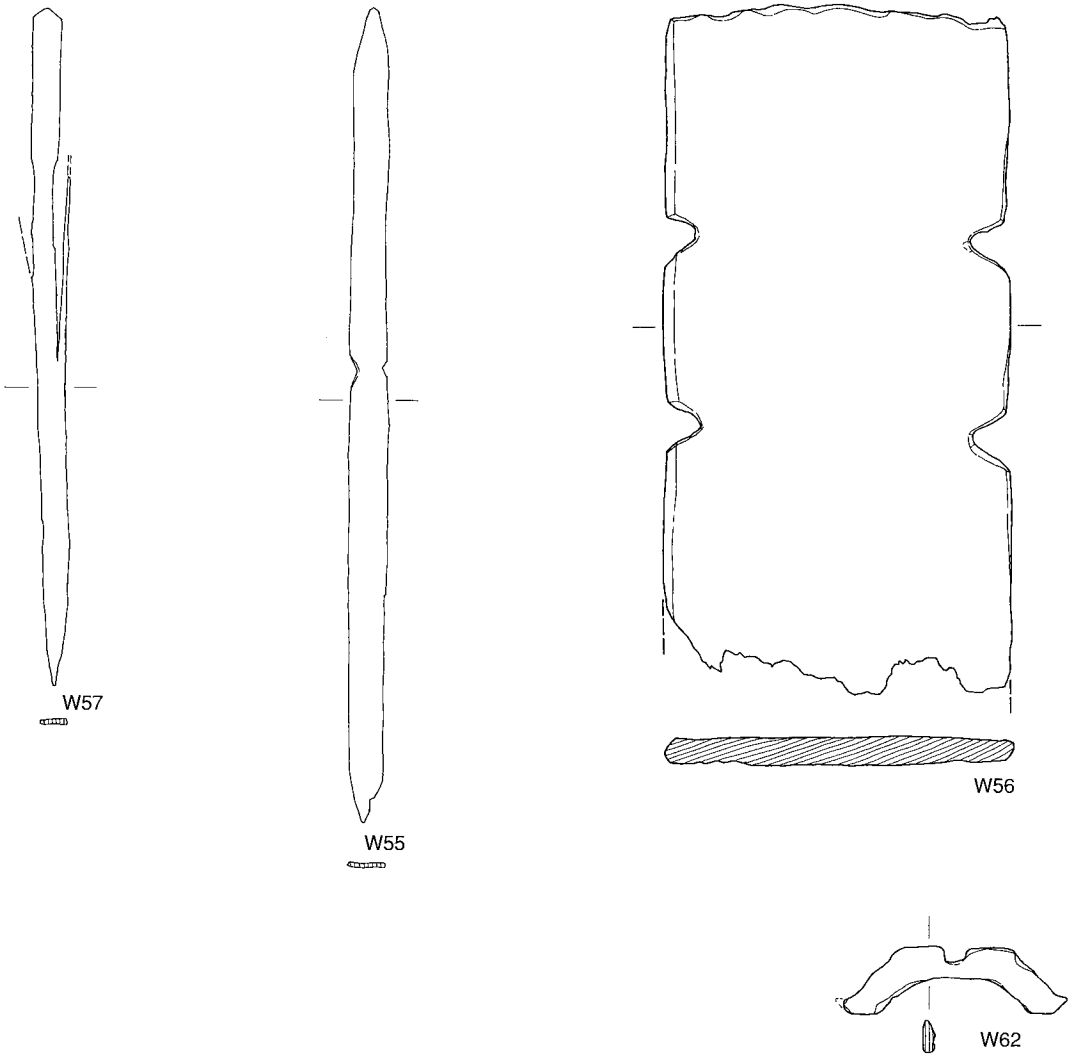






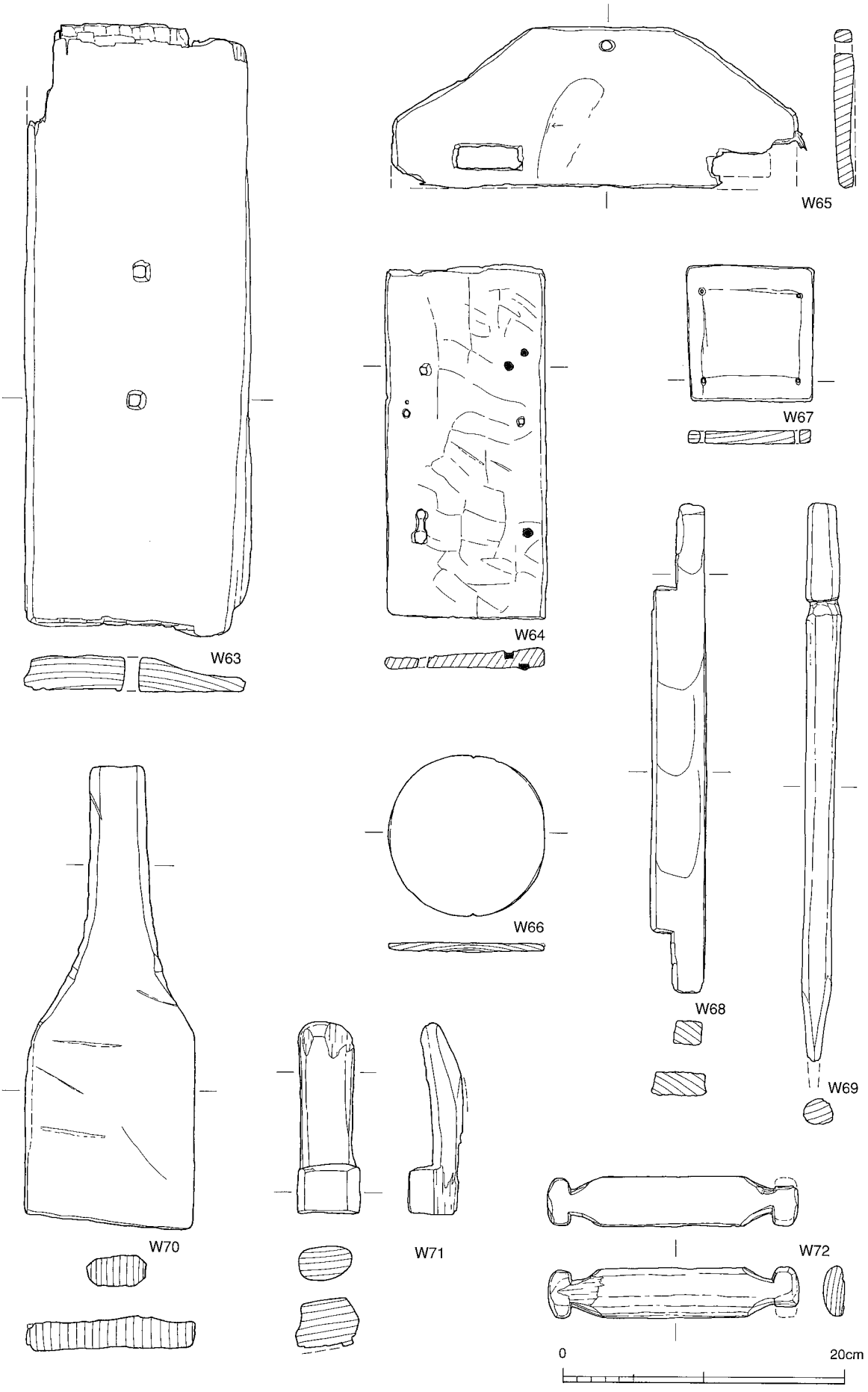


木器　2区　C地点

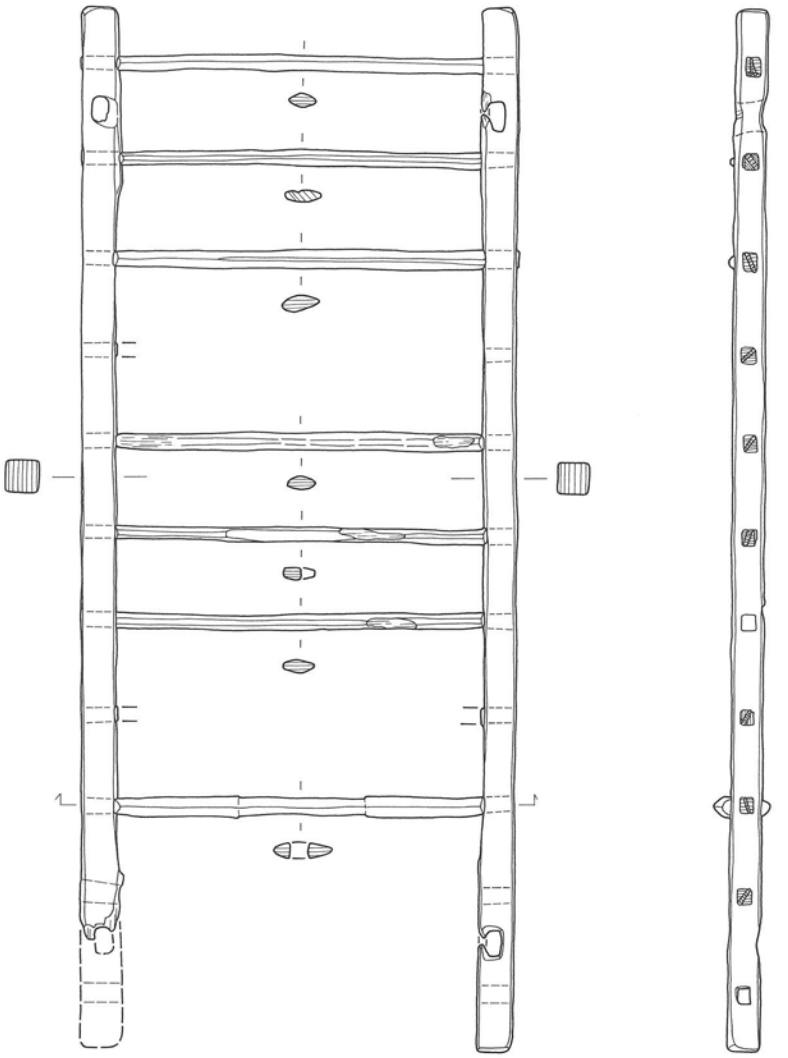


木器　2区　D地点①

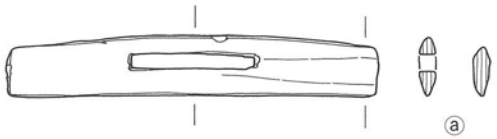
図版82



木器　2区　D地点②



W73

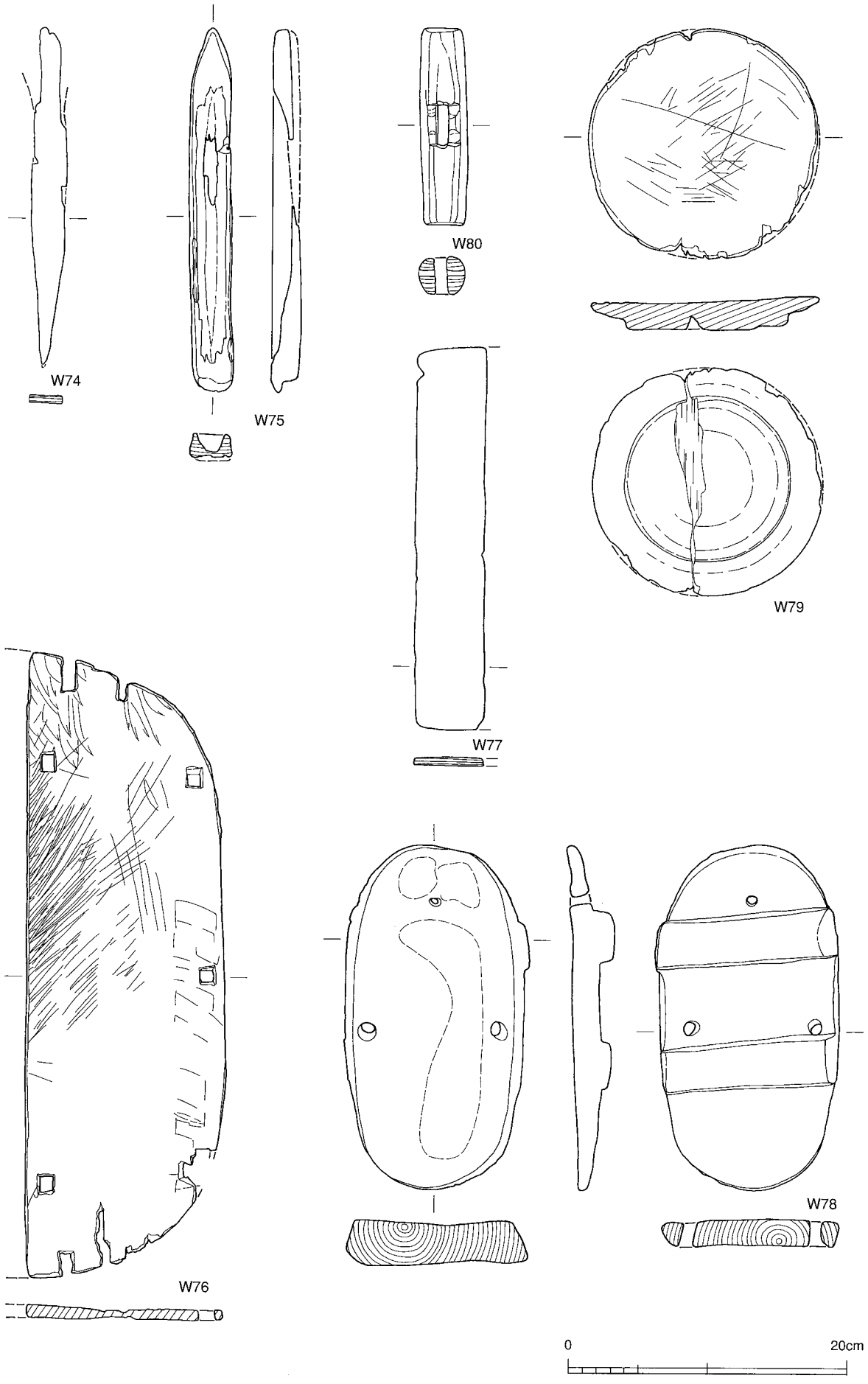


ⓐ

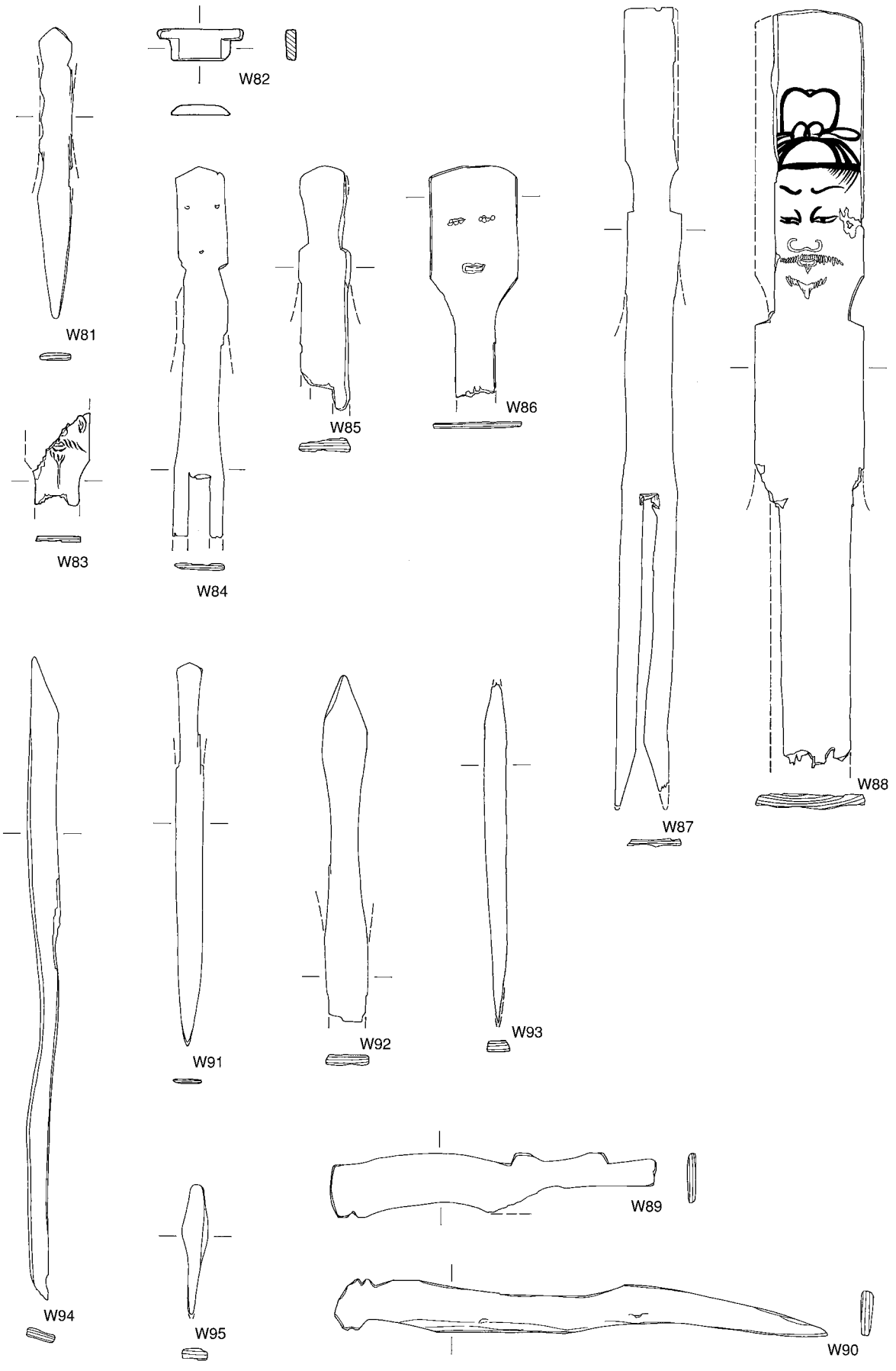
0 40cm

木器　2区　D地点③

図版84

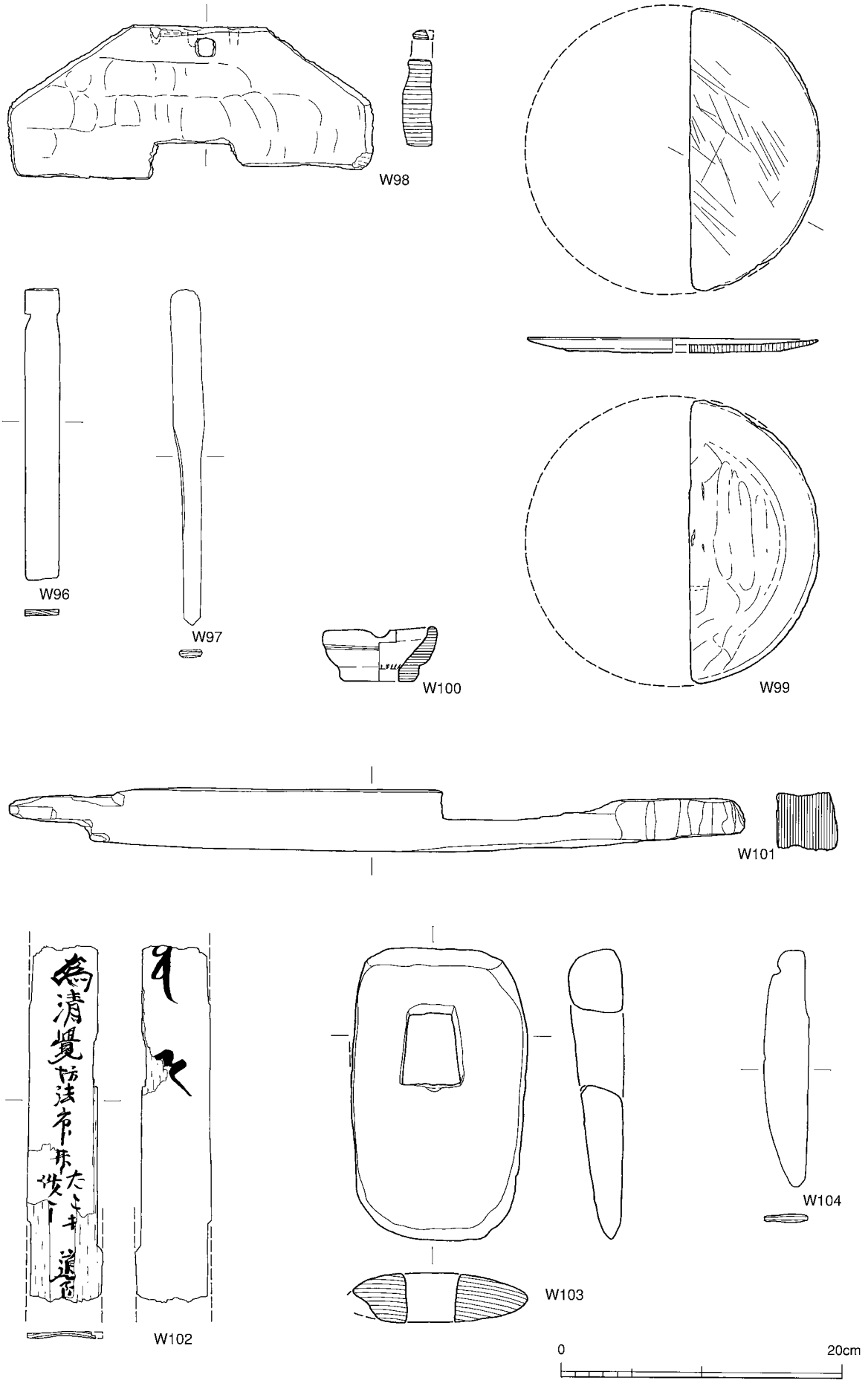


木器　2区　F地点①

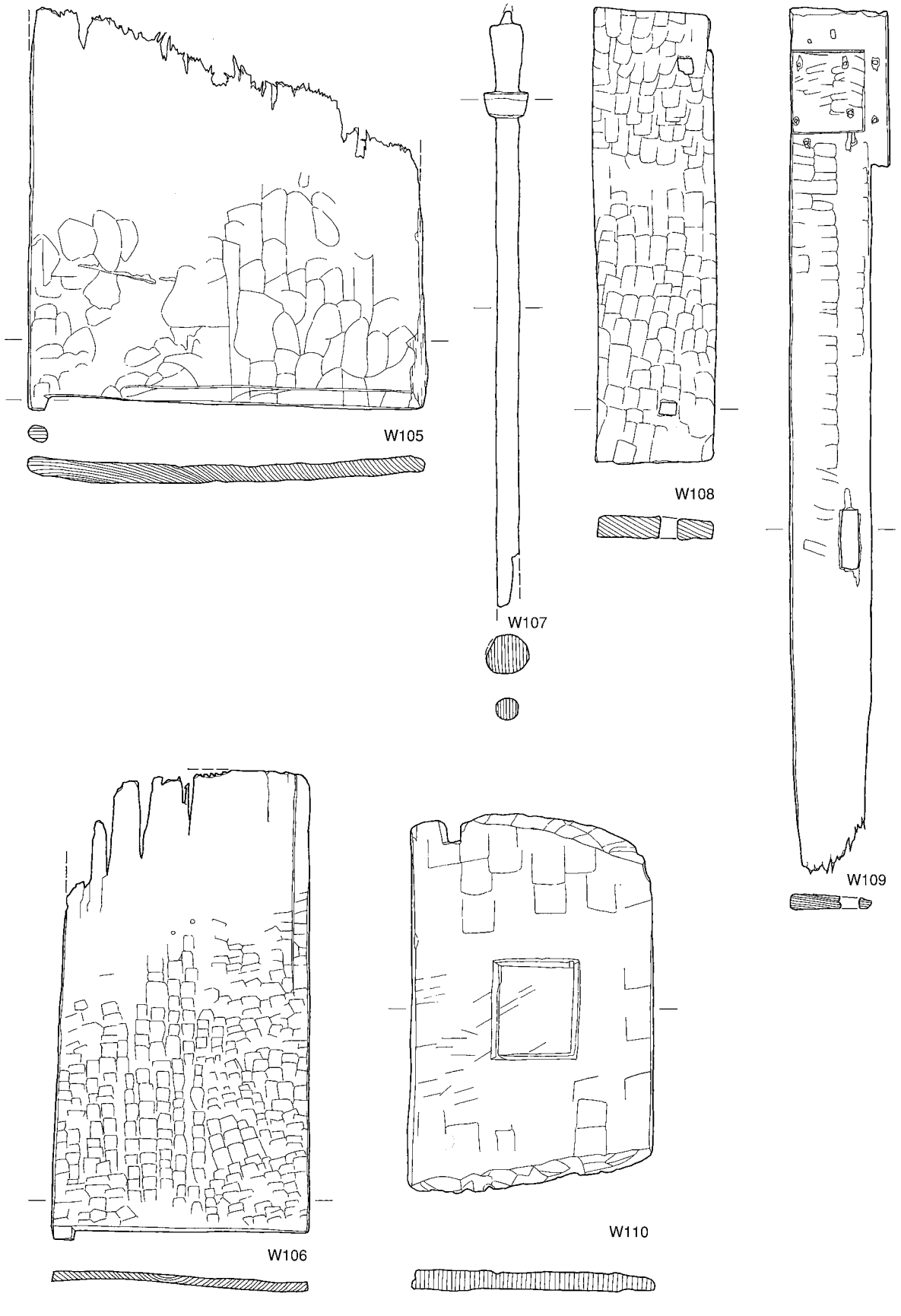

W81
W82
W83
W84
W85
W86
W87
W88
W89
W90
W91
W92
W93
W94
W95
0
20cm

木器　2区　F地点②

図版86

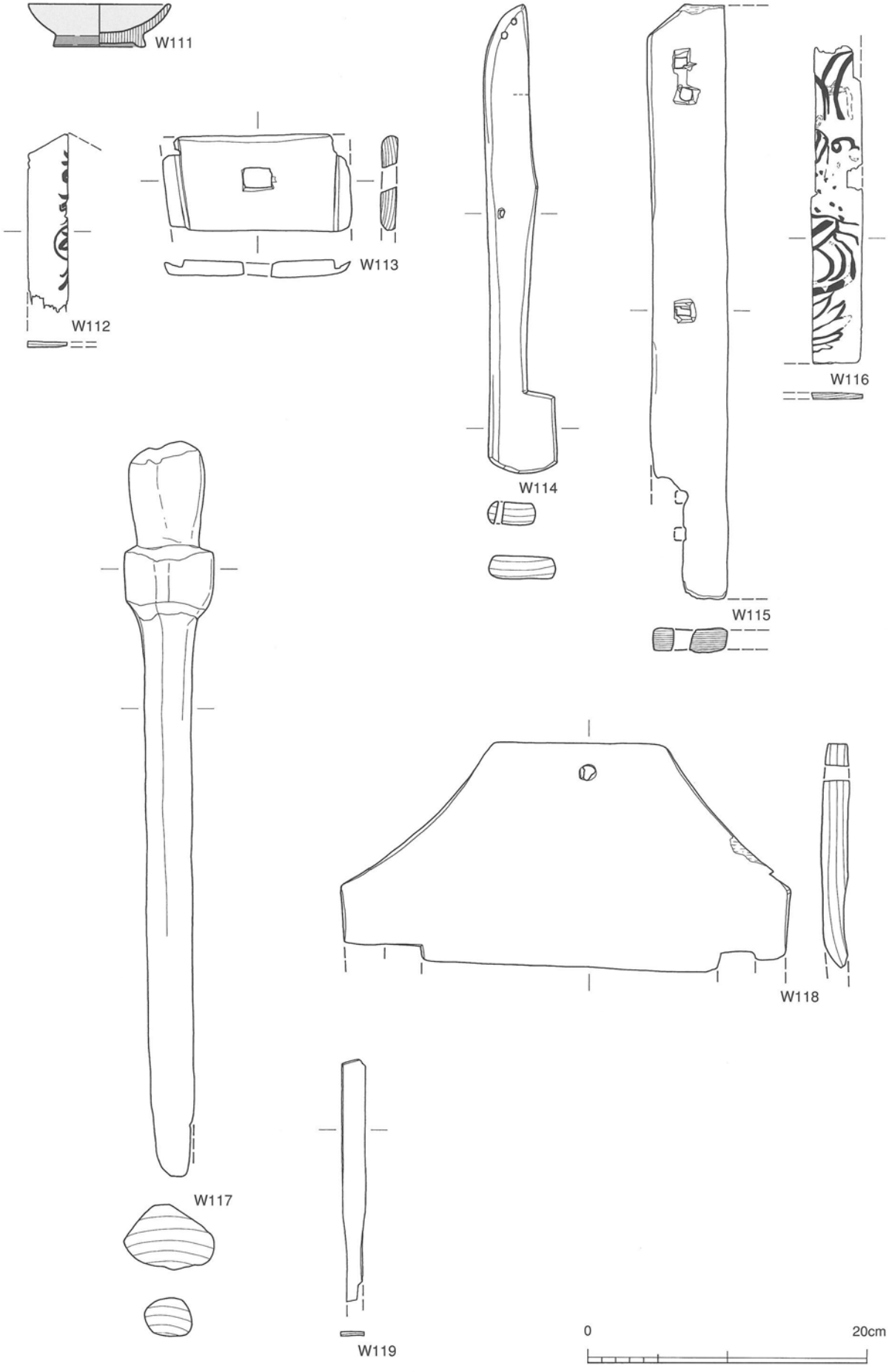


木器　2区　F地点③

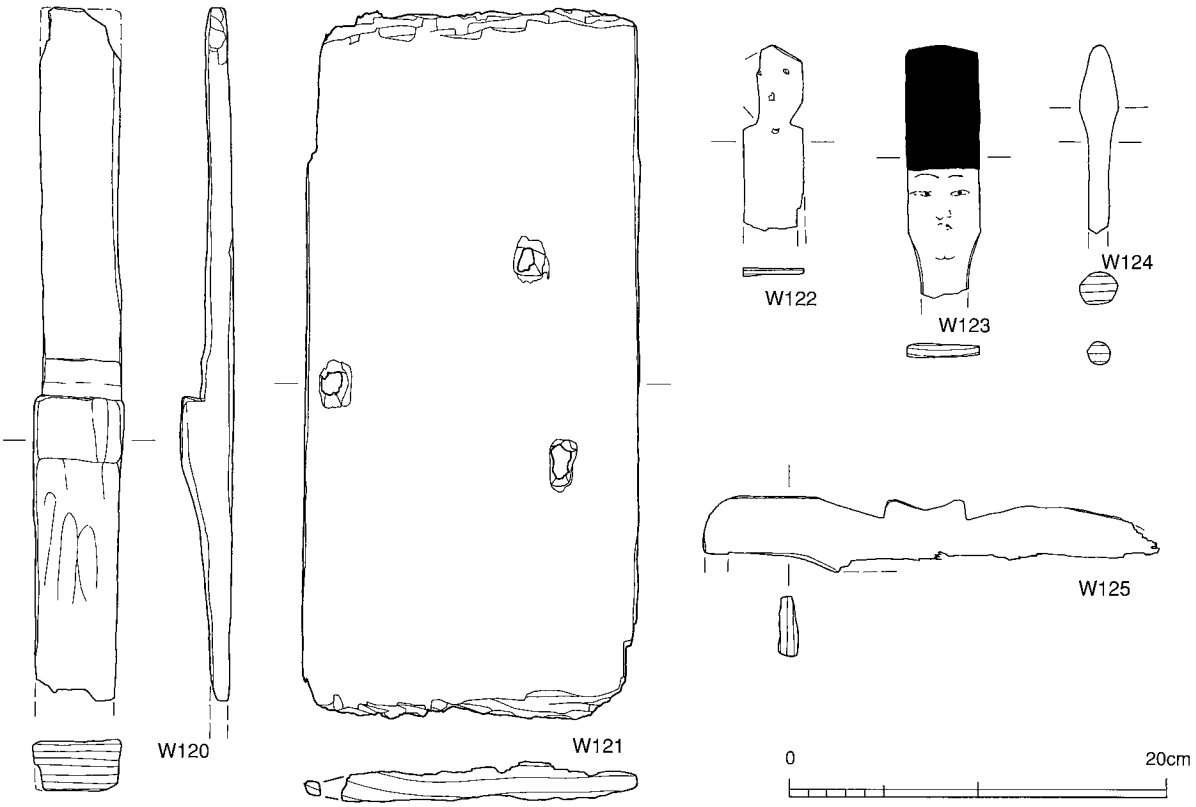


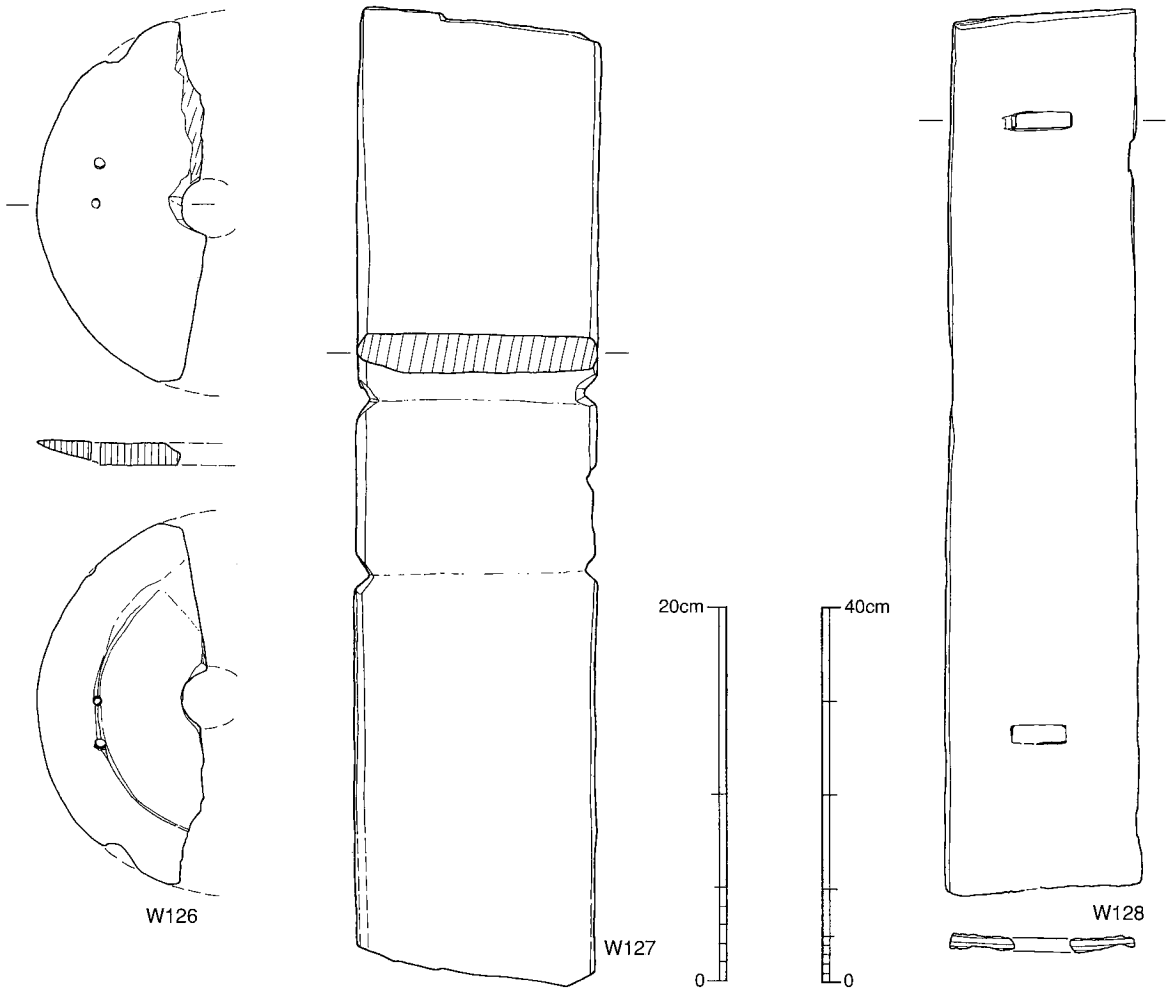
木器　2区　大型

図版88



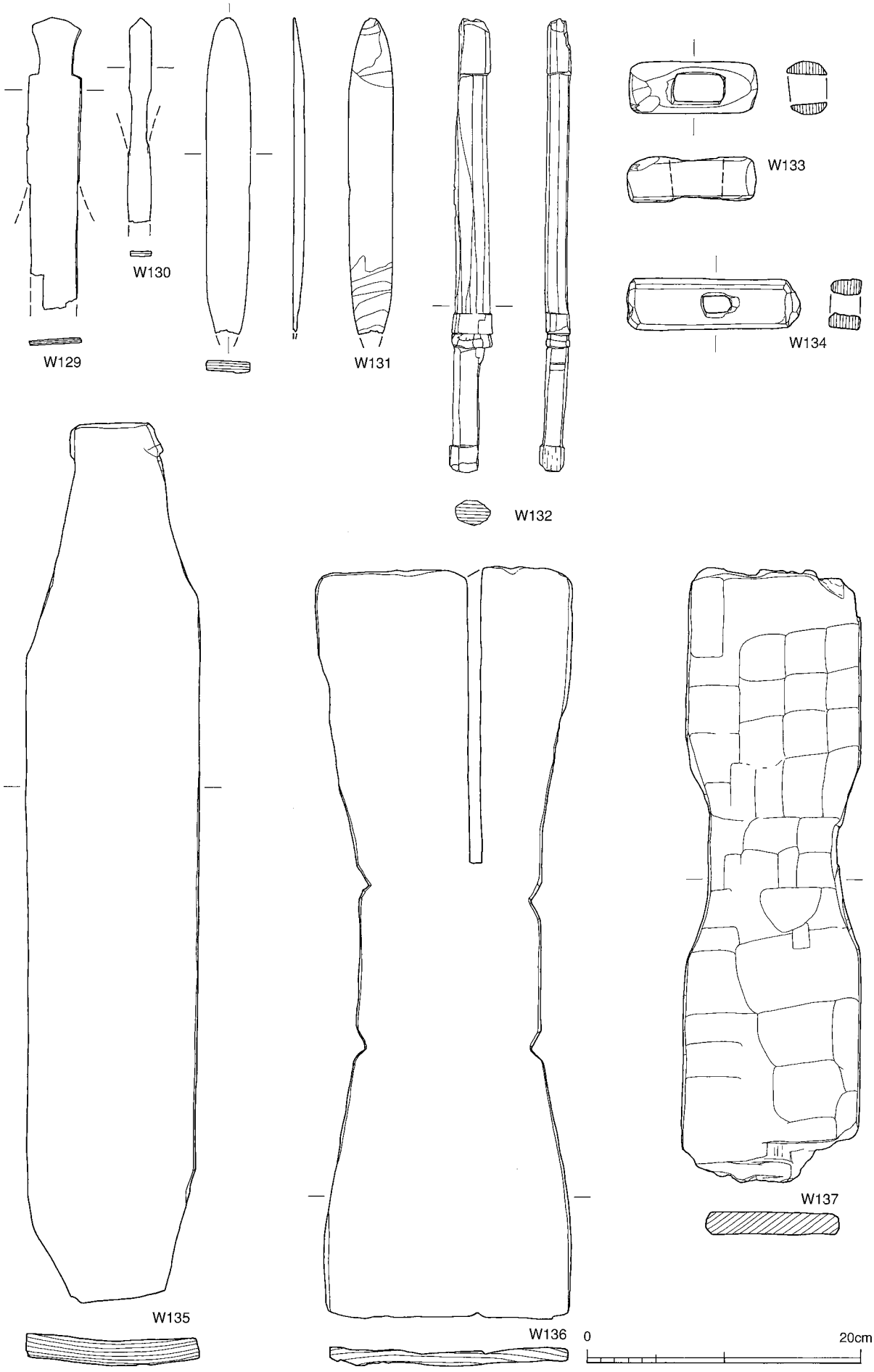
木器　3区①


W120
W121
W122
W123
W124
W125
0
20cm

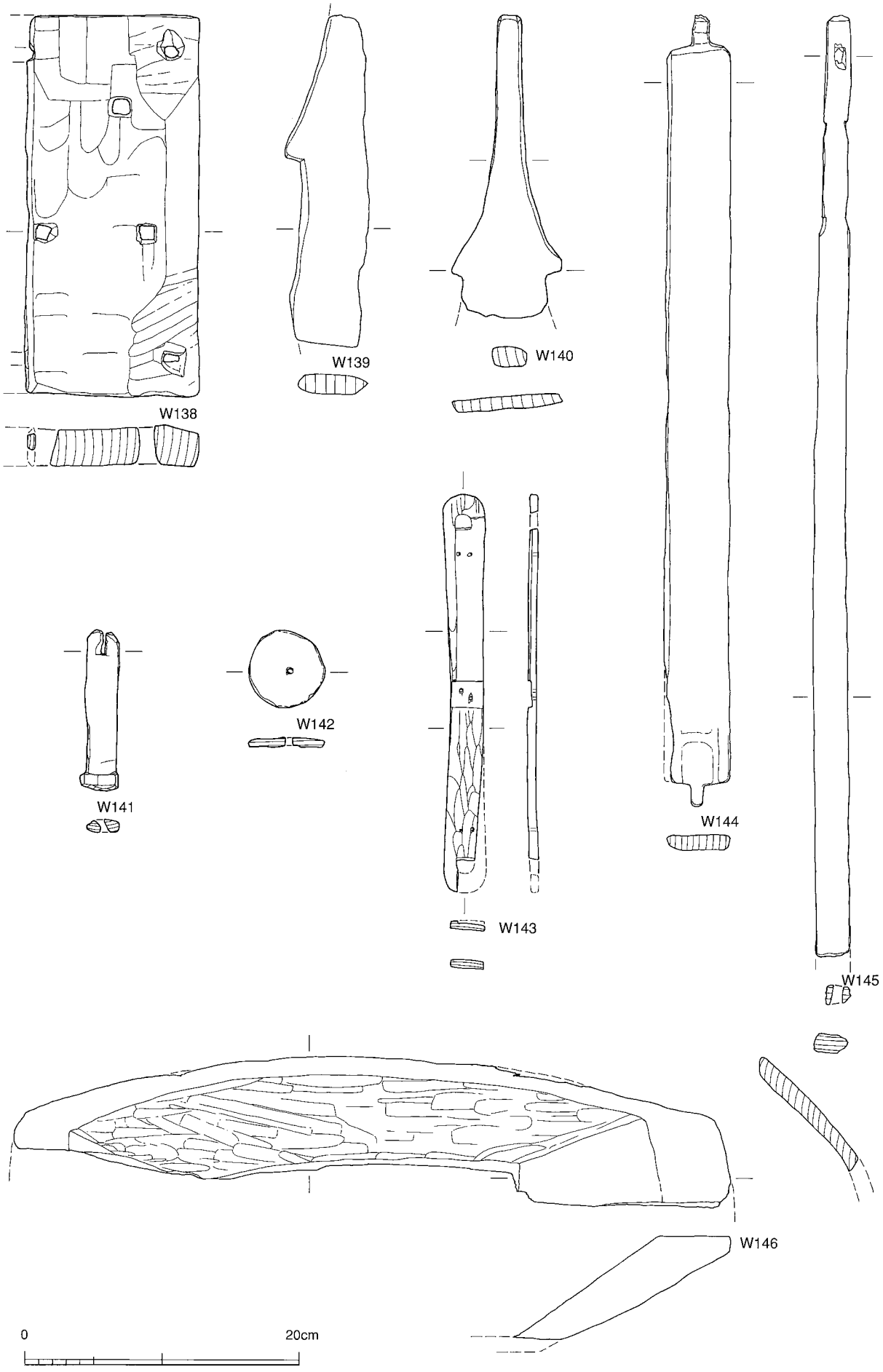

W126
W127
20cm
0
40cm
0
W128

木器　3区②

図版90

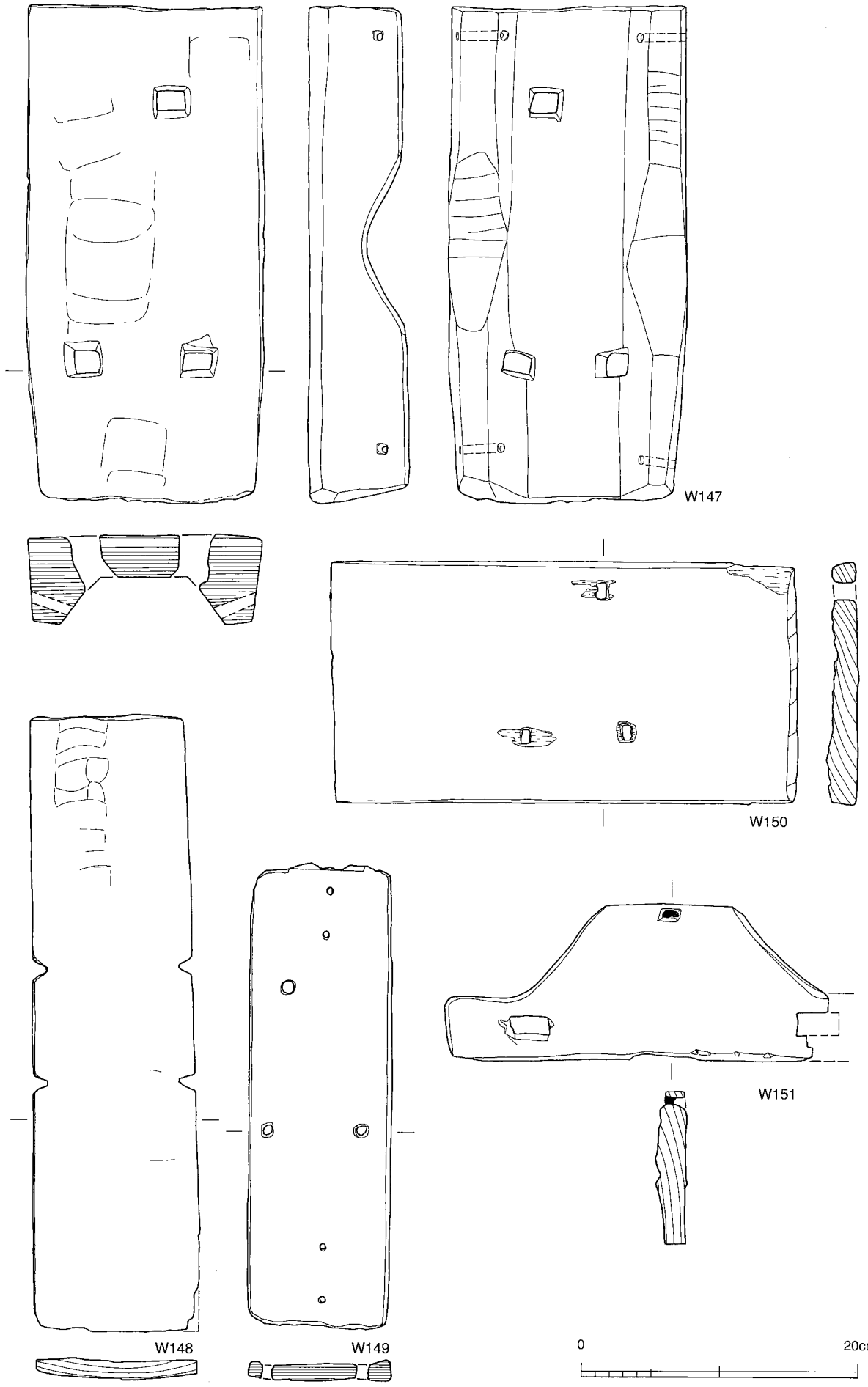


木器　3区③

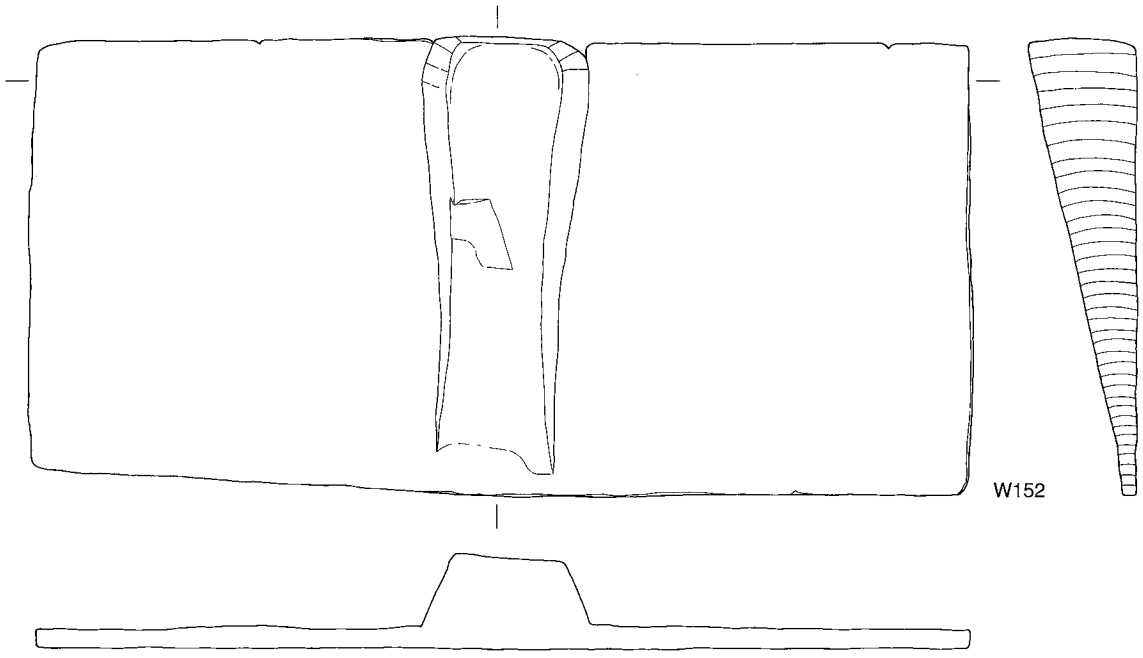


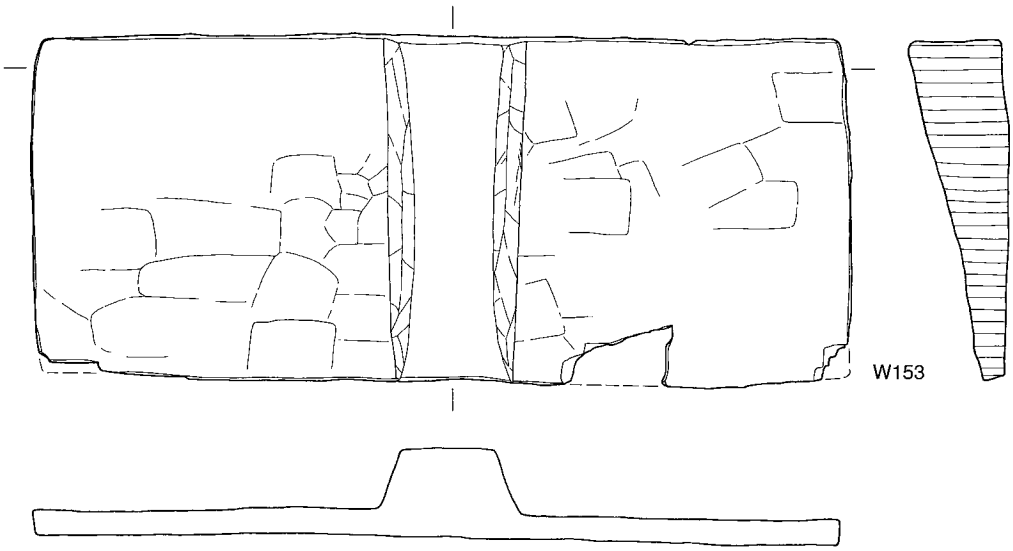
木器　3区④

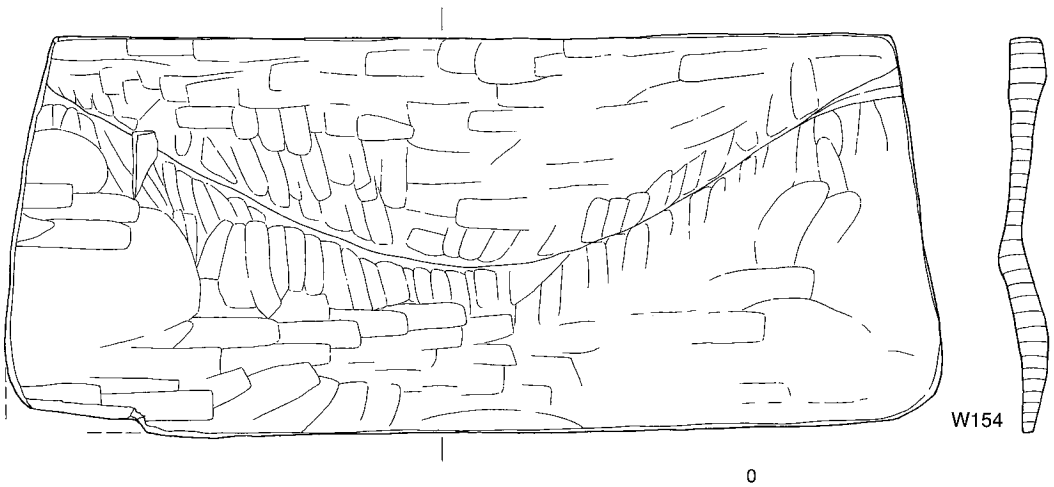
図版92

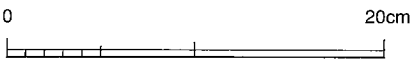


木器　3区⑤



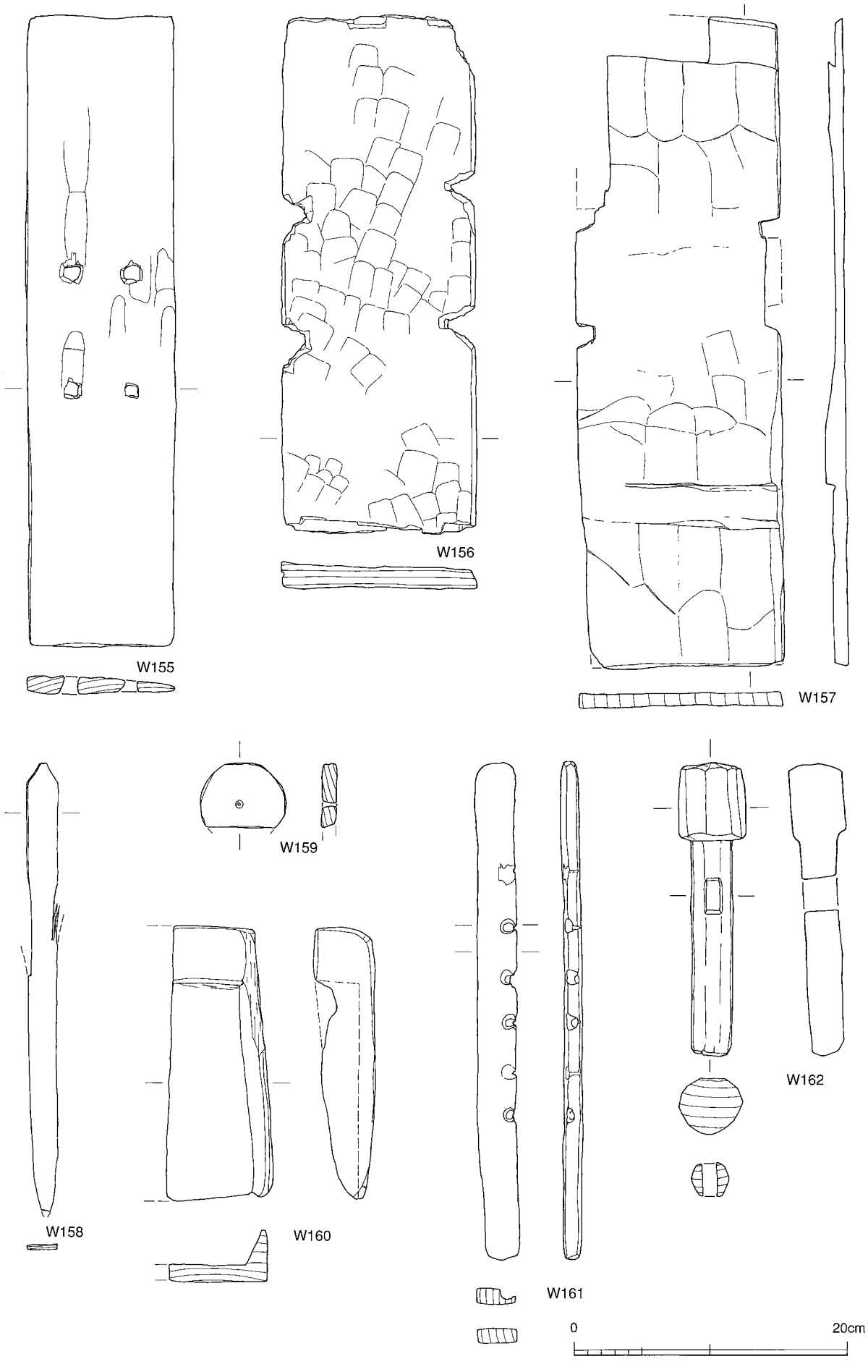




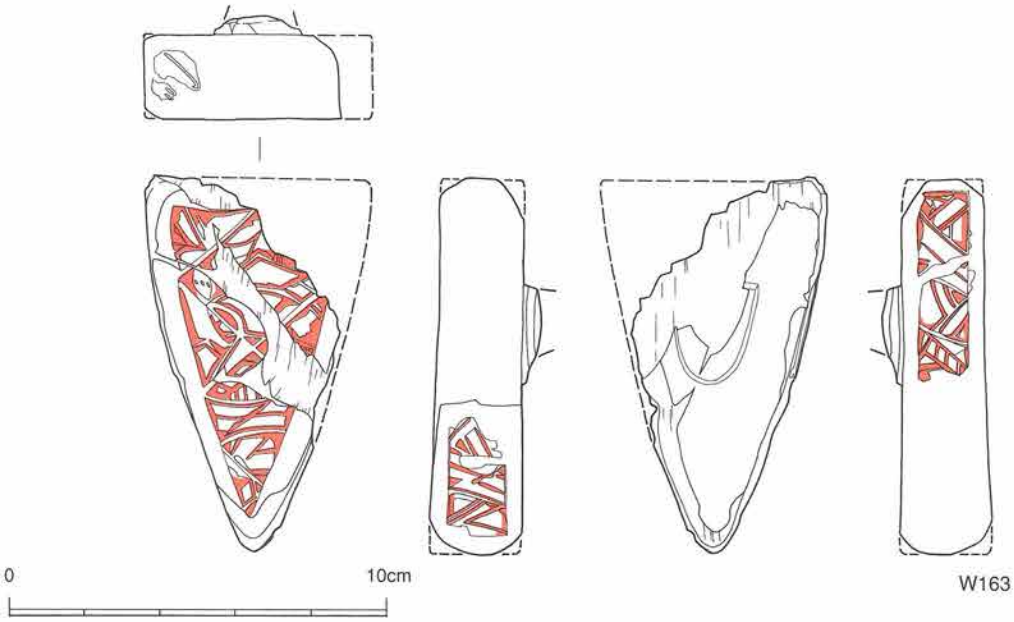


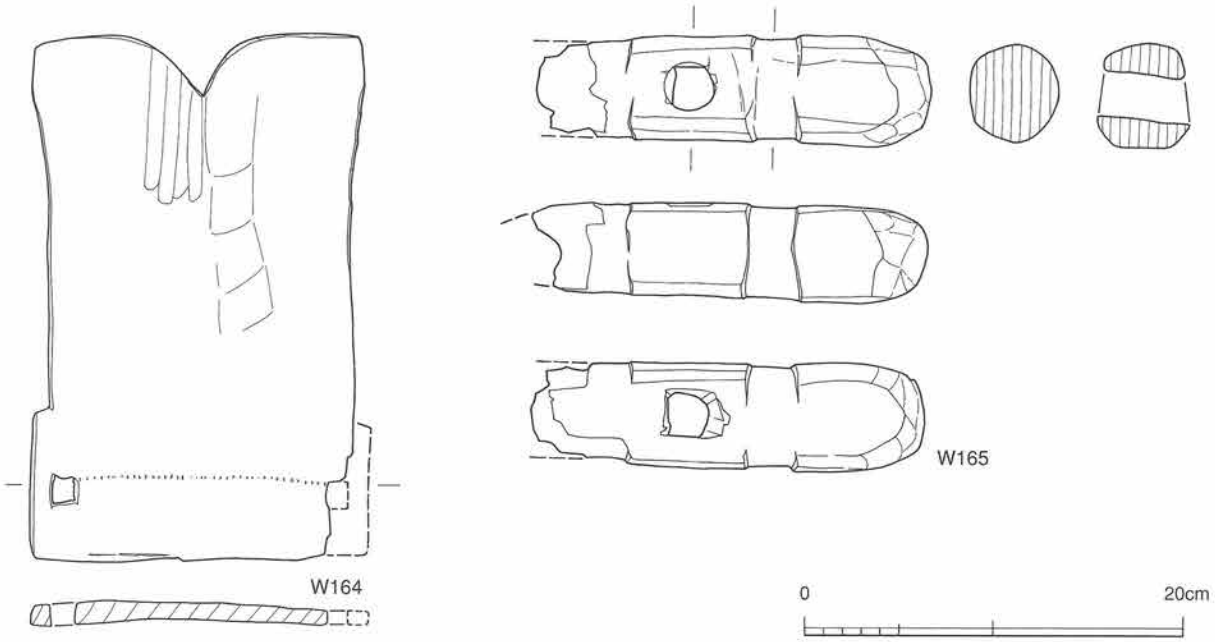
木器　3区⑥

図版94

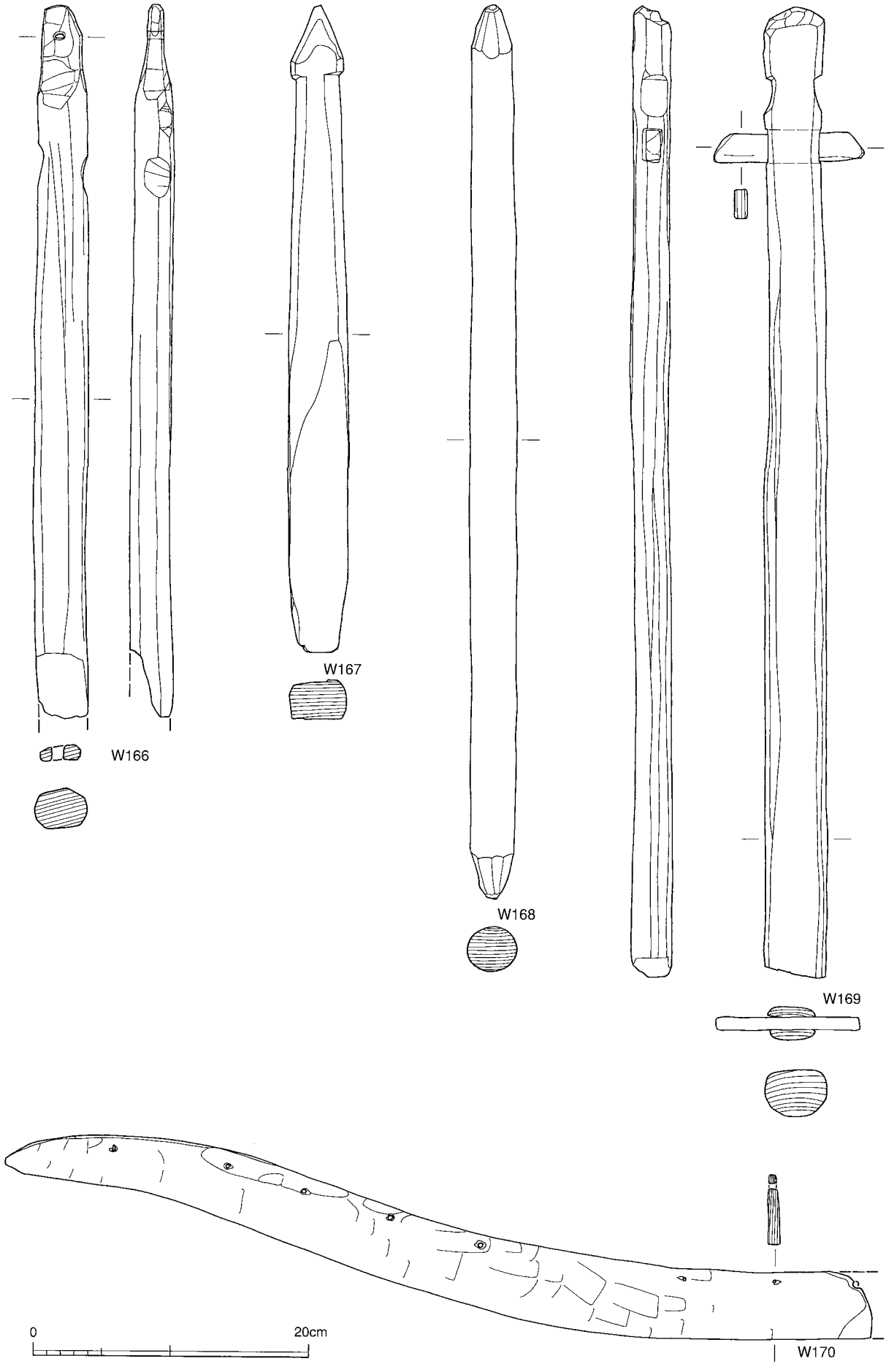


木器　3区⑦

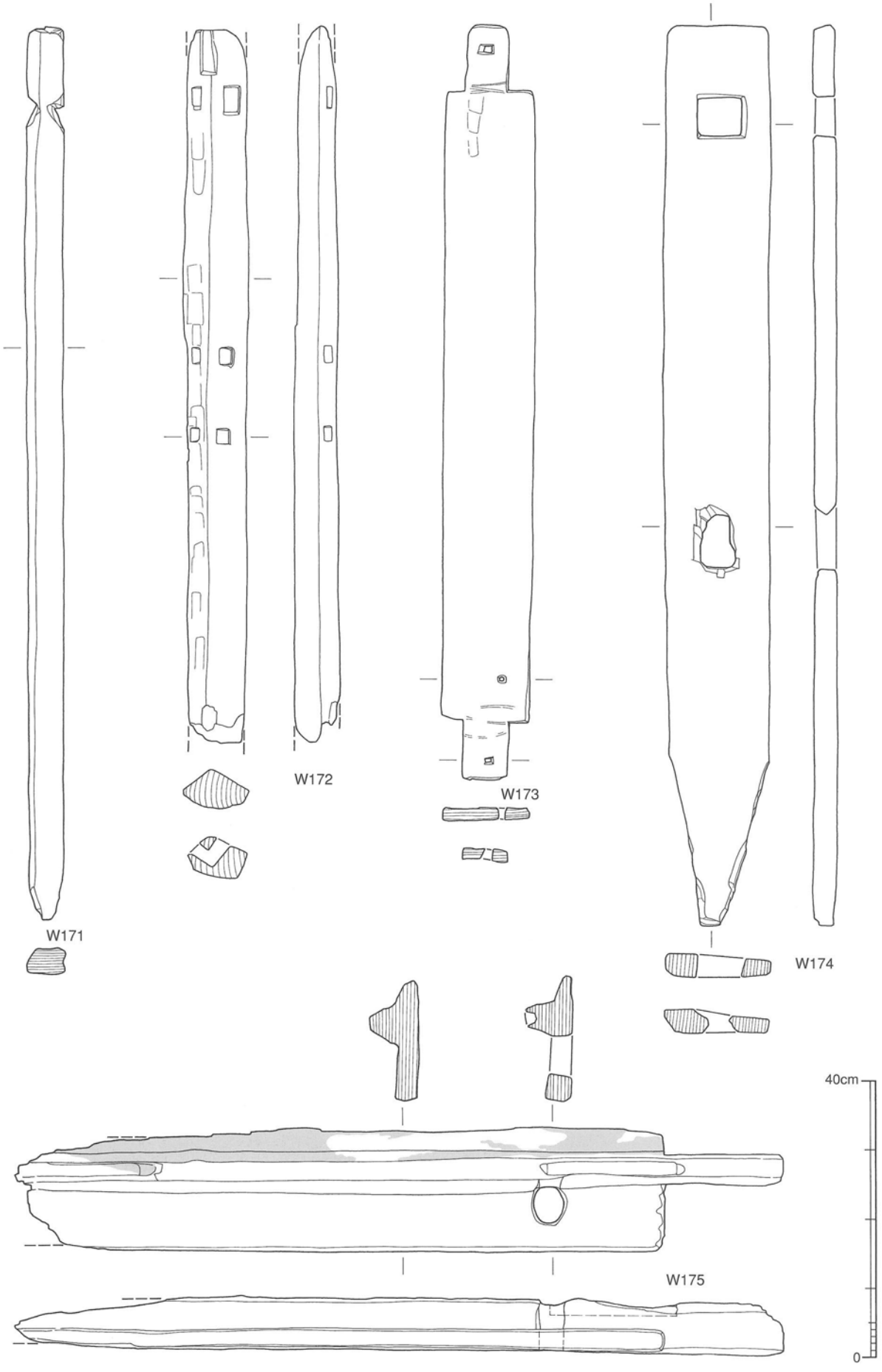

0
10cm
W163


W164
W165
0
20cm

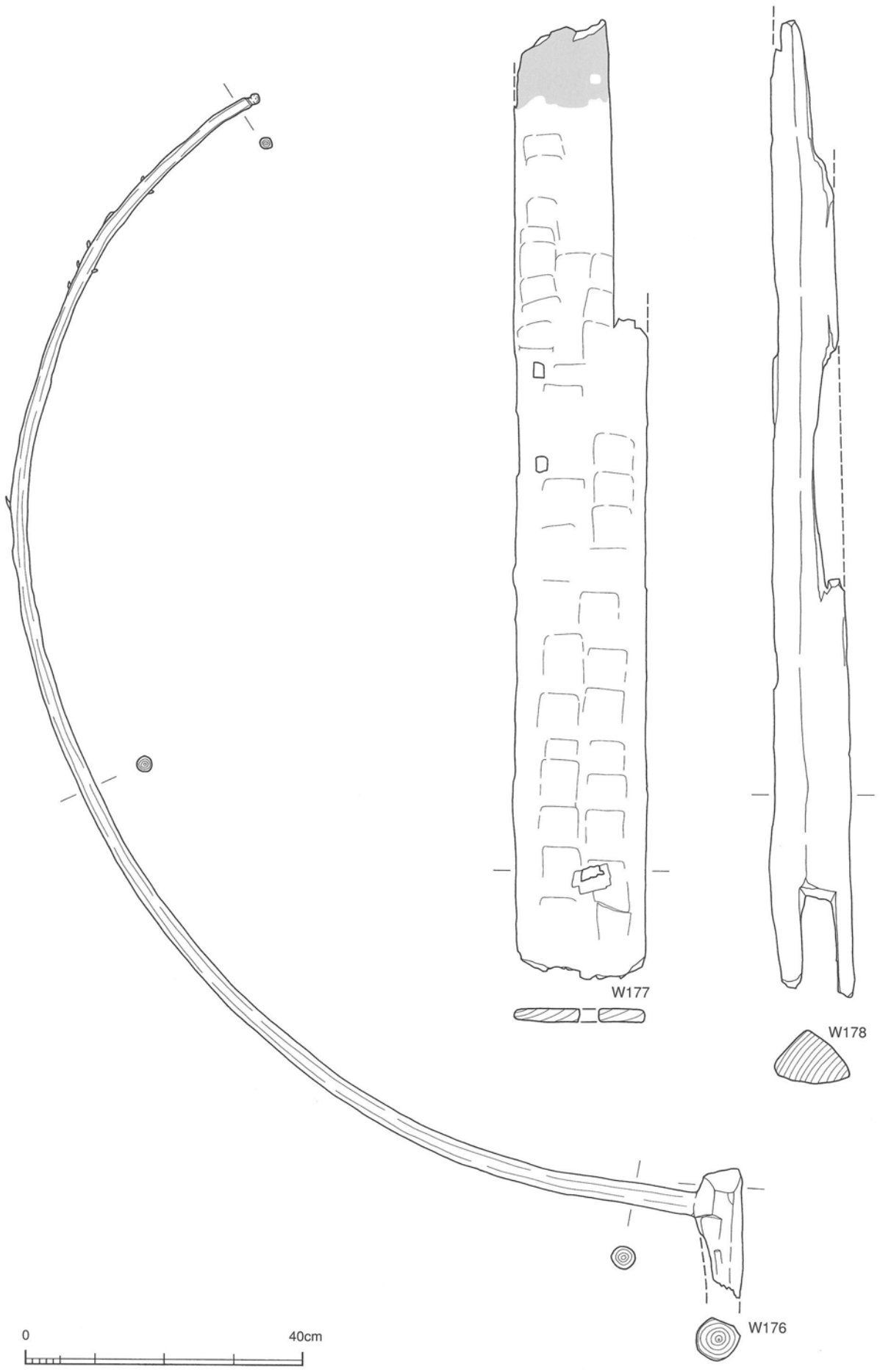
図版96



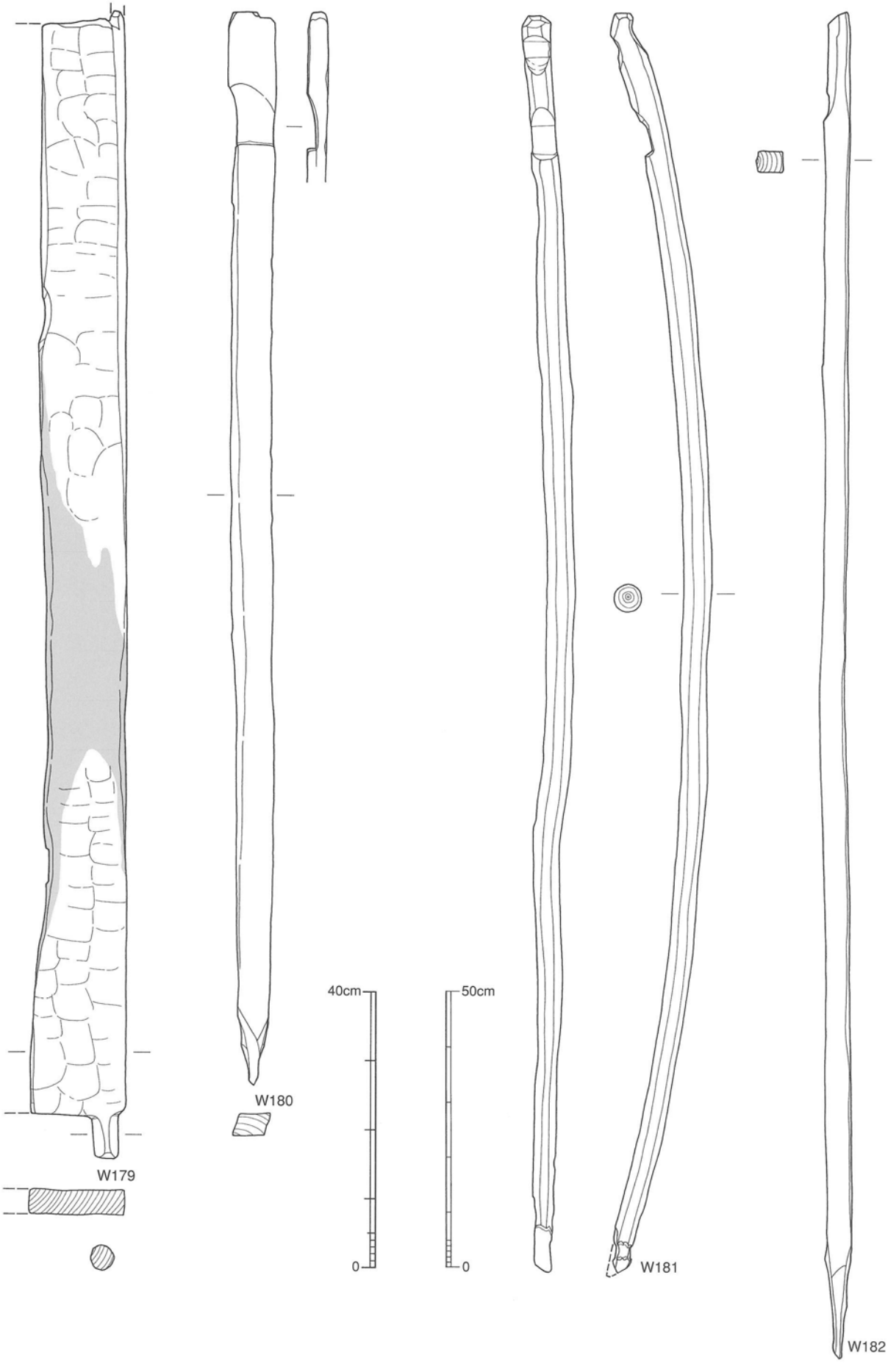
木器　3区⑨



木器　3区⑩

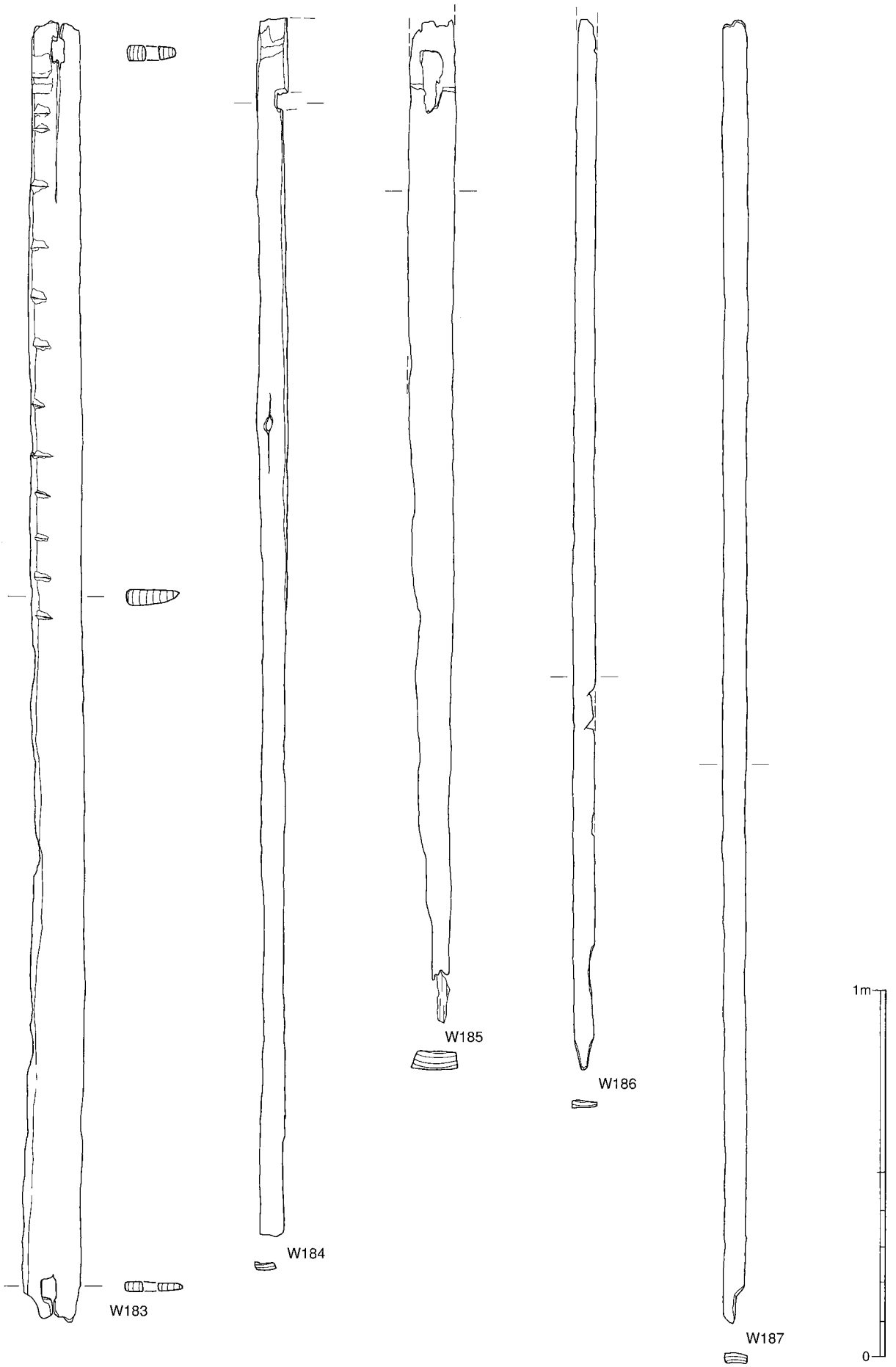


木器　3区　大型①

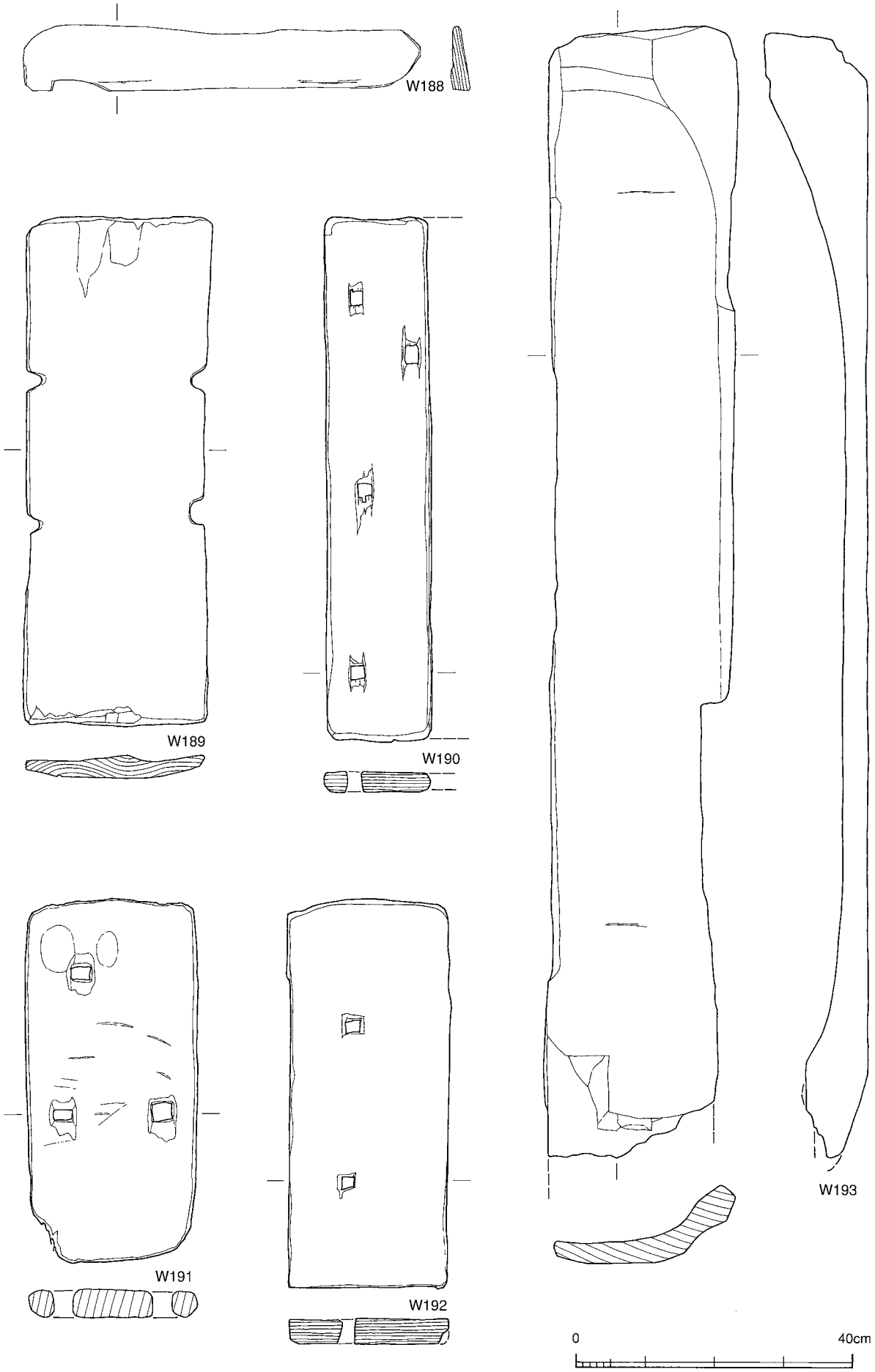


木器　3区　大型②

図版100

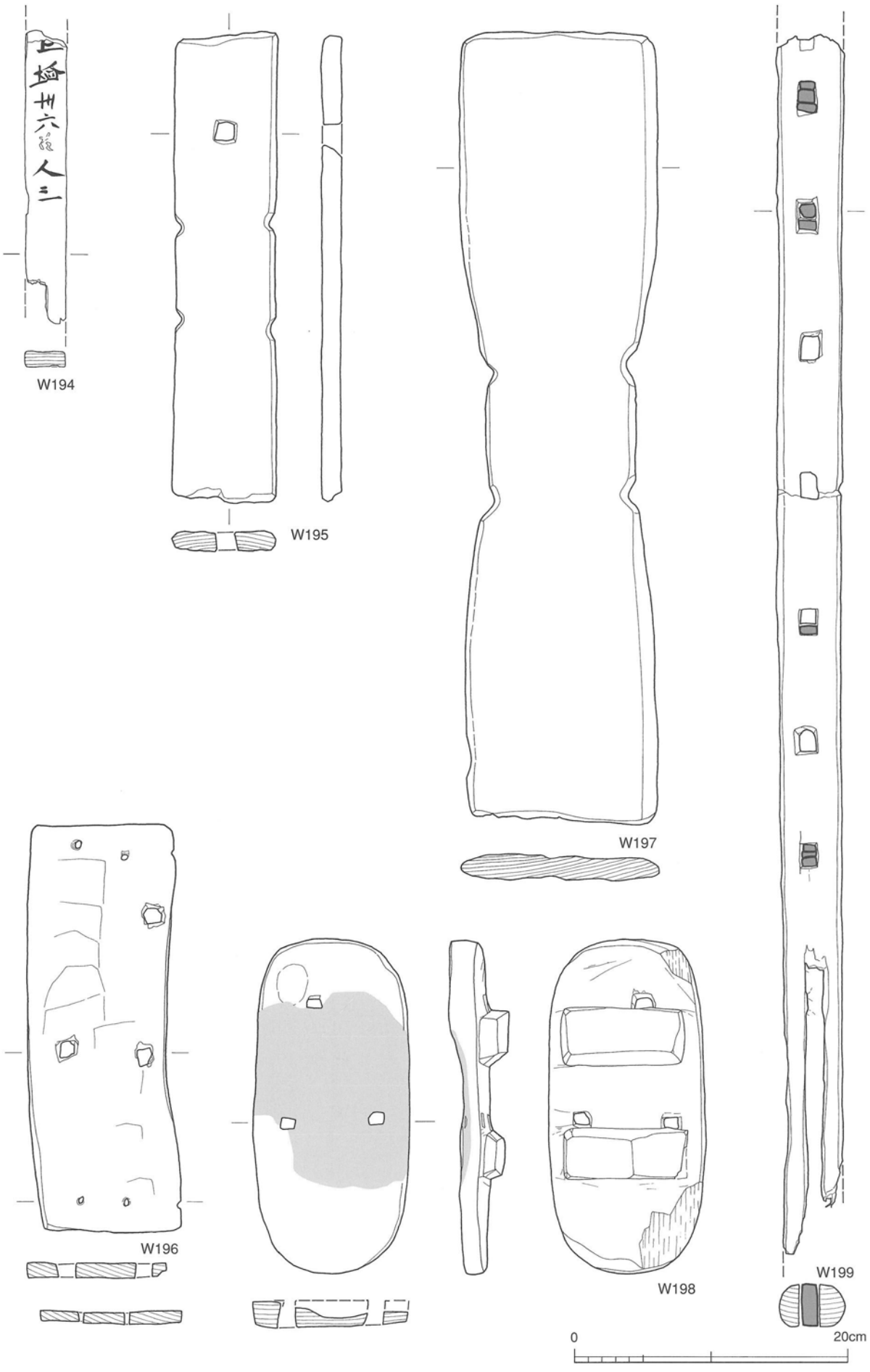


木器　3区　大型③

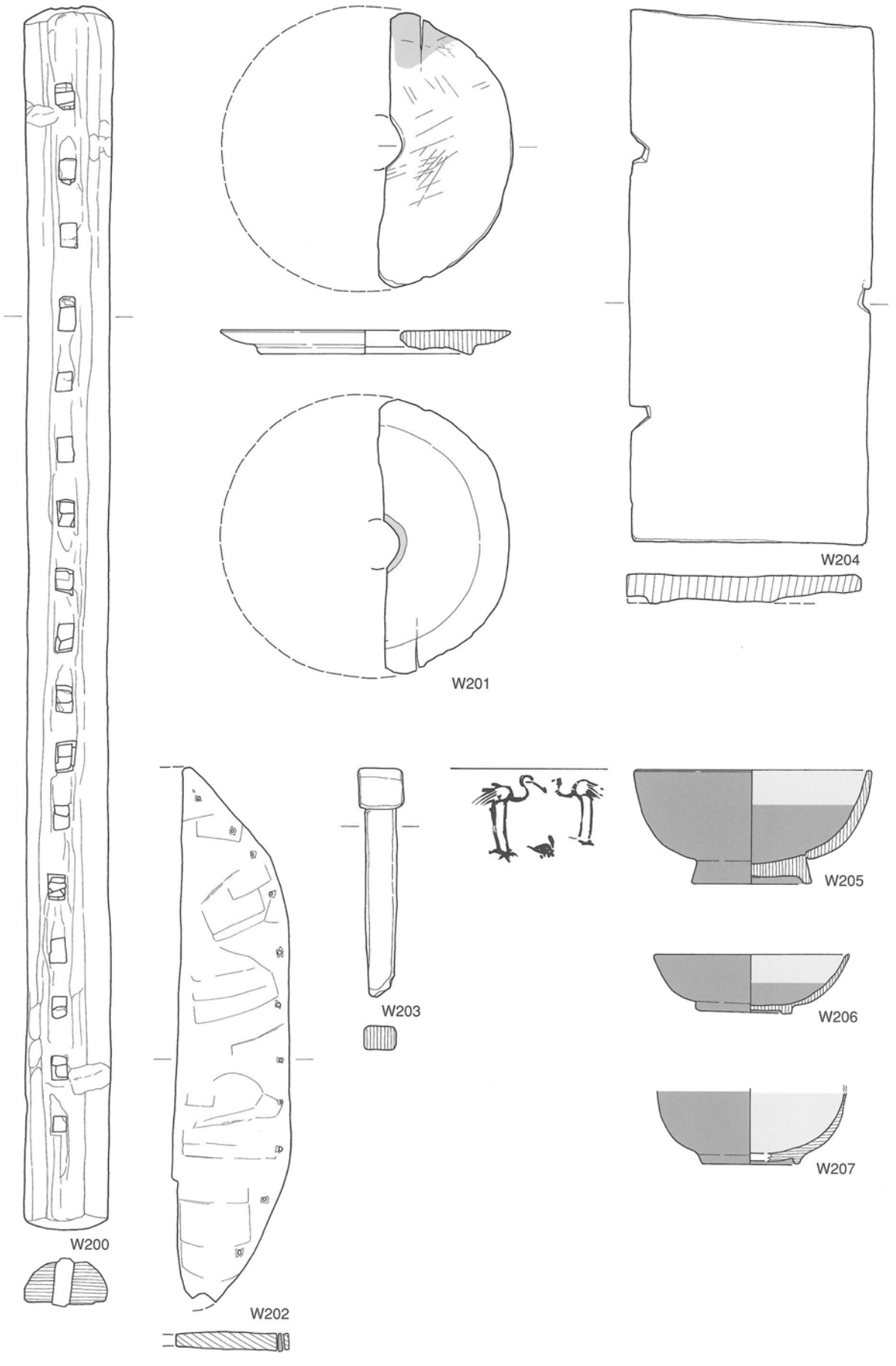


木器　4区　A地点①

図版102

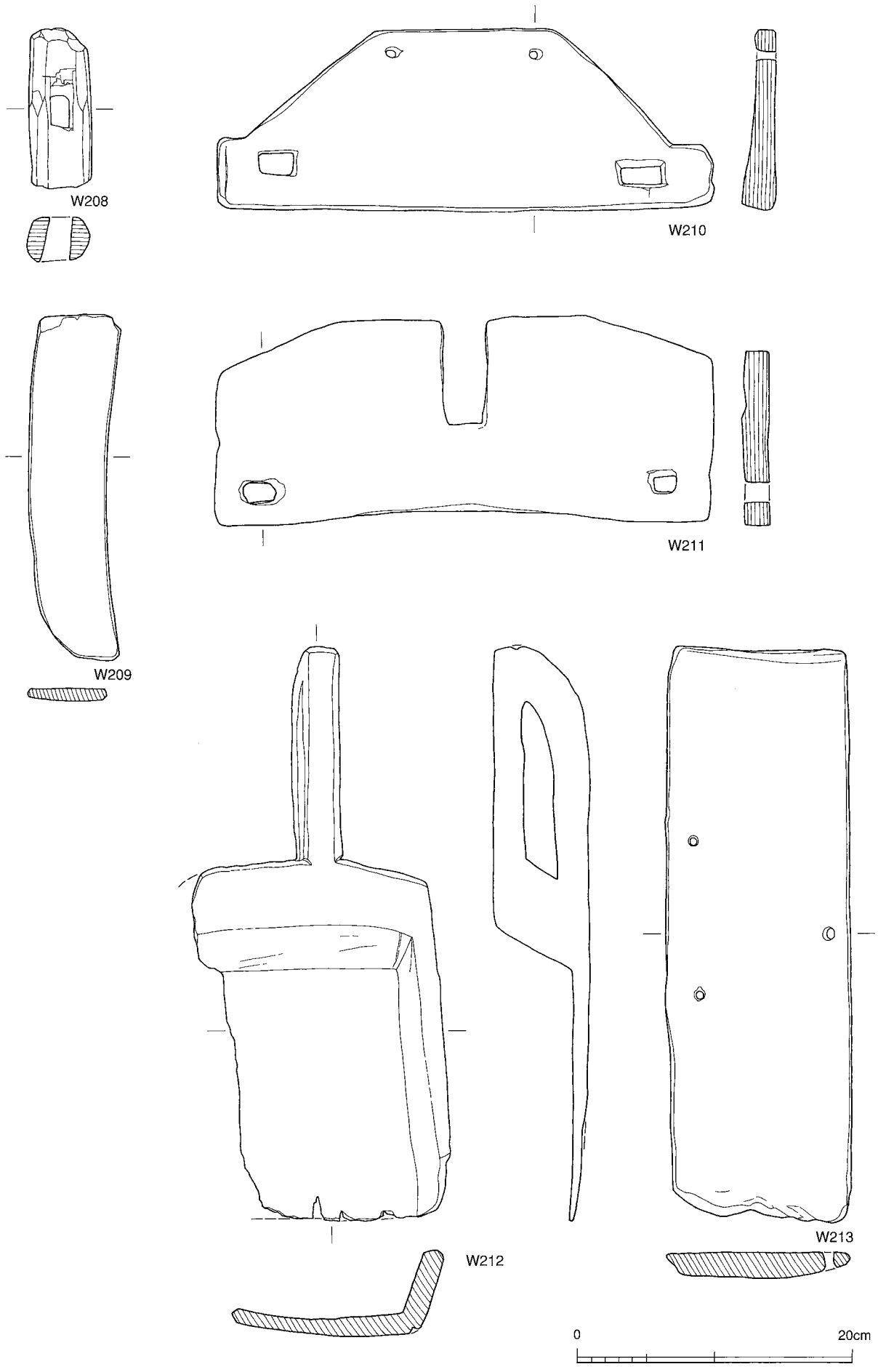


木器　4区　A地点②

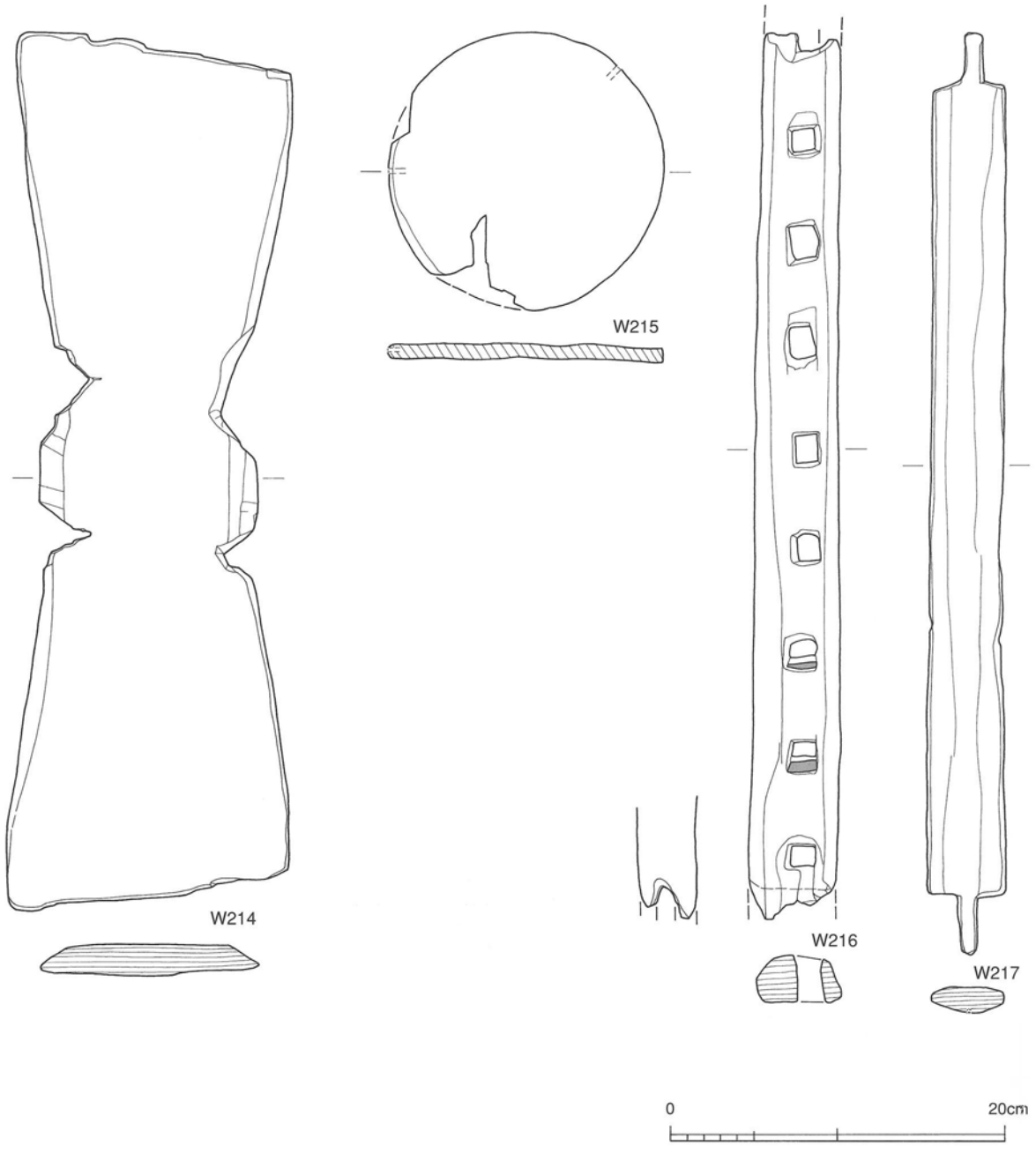


木器　4区　B地点③

図版104

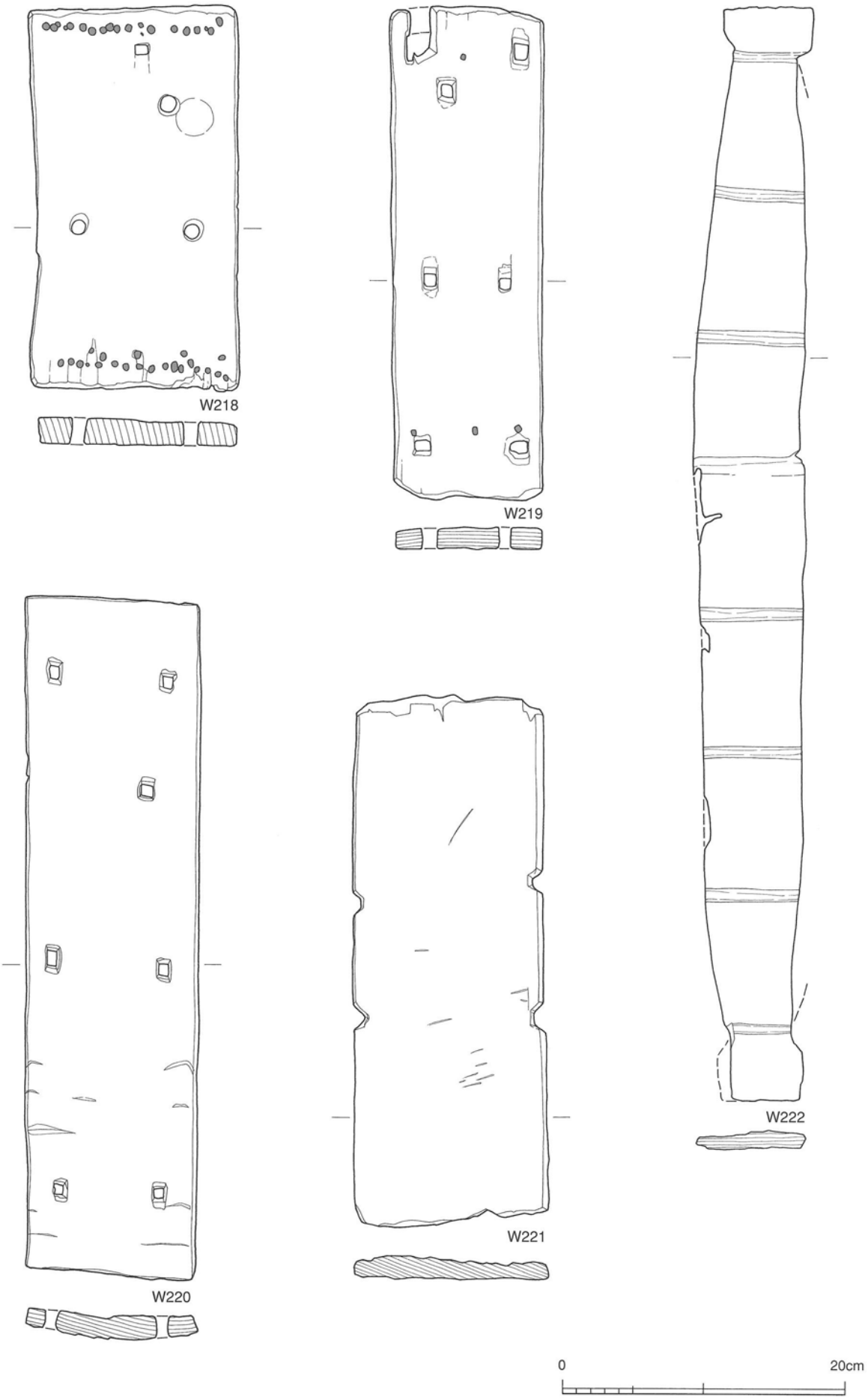


木器　4区　B地点④

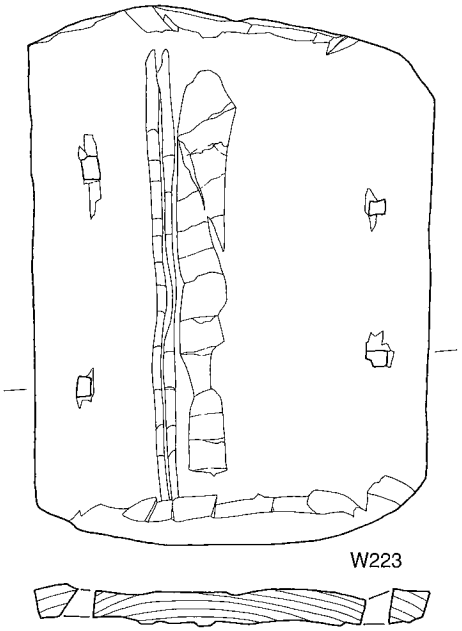


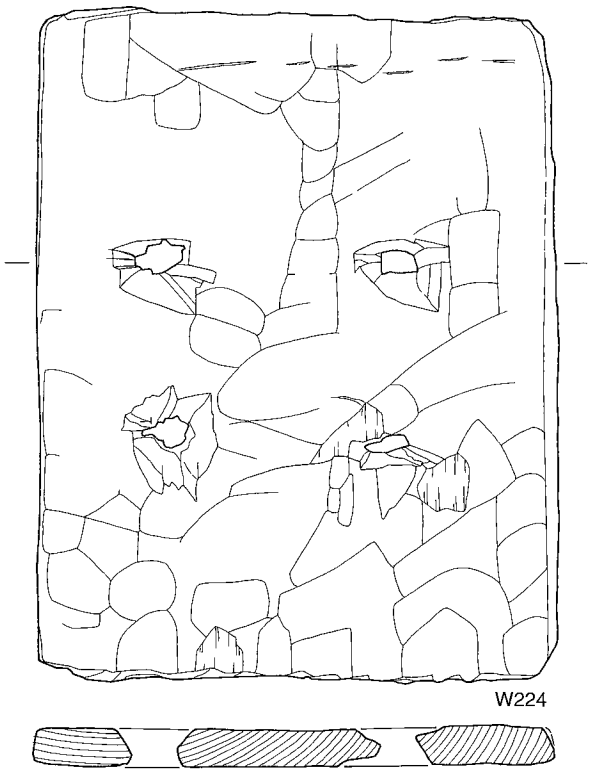
木器　4区　B地点⑤

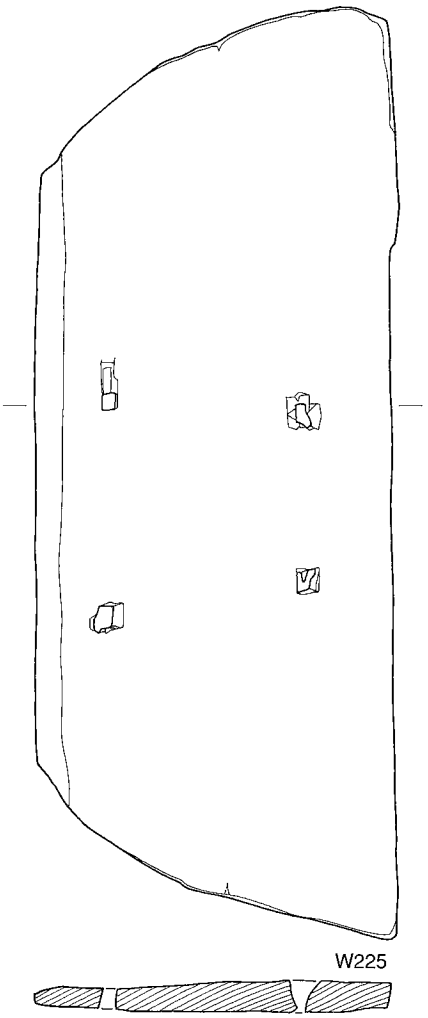
図版106

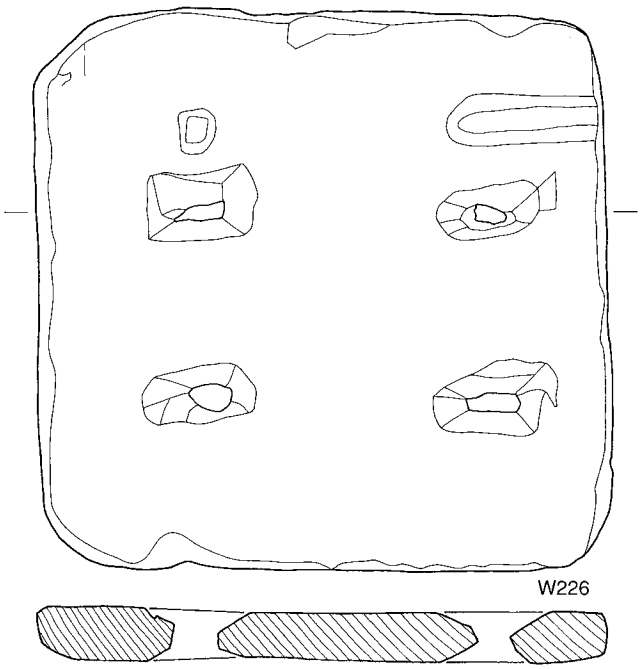


木器　4区　C地点①





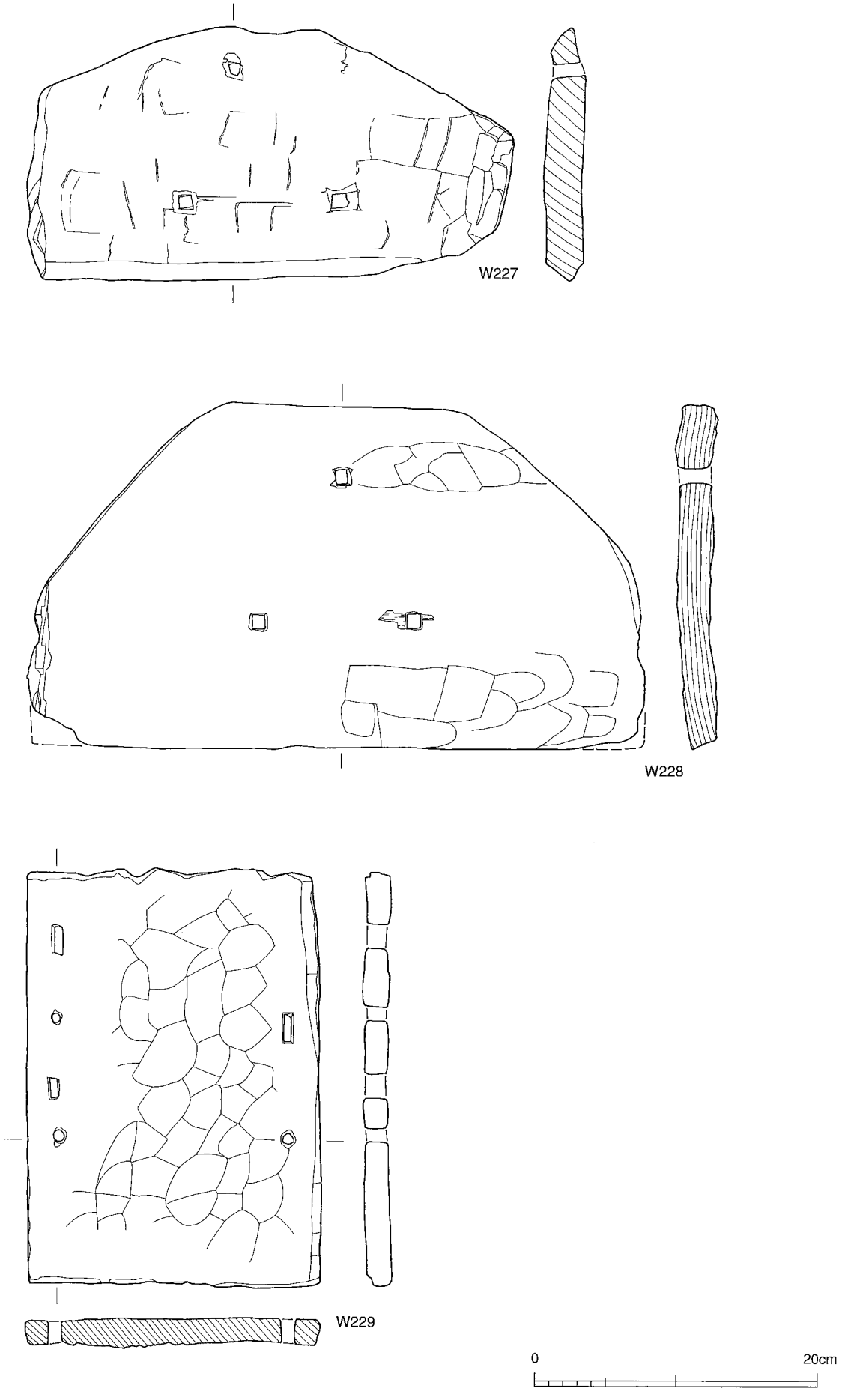




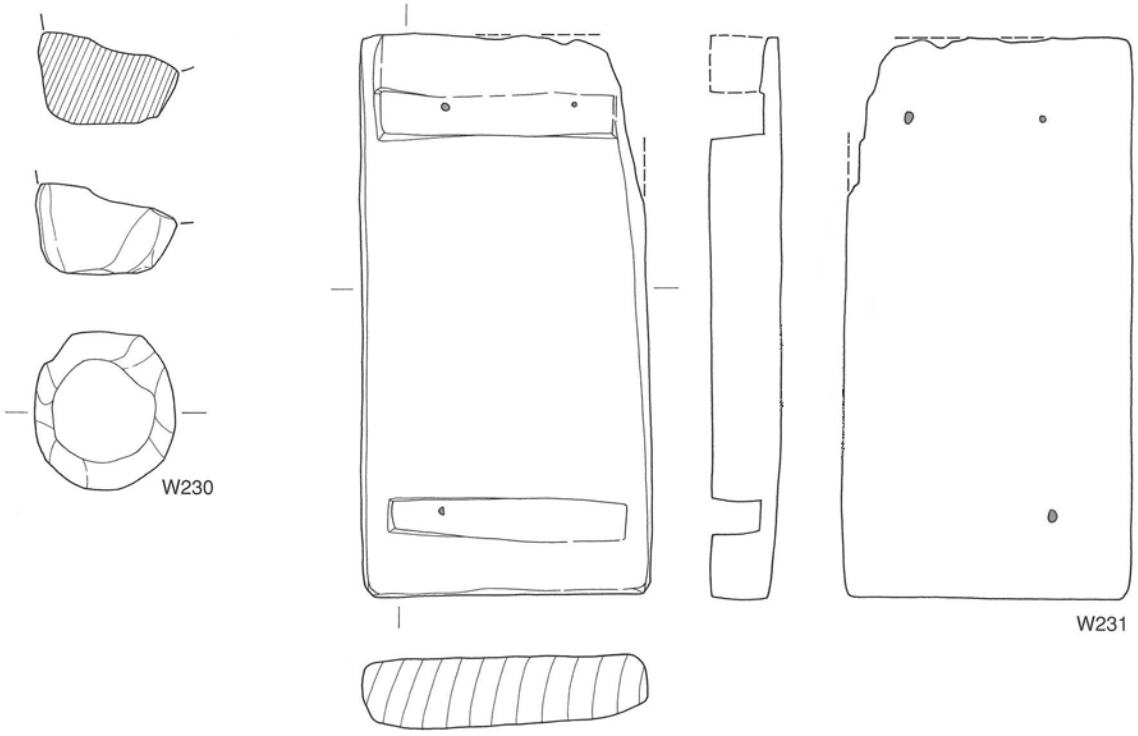
0 20cm

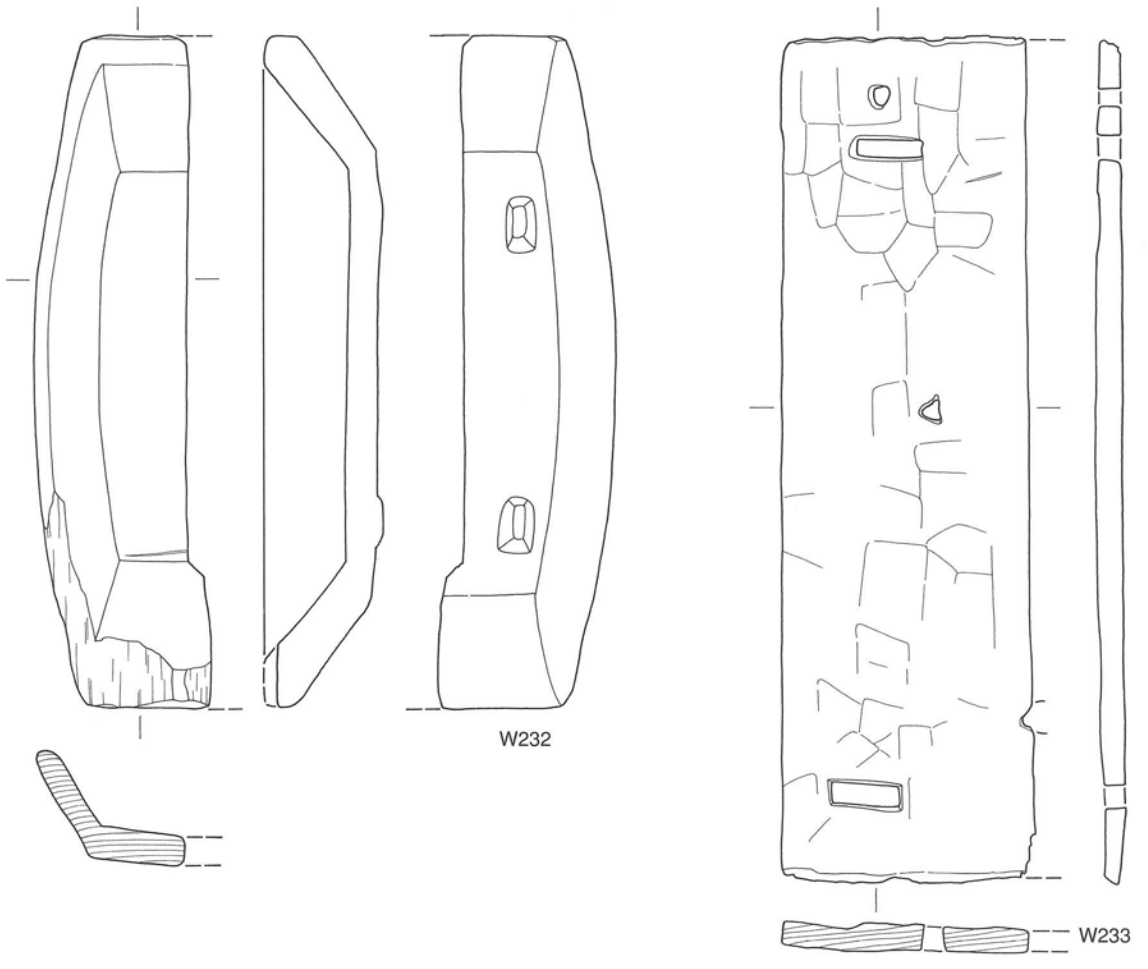
木器　4区　C地点②

図版108



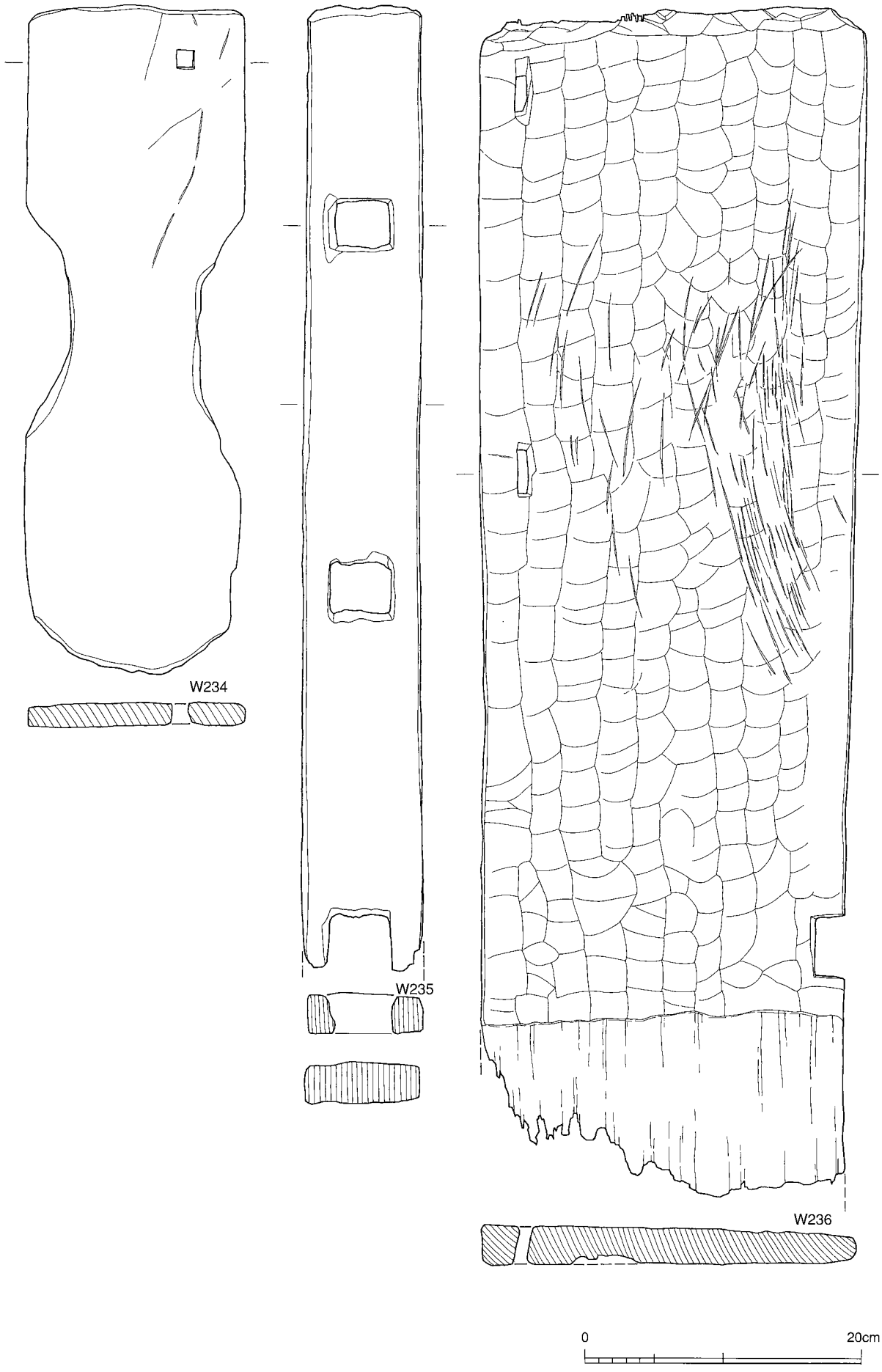
木器　4区　C地点③



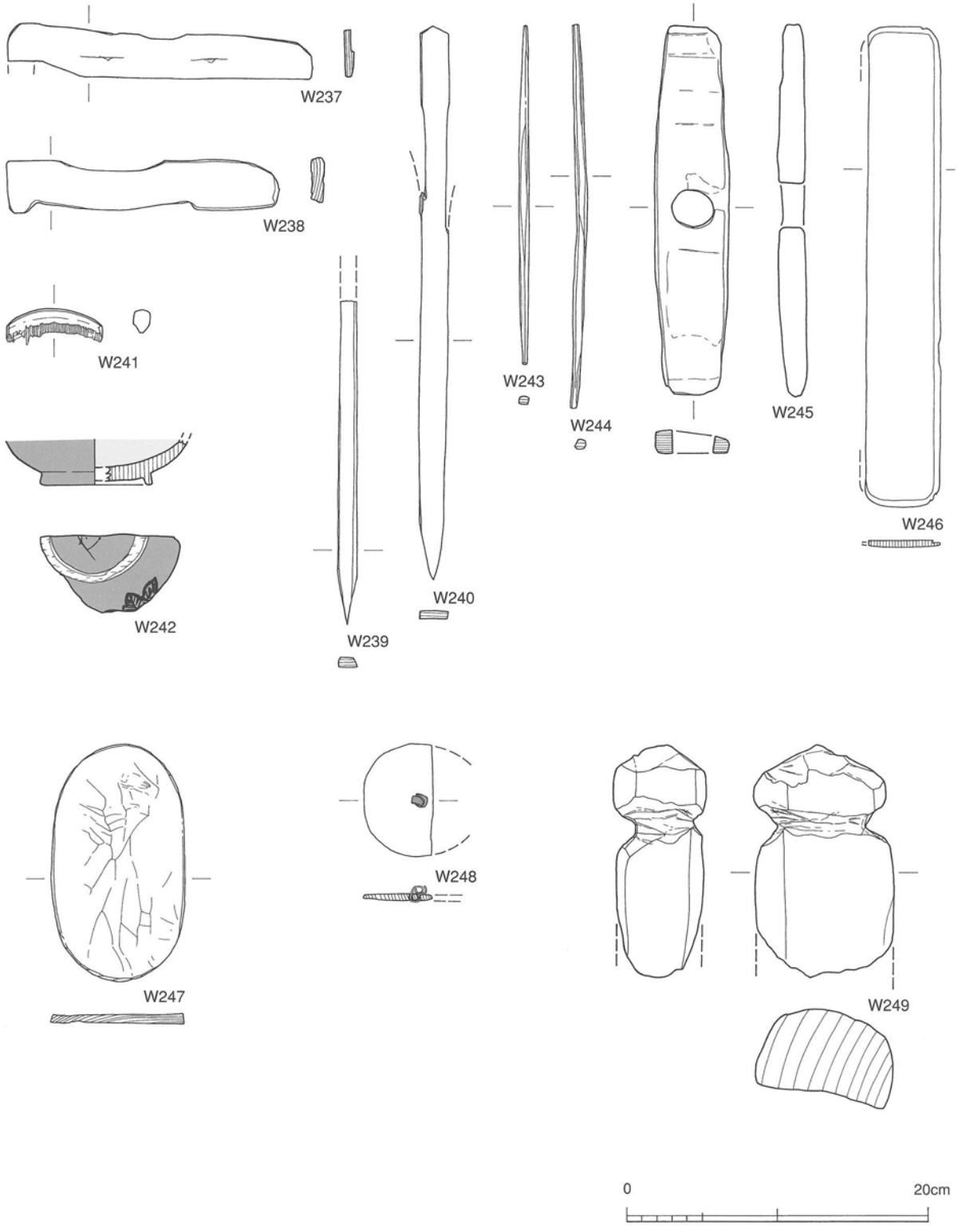


木器　4区　C地点④

図版110

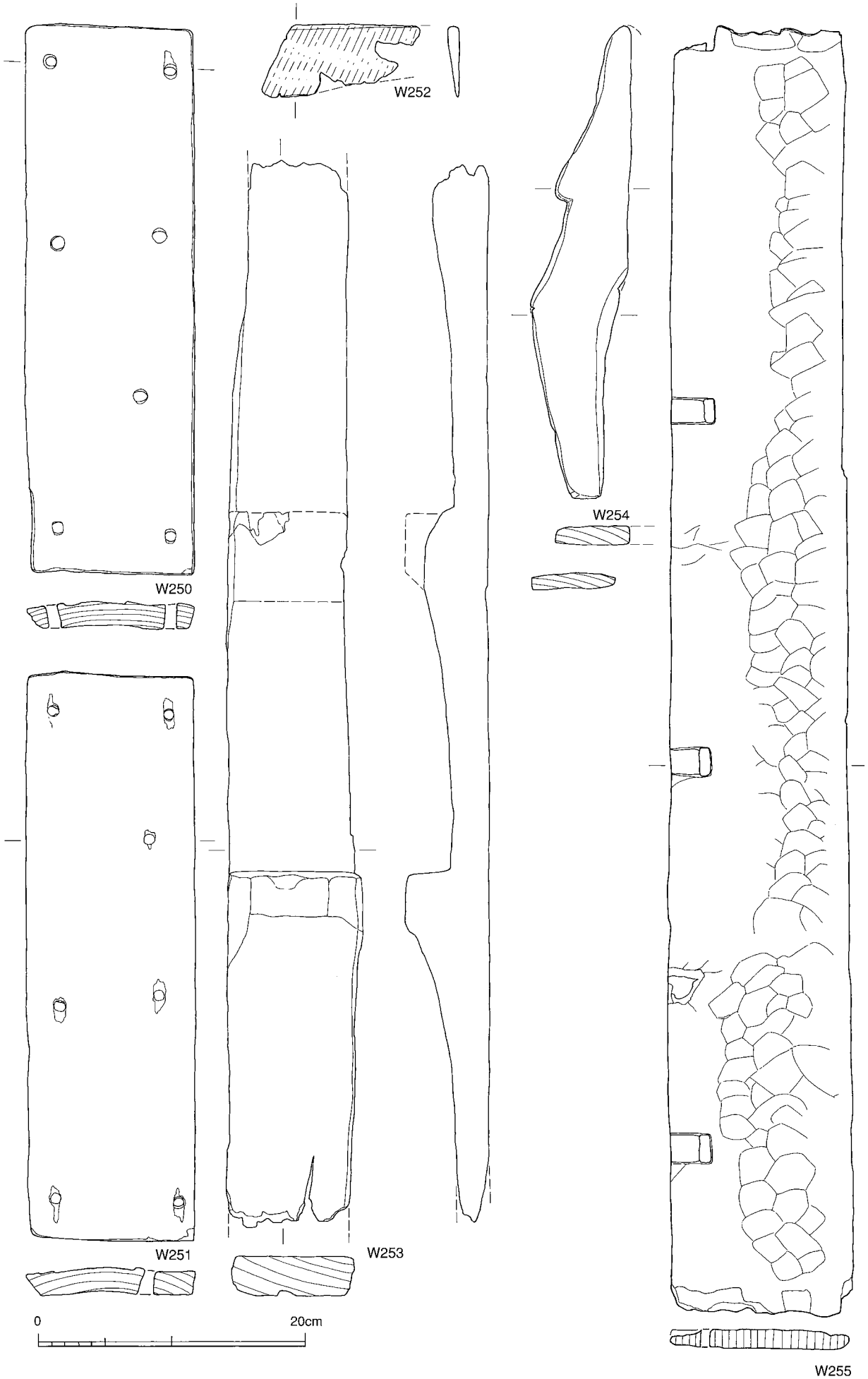


木器　4区　C地点⑤

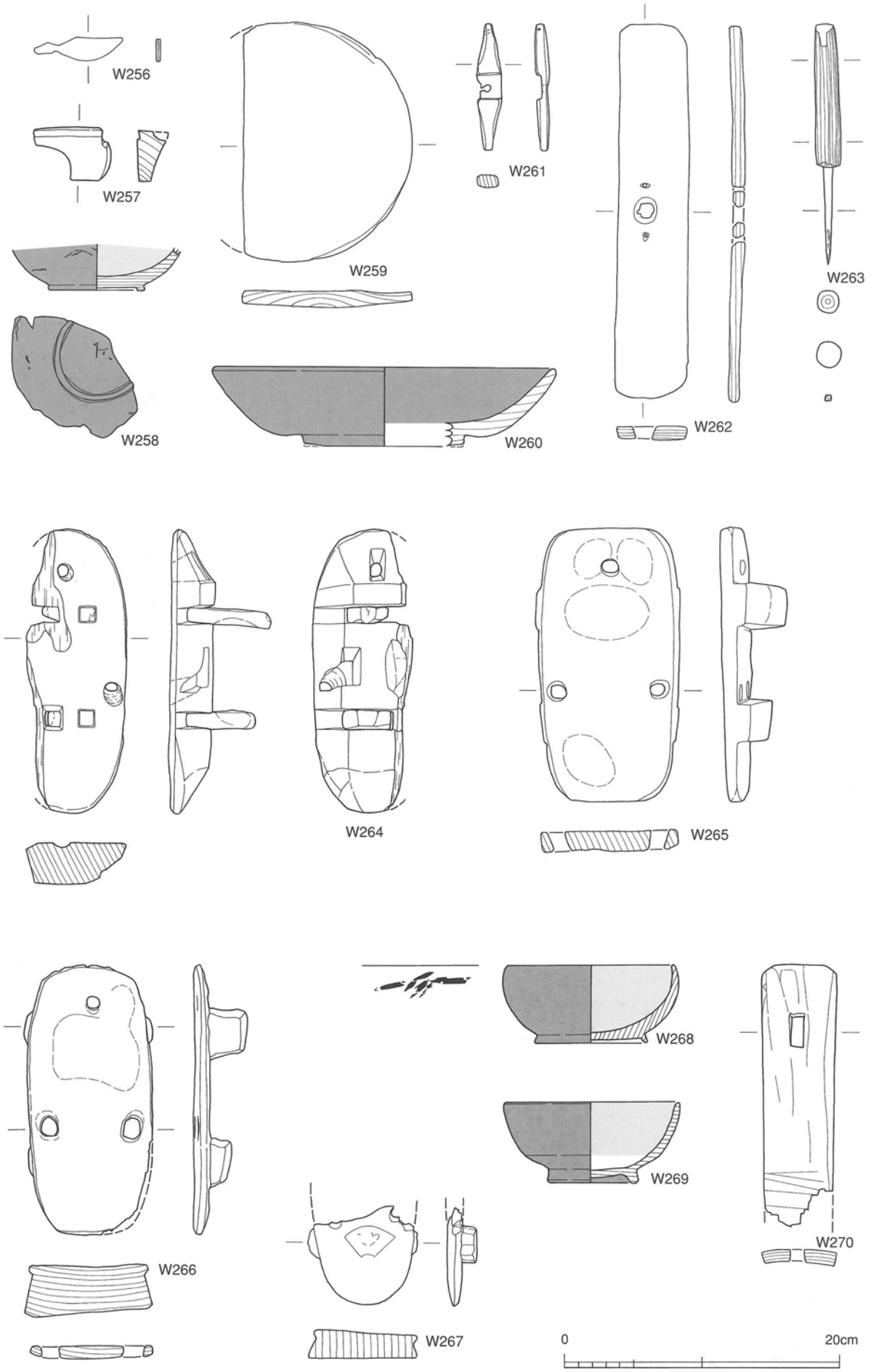

W237
W238
W241
W242
W239
W240
W243
W244
W245
W246
W247
W248
W249
0
20cm

木器　4区　C地点⑥

図版112

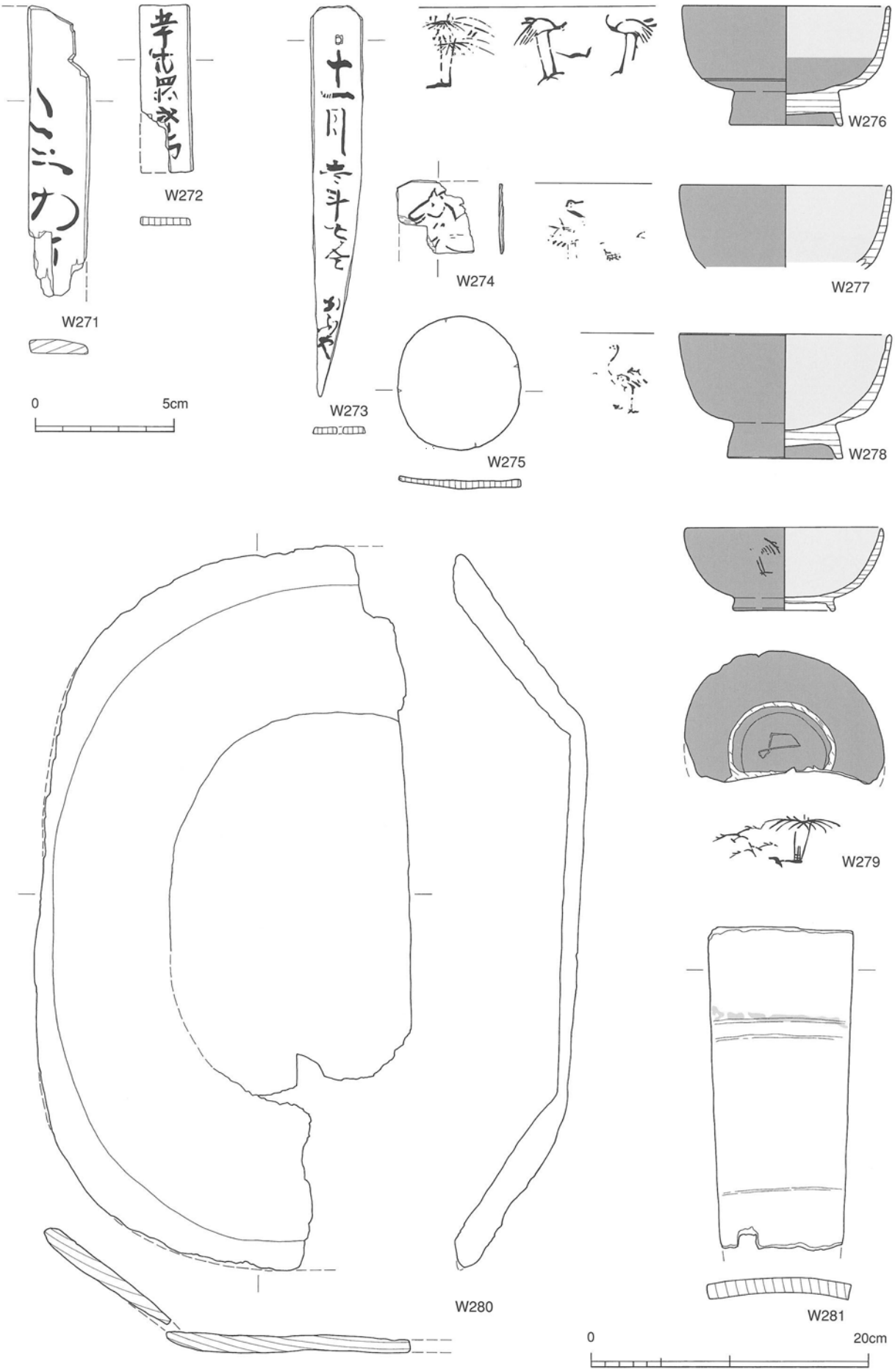


木器　4区　C地点⑦

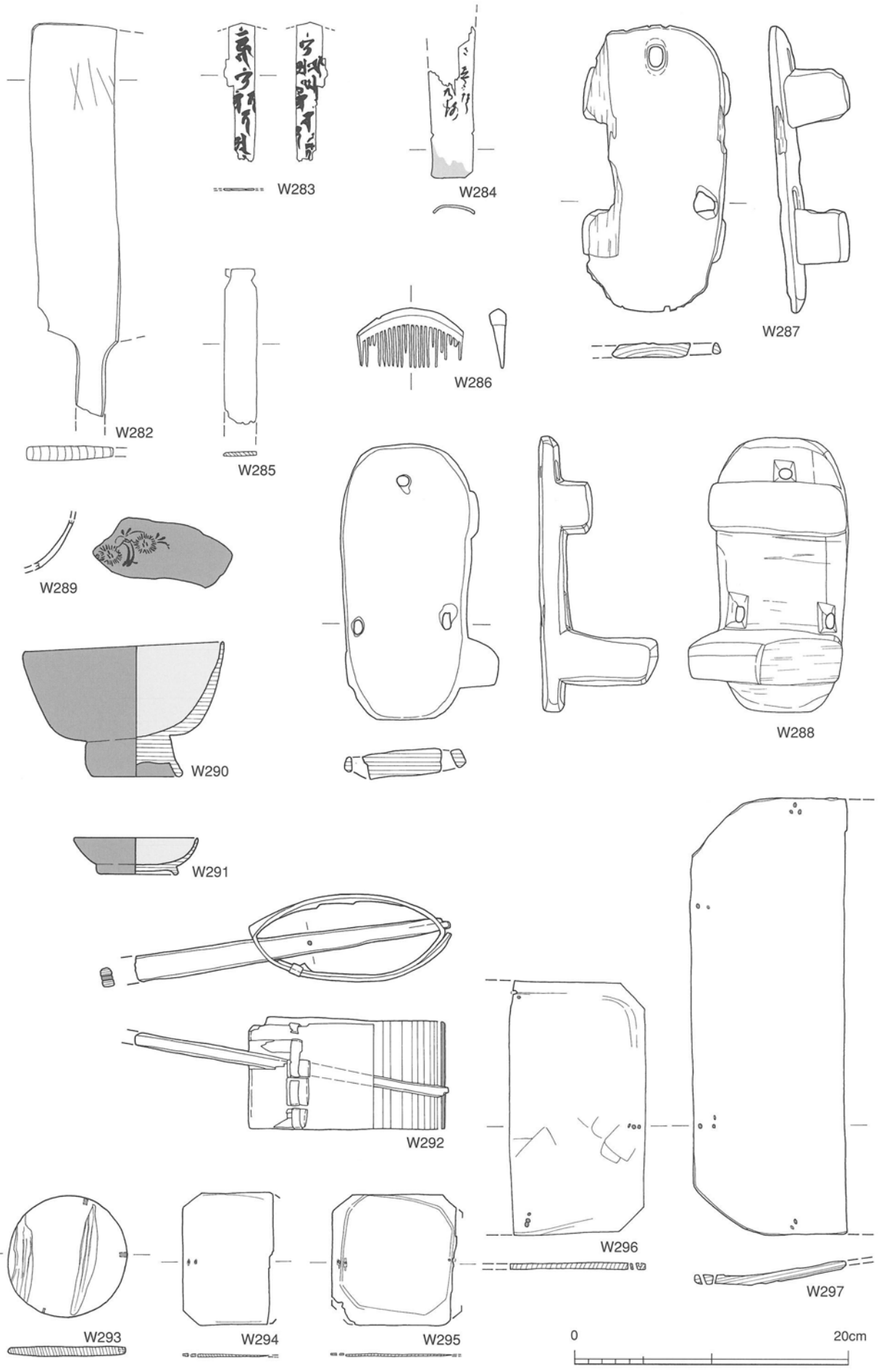

W256
W257
W258
W259
W260
W261
W262
W263
W264
W265
W266
W267
W268
W269
W270
0
20cm

木器　4区　D地点①

図版114

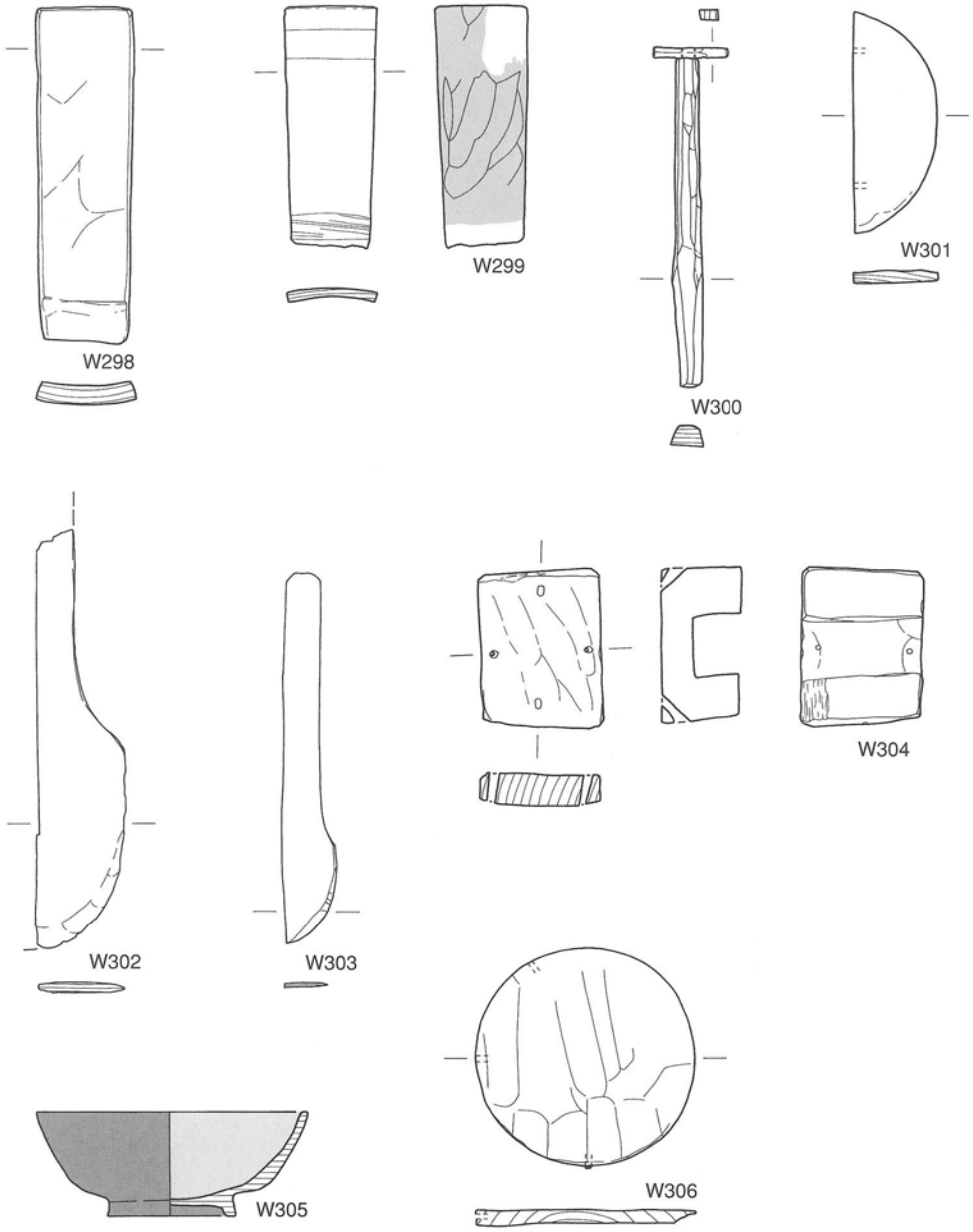


木器　4区　D地点②

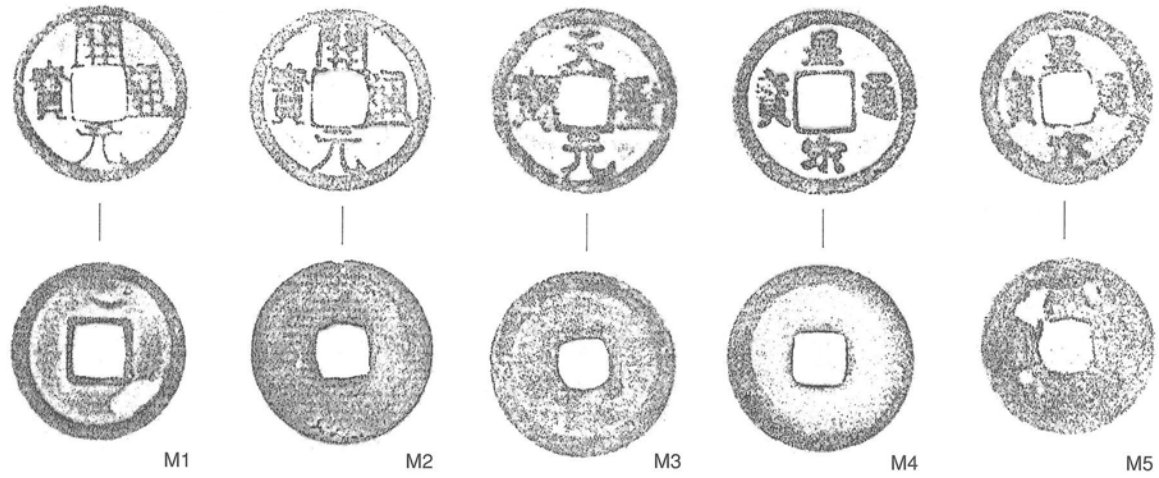

W282
W283
W284
W285
W286
W287
W288
W289
W290
W291
W292
W293
W294
W295
W296
W297
0
20cm

木器　4区　D地点③

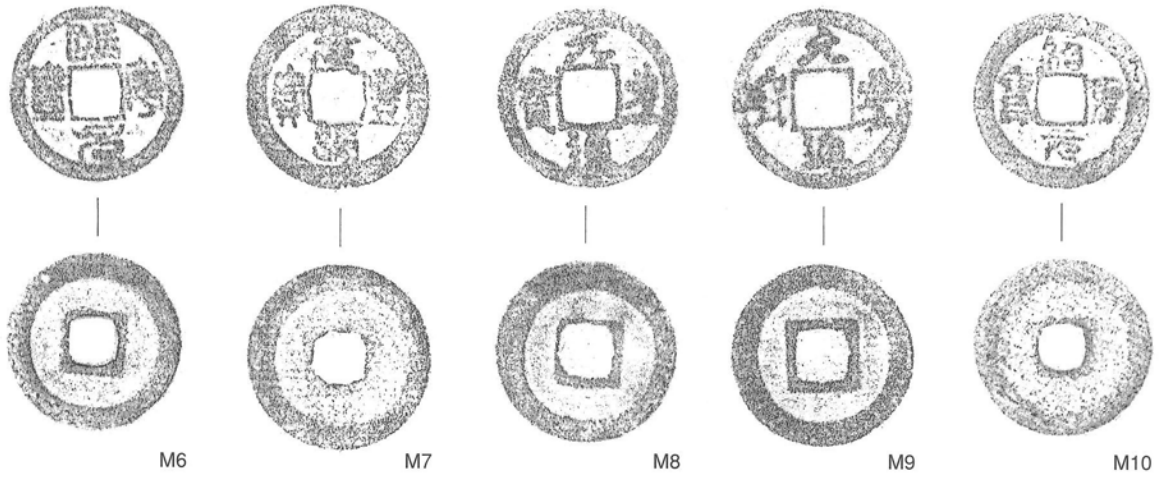
図版116



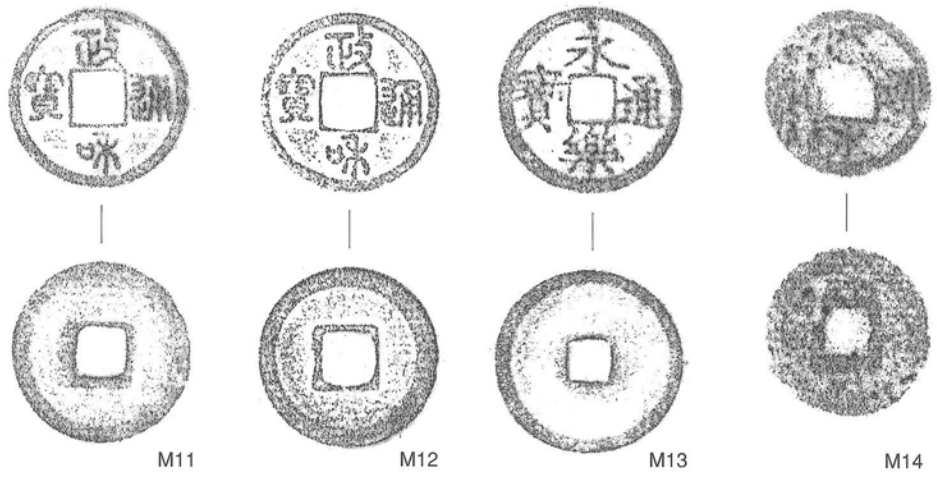
木器　4区　D地点④



M1　M2　M3　M4　M5



M6　M7　M8　M9　M10

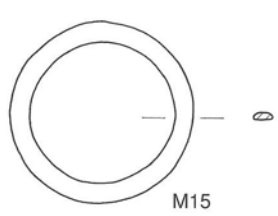


M11　M12　M13　M14

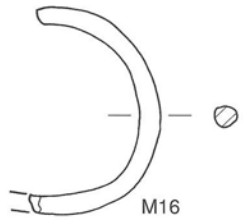
0　5cm

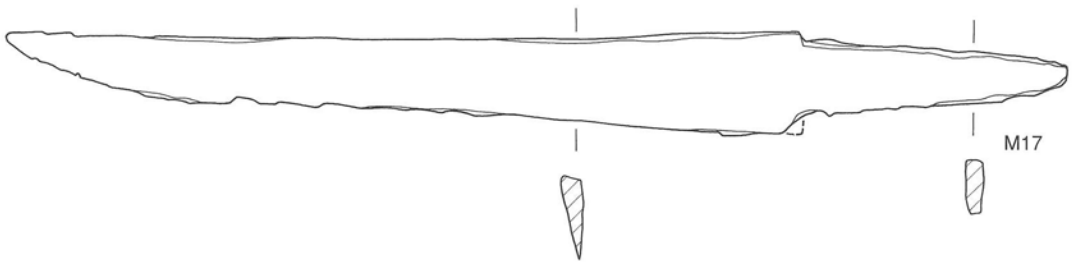
金属器①

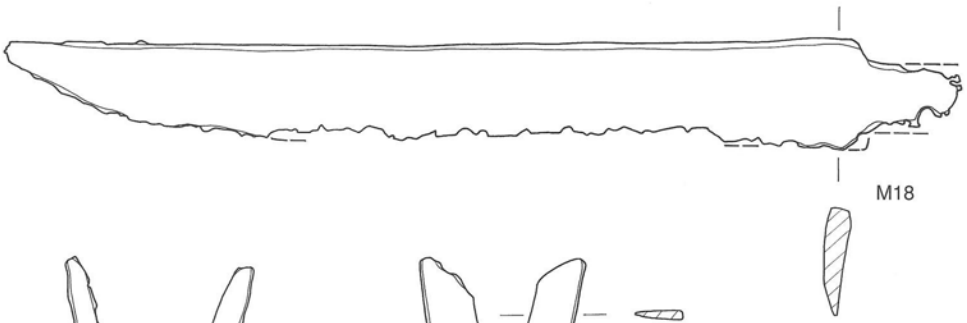
図版118

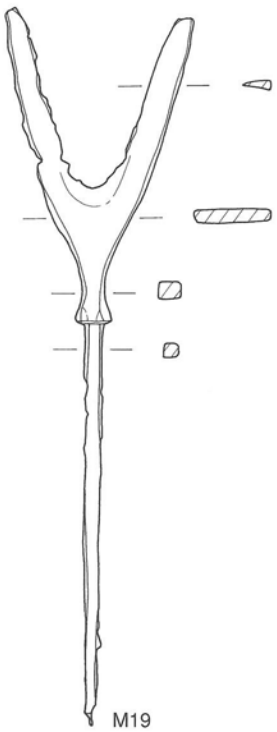


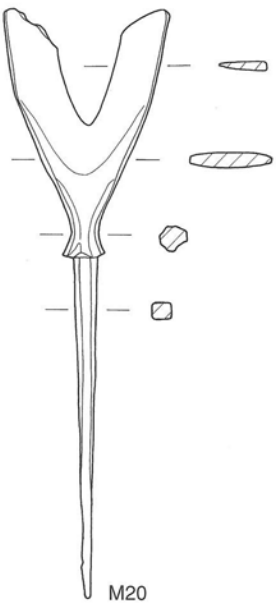
（M15 拓本）

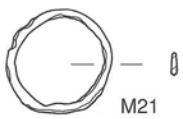




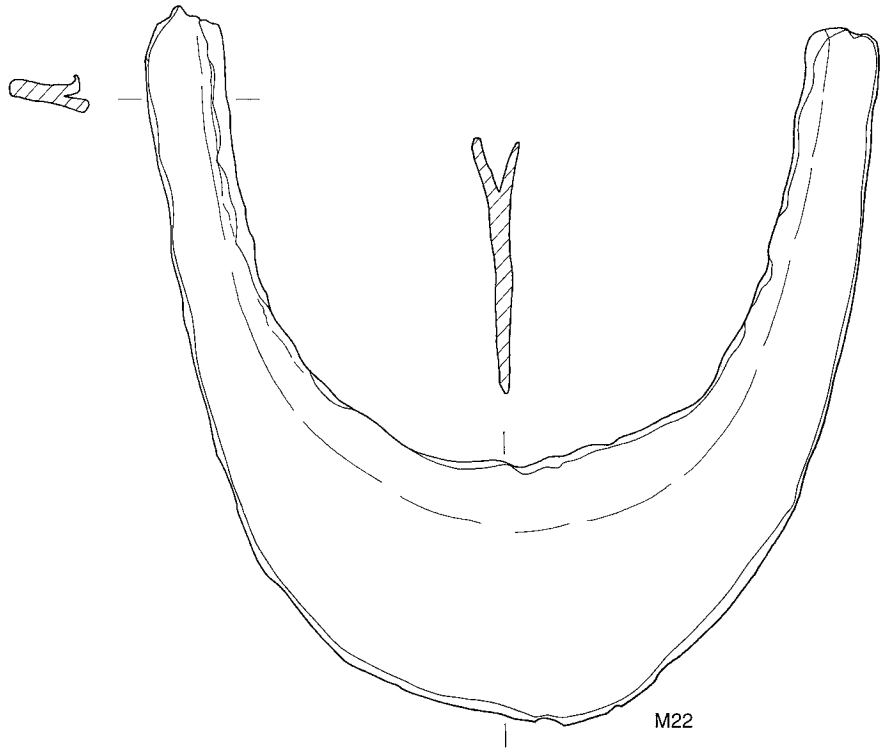


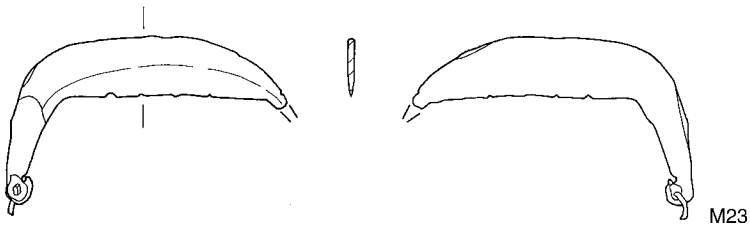


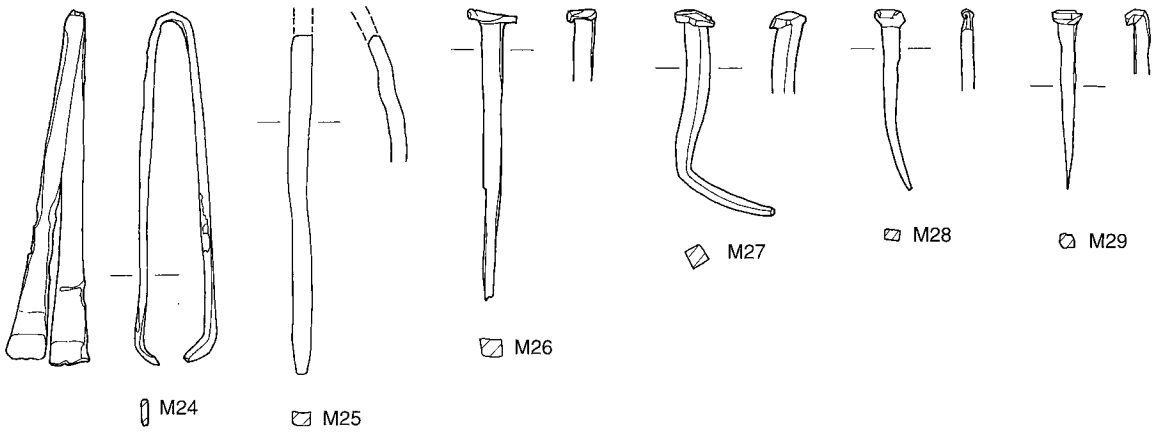


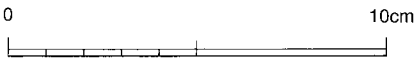


金属器②



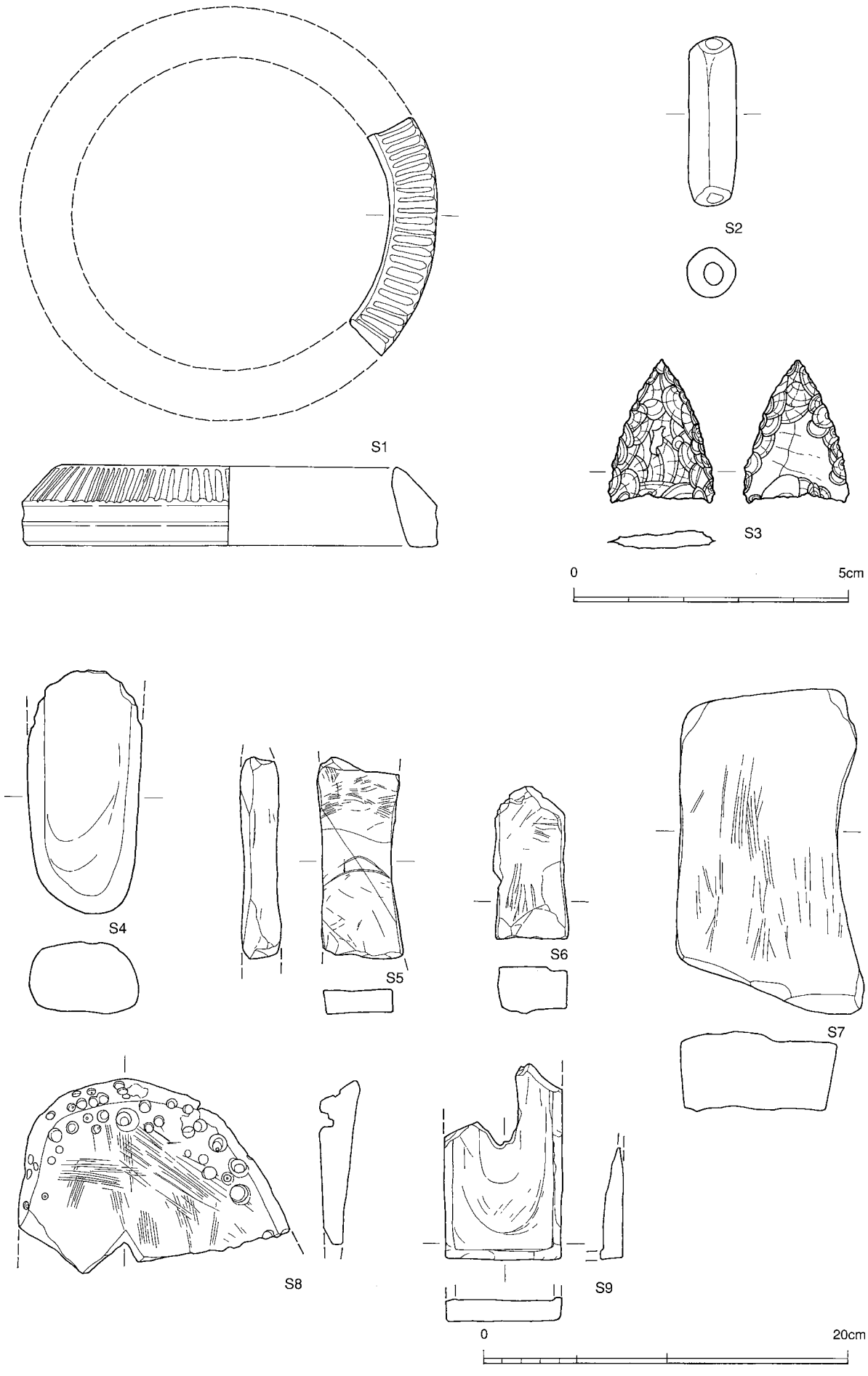




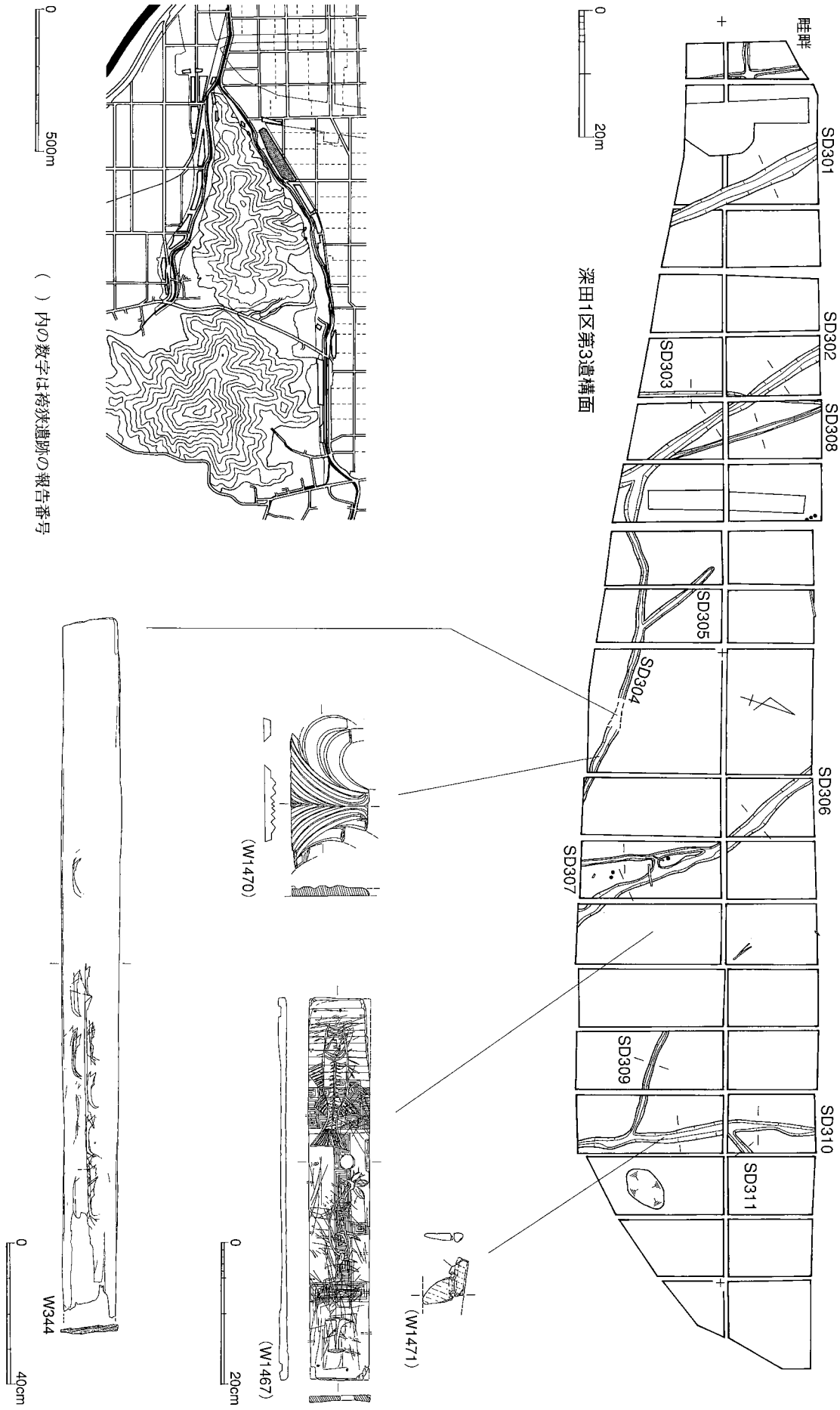


金属器③

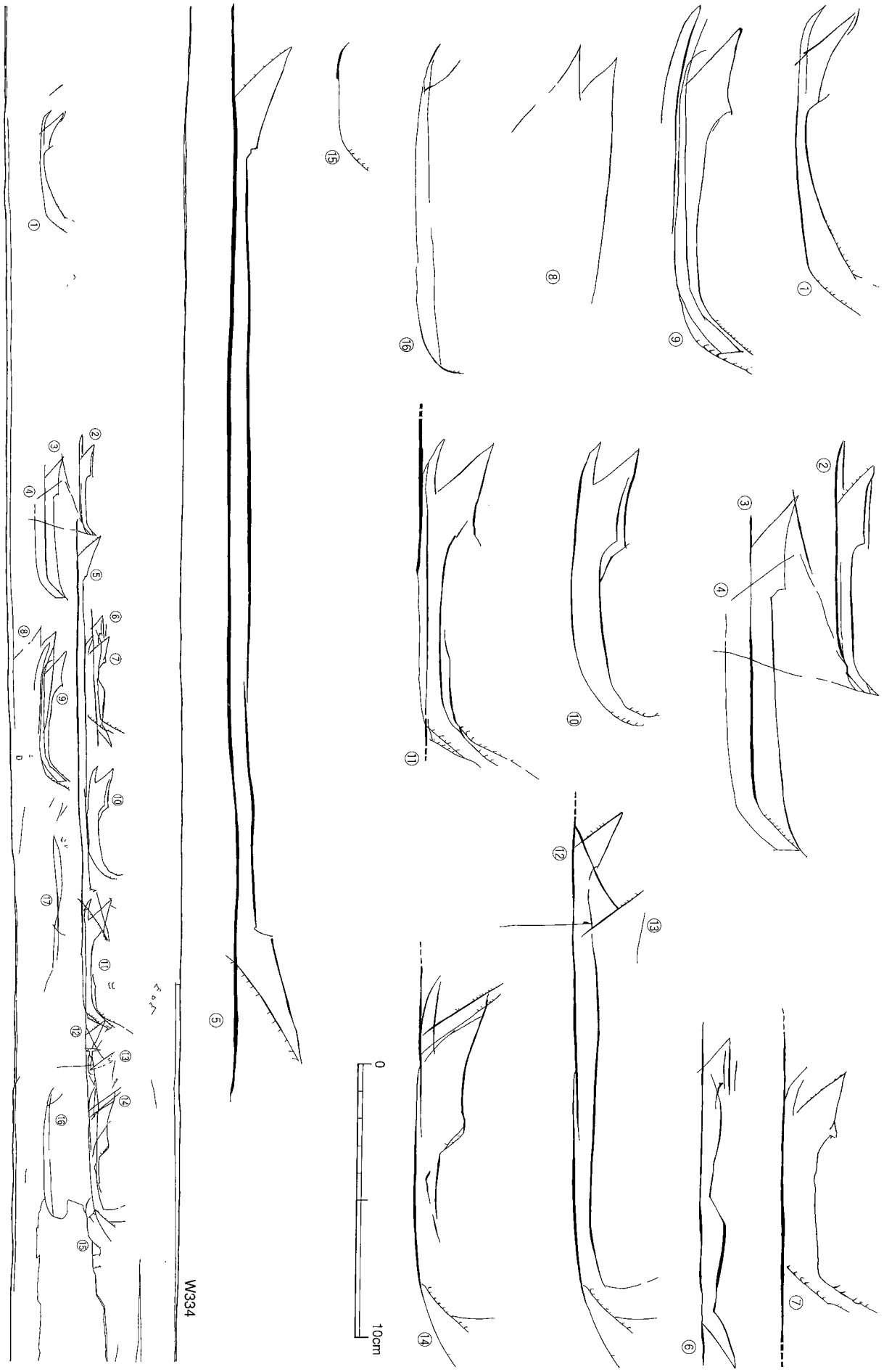
図版120



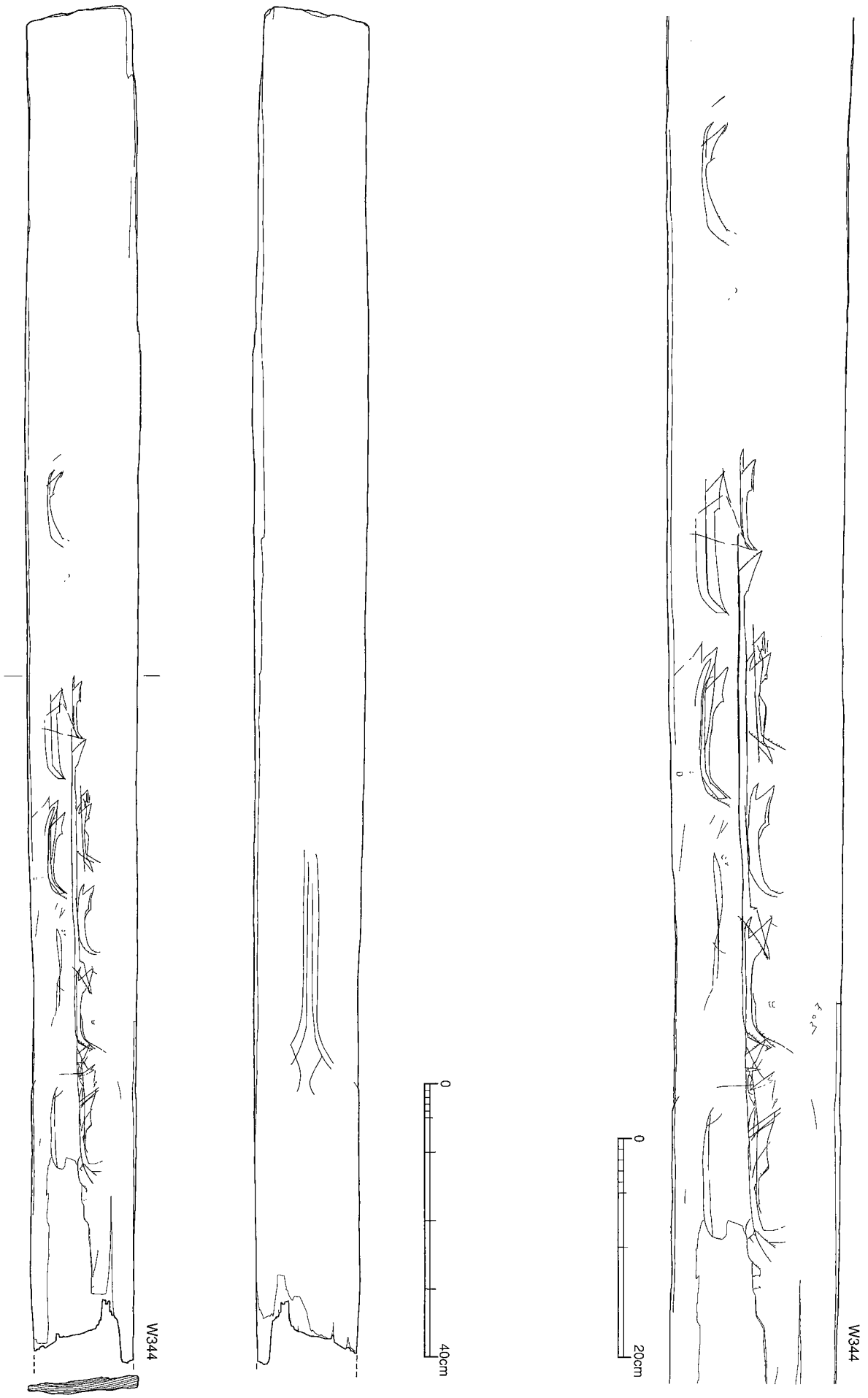
石製品



付編　袴狭遺跡（坪井地点）線刻画出土位置図



付編　袴狭遺跡（坪井地点）出土線刻画木製品①



付編　袴狭遺跡（坪井地点）出土線刻画木製品②